

けものフレンズR ☒わたし☒の物語

むかいまや

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

<https://seiga.nicovideo.jp/seiga/im9098445> より設定をお借りし、書きました。

謎の施設で目を覚ました少女。彼女の旅が今始まる……！なテンプレートはさておき。

作者の勘違いから一人称が『わたし』になってしまい、止めるに止められず動き出した物語です。

大きな事件は多分ありませんが、主人公である「ともえ」が何を感じ、何を思い、何を決めるのか、描写していきたいと思えます。

メインストーリーで描写しきれない物語などは『幕間』で書いていきます。

『後日談』は読み切りの短篇くらいのつもりで書いていますので、単品で読んでも平気じゃないかと思われれます。

分量はまちまちですし、まあねちっこい文章ですけど、よろしく願います。

誤字脱字等ありましたら、教えて頂けると幸いです。

Pixivでも同様の作品を投稿しています。(<https://www.pixiv.net/novel/series/1102872>)

そちらでは縦読み可能なので、お好きでしたらそちらもどうぞ。表紙を描いて頂きました。どうぞ御覧ください。

<https://www.pixiv.net/artworks>

8
2
5
6
2
7
2
0

目次

7 — 2	7 — 1	幕間 4	6 — 3	6 — 2	6 — 1	幕間 3	5 — 3	5 — 2	5 — 1	4 — 3	4 — 2	4 — 1	幕間 2	3 — 3	3 — 2	3 — 1	幕間 1	2 — 3	2 — 2	2 — 1	1 — 3	1 — 2	1 — 1
275	261	250	237	218	204	197	186	172	157	148	130	117	104	92	77	67	60	54	42	30	25	11	1

1 4 2	1 4 1	1 3 3	1 3 2	1 3 1	1 3 0	1 2 3	1 2 2	1 2 1	幕間 7	1 1 3	1 1 2	1 1 1	1 0 3	1 0 2	1 0 1	幕間 6	9 3	9 2	9 1	8 3	8 2	8 1	幕間 5	7 3
592	581	568	550	537	534	519	505	490	474	462	448	435	426	414	402	391	377	361	348	333	319	308	301	289

後日談 5	793
後日談 4 3	785
後日談 4 2	772
後日談 4 1	757
後日談 3	732
後日談 2	701
後日談	673
終わり	661
1 5 3	647
1 5 2	631
1 5 1	618
1 4 3	605

最初に聞こえたのは、空気の抜ける音でした。その次に何かの動く音。

わたしはもう少し寝ていたかったけれど、外からの冷たくて妙に埃っぽい空気に耐えられず、咳き込みながら身体を起こしました。澱みのような気だるさが身体に満ちているような感覚。どうやらとても長い間眠っていたようです。

「う……………」

伸びをしながら眼を擦ると、段々と眼のピントが合ってきたようで、ぼんやりとした視界がしゃっきりしてきます。

「……………」

視界に入ってくるのは、幾つかの淡い黄色い光と妙に強く光っている緑色の光がぼんやりと浮かぶ殆ど真つ暗な部屋でした。

妙に落ち着かない気分できよろきよろと周りを見回しても、その光と、わたしの眠っていた卵のような形をしたベッド以外には何もわかりません。

暫くの間——十分くらいでしょうか？ 時間の感覚さえ曖昧で、はつきりとは覚えていませんが、わたしはぼんやりとした意識の中、今居る場所が夢なのか現実なのかもわからないような混濁した意識で周辺を見回していました。また、時間が経つに連れて、冷たい空気のお陰か、段々と意識がはつきりしてきます。それに従って、わたしはわたしの置かれた状況が段々と理解できて来ました。「自分が何処に居て、何をしていたのか」ということが、わたしにはまるで思い出せないこと。自分の名前や、年齢、お父さんやお母さんの名前、友人、そういった何もかもを含めて、何も覚えていないのです。何も思い出せないのです。

ただただ不安としか言い様の無い思いに急かされるように、わたしはベッドから出ます。何とかベッドから這い出ることは出来ましたが、どうにも身体に力が入りません。わたしはずっと眠っていたのでしょうか？ ベッドに手をかけて、何とか立ち上がることは出来まし

だが、脚を引きずりながら壁にもたれかかって部屋を進むのが限界でした。目指す先はあの緑色の光。殆ど何も覚えていないわたしですが、直感的にそこが出口なのだと思ったのです。

「——きゃっー！」

ケーブルの類と思われるものに足を取られて転んでしまいました。痛みと自分の身体を自由に出来ない情けなさからか、涙が零れそうになります。なんで、こんな……と思わず考えてしまいます。

「くっ……くっ……」

全身の力を振り絞りながら何とか起き上がることは出来たのですが、無理をしたからか、頭がくらくらとし始めました。視界もまたぼんやりとします。

「この部屋から何としても出なくてはならない」そんな強い思いがわたしの足を支えてくれたのでしょう、わたしは何とか緑の光にたどり着くことができました。光のあたりには頑丈そうな扉がありました。扉を必死になって押し開けると、ギィツという低く鈍い音が何かの駆動音だけが立ち込める部屋に響きます。

その先は薄暗い廊下でした。

わたしは扉をあけ、前に進みました。身体の支えがなくなったからか、また転んでしまいます。何度目か判らない嗚咽を漏らしながら、這って進みます。錘のように身体にまとわりつく気だるさから、立ち上がることは出来ませんでした。

ふと視線を上げると廊下には薄汚れた窓ガラスがあって、そこからぼんやりとした星や月の光が差し込んでいます。廊下にも窓の外にも他に光が無いからか、星々の柔らかく暖かささえ感じる煌きがそのまま差し込んでいます。柔らかな光のお陰で、わたしは目が眩むようなことも無く、また、ベンチや何かの瓦礫にぶつかることも無く廊下を進むことが出来ました。「ありがとう、お星様」なんて考える余裕も生まれてきましたが、それでもやっぱり起き上がる程の元気は取り戻せません。

そのまま進んで、曲がり角を一回曲がって、もう一度曲がって……そんな風に行っていると、先ほどの部屋で見たものと同じような緑色

の光が視界に入ります。

「出口だ……うん、きつと……」

思わずぼつりと呟いてしまいます。何よりも、果てが無いように思えた道のりに終わりが見えたという事実がわたしに力をくれました。最後の力を振り絞ってその光に向って進みます。埃に汚れた窓ガラスの向こうから、風にそよぐ木の葉たちの音がうつすらと聞こえます。「きつと外はいいところなんだろうな」なんて漠然とした思いを抱きながら、ドアノブを支えに立ち上がり、ふうつと息を吐いて扉を開きました。

視界に飛び込んでくるのは、果てしなく広がるように思われるほどの広大な草原でした。

「わぁ……」

自分の身体の倦怠感も、這って進んだために感じる痛みも、何もかもを忘れた感動の声でした。不意に柔らかな暖かさを含んだ風が頬を撫でます。その風はわたしにそうしたように木の葉を、草々を優しく撫でていて、全てを見つめるように輝く月が空に浮かんでいて……素敵な光景でした。

わたしは外に出られたことの安堵からか壁にもたれかかっとうとうとし始めてしまいました。「そうだ、この光景を絵に描こう。今度こそ、忘れないでちゃんと」自然とそんな思いが胸中に沸き起ります。「今度こそ」という言葉への違和感は何故だかありません。

「でも、その前に、少しくらい眠ってもいいよね」

呟いたのか、それとも心の中でそう考えたのか、ぼんやりとした意識と安堵の思いに力が抜けてしまったわたしにはわかりません。そうして、わたしは瞳を閉じました。何も覚えていないことへの不安感、それは拭えません。ですが、こんな優しい光景がある世界なんです。きつと優しい世界に違いありません。わたしはそう信じて、眠りにつきました。

○

「大丈夫なんでしょうか……この娘……アルマーさん、センさん……」

真つ暗な視界の中、声が聞こえてきました。

「うーん……様子を見てみないことには……」

「ちよつと無責任な言い方ですが、息は落ち着いていますし、苦しそうにもしていません。きつと大丈夫ですよ。信じて待ちましょう？」

ね、イエイヌさん」

「ですが……」

聞こえてくるのはみつつの心配そうな声。

どの声も、多分わたしを案じてくれているのでしょう。ただ、一際心配そうに涙ぐんでいる声が聞こえます。イエイヌと呼ばれた少女の声はわたしのすぐ隣で聞こえてきました。今すぐにでも、彼女を抱きしめて、「ありがとう、大丈夫だよ」と声をかけてあげたいくらいなのに、私の身体はまだ言う事を聞いてくれません。瞼も腕もとても重くて、どうにもなりませんでした。再び、私の意識はまどろみの中に溶け込んでしまいました。

○

「う……ん……」

瞼を開け、身体を起こします。思考はあの夜よりもずっとすつきりしていて、身体の気だるさも殆どなくなっていました。部屋の中には人の気配はありません。イエイヌと呼ばれた方も、アルマー、センと呼ばれた方も、どこへ言ってしまったのでしょうか……？

「……は……」

伸びをしながら部屋を見回してみると、白色の壁紙に、パステル調の家具が眼に入ります。その家具は動物をモチーフにしているようなデザインでした。ベッドの隣には窓があつて、その窓の向こうには草原が広がっていました。その光景を見ると、眠りにつく前に見たあの優しい光景が思い起こされてきて、居ても立ってもいられなくなってきました。

ですが、まだ無理に歩き回るのは躊躇われましたし、何よりもあのイエイヌと呼ばれていた少女に感謝の言葉を届けたいという思いもあります。ここは彼女達の好意に甘える形にはなりますが、ゆっくりさせてもらいましょう。きつと彼女達は戻ってくる筈でしょうし……確信はありませんが、机やベッドの脇に何も書置きもありません

し、ひとりで放っておくようなことは無いでしょうから……

窓の外は穏やかな草原が広がっていて、空は澄み渡っていました。時折、陽光を遮るように雲が通り過ぎていきます。陽光はまるで春の日差しのような暖かさでわたしの目に入る景色の全てを照らしていました。

ふと視線を落とすと、わたしの手が目に入りました。記憶が無いとは言っても、わたし自身の手なのです、別に不思議なところなんてある筈が無いのですが……ひとつだけ、気付いたことがありました。爪の色が緑色なのです。昔の私がどんな人間だったかということさえ、はつきりと覚えていませんけれど、ある程度の『常識』——所謂自分の身体に染み付いた感覚——からしてみるとどうにもその範疇に無いのです。不思議と嫌悪感のような悪い感情は無く「何か塗られているのかな？」と思つて爪を引つ搔いてみたり、意味も無いのに手のひらを光に透かしてみたり、あれこれしてしまいます。

そんな風にして過ごしていると、家のドアががちやりと開く音がしました。イエイヌ……さんなのかな、感謝の言葉を伝えないと……！「私は元気です、ありがとうございます」って……。

どんな風に声をかけたら良いか悩んでいると彼女の姿が見えました。あれから時間が経っていると思うのですが、とても落ち込んだ表情で、心底悩んでいるように俯きながら、大きな紙袋を抱えてとぼとぼと歩いてきます。

「あ、あの……ありがとう——」

わたしの様子に気付くやいなや、彼女のしよんぼりとした表情は笑顔になって、その後すぐに顔を崩しながら私に飛び掛るように抱きしめてきました。不思議な「何か」が彼女の頭についているのに瞬間的に気付きましたが、彼女はそんなのお構い無しです。

「良かったあ……ほんとうに、ほんとうに……良かったあ……！」

彼女の動きは彼女の抱えていた紙袋が床に落ちるどきりという音よりも速かったのでは無いのかと思えてしまうくらいの勢いでした。急に抱きつかれたわたしは思わず「きゃっ」と声が出してしまいます。

「く……くるしい、です……」

「あつ……！……ごめんなさい……」

彼女はしゅんとしながら離れてくれました。そのお陰で、わたしは改めて彼女の顔をしっかりと見る事が出来ました。灰色と白色の細かな髪の毛が窓から差し込む陽光に照らされて一本一本が煌いていて、頭のとっぺんからは彼女の感情を表すかのようにしゅんと垂れる耳……耳？ ……瞳は左右の色が違っていて、右目は透き通るような青空の色、左目は綺麗な夕焼けの色でした。すこし釣り上がった目尻には涙が貯まっています、彼女の芯の強さを表すようでした。

「ううん、ちよつと苦しかっただけです……ええつと……」

私の言葉を受けて彼女は答えます。

「申し訳ありません……嬉しくて、つい……私はイエイヌです」

やつぱり、彼女がイエイヌさんだったんだ。

「イエイヌ……さん、ありがとう。わたし……外で倒れてたんですよ？ それを助けてくれた……んですよね……？ あのままだったら死んじゃってたかもしれないし……本当にありがとうごさいます……」

心からの感謝の言葉を彼女に伝えます。ちよつと涙ぐんでいたかもしれない。

「いえ！ お安い御用です！ ヒトを助けるのは私の使命ですから！

……あなた、ヒト……ですよね？ ニオイもふんいきも、フレんズの皆さんとは違いますもの！」

そんな風に話す彼女の顔は本当に嬉しそうで、楽しそうで、わたしも自然と笑顔になってしまいます。ですが、どうにも不思議です。先程までうなだれていた耳はピンとしているし、彼女の肩越しに嬉しそうに振られている尻尾もありました。それにヒトとかフレんズとか私の判る『常識』にはまるで縁の無い言葉が聞こえてきました。

「ええつと……イエイヌさん、その耳と尻尾は……？ それにヒトつてあなたもヒトじゃないの？ あとフレんズって……」

イエイヌさんは不思議そうに首を傾げます。

「ええつと……私はフレんズですよ？ うーん、どうしましょう……」

どう話したら良いか……」

彼女は首を傾げながらうんうん唸ります。先程までぶんぶん嬉しげに振られていた尻尾は床に丸まるようになっていきます。

「困らせてしまつてごめんなさい……わたし、何も覚えていないんです……自分の名前やどうしてあそこにいたのかとか、ここが何処なのかとか、何も……」

重度の記憶喪失、自分が何者かもわからず、自分が居る場所もわからない。それを意識すると、孤独にも似た耐え難い悲しみが不意に込み上げてきてしまいます。イエイヌさん、アルマー、センと呼ばれていた方達の優しさのお陰で和らいでいた感情が、再びわたしの胸中に広がっていきます。

「あつ……！ な、泣かないで下さい！ 私が、私が居ますから！ ね？」

そう言つてイエイヌさんは私をそつと抱きしめてくれました。優しい優しい日差し匂い。彼女の綺麗な髪の毛が鼻をくすぐつてむずむずとしてしまいました。その所為か「くちん」とくしゃみをするわたし。恥ずかしいし、情け無いし、申し訳ないです。

「ご、ごべんなさい……」

涙ぐんでしまったからか鼻声になりながら彼女の胸から顔を離します。鼻水で彼女の服を汚さなかつたのは不幸中の幸いです。

「いえいえ、大丈夫ですよ」

彼女は微笑んでいました。にへらつという感じでしようか？ 可

愛らしい顔立ちが一層映える様なそんな笑顔です。

「うーん……そうですね、まずフレンズついて、その次にここについてお話しますね」

私もあまり詳しくないんですけど、と彼女は付け加えて、ゆっくりと話し始めました。

彼女の話はとても神秘的というか、不思議というか、なんともいえ

ないものでした。しかし、妙に納得が行くお話でもありました。簡単に言うならば、フレンズとはサンドスターの力によつて動物たちが変化した存在で、そのフレンズたちが暮らす場所がジャパリパークという場所。そんな感じでした。

「不思議……でも、はい、なんだか納得できました。ありがとうございます、イエイヌさん」

私は彼女にお礼をいいながら少しだけ思案します。どうしてジャパリパークという場所に私が居るのでしょうか？ 考えても解決しない問題なのでしょうから、仕方ないのでしょうけれど……考えても考えても本当に何も思いつきません。ちよつとやそつとじゃ判らない。そう割り切つて考えるしか無いのでしょうか。

「お役に立てたでしょうか……？」

ふと視線を上げると、わたしの顔を覗き込んでいるイエイヌさんの顔が眼に入りました。好奇心半分、心配半分という具合で、わたしの心を探るような表情をしています。そんな表情を見ると、なんだか好奇心のような、悪戯心のような、そんな思いがわきあがつてきました。

「ちよつと失礼しますね……」

わたしはそういつてイエイヌさんの耳に手を伸ばします。

「わつ、ちよつと……わふつ……」

「わあ……もふもふ……気持ち良い……あつ、ヒトの耳もあるんですね！ 不思議ー」

イエイヌさんは最初こそ驚いて居ましたが、撫で回している内に彼女の表情は困つたような笑顔になり、ついには顔を赤くしながら「わふう」という声を漏らしていました。その声を聞いて、私はさつと手を離します。

「あつ……ごめんなさい。さつきから失礼です、わたし……」

「いえいえ、大丈夫ですよ。ヒトに撫でてもらえて嬉しいくらいです！ ただ……ちよつといきなりでびっくりしちゃいましたかね……えへへ」

髪を手で整えながら、笑顔で答えるイエイヌさん。そういえば彼女

の今までの口振りからひとつの核心に触れるような疑問が浮かびます。それは、多分、聞かないほうが良い質問。でも、いつかは直面するであろう問題。わたし以外のヒトの存在について。

「あの……わたし以外にヒトって居ないんですか？ パークって事は動物園とか公園とか、そういうものなんじゃ？」

そう問いかけるとイエイヌさんは考えるように視線を上に戻しました。

「うーん……私の知る限り、ヒトはあなたひとりです……」

その言葉は私に重くのしかかるようでした。イエイヌさんは何か言っていない言葉の口にしてしまったかのように、はっとした表情になります。

「あつ、気にしないで下さい、イエイヌさん。大丈夫です、記憶が戻れば、きっと何とかできますよ！」

私の言葉を聴いてイエイヌさんは顔をぶるぶると振りしました。

「あなたがそう言うなら……ハイ！ 大丈夫です！」

彼女の自信は何処から来たのかはわかりませんが、その無条件の信頼にも似た言葉は、わたしの傾きかけた心を支えてくれました。

「あつ、そうです！ あなたのことは何と呼べばいいですか？ ずっとあなたたつて呼ぶのも申し訳ないですし……」

正直なところ困った質問です。今のわたしは名前も何も覚えていないのです。ですから、こう呼んでと気軽に伝えることが出来ません。

「イエイヌさん、さつき伝えたとおり、名前も覚えていないんです……何か思い出せるような手がかりがあれば良いんですけど……」

私は何も持たず、着の身着のままあの建物を抜け出したのです。幸い服こそ着ていましたが、もしかしたら全裸でここに眠ることになっていたのかもしれませんが。そう思うとぞつとします。

「うーん……困りましたね……ん？ 手がかり……手がかりといえば、アルマーさんとセンさんが言っていた言葉がありました！ ゲンバケンショウ？ が大事だとか何とか……」

手をぱちんと叩かせながら彼女は言いました。なるほど、現場検証

……そうと決まれば。

「イエイヌさん。申し訳ないんですけど、お願いしてもいいですか？」
「はい！ お任せください！」

心底嬉しそうな笑顔を浮かべ答えるイエイヌさん。快諾してもらえるのは良いのですが、なんだかここまですんなりと行くと、本当に申し訳ないです。

「私が眠っていた場所まで案内してもらえますか？ 何かあるか調べたいんです」

飛んだり走ったりは出来ませんが、十分な休息のお陰で歩くことは出来そうです。あの場所に何かヒントがある。そう信じて、今は向うしかありません。

わたしが立ち上がろうと身体を動かすと、お腹がくうと鳴きました。余り大きな音では無いと思っただのですが、イエイヌさんはどうやら聞き取ったようです。彼女はくすりと笑いました。先程からわたしはとても恥ずかしいやらみつともないやら、そんなことばかりをしているような……？

「その前に、ご飯にしましょう？　ね？」

イエイヌさんはそう言つて、先程床に落としてしまった紙袋からお饅頭を幾つか取り出します。

「これは……お饅頭？」

わたしは率直な疑問を口にします。

「そうですよ。ジャパリまんです！」

イエイヌさんはフレنزズの皆さんはこれを食べているのだとわたしに告げながら、ジャパリまんをひとつ私に差し出します。

「そうなんですかあ……ありがとうございます、イエイヌさん」

いえいえと返事をしながら彼女はジャパリまんを頬張ります。もつきゆもつきゆと美味しそうに食べる彼女の姿を見てから、私も同じように口にします。

「あつ……！　美味しい……！」

思わず感想が口に出てしまいます。お肉とお野菜がバランスの良い味わいを齎していて、少し薄味な気もしますが、とても美味しい味わい……。空腹だからか、ジャパリまんの味は身体に染み渡るようでした。

「んつく……。でしよう？　栄養満点ですし、ボス……ええつとラツキービーストさんが毎朝配ってくれているんです！」

また聞き慣れない言葉。ラツキービーストとは何のフレنزズさんなんでしょう？　少しばかり考えましたが、答えは出ません。ここは素直にイエイヌさんに聞くとしましょう。

「イエイヌさん、そのう……ラツキービーストさんってなんのフレنزズさんなんですか？　ボスってことは……偉い方だったりします

……？」

イエイヌさんはまたも困ったような表情になりました。私、彼女を困らせてばかりですね……。

「ええつと……ラッキービーストさんはラッキービーストさんです。フレンズでは無いと聞いたような気が……お話もしてくれませんか……あ、でもお掃除をしてくれたり、ご飯を用意してくれたり、優しい方ですよ！」

どうやら不思議な存在のようでした。彼女でもわからないということは、きつとそういうことなのでしょう。……わたし、記憶は無いですけど、こんなに『？』という記号が頭に浮かんだことって無い気がします。

ジャパリパーク……本当に不思議な世界……わたしはこの世界に何故居るのか、わたしは何者なのか、早く思い出さなくてはなりません。その為にもはやくご飯を食べ終わって、『あの場所』に行かなくては。でも、それ以上に疑問も一杯……うーん……。

考えながらご飯を食べていたからか、気付けば食事の手は止まっていました。顎に手をやって考え事をしているわたしをじつと見つめるイエイヌさんに気付きます。

「——あつ、ごめんなさい……お行儀悪いですよね……」

「いえいえ！ あつ、わかりましたお水ですね！ お待ちください！」
そういつて彼女は小走りに部屋を出て行きます。なんであんなのに楽しそうなんでしょうね……尻尾はぱたぱた振られていますし、顔も笑顔です。労働の喜び……とでも呼べばいいのでしょうか？ わたしにはわかりませんが、彼女には彼女なりの楽しさがあるんでしょうね……というか、そもそもわたしお水を頼んでなんかいないのです……ここはご厚意に甘えることにしましょう。

暫くすると、イエイヌさんは両手で水が入ったコップを持ちながら、零さないように慎重に歩いてきました。

「ふう……中々緊張しますね……！ どうぞー！」

いや、あの、その、嬉しいのですけれども……コップから溢れんばかりに注がれた水。そんなに注がなくても……。

彼女には妙に抜けているところがあるような気がしてきて、親近感が湧いてきます。

「あ、ありがとうございます……」

彼女は何処で覚えてきたのでしょうか「さきつグイつと」なんて言っていますが、それはちよつと……ひと口ふた口含んでコップをベッドの脇にあるサイドボードに置きます。

「ご、ごめんなさい、ひと口ではちよつと……」

私は彼女の意向に答えられ無かったことを申し訳なく思つて、つい謝つてしまいましたが、彼女はもうこの状況自体が楽しいかのように心からの笑顔を湛えていました。

「いえいえ、大丈夫ですー!」

首を傾げながら私をじつと見つめてくる視線。その視線は時には楽しげで、時には悲しげなものであつたようにも思えます。

わたしには、彼女の思いはわかりません。ただ、何故だか妙に寂しいような悲しいような、そんな思いを抱いている様に思われました。献身の裏には自らの寂しさを、悲しさを、紛らわしてしまいたいという思いが隠れている……? どうしてでしょうね、わたしは、そんなあなたを救つてあげたい……わたしと彼女の付き合ひは、恐らく一時間にも満たないのにそんな思いを抱いてしまいます。

「あつ、そうです! ちょっと失礼しますね」

イエイヌさんはそう言つて部屋の奥の方へととて歩いていきました。彼女を待つ間に、わたしは半分ほど残っていたジャパリマンをふた口でぱくぱくと押し込むように食べて、水で流し込みます。お行儀は悪いですが、彼女に見つめられていた恥ずかしさやら、早く『あの場所』へ行きたいという思いやら、そんな思いが胸中を巡っています。

ジャパリマンを食べ終わり、ふうと一息ついていると、彼女が戻ってきました。戻ってきた彼女に、わたしは一言告げます。

「じゃあ行きましようか、お願いします、イエイヌさん」

彼女は「はい!」と元気良く答えてくれました。

「よしよし……つと」

私はベッドから降りようと身体を動かします。あの夜と比べるとずっと身体は動かしやすく感じます。

わたしを支えるように、イエイヌさんがすつとわたしに近寄りました。「ごめんなさい」と彼女に告げてから、わたしは肩を借りるようにして立ち上がります。やはり、というべきでしょうか、膝に力を入れようとしてもどうにも力が入りません。どうしてもぐらりとバランスを失ってしまいます。わたしは、立ち上がり方すら、忘れてしまったのでしょうか？ イエイヌさんはわたしの身体を支えながら「大丈夫ですか!？」とわたしの事を案じてくれました。

「だ、大丈夫ですよ。暫くすれば、良くなりますから……きつと暫く歩いていなかっただんでしようね。申し訳ありません……」

大丈夫、そう自分に言い聞かせてわたしは一步を踏み出します。

「無理はしないで下さいね？ 私、心配です……」

イエイヌさんの言葉に、わたしはそつと首を振って答えます。

「だ、大丈夫です……動物の赤ちゃんだって、すぐに歩き始めるそうですし、大丈夫です」

ヒトは確か歩き始めるまで結構な時間が必要だったような気もしますが……それでも、自分でそう考えなければ立ち上がることさえ出来ない気がしました。

イエイヌさんにドアを開いてもらい、外に出ると、天高く輝く陽光に目が眩みそうになります。イエイヌさんの肩に回していない手で眼を陰に入るように覆います。少し汗ばみそうな、ちよつと暑いかなというくらい気温ですが、風がのんびりと吹いていて、そのお陰で不快ではないどころか、むしろ心地よいくらいでした。

「えつと、私が寝ていた建物まで、どれくらい距離ですか?」

うーんとイエイヌさんは考え込み始めます。

「そうですね……そんなに歩かない筈です。ちよつとしたお散歩くらいの感覚でしたから……ちほーは跨いでないですし、すぐですよ、すぐ」

具体的な時間で伝えてくれないのでしょうか？ それとも時間に対する感覚が弱い？ というか、ちほー？ とは一体……場所？ そ

れともそのまま『地方』？ 色々と疑問は浮かびますが、彼女を信じましょう。

暫くイエイヌさんに手伝ってもらいながら進みます。二、三十分ほど歩いたでしょうか？ 幸い、道は草の生えていない土道の部分を中心に進むようで、転んだり躓くようなことも無く、無事に進むことが出来ました。

歩きながら、わたしはわたしを助けてくれたフレンズさんのことについて、イエイヌさんに尋ねます。

「そういえば、アルマーさん？ センさん？ ってどう言った方なんですか？」

私は額に流れる汗を拭いながらイエイヌさんに問いかけます。彼女はわたしを支えているからか少し疲れてしまっているようで、ふうと呼吸しています。

「えーっと……」

イエイヌさんは考えるように呟きましたが、どうにも疲労の色が見えています。

「無理させてごめんなさい、イエイヌさん……。お願いなんですけれど、あそこの木陰で休んでも良いですか……？」

イエイヌさんは少しだけ掠れた声で「はい」と答えて、わたしの指差す方向に足を向けなおしました。彼女の疲労を鑑みてというのもありましたが、私自身も疲れていたのは事実ですしね。丁度良いところに木陰があつて助かりました。

「ふう……」

お互い木の幹に寄りかかるようにして座ります。わたしを支えながら歩いていたイエイヌさんの疲労は結構なものようです。暫くお互いに言葉も交わさず、休むことになりました。

「これ、どうぞ。お水持ってきたんです。今日は暑そうだったので、用意してきました！」

イエイヌさんは肩から提げた水筒をわたしに差し出します。どうやら出発前に持ってきたようです。わたしは自分のことで精一杯で彼女の気遣いにも気付けなかつたようです。

「ありがとう、イエイヌさん。先に頂いちゃって良いんですか?」

わたしが遠慮の気持ちを示すと、彼女は首を振って答えます。

「いえいえ、私よりも先に。あなたの方が大変ですもの」

彼女の優しさに答える形で、わたしはひと口だけ頂きました。貰った水はまだ冷たくて、喉を下る冷たさがなんとも気持ちよく感じました。

「……美味しい! ありがとうございます、助かりました……お返ししますね」

イエイヌさんは「いえいえ」と答えて受け取り、わたしと同じようにこくりこくりと水を飲みます。飲み終わると、思い出したかのように彼女は話始めてくれました。

「アルマーさんとセンさんは、私の恩人です——」

彼女が言うには、フレンズになった当初、色々なことを教えてくれたり手伝ったりしてくれた恩人だそうです。パークでの掟、どうやってご飯を得て、どうやって棲家を得て、どうやって生きていくべきなのか——彼女達は、イエイヌさんにそう言った基礎基本を教えてくださいのだからそうです。

フレンズになったばかりの子でも基本的な常識は記憶した状態で変化するので必要ないといえれば必要ないのかもしれない、けれど、改めて知ることによりよく生きて行けるはず……その言葉と一緒に、彼女達はイエイヌさんに手ほどきをしたそうです。

「そもそも、アルマーさんとセンさんは、二人で何でも屋のようなことをしているそうです。最近はタンテイ? とか言うのもやっているのですが……」

わたしは相槌を打ちながら、彼女達に感謝します。彼女達のおかげで、イエイヌさんがここに居て、わたしの命が助かったのだとさえ言い切れるような気がします。

「それで、ですね、あの夜、私は夜の散歩のつもりであの建物に向ったんです。そうしたらあなたが眠っていて……私ひとりの力ではどうにもならなかったので、おうちの近くにいたお二人に手伝ってもらって、運んだんです」

イエイヌさんはひと息ついてから、続けて言います。

「あなたが眼を覚ましてくれて、本当によかったです。こうしてヒトとお散歩できるなんて、まるで夢見たいですもの！」

彼女の無条件の肯定にも似た優しさは、多分、彼女の孤独感の裏返しなのだと思います。わたしは、何よりもその彼女の優しさに、今頼ることしか出来ないことが悔しく思えました。わたしは彼女に何も出来ない、無力な存在です。いつか、恩返しをしよう。そう固く決意しました。どんな形で彼女に恩返しを出来るのか、それはわかりません。ですが、何か、こんなわたしでも彼女に何か出来る筈です。

「ありがとう、イエイヌさん」

自然と笑顔になりながら、彼女に応えます。いつか、ゆっくりと当てるの無い散歩でも彼女としてみたい。そう思いました。

休憩を終えたわたし達は再び出発します。休んだお陰か、それとも身体が歩き方を思い出しているのか、イエイヌさんの手を借りずとも歩くことの出来るようになってきました。

「本当に大丈夫ですか……？」

木陰から歩き始めて数歩のところでもよろめいたわたしを心配そうに覗き込むイエイヌさん。

「大丈夫、大丈夫。これでも元気になったんですよ？ それに、何時までも頼ってばかりじゃ、申し訳ないですから……」

半分本当、半分嘘でした。元気になったのは事実ですし、歩くことも出来ます。ただ、このまま目的地までひとりで行けるかと問われると言いつくぬいしてしまうような、そんな具合です。

「そんなに気になさらないで良いんですけれども……」

わたしは返事に困ってしまつて乾いた笑い声を漏らしてしまいました。

道を進んで暫くした頃、わたしはイエイヌさんに尋ねます。

「イエイヌさん、あとどれくらいですか？」

わたしはふうと息をついて草原を走る道の先に眼をやります。

「そうですね……あとちよつとです。お日様がたつぺんに来るころには到着すると思います」

あとちよつと、そう聞いて俄然元気が沸いてきました。「よし」と意気込んで歩き始めます。

舗装されている道ではないので、少しばかり大変なのは変わりませんが、草が生えていない土道がずっと続いています。恐らく、『あの場所』はパークの中でもある程度の役割が担われていた建物なのでしよう。

考え事をしながら歩いていると、不意にイエイヌさんが立ち止まって、言いました。

「あそこです、あそこー！」

イエイヌさんが指差した場所、そこがわたしの居た場所のようです。ぱっと見た感じは単なるひとけの無い廃墟。ですが、良く見れば、屋上には何か黒いガラスのような不思議な屋根がありますし、幾つかのケーブルやアンテナがあり、この建物が何らかの役割を担っていたであろう事がわかります。とはいえ、妙に古ぼけたような雰囲気も感じてしまいます。

「ここから入って……ここつちです」

イエイヌさんの指示に従って進みます。風化してしまったのか、それとも元々無かったのか……それはわかりませんが、看板や案内板と言ったこの建物の正体がわかるようなものはまるでありません。少しだけがつかりしてしまいがちながらも、彼女についてあるき続けます。さほどの時間を経ずに、わたし達は建物の裏口に到着しました。「ここにあなたが居たんです」

その場所は確かに私が最後に見た光景を望む場所でした。わたしが開いてそのままになってしまっているのでしょうか、開け放されたドアも確認できます。

「で……わたしは、このドアから出てきた、筈……」

わたしが奥を指し示すと、イエイヌさんもそれに従って、ドアの向こう側をじっと見つめるのでした。

明りが陽光だけだからか、やはり薄暗く、ひとけの無い上に、あの夜には見えなかったぼろぼろの壁紙。外の優しげな光景とは裏腹に、何故か無情さや儚さや訳のわからない不気味さが漂っていました。

「入りましょう」

以外にもイエイヌさんが先に進むことを促します。

「なんだか不気味ですけど……怖くないですか？」

その言葉に彼女は首を振ります。

「怖くないといったら嘘になるかもしれない……でも、あなたに取って大切な何かが見つかるかもしれないですよ？　だったら行かない訳が無いじゃないですか！」

そういう彼女の身体は震えていますし、いつの間にか私の先に居た筈の彼女は私よりも少し後ろに下がっていますし、尻尾も丸まっています。

「無理をしなくてもいいんですよ？　ここまで案内してくれただけで、わたしは本当に助かりましたし……」

わたしは彼女の身を案じる言葉を投げかけましたが、彼女は頑と譲りません。

「し、使命……ですから……！」

自分の意思すら殺して何かに縛り付けられているような言葉。ですが、強い決意を感じさせる言葉。わたしは胸が痛くなるような思いを抱きました。恐らく、今のわたしに彼女の意思を覆すだけの言葉はありません。彼女に帰るように伝えることが、かえって彼女の尊厳を蔑ろにするようにさえ思えます。

「そこまで言うなら……はい、お願いします。イエイヌさん」

私は言葉が続けます。

「でも、何か危ないことがあったり、どうしても無理そうだったら、おうちに帰ったり、他のフレンズさん達を呼んだりしてください。あなたにも無理をして欲しくないです」

そう伝えて、わたしは彼女に手を差し出します。

「手、繋ぎましょう？」

「はい！　かしこまりました！」

彼女の手は、手袋越しでしたが、柔らかく温かでした。

……ところで、イエイヌさんは感情の動きがわかりやすい子なのだなあと思います。手を繋いだ途端、しおれていた耳と尻尾はしやんと

なって、身体の震えも止まっていました。とはいえ、私だって、先程まで感じていた恐怖のような感情は、イエイヌさんと手を繋いだ途端、何処かへ消えてしまいました。ありがとうございます、イエイヌさん。

おぼろげな記憶を頼りに道を進みます。あの夜とは違って、窓から差し込むのは陽光ですし、わたしの意識も身体もはつきりとしています。お陰である晩に抱いた果ての無い迷路のような印象は無く、寧ろ、何かの跡地のようなそんな物悲しい印象さえ受けました。壁には剥がれてしまったのか、それともともと無かったのかはわかりませんが、装飾などもありませんでした。

「ええっと、この角を曲がって……その次も曲がって……」

つい呟いてしまいます。返事を求める言葉ではなく、わたしが自分の中で確認をするための言葉なのに、何故かイエイヌさんは律儀に「はいー」と返事をしてくれます。そんな様子にわたしはつい、くすりと笑ってしまいます。

「ど、どうかしましたか?」

イエイヌさんが問いかけます。

「いえ、イエイヌさんが可愛らしくて」

思わず思ったことをそのまま伝えてしまいます。彼女は顔を真っ赤にして俯いてしまいました。それに耳はぴんとしているし、尻尾はぶんぶんと振られているし……そういう私も伝えた言葉のまっすぐさに後から顔が真っ赤になってしまいます。

「さ、行きましよう?」

照れ隠しに彼女の手を引っ張るようにして先に進みます。ああ、恥ずかしい。

わたしが眠っていたであろう部屋の前に到着しました。何故だかごくぐりと喉を鳴らしてしまいます。

「……開けますね」

「はいー」

ぎいっという重い音が響きながら、ドアが開いていきます。部屋の中はわたしが目覚めた時と変わらない、淡い黄色い光と、ドアの真上

の緑色の光がありました。ですが、私達の背後から差し込む陽光の
陰か、ドアの横にスイッチのようなものがあることがわかりました。

「これは……スイッチ？ 何の？ 電気……なのかな」

わたしが考え込んでいると、イエイ又さんが不思議そうに問いかけ
ます。

「何かわかりましたか？ これですか？」

考えることで一杯で、彼女の言葉を無視するようになってしまいま
した。

「うーん……いいや、押してから考えましょう」

わたしはスイッチをぱちりと押します。ぶうんという低く小さい
音が聞こえると同時に、部屋の電気がつきました。イエイ又さんは少
しばりくりしたように身体をぴくりと震わせました。「きゃっ」とい
う可愛らしい声も一緒です。

「ご、ごめんなさい、びっくりさせちゃった……」

「いえ、ちよつと急だったもので……」

恥ずかしそうに顔を俯かせて彼女は言いました。イエイ又さんに
は少しばかり申し訳ないところですが、電気が点いたお陰で部屋を見
回すことが出来ました。

部屋は真っ白な壁紙に真っ白なタイルが敷き詰められた部屋でし
た。廊下の荒れ具合とは違い、小奇麗さがまだ残っています。床や天
井には何本かケーブルが走っていて、そのケーブルは部屋の別の出口
と、数個のベッドのようなカプセルとに繋がっていました。カプセル
は五台程ありましたが、中は全て空でしたし、蓋が開いているものは、
恐らくわたしが眠っていたであろうそれ以外にありませんでした。

「ここに、わたしは眠ってたんですかね……」

わたしは蓋の開けているカプセルに近づきます。すると鞆が一緒
に入っていることに気付きました。

「こんなものが……どうして気付かなかったんでしょう……」

そう言ってわたしは鞆を持ち上げます。肩から掛けるタイプの
バッグです。青色を基調とした可愛い鞆でしたが、布の具合やつ
くりの頑丈さは無知なわたしでもすぐにわかります。何か入ってい

るかもしれないという好奇心から鞆を開くと、中には小さなペンケースと、一冊のスケッチブックが入っていました。

「これは……わたしのもの？」

首を傾げると、隣に居たイエイ又さんが鞆やスケッチブック、ペンケースに顔を近づけて、すんすんと臭いを嗅いでいました。

「これはあなたのものです！ 間違いありません！ 匂いが一緒です！」

彼女を信用していない訳では無いのですが、わたしと一緒に眠っていたこの鞆が他人のものということはありえない話ではありません。とはいえ、わたしには出来ない方法で、鞆とその中身がわたしのものであるということのお墨付きをくれたイエイ又さんには感謝です。

「さすがイエイ又さんですね……わたしには匂いなんてわかりませんし……ありがとうございます！」

彼女の方を見ると、何かをねだる様な表情でわたしをじっと見つめるイエイ又さん。

「……どうかしました？」

どうしたら良いのかさっぱりです。

「い、いえ、ちよつとお役に立てたご褒美を頂こうかな……なんて、ちよつとだけ……」

申し訳なさそうに伝える彼女。わたしは「うん？」と返します。

「今のわたしに出来ることだったら、なんでも……なんですか？」

わたしは笑顔で彼女の申し出を受けます。こんなにも親切にしていただけなのです。何だつてやります。限度はありますけれど……

「えつと……おうちの時のように、撫でてもらえますか？」

とても申し訳なさそうに彼女は言いました。

「おやすい御用です。今までありがとうございます、イエイ又さん」

わたしは手をズボンでパンパンと払い、彼女の頭を撫でます。さらさらとした髪の毛が、妙に力が入っているお耳が、手のひらに当たりました。当たるとびくりと動く耳の可愛らしいことと言ったら……！ 暫く彼女の髪と耳とを独り占めできたことは、案外今日一番の収穫だったのかもしれない。

ひと段落ついたかな、というタイミングでそつと手を離します。彼女が顔を上げると、その目尻には涙が貯まっていました。わたしはつい慌てて彼女に謝ります。

「い、痛かったですか？ それとも触っちゃいけないところとかありました？ ご、ごめんなさい……」

イエイヌさんは涙を振り払うように首を振り、言いました。

「いえ、違うんです……胸がぎゅうってなって……それで、つい……嬉しいんです、うれしいんですけど、なんだか寂しくなってきたやつ……」

わたしはおうちを出る前にそうしてくれたように彼女を抱きしめます。

「大丈夫ですよ、イエイヌさん。わたしが居ますから。大丈夫ですよ」
「やっぱり、彼女は陽射しの匂いがしました。柔らかくて、やさしくて、そんな匂いがしました。」

イエイヌさんと一緒に、わたしが眠っていたであろうカプセルの淵に腰掛けて、鞆とその中身を詳しく見るようになりました。

「何か他にはあるかな……」

わたしが鞆をくるくる見回してみたり、ポケットをひとつひとつまさぐっていると、イエイヌさんが何かを見つけたようです。

「あの……このスケッチブック？ でしたっけ、ここに何か書いてあります」

イエイヌさんはその箇所を指差しながら、スケッチブックをわたしに差し出して見せてくれました。その箇所はスケッチブックの裏表紙でした。

「私、読めないの……あなたなら、と思つて……」

ええつと……『おなまえ と も え』？

「うーん……？ はつきりとは読めないですね……インクが滲んでるのか汚れてるのかはわかりませんが……」

わたしは眉間に皺を寄せながら伝えます。

「あの！ あの！ 読めるところだけで良いので、読んでください！」「おなまえ、と、も、え……多分名前なんでしょうけど……うーん……」

わたしは悩みながら考えます。わたしの言葉を聴いて、イエイヌさんは嬉しそうに言いました。

「と、も、え……じゃあ、ともえさんですね！」

彼女はにっこりと笑っています。悩んでいたわたしがなんだか馬鹿らしくなってきました。それが本当の名前かどうかなんていうのは、きつと問題じゃありません。彼女やこれから出会うであろう沢山のフレンズの皆さんが呼んでくれる名前こそが、これからのわたしなんです。記憶を取り戻してからのことなんて考えるだけ無駄です。正解でも不正解でも、前に進みましょう。その為の道を今、イエイヌさんが教えてくれたのです。

すうつと息を吸い込んで、彼女に告げます。

「はい、わたしはともえです」

胸に手を当てての自己紹介。自然と笑みがこぼれます。過去のことで、本当の名前、気にならない筈がありません。ですが、彼女が与えてくれた大切な一歩。それを尊重するということ。それは今のわたしにとって何よりも大切なことです。

「よろしく願います、イエイヌさん」

わたしは彼女に手を差し出します。

「良かったら、お友達になってもらえますか？」

わざわざ言うのは、少し照れ臭いですけど……

「はい、こちらこそよろしく願います！　ともえさん！」

彼女は満面の笑みで、わたしの手を握ってくれました。よろしくね、イエイヌさん。

わたし達は部屋を後にします。わたしの鞆とスケッチブック、そのたつたふたつがカプセルの中にあるだけで、他に何も見当たらなかったという事実。そして、その部屋には、扉がもうひとつありましたが、そちらはしっかりと施錠されておりこれ以上の探索が出来なかったという事実もありました。

期待していたほどの収穫が無いことにどこか虚しさを覚えました。……それでも何も見つからなかったよりはマシというもの。そう考えながらも、わたしは部屋の中を見回していました。

イエイヌさんは施錠されている扉をがちやがちやと弄っていました。少しすると諦めたように肩を落とし、わたしに眩きます。

「こつちには……行けませんね……」

「そうですね……どうしましょう？ 道に戻って他に探してみますか？」

わたしが提案すると、彼女は首を振ります。

「他に扉はありませんでしたし……ともえさんの二オイも残っていたりはしませんし……」

イエイヌさんの言葉を信じるならば、わたしが目覚めてから通った道以外に二オイが残っていないということ……『二オイ』というものがどれほどの時間で消えてしまうのか、わたしは知りませんけれど、多少なりとも時間が経過しているのだと思われれます。

わたしは「うーん」と声を出して悩んでしまいます。

例えば、ひとつの案としては、別の入り口を外から探すというものが思いつきました。けれど、ここがこの様子では他の扉も施錠されているでしょうし、仮に侵入できても荒れ果てていて探索どころでは無いかも知れません。

見かねた様にイエイヌさんがわたしの顔を見つめて言います。

「ともえさん。悩んでいても仕方が無いですし、いったん帰りましょう？」

その声色は不安げなようで、心配なようで……けれど、心底わたし

の事を案じてくれているのは間違いないようでした。

確かにイエイヌさんの言うとおりでです。この場で悩んでいてもどうしようもありません。再び時間を置いて探索をすれば良いだけのことです。幸い時間なら幾らでもありそうな現状。無理をする必要は欠片もありません。というか……

「イエイヌさん。わたし、あなたのところにお世話になっても大丈夫なんですか？」

当然の疑問です。単純に申し訳ないという思いもありますが、何よりも彼女に掛かる負担の事を考えると考えなしに頼ることは出来ません。まだわたしは身体が自由に動くワケでも無いですし、何か彼女のお役に立てることがありそうな気もしません。

「当然です。一緒に帰りましょう？　ね？　ともえさん」

当然でした。断言でした。とはいえ、多少なりともご迷惑をおかけしてでも、今は彼女と一緒に居なくてはならないのもまた事実です。今後の自分の生き方も含めて考える為にも、ここは一端、彼女にお世話になりましょう。

わたし達は建物を後にします。相も変わらず、私の歩みは遅く、イエイヌさんのペースには中々追いつきませんでした。起きたばかりの頃と比べると、ずっと快復したように思えますが……まだまだ本調子とは呼べないでしょう。

それに考えるべきことはたくさんあります。過去のことともそうですし、これからどのようなようにして生きるのかということもそうです。加えて、どうしたら自分自身の過去を取り戻せるのかということ。それらに今、正解を見出すことは叶わず、正解に至るための過程すら、わたしには思いつきません。

「ともえさん、ともえさん」

わたしの先を歩くイエイヌさんが傾きかけた陽射しを浴びながら、振り返ってわたしの名前を呼びます。

「なんですか？　イエイヌさん」

えへへと彼女は楽しそうに微笑んで言いました。

「今日は楽しかったですね！　お散歩も出来ましたし……ともえさん

だって、お名前もわかりましたし、持ち物だって見つけました！ 大きな一歩ですよ！」

その微笑は、彼女の発言が心の奥底から嘘偽りの無い本心で発せられたものであることの何よりの証明でした。そして、何よりも、わたしが悲観的に過ぎるのだということを痛感させました。

「ええ、そうですね……イエイヌさん。ありがとうございます。あなたと出会えてよかったです」

わたしも、多分微笑んでいました。

イエイヌさんが歩くペースを緩めます。そうして彼女はゆっくりとわたしの隣を歩き始めました。

「どうかしましたか？」

わたしは首を傾げながら問いかけます。

「まだ、夢の中にいるみたいです……こうしてヒトと……いいえ、ともえさんとお散歩できて……」

きつと現実ですよ、イエイヌさん。

「……暫く、せめて体調が良くなるまでは、イエイヌさんのお世話になっても良いですか……？」

わたしがそう尋ねると、彼女は一瞬きよとした顔を浮かべました。

「……？ 何言ってるんですか？ 当然です！ ともえさんさえ良ければずっと一緒にいたっていいんですから！」

彼女の申し出は、なんとも都合の良い言葉でしたけれども、なんとなく、その裏側に込められた彼女の感情が透けて見えるようでした。孤独。言い方は悪いですが、それを紛らわせる事、あるいは終わらせること……それが当面、わたしがイエイヌさんにできることなのでしょうか？ それは……あまりにも自分を買いかぶり過ぎに思えました。

わたしは彼女の言葉に「ありがとうございます」と返して、一拍置いてから続けます。

「また明日も一緒にお散歩しましょう？ 良ければ、他のところも行ってみたいです。案内していただけますか？ イエイヌさん」

彼女は満面の笑みを浮かべて、強く頷きました。

「はい！ 任せてください！ ……うふふ、楽しみです！」

ええ、わたしも楽しみです。よろしくお願いしますね、イエイヌさん。

わたし達は、夕日に染まる土道を手を繋いで歩きます。イエイヌさんはわたしの隣をゆっくりと歩いてくれていて、その心遣いがわたしにはなんとも嬉しく思われました。時折、わたしがバランスを崩しそうになると、すかさずわたしを支えるように身体をぴったりとくっつけてくれたり、繋いだ手に力がぐつと加えて寄りかかっても良いのだと暗に教えてくれたり…彼女のひとつひとつの行動の全てが、わたしの助けになってくれていました。

イエイヌさんは『ずっと一緒に』という言葉をわたしはふと考えます。

ずっと一緒に居られるのなら、それはきっと素敵でしょう。彼女が素敵な方であるということは言うまでもなく、そんな彼女のお友達ですとか、知り合いですとか、そんな方々とも繋がりを持って、広大に見える世界がちっぽけになるくらい、ずっと一緒に居られるのなら……きっとそれは素敵です。

けれど、わたしはわたしの事が気がかりでした。

それは、安堵に包まれた今でさえ胸の奥で燻り続ける過去への欲求。あるいは、わたし自身への疑念。ゆっくりと脈打つその鼓動は、きっとわたしをいつかどこかへ駆り立てる……そんな気がしました。

「ともえさん！ 着きましたよ！」

わたしははっと顔を上げます。

「ずっと考え事してました……もう着いちゃったんですか……」

「むつかしそうな顔してたんで、声はかけないようにはしてましたけど……無理はしないでくださいね……？ そっちの方が心配です……」

彼女はしゅんとしながらわたしの顔を伺います。

「うーん……多分、大丈夫です。身体が元気になるまでは、なるべく気楽に構えようかなって思いますので……」

イエイヌさんはじっとわたしの眼を見つめます。数秒か、あるいは

一瞬か、彼女はゆっくりと眼を瞑って頷きました。彼女の顔が再び視界に入った時、その表情はどこか淋しげなものに思われました。

「そうですよ！　だから、せめて……せめて、元気になるまでは、笑って下さい！」

わたしは彼女にほほえみ返し、頷きます。

「お言葉に甘えて——」

わたしは『ただいまあつ』と大きく声を出して『おうち』のドアをくぐります。イエイヌさんもわたしと同じようにして、中へ。

「——お世話になります。これからよろしくおねがいますね、イエイヌさん」

イエイヌさんは満面の笑みで頷いて「はい！」と応じます。

「こちらこそよろしくおねがいます！　ともえさん！」

その言葉をきっかけに、何かが始まった気がしました。

朝特有の鋭さのある陽射しが窓から差し込みます。

「ん……うん……」

眼が覚めたわたしは隣に眠るイエイ又さんの温もりを感じながら、眼を擦ります。イエイ又さんは尻尾を抱えるように丸くなって眠っていました。わたしはそっとイエイ又さんの頭を撫でます。彼女はもにもよると眩きながらくすぐったそうに顔を動かしました。そんな様子にわたしはつい、くすりと笑ってしまいました。

「顔、洗いますか」

誰に聞かせる訳でもなく眩きます。

「ええつと……洗面台は……」

イエイ又さんのおうちを勝手に物色しているようで、なんだか申し訳ない気もしますが、そこには眼を瞑りましょう。

「台所……？ 使うのかしら？ こっちの扉の方にお手洗い……その奥にお風呂と……」

自分で自分の動きがなんだか猫みたいに思えてしまい、内心で小さく笑ってしまいました。ともかく、顔を洗いましょう。

タオルは幸い洗面台の下の棚にありました。きちんと洗濯されているようで、すぐにこのまま使えるようです。

洗面台に備え付けられた鏡を覗くと、そこには青味がかかった緑色の髪の毛をした少女が映ります。襟足が長く伸びており、見たところ髪の毛をまとめたほうが良さそうです。また、彼女の瞳は両目の色がそれぞれ異なっており、右目は灰色の混じった赤色。左目は髪の毛と同じ青味がかかった緑色でした。

はてさて、これは誰や如何にとわたしは疑問に思いますが、答えなどひとつしかありません。この少女は、わたしです。その事実に気付くや否や、眩暈のような視界のブレがわたしを襲います。何かがおかしいのです。何かが違うのです。忘れてしまったわたしの記憶。その一部が唐突に取り戻されたような感覚。

「あれ……？ わたし、こんな……」

世界に揺さぶられながら眩みます。しゃがむようにして、眩暈に耐えます。十数秒程度で揺れは収まりましたが、妙な動悸はまだ残っていました。改めて鏡をしっかりと見ます。

わたしの視界に入ってくる鏡の中のわたしは、焦燥感と猜疑心がない交ぜになったような表情をしているだけで、先程と変わらないわたしでした。記憶の一部……そうは言いましたが、本当にほんの一部です。嘗てのわたしの姿だったかもしれない記憶、それだけ。その記憶の中にある姿は、顔の形や眼や鼻などの細かい形は（ぼんやりとですが）今と大差なく、単に月日を重ねたものに過ぎないように思われましたが、決定的に違っていたのは髪と瞳……昨日気づいた爪の色も、同様でしょう。

記憶の中のわたしは、真つ黒の髪に茶色の瞳をしていて、爪の色も桃色だった筈です。今のわたしと昔のわたし。眠っていた間に、一体何があったのでしょうか？ まるで見当もつきません。

心を落ち着かせるため、そして朝の習慣として、顔を洗い終えます。その頃になると動悸も治まり、現状を受け入れるしかないのだという心構えも出来ていました。

「ふう……」

タオルを首にかけて、顔に残った雫をふき取りながらベッドの方に戻ると、イエイヌさんが起きていました。眠そうに眼をこすつていましたが、何よりも不安そうに辺りを見回していました。

「おはよう、イエイヌさん」

わたしに気付いたイエイヌさんは何も言わずにわたしに近づいてきました。

「ど、どうかしました？」

彼女はわたしの質問に答えないで、彼女はそつとわたしの胸元に顔をうずめました。わたしは困惑してしまいます。ただ、こうされると、何故でしょうね。どうしても彼女の頭を撫でてしまいたくありません。

一分に満たないほどの時間、わたしは黙って彼女の頭を撫でます。その内、小さな声でイエイヌさんが何かを眩みます。わたしは聞き取

れず、聞き返しました。

「何か、言いました？」

彼女はわたしの胸元から顔を離し、頭をぶるぶると振って言いしました。

「なんでもないです……おはようございます！　ともえさん！」

朝早いというのに、元気ですね……イエイ又さん……それはさておき、今日はどうしましょうか。彼女と散策に出かける予定こそありませんが、時間が早すぎますし……ここはひとつ、わたしの身体の調子を取り戻す為にも、ここでの生活を知る為にも、イエイ又さんの予定にくつついて動くのが無難に思われます。

「どうしましょう、イエイ又さん。何かお手伝いできることとか、したほうが良いこととか……そういうのつてありますか？」

うーんとイエイ又さんは唸りながら考えます。

「そう、ですねえ……お手伝いしてもらいたいこと……命令とか指示とかでしたらなんでも良いのですけれど……」

昨日は見せなかつた一面。彼女の闇？　は深そうです。

「い、今なんて？　いいえ、なんでも……そうです！　ジャパリまんをいただける……んでしたよね、そこまで案内していただけますか？」
とりあえず話題を逸らすことは出来たような気がします。命令とか指示とかなんて思いつきませんし、思いついてもする気にはなりません。

「わかりました！　では行きましょう。ともえさん」

彼女はとてとてと歩いていきます。

「イエイ又さん」

わたしは彼女を呼びとめました。

「まずは顔を洗いましょう？」

イエイ又さんは耳を赤くして「はい」と返事をしたのでした。
イエイ又さんが顔を洗い終わるのを待っている間、手持ち無沙汰でしたので部屋の中を眺めることにしました。

昨晩は帰ってきて早々、わたし、寝てしまっただけですよ。どれくらいの間かはわかりませんが、長時間寝たまま、目が覚めて……

そうしていきなりあの距離を歩いて……肉体的にも精神的にも疲労が貯まっていたのでしよう。

イエイヌさんのおうちに戻るなり記憶がありません。ベッドに腰掛けたあたりまでは何とか覚えているのですが……もしかすると何かの後遺症で記憶に障害でも……と考えたあたりで、一冊の本が壁際の棚にあることに気付きました。

気になって手に取ってみると、どうやら凶鑑のようです。『動物凶鑑』そう書かれています。ふむ、これから沢山のフレンズさんたちと接するのです。彼女達と仲良く生きるためにも、知識があるに越した事はありません。後ほどイエイヌさんに譲ってもらえるか聞いてみましょう。

「お待たせしました！　ともえさん！」

イエイヌさんが戻ってきました。彼女は水滴を振り払うように軽く顔を振ります。そして何か思いついたように、手をぱちんとたたきました。

「あ、そうだ！　ともえさん！　これを……どうでしょう？」

彼女はクローゼットの中から一着のベストとサファリハットを取り出します。昨日わたしが回収した鞆と似た色合いの青色が基調となっていて、使いやすそうなポケットが幾つか付いている袖なしのベスト。そして、カーキ色の生地に先端が空色に染められた羽根のついたサファリハット。可愛らしさと実用性を兼ね備えた中々素晴らしい一品たちです。

「朝と夜はまだ冷えますので、どうぞ。昨日の夜、ともえさんが眠っている間に見つけたんです！　あと先日ともえさんが眩しそうにしていたので、お帽子も……どうぞ！」

楽しそうにベストとハットをひらひらさせるイエイヌさん。

「気持ち嬉しいのですが……イエイヌさんは着ないんですか？」

「私には毛皮がありますので！　平気です！」

けがわ……毛皮……？　服を……？　なるほど、そういう解釈なのです。口にはしませんが、わたしは何となく納得しました。が、ちよつと動揺してしまいます。

「そ、そうですか……」

ヒトとして私に染み付いているであろう『常識』がなんだか間違っているような気がしてきます。

「ではお言葉に甘えて……サイズもちょうどいいですし、暖かいですね……ありがとうございます、イエイヌさん」

わたしが彼女にそう伝えると、彼女は満面の笑みでした。

「いえいえー、お役に立てて何よりです！ ミヨリーニツキルってヤツですね！」

どこで妙に難しい言葉を覚えてくるんでしょう……？ ともなく、イエイヌさんには感謝です。

「では行きましょうー！ しゅっぱーっ！」

念のため……というよりも、何かに役に立つかもしれない。そう思って、わたし鞆に凶鑑を押し込みます。そうして、わたし達はうちを出ました。

イエイヌさんの言うとおり、外は少し冷えていて肌寒いくらいでした。イエイヌさんに先導してもらいながら、わたしは彼女に疑問に思ったことを問いかけます。

「パークにもやっぱり季節ってあるんですか？」

「はい！ と言っても、このちほーはそこまで暑かったり寒かったりはしないそうですよ？」

なるほど……ちほーというのはそれぞれ特色があるんでしょうね……

「イエイヌさんは別のちほーに行ったことってあるんですか？」

「無いですねえ……話には聞いたことはあるんですけど……わたしはフレンズになったばかりですので」

そういえばそうでした。

「何処か行ってみたいちほーって、ありますか？」

イエイヌさんは悩むように首を捻ります。

「うーん……考えたことが無かったですねえ……うーん……」

フレンズになってから日が浅いからでしょうか。それとも生活に適した土地から離れたくない、とか？ 色々事情もあるのでしよう

か。あまり詮索しないほうが良いのかもしれない。

「寒いところはあまり得意では無いですけど、雪とか見てみたいですかねえ……綺麗そうですね……ゆきやまちほーだと見られるとか……」

なるほど、ジャパリパークでしたらきつと綺麗な雪景色を眺めることが出来そうですね。わたしもぼんやりとそんなことを考えてしまいます。

「ともえさんは……あつ、見えましたよ！ あそこですあそこ」

イエイ又さんの指の先には屋台風の小さな小屋がありました。嘗ては売店として運用されていたのでしょうか？ 軒先には汚れて読むことが出来ませんが『屋さん』という文字が確認できました。小屋の中には山積みになっていいるジャパリまん、ひとつの影が見えます。

「おはようございます！ ロバさん！」

イエイ又さんが小走りになって駆け寄り、挨拶をしました。

「お、おはようございます」

ロバと呼ばれたフレنزにわたしも挨拶をします。

「おはようございます、イエイ又さん。そちらの方は……」

「あつ……ごめんなさい、わたしはともえです。よろしくお願いします、ロバさん」

わたしはペこりとお辞儀をして応じます。

「はい、よろしくお願いしますね、ともえさん……ですね」

ロバさんはそう言って会釈してくれました。

「それにしても、イエイ又さん。今日も早いですねえ。素晴らしいですよー。健康に早寝早起きは重要ですからね」

ロバさんは腕を組んでうんうん頷いています。ふむ、フレنزさん毎にこだわりポイントみたいなものがあるんでしょうか？

「ロバさんには負けますよお。いつも日が昇るころにはここにいますし……毎朝大変じゃないですか？」

イエイ又さんが問いかけます。わたしも同感です。毎朝この時間となると幾らなんでも大変でしょう。

「うーん……そういわれると大変ですけど……好きでやっていること
ですし……それに何よりも、皆さんが快適にジャパリまんを食べるこ
とが出来るということが嬉しいですし、気にしたことは無いですよ」
そういわれると確かに説得力があります。

「あの……ロバさんがこのお仕事……ですかね、始める前はどうかっ
たんですか？」

ロバさんは思い出すような素振りをしながら語りました。

「ええつと……結構前ですけどね。ボスはいつもここにジャパリま
んを置いてくれるのですが、そりゃあもう毎朝大変でしたよ……」
その光景を思い出したのか、彼女は呆れたように乾いた笑いを漏ら
します。

「このあたりをナワバリにしてる子達が皆来て、それでごった返して
……ちからの強い順みたいなのところがありましたからね……食べら
れない子が居たことは無かったはずですけど……」

大変なんですねえ……それはそれで見てみたい、と思うのはわたし
のわがままでしょうね。

「で、見るに見かねたロバさんがこのお仕事を始めた、と……ありがと
うございます！」

イエイヌさんが感心した様に頷きながら言いました。

「いえいえ、それほどでもー」

ふふんと誇らしげなロバさんでした。

「つと、昔話はこれくらいにして……おふたり分ですね。はい、どう
ぞ」

簡素な袋に包まれた数個のジャパリまんを受け取ります。そうし
て、わたし達はお礼を述べて帰ることになりました。わたしは皆さん
への挨拶を兼ねて残ろうかと思ったのですが、ロバさんから止められ
ました。

「空腹でぴりぴりした子もいますし、挨拶どころでは無いですよ……
？　　なんだか情けない話ですが……」

わたしは思わず乾いた笑い声を漏らしてしまいました。

何と言うか……恐ろしいですね……フレنزもヒトもけものも、食

欲には負けるんでしょうね、きつと。

では失礼するとしましょう……と、その時でした。雑談やら足音やらが入り混じった雑踏の音がわたし達の耳に届きます。振り返ってみてみると、軽く土煙を上げながら凄いスピードで走ってくる子も居ます。

「みんな来ましたね……急いでも数は変わらないのに、まったく……」
そういうロバさんの顔は呆れたようでしたが、何処か楽しげでもありませんでした。

「さ、離れたほうが良いですよ。巻き込まれでもしたら大変ですからね？」

改めてロバさんにお礼をし、わたし達は屋台から離れました。背後から諫めるような会話をするロバさんの声も聞こえましたが、それに反論するように「へっへん」と応える声も聞こえて来ます。

「あの子は何のフレンズなんでしょう……」

羽根のあるフレンズさんは、やっぱり鳥さんなのでしょうか？

と、わたしは興味が引かれ、つい振り返って足を止めてしまいましたが、イエイヌさんがジャケットの裾を軽く引いて言いました。

「早く行きましょう？　ともえさん。声からすると口……じやなくて、多分お話をするどころではないですよ……？」

イエイヌさんの方を見てみると、彼女は屋台の向こう側から来る十数人以上はいるであろうフレンズさん達を指差していました。急いでいる子も居ればフレンズ同士で話し合う子も居ます。ただ……彼女達の背後には闘争心や競争心とも呼べるようなものが見えるような気がします。

「あ、あはは……あれは……そうですねえ……ご挨拶はまたの機会にしましょう……」

はい、怖気づきました、わたし。

わたし達は屋台のある広場を後にします。やはり……というべきでしょうか。がやがやと喧騒が聞こえてきます。イエイヌさんの言う通り、退散して正解だったのでしょうか。

「イエイヌさん、あそこっていつもあんな感じなんですか？」

わたしが尋ねるとイエイヌさんはあははと乾いた笑いを出します。

「今日は特に凄いですね……」

そんな他愛ない話も程ほどに、わたし達はのんびりと歩きます。イエイヌさんはふんふんと鼻歌を歌いながら、時折わたしの方を振り返ります。どうして振り向くのかはわかりませんが、わたしはそれに笑顔で応えます。

太陽が高くなってきたからか、段々と暖かくなってきましたし、時折吹く風の含んだ冷たさが心地よくもありました。遠くには高く聳える山があり、そのまま視線を下に動かすと風にそよぐ木々や草叢があります。爽やかで、暖かくて、素敵な光景でした。ふと、あの日の夜を思い出します。「絵を描こう」という決意。イエイヌさんに相談してみましようか？ それとも、自分ひとりであそこまで行ってみましようか？

そういえば、わたしの眠っていたカプセルには、わたしの思いを見計らったかのようにスケッチブックが添えられていましたが、昔のわたしも絵を描くのが好きだったのででしょうか？ 顔を洗ったときに戻った記憶はわたしの外見だけ。何もわかりません。ただ、ふつつつと湧き上がるこの欲求は、記憶を思い出すに辺り、重要な予感がします。

「ねえ、イエイヌさん」

「はい、何でしょう！ 準備なら出来てますよ！」

なんの準備でしょう……？

「お家に帰ってご飯を食べたら、またあそこへ行きませんか？ まだ調べたいこともありますし、やりたいことが出来たんです」

あ、でもわたしひとりでも大丈夫ですけれど……と伝えようとする。と、わたしが言葉を発するよりも早く、「はい！」と彼女は言いました。うーん……彼女と一緒に出かけることが出来るのは幸いなんですけれど、彼女は本心からそれを望んでいるのでしょうか？ ふと疑問に思ってしまう。尻尾をふりふり答えるので、恐らく嫌ではないのでしょうか？ 申し訳ないというかなんというか……。

そんなお話も程ほどに、わたし達はお家に着きました。

「ふう……ただいま」

わたしがそう言って扉をくぐると、イエイヌさんも同じようにして扉をくぐります。

「そういえば……ただいまって言うておうちに入ったことは無かったですねえ……」

イエイヌさんが感慨深げに言いました。

「そうなんですか？　というか……」

ひとつ疑問が浮かびます。

「フレンズのみなさんって、イエイヌさんのように『おうち』があるんですか？」

わたしは手を洗いながら尋ねます。

「うーん……むしろ私のように『おうち』のある方が珍しいですかねえ」

イエイヌさんは机にコップとジャパリまんを並べながら答えます。

「そうなんですか？　てつきり皆さんおうちがあるものか……」

手洗いを済ませた私は椅子に腰掛けます。

「それぞれ皆さんナワバリがありますし、好みもありますからね」

続けてイエイヌさんは幾つかの例を出します。

「例えばアルマーさんセンさんは一緒に暮らしているようですが、眠るときは地面の穴や洞穴で寝るそうですし、ロバさんは草原の木陰で過ごすことが多いそうです」

その日の天気や気温、やりたいこと、そういった色々な要因もありそんな話です。フレンズになる以前の動物だった頃の習性が彼女達の暮らしぶりにも反映されている訳ですね。

「では……何故イエイヌさんはここに……？」

私は動物としてのイエイヌの生活を調べようと、鞆に押し込んだ百科事典を開きます。

「うーん……私はフレンズになったときからここに居たというのが大きいですかねー」

わたしはページを捲りながら彼女の話の話を聞きます。

「フレンズになったときにここに居て……最初にいったそうです。こ

ここで待つんだって……私は覚えてはいないんですけど、でも、ここに居なくちやいけないんだって思いは……今でも、あるんです」

今までに無いほどの強い意志を彼女から感じました。イエイヌさんがフレンズになる前に、一体何があったんでしょう。

「でも、私がフレンズになる前のことは何も覚えていません。私は……私は、どうしたら良いんでしょうね……えへへ」

どこか照れくさそうな言葉でした。けれど、わたしから彼女に伝えられる言葉はありませんでした。わたし自身が、囚われるべき過去が無いのに過去に囚われていると言う身の上ということもありますし、わたしの言葉が彼女の意志を変えてしまうのではないかという恐怖もありました。

わたしは、わたしの力で、他者を変えてしまっても良いのでしょうか？ 過去という根拠を持たないわたしが？ そんなこと、許されない。わたしはそう思います。もしかしたら……わたしが他者の本質を変えることへ恐怖を抱いているというそれだけかもしれないかもしれませんが……。

わたしに返す言葉が無い以上、必然的に部屋を包むのはしんとした空気だけになります。耐えられなくなったのか、それとも自分の言葉が齎した沈黙を破る義務を感じたのか、イエイヌさんが口を開きま

す。
「……なんだかごめんさい、ともえさん。困らせたくなかった訳では無いんです」

わたしは彼女の言葉を聴いて返します。

「いいえ、わたしがイエイヌさんにひとことでも言えることが出来ないことが……それよりも、ご飯にしましょう？ ね？」

わたしが促すと、イエイヌさんは「はい！」と元気な返事をしてくれました。わたしの気持ちを汲んでくれたのかはわかりませんが、何よりもその返事がありがたく感じました。

気付けば、辞典はイエイヌの頁になっていました。そこには手書きの文字が書いてあります。『 せ な ち 』。
インクが擦れてしまっているため、何と書いてあるかは、わかりませ

んでした。

不思議な沈黙。互いが互いの触れてはならない事柄に触れてしまったが故の沈黙。わたし達は黙ったままジャパリまんを頬張ります。気付けばお互い食べ終わっていました。

「……そういえば、ともえさん。やりたいことって何なんですか？」
イエイヌさんが不意にわたしに尋ねます。そういえば、お話していませんでしたね。

「絵を……描こうと思ったんです。折角のスケッチブックですしね」
「へえ……絵ですか……凄いですねえ、ともえさん……」

彼女は「ほへえ」と妙な吐息を漏らします。

「そんなことは無いですよ？ わたしが絵を描けるか、わたしもわかりませんしねえ……」

わたしは自分の発言にはっとします。彼女にとって反応しづらいことを言ってしまった。そう思ったのです。

「出来上がったら是非見せてくださいね！」

幸いというべきだったでしょうか？ それとも彼女は気を使ってくれたのでしょうか？ともかく、わたしの恐れていた事態は避けられました。

「ええつと……あんまり期待しないで下さいね？ わたしにもどうなるかわかりませんので……」

言うまでも無いことです。身体に染み付いているほどの技術があるのなら話は別でしょうが……今のわたしにそんなものがあるのかどうか……。

疑問は尽きませんが、自分自身のやりたいことをやってみようかな、と思うのです。ロバさんが他者の為にと働くように、イエイヌさんが自分の思いを貫くように。わたしだって何かしたいんです。

食事の片付け——と言ってもグラスを片付ける程度ですが——が終わり、時間が過ぎていきます。お互いに食後特有の眠気を味わうようにのんびりとした時間でした。わたしは椅子に腰掛け、パラパラと辞典をめくりまわす。書かれた内容は別段変わったものでは無いようでしたが、何となく眺めているだけで楽しく感じられました。イエイヌさんはベッドに丸くなつて寝転がっており、眼を閉じたり、外を眺めたりとゆったりとした様子でした。恐らく、わたしがお世話になる前からずっと続けていた過ごし方なのでしょう。

ふと、部屋の棚に視線を移すと、小さな小箱が目に入りました。手に取り眺めてみます。赤いリボン型の装飾が箱を縁取り、その四角形の中心部には『の』をモデルにしたような黄色に塗られたシンボルがありました。木製のようなですが、つくりはしっかりとしていますし、欠けや汚れも殆ど無く大切に扱われてきたことがわかります。

ちよつとした好奇心です。イエイヌさんに問いかけます。

「ねえ、イエイヌさん。この箱開けても良いですか？」

彼女はまず先に耳をぴくりと動かして、その次にこちらを向いて言いました。

「えっ、それ開くんですか？」

「はい、多分……」

彼女はわたしの言葉を聴くと興味津々と言った様子でわたしの元に小走りで来ます。箱には小さなパズルのようなものが付いていて、それが鍵の役割を果たしていました。

「ええつと……これをこうして……違うかあ……こうして……」

わたしがせかせかと手元を動かしている様子をまじまじと見つめるイエイヌさん。どうしてそんなに楽しそうなのでしょうね。

「よし！ 出来ました！」

少ししてパズルは解けました。一度判ってしまえばなんて事の無い答えでしたが、かかってしまった時間を考えるとまだまだと言ったところでしょう。誰と比べている訳でも無いんですけれどもね。

「はええー……凄いですね、ともえさん……私も少し試したんですけど、ダメでした……」

心底感心するように呟くイエイヌさん。実際、大したことはしていない気もしますが、褒められて嫌な気持ちになることはありません。

「いえいえ、ありがとうございます。……開けても良いですか?」

どうぞ、という彼女の声を聞いた後、ゆっくりと開きます。中に入っていたのは黄色のリボンでした。宝箱を頑張って開けたのに、中身がリボンとは……なんだか肩透かしな気がします。ああ、でも、きつと……

「これは……? リボン?」

イエイヌさんは丁寧にリボンを摘み上げます。彼女はリボンをひとしきり眺めて、再び箱にそつと戻しました。彼女の表情は懐かしさのような、寂しさのような、切なさのような……色々な感情がないまぜになったものでした。

「きつと、昔住んでいた方のものでしょうね……」

わたしはそう呟きます。

「そう……なんですかね? 私はまるで覚えていないのですけれど……なんだか、胸がしゅんとなりました……」

寂しげなイエイヌさんの声を聞いてわたしは言います。

「きつと、宝物ですよ。イエイヌさんに取っても、ここに住んでいた方に取っても」

だって大切にしまわれていたんですもの、とは言いませんでした。彼女も、それを判っているでしょうから。

「私の……宝物……?」

イエイヌさんはきよとんとした顔で呟きました。

「フレンズになる前のあなたが、もしかしたら身につけていたものかもしれませんし、あなたのご家族が身につけていたかもしれませんし……それはわかりません。でも、きつと大切なモノに違いありませんよ」

イエイヌさんはわたしの言葉を聴いて、寂しさと嬉しさの混じった笑顔になります。

「きつき確認したとき、懐かしい匂いがしたんです。……きつと、きつと、大切な……」

わたしはそつとイエイヌさんを抱きしめます。わたしもどうしてそうしたのかわかりません。イエイヌさんはびっくりと驚くように身体を動かしましたが、わたしを受け入れてくれました。

暫くの間、わたしたちは寄り添いあっていました。気付けば太陽は空の頂点に昇っています。

「ともえさん、そろそろ出かけますか？」

イエイヌさんはわたしの胸から顔を離して言いました。

「そうですねえ……わたしはずつとこうして居たい位ですけれど……行きましようか」

イエイヌさんは耳（ヒトの耳の方です）を赤くしながら「はい」と元気良く言ってくれました。

イエイヌさんは昨日と同じように水筒に水を入れに流しへ、わたしは『あの場所』ですることの優先順位を考えます。まず最初にすべきこと、それは他の入り口の発見でしょう。窓ガラスを割ったり、扉を押し破ったりと言った行為は避けませんが、場合によってはその必要もあるかもしれません。次にすべきこと……いいえ、やりたいこと。それは絵を描くことです。わたしが眠っていた場所からの景色を、絵に描くのです。最後にすべきこと……帰り道にでもイエイヌさんに案内をお願いして、近くのフレンズさんに挨拶をしましょう。

そうこう考えているうちにイエイヌさんの準備が出来たようです。では出発しましょう。

先程までのお互いの悲しみに触れ合うような陰鬱さは何処へやら。わたし達の散歩は明るいものでした。ちよつとした雑談——例えば、ジャパリまんには他に味があるのかだとか——を交わしながらの道のりでした。イエイヌさんは道案内をするために（もしかしたら楽しんでいて早歩きになっているのかもしれませんが）わたしの数歩前を進んでいました。そして、わたしは景色とイエイヌさんの楽しげに揺れるしつぽとを微笑ましい思いを抱きながら眺め、進みます。

「ねえ、イエイヌさん」

「はい！　なんででしょう？」

彼女は笑顔で振り返りました。

「アルマーさんとセンさんって今はどちらにいらつしやるんですか？
彼女達にもお礼を言いたいのですが……」

わたしが問いかけると彼女はわたしの隣に歩いて来て、答えてくれました。

「今は……確かうみべちほーの方に居るとか……お仕事があるそうです。ともえさんが起きる前の日に向ったので、もしかしたらお仕事は終わっているかもですけど……」

ふむん。

「うーん……そうですか……」

「あ、でもまた来るとは言っていましたから……いつかお会いできるはずですよ！」

出来ればこちらから挨拶に向うのが礼儀というモノ。とはいえこちらから行っても、彼女の言うとおりすれ違いになってしまう可能性もありますから……

「出来ればわたしから挨拶に向いたいですけれども、難しそうですねえ……」

「大丈夫ですよ！　ジャパリパークはそんなに広い訳では無いですから、いつか会えますよ！」

確かにそうでしょう。そうでしょうけれども……釈然としないのはわたしの我侭でしょうか？

「あつ、そうです、ともえさん、休憩は大丈夫ですか？」

いつの間にか昨日休憩した木陰まで歩いたようです。確かに軽い疲労は感じますが、休憩は必要だとは感じませんし、何よりも少し無理する程度の方が身体にも良い気がしました。

「わたしは大丈夫です。イエイヌさんは大丈夫ですか？」

「大丈夫です！　私のことは気になさらず！　いつも歩く道ですので！」

彼女はえっへんという言葉が似合うような様子で胸を張ります。

「さすがイエイヌさんですねえ……」

彼女はふふーんと鼻を鳴らすようにして、再び歩き始めました。空高く太陽は輝いていて、確かな暖かさを覚えます。いえ、寧ろ暑いと表現したほうが良いような……：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：～

「イエイヌさん、暑くは無いですか？」

「まだまだ大丈夫ですよ？」

そういうお話ではなく、無理をして欲しくは無いのですが……

「ちよつとこつち来てください」

もしかしてという思いが頭を過ぎります。イエイヌさんは不思議そうに再びわたしの隣に来ます。彼女の額にはじんわりと汗が浮かんでいて、口で息をしていました。

「失礼しますね……」

彼女の持つ水筒をいったん預かり、彼女のブレザーとセーターを脱がします。その間、彼女は非常に不思議そうな顔をしていました。

「へ？ あれ？ へ？」

……今朝の彼女の口振りからして、そうなんだろうなあと思つていました……：：：：：：：：：～

「シャツ一枚では薄着過ぎますかね……：：：～こつちだけでも着てください」

わたしは彼女にブレザーを手渡します。イエイヌさんは受け取り、再びブレザーを身につけます。彼女は依然として不思議な顔をしていきます。

「あ、ありがとうございます……：～これ、脱げたんですね……」

常識が違うと一言で言うのと申し訳ないですけれど……：～この感覚はフレンズさんたち特有なんでしょうか？ とはいえ、考えてみれば彼女達の姿は動物達の姿が由来で、彼女達にとって適した環境で生きていく訳ですから、衣服を着替えたりする必要は薄いのでしょ～ね。とありえず、このセーターは鞆にしまっておくとして……：～イエイヌさんは不思議そうにブレザーを着たり脱いだりしながら歩いています。

「危ないですよ、イエイヌさん」

何も無い道とはいえ、前後不注意で転んでしまう可能性だつて十分にありません。

「あつ……ごめんなさい。気をつけますね……」

彼女はそう言って前を向いて歩き始めましたが……不意に再び振り向いてわたしに問いかけます。

「これって、下の方も脱げるんですよね？ どうやるんです？」

イエイヌさんはスカートの裾を捲り上げるようにして問いかけます。わたしは目の前で行われている出来事に呆然として言葉を失います。が、それも束の間。わたしはイエイヌさんに駆け寄り、注意します。

「イエイヌさん。下は、脱げますけど、外ではダメです。あと、セーターの下のシャツも、外ではダメです」

イエイヌさんはわたしの言葉を聴いて、自分が今、何をしたのか気付いたようです。彼女は「はい……」と消え入りそうな声で呟きました。

それから暫くして、『あの場所』に到着しました。昨日と変わらず陰鬱な雰囲気を感じながらそこに建っていました。

「さて、と……」

まずは正面玄関と思われるドアを押してみます。扉はびくともしませんでした。

「ですよねえ……」

予想はしていました。わたしの眠っていた場所のもうひとつの扉と同じように嚴重に施錠がされているのでしょうか。

「うーん……」

わたしが悩んでいると、イエイヌさんが何か思いついたようです。「二手に分かれませんか？ わたしはこつちから回ります。ともえさんはあつちから」

彼女の提案を断る必要はありません。極めて賢いやり方ですしね。お言葉に甘えて、彼女にも手伝ってもらいましょう。

「ありがとうございます。ではよろしくお願いしますね。何か見つかったら教えてください」

わたしは建物正面玄関から左側をぐるりと歩きます。扉は他に見当たらず、窓ガラスも全て鍵が閉まっています。ガラスはよほど頑

丈なのか、割れていたたり、歪んでいるところもありません。上の階に視線をやりますが、窓は同じように閉まっています。この嚴重さからして、やはりここは重要な意味合いを持つ建物なのでしょう。

暫く歩き、裏手に入り、そして右手側を見てきたイエイヌさんと再び出会います。

「どうでしたか？」

わたしの質問に彼女は首を振ります。

「扉も無いですし、窓も全部閉まっていました……」

探索は完全に行き止まりです。お手上げ状態、というヤツですね。

「どうしたのですかねえ……うーん……」

わたしは軽くガラス窓を叩きます。薄く脆そうな印象を受ける程度には土埃で汚れているのですが、想像していたよりもずっと頑丈で、とても割る事は出来なさそうです。

「割って無理矢理……というのも無理そうですね」

イエイヌさんも試すように窓に触ります。

「ですねえ……力自慢のフレンズさんと呼んでくれば、もしかしたら……」

わたしは首を振ります。

「仮に割ることが出来たとして、誰かが危険な目に会う可能性も……」
事実、岩や丸太のようなものを用意できれば何とかなるかもしれない。しかしそれに必要な労力や、伴う危険性を考えると、失敗の可能性だってある以上、実行する価値があるとは思えません。それにこれほど嚴重なのです。何らかの警備がある可能性だってあります。

「そう……ですか……」

イエイヌさんは自分のことでも無いのにしゅんとした様子です。

「大丈夫ですよ、イエイヌさん。記憶の手がかりがあるかもしれないというのは事実ですけど、何も無い可能性だってあります。無理をする必要なんて無いんですよ」

時間はたっぷりとあるので、他の手があるはずですが、わたしはそう付け加えます。しかしながら、イエイヌさんはやはりしゅんとした様子です。

「お役に立てなくて、ごめんなさい……ダメダメですね、私……」

自虐気味に呟くイエイヌさん。自分のことのように悲しんで頂けるのはありがたいことなのでしょう……ちよつとムツとしてしまいます。そんなに悲しまないで下さい。

「何がダメなんですか？ そんなことありません。イエイヌさん。あなたはわたしの命の恩人ですよ？ お忘れですか？」

彼女は俯いたまま何も言いません。

「あなたに救ってもらいました。あなたに色々なことを教えてもらいました。あなたと楽しくお話だつてしました。わたしは、イエイヌさん、感謝してもしきれないくらいです」

風にかき消されてしまうのでは無いかと思われるくらい小さな声で「でも」と呟くイエイヌさん。

「ほら、しゃんとしてください？ わたしはここに絵を描きに来たんですから」

わたしは彼女の肩をぽんぽんと叩いて手を引きます。悩んでいてもどうしようもない。それはあなたが教えてくれたんですよ？ イエイヌさん。だから……

「記憶を取り戻せなかったって、構わないんですよ？ わたしは」

イエイヌさんはじつとわたしの顔を見つめます。まるでわたしの発言が本心からのものかどうかを見定めるようでした。

「どうかしましたか？」

彼女は目尻にうつつすらと滲んでいた涙を拭って言いました。

「い、いえ……わかりました。あなたがそういうなら……行きましよう！」

わたしの手を引いて、駆け出すように歩き出すイエイヌさん。気持ちが伝わってくれたのでしょうか。

目的の場所に来ました。何度見ても良い景色です。イエイヌさんは相変わらず落ち込んだ様子でしたが、わたしが準備するのを見て、絵が描かれることへの興味を持ってくれたようです。と、その前に靴にしまっていたセーターをお返ししましょう。お互い体温も下がってきたようです……

「景色を描くんですか？」

イエイ又さんがセーターを着ながら尋ねます。

「ええ、そのつもりです」

「フレンズさんを描いたりとかも……？」

「それはちよつと自信が無いですね……今描こうと思っているのは、あの夜の景色なんです」

あの夜に見た、あの景色。風に揺られる木々と草。星星煌く夜空に浮かぶ月が、優しく草原を見つめるあの景色。あの瞬間、わたしはわたしの苦痛をさえ忘れられたのです。

「フレンズさん達も描こうかな、とは思っているんですけど……今は何よりもあの日見た景色を忘れたくないんです」

イエイ又さんはわたしの告白を聞いて、「ほほう」と言った具合に頷きます。

「では、始めますか」

わたしはスケッチブックを開き、色鉛筆を持ちました。

自分でも不思議なくらいの勢いで鉛筆が滑ります。まるで答えが既にわかっているかのように線が引かれ、スケッチブックに風景が描かれていきます。

「凄いですねえ……ともえさん……」

イエイ又さんが呟きます。

「そんなことは無いですよ……というか、むしろ自分でも何でこんなに絵が描けるのかわからないくらいです」

わたしの答えを聞いてイエイ又さんは「はへえ……」という妙な吐息を漏らしました。わたしは彼女の様子を見てくすりと微笑んでしまいます。さあ、続きを描きましょう。

気付けば日が傾いていて、結構な時間が経っているようです。かなり集中してしまっていたようで、イエイ又さんはわたしの隣で眠ってしまっていました。出来たよ、と彼女を揺り起こしても良いのですが、ひとつ思いつきました。ふふっ……喜んでいただけでしょうかな？

茜色に空と大地が染まる頃、わたしの『思いつき』は終わりました。

後はイエイ又さんを起こすだけです。

「イエイ又さん、起きてください」

わたしが肩をとんとんと叩くと、すぐに彼女は目覚めました。

「あ、ふぁ……おはようございます、ともえさん」

彼女はそう言っつて伸びをします。

「はい、おはようございます」

笑顔で返事をする、イエイ又さんは申し訳なさそうに言いました。

「寝ちゃつてたんですね、私……ごめんなさい……退屈させちゃいましたよね……？」

わたしは首を振って彼女に答えました。

「いえいえ、気にしてませんよ。わたし、結構集中しちゃつてたみたいですよ……それよりも、描けましたよ」

わたしは風景画を彼女に差し出します。

「わぁ……お上手ですね……ともえさん……」

感嘆の声を漏らすイエイ又さん。

「ありがとうございます。なんだかくすぐつたいですね……」

えへへと声が出てしまいます。

「でも、どうして夜なんですか？」

「あの時の光景が綺麗だったので、思い出しながら描いたんです」

彼女の抱いた疑問は当然のものです。ですが……

「これは絵ですからね。写真と違ってありのままである必要は無いんですよ……よ……？」

思わず口から出た言葉。わたしの本心の筈なのですが、違和感を覚えます。その違和感について思考を思わず巡らせてしまいます。何か、何か……

「と、ともえさん？」

わたしは、わたしはこの言葉を『昔言ったことがある』？ それとも……？ ぐらりと視界が揺れます。

「あっ」

今朝と同じ感覚。世界が揺れる、ゆれる、まわる……くらくらなって

……

「——さん！ ともえさん！」

わたしはイエイヌさんの声に呼び起こされます。どうやら気を失っていたようです。あたりは茜色から董色に変わりつつあります。数分程度、経過しているのかもしれませんが。イエイヌさんは涙を流していました。

「イエイヌさん、ご心配をおかけしました……もう、もう大丈夫ですよ……」

わたしの言葉を聴いて、彼女はわたしに抱きついてきます。

「ともえさん、ともえさんともえさん……うう……また眠り続けちゃうのかと……良かったあ……良かったあ……」

嗚咽を漏らしながら言う彼女の姿にわたしは胸が痛くなります。

「ほ、本当に、ごめんなさい。イエイヌさん……」

わたしは彼女の背中をとんとんと叩きます。震える身体を抱きしめていると、彼女が心底わたしのことを心配してくれていたのがわかります。わたしまでなんだか涙が込み上げてきそうになるくらいです。

暫くそうしていると、彼女は落ち着いたのか、そつと身体を離します。依然として彼女の瞳には涙が貯まっていますが、安堵の笑みを浮かべています。

「そうだ、イエイヌさん。これも見てください」

わたしはもう一枚の絵をスケッチブックから切り取り、彼女に差し出します。

「これは……私ですか？」

「はい、寝ているときにささーっと描いちゃいました。昨日と今日、付き合っていただけのお礼です。差し上げます」

イエイヌさんは絵を受け取ると、ぱあつとまるで太陽の光が当たったかの様に笑みを浮かべます。

「良いんですか!? ありがとうございます！ ともえさん！」

尻尾を振りながら喜ぶあなたの姿が見られただけで、わたしは十分嬉しいです。そういいたくもありませんが、どこか気恥ずかしいの

で、言わないことにしましょう。

「いえいえ、どういたしまして……絵を描いた甲斐があつたというものです」

喜んでくれてよかったです。本当に。

「イエイヌさん。今日のところは帰りましょう？　もう日が暮れますし……」

彼女は元気良く「はい！」と答えてくれました。私を先導するようにイエイヌさんが歩き始めます。段々と周囲は夜になって行きます。筆色は薄墨のような暗闇へと変化していきました。ですが、イエイヌさんの笑顔がわたしには眩しすぎるくらいです。

「そういえば……なんで寝てるところを描いたんですか？」

不意にイエイヌさんが疑問を口にします。

「そうですね……寝顔が可愛かったから、つい」

わたしが笑いながら言うと、イエイヌさんは何故だかぷくつと頬を膨らませます。

「どうしました？」

「寝ているところを不意打ちとは卑怯です……」

イエイヌさん。怒るところ、そこなんですわね……申し訳ない話ですが、わたしはくすりと笑ってしまいました。

「ともえさん……なんで笑うんですかあ……」

困ったように呟くイエイヌさん。さて、怒られないうちに……

「イエイヌさん。おうちまで競争しましょう？」

わたしはそう言って駆け出します。逃げるが勝ちというヤツです。

「へ？　ちよ、ちよつと無理は……と、ともえさん？」

イエイヌさんは驚いた様子でしたが、少しして走り始めました。「まったくもう……」という言葉が聞こえてきた気もしますが、構いません。

わたし達の笑い声が夜道に響きます。明日も、明後日も、こうして笑いあいながら一緒に居たい。心からそう思います。

おうちに帰る頃にはあたりは完全に真っ暗になっていました。外は日が沈んでいるためか少しばかり冷え込んでおり、朝と同様、肌寒さを感じるほどでした。わたし達は今朝と同じように、「ただいま」といいながらおうちに入ります。

「ともえさん、もうちよつとしたら、ご飯にしましょう」

「はい、わかりました」

わたしはベストを脱いで、クローゼットにしまえます。『おうち』の中は不思議なことに暖かく、ベストを着ている必要が無いように思われたためです。

「不思議……暖房？ でも音はしませんし……」

イエイヌさんは手洗いを済ませて椅子に腰掛けます。

「どうかしました？」

「い、いえ……」

イエイヌさんに聞いても判らない気がしますが……

「イエイヌさん。このおうちって暖房とかってあるんですか？」

「だんぼう？ 何です？ それ」

わたしは簡単に説明します。部屋の温度を上げるための機械。要するにこういうことでしょう。

「きかい？ うーん……」

イエイヌさんは首を傾げます。彼女の場合は特にでしょうけれど、フレンズさんたちはヒトが作った『何か』を利用していただけで、その機能や運用には意識が向けられていない気がします。もしかしたらその『何か』は普通では気付くことが出来ないようになっていたりするのかもしれないが……益々ジャパリパークという存在が理解できなくなつてきて、疑問や疑念、違和感。そんなものが胸中に沸き起ります。

何故ジャパリパークという存在が生まれたのか、この歴史はどういったものか……『あの場所』にしてもそうです。あんなにも厳重な施設が施されていたのです。あそこは極めて重要な場所であつた筈

です。しかし、何故、あそこを利用する人も、維持する人も、警備する人も、居ないのか。この世界についてわたしの知る箇所は多くありません。しかも、ありとあらゆる場所に人の痕跡『しか』見当たらないのです。

わたしの思考はひとつの事実に向面します。

「もしかして……まさか、そんな……でもそうでないとおかしい……」
胸の鼓動が早くなります。

「と、ともえさん？」

わたしの様子が変わったのを察してか、イエイヌさん心配そうにわたしを覗き込みます。ですが、わたしに彼女の言葉に答えるだけの余裕はありません。

「やつぱり……もう人は……？ 『あの場所』もここも……でも……そうになると、わたしは？ 子供ひとり置いて……？ ありえない……でも……何か……あった？ もしかして……わたしは捨——」
「ともえさん——」

イエイヌさんがわたしの肩を掴んでわたしを呼びます。

「どうかしま……いえ、落ち着いてください……」

わたしは彼女の声ではっとします。

「ご、ごめんなさい、イエイヌさん」

わたしは恐る恐る彼女にひとつの質問をします。

「イエイヌさん、急で申し訳ないんですけど、ひとつ聞いても良いですか？」

彼女ははいと頷き言葉を待ちます。極めて長く感じる一瞬の後、わたしは覚悟を決めて問いかけます。

「わたしの他に……ヒトに会ったこと、ありますか？」

ほんの少し前にもした筈の質問を、わたしは彼女に尋ねてしまいました。

その時と同じ様に、イエイヌさんは首を振りしました。わたしの胸に衝撃のような悲しみのような絶望のような名状し難い感情が訪れます。

「そう……ですか……見かけたり噂話でも良いんですが……」

やっぱり彼女は首を振りました。

「私の知る限りではともえさんしか、私は知らないです」

彼女の言葉はわたしに重くのしかかるようでした。孤独感さえ覚ええます。あれほど強く感じた鼓動が消えてしまったかのようにさえ感じられます。

「……ともえさん。ご飯に、しましょう？　まずは落ち着かないと……」

言葉を失ったわたしを案じてくれたのでしょうか。

「……ええ、そうしましょう。ありがとうございますね、イエイヌさん」

彼女の気遣いに感謝をすると同時に、わたし自身、現実から逃げたいという感情から、彼女の提案に乗ります。まずはご飯を食べてから。どうも、悩んだら悩みつばなしというのはわたしの悪い癖のようです。

○

食事を終え、お風呂も済ませた後、わたし達はベッドにもぐりこみます。イエイヌさんはすぐに眠ってしまったようですが、わたしはどうも眠れません。食事の前に直面することとなったその『現実』の事をどうしても考えてしまうのです。

わたしはそつとベッドを抜け出し、夜風に当たるために表へ出ます。

「ふう……」

夜風を浴びながら、深呼吸をします。考えることは幾つかあります。わたしは何故ここに居るのか、何故今ここにわたし以外のヒトが居ない（と考えられる）のか、わたしは今後どうすれば良いのか……こんなところでしようか？　前者ふたつに関しては、恐らく今ここで考えたところで結論は出ないでしょう。パークにおける知患者やヒトの痕跡が残る物品の観察など、そういった何らかの行動によって初めて判ることだと思われれます。

最後のひとつ、わたしの今後について。

全て——わたしの過去、事実、そういった諸々——をあきらめて、こ

ここでイエイヌさんと暮らすという未来。欠片でも良いから答えを求めてパークを探索するという未来。そして、生命の危険さえ顧みず、パークから出るという未来……。

考えても答えは出ないのでしようけれど、取るとしたらひとつ目とふたつ目。みつつ目は単なる無謀ですしね……。

わたしの過去について思い出したことも、整理しましょう。

「写真と違ってありのままである必要は無い」……この言葉で思い出したことがありました。わたしは昔から絵を描くことが好きだったということ。そして、誰か——恐らく絵の先生に当たる方——から同じ言葉を教えられたこと。その言葉を告げられた後に頭を撫でられてくすぐったかったこと。言葉とその手には確かにわたしへの愛情が込められていました。その頃のわたしはここでは無いどこかに居て、風景を描いていました。何故、今、わたしがここにいるのかが益々わからなくなってしまう、それだけの疑問。ですが、ひとつ確実なことがあります。それは、わたしは誰かから愛されていたという事実です。そのたったひとつの事実がわたしの過去を今を、保障してくれるような感覚さえ抱いてしまいます。

不意に声をかけられました。予期せぬ訪問者にわたしの身体は驚きで跳ねます。

「よう、こんばんは……ってイエイヌじゃないのか。誰だ？ おまえ」

声の主はやはり少女の声。ですが、ロバさんともイエイヌさんとも違う強気な口調でした。月明かりに照らされる彼女の姿は、やはり見知らぬフレンズさんでした。色は定かではありませんが、半袖の上着に白のシャツで、おへそを出しています。シャツには数字がプリントされています。スカートの裾は膝丈よりもずっと上で踊っていますし、また、長めの靴下を履いています。イヌのような耳と尻尾……

「ど、どうも……ええっと、わたしはともえと言います。あなたは？」
彼女は少しの間、わたしをいぶかしむような目で見つめ、すぐに親しげにニツコリと笑いながら自己紹介をしてくれました。

「ともえ……そんなフレンズ居たかな……？ まあいいや。俺はコヨーテ、ともえ、よろしくな」

言い終わると簡単なストレッチをしながら彼女は続けます。

「気分でごつちの方まで来たが、珍しいこともあるもんだな、こんな時間に他のヤツと会うとはな」

へへんと言った具合で笑って、彼女は続けます。

「この辺りはセルリアンも滅多に出ないし、夜でも大丈夫だろうが……気をつけろよ?」

はて? 初めて聞く単語です。

「セルリアン……?」

思わず口に出してしまっていたようです。

「知らないのか? フレンズの敵……と言い切っても良いのかもしれないな……とはいえ、だ。ココ、イエイヌのナワバリだろう? やつかいになっているんだったら、イエイヌに聞きな。時間も時間だ。話すとは長くなる、悪いな」

彼女は申し訳なさそうに頭を掻いて言いました。

「いえ、わざわざありがとうございます、明日の朝、イエイヌさんに聞いてみます」

「もうちょっと早い時間だったらな、教えただが……」

「いえ、危険を教えてくださいただけでも、ありがたいです。優しい方なんですね」

彼女の第一印象を素直に述べます。

「ふふっ、ありがとうございます。じゃあ、私も帰るとするか」

彼女は手を振りながら来たであろう道を戻ろうと振り返りました。わたしも手を軽く振り、応えます。ですが、コヨーテさんは何かを思い出したようにもう一度振り返って言いました。

「悩んでたようだがな、ひとことだけ、良いか?」

「どうぞ、わざわざありがとうございます」

彼女は少し思いつくように頭を捻り、そして言いました。

「失敗は恐れても、好奇心は恐れちゃダメだぜ」

どういう意味でしょう……?」

「あ、ありがとうございます……どなたかの言葉ですか?」

「悪い、それは忘れた。だが、いい言葉だと思ってな。今度こそ、じゃ

あな！」

そう言って彼女は走っていきました。それも結構なスピードで。さすがフレンズ……と思う間も無く、彼女の言葉の意味を考えます。「失敗は恐れても、好奇心は恐れるな……ですか……」

決めました。コヨーテさん。ありがとうございます。と、わたしが
おうちの扉を開こうとすると再び声をかけられます。

「すまん、ともえ。伝言お願いできるか？」

コヨーテさんでした。彼女が帰ってくるとは思っておらず、少しばかり動揺してしまいました。

「え、ええ……大丈夫ですよ」

「ホント、悪いな……ロードランナーに会ったら例の約束忘れるなど伝えてくれ。今度こそ、じゃあな」

どなたですか？と問いかけるよりも早く彼女は走り去っていきま
した。慌しい方ですね……。

幕間1

イエイ又さんの勧めに従って食事を取ります。

「いただきます」

彼女もわたしに倣っていただきますと言いました。そういえばひとつ思いあたることがあります。

「イエイ又さん。あのう……お風呂って使えますか？」

口をもきゆもきゆさせながらイエイ又さんは不思議そうな顔を示します。

「ええつと……うーん……？」

時々こくりと喉を動かして、ジャパリまんを飲み込みながら応えるイエイ又さん。

「あー……飲み込み終わってからで大丈夫ですよ……」

マナー、大事ですよ。イエイ又さん。飲み込み終わった彼女が口を開きます。

「失礼しました……そもそもお風呂ってなんですか？」

うーん……

「そうですねえ……イエイ又さんは水浴びってしますか？」

はいと彼女は首を縦に振ります。

「ここから少し離れたところに川があるのでそこでしますよ？ それがどうかしました？」

「冷たくないですか……？ それがお湯で出来ると思ってもらえれば」

イエイ又さんは目をきらきらさせ始めます。

「本当ですか？ 水浴びは好きなんですけれど、最近では寒くてめつきり……どうやるんです？」

先程わたしが考えたとおり、自動的に与る恩恵はともかく、何らかの操作をする必要のある機能はレンズの皆さんに取って、関係の無い世界の話であるのかもしれない。

「まだ試した訳では無いのでどうなのかはわかりませんが……ご飯を食べ終わったら試してみますね」

「ご期待くださいとはいえませんが。何しろこの『おうち』の機能がどれくらい維持されているのかがわかりませんもの。」

○ お風呂場に入り、確認をします。

「こっちのつまみが温度……？ こっちが水の栓で……こっちがシャワーと蛇口の選択、と……」

「だいたいわかりました。仕組み自体は然程複雑ではないようです。わたしは袖を捲りながら軽く水で浴槽や浴室を流しながら、お湯の温度を確かめます。」

「水が汚れているようなことも無いですし……何なんでしょう、本当に不思議……一体誰が管理や掃除をしているんでしょう……？」

後はお湯を貯めるだけ。手を拭ってテーブルに戻りましょう。」

「イエイヌさん、大丈夫そうですよ。暫くお待ちくださいね」

イエイヌさんは楽しそうに尻尾を振りながらいいました。

「ともえさんともえさん！ 私にも使い方教えてもらえますか？」

そんな風に頼み込まれては断ることが出来ません。

「良いですよ、こっちへ」

辛い現実から目を背ける。そう言ってしまえばそれまでですが、彼女の為にも、わたしの感情を癒すためにも、楽しく愉快的出来事が大いに越した事はありません。特に、今は。

わたしの説明を聞くイエイヌさんの姿は本当に楽しそうでした。わたしが彼女に何かを教えるたびに「ほへえ」だとか「はふう」だとか感心したような驚くようなそんな声を上げていましたし、何よりも彼女の暮らしが良くなることへの貢献が出来ているということがわたしにとっての救いにも似た恩返しに思われます。

そうこうしている内にお湯が貯まりました。

「どうします？ イエイヌさんから先に入りますか？」

わたしの言葉を聞いた彼女は何故か驚いた表情になります。

「えっ、一緒に入るんじゃないんですか？」

えっ、一緒に入るつもりだったんですか？

「だ……大丈夫ですか？ 恥ずかしかったりとか……」

わたしは困惑から問いかけます。すると彼女は答えました。

「恥ずかしい……？　それよりも、使い方とかまだわかっていませんし、一緒の方が楽しそうなので……」

イエイヌさんは本当に頼み方が上手ですね……寧ろ手玉に取られているのではとさえ思えてきます。彼女の性格からしてそんなことは無い、と断言できるのですけれど。

「わかりました。じゃあ一緒に入りましょう」

彼女は嬉しそうにはいと答えて浴室に入っていました。

「待って、イエイヌさん、待って、ちよつと、お願いですから待ってください」

何故服を着たまま……ああ、そういえば、そうでしたね……

「な、なんですか？　ともえさん」

首を傾げるイエイヌさん。

「服、脱ぎましょう？」

一瞬だけ、「へ？」という具合の疑問を示しましたが、彼女はすぐに理解が行ったようです。顔を真っ赤にしながら黙りこくってしまいました。少なくとも、彼女の知る『水浴び』とわたしの言う『お風呂』が違うということは伝わったようです。

「はい、上着を預かりますね。シャツ、脱げます？　ボタンはこうやって……」

わたしは彼女に近づき、シャツのボタンをひとつ外します。イエイヌさんは慣れない動きに戸惑いながらもシャツを脱ぎ終わりました。

「スカートは……えーつと、ここにジツパーがあるので、下ろしてから脱いでください。肌着はそのまま脱いでもらえれば大丈夫です……って、イエイヌさんこんなに長い手袋と靴下つけていたんですか？　そりゃあ暑い訳ですよ……って首を振ってもダメです。外してください。裸です、裸になってください」

もしかしたら今日で一番疲れたかもしれません。彼女が恥ずかしそうに浴室に入っていくのを見送ります。

「ちゃんとお湯につかる前に身体を流してくださいね？」

イエイヌさんの頭がこくりと動くのを確認して、彼女を見送りま

す。すると、途端にわたしの心の中にとてつもない罪悪感のような恥ずかしさのような感情が沸き起こります。

「……わたし、かなり大変なことをしてしまったのでは……？」

如何に綺麗に彼女を脱がせるかに腐心していたので、彼女の身体、肌だとか、彼女の肌着のデザイン……そういった詳細は記憶にありませんが、かーなーり、大変マズイことをしていた気がします。

「うん、これはタイヘンにタイヘンなことをしましたね、わたし……」
わたしも服を脱いでお風呂場に入ります。イエイヌさんは濡れた髪を浮かべながら、背中を見せて湯船に使っていました。

「ご、ごめんなさいね、イエイヌさん。ちよつとやりすぎましたね……」

「い、いえ……ともえさんの言うとおりなのが正しいのでしょうか……」

彼女はそうはいうものの、こちらを向いてくれませんし、声もなんだか震えて聞こえます。わたしも身体を軽く流して、湯船に入ります。

「よいしょつと……失礼しますね」

わたしの後ろ髪も彼女と同じように湯船に浮かんでしまいましたが、かまいません。

「ふう……温度も丁度良かったですね」

そう言って彼女の方を見ると、恥ずかしげに膝を抱えるようにして座っています。なんだか心なしか震えているようですし、同性のわたし相手に恥ずかしがりすぎなのでは……？　とも思います。

彼女達フレンズが『毛皮』と称するもの（つまりは服ですけど）を全て脱ぐということはまずありえない話なのかもしれません。となると、極めて特殊な状況に混乱することさえあっても、羞恥の感情は余り起こらなさそうな気がします……まあ良いでしょう。

不意にわたしの左腕が彼女の右腕に触れていることに気付きます。滑らかで柔らかかで、そして何よりもわたしが思っていたよりもずっと白く透き通る彼女の肌は、恥ずかしさや何らかの性的な意図すら排除された、極めて純粋な美しさ、或いは愛おしさのようなものさえ覚え

させるものでした。

「イエイ又さん……綺麗ですね……」

何を言っているんでしょう。わたし。

「そ、そんなこと言われても……」

戸惑うイエイ又さん。それはそうでしょう。彼女の普段の服装からして、表に出す肌は顔と首元だけ。そこさえ、じっくりと見られて綺麗だなどと言われる事はまずあるはずが無いでしょうし……

「ご、ごめんなさい……身体と髪を洗いましょう？ さ、一旦出てください」

そう告げると彼女は立ち上がってくれましたが、わたしは……何故でしょう。驚愕というか感動というか……何かの完成した彫刻がそこにあるようにさえ思われました。いえ、わたしも女性ですけれど、素直に憧れてしまうようなそんな美が確かにそこに……どうやら、わたしの方が混乱しているように思われます。

「ちよつとごめんなさい、先に失礼しますね」

そういつてわたしは冷水を浴びます。身を切るように感じられるほど冷たいものでしたが、お陰で少し意識がしゃっきりしたように思えます。

「さ、どうぞ、こつちにきてください」

イエイ又さんはおずおずと、それでいてわたしの奇行を不思議そうにしながら浴槽を出たのでした。

イエイ又さんの身体と髪を一通り洗い終え、わたしも自分の身体と髪を洗い終えます。イエイ又さんのふわふわとしつつもさらさらとした髪と自分の汗できしきしとしてしまった髪を触って比べてみると、何故だか無性に悲しいような気持ちにもなりましたが、それはそれです。そんな悲しい気持ちをあてつけるようにで申し訳ないのですが、身体はきつちりと洗って差し上げました。イエイ又さんはわっふわっふとくすぐったがったりしていました。お構い無しです。

お互い肩まで湯船に浸かりながら、言葉を交わします。

「そういえばともえさん、不思議な爪の色ですね……」

彼女はわたしの手を取っていいました。並べてみると、はつきりと

判るその色の違い。イエイヌさんは肌の色に少し桃色が加わったような可愛らしい色合い。わたしの方はといえば、緑色。時折青色に近づいたりもしていますが……

「わたしも不思議に思っていたんですよ……緑色だったり青色だったり……見え方も時々違うんですよねえ……」

彼女は不思議そうにじつと見つめて、わたしの爪を引っ掻いたり光に透かしたり……わたしと同じようなことをします。つい、くすりと笑ってしまいました。

「どうしました？ 私何か変なことしちゃいました……？」

「いえ、わたしと同じ事をしていたので」

ふたりに軽く笑いあいます。

「綺麗な、色ですよ」

彼女はじつとわたしの目を見つめて、しみじみといいました。わたしはなんだかくすぐったいような心地がしてきます。

「さっきの続きですー」

照れ隠しでイエイヌさんのわき腹をくすぐります。

「ちよっ……や、やめ……わふっ！」

そんな感じで、時間が過ぎていきました。お互いのぼせ気味になっ
てしまいましたが、まあ、仕方が無いことでしょう。楽しい時間が過ぎるのは早いものです。

お風呂から出てベッドにもぐりこみます。部屋の電気を消してわたしもベッドに入ります。イエイヌさんはどうやら結構な眠気に襲われていたようでした。

「おやすみなさい、ともえさん」

「はい、おやすみなさい、イエイヌさん」

お互いに就寝の挨拶を交わし、数分も経つと、イエイヌさんの可愛らしい寝息が聞こえてきました。余程疲れていたのか、それともお風呂に入ったからか……

目を閉じて暫く経ちますが、どうにも眠れません。わたしは彼女起こさないように、そつとベッドを抜け出します。ちよつと夜風にあた

り
ま
す
か
ね
…
…
…

太陽が空の頂点で照り輝き、わたしを照らします。雲に遮られることも無く届くその陽光は、わたしの背後にひとつの色濃い影を残しながら、まるで我こそが空の支配者であると主張するように浮かんでいきます。

「ふう……」

わたしは眩きます。ひとりでの道のりがこんなにも辛いものだとは思っていませんでした。考えてみれば、わたしはジャパリパークで目覚めてからほんの少しの間ひとりで居ただけで、わたしの隣にはずっと彼女が居たのです。わたしという存在のちっぽけさを、矮小さを痛感させる自然の景色もあるのでしょうか。あの夜以上に強い孤独とその悲しさを痛いくらいに感じていました。

どれくらい歩いたかはわかりませんが、額から流れる汗や身体が訴える疲労の色からして、結構歩いたのではないのでしょうか？ 道のりはわかりやすいとは聞いていましたが、それにしたって地図も無ければ標識のようなものも見当たらず、自分が今どれくらいのところに居るのかさえわかりません。土地勘が無いということは、つまりは茫漠とした砂漠にひとり置き去りにされることと大差が無い……そんな事を、ふと考えてしまいました。

周囲を見回してみると、右手側には雑木林のような木立があります。そして、左手側に道を少し外れたところに草原に一本だけぽつんと影を作っている木がありました。あそこで一休みするのでしょうか。道を外れて歩きます。土道からくさむらへ、歩きづらはさは格段に上がりますが、そこさえ越えてしまえば休憩できるという事実の為に、転びそうになりながらも進みました。

間も無く木陰に腰掛けることが出来ました。草むらを通つたために感じる植物の青臭さも、日陰の涼しさや折良く吹いてくれた風の心地よさの為に、かえってわたしの心を高揚させてくれるように思われます。

木陰特有の少しだけ湿っているひんやりとした空気を楽しみなが

ら景色を眺めると、思っていたよりも高い位置から周囲を見回すことが出来ました。どうやら緩やかな勾配があつたようで、ここはそのつぺんのようなようです。遙か先まで続く草原の為に、緩やかな起伏も、それが為に起こる変化にも、今の今まで気付けなかつたのでしよう。「あ、あれは……『おうち』なのかな……」

まるっこい屋根の、広場から少し外れたところにある建物。きつとあそこは『おうち』でしょう。そこから視線を動かして行くと、わたしの眠っていた建物を見つけました。結局謎だらけの場所。何らかの重要な役割を担っていたのだということを探することは出来ませんでした。漠然とした感覚でしか理解できておりません。その詳細も、わたしが彼処に居た理由も、ヒントの欠片さえ手に入れることは出来ませんでした。

いつか自分自身の事を知るために、きつとあそこに入るようになる。そんな予感はしていますが、今わたしに出来ることはありません。そういう意味では『あの場所』はわたしの無力感の象徴のようにさえ思えてきます。

そういつた建物を眺めていると、ますます彼女や彼女と過ごした短いけれど大切であつた日々が思い起こされます。ですが感傷に浸る事は避けましょう。わたしが『やりたい』と決めたことの為に、わたしは進まねばなりません。

数分ほど座り込んで休んだ後、わたしは立ち上がります。と……木陰を出る前に水を飲みましょう。水分補給は大事ですからね。わたしは鞆の中身をまさぐりましたが、目当ての水筒が見つかりません。イエイヌさんから譲っていた、大切な水筒。

「まさか……」

彼女のおうちに忘れてきてしまった……なのでしょう……見たところ鞆に穴もありませんし、水筒を取り出そうとしたのもこれが初めてですし……うっかりというか、抜けているというか……はあ……。

話は数日前に遡ります。

イエイヌさんと一緒に二度目の彼処の探索を行ってから数日間、わたし達はのんびりとした時間を過ごしていました。身体を癒やす為に、わたしがこのパークについて勉強する為に、そして、自分が何をするのか、したいのか……それを考える為に……。

その間中、コヨーテさんからのアドバイスとそれによって浮かんだひとつの覚悟のようなものがずっと頭の中を浮かんで消えてを繰り返していました。けれども、わたしはそれを実行しようとか、イエイヌさんと相談しようとか、そういう事はしなかったのです。……あえて直視しなかったというのと、わたしの不甲斐なさが目立ってしましますが、実際のところわたし自身の身体の調子が戻ったのかどうかという不安や、イエイヌさんに私の思いを告げることがどうしても避けてしまっていたという事もありました。

ある日のことです。かねてからのわたしの願いであったフレレンズさんたちとの挨拶が一通り済んだ晩にイエイヌさんと交わした話が切欠でした。

わたし達は夕日に染まった道を歩いていました。イエイヌさんはわたしの隣を歩いて満足げにいます。

「これで近く住んでいるフレレンズさんたちには挨拶が終わりましたね！」

「ですねえ……中々アルマーさんとセンさんには会えないのは残念ですが……」

わたしがそう答えると、彼女は少し考えるようにして言いました。「うーん……どうしたんでしょうねえ、お仕事が立て込んで……とかでしょうか」

彼女たちもこの辺りに居ることが多いそうですし、暫くすれば会えるとは思いますが……できる限り早く挨拶をしたいものです。

「そういうえば、ラッキービースト……さん？ にはお会いして無いですが……この辺りにはいらっしやらないんですか？」

イエイヌさんは首を傾げます。

「意識したことが無いですねえ……うーん……いつも、こう……気付

いたら居るんですけども……」

はてさてどうしたことでしょうか。

「あ、でも、私もお話したこと無いですよ？ ジャパリまんを運んだり、時々道を歩いていたりするところは見たことありますが……」

うーん……名前の通り幸運でなければお会いできないのでしょうか？ そんなことを考えながらうちへの帰路を歩きます。

わたし達の進む道には長い影が伸びていました。時間が経つのは早いもので、その日は確かお昼前くらいに家を出たはずなんですけれどね……

大した時間はかからず、わたし達はうちに戻りました。

「ただいまー」

わたし達はこれまでそうしてきたように、ふたりで声をそろえて言いながら家に入ります。わたしはベストを脱いで手を洗い、椅子に腰掛けます。わたしが手を洗っている間、イエイヌさんは食事の準備をしていたようです。机にはジャパリまんとお水がふたり分並んでいて、彼女は椅子に座って待っていてくれました。

「ささ、ご飯にしましょう？」

「ありがとうございます、イエイヌさん。では、いただきます」

イエイヌさんも同じようにいただきますと言って、食事が始まりました。食事の最中、不意にイエイヌさんが尋ねます。

「……ともえさんって、したい事ってあるんですか？」

「うーん……」

もきゅもきゅとジャパリまんを咀嚼しながら考えます。『絵を描きたい』そう思ったのは事実ですし、あれ以来、度々絵も描いています。ですが、記憶が戻るようなことはありません。わたしは記憶を取り戻すために絵を描いているのではなく、思い出のひとつとして、『今度こそ』忘れてはならない大切な今の記憶の為に描いているのでそこは問題ないのですが……こくりと飲み込んで、答えます。

「絵を描くこと以外に、ですか？」

何故遠まわりの言葉を出したのか？ 自分自身が困惑してしまいます。絵を描くこと以外に、もうひとつやりたいこと……いいえ、『や

らなくてはならないこと』はあるのです。ただ、ずっと口に来なかつただけで……わたしを追い立てるようにじりじりと思考に浮かぶひとつの思いが、確かにあるのです。

イエイヌさんはジャパリまんをもぐもぐと咀嚼しながらこくりと頷きます。

「うーん……ひとつだけ、あるにはあるんですが……」

その言葉を聴いて彼女は目を輝かせました。

「んぐつ……なんですか？ ぜひ教えてくださいー！」

飲み込んですぐに喋ると危ないんですけどねえと思いましたが、口にはしませんでした。

「……その前に、聞いてもいいですか？」

イエイヌさんははいと頷き、促します。きつとこのタイミングを逃すと、もう二度と聞くことは出来ない。そんな直感が、ふと、浮かびます。

「イエイヌさんは、ここを離れようと思ったことってありますか？」

呆然としたようにわたしを見つめるイエイヌさん。

「ええつと……どういふ……」

「そのままの意味です」

暫く考え込むようにするイエイヌさん。

突如として室内の空気が重苦しくなります。こうなると判っていたから、聞けなかつたのです。彼女がわたしに教えてくれた話。「ここに居なくちやいけない」という言葉。その言葉は彼女がフレンズになつてすぐに発した言葉。重要な意味合いを持つに違いない言葉です。それに対して、わたしは疑問を呈し、否定の言葉を告げるのです。彼女の心の為にも慎重に話を進めなくてはなりません。

「……私は、許されるなら……ずっと、ここに……」

その言葉を聴いた私は、彼女をなるべく傷つけないように、そつと問いかけます。

「何の……為に、ですか？」

再びイエイヌさんは考え込み始めました。何かを思い出すようにしたり、その理由を考えたり……悩んでいるイエイヌさんの姿を見る

と、どこか罪悪感のような感情を抱いてしまいます。

『何を』かは覚えていませんけれど……待つ、ため……？」

イエイヌさんは苦しんでいるような、悲しんでいるような声で言いました。彼女は、もしかしたらわたしよりもずっと非情で冷酷な現実
に直面しているように思われます。待つべき対象がわからないとい
うことは、待つているべきか否かという判断さえ奪います。離れるこ
とも出来ず、迎えにも行けず、ただここに居る。それはどれほど苦し
いことなのでしょう？ わたしにはわかりません。

ですが、イエイヌさんの思いは彼女自身を縛り付けている呪いのよ
うにさえ感じました。

「……ごめんなさい。イエイヌさん、辛いことを聞いてしまいました
よね……」

彼女は首を振りしました。

「ともえさんが悪い訳では無いです……何も覚えていない自分が――」

イエイヌさんは言葉を途切れさせます。

「ご、ごめんなさい、ともえさん。ともえさんの事を悪く言うつもりは
……」

記憶の欠落を非難するということがわたしへの当てつけになると
感じたのでしょうか？ わたしは、そんなことでどうこう思ったりな
んで、しませんのに。むしろ、彼女の心遣いに感謝の気持ちを抱いた
くらいです。

「イエイヌさん、落ち着いてください……考えすぎですつて……」

耳をしゅんと垂れ下げている彼女は普段の元気な様子とは違って、
非常に儂げで物悲しく、弱弱しい印象さえ抱かせるものでした。わた
しがこれから伝えようとする言葉が彼女を消し去ってしまうのでは
無いかと思われるくらいです。

「イエイヌさん。わたしは……わたしは、旅に出ようと思いません、期間
はちよつとわかりませんが……」

ああ、言ってしまった。言わなければ何も動き出さなかったのに、
言ってしまったから動き出さなくてはなりません。言葉を口にする

ということの、覚悟を示すということの、意味と義務と責任。それらがわたしのしかかるようでした。

「た、旅……？」

彼女は呆然としています。

「……近いうちに、ここを出るつもりです。早ければ、明日にでも……」

イエイヌさんはがたりと椅子から立ち上がり、わたしの肩を掴みま
す。

「なんで……どうして……」

彼女がわたしのことをどれほど思ってくれていたのか、それを強く
実感しました。

「そんな……ずっと……」

彼女はもう涙を流しそうなくらい打ちひしがれていました。彼女の
綺麗な瞳は既に涙を湛えているかのようにさえ見えます。わたし
は肩に掛けられた手を自分の手でそつと覆います。

「信じてくれてというのはわがままでしようけれど……最初に言っ
ておきますね。わたしが決めた理由に、イエイヌさんが悪いとか嫌い
になったとか、そういう考えはありません」

そつと彼女に告げます。

「わたしが、わたしの記憶を取り戻すためです。旅を終えたら帰っ
てきます。そのときはよろしくお願いしますね、イエイヌさん」

記憶を取り戻すために旅に出る。そういうと聞こえは良いでし
う。

ですが、実際のところ、そんなに格好の良い話ではありません。旅
をしたところで記憶が取り戻されると決まっている訳では無いで
すし、いくらジャパリパークの安全性が担保されていても——セルリア
ンという例外を考えなくとも——ひとり旅には危険が付きまといま
す。迷子になって、そのまま……だとか、崖や高所からの落下、予想
さえ出来ないような事件事故……幾らでも危険や危機の可能性はあ
ります。それでも……

「何かしないといけないって感じていました。コヨーテさんからの言

葉もありますけれど、何よりも、あなたに頼ってばかりいてはダメなんだって、悩んでいたんです」

彼女を否定するつもりも拒否するつもりも、一切ありません。けれど、彼女無しで過ごせるようにならなくては、わたしはわたしを見つけれられないのだと思うのです。

じっとイエイヌさんの顔を見つめます。彼女は俯いたまま口を開きません。

「それに、ですね。わたし、『あの場所』で結構大事にされていたじゃないですか。それを考えると、何かパークに手がかりがあるんじゃないかなーって思うんですよね」

楽観的に過ぎるかもしれませんが、それもまた事実だと思われるます。嚴重に封鎖された建物、その中には用途がわからないけれども重要そうな機械類。そこに安全に閉じ込められていた少女……意味もなくそんなことをすることなど、まずありえないでしょう。

「わ……私も付いて行って……良い、でしょうか……？　いいえ、命令、してください……ついてこい……って……」

イエイヌさんが苦しんでいるように、ふりしぼって言葉を発します。

「断ります」

わたしの言葉を聴いて、肩に掛けられた手に力が加わりました。

「わたしは、大切な……大切なお友達に命令なんてしたくありません」

心なしか震えた声になってしまいました。わたしの言葉には文字通りの意味の、極めて単純な意味もあります。ですが別の思いもありました。

わたしはわたしの言葉で他者の心や意思を変えたくないのです。それが許されるのは生きるという行為の積み重ねという大切な証拠がある人間だけ。そう思えて仕方が無いのです。わたしには、今まで生きてきた事実が殆どありません。わたしの人生の証拠というものは、せいぜいが一緒に眠っていた鞆の中身と少し思い出した記憶くらい。それは、彼女のかつての覚悟を否定するに足りるとは思えないのです。

「イエイヌさん。あなたはここに残りたいと言いました。それを否定なんか、わたしはしたくありません……落ち込まないで下さい、帰ってきますから……」

その晩は、その一言を告げたきり、わたし達の間には会話も少なく、ずつと重苦しい空気が流れていました。

水筒を忘れたこと、それ自体がアクシデントではありませんが、何よりもわたしにとってイエイヌさんから譲ってもらった大切なものを忘れてしまったという事実が、自分自身を責め苛むように感じました。その感情はちくりちくりと胸を刺し続けることは明白です。

では、取りに戻れば良い……？それはそうなのですが、孤独を知ってしまったわたしは、今あそこに戻ってしまったら二度と進むことは出来ないでしょう。なし崩しにわたしはあそこに、『おうち』にとどまってしまうでしょう……それくらい、彼女との日々は魅力的で、愛おしくて……

「……よっしー！」

顔をぺちぺちと軽く叩いてわたしは緩やかな傾斜を下り、道に戻ります。水筒が無いということは割合に生命に直結しそうな重要な問題である気がします。まだ旅を諦めるほどではありません。イエイヌさんの『おうち』を出るときに彼女が教えてくれた言葉のお陰です。

・広場から伸びる道（ちなみに南）をまっすぐ行って、分かれ道を右側に進めばうみべちほー。左側に進めば『おうち』のあるちほーと同じそうげんちほーに行ける。

・道から進行方向右手側の少し離れたところに、道に沿う様にして川が流れている。川に沿って歩けばうみべちほーに行ける。

・そうげんちほーの側には『おうち』と同じような建物が幾つかある。

簡潔に彼女は以上のことを教えてくれました。わたしはとりあえずの目標として、アルマーさん、センさんの足取りを辿り、追いつく

ことを定めていたので、まずはうみべちほーへと向う予定です。彼女達が今、何処にいるのかということとはわたしはもちろん、イエイヌさんやその他のフレンズさん達でさえも殆ど知らなかったので、彼女達の足取りを追うのが手っ取り早いでしょうしね。

と、それはそれとして……要するに水が必要になった場合、道を外れて川を目指せば良いということですよ。うみべちほーを目指す間は遠回りになる可能性もありますが、道を大きく外れることなく水分の補給が出来るでしょう。

さて、道に戻ったら、そのまま林を突っ切って、目指す先は川ですね。……結局イエイヌさんにはお世話になりっぱなしです。自分の事を、「巣立ちを行う雛鳥だ」なんていう詩的に過ぎる表現はしませんけれど、もう少し自分で生きるということに真摯にならないといけない気がしますね……。

道を横切り、林の中にわたしは進んで行きます。

夕焼け空は、透き通るような夜空に変わっています。星々が煌き、少しだけ欠けた月が眠そうな瞳のように地上を照らしていました。微風に揺れる木の枝の音が、窓越しに微かに聞こえます。優しい夜でした。

ですが、おうちの中には、重苦しい空気が立ち込めていました。お互いに会話も少なく、また、わたしも、イエイヌさんも、お互いに物悲しい表情をしていたと思います。

わたしは、まだ良いのかもしれませんが。自分で旅をすべきであると判断し、その思考を実行に移すだけなのです。また会える、そう信じて旅立つだけです。ですが、イエイヌさんはきつと違います。彼女がすべきことは『おうち』で待つこと。わたしと旅をすることではありません。彼女は（わたしの自惚れで無ければ）わたしと旅に出たいという思いと待たなければならぬという思いと言う相反する感情に苦しんでいるのでしょう。

きつとイエイヌさんは付いて来いと言ったら喜んで旅に同行してくれると思います。ですが、それでは意味がありません。自らが自らに課した使命を捨てるように命令をすることも、そうしてもらおうとすることも、およそヒトの……いいえ、自我ある存在の意義に反します。自分で考え、自分で決めること。それが、心のある存在の意義であり義務です。わたしはそう思います。だから、どんなに寂しくても、どんなに辛くても、わたしはイエイヌさんに命令をすることも、同行してくれるように促すことも、してはいけないのです。わたしと彼女は上下関係にある訳でも無いのですから……。

「イエイヌさん。先に寝させていただきますね。おやすみなさい」

わたしがベッドに潜り込むと、イエイヌさんが続くようにして、そつとくつつくようにわたしの隣に横になります。

「ともえさん……少し、わがままを言っても良いですか？」

わたしはイエイヌさんと会話できることそれ自体が嬉しく思いました。

「はい、何でしょう？」

わたしはイエイヌさんの方を向きなおします。

「……前みたいに、ぎゅってしてください」

わたしは何も言わずにイエイヌさんを抱き寄せます。わたしが彼女を抱きしめる力よりも強く、イエイヌさんはわたしの胸に顔をうずめます。なんだかわたしの体の貧相さが申し訳なくなるような気がします……

「イエイヌさん？ どうかしましたか？」

「いいえ、何でもありません……」

そういいながらも、彼女は顔をわたしの胸にこすり付けています。

「私は……ずっとともえさんと一緒にここに居られるんだって思ってたんです」

彼女は「勝手ですよ」と自嘲気味に加えて呟きます。

「……ありがとうございます。勝手なんかじゃありません。わたしはそう言ってもらえて嬉しいですよ。旅が終わったら、また戻ってきますから」

わたしはイエイヌさんの頭をそつと撫でます。柔らかな彼女の髪がわたしの頬をくすぐりました。

「むしろ……わたしはイエイヌさんにずっとお世話になっていたよかったのか疑問に思っていたくらいです」

これは本心からの言葉です。わたしが彼女と暮らすこと。それはわたしだって望むことです。ただ、いつまで彼女に甘えるようにして生きていくのか、生きていて良いのか、それが正しいことなのか疑問でしたし、申し訳なくも思えました。

「そんなこと……当然ですよ……」

鼻声で彼女は呟きました。イエイヌさんは、わたしとここで暮らすことを、少なくともわたしの近くで、可能ならばわたしと一緒に、生きて行きたいと思っていたのでしょう。

「イエイヌさんは優しいですね……」

彼女の思いはわたしにとつて決して不快なものではありませんし、わたしがもう少し他者に甘えることを良しとする性格だったら、そうしていたのだと思います。

「ありがとうございます……ともえさんだつて……」

会話はそれきりでした。お互いに会話を交わすことが嫌になった訳ではなく、お互いに言葉を交わさずとも良いという思いが共有されていたのだと思います。

暫くすると、イエイヌさんは気持ちが落ち着いたのか、寝息を立て始めました。わたしは小さく微笑んで、目を閉じます。

おやすみなさい。イエイヌさん。

目を閉じていると疑問が浮かびました。何故、イエイヌさんはわたしにこんなにも親切にしてくれて、わたしを受け入れてくれるのでしょうか？

仮にわたしが……例えばイエイヌさんと同じイヌのフレンズだったとして、彼女はわたしにしてくれたように、自分を投げ捨てるのかの様なほどに、親切にしてくれたのでしょうか？ わたしがこれまでに接してきたフレンズの皆さんは（多少の癖があったりはしますが）親切で優しい方でしたから、イエイヌさんも決して邪険に扱ったりなんかしないとは思いますが。

けれど、イエイヌさんがわたしにしてくれたこととわたしに望むこととは何かが違う気がします。過剰だとか、やりすぎだとか……そういう次元です。わたしはそれが不快であったり、疎ましく思ったりということはまるでありませんが……。彼女の孤独感の裏返し、そう思ったこともあります。ですが、何か、何かが違うように思えてならないのです。

浮かんだ疑問にわたしなりに向き合おうと横になったまま考えていたのですが、段々とそれがわたしに取って重要な問題では無いのだと悟りました。

どういった意図、どういった思いがあつてイエイヌさんはわたしに接していたのかということは、わたしに取って彼女がどういった性格

の持ち主なのかを理解することの一助でしょうけれど、それはこれからの長い時間で知れば良いことです。

わたしがどれほど彼女の思いを考えたところで事実はわかりませんしね……まあ、もしかしたら眠くなってしまうただけなのかもしれないが……わたしの肩の上に乗ったイエイ又さんの頭の重さ、その温もり、可愛らしい寝顔、嗅ぎ慣れた彼女の匂い、寝息の音。それら全てが、波立つようだったわたしの心をひららかにしていきま

す。この幸せにも似た喜びとは、もう少ししたらお別れなのです。わたしがそれを決めました。ですが、お別れまでの短い間くらい、いいですよ。

木立と言っても木々が密集していたり、草や蔦などがはびこっている訳ではありません。獣道とでも呼べばよいのか、下草の剥げた道が所々にありましたので、幸いなことに、わたし一人程度であれば大した苦勞も無く進むことが出来そうです。

木々のお陰かひんやりとした空気に包まれながらわたしは歩みを進めます。ふと、木々の隙間の先に異様なものが跳ねていることに気が付きます。まるっこい身体に果てしなく自然と乖離した青色をした小さな『何か』……あれが、セルリアンという存在でしょうか？ もう少し近くによって確認しましょう。

一歩一歩慎重に『何か』に忍び寄ります。気付かれてしまったては身の危険さえあるのでしょうけれど、平穩な光景の中に切り取られたように真っ青な違和感の塊のようなその存在に対して、わたしはひどく興味をそそられていました。

四、五メートルほどの距離に近づくと、ありありとその姿を認識することが出来るようになります。楕円形の胴体に、同様の楕円がくっつくような形で耳のような部分や胴体のような部分が出来ており、ぴよこぴよこと跳ねるように移動していました。こうして無害なところから眺める分にはどこか可愛らしさも感じるのですけれども

……不意にセルリアンがこちらに振り向きまゝ。

「えっ」

気配を悟られてしまったということなのでしょう。その中心に据えられたひとつの目玉がわたしを凝視しています。わたしは、その一切の感情、思考を感じられない瞳に見据えられ、全身の血の気が引くような思いを抱きます。

確かに、それらの異常性と危険性をわたしは言葉として認識してました。『輝き』が奪われ、命の危険さえあるということ、種類があり大きいものほど危険であるということ、打ち倒すためには身体に弱点のように存在する「いし」を破壊しなくてはならないということ。そういった簡潔な知識は確かにあったのです。

しかし、現実にとそれらと直面するということは、わたしに想像していた以上の恐怖と違和感とを与えました。

「あ……えっ……えっ……」

思わず後ずさりしようとしたが、木の根に足を引っ掛けて転んでしまいました。

「やつ、やあつ……」

そのまま必死にわたしは這い下がりますが、木の根や石、地面の隆起の為に上手く進むことが出来ません。腰が抜けてしまったということもあるのでしょう。『それ』はじつとわたしのことを見つめていましたが、わたしが抵抗できない事を悟ったのかぴよこり、ぴよこりと跳ねるようにしてゆっくりとこちらに擦り寄ってきます。

「やめっ……こ、来ないでえっ……」

頭が真っ白になります。

一步、二歩、ゆっくりと近づいてくる『それ』。その瞳は依然として無機質で、却ってわたしの恐怖心を煽り立てるもののように思われまゝした。

もう、手を伸ばせば『それ』に触ることが出来る距離です。

ぴよんと『それ』は大きく跳ねました。反射的にわたしは目を閉じて顔を背けます。しかし、わたしの身体は何らの痛みも感触も覚えません。わたしは疑問を抱き、目を開きます。そこに居たはずの

『それ』が居なくなっていることを願って……

わたしの眼前に無機質な白色と黒色で出来たひとつの大きな目が
ありました。

「——っ！」

声にならない叫び声を上げます。恐怖で意識を手放しそうにさえ
なりました。じいっとわたしの顔を覗き込むセルリアン。その瞳が
無機質であることに変わりはありませんが、わたしには理不尽な恐怖
でなぶることを楽しむようにさえ思えました。

ああ——イエイ又さん——

甲高い笛の音が大気を震わせます。その音に驚いたのか、或いはわ
たしの仲間が訪れたと考えたのか、セルリアンはわたしを飛び越える
ように大きく跳ねて木立の中に逃げて行きました。わたしは危機が
去ったことの安堵から、全身の力が抜けてしまいます。「はふう」なん
て情け無い声も出てしまいました。

「大丈夫ですか！」

聞いたことの無い声。どなたでしょうか？ いいえ、そんなことよ
りも助けていただいたことを感謝しなくては……彼女はわたしに駆
け寄り、手を差し伸べます。

「あ……ありがとうございます……」

彼女の助けを借りて立ち上がります。改めて彼女の姿を見ます。
白と茶色の髪に黒色の前髪が軽くカールしたように曲がっており、後
頭部には翼を思わせる様に跳ねた髪の毛が一对あり、首からは先程
使ったのであろう笛が下がっています。ピンク色のエプロンの下に
は茶色をベースにしたシャツと白色のタイトスカート、オレンジ色の
ストッキングと同じ色合いの靴を履いている少女です。外見は幼い
印象を受けますが、纏う雰囲気はエプロンのお陰かお姉さんとも呼べ
るような具合です。

「怪我はありませんか？」

彼女はそう言いながらわたしのお尻に付いた土汚れを軽く叩き落
としてくれました。

「す、すいません……」

下着を汚さず済んだのは不幸中の幸いでしよう。

「小さいセルリアンとはいえ危険には変わりませんからね……無事で何よりですよー」

彼女は素晴らしいながらにつこり笑いしましたが、すぐに不思議そうな顔になります。

「そういうえば、初めましてですかね……わたしはカルガモです、初めまして」

カルガモさんは再びにつこりと笑います。

「本当にありがとうございます……助かりました……。ええつと、わたしはともえです。よろしくお願いしますね、カルガモさん」

彼女はいえいえと首を振って言いました。

「ところでともえさん、どうしてあなたはこんなところに？」

当然の疑問です。彼女に事情を説明しましょう。イエイ又さんのことは、なんだか気後れしてしまって話せませんが……。

ある程度事情を説明すると、カルガモさんは呟きます。

「なるほどなるほど……うみべちほーにひとり旅ですか……タイヘンですね……」

ひとまず川の方に行きましょう、とカルガモさんが先導する形でわたし達は進み始めます。その途中、彼女はそう言っ自分の話をしてくれました。お友達に会うためにこの辺りから離れていたそうです。その帰り道に川へ向っていく途中でわたしを見つけたそうです。

会話をしながら歩いてきた所為か、意識が散漫になっていたようです。わたしはカルガモさんから注意の言葉を受けます。

「あー！ともえさん！ぼうつとしてないで、ちゃんと前向いて歩きましょうね」

彼女の言葉を聞いて、足元を見てみると木の根っこが隆起していて、ひっかかってしまいそうな状況でした。

ごめんなさいと手を後頭部にやりながら謝罪すると、カルガモさんは続けて言いました。

「一寸先は闇。何が起こるかわかりませんからね！ 気をつけて進みましょうー！」

何というか……しつかりした方ですねえ……

暫く進むと、綺麗な小川が目に入りました。さらさらと流れる水は澄んでいて、木の枝や木の葉が幾つか川面を漂い過ぎ行きましたが、周囲にも、また川の中にも人工物の類は見当たりません。口に含めばきつと美味しい、そう思えてしまうくらい清浄さを密やかに煌めかせていました。

わたしは先程の出来事の所為か、喉の乾きをずっと忘れていたのですけれど、現実には水があると認識してしまうと、以前よりもずっと強く水を求めるような渇きを感じてしまいました。

「到着ですっ」

カルガモさんがばんざいのポーズをします。わたしは思わずくすりと笑ってしまいました。

「ありがとうございます、カルガモさん」

「どういたしまして。ささ、飲みましょ飲みましょ」

彼女は早歩きで川の流りに顔を近づけ、水を飲み始めました。わたしは手を軽く流れに晒しすぎます。川の水はわたしの想像よりもずっと冷たく、思わず手をさっと引いてしまいそうになる程でした。わたしはぐつと覚悟を決め、両手で水をすくい、顔を洗います。

「ちべたい……」

そつと呟きます。どうやらカルガモさんに聞こえていたようで、彼女の方を見るとくすりと笑う様子が目に入ります。非常に冷たい水ですが、汗や疲労を流し落とすという意味では最高の温度です。

続けてひと口分を手にくくって飲んでみます。喉が渴いていたからか、それとも純粹な水の美味しさか、それはわかりませんが、人間……いえ、生きとし生けるもの全て、この清涼なひと口の水程美味しいものを口にすることが出来るでしょうか……なんていう感動さえ抱いてしまいました。

「ふう……」

思わず息をつきます。どうやら結構な勢いでがぶがぶと水を飲んでいたので、口元や胸元が水で濡れています。

「そういえば、ともえさんはうみべちほーへの道わかります?」

イエイ又さんから話は聞いています。わたしは指で方向を示しながら答えます。

「この林の手前の道を進んで……右側に進むんですよね？」

わたしの答えを聞いてカルガモさんはうんうんと頷きます。

「そうですね。道を間違えると大変ですからね。あつちも面白いものは沢山ありそうけど……危ないって噂ですの」

「へえ……そんなところが……いつか行ってみたくらいです」

危険、と言われた所に行ってみたいというのも無謀な気がしましたが、けれど好奇心は止みません。

彼女は見かねたように、ふふつと笑います。

「それでしたら……どなたかと一緒の方が良いと思いますよ？ その時は呼んでくださいね、私も興味ありますし」

少しだけ期待感に似た感情が胸に沸きます。もちろん、そんな未来が訪れるのはいつになるやら、と思いますが。

わたしは川辺に座り込みます。少しのんびりしたらまた出発するとしましよう。このひんやりとした空気も、耳をくすぐるせせらぎも、何もかもが愛おしく思えました。先程、危険な目にあつたばかりですから呑気に過ぎます。それに、自然に囲まれた生活というもの、目覚めてからは別段珍しいものでは無いはずなんですけれどね……。

十分ほどでしょうか、カルガモさんと休憩していました。

「さて、と……わたしは出発しますね」

わたしの声に応じるようにカルガモさんが言います。

「途中までご案内しましょうか？」

「いえ、申し訳ないですから……」

彼女はすこし残念そうにして「そうですね……」と呟きます。なんだか申し出を断るのが申し訳ないという不思議な状況な気がします。……そうだ。

「折角なので……ちよつと、いいですか？」

どうぞどうぞと促すカルガモさん。助けてもらったばかりでなく、お願いまでしてしまつて……本当にありがたいというか申し訳ないというか……

「そのう……頭の……羽根？ をですわね……そのー……触らせて……」

節目がちにわたしは言いました。もしかしたら羽根を触らせてという言葉は鳥のフレンズさんにとってお尻触らせてと同じくらい無礼なお願いかもしれませんが……わたしの言葉を聴いたカルガモさんはくすつと笑います。

「お安い御用ですよー、はい、どうぞー！」

彼女はわたしに障りやすいようにと中腰になって、頭を差し出します。では失礼しましょう。

「おお……これは……？ ほっほう……なるほどなるほど……」

髪の毛のような柔らかさはもちろんあるのですけれど、わたしやイエイヌさんのそれとは違って、つるつるとした触り心地です。それになにより……軽い！ 驚きです。

「あ、あの、ともえさん？」

わたしが彼女の羽根の下から手を差し入れほわほわと持ち上げるように楽しんでいるところでしたが、彼女から注意を受けます。

「くすぐったいです……」

「あつ、ああ……ご、ごめんなさい……カルガモさん……」

どうも夢中になりすぎていたようです。

「もうひとつだけ、いいですか？」

カルガモさんは訝しげな顔で言います。

「おさわりはダメですよ？」

「本当にごめんなさい……確認なんですけれども、カルガモさんってロバさんがジャパリまんを配っている広場の辺りに住んでるんですよね？」

「ええ、そうですそそうです。あの広場から少し外れたところの川辺によく居ますよー」

でしたら大丈夫でしょう。

「広場の近くにイエイヌというフレンズが居るんですけれども――」

わたしが翌朝目が覚めると、隣に眠っていたはずのイエイヌさんが居ませんでした。むにゃむにゃと目を擦りながら周囲を見回しましたが、彼女の姿は見当たりません。あれれとわたしは首を捻ります。「それはそれとして……」

わたしはベッドから出て顔を洗い、支度を始めます。今日のお昼前くらいに出発できる程度には準備しておきましょう。今日出るのはつきり決めた訳では無いですが、思い立ったら吉日、というヤツです。それに……

「一緒に居れば居ただけ、辛くなる……」

思わず呟きます。その言葉が無性にわたしの心をちくりと刺すように感じられました。

それでも、わたしは前に進まなくてはならない。そう思います。そして、彼女はここに残らなくてはならないと強く感じている。それはつまり、わたしは彼女と離れなくてはいけないということ。改めて考えると、わたしのわがままさを強く感じます。彼女は許してくれるでしょうか？ 考えるだけ無駄なのかもしれませんが、離れ離れになるという悲しい現実には、心がしおれてしまったのでしょうか。頭に浮かぶのは悲しいことばかり。頭を振っても、顔をもう一度洗っても、寂しげな思いは胸の中にずっと漂い続けていました。

スケッチブックと、色鉛筆。クローゼットの中の肌着とシャツを二組……ええっと、タオルを二、三枚ほど……そんな風に持ち物を確認したり鞆に押し込んだりしていると、おうちのドアがそつと開きました。

「戻りました、ともえさん」

イエイヌさんが帰ってきたようです。彼女の声は寝ているかもしれないわたしを気遣ったのか、小さな声でしたが、どこか悲しげな声色でした。

「おはようございます、イエイヌさん。ジャパリまんを貰ってきたんですか？ わたしも一緒に行ったのに……」

わたしは作業の手を止めて言います。

「どうせともえさんの事です。今日中に出発するつもりなんでしょう?」

イエイヌさんは呆れたような声で続けます。

「最後までいいのんびりしてください。ねっ?」

彼女の口調は何時にもまして大人びているように聞こえました。というか、わたしってそんなに考えを曲げないように見えていたのでしょうか?」

「気持ちは嬉しいんですけど……わたしってそんなに頑固ですか?」

わたしの質問に彼女は軽く笑います。

「いつもじゃないですけど……時々?」

「はあ……良く見ていらっしやる……自分でも気付かなかったですよ……」。

「ええっ……? 例えばどんなときですか……」

つい聞いてしまいますが、彼女は再び笑って言いました。

「秘密です」

「教えてくださいよお……」

わたしはそう言っ、イエイヌさんに近づきます。

「ダメです。恥ずかしいですもの」

「恥ずかしい、とは……一体……? こうなれば強硬手段です。」

「わっ、や、やめてくだ……わふっ」

困ったらくすぐるのです。そう決まっています。

逃げるイエイヌさんを追い詰めるようにベッドの方へ移動していきます。わたしに押し倒されるようにして彼女はベッドに寝転がります。と、瞬間、イエイヌさんは寝転がった勢いを利用し、わたしに馬乗りになりました。ちようど体勢が入れ替わった形です。

わたしは仰向けになって恐る恐るイエイヌさんの顔を見上げます。すると、彼女はふふんと鼻を鳴らして言いました。楽しげで満足そうな表情が彼女の顔に浮かんでいました。

「おかえしです!」

「ちよつとイエイヌさん? や、きやあつ」

暫くの間くすぐったりくすぐられたり……きやあきやあとふたりして声を上げていました。

お互いの手は不意に止まりました。わたしが彼女の上側に居て、彼女はわたしの目をじっと見つめています。少しだけ荒くなつたお互いの息遣いだけがわたしの耳に入ります。

「……イエイヌさん。もう少ししたら、出発します」

わたしにはわかりました。この機会を逃したら、多分、もう、ここを発つことはできません。余りにもこの生活は素敵過ぎます。こうして彼女とふたり楽しく暮らすことが出来るという砂糖の様に甘い夢が心を支配するよりも前に、ここを立ち去らなくてはなりません。わたしは彼女の意志を曲げたくないですし、わたしの過去を、真実を、投げ打つてでも彼女とここで暮らすことを選んでしまおう。もう既にわたしの心の中には『そうしてしまいたい』と切なく求めるわたしが居るのです。

「……だと思いました」

彼女は微笑むように言います。

「ちよつと、いいですか？」

イエイヌさんはわたしの下から抜け出して、別の部屋に行きます。戻ってきた彼女が手にしていたのは水筒でした。

「旅をするなら、役に立つでしょうから……」

わたしに水筒を手渡して、彼女は続けます。

「それと、皆さんに聞いていたのですけれど——」

それは彼女が他のフレンズさん達から聞いてきたという周辺の地理について。その情報のひとつひとは小さなものですが、確かな情報でしょうし、何よりも実際に生きてきたフレンズさん達が教えてくれた、大切な知恵です。

「……ありがとうございます。イエイヌさん」

わたしは何故だか涙が出そうになりました。

「この為に早く起きたんですか……？」

えへへという表情で彼女はこくりと頷きます。

「ちよつと急だったのでお役に立てるほど皆さんにお話を聞けたかわ

かりませんが……」

遠慮がちにそういう彼女でしたが、わたしはそういういった情報だとか、地理だとかと言ったことには意識を向けていませんでした。きつとどうにかなると思っていたというのかもしれませんが、自分のことについてばいいっぱいになっていったのかもしれない。

「本当に、本当にありがとうございます。……結局……お世話になってばかりでしたね、わたし」

イエイヌさんは首を振ります。

「私がそうしたいからそうしただけですよ、ともえさん。私はあなたのお役に立ちたかったです。どうしてかは……判りませんけど……もしかしたら、私が『イエイヌ』だからかもしれないね」

照れたように頭を掻くイエイヌさん。彼女は、『イエイヌ』という種が、ヒトという種に取つての最も古くからの種を渡つての友、そう言いたいのでしょうか？

それはある意味で正解だと思います。けれど、わたしはあえて、そうは言いたくありません。種としてどうこうというのは、フレンズという存在にとつて、恐らく重要な事実であり、もしかしたら彼女達の根幹を成すのかもしれない。けれど……

「いいえ、違いますよ。きつと、あなただから、ですよ」

ちよつと恥ずかしい台詞だったので、しっかりとイエイヌさんの顔を見ることはできませんでした。

カルガモさんが先導する形で木立を抜けて、道に戻ります。

「ここまでですね……ともえさん！ では、お氣をつけて！」

彼女は手を振りながらわたしに背を向けて歩き始めます。

「カルガモさん！ 本当にありがとうございます！」

わたしはペコリとお辞儀をしながら伝えます。彼女はわたしの声に応じるように振り向いて、改めて手を振ってくれました。

「伝言、忘れませんかー任せてくださいー！」

わたしは彼女に「お願いしますねー」と大きな声で答えます。暫くすると彼女はパタパタと頭の羽根を動かして空に飛び立ちます。再び彼女はくるりと後ろに振り返り、手を振ってくださいました。その後、彼女はゆっくりとした速度で空を飛んで行ったのでした。

カルガモさんから分かれて、道を歩きます。歩けど歩けどうみべちほーと思われるような光景は見えず、ただただ広がる平原の彼方には、時折何かの影が見えます。

「うーん……あれがお話に出てた所なんですかねえ……」

わたしは遠くを除くように手を額に当て、眺めますが、いまいち良くわかりません。陽炎の為か、はたまた霞の為か、それさえも判断しかねます。

「地図だと、今どの辺りなんでしょう」

遠くを眺めながら歩くことに飽きたわたしは空を見上げ、ぼんやりとつぶやきます。イエイヌさんを含めてフレンズの皆さんは文字や地図、図形と言ったあれこれに込められた意味や意匠を読み取ることが出来ない方が多いようです。意図してそうされているのか、それとも単に教える存在が居ないからか……それはわかりませんが……。彼女達にはしつかりとした知性を感じますし……もしかしたら、『必要が無い』という可能性も……うーん……。

ぼんやりとまとまらない考えを抱きながら歩いていると、木立の中に妙な真つ赤な丸つこいものがあることに気付きます。わたしは再びセルリアンという異物と遭遇してしまっただのかと身構えますが、『それ』に動きはありませんし、『いし』だとか不気味な眼だとかも見取れません。興味が引かれてということもありましたが、何よりも『それ』が何なのかということを確認しなくてはならないと思い、わたしはゆっくりと近づいていきます。

徐々にはつきりとしていく『それ』の姿は、やはり奇妙なものでした。セルリアンのようなこの世のものとは思えない違和感ではなく、こんなところに何故こんなものが？ という感想を抱いてしまうような奇妙さでした。一對のピンと立った耳に、まるっこい胴体の下側にレンズの付いたベルト、胴体には直接くつつくようにして足が付いています。

「これって……ラッキービーストさんでは……？」

その姿の全てをわたしはじっくりと観察します。彼？らの特徴は話には聞いていたのですけれども、実際に見てみると、なんといか……可愛らしくも不思議な姿という感じです。シンプルな意匠からは想像が付かないほどの働きをしているようです……他の方を知らないで比べようがないのですけれども、この子はなんだか土埃の汚れが酷く、命の持つ気配のようなものさえありません。それこそ、『モノ』のような……

「うーん……機械……なのかしら？」

この子が、仮に『生物だったモノ』という不吉極まりないモノだとするならば、余りにも無機質というか何と言うか……

「ふーむ……」

わたしはこの子の触感が気になり、そつと撫でるように触ります。硬いというかしつかりしているというか……少しだけふわふわしてますけども……。

そのまま、全体をゆっくりと撫でていると、不意にレンズがキラリと光りました。レンズも他の部分と同様に土埃で汚れてしまっていました。疑問に思ったわたしは指でそつと擦るようにして汚れを落とします。

すると、ピーツというぐもった甲高い音がラツキービーストから聞こえます。そして言葉を発したのでした。

「ト——、——、トオ——セニヨル——チ——、

トク——リテイク——フー、カン——。イチブ——

——、カク——」

わたしは唐突に発せられた音声にびっくりしてしまいます。それに、この子の発した音は壁を一枚隔てたような籠ったものでしたし、何よりもノイズのようなざあつという音が酷すぎるため、わたしには意味がまるでわかりません。

「ええつと……何なんでしょう……」

わたしは不思議に思い、さらにラツキービーストを持ち上げたり、擦ったり、ひっくり返したりと色々を試してみますが、何の反応も見られません。

「うーん……」

もしかしたらフレンズさんの中でも偉い方や特別な知識を持つ方（居るのかは知りませんが……）に出来ればこの子を直接見せれば良いのかもしれない。とはいえ、流石にこの子を抱えて旅路を行く余裕ありませんし……何より不確定……

「ごめんなさいね……もうちよつと安全なところに……」

そつとラツキービーストを持ち上げ、丁度おさまりの良さそうな洞のあつた木の根元に置きます。

「いつか、きつと……また会いましょう。ラツキービーストさん……ごめんなさい」

どこか名残惜しくもありましたし、申し訳なくもありましたが……仕方がありません。後ろ髪を引かれるような思いを抱きながらも前に進みます。

「ごめんよ」

突然、男性の声が聞こえます。風に掻き消されてしまうようなくらい小さい音だったのですけれども、わたしははつきりとその言葉を聞き取りました。驚きながら振り返りましたが、そこにはもう動かなくなったラツキービーストさん以外に人影も物陰もなく、木々が広がるばかり。

「空耳……？」

でも、どこか……なんでしょう、懐かしいような……。少しばかり不気味にも思いましたが、悲しさと申し訳なさの入り混じったような男性の声は、何故だか優しくわたしの心の中に染み入ってきます。

暫く周囲を探しましたが、何も見つかりません。ラツキービーストさんがまた何か話してくれたのだと思つて改めてまきぐつたり、持ち上げたり……それも意味がありませんでした。仕方ありません、行きましょう。

イエイヌさんに旅の出発を告げてから、簡単にご飯を済ませること

になりました。お互いに言葉も少なかったのですが、昨晚のような重苦しきは不思議と感じませんでした。

「あのお……ともえさん。いつ頃帰ってきますか？」

イエイヌさんはゆっくりとわたしに尋ねます。

「ちよつとわからないですねえ……半年か一年か……もしかしたら明日にでも記憶を全部取り戻して帰ってくるかもしれないし……」

最後の可能性は低いでしょう。イエイヌさんはわたしの言葉を聴いてくすりと笑います。

「それだといいですねえ……私、ずっと、待つ……待……」

彼女の言葉はそこで止まりました。顔を伏せながら言葉を搾り出すようにしています。彼女の口から出てくるのは言葉でも、嗚咽でもなく、意味を含めることすら出来ない、掠れた音でした。

「大丈夫ですよ、言わなくても」

わたしはそういいながら彼女の頭にそつと手を載せて、撫でます。

暫くの間、イエイヌさんの温もりを手の中で弄ぶようにしていると、彼女は口を開きました。

「……それじゃあ、頑張ってください！ お体に気をつけて……無理はしないで……安全に……ええつとそんな事じゃなくて……」

「大丈夫です！ ご安心ください！」

わたしは彼女を気遣おうとえつへんと力こぶを作るようなポーズをとって言いました。実際のところ、わたしには絶対に大丈夫といえるほどの自信はありませんが、悩んでいても仕方ないですし、「きつとどうにかなる」という思いも抱いています。それは間違いなのかもしれませんが、悲観してばかりでは何も得られるものはありませんの。

「さて、と」

鞆と帽子、ベスト、鞆の中身もスケッチブックと色鉛筆と、二、三枚のタオルと着替えと……大丈夫ですね。ええ、大丈夫でしょう。

「では、行って来ます」

わたしはイエイヌさんに手を振りながら、扉に手をかけます。

「あの……その……ええつと……」

イエイ又さんはわたしのすぐ後ろで迷っている様に眩みます。彼女のふさふさとした尻尾は垂れ下がり、身体の左側に巻きつくようにくっついていきます。

「……どうか、しましたか？」

「……いえ……お気をつけて！」

彼女はにっこりと笑っていました。無理をしているのでしょうか。彼女の表情は明るいものでしたけれど、尻尾の様子も変わっておりませんし、耳もしゅんと垂れ下がっているように見えます。

「はい！……では、また！」

そうしてわたしはドアをくぐり、旅に出たのでした。もしかしたら、彼女はわたしの後姿を見送ってくれていたのかもしれないが、わたしは振り向くことができませんでした。振り向いてしまったら足が止まる気がしたのです。いえ、実際に止まってしまったでしょう。だから、振り返らずに進むことにしたのです。

空に輝いていた太陽は段々と朱色に変わり、私の影が長く伸びるようになってきました。

「今日のとっころは」口までにしたいところ——

目的地まで結構な距離があったのか、それともわたしのペースが遅かったのか、それは判断しかねますが、想像よりも時間が経過しているのはわかります。

「——と言つても……うーん……」

ざっと周囲を見回しても休憩に適するような場所は見当たりません。右手側には木立が変わらずありますし、その向こう側には小川があるのでしょうか。左手側には広がる草原。どことなく建物の影らしきものが近づいているような気もしますけれど、今から向うには少しばかり距離がありそうですし、何よりも道を外れることへの恐怖心もあります。地図や土地勘があれば良いのでしょうか、今のわたしでは迷子になる可能性もあります。もう少し進んだ方が良さそうで

すね。

そのまま進んでいると、イエイヌさん、カルガモさんから聞いていた通り分かれ道に到着しました。あと少しでうみべちほー、ということでしょう。幸い、大きい看板に地図が描かれていますし、近くには小屋のような建物もありました。

「ええつと……」

わたしはスケッチブックの最後のページに地図を写し取ります。ふむふむ、ここって島だったんですねえ……円形の島の北端には大きな山があつて、そこから広がるように各所に『ちほー』があります。この草原は結構な広さがあるようで、川を跨いだ先にも、広がっているようです。次に広いのは南端に位置していて、目的地であるうみべちほーでしょうか。つまりわたしは大雑把に言つて南にまつすぐ歩いてきた訳ですね。幾つかの文字は擦れていて読み取れませんが、これだけ判れば十分でしょう。距離が正確かどうか、というのは疑問ですが、大体の位置がわかるだけでも大きな一歩です。

「よう！　ともえじゃねえか」

集中していたところに声をかけられたので身体が跳ねてしまいました。

「きゃあつ！　ええつと……ロードランナーさん？　お久しぶりです」

彼女は確かロードランナーさん。可愛い頭の羽根に半袖のシャツ、半ズボン……寒く無いんでしょうか？

「イエイヌはどうしたんだ？　あんなに仲良さそうにしてたのに」

「ええつとですね——」

簡単にいきさつを彼女に話します。

「……ともえも結構向こう見ずなところあるんだなあ」

何処となく呆れたような物言いの彼女ですけれど……何でしょう、あなたには言われたくないというちよつとした反抗心のようなものも……

「ロードランナーさんはどうしてここに？　確かナワバリは……」

わたしが尋ねると、彼女は頷いて言いました。

「走りたくなつたから、だな」

「やっぱり、うん。馬鹿にしたりするつもりはありませんけれど、彼女に向こう見ずと呼ばれるとなんだか違うような……そういえば、彼女に伝えることがあるんですけど。」

「あの、ロードランナーさん。以前コヨーテさんに会つたんですけど」
ロードランナーさんは、ちよつと驚いた表情になります。

「うっそ、おまえ、コヨーテと知り合いだったのか？」

「偶々会う機会があつて……で、ロードランナーさんに伝えてくれと頼まれたことが……」

「おう、なんだ？」

「ええつと確か……」

「例の約束忘れるな……だったかと」

ロードランナーさんは首をかしげて「約束……約束……」と何回か呟いていましたが、かつと目を見開いて「あああーっ！」という具合に声を張り上げます。彼女の声の勢いと同じくらいの勢いで尻尾もぴんと立っています。

「ごめん、ともえ、もうちよつと話してたかつたけど、行かないと！
じゃあな！」

彼女はそう言つて走り去つていきました。わたしがかける言葉を選ぶ時間すらなく彼女の背中が木立に消えていきます。川……渡るんですかね……近いのかもしれないけど……大丈夫なんでしょうか……？ というか……なんでそんなに急いでいるのか位、聞けば良かったですね……

半ば呆然としながら彼女を見送り、建物に入ります。四方が、銀色の金属で縁取られた透明な壁で囲われており、同じようなつくりのドアが両端にある、そんな建物でした。わたしは開いて中に入ります。風も通らず、雨に降られる心配もありません。今日はここで夜を明かすとしましょう。ベンチに腰掛けて、わたしは手に持ったスケッチブックを開きます。そこにはイエイヌさんと過ごした数日間に描いた幾つかの絵がありました。数は少なく、捲っているとすぐに白紙のページになりました。

「さて、と……」

今日は忙しかったですからねえ……殆ど歩いていただけですけど……。わたしは鞆の中から改めて色鉛筆を出し、絵を描き始めます。頭に思い浮かんできたのは、小川を眺めながら座って休むカルガモさんの背中という光景です。これを描きましょう。

「……行っちゃいました」

イエイヌはともえの姿が見えなくなるまでの間、ずっとともえの背中を見送り続けていた。その為にか、居た堪れなくなったような気持ちでドアの前にたたずんでいる。

彼女の瞳には小さな涙の粒が貯まっていたが、彼女はそれを拭いずらせず、ただただ、ともえの姿が消えた方向をじっと見つめる。

どれくらい時間が経っただろうか？ 出立はといえば正午の手前であつただろうに、気付けば陽射しは幾分か傾いていた。その間、イエイヌは、まばたきや、風に吹かれた耳が時折動いたりといった程度の動きしかせず、いつの間にか両腕は力なく垂れていた。半ば眠っていたとも呼べるような放心状態。ともすれば、虚無感にも似た感情に弄ばれているようにさえ見えただろう。

「……おうちに、戻りましょう……」

力なく呟いた彼女はそつと扉を開き、中に入る。

「ともえさんの、匂い……」

イエイヌは込み上げてくる寂寥感を我慢しようともせず、しとしとと降る雨のように涙を流し始めた。

ともえの残滓を求めるようにベッドに入り、枕に——ともえの使っていたもの——に顔をうずめる。嗚咽こそ漏らさなかったものの、とめどなく流れる涙は、何故自分が泣いているのかということさえ忘れさせそうになったが、彼女の『大切な存在』が自分自身の不甲斐なさによって、自分の手元から消えてしまったという事実は、救済にも似た忘却すら許さなかった。欠落と喪失。

何故あの子の事をこんなにも思い慕うのか、それならばいつそのことと出会うことすら無ければよかつたのに……何故、何故、私は『残らなくてはならないのか?』、それを考えて、考えて……自分の存在する意味や理由すら考えて……涙を流しながら、判らず。それが悲しくて、いつの間にか彼女は瞳を閉じていた。

夢を見た。

今よりもずっと低い目線で、自分の知る誰よりも大きな存在から、自分を知る大切な人からの頼みごと。

「きつといつか——が——くる——、——待って——くれるかい?」

聞き取れないところもあったが、優しい声だった。悲しい声だった。「任せてください!」そう伝えたかつたけれど、出来ず。自分も悲しい気持ちになった。夢で見た何もかもは忘却の彼方へと消えていく。悲しいと思った事さえ忘れてしまうことの悲しさだけが心に残るのだらうと、覚醒しかけた自意識が感じていた。

「——はっ」

イエイヌが目覚めたときには、時は夕刻だった。夢の事を考えるよりも先に、どれくらい眠っていたのだろうかということを考えるよりも先に、眠りに着く前に考えていたいろいろなことを考えるよりも先に、目に入ってきたものがあつた。水筒だった。

「……渡さないよ」

水筒を肩から掛け、ドアに手をかける。ひとつ、思いついたことがあつた。

「そうだ……!」

部屋の中の棚から箱をひとつ、ポケットに仕舞いこみ、彼女は頷く。

「うん、これで」

ドアを開き、外に出る。今まで悩んで居た事が解決した訳では無いのかもしれない。しかし、彼女は振り向くことは無く、まっすぐに道を行くのだった。

「ほにゃっ!？」

ドンドンという物音がわたしを起こしました。なんだかとても情けない声が出てしまったような……いつの間にか寝ていたようです。気恥ずかしさから、わたしは周囲を見回します。

「……イエイ又さん！」

ドアの向こうにはイエイ又さんが居ました。彼女はげえげえと肩で息をしています。

「ど……どうしたんですか？」

わたしは慌てて駆け寄り、ドアを開きます。

「と……ともえさん……これ……」

彼女はわたしに水筒を差し出します。

「そんな……わざわざ……？　そ、それにもう夜ですよ？　それに……おうちを離れても大丈夫なんですか……？」

わたしの言葉にイエイ又さんは首を振って答えます。

「渡さなきゃって……はあはあ、そ……それに……」

彼女はすうと深呼吸して、改めて口を開きます。

「決めたんです！　私も一緒に行きます！」

はあ……とわたしは溜息をついてしまいました。

「……そんな顔で言われたら、何も言い返せないじゃないですか」

疲労の色を浮かべながらも、きりりと固い決意を決めたような、そんな表情でした。彼女と過ごした日々は長くはありませんが、今までの笑顔とも、困った表情とも、涙を浮かべた声とも、全然違った表情でした。

「も、もしかして……嫌、でした……？」

つい一瞬前までの顔はどこへやら、困った表情をしながら問いかけてきます。

「いいえ、そんなことはありません」

こちらも望むところです。あなたと一緒にに行けるなら、それが一番ですもの。

「じゃ、じゃあ……」

の後ろ髪はまとめられてしまいました。

「ふふん。……お似合いですよ、ともえさん」

イエイヌさんは達成感に満足したように鼻を鳴らします。わたしは改めて自分の姿を確認しようと、透明な壁にぼんやりと映るわたしの姿をじっくりと眺めます。

「そ……そうですかね……」

照れ臭くてそんなことを言っただけです。後ろ髪を纏める様に結わえられた黄色のリボン、緑色の髪、そして、左右で色の違う瞳。やっぱり何処か違和感を覚えてしまう姿ですけど、でも……

「なんだかしつくり来る……ような……」

首を傾げながら呟くと、しつかりと聞き取ったのか、イエイヌさんは楽しそうに言います。

「はい！ お似合いです！」

まあ、イエイヌさんがそういうのなら、きっとそうなんでしょう。それにこれだけ嬉しそうにしているイエイヌさんを無碍にも出来ません。実際嬉しいですね。

「……ありがとうございます！ イエイヌさん！ 大切にしますね！」

えへへと笑うイエイヌさん。わたしもつい、彼女に釣られて笑ってしまいます。たった数日でしようけれど、彼女とこうして笑っていることがどれほどわたしにとって大切なことなのかを痛感してしまいます。

「ともえさん。明日から改めて、よろしく願いますね」

「ええ、こちらこそ、よろしく願います」

ふたりだから楽な旅になるかと問われると、それはわからないとしか言いようがありません。ですけど、わたしも、イエイヌさんも、きつと、ふたりだからこそ楽しかった旅だったと言える気がします。あくまで、予感ですけどね。

幕間2

「ねえ、——。なにをかいてるの?」

わたしは目の前に居るその人に声をかけます。その人の顔は、わかりません。陰になっっているのか、それとも記憶から抜け落ちているのか……まるで、いいえ、文字通り黒塗りになった顔がわたしの方を向いて、微笑みながら言いました。

「絵を描いているんだよ、——」

わたしはその言葉を聴いて、わくわくしながら、イーゼルに置かれたままの絵を精一杯の背伸びをして覗き込みます。しかしながら、描かれている絵と、わたしの眼前に広がる光景とは著しく異なっていました。

例えば、時間。目の前に広がる景色は太陽が燦燦と降り注ぐ芝生の生い茂る丘でしたけれど、描かれているのは夜。細っこい下弦の月がささやかに照らす夜の丘でした。例えば、山。遠くには山々が連なり、稜線が空との間に境界をぼんやりとスカイラインを生んでいるのですけれども、描かれた丘の向こう側には山が無く、夜空に煌く星々が、真っ黒な天幕に穴を開けたように幾つか描かれています。例えば、人。小高い丘の頂点の大木の下には家族連れが何組か居て、タイヘン賑やかなのですが、描かれているのは夜に不釣り合いなほど白く輝くワンピースを着た女性の姿。風にスカートをはためかせながら、遠く夜空に思いを馳せているように、小さな横顔をこちらに見せています。

「なんで、よるなの? なんで? このひと、いないよ? なんで?」

その人は苦笑いしながら、わたしの頭をそつと撫でます。

「絵ってというのはね、写真じゃないんだ。ありのままを描く必要は無いんだよ」

わたしはその言葉に釈然としませんでした。今なら、きつとわかるのですけれど。

「へんなの」

そういつてそつぽを向くわたしの頭をそつと撫でるその人の手は、

ごつごつしていましたけれど、暖かで、優しくて……あと、どこか妙ななにおいがありました。今からしてみれば、きつと懐かしいと感じただろうそのにおいは、きつとそのときのわたしにとって、心地の良いものではなかったのでしょうか。

「……………、たばこすつたの?」

吸わないって言ったじゃない、とむくれるわたし。それに答えるようにその人は言いました。

「ごめんごめん、辞めるのはタイヘンなんだよ? 控えるようにはしてるんだ……」

申し訳なきそうな声でした。

「からだにわるいって、ぶくりゅーえん?」

あははとその人は笑います。笑われてわたしはますますむくれてしまいます。

「ごめんごめん、笑っちゃダメだったね」

「じゃあ、やめよ?」

正論……でしょう。何が「じゃあ」なのかは不明ですが、今のわたしでもそう思います。そういうとその人は真剣に悩みながら、ぼそぼそと呟きます。

「や……確かに身体には悪いけども……心には良いんだ……うーん、しかし……うーん……時期にガンにも効くように……するが……今は……うーん……」

幾らなんでも妄言の類でしょう。その人の言葉に飽きたその時のわたしは、絵から目を離して眼前の光景を眺めます。折り良く吹いた風に髪の毛がそよぎ、雲が陽射しを遮り、光の柱を作ります。そのときの光景は、忘れてしまっていたのが惜しいくらいでした。感動にも似た思いが幼かっただろうわたしの心を揺さぶります。

「ねえ、……………。あたしもえをかきたい」

わたしの言葉を聴いたその人は心底嬉しそうに微笑み(顔はわからないのに、微笑んでいたんです。不思議ですよね)、わたしにスケッチブックと色鉛筆を数本渡してくれました。わたしは受け取るや否や、目の前の光景を写し取ろうと躍起になり始め、その人はわたしをそつ

と見守ってくれていたのです。

そこで、あの時思い出した記憶は途切れます。

「ともえさん、どうかしましたか？」

お昼ごはんを済ませたわたしとイエイ又さんは、思い思いに食後の時間を過ごしていました。わたしは水を組んだコップを傍らに置き、時折舐めるように口に含んだりしながらよみがえった『思い出』の事を考えていました。どうやら思案に暮れている間に結構な時間が経っていたようで、心ここにあらずといった様子のわたしを、イエイ又さんは不思議に思ったようです。

「いえ、ちよつと考え事を……」

「そうですかあ……よいしょつと、体調を崩したのかと思っちゃいました、良かったです」

イエイ又さんは椅子の位置をわたしの隣に動かして、腰掛けます。いじらしいというか可愛らしいというか、そんな様子のイエイ又さんにわたしはくすりとしてしまいます。

「ご心配をおかけしました。……イエイ又さん、今日はどうしましうう？ お散歩に行つて、その後は……うーん……」

このまま『おうち』で過ごしても良いのですけれど、幾分手持ち無沙汰ですし、少しくらいは身体を動かしたいところです。

「そう、ですねえ……どうしましょう。お散歩しながら考えます？」

「そうですね、そうしましょう」

身体を動かせば何か思いつくだろうという判断です。

わたし達は支度をして、『おうち』を出ます。澄み渡るような空のんびりと漂う雲。良いお散歩日和でしょう。

イエイ又さんは時折わたしの顔を覗き込むように伺いながら、わたしの隣を歩いています。その度にわたしは「うん？」と口に出したり出さなかつたりしながら、イエイ又さんに答えるように、目線を合わせます。幾度もちらりちらりと彼女の尻尾が視界に入ります。それは楽しげに揺れるものでした。

彼女はにっこりと笑ったり、はたまたすぐに視線を前に向けたり……落ち着いていないというと悪く言うようですが、彼女の動きのひ

とつひとつが楽しげなものであるように思われます。

「ねえ、イエイヌさん」

わたしの問い掛けに彼女はこちらを見て応じます。

「なんですか？　ともえさん」

「ひとつお願いがあるんですけど、いいですか？」

彼女にお願いをするのは何回目でしょうか？　大小問わずにいくつかを積み重ねて来た気もしますが、彼女からお願いをされたことは、殆ど……いえ、まったくありません。単に彼女の性格なのでしようけれど、ずっと頼みごとばかりしていて「申し訳ない」という思いが積もっていくような気持ちもします。

「はい！　なんででしょうー！」

彼女は尻尾を振りながら、本当に嬉しそうに答えてくれました。

「ええっと……この辺りに住んでる……んですかね、フレンズさん達にご挨拶をしたいなあと……」

彼女を喜ばせるような『お願い』をしないといけないのではというちよつとした責任感さえ感じていたのですけれども、どうやら杞憂だったようです。

「はい！　よろこんで！　……でも皆さん決まったところに居るとは限らないですよねえ……」

イエイヌさんの困ったような、呆れたような、そんな声にくすりとしてしまいます。

確かに、ナワバリに住んでいるといっても、その範囲は曖昧でしょう。重なっていたり、出かけていたり、一緒に暮らしていたり……もとの動物と同じような生活をしているとしたら『渡り』をする子もいるのでしょうか……

「そういえば、そうですね……大丈夫ですよ、気負わないで下さい。長く暮らしていればその分沢山のお友達も出来るでしょうし、焦ったりはしていませんよ」

気のせいでしょうか？　『長く暮らしていれば』と言ったときにイエイヌさんの耳がぴくりと動いたように見えました。

「うーん、となると……最初はロバさんに改めてご挨拶するとして

「……うーん……」

ふふつとくすりと笑ってしまいます。

「ともえさん？　どうかしました？」

「ごめんなさい……思い出した人にちよつと似ていたので」

イエイ又さんは不思議そうに首を捻ります。

「思い出した……何か思い出したんですか？　教えてください！　お役に立てるかもですし！」

「そこが基準なんですわね……」

「いいですよ、歩きながらで大丈夫ですか？」

「はい！」

彼女はわたしの話に時折相槌を打ったりしながら、静かに聴いてくれました。わたしの話が終わると、彼女は考えるような素振りをして、そつと言いました。

「ともえさん、その人、誰です？」

イエイ又さんの声色が若干低いような……いえ、問題はそこではなくて……

「わからないんですよねえ……顔がわからなかったというのも大きいですけど、断片的に思い出ただけで、どういう理由でそこに居て話をしていたのか、絵を描いていたのか……まったく……」

わたしの思い出した記憶はそれと、それに付随して今のわたしの心に浮かんだ安心感にも似た感情。決してそれに連なる前後の出来事が胸中に沸き起こることはなかったのです。

「余程親しい方の方のようですね……お友達って感じじゃないですものねえ……」

ひとつの可能性が頭を過ぎります。

「わたしの……お父さん？　それとも、別の誰か、絵の先生……？」

後者は最初にこの記憶を取り戻したときの直感。前者は、今ふと思いついた可能性。

「オトウサン……？　何となくわかるんですけれど……」

不思議そうに首を傾げるイエイ又さん。そういえばフレンズさん達って野生動物から変化（進化？）した存在なんでしたっけ……とな

ると、『家族』という概念にも食い違いがあるかもしれません。

「ちよつと聞き辛いんですけれど……イエイヌさんにはご家族……ええつとお父さんやお母さん、ご姉妹つて居るんですか……？」

わたしの質問はある意味で禁忌に思われました。彼女の口からそういった言葉は聴いたことがありませんし、フレンズさん達のありようにわたしは詳しくありませんが、どうも「一種一体」が原則のように感じられます。そうでなければ、自分の事を「イエイヌ」だとか「口バ」だとか種族名で呼びませんもの。

「……？ うーん、良くわからないですねえ……でも、家族ならともえさんがいるじゃないですか」

イエイヌさんにはっこりと笑いながら私に言いました。

「あはは……そういうことなら、わたしもイエイヌさんが家族ですね」わたしは微笑みながら、「どっちがお姉さんなんでしょうね」と冗談を言いましたが、わたしの胸中には不思議な感情が渦巻いています。なぜ、今まで自分の家族の事を考えなかつたのか……いいえ、自分が捨て子であるという可能性を考えてしまったのは事実なのです。ただ単に、考えないようにしていたのかもしれない。

「まあ、答えなんか出ませんよねえ」

わたしはつい、呟いてしまいます。それを聞いたか聞かないかはわかりませんが、イエイヌさんがわたしに問いかけます。

「……ねえともえさん。行きたいところがあるんですけれども、良いですか？」

「ええ、いいですよ、行きましょう」

わたしがそう答えると、イエイヌさんはそつと手を差し出します。わたしは何故だか彼女から慰められているようにさえ思いました。

「ふふつ、ありがとうございます」

「なつ、なんのことですか？」

顔をぷいと背けるイエイヌさんですけど、尻尾の動きが大きくなっていますし、心なしか、可愛らしいお耳がこちらを意識するように向いているんですけれどねえ……。

「イエイヌさん。わたし、思いました」

イエイヌさんは「はい?」と言いながらこちらを向きます。

「わたし、大きいお耳もふさふさの尻尾も、無くてよかったなあつて」わたしの言葉に込められた意味合いを彼女は理解したのでしょうか? それはわかりませんが、イエイヌさんはくすりとして、言いました。

「ともえさん、結構似合うと思いますよ?」

果たして彼女はとぼけたのでしょうか? ちよつとわたしにはわからない、ということにしておきましょう。

暫く歩き、わたし達は良く通る道(広場に向う道です)から外れます。道は広場から外れる方向に続いており、流れる小川を渡るように小さな木造の橋を渡ります。

「こつちの道はこんな風になっていたんですね……」

わたしの先に行くイエイヌさんに声をかけると、彼女は振り向かずに答えます。

「ええ……もうちよつと歩いたら坂道です。大丈夫ですか? ともえさん」

ふむふむ……体調の方はもう言うまでも無いですし、疲れも特に感じておりません。

「大丈夫です! もしかして、広場から見える丘の上に向ってるんですか?」

「あ、わかつちやいましたか……そうです。あの丘の上からの景色が、私は好きなんです」

わたしは、彼女の言葉を聞いて自分が喜びにも似た感情を抱いていることに気付きます。イエイヌさんから、イエイヌさんの個人的な感情、特に自分自身を表現する言葉。それを聞いたことが、なんだか格別に嬉しいのです。

「……どうして笑うんですかあ、もう……」

イエイヌさんが困ったような表情で言います。どうやら私は笑ってしまっていたようです。

「なんだかごめんなさい……イエイヌさんの好きな場所が聞けて嬉しくて……」

わたしの言葉にイエイヌさんは少しばかり顔を赤くして、道の先に顔を向けます。

「どうしました？ イエイヌさん」

「い、いえ……さあ、行きましよう？」

わたしの手を強く引いてイエイヌさんは進んでいきます。

歩いている内に道は段々と傾斜のかかった道になって行きます。広がる光景は変わらず平原ですが、目の前に見える丘が近づいているのがわかります。心地よさにも似た疲労感を覚えながらわたし達は進みます。進んで進んで、坂道を昇り……丘の頂点に到着します。

「ふう、到着です！ ともえさん、大丈夫ですか？」

イエイヌさんは振り返ってわたしに問いかけます。わたしはといえばイエイヌさんのペースに合わせて歩いたからか、少しばかり息が上がっています。

「ふうふう……ちよつと疲れましたが……体力つけないといけませんねえ……」

「無理はしないで下さいよ……？ ほら、見て下さい！ ともえさん！」

彼女が指差すのは丘の向こう側。少し傾いた陽射しがのんびりとゆつたりと、柔らかく照らす広場と、その周囲の草原。自然の中にヒトの営んだ痕跡が、その中で今はフレンズさん達がそれぞれ思い思いに過ごしているのでしょう。少しだけ長くなった影の中をそつと歩くフレンズさんの姿も見られます。あの子はどなたなんでしょう……イエイヌさんに聞いても首を振ります。流石に見えませんかよね……。

「そうですか……そうだ、イエイヌさん。この景色を描いても良いですか？」

私はイエイヌさんに尋ねます。すると彼女はふふーんと鼻を鳴らして言いました。

「そのつもりで、ともえさんをここに連れてきたんですよ！」

見透かされていたような悔しきにも似た感情よりも、ずつと強く、わたしはわたしのことを彼女に理解してもらっていた事が本当に嬉

しく感じられます。

「……い、こぼれゆいすね……」

えへへと恥ずかしがってしまおうわたし。そんなわたしを見て、イエヌさんがぼそりと呟きました。

「やりかえしてやりました……!」

片手をぐつと握り締めています。イエヌさんはわたしに妙な対抗心を湧かしていたようです。なんともいえない、胸から込み上げてくる愛しさのような感情。感謝と気恥ずかしさと嬉しさ。ふふつと笑いが零れます。イエヌさんもわたしに釣られて笑い始めました。

少しして、わたしは鞆からスケッチブックと色鉛筆を出して、風景を描き始めます。以前と同じように、自分でも不思議に思えるくらい、迷い無く滑り始める手。果ては見取れず、水平線まで広がって見える草原を、陽射しを浴びて少し長くなつた陰を湛える広場を、果てまで続くあの道を、ゆつくりと、それでも確かに、わたしはスケッチブックに描いていきます。

そんなわたしを後ろからじいつと見つめるイエヌさん。時折、何故だか警戒するように周囲を見回しているようでしたけれど、彼女は殆どの時間をわたしの手元を眺めて居たように思います。横目で見ただけですけれどね。

そんな折、何かの気配を感じました。

「ふう、今日はこんなところだなー帰るかー……おおつ?」

可愛らしい声でしたけれど、知らない声です。不思議に思つて振り向くと、そこには羽根のように跳ねた髪の毛のショートカットの女の子が居ました。両耳に挟むように綺麗な羽の髪飾り。半袖半ズボンの涼しそうな格好で、ちらりとびよこびよこ楽しんで跳ねる長い尻尾も見えます。

「……ロードランナーさんですか……セルリアンかと思いましたよ……」

イエヌさんが彼女に言います。セルリアン、フレンズの敵。そんな言葉が呼び起こされます。

「失礼なヤツだな、オイ。イエヌう……久しぶりにあつたのに、セル

リアン扱いはひどいぞ」

腰に手を当てて彼女は言いました。彼女の言葉も一理あるでしょう。ロードランナーと呼ばれた彼女にわたしは興味が惹かれました。「ええつと……イエイヌさん。彼女は？」

イエイヌさんに聞くと、紹介してくれました。

「彼女はロードランナーさんです。こちらはともえさん。わたしのお友達です」

イエイヌさんはロードランナーさんにわたしのことを紹介してくれました。うーん……どこか聞いたことのある名前……

「こ、こんにちは、ロードランナーさん。わたしはともえです。よろしくお願いしますね」

胸の中の疑問はさておき、わたしは彼女に名乗ります。

「おう、ともえだな！ よろしく！ じゃあな、あたしは帰るぜ！」

あつ、そうですそうです。コヨーテさんから伝言を……

「あ、あの。コヨー……あ……」

帰るぜ！ とは聞こえましたが、もう丘の下に……

「あ……その……イエイヌさん……忙しい子ですね、ロードランナーさんって……」

半ば呆れながら、半ば彼女のスピードに感心しながら、私はぼそりと呟きます。イエイヌさんも「ええ……」とそつと呟きました。わたしたちの間には奇妙な沈黙が一瞬訪れます。

「……絵、描きますか」

わたしは再びスケッチブックに向き合います。

西の空が茜色に染まり、東は透き通るような董色に変わった頃。わたしは絵を描き終えました。

「ふう、出来ましたよ、イエイヌさん」

そういつて振り向こうとすると、イエイヌさんはわたしの肩の上を通すようにして絵に顔を近づけます。彼女の両手はわたしの肩に乗せられていて、彼女の全身のぬくもりを背中に感じました。

「はええ……」

妙に気の抜けた声を上げて感心してくれるイエイヌさん。

「ど、どうでしょう？　今回は、見えたままを描いたつもりですけど……」

イエイヌさんが好きだといった場所を、わたしは出来る限り、切り取るように描こうとしました。

それは、この丘に来なくとも彼女が愛する光景を見られるようにするため。それは、彼女が教えてくれた光景に対する感謝と尊敬の思い。そんな色々な感情が混じっていたからだと思います。

「とても……綺麗、です……」

イエイヌさんはほうと息をつきます。わたしはなんだか嬉しくなって、わたしの右肩の上にある彼女の顔にそっと顔をくっつけます。

「お褒めいただき、光栄です、イエイヌさん」

少しばかり大仰な言い方になったのは恥ずかしかったからです。

イエイヌさんはわたしの顔に彼女の顔をこすり付けるようにして答えてくれたのでしょうか。小さくわたしは笑い、彼女も同じようにささやくように笑います。

幸せなんてものは、わたしに断定できません。ですが、きっと、これは幸せのひとつの形なのでは無いでしょうか？　わたしを家族と呼んでくれたこと、彼女のお気に入りの場所を教えてください、彼女がわたしを褒めてくれたこと、彼女がわたしを認めてくれたこと、彼女がわたしを守ろうとしてくれたこと。その全てがわたしの今を肯定してくれているように思います。

暫くふたりで何も言わず、夕暮れに佇みました。お互いの間に流れる空気は緩やかで、なめらかで、優しいものでした。夕日に浮かび、夜に沈む。そんな平原の姿をふたりで眺めることの無上の感動。それは確かなものでした。そうしている内に、辺りは真っ暗になります。

「帰りましょうか、イエイヌさん」

彼女はええと頷き、そっと立ち上がり、わたしの前を歩きます。そういうえば、イエイヌさんはわたしの前を歩くことが多いことに気付きます。特に知らぬ道や夜道では……彼女なりの心配りなのでしょうか？　道案内として、或いはわたしを守ろうとして……？　その真実

はわたしにはわかりません。単なる道案内ということが多いのでしようけれど……。

「ねえ、イエイヌさん。手を繋いでもいいですか？」

夜道への恐怖を、彼女への感謝の思いで隠すつもりはありませんよ？

わたしの申し出を彼女は快く引き受けてくれました。ありがとうございます、イエイヌさん。

丘を下りきり、道を歩いて……わたし達は広場の周辺まで戻ってきました。静まり返った広場は朝の喧騒がまるで嘘のようです。朝に来る度に感じる混沌のような雑踏、喧騒……それらが妙に懐かしく思えます。殆ど毎日の恒例なんですけど、ね。

隣を見れば真剣に道の先を見つめるイエイヌさんの顔が目に入ります。耳はしゃんと立っていて、時折ぴくりと方向を変える様に動いています。尻尾は楽しげですけど、彼女自身も含めた安全の為に気を張っていてくれるのでしょうか？口だけ動かすようにして、感謝の気持ちを伝えます。イエイヌさん、ありがとうございます。口を動かし終わったくらいタイミングで、イエイヌさんが私の顔を見つめてきます。頭の上に「？」が浮かんでいそうな顔でした。

「どうかしましたか？」

「い、いえ、なんでもありませんよ、イエイヌさん」

不思議そうにしているイエイヌさん。そうだ……

「イエイヌさん、今日描いた絵は、おうちに飾りましょう？」

「えっ？ 良いんですか？」

楽しみですっねえなんて、わたし達は話しながら歩きます。ふいに、わたしの心にひとつの思いが過ぎります。「ずっとこうしているのか？」と。

イエイヌさんとふたりで、ずっと暮らす。ああ、それはなんて甘く、美しく、魅力的なんでしょう。きつと、それは素敵でしょう。ですが、それは……多分、きつと多分、わたしの過去を放棄するということ。いつか、わたしはわたしの過去の為に決断しなければいけません。あの夜のことがよみがえります。『旅に出ること』……いつか、

きつと、いつか。決断したらすぐに旅立たねばならないでしょう。

とはいえ、もう暫くここでのんびりしてもバチは当たりませんよね……？　ひとまずは明日か明後日か……まだ知らないフレンズさんたちと会えることを願って、今日を終わりますよ。

「ただいま」という声かふたつ重なって『おうち』に響きます。今日は楽しい一日でしたね。イエイ又さん。明日もよろしくお願ひしますね。

朝日が強く差し込み、わたしは目が覚めました。ベンチで寝ていたからか、身体の節々が痛みます。水平線の向こうには太陽が輝いています。

「んっ……ふう……覚悟はしていましたけど……結構辛い……」

わたしは身体をほぐすために伸びをしながら呟きます。雨風をしのげて、地面に直接寝ることも避けられる……それだけでもありがたいことですけど、やはりベンチに横になって眠るといのは結構しんどいものですねぇ……。

「ん……うーん……」

わたしの呟きで目が覚めたのか、イエイヌさんも起き上がります。

「おはようございます、イエイヌさん」

「ふあい……おはようございます、ともえさん……」

言い終わるや否や、イエイヌさんはふわあと欠伸をしてから伸びをします。わたしも釣られて欠伸をしてしまいました。

「……ともえさん、もう出発します?」

それでも良いのですけれど、身体をほぐしたり、軽く顔や身体を清めたいところです。

「そうですね……もう少ししたら、川の方に言って少し身体をぬぐおうかな、と思ってます。イエイヌさんはどうします?」

寝起きでぼんやりしているからか、数秒の間を置いて、イエイヌさんは答えます。

「私も、行きます」

そう言って彼女は再び欠伸をしました。それでも眠たげな半目。彼女のおっとりとした様子に、なんだかわたしも眠くなってしまうようです。眠気を払うようにほつぺたを軽くぺちぺちと叩いて、ドアを開いて表に出ます。心地よく冷えた朝の空気がわたしを出迎えます。

今日が、始まりました。

わたしが小屋の外で軽くストレッチの続きをしていると、先程よりも覚醒しているのであろうイエイヌさんが出てきました。彼女は「ど

うぞ」といつてわたしに鞆と帽子、それと水筒を手渡します。

「ありがとうございます。じゃあ川の方にいきましょうか！」

わたしの言葉にイエイヌさんは「はい！」と元氣良く、ですがどこか眠たそうに答えます。彼女の返事を合図にするように、わたし達は歩き始めました。

道を横切り、木立に入ると、ひんやりとした空気がわたし達を包みます。むしろ寒いくらいでしたけれど、お陰で歩いているだけで目が覚めるようです。フレンズさんなのか、それとも自然の動物なのか、小鳥の囀るようなチチチという可愛らしい声も聞こえます。深呼吸をすると、しっとりとした空気がわたしの身体に染み渡るようです。

「前から思っていましたけど、空気が美味しい……」

わたしの言葉にイエイヌさんは首を傾げます。

「……？ 味、しませんよ？」

こういった感覚はヒト特有なのででしょうか？ それともこの空気が知らない為に比較のしようがないのか……

「うーん……説明しづらいというか何と言うか……綺麗な空気だなあ」といいたいですよ」

そういうと、彼女は納得したようにふんふんと頷いています。わたしもわたしで、何故この空気が『美味しい』と思ったのかという疑問を抱きます。もしかしたら、嘗てのわたしの記憶の名残かもしれないですね。

暫く歩くと小川が見えました。道中では先日のようなセルリアンの出現なども無かったのは、幸いでしよう。

「よし、っと……」

わたし達は小川の傍らにしゃがみ込みます。わたしとイエイヌさんは水を手で掬い、顔を洗います。手と顔に触れる水はとても冷たいものでした。

「ひよええっ……！」

イエイヌさんが奇妙な声を上げます。

「ど、どうかしましたか……？」

彼女はバツが悪そうな顔で雫を垂らしながら言いました。

「ちべたいです……」

やっぱり、似るものなんですわねえ……。思わずくすりと笑ってしまいました。

顔を洗い終えたわたしは、昨日かいた汗を軽く拭おうと思い、タオルを流れに浸し、絞ります。そうしてベストだけ脱いで、服を脱がずに軽く擦るようにして拭きました。そんなわたしの様子をじいつとイエイヌさんは不思議そうに眺めます。

「ともえさんって……綺麗好きですよねえ……」

「うーん……なんでしょう。汗でベタベタするのは避けたいですし、臭いとかも気になりますし……」

ちよつとばかり恥ずかしいような話ですけれども、正にその通りです。殆ど何も持たずに旅に出る以上、お風呂に入ったり、服を頻繁に変えたりなど出来る筈も無いですし、その事は覚悟していますので望んだりもしません。ですけど、少しくらいは身なりを整えておきたいと思うのも、また人情というところでしょう。

「うーん、ともえさん、ヘンなおいとかしませんけどねえ……」

イエイヌさんはわたしに近づいて、すんすんと鼻を鳴らします。

「ちよ、ちよつ……は、恥ずかしいですって」

わたしは思わず飛びのくようにイエイヌさんから離れます。そんなわたしの様子をやっぱり不思議そうに見るイエイヌさん。

「むしろいいにおいですし、安心してください！ 結構離れていても、ともえさんのおいなら、私、わかりますよ！」

胸を張って彼女は言いましたが、わたしはなんだか非常に恥ずかしい気持ちです。

「えー……ええつと……喜んでいいんですか……？」

ヒト……少なくともわたしが抱いている『常識』とフレんズの皆さんの抱く『常識』が異なることは理解してましたけれども……

「はー」

イエイヌさんは、恐らくわたしよりもずっと鼻が利くはずですし、そのイエイヌさんが自信を持って肯定してくれているのです。きつと自信をもっても良いのでしょうか……何と言うか、その……

『体臭に自信があるヒト』という存在は、わたしには妙に違和感が目立つ言葉のように思えます。いつそのこと、そんな『常識』を覚えているよりも、わたしの過去についてももう少し覚えていて欲しかったものです……。

「そういえばフレンズの皆さんは着替えとかしないんですもんね……」

イエイヌさんもロバさんもロードランナーさんも、同じ服を着ています。汚れや傷も殆どありませんし、きつと『フレンズ』としての特性や特徴なんですよね。深く考えても仕方が無い気がしますので、ざっくりと『そういうモノ』だと受け入れましょう……。

とそこまで考えて、『常識』があることの大切さに気づきました。わたしがフレンズさん達のような体質で無い以上、清潔さを保つことは重要なことです。想像して少しぞつとしました……。フレンズさん達に少しばかりの羨ましさを抱きながら、わたしは身体を拭い終わり、タオルをすすぎます。

さて、今日はどれくらい歩けるでしょうか？ 新たな出会いや、楽しい出来事。もしかしたら辛いことや大変なこともあるのでしょうかけれど……イエイヌさんが一緒ならば、きっと大丈夫。そう思います。わたしがそんな思いを抱いている間、イエイヌさんと言えば周囲をきよろきよろ見渡したり、お耳をぴくりと動かしながらも流れに手をさらして遊んでいたりと……。水筒に水を汲み終わって、最後の準備の終わりました。

「よし……イエイヌさん、行きますか！」

わたし達の間「おー！」という具合の音が響きます。

木立から道に戻り、うみべちほーに向って歩みを進めます。具体的な時間こそわかりませんが、太陽の傾き具合から言って、まだまだ朝と呼べる時間でしょう。空の様子はといえば、今日は風があまり吹いておらず、雲も少ないようです。

「今日は暑くなりそうですね……」

イエイヌさんはわたしの呟きに「ですねえ」と答えます。昨晚写し取った地図（正確に描けたか、といわれるとちよつと自信はないです

けれど)で見たところ、うみべちほーまではそこまで距離はなさそうですね。ですが、どこかで一端休憩をしたほうが良いかもしれませんね……。

っと、話は変わりますけれど、ご飯、どうしましょう？

「イエイヌさん、ご飯はどうしますか？　今、手元にジャパリまんは無いのですけれど……」

わたしがそういうと、イエイヌさんは申し訳なさそうに答えます。

「ごめんなさい、ともえさん……私も……持つてくれば良かったですね……」

「いえ、責めるつもりは……では無理しない程度に急ぎましようか。うみべちほーの方で配っている余りとかあるかもですし」

そう言つてわたし達は少しだけ歩くペースを上げ、進み始めました。

「そういうえば、ともえさんはアルマーさんとセンさんにお会いするの目標でしたっけ？」

「そうですよ。会いたくても会えないなら、会いに行けばいい、という考えです」

わたしはイエイヌさんの先を歩きながら、振り向かずにご答えます。目先の目標でもあるだけで何となく前に進んでいる気にはなるものです。

「ともえさんは前向きですねえ……」

イエイヌさんの言葉は何処か自嘲気味であるように思えました。

「……性格は、みんなそれぞれ違いますから。会いに行くといつても、もしかしたら、入れ違いが続くかもしれないしね」

わたしの言葉にくすりと笑うイエイヌさん。

「優しいですね、ともえさん」

「そうですかね……？」

わたしの言葉が、彼女の琴線の何処に触れたのかはわかりません。もしかしたら、彼女は『待つ』という行為をずっと続けていた自分に何か思うところがあるのでしょうか？

「待ち続けるって、タイヘンですもの。わたしは身体を動かしていた

ほうが気楽ってだけです」

わたしがそう言って後ろを振り向くと、イエイヌさんと目が合いました。心なしか彼女の目が潤んでいたのは気のせいでしょうか？と、その時です。

「あつー！ともえさん、あれ！」

ふえ？ と声を上げてしまいました。彼女の指差す先には、ぴよこぴよこ跳ねるようにしながらくさむらの中を移動している大きなカゴがありました。

「あれは……なんです……？」

セルリアンでは無いのでしょうか、とわたしは付け加えます。

「多分、ラツキービースト……ボスさんですよ！もしかしたら……」なるほど、ラツキービーストさん……。わたしが納得していると、イエイヌさんは小走りに茂みに近づいていきます。後を追いましう。

「よかったあ……帰り道だったんですかね……？ボスさん。貰ってもいいですか？」

わたしが彼女に追いつく頃には、そのぴよこぴよこというカゴの動きは、イエイヌさんの質問に答えるように止まり、彼女が取りやすいように傾いているように見えます。

「ふう……びつくりしましたよ……。おはようございます、ラツキービーストさん。わたしも良いですか？」

視線を落とすと、カゴの陰になっていて、ラツキービーストさんの姿は見る事が出来ませんでした。イエイヌさんがしっかりとジャパリまんを幾つか拝借しているのを見ると、どうやら正解なのでしょう。

「オつかれさまデス、ハカセ。ドウゾ」

ハカセ……？ 博士？ 人名？ うーん……？ わたしの疑問を他所に、イエイヌさんは驚きの声を上げます。

「しゃ……喋れたんですか……？ というか、ハカセじゃないですよ！ともえさんです！」

イエイヌさんの声を聞くと、ラツキービーストさんは頭に載せたか

ごを地面に投げ置きました。そして、イエイヌさんの顔と、わたしの顔を順番にじいつと見つめます。

「ホントウ?」

わたしの顔を見て問いかけるラッキービーストさん。

「……ええつと……なんて答えたら良いのでしょうか……」

少し思案してわたしは口を開きます。

「はい、わたしはともえです」

ラッキービーストさんの胴体にくぐられたレンズがきらりと光ります。

「ケンサクチュウケンサクチュウ……ガイトウジヨウホウ、カクニン。トウロクめいヲていせいシマスカ?」

……何の情報でしょうか? とはいえ、ラッキービーストさんたちに間違つて覚えられるのも、間違えられた方にも申し訳ないですし……

「ええつと……訂正してください」

「リヨウカイ……カンリヨウ……オつかれサマデス」

終わつた……のででしょうか? いつの間にか地面に置かれたカゴを手持っていたイエイヌさんは、そつとラッキービーストさんの頭の上に戻します。

「あ、ありがとうございます、ラッキービーストさん」

「イエ、では、ともえ。しつれいします」

そう言つてラッキービーストさんは再びぴよこぴよこと跳ねるように移動し始めました。

「……なんだつたんでしよう?」

イエイヌさんは不思議そうに呟きます。

「なんだつたんでしようねえ……」

わたしもぽつりと呟きます。『わたしの情報がある』ことがどういうことなのかさえ、今のわたしにはわかりません。とはいえ、わたしが『あそこ』で眠っていた以上、何らかの情報がパークの中にある可能性をぼんやりと考えていましたが、どうやらその考えは正しいようです。今回、わたしが質問をするよりも先に、ラッキービーストさんはどこかへ言つてしまいました……

「それに……ボスさんはお話できたんですね……」

そういえばそうです。てつきり違和感無く受け入れていましたが、皆さんから聞いた話ではラッキービーストさんは寡黙な方だというお話でした。話は聞くし、行動もしてくれるけれども寡黙な（というか喋らない）不思議な存在。けれどフレンズさんたちの生活をサポートしてくれている存在……というお話でしたからねえ……。

「不思議ですね……何か条件でもあるんでしょうか？」

わたし達はふたりしてラッキービーストさんから頂いたジャパリまんをもぐもぐしながら歩き始めます。疑問は尽きませんが、考えても仕方が無いことでしょう……

「あつ、もしかして、ヒトとしかお話ししないのでは……」

イエイヌさんがぼそりと呟きます。

「えつ、そういうことなんですか？」

直感ですけど……とイエイヌさんは言いましたけれど、的を射る答えだと思われまます。要するに、ヒトとは会話するが、何らかの事情からフレンズさん達とは会話しない、ということでしょう。理由や事情は……わかりませんけれど。

「まあ……それはそれとして……ご飯の心配もなくなりましたし、そこまで急がなくても良いかもですね」

偶然の遭遇でしたけれども、ラッキービーストさんのお陰で少しばかり余裕が生まれました。少しだけ多目に拝借させていただいたので、今日一日ならば余裕を持って行動できるでしょう。

それに……何よりも自分自身の過去について一歩近づけたのではないのでしょうか？ と言っても……そうなってしまおうと、ますます機会を逃してしまったことが悔やまれますね……。

想定外の遭遇の後、わたし達は再び歩き始めます。歩いている内に太陽は空高くに昇っていきまます。今朝方想像したとおり、どうやら気温が結構な温度にまで上がっているようですし、先程までとは少しばかり空気が違うように思われます。うみべちほーに近づいているから、ということもあるのかもしれませんが。気温や空気の変化は、わたしの身体を流れる汗の量からも判断は出来ましたが、何よりもイ

エイヌさんの呼吸が荒いことから想像は容易です。わたし達の体調を考えると、そろそろ休憩をしたほうが良さそうです。

「エイヌさん、あそこで休憩しましょう」

わたしは木立の方を指差します。

「……はあ、ふう……良いんですか……？」

一緒に旅をする以上、お互いの体調管理は当然のことです。

「ええ、急ぐ理由もありませんから」

微笑みながら彼女に答えます。エイヌさんは申し訳なさそうにしていますけれど、やはり辛そうにしています。わたしは彼女の手を引くようにして木陰に向います。

「なんだか、ごめんなさい……」

エイヌさんの言葉を無視する形になってしまいました。程なく、わたし達は木陰に到着し、腰をおろして涼みます。わたしは「ふう」とひと息ついてから、水筒を彼女に手渡して言いました。

「無理はしないで下さい？ 急ぐ必要があったとしても、です」

彼女は「はい」と小さな声で答えます。

「具合はどうですか？ くらくらしたりとか……そういう……」

エイヌさんはわたしの言葉に首を振ります。

「そこまでは……ちよつと暑くていつもよりも疲れ気味な程度です、たぶん……」

彼女はそう言って水筒を開け、ひとくちほど水を飲みました。こくりと動く彼女の喉には口元から溢れた透明なしずくが見て取れます。

文字通り、ひと息ついたからか、彼女の疲労も少しばかり回復したようです。もしかしたら、昨日の疲れが抜け気って居ないのでしょうか？

「ならいいですけど……」

わたしを追いかける為が無用な疲労をしてしまったという疑問は口にはしませんでした。けれども、わたしは少しばかり不安な気持ちになります。彼女の襟巻き（マフラーでしょうか？）だとか、腕を覆う長い手袋だとか、そういったものを外せば良いのでしょうか、彼女が言うには落ち着かないとのことでしたし……。

「ありがとうございます、ともえさん」

彼女はわたしに水筒を返しながら言いました。わたしもひとくち頂きましょう。

「んくっ……ふう。……？ どうしました？ イエイヌさん」

息をつきながらイエイヌさんの方を見ると、何故か彼女と視線が会いました。気のせいやお耳（ヒトの方です）が赤くなっている気がします。……気温の所為でしょうか？ 彼女は目が合うとすぐに顔を背けます。

「い、いえ……何でも……」

その後、彼女はぼそりと呟きました。それはそれは小さい音で、はつきりと聞き取れることは出来なかつたのですけれど、何となく、彼女の言いたい事がわかりました。

「わたしは気にしませんよ？ 直接となると困りますけど……そもそも水筒はひとつしかありませんしね」

わたしの言葉を聴いてイエイヌさんはぴくりと身体を震わせます。

「な……なんのことです？ そ、そんなことより、行きましょう！ 体調も戻りました！」

慌てて取り繕うように立ち上がるイエイヌさん。まったく、同じ飲み口を使ったことなんて気にしなくても良いでしょうに……以前も同じ水筒を回し飲みしたじゃないですか。まあ、それはそれ、ということ……。

「本当に大丈夫ですか？ 急ぐ必要はありませんし……」

わたしが立ち上がりながら尋ねると、彼女は「大丈夫です！」と答えてくれました。見たところ、彼女の息も整ったようですし、出発するとしましよう。くれぐれも彼女が無茶をしないように気をつけなといけませんね。彼女が『気負う性格』なのは、わたしにだってわかりますもの。

歩き始めて暫くの間、景色は今までのものから変わりませんでした。右手側には木立が茂り、左手側には広がる草原。ある地点を過ぎると、くさむらはぱたりと茂るのをやめ、木立は変わらずありました

けれど、それも疎らに……更に少し進むと、目の前には大きな門。その門には「うみべちほー 入り口」と大きな丸っこくて可愛い文字で書かれています。所々装飾が剥けていたりもしましたけれど、幸い、可愛らしさを辛うじて感じられる程度には本来の意匠が残っていました。

「ここが……うみべちほーの入り口なんですかね……案内もしてまっし……」

わたし達は歩みを止めはしませんでした。疑問に思っただけで、あなたに質問します。彼女の方が、きっとパークについての知識は多いでしょうから。

「うーん……そうなんでしょうねえ……境目には門があるとのことですので、きっと……」

彼女も確証を得ていないような口振りです。

「イエイヌさんもちほーを渡るのは初めてでしたっけ？」

「はい！ そうです！」

後ろを歩くイエイヌさんに目線をやると、楽しげに微笑んでいて、尻尾もゆるりと振られています。休憩を挟んでから、歩くペースを落としたからか、それとも暑さに慣れてきたからか、彼女には疲労の色は見られませんでした。

「楽しみですねえ、うみべちほー……」

わたしが彼女を見ながらさういうと、イエイヌさんも「はい！」と微笑みながら答えます。その後、すぐに彼女はとてつと小走りになり、わたしの横に並びます。そして、イエイヌさんはわたしの目をじっと見つめてきました。何となくでしょうけれど、彼女がして欲しいことが直感的にわかりました。

「どうぞ、イエイヌさん」

わたしが手を差し出すと、彼女は驚いたように目を見開いて、わたしの手を取ります。

「……なんで判ったんですか？」

「なんででしょうねえ……何となく、ですかねえ……」

わたしの言葉に彼女は「ズルイです」とぼそりと呟き、わたしはそ

の言葉にふふつと笑って返します。

門を抜けると、景色が一変しました。

まず最初に感じるのは空気の違い。今まで触れていた草原の空気とは異なり、しっとりとしていますし、何処か違った独特のにおいにする空気です。そして、一面の海が最初に目に入りました。それは本当に広大で、雄大で……水平線というものがこれほどまでに驚きを与えてくれるものだとは思いませんでした。遠く漂う大きな白い雲も、何処までも続いていそうな真っ青な空も、全てがわたしにとって驚きの対象でした。

右手を見ると、木立が門を境にぱったりと無くなり、そこには海に流れ込む、ゆつたりと広がる水の道があるばかり、その上を渡るように橋が架かり、その先には弧を描きながら続く道……左手を見ると、同じように曲がった道が続いています。道の果てには青と白とを基調にした海つぼさそうな印象を受ける建物と、矢鱈に背の高い白い塔（灯台でしょうか？）があります。

どうやらこの門は、緩やかに弧を描く湾の真ん中にあるようです。ここから浜辺までは少し距離があるのか、波の音は小さく控え目で、白く泡立つしぶきはあまりに小さくて見えません。

門の辺りは一段ばかり高いところになっているようで、浜辺や波打ち際の様子は地面の陰になっているところもあります。ですけど、お昼を直前に控えたような穏やかな雰囲気は強く感じましたし、広大な海の優しさのような印象と突き放すような厳しさがひしひしと感じられます。

「うわぁ……凄いです……」

素直な感情を呟きます。どうやらそれはイエイヌさんも同じだったようです。いいえ、わたしよりもきつと強い感動を覚えていたのかもしれません。

「凄いですね！　ともえちゃん！」

ぴよんぴよんと跳ねるようにしているイエイヌさん。彼女の反応からしても、ちほーを越えるところがらりとパークの雰囲気は変わるようです。

「ふふっ……行きましょう？ イエイ又さん」

少し残念そうにしているイエイ又さんを尻目に、わたしは彼女の手を引いて歩き始めます。少し進むと、階段が見つかりました。階段を下り、わたしたちは浜辺に降り立ちます。イエイ又さんは押さええが利かなくなつたようで、走り出してしまいました。

「あ……あはは……元気……」

わっふわっふという具合に走り出し、ひやつほうと声を上げてさえます。わたしはといえば、景色に感動にも似た感情を抱いているのは言うまでもありませんが、それはそれとして、ひとつの懸念が頭を過ぎっていました。

「さて、今晚、どこで寝ましょうか……」

何というか、感情や遊興よりも先に、自分自身の安全を優先させてしまう思考が情けないような、悲しいような気持ちにもなりますが、仕方の無いことだと受け入れましょう……。

さて、少し歩きながら、見て回りますか。周囲を見回しながらイエイ又さんの向つたほうにのんびりと歩きます。より強く感じる波の音と優しく吹く風の音とがわたしの耳をくすぐります。心地よさを感じながら歩くと、足を踏み出す度ににざくりと音のする砂浜。そして何よりも独特の空気……！ 草原とは、まるで別世界に降り立ったのだということを痛感します。

砂に足を取られてしまい、中々速度を上げられないでいると、イエイ又さんが「ともえさーん」と言いながら手を振り、わたしを呼びます。

「まったく、焦らなくても……」

わたしは苦笑しながら、彼女に手を振り返します。

「……ん？ あの子は……？」

わたしに向つて手をふるもう一人の影。あの子はどなたでしょうか……？

わたしはイエイヌさん達に小走りに近づきます。けれども、どうにも砂に足を取られてしまつて速度を出すことが出来ません。あと数歩、というところで思わず転んでしまいました。

「だ、大丈夫ですか？　ともえさん」

「だいじょうぶ？」

ふたつの声がわたしに掛かります。ひとつはイエイヌさんなので、間違えようも無いのですけれど、もうひとつの声は心当たりがありません。この辺りで過ごしているフレンズさんなのでしょう。

わたしはイエイヌさんが差し出してくれた手を取って立ち上がり、膝や手のひらについた砂を払って、もうひとつの声の主を見つめました。グレーと白から水色にグラデーションしていく特徴的なショートヘア。心配そうな表情浮かべながらも、はつきりとわかる人懐っこさそうな可愛らしい顔立ち。薄い青色の瞳は透き通るようです。水色を基調にしたセーラー服風のワンピース、腰には錨がモチーフであるベルトに、短めのスカート。すらりと伸びる細っこくて透き通るように白い肌の足。その後ろ側には光沢を持った太い尻尾。真っ白の靴……

「あ、ありがとうございます、イエイヌさん……」

この子は？　と問いかけるよりも先に彼女は名乗りました。

「あたしはバンドウイルカっ！　よろしくねっ！」

彼女はにこやかにわたしに名乗ります。やはり、というべきでしょう。その笑顔は人懐っこさを覚えさせる柔らかかなものでした。

「はい！　わたしはともえです。こちらこそよろしくお願いしますね！」

わたしも笑顔で彼女に答えます。横を見れば心配そうな表情のイエイヌさん。

「ともえさん、お怪我はないですか？」

イエイヌさん。あなたは心配しすぎでは無いでしょうか……？

いえ、お気持ちは嬉しいのですけれども……。

「大丈夫ですよ、イエイヌさん。これくらいなんてことありません。心配してくれてありがとうございます」

彼女を励まそうという思いもありましたが、何よりも事実ですからね。わたしの言葉を聴いてイエイヌさんはほっと息をつきます。

「ともえさんって、意外と運動苦手ですよね……？ 無理しないで下さいね。いざというときは背負いますから！」

「え、ええ……ありがとうございます……その時はお願いしますね……」

その時が来ないことを祈りましょう。申し訳ないですし、恥ずかしいですし、情け無いですから……

「ねえねえ、ふたりはどこから来たの？」

首を傾げながら問いかけるバンドウイルカさん。

「ああ、そうですね。草原の方から来ました」

わたしの言葉に続けてイエイヌさんが口を開きます。

「ともえさんと、私とで旅をしてるんです」

わたし達の言葉にバンドウイルカさんは目を輝かせます。

「ほんとっ!?! 旅かあ……」

キラキラと太陽の光を受けて輝く瞳は彼女の好奇心を表しているようでした。

「お話聞かせて欲しいんだけど……いい？」

もとより断るつもりはありません。ですがけれど、わたしとイエイヌさんの手を取って、そんな瞳でお願いされてしまったら断ることも出来ませんよね。

「ええ、いいですよ。ちょっと長くなってしまいますね……どこか座れば……」

わたしは周囲を見回します。そんなわたしの様子に気付いたのか、イエイヌさんがわたしの袖を引っ張って指を指しています。

「あそこ、行きましょうー！」

彼女の指の先には小さな小屋と、その軒先から伸びる栈橋がありました。

「そうですね、そうしましょう。バンドウイルカさん、歩きながら大

丈夫ですか？」

「楽しげに「うんっ！」と頷く彼女の顔を見て、わたし達はイエイヌさんが指差した建物に向かい、歩き始めました。足元からのわたし達の足音と、浜辺に打ち寄せるさざ波の音とが耳に届きます。」

「海、という存在は記憶をなくしたわたしにとって初めて触れる筈ですけれども、何故でしょう。不思議と懐かしい気持ちになります。あの『思い出』の光景に思いを馳せたときと同じ、優しいような、切ないような、憧れのような……。」

「別段時間はかからず、棧橋にわたし達は到着しました。陽射しが少し傾き始めたからか、建物の屋根が陰を作っています。強すぎるくらいに色彩が強調された陽射しの世界を切り取るその陰は、お話をしながら腰掛けるのに正に最適だったと言っても良いでしょう。」

「わたしを真ん中に、右手側にバンドウイルカさん、左手側にイエイヌさんが腰掛けます。当初、彼女に話しているのは旅の目的についてです。」

「アルマーさんとセンさんに会ってお礼をするため。そして、自分のことについて知るため。後は少しの好奇心。そんな感じですよ。バンドウイルカさんはわたしの言葉に相槌を打ったり、時折質問をしてくれたりなどしっかりと聞いてくれました。特に先日のセルリアンの事件のふたりの反応はなんだか不思議でした。イエイヌさんは何故だかおろおろし始めましたし、バンドウイルカさんは「ひゃあー」と心底怖がるような素振り……ああ言った事態は普通では無いんでしょうけれど……。」

「そんなに怖い話でしたか……?」
「うんうんと激しく頷くおふたり。」

「ここはそもそもセルリアンってそんなに多くないの」
「バンドウイルカさんの言葉に、そうですねと頷くイエイヌさん。」

「私もそう教わりましたし、今まで見かけたことはありませんけれど、襲われたりは……ハンターさん達の数もそんなに多くないそうですね……無事でよかったです……」

イエイヌさんは胸を撫で下ろすようにしています。

「そ、そうなんですか……てつきり、ひとけの無いところには一杯居るのかと……」

「うーん、結構見当たらないよねー。見かけたら、あたしも皆に伝えて回るけど……そんなに会ったこと無いかなあ……」

バンドウイルカさんは思い出すように上を向いて呟きます。

彼女達の言葉に、私は自分の無謀さに反省の思いを抱いてしまいます。ここは優しい世界であるという認識。それはあながち間違ったものではないと思うのですけれど、それでも自然に包まれた世界であるということとは間違いないのです。

それは、単なる優しさ以上に厳しさや困難に包まれているということでしょうし、セルリアンという明確な脅威も存在しています。それに対してわたしは何が出来たのでしょうか？ ただ怯えていただけです。

「イエイヌさん、一緒に来てくれて、本当にありがとうございます」

わたしはイエイヌさんの方に向き直り、改めて感謝の言葉を伝えます。わたしは弱い。それはどうしようもなく事実です。記憶がどうかそういう話ではなく、肉体的な強さはフレンズの皆さんにずっとずっと劣ります。早く走れず、力も無く、そんなわたしがひとり旅をすることの無謀。ロードランナーさんの言葉は、事実でした。だからこそ強く感じるイエイヌさんへの感謝の思い。この感情は、きつと彼女に伝えなくてはならない感情です。

「いえ、そんなに大したことは……でも、私がともえさんを支えますから……だから、安心してください！」

彼女の言葉が、わたしの心を励ましてくれます。思わず顔がほころんでしまうような、そんな感じですよ。

「ふたりは仲良しさんだねー、ふふっ」

「ええ、そうですとも！」

イエイヌさんが肯定します。わたしだってそう思っていますよ。イエイヌさん。

「ありがとうね、イエイヌさん」

わたしはそう言って、言葉が続けます。

「えーっと、じゃあお話の続き、しますね」

ここに到着するまでの話をし終わり、わたしは水平線に視線を動かします。雄大で広大で……遠くどこかに、きっと何かがある、そう思わせてくれる光景です。イエイヌさんもわたしも、バンドウイルカさんも何故だかしみじみとした様子で、黙って海を見つめています。

「そういえば、バンドウイルカさん」

すべき質問を思い出しました。わたしはバンドウイルカさんに尋ねます。

「なあに？　ともえちゃん」

「アルマーさんとセンさんって、どちらにいらっしやるか、わかります？」

わたしの質問にバンドウイルカさんはうーんと首を捻ります。

「少し前までは居たんだよねえ……コウホウ？　のお仕事って言うたかな」

コウホウ……？

「ど、どういうお仕事です……？　それ……」

「んーとね……確か……」

うんうん唸りながら考え込むバンドウイルカさん。

「バンドウイルカさん。大丈夫です。どっちの方に行つたとかそういう話で良いので……」

わたしがそういうと、彼女は「それなら……」と言ってわたし達が来たそうげんちほーから大きく逸れた方向を指差しました。

「確か、さばんなちほーの方に向つてつたよ！」

ふむ、何かあるのでしょうか……それが依頼なのか、それとも個人的な都合なのかはわかりませんけれど……。

「ありがとうございます、バンドウイルカさん」

今日は時間的にもここで休ませていただくのは間違いないですし

……出発は明日か、それとも明後日でしょうか、次の目的地が決定したというのは十分成果だと呼べるでしょう。当てる無の旅ほど辛いものは無いでしょうから。

「ううん、覚えてなくてごめんね、ともえちゃん……」

わたしはバンドウイルカさんの言葉を首を振って否定します。

「次の行き先が決まっただけでも十分ですよ」

わたしは言葉にイエイヌさんも頷きます。

「目的があるっていうことほど、気持ちがおもしろくなることはありません。私からお礼を……ありがとうございます、バンドウイルカさん！」

どうやらイエイヌさんもわたしと同じ思いを抱いていたようです。

「えへへ……なんだかありがとうね……！」

バンドウイルカさんは少し間を置いて、続けます。

「ねえ、ともえちゃん、イエイヌちゃん。見てて！」

彼女はどぼんと海に飛び込みます。わたし達の間、唐突な出来事に対する困惑が一瞬訪れましたけれど、その困惑は間もなく感嘆の思ひへと変わりました。

「わあっ……凄い……」

イエイヌさんもわたしもわあっという声を上げます。バンドウイルカさんは空高く跳ね上がり、空中でぐるりと一回転して再び海に戻っていきました。跳ねる水しぶきも気にせず、わたし達は彼女の姿を追うことしか出来ません。海面からわたしの背丈よりもずっと高く、真つ青な空を背負いながら、バンドウイルカさんと白く泡立つしぶきが浮かんでいました。彼女の尻尾や髪の毛、水しぶき……：彼女らが光を受けてきらりと輝いている光景は、呼吸さえ忘れさせてしまうようです。

一瞬の間を置いて、バンドウイルカさんは水面から顔を出して言いました。

「どうだった!？」

その顔はとても楽しげでしたけれど、どこかわたし達に期待を寄せられている様にも見えませんでした。

「凄いです！ バンドウイルカさん！」

わたしとイエイヌさんは声をそろえて同じ言葉を発しました。

「えへへえ……ありがとっ！ お話聞かせてくれたお礼ねっ！」

朗らかに笑いながら、彼女は続けます。

「ほら、皆も泳ぐ？ 楽しいよー！」

「はいー！」

イエイヌさんは彼女の声に応じる形でぎぶんと飛び込みます。衝動的に海に飛び込んだからか、最初の方こそあっぱあっぱと言う具合に慌てていた彼女でしたけれど、バンドウイルカさんの手を借り、上半身だけ曲げるようにしています。落ち着いたように浮いています。時折水を掻く為か、バンドウイルカさんと繋いでいない左手の方をゆるく動かしています。

「ともえさんー！」

イエイヌさんに呼ばれましたが、どうにも気後れしてしまいます。

「あのう……ええと……せめて着替えを……」

彼女達のように服のまま……となると……下着でというの……うーん。困ったわたしは周囲を見回します。すると、背後の建物の中に水着のようなものが見えました。

「あっ！ バンドウイルカさん。この建物の中って入れますか？」

少し考え込む素振りをして、バンドウイルカさんは答えます。

「入ったことは無いけど……多分……」

「ありがとうございますー！」

わたしは正面の入り口に向います。背中越しに「どうしたんだろうね？」とイエイヌさんに問いかけるバンドウイルカさんの声が聞こえます。それに応じるように「多分、服を……」と答えるイエイヌさんの声。やっぱり、フレンズさんには不思議に思えるのでしょうか……？

木製の扉をがちやりと押し開けると、見えていたとおり、水着や日傘のようなもの、はたまたビニール製の玩具（でしょうか？）などが陳列されていました。きつと、ここは嘗て利用されていたお店のようなものなのでしょう。薄暗い空間に、窓から強い光が差し込む様子は、どこか寂しげな様子にさえ見えます。そつと、何かが並んでいた

のかもしれない机に触れると、どこか悲しいような、寂しいような、そんな思いを抱いてしまいました。皆さんを待たせているのでしたね。急がないと。

「うーん……」

わたしは水着と思われる数着の衣類を物色します。どれも若干の埃を被ってこそいますが、穴が開いていたり、ボロボロになっていたりと様子はありません。

「これにしましょう。なんだか盗むように申し訳ないですが……」

わたしはぼそりと呟いて、一着の水着を取りました。濃い緑色のワンピース型。腰の辺りには可愛らしいフリルの長めのスカートがあり、そこにはパークの各所で見かけてきた「の」をかたどったモチーフが白抜きでちりばめられています。サイズがわたしにあっているように思われたのもありますけれど（おんなのこ用Mサイズと書かれています）デザインが可愛らしいというのもありました。

「ちよつと失礼して……」

わたしは部屋の隅っこに移動し、着替えます。見た目通り、シンプルな構造でしたので、時間は然程必要ありませんでした。

「ちよつとゆるいような……?」

ですがこれよりも小さいサイズとなると、見たところ本当に小さい子供向けのようで、わたしの体系には適していないようです……ふと思っただんですけど、この水着、イエイヌさんだとキツいんですよ、背丈は同じくらいなのに……なんだか悔しいような情け無いような……。着替えは終わりました。帽子とリボンは置いて行ったほうがよさそうですね……さて、表に出しましょう。部屋を出ようと思いい、入り口に視線を向けます。するとひとつの絵が目に入りました。

「この絵は……」

浜辺から一望した海の光景の絵でした。

わたしのスケッチブックと同じくらいの、然程大きくは無いものにしたけれど、窓から差し込む光で照らし出されているかの様に輝いていた所為か、わたしの興味がいついっさい惹かれてしまいました。

絵の左端から海原を抱え込むように伸びる丘があり、その丘には陰

になっていてはつきりとはわかりませんが、建物の輪郭がぼんやりと描かれていて、その隣には光を受けてはつきりと描かれた灯台とがあります。絵の色合いからするとお昼時でしょうか？ 全体的に明るい色調でしたけれど、そこに生き物の姿はありません。海は少しだけ白く波が立っていますけれど、強調されているように感じるのは、その波の——いいえ、灯台も含めた——影。それは絵の左半分を薄く広く覆っていました。わたしの胸中に浮かんできたのは、悲しみのような思いです。

もしかしたら、わたしの心の奥底の不安だとか、この建物に感じる郷愁のような感情が、そう思わせているのかもしれないけれど……。眺めていると、悲しみとも寂しさとも虚しさとも付かない、不思議な感情を抱かせる絵でした。

「つと、遅れちゃう遅れちゃう……」

この絵をじっくりと眺めるのは後にしましょう。少なくとも今日一日はここに滞在することになるでしょうね。後ろ髪を引かれるような思いを抱きながら、わたしは建物を後にします。

強い日差しに目をくらませながら、肌を焼くような暑さを感じる表に出ます。すると、はしやぐ皆の声が聞こえました……うーん？ 先程よりも声が増えているような……？

駆け足になりながら先程のところまで行くと、フレンズさんがもうひとりやって来ていました。つやつやとした長い黒髪で、丈の短い空色のパーカーを着ていて、裾から伸びる細い腕は黒い手袋のようなもので覆われています。その子はバンドウイルカさんと一緒になってイエイヌさんに泳ぎを教えていました。

「速く泳ぐには、こうだよ、こう！」

バンドウイルカさんがはそう言うのと水面下でふよふよと動く陰が見えます。……多分尻尾を動かしているのでしょうか。

「こ、こうですか……？」

多分……イエイヌさんも尻尾を動かしているのでしょう……。

「うーん、泳ぎ方を教えるなら浅瀬に行った方が良さと思うんだけど……」

後姿でしたけれど、首をかしげている様子です。

「お待たせしました、皆さん」

皆さんの視線がわたしに集中します。何とか頑張って尻尾を動かしているんでしょうね。眉間に皺を寄せてイエイヌさんは言いました。

「おかえりなさい、ともえさん」

「おかえりー。不思議なおヨウフク？　だねえ……アシカちゃんの毛皮みたいなき感じ」

笑顔で答えてくれるイエイヌさんとバンドウイルカさん。やっぱり、彼女達からしてみたら、洋服という概念は違和感があるんでしょうか……。

「あら、どうも初めまして。カリフォルニアアシカよ。よろしくお願ひしますね……フォルカでいいわよ」

器用にくるりとターンして、こちらに振り返ってそういった彼女は、首を軽く動かして挨拶をしてくれました。お腹よりも下は海面よりも下なので良くわかりませんが、先程見えた水色の丈の短い半袖のパーカーの下に黒地のインナーを着ているのがわかります。髪の毛は真っ黒でしたけれど、バンドウイルカさんと同じように光沢が目立ちました。彼女は黒縁の眼鏡を掛けていて、その弦のところからはひと房ずつ灰色の髪の毛が飛び出しています。

「よろしくお願ひします、フォルカさん。わたしはともえです」
わたしはしゃがんで挨拶をしました。

「……あなた、私みたいな姿なのね。陸の生き物でしょう？」
そういうフォルカさんに、バンドウイルカさんが答えます。
「アシカちゃん。ともえちゃんは、ええつとー……おヨウフク？　着替えるんだって」

その言葉を聴いて眉間に皺を寄せるフォルカさん。ですが、彼女の表情はどこか興味深げなものに惹かれるように見えます。

「へえ……不思議ねえ。ともえさん、よろしければ後で詳しくお話しまししょう？」

「ええ、大丈夫ですよ」

わたしは頷きます。別段困ることでもありませんし、彼女達と楽しく過ごすことが出来るならそれが一番ですもの。

いつの間にかイエイヌさんはバンドウイルカさんの手を持ってぷかぷかと浮いています。

「さあー、ともえさん、どぼんとー！」

楽しげにそういうイエイヌさんですけど、やっぱり躊躇してしまっています。

「そうは言われても……わたし、泳げるんですかね……？」

「大丈夫大丈夫！ 私達が支えてあげるから！」

「そうそう、安心して」

バンドウイルカさんとフォルカさんがそう言ってくれていますし……飛び込むのはちよつと怖いですけど、ゆつくりなら、うん……。栈橋に腰をつけてゆつくりと足を水面に伸ばします。

「ひゃっー！」

温度が想像していたよりも低く、驚いてしまいました。とはいえ、これで躊躇っついてはダメでしょう。ゆつくり、ゆつくりと足を伸ばします。

「……えいっ」

もう足が限界というところで意を決して身体を投げ出します。身体は海に吸い寄せられるように落ち、すぐさまどぼんという音が聞こえて、すぐに壁を一枚隔てたようなくぐもった、ごぼごぼという泡の弾ける音が聞こえてきます。全身はひんやりと冷たい海水に包まれてびつくりしていますし、「どうやって浮くのか」という根本的な疑問も沸き起ります。わたしは怖くて目が開けられませんし、ただただどうしたら良いのだろうか？ という困惑の思いに囚われてしまいます。ですが、パニックに囚われるよりも先に、すぐに誰かの優しい手に引かれ身体を支えられます。

「ぷはあっ……いー！」

わたしが顔を海面から出すと、皆さんが一斉にわたしに声をかけます。

「大丈夫ですか？ 水とか飲み込んだりしてませんか？ ともえさん

！」

「ね！ 楽しいでしょ？ ともえちゃん！ 手持っててあげるから、泳いでみよう？」

「やっぱり陸の生き物なのねえ……泳げそう？ 無理そうなら教えてあげるわ」

一辺に話しかけられてしまい、困惑してしまいました。わたしは口に少しだけ入った海水の塩気に顔をしかめながらも、ひとつずつ、答ええていくことにしました。

「イエイヌさん、心配してくれてありがとうございます。ちよつと口に入っちゃいましたけれど、大丈夫ですよ」

わたしの言葉を聴いたイエイヌさんはほうと安堵の息をつきます。

「楽しいかと言われると……ごめんなさい、ちよつとわからないです」
その言葉を聴いてバンドウイルカさんはどこか悲しげな表情になりました。

「ですけど、楽しさを教えてもらってもいいですか？ わたし、頑張りますので……！」

「うん！ 任せて！」

バンドウイルカさんはぱあつと花が咲いたような満面の笑みです。

「だから、フォルカさん。まずは浮き方……？ から教えてもらってもいいですか？」

「ええ、いいわよ。そうしたら、浅瀬に行きましょうか。足が付いた方が安心でしょう？」

わたしは彼女の提案にはいと答えます。わたしはフォルカさんに引っ張られるようにして移動します。イエイヌさんも、バンドウイルカさんも一緒です。

「そういえば……」

わたしの声にフォルカさんが振り返ります。

「ん？ どうかした？」

「ありがとうございます、フォルカさん。ずっと支えてくれて……」

フォルカさんは、そつと微笑んで言いました。

「ふふっ、どうぞ致しまして、ともえさん。でも練習は厳しく行くわよ

？」

思わず「ええっ」と声に出てしまいます。フォルカさんは先程よりも少し大きく笑って、「冗談」と付け加えました。とりあえず、一安心……なのでしようけれど、今、わたしは、足をばたばたとバンドウイールカさんやフォルカさんの真似をして動かしているだけなのですが、それでも足に疲労が貯まっているのがわかります。となると、泳ぎの練習は結構大変なのは……？ 体力づくりと受け入れて、頑張りましょう、わたし。

わたしはバンドウイールカさんに手を引いてもらいながら、フォルカさんに簡単に泳ぎを教えてもらいました。イエイヌさんもフォルカさんやバンドウイールカさんから簡単なアドバイスを貰ったりしながらわたしの横を泳いだり、少し遠くまで泳いでみたり、はたまたぶかぶか浮いてみたりと悠々と過ごしています。

やはり、というべきでしょう。幾らか時間が経つ内にわたしの身体は疲労を訴えます。わたしはバンドウイールカさん、フォルカさんから離れて休憩を取らせていただきました。砂浜の、波打ち際に腰掛けます。

「ふう……」

わたしが息をつくとき、ちょうどイエイヌさんがわたしを追いかけるように浜辺に戻ってくるころでした。彼女は「よいしょ」と呟いて、わたしの右隣に座り込みます。足だけ波に触れるようなくらいの位置に座るからか、波に巻き上げられた砂が足の裏をくすぐり、少しばかりこそばゆく感じます。

「楽しいですね、海って……疲れますけど……。ね、イエイヌさん」
ほへえという具合に脱力した顔のイエイヌさんは、そのままの表情でこちらを見て、答えます。

「はい！ 私は、多分、泳ぐのは得意じゃないですけど、ぶかぶか浮いたりしてるのってけっこう楽しいです！ それに……ともえさんが楽しそうにしているのが一番わたしは嬉しいんです！」

くすりと笑ってわたしは答えます。

「そんなこと言われても……困っちゃいますね、ふうっ」

えへへと照れるように頭を搔くイエイヌさん。お互い、疲れからか口数は多くなく、わたし達の間には少しばかりの静寂が訪れます。波の音と風の音。沖合いからは、楽しげな笑い声。声の主たちはといえ、バンドウイルカさんとフォルカさん。浜辺から少し離れたところで何処からか持ち出したボールを使つて遊んでいます。海の上だというのに右に左に前に後ろに、自由自在にボールが絶えず行き交うその光景は驚嘆以外の何物でも無いでしょう。楽しげに遊んでいる彼女達の姿をぼんやりと見てみると、不意にわたしの右肩にこつんという可愛らしい重さを感じます。

「ふふっ……イエイヌさんったら……」

遊びつかれたのか、彼女は眠ってしまったていました。膝を抱えるようにして座り、頭をわたしの肩に乗せる彼女の姿はなんとも可愛らしいのですが、ちよつとした悪戯心——魔が刺すというやつでしょう——がわたしの心に沸き起こります。

「……」

わたしは彼女を起こさないようにそつと左腕だけ動かして彼女の右頬をもにゆりつつまみます。

「ううん……」

痛くしないように、起こさないように、そつと彼女の頬をもにゆにもにゆ弄つていると、何故だか物足りないような気持ちになつてきます。ですけれど、寝苦しげな表情になるイエイヌさんを見ると、段々と眠っている彼女の邪魔をしてしまうのが申し訳ないという感情が勝つてきます。

わたしは彼女の頬に添えられた手を離し、視線を海に戻します。陽射しはまだ強いものの、だいぶ傾いてきました。もう少ししたら、空は茜色に染まるのでしようね。今晚はあの建物で休ませていただくとしましようか……。

少しすると、ボールを抱えたバンドウイルカさんと長い黒髪を整えるフォルカさんが浜辺に向つて歩いてきています。わたしは口元に指を当て、彼女達に静かにとジエスチャーをお願いします。彼女達もどうやら察してくれたようでくすりと微笑んで、わたしと同じよう

にジエスチャーをします。

ちらりと視線を動かすと、灯台の影の掛かり方と湾の形がちょうど『あの絵』に似ているということに気付きました。

「あれ……？ あの絵って……ここ……」

わたしの呟きを聞き取ったのか、バンドウイルカさんは不思議そうな顔をします。

「絵？ どうかしたの？」

わたしは彼女たちに事情を説明します。わたしが着替えをした建物の中に小さな絵があったこと、その絵がここから見た光景を描いたのではないかと感じたこと。

「そんな絵があったんだあ……アシカちゃんは知ってる？」

フォルカさんは頷いていいいます。

「あそこでしょう？ 知ってはいるけど、しつかり見たことは無かったわね……」

一緒に行つて見てみましょうとフォルカさんは提案します。わたしは頷いて、そつとイエイヌさんを揺り起こします。

「むにゃ……ふわあ……ごめんなさい、寝ちやつて……どうかしました？」

「イエイヌさん、起こしてすぐで申し訳ないんですけど——」

わたし達はイエイヌさんに事情を説明し、建物の中へと入っていきましました。

「これです」

わたしは指を指して言います。

「ともえさんの言うとおり、あそこの景色だと思えます……」

イエイヌさんは眠たげな目を擦りながら言います。バンドウイルカさん、フォルカさんもイエイヌさんの言葉に賛同します。

「ふむ……」

改めてじっくりと『絵』を眺めます。夕方に差し掛かっているとはいえ、太陽はまだ部屋を明るく照らしています。お昼に見たときと同じ、悲しげな印象を覚えるのですけれど、陽射しが赤味がかっているからか、その印象をわたしはより強く感じます。

「綺麗な絵だねえ……描いたひとは、きっと海が好きなんだろうね。綺麗に切り取ったみたい……」

バンドウイルカさんがそつと呟きます。

「あら？ あなたはそう思うの？ 海が好きそうなのは同感だけれど、わたしは何だか作者の『理想の海』を描いてるように感じるわ」
フォルカさんは考え込むように、顎に手をあてて呟きます。その様子を見て、イエイヌさんはわたしに尋ねます。

「ともえさんは、どう感じるんですか？」

わたしは、彼女達と違った感情を抱いています。だからでしょうが、少し感想を口にするのが躊躇われましたが、そつと口に出します。
「わたしは……悲しい絵だなって思いました」

わたし達の間には流れる疑問のような感情は益々濃くなっていきます。その空気を察してか、それとも無意識にか、それはわかりませんが、イエイヌさんが口を開きます。

「答えて……あるんですかね？」

言い終わって、どこかハツという顔をするイエイヌさん。各々が考えていたのを邪魔をってしまったと思ったのでしょうか？

「多分、イエイヌさんの言うとおりですよ」

わたしは続けて言います。

『答えなんて無い、あるとしたら、きつとわたし達の考えたこと……』

イエイヌさんがわたしをじつと見つめて言います。

「何か思い出したんですか？」

わたしは首を振って答えます。

「ふつと言葉が思い浮かんだだけです。そこまででは……」

バンドウイルカさん、フォルカさんも不思議そうな顔をしてわたしを見ましたけれど、口を開くことはありませんでした。不思議な沈黙が、室内に立ち込めます。何かを口にするのが躊躇われるような風にも思われましたし、何かを喋るよりも考えていたいという思いを共通して抱いているようにも思われました。少しして、バンドウイルカさんが口を開きます。

「そういう、こと……なのかなあ？」

「多分……描いた人に聞かないとわからないでしょうねえ……」

わたしの言葉は身も蓋も無いように思われましたけれど、きつと事実でしょう。

「どうしようも無い……わよねえ……」

フォルカさんも諦めたように呟きました。

不思議な沈黙の中わたしは、わたしの抱いた感情を、思いを、形にして残したいという思いを抱きました。この絵に対して、自分なりの答えを描きたい……わたしにはそれくらいしか出来ないから……。

差し込む日差しが白色を帯びたものから朱色に変わるころ、わたし達は解散ということになりました。わたし達は建物から出て、挨拶を交わします。

「ねえ、ともえ。何時頃出発するのかしら？」

フォルカさんの質問に、わたしは唸りながら答えます。

「うーん、明日にでもと思っていたんですけど……ちよつと予定が変わりそうですね」

イエイヌさんは不思議そうにわたしに尋ねます。

「あれ？　どうかしたんですか？」

「いえ、ちよつとここに残る理由が出来たので。時間はそんなにかからないと思いますが……一日くらい余計に掛かってしまうかもしれません。ごめんなさい、イエイヌさん」

イエイヌさんは首を振ります。

「いえいえ！　ともえさんと一緒に居られるなら何時までもどこまででも、です！」

ありがとうございます、イエイヌさん。彼女の言葉を聴いて、バンドウイルカさんは楽しげに笑って言います。

「じゃあ、明日も遊ぼうね！　イエイヌちゃん！　ともえちゃん！」

「ええ、喜んで」

続けてフォルカさんも、少しだけバンドウイルカさんを嗜めるような口調で言いました。

「もう！　ドルカとだけじゃなくて、私も忘れないでちょうだい。約

東、忘れちゃダメよ？」

わたしは笑顔で「はい」と返事をします。

手を振りながら彼女達は各々のナワバリへと帰っていきます。砂浜を歩く音と、またねと交し合う言葉。どこか心地の良い感情がわたしの胸を満たします。そうして、間もなく彼女達の姿は見えなくなりました。

「さて、と……まずは着替えますか……ちょっと失礼しますね、イエイヌさん」

「はい！ わかりました！ ここで待ってますね」

今日と明日の朝の分のご飯は鞆に入っていますので心配はありませんし、今晚過ごす場所も、この建物を使わせてもらえる以上、改めて探す必要ありません。ひとまずのところは安心して過ごすことが出来そうです。

後は……贅沢を言うようですけれど、身体に付いた海水や汗、砂の汚れなどを落とすためにも、水浴びをしたいということでしょう？ この後軽く散策を試みましょう。

着替え終わって戻ってみると、やはり疲れが抜けていないのか、イエイヌさんは座り込んで壁にもたれかかって眠っています。わたしも彼女と同じように、全身が心地よいくらいの疲労を訴えていますし、少しくらい寝てしまっても……とはいえ、水浴び……うーん、ちよつとだけ、ええ、ちよつとだけです。すぐに起きられるでしょう。そう信じましょう……。わたしはイエイヌさんの隣に腰掛けて、壁に寄りかかって瞳を閉じました。気温は暑いくらいでしたけれど、イエイヌさんの体温はどうしてか不快ではありません。すうすうと規則正しく聞こえる彼女の寝息は、抗いようのない眠りをわたしにもたらそうとするようにさえ思えます。三十分、三十分だけ……仮眠です、仮眠……

「ううん……」

目を擦りながら目を覚ますと、もう既に部屋は真つ暗でした。窓から差し込む星の煌きは、優しげなものでしたし、風の音なども無く、外は正に穏やかそのもの。ですけれど、わたしの胸中は寝すぎてしまったことへの焦りにも似た後悔の思いで満たされています。

「はあ……そんな気はしてましたけど……」

うーんと伸びをして、視線を動かすと、イエイヌさんはわたしの隣で横になって眠っています。彼女を起こすのはやはり何処か申し訳ないような気がします。わたしはそつと彼女の隣から抜け出し、外の風に当たろうと表に出ます。そつと扉を開けると、眠りに付く前とは装いの変わった夜の海辺の景色が目飛び込んできます。しんとした浜辺には、本当に誰も居らず、昼間の喧騒が遠い世界のようにさえ思えました。

「うわ……髪がきしきしする……」

わたしは自分の髪の毛を軽く手で漉きます。不快というと少し言いきりかもしませんが、慣れない感覚のために、何処か、冷たくても良いので真水を使える場所が無いかと思つてきよきよと周囲を見回します。すると浜辺の端の方に、何やら人工的な光が見えました。

「行ってみますか……」

ゆつくりと歩みを進めると、そこには簡素な電灯と、それに照らされる大きな看板。看板の塗装は剥げ落ちていますが、辛うじて『ヤワー』という文字と『ご利用ください』の小さな文字列が見て取れました。

恐らく、ここは嘗ては海水浴場か、それに類する場所だったのでしよう。『パーク』と呼ばれるこの場所の役割として、レジャー施設としての要素が多分に含まれていたことを察せさせます。看板の裏側には多少古ぼけているように見えますが、シャワーが三機ほどありました。半ば個室のように区切られていますが、入り口のところはカー

テンや扉などはなく、あけすけになっています。

元々水着を着たまま浴びるための施設なのか、それとも劣化でなくなったのか、それはわかりませんが……

「また水着に着替えるというのは……となると……ここを、裸で……裸で？」

わたしはぼそりと呟いてしまいました。利用できるかどうか、という問題ではありますが、何よりもこんなに開けたところで裸になるというのは躊躇われます。

「……つと、先に使えるかどうかを……」

わたしはシャワーから出てくるであろう水が掛からないように注意しながららんを捻ります。すると無事に水が出て、暫くすると、少し温いお湯が始めます。

「うん、これくらいなら……」

温かく気持ち良いとはいえませんが、目的には十分でしょう。となると、問題になるのはここを裸で利用することが出来るかどうか……。わたしは悩んでしまいますけれども、他に方法ありませんしね……。ちよつと人としての尊厳のようなものに反する気もしてしまいますけれど……。セルリアンのような危機は少なく、加えて、周囲にフレンズさん達の気配も感じません。

「いったん戻って支度をしましょう……」

わたしは建物に戻り、タオルと肌着、それとお借りした水着を取りに戻ります。

夜空にはぼんやりと浮かぶ月と星。夏のように暑い天気だからでしょうか？ どこか霞みやもやがかかったように浮かぶその光をゆっくりと這うように浮かぶ雲が遮ります。

「ほんとうに、きれい……」

思わず呟きました。それと同時に、何と比較して綺麗なのか、という疑問も同時に沸き起こります。幾度も考えて、それでも答えの出ないその間に直面するたび、やはり自分の無力感に苛まれるように感じます。そんなことを一瞬でも忘れさせてしまうような優しくも厳しく、雄大で広大な自然の美しさや愛おしさを同時に抱きます。

わたしの過去がわかった時、たとえそれが望まないものだったとしても、今、わたしが感じてわたしが考えてわたしが出した答えは、きつとわたしだけのもの。それを証明してくれる存在だって、居るのです。

それはイエイヌさんだけじゃありません。今まで出会ってきたフレンズの皆さんだってそうです。わたしはそうだと信じます。

あまりに広い自然の中にあつて、あまりに小さなつなかりを強く感じる、そういうことつて、きつと記憶をなくしたわたしだからこそ感じられることなのでしょうか？

建物の扉をそつと開き、忍び足で中に入ります。部屋は灯りをつけていないから薄暗くはありましたが、大分暗闇に目が慣れたのか、どこかに身体をぶつけることも無く進むことが出来ました。イエイヌさんは変わらず安心しきつたように眠っています。よほど疲れていたのでしょうか。仰向けになって足を広げて眠っています。わたしはイエイヌさんの傍らにしゃがみ込み、そつとささやきます。

「スカートの中、見えちゃいますよ……？」 覗いちゃいますよ……？」わたしの言葉は届かなかつたようです。相変わらずイエイヌさんは熟睡しています。まあ、誰が見るといふワケでもありませんからね（わたしだって当然見ませんよ？ 冗談というやつです）、無理に起こして直すよりも、彼女の寝たいように眠っていることが一番なのでしょう。イエイヌさんの傍からそつと離れて、部屋の隅に置いている鞆と、まだ湿っている水着を手に取り、部屋を出ます。

そのままシャワーのところへ行き、わたしは良く周囲を見回して、誰も居ないことを確認してから服を脱ぎ始めます。からんを捻り、シャワーが温かくなるのを待つて、身体を流していると、ひとつ不思議なことに気付きました。

「爪……色が……？」

わたしの爪の色が緑色であるということ。それは慣れきつてしまった現実として既に受け入れていたことです。時折青色に近づいたりもするので、色に変化するということも、もう気にしなくなっていましたけれど……今のわたしの爪の色は肌色、或いは桃色と呼んだ

ほうが良いだろう色。つまりはイエイヌさんや他のフレンズさん達、わたしの中の常識にある『ヒト』という存在にとつての普通の、常識的な色なのです。

「どう……したんでしよう……？」

わたしの体調の良し悪しや疲労の具合などとも関連しているような気がするのですけれど……確かに今日は大変疲れはしましたが……具合が悪いということでは無いのは自分が良くわかっています。「うーん……？」

考えても解決しない問題なのでしようけれど……いったい……？

自分の身体に起こった不思議に悩みこそしましたが、シャワーを浴び終わったわたしは、身体を拭う前に水着と衣類を水ですすぎ、絞ります。水着を借りた以上、きれいにしておかなくて返すというのは礼儀でしょうし、衣類全般もどこかで軽く洗っておかないと汚れてしまいますからね。水を絞り終えた衣類を水の当たらないところにかけて、髪の毛と身体を拭います。

「あー……そうかあ……」

髪の毛が乾くまでは起きていなくてはならないという事実気付いたわたしは思わずぼやいてしまいます。シャワーを浴びてしゃっきりしたからか、眠気はそこまでありませんけれど……少し残念というか、眠らずに色々済ませてしまつていれば……とつい思つてしまいます。まあ、今更悩んでいても仕方ありません。海の夜風に佇むというのも、中々素敵に感じますしね。

わたしは肌着だけ身につけて、建物に戻ります。もう一着くらいシャツとズボンを持つてくるべきだったのでしようけれど、鞆に入らなかったなので仕方ありません。キャミソールとパンツという本当にひと前に出てはいけなような格好です。本当に……本当にフレンズさん達がいらつしやらなくて良かった……。

わたしは建物の中にあるハンガーを借りて衣類を乾かします。男性用の水着をかけているハンガーに洗濯ばさみがくっついていたのは幸いでしよう。これで肌着やズボンも乾かすことが出来ます。本当に幸運だといえるでしょう。不意に部屋の片隅に扉があることに

気付きます。

「ここに……扉……倉庫……う」

建物自体、横幅も縦幅も十数歩程度の空間です。この狭さですし、この建物がかつて何らかのお店であったことを考えると、倉庫の可能性が高いでしょう。

扉の近くにスイッチがあり、それをぱちりと押すと、扉の向こうで電気が点きます。中の確認がてら、扉を開きます。鍵は掛かっていませんでした。

案の定、中は倉庫のように雑多に物が積まれている小さな空間でした。それこそわたしが寝転がる事が出来ないくらいの狭さです。

「けほっ……埃っぽい……」

少しだけ咳き込みながら、倉庫の中を見回します。中には特段変わったものはありませんでした。表に置かれている物の予備、と言ったところでしょうか。ビニール袋に入った数着の水着と、何らかのおもちやが並んでいました。

ふうんという具合にわたしは鼻を鳴らします。想像通りでつまらないという少しばかりわがままでしょうか？ ……と、部屋の片隅に置かれたてらとした光沢を持つ布袋がふたつ、目に入ります。薄い緑色と薄い桃色の袋は触つてみるとほわほわとしていますし、袋の口はきつく封がされていますが、開くことは容易そうでした。

「何でしょう、これ……。ん？ メモ……？」

手に持って見回してみると、その袋には小さなメモのような紙片がテープで貼り付けてありました。妙に固くなっているそのテープは、経過した時間を物語るように、触るとすぐにぼろりと崩れてメモと一緒に床に落ちてしまいました。

「ええつと……ふふつ……」

メモを手を取ってみてみると、ちよつとしたお小言が書かれています。

『遠坂博士へ よく来ていただけなのは結構ですけど、ここをキャンプにしないで下さい。商品もあるんですからね！ 寝袋を置く余裕なんてありませんよ！ 追伸、娘さんと来るからと言いつても無

駄です！ ご自宅に置いてください！』

とはいえ、怒った様な内容の割りに、妙に丸っこい文字ですし、何故だか怒っている印象もありません。

「結局取りに来なかったのか、それともそれでも置いていたのか……どっちなんでしょう……」

かつて人が居た頃の名残。それはどこかわたしに取って『面白い』ものでした。この遠坂という方がどのような人物であったのかはわかりませんが、結構わがままな方だったんでしょね、それをこのお店の人に怒られてしまった……もしかしたら、この桃色の方の袋は娘さんのものなのでしょう。大きさは変わらないように見えますけれど……。わたしは袋の口を開き、中から布の塊をひっぱり出して広げます。すると、その塊は、筒状になっているお布団のようにふわふわとしたひとつの袋になりました。

「寝袋……？」

要するにこれはメモにあった寝袋というヤツなのでしょう。それにしても、どうしましょう、これ……戻しても、誰も使わないような気もしますし……この寝袋はわたしとイエイ又さんに取って間違いない『役に立つ』ものです。正直な気持ちを言ってしまうと、お借りしたいのですけれど、誰かのものを盗むという行為とほぼ同じ行為になりかねません。

それはどうしてもしてはいけない行為です……水着のときのようにならぬにすぐ返すということも出来ません……明日の朝にもイエイ又さんに聞いてみましょう。イエイ又さんに聞いてみて、そうして決めればわたしのこのもやもやとした気持ちも解決するのでしょうか？ ともかく外に出て、髪を乾かしましょう……。

外に出て、昼間、バンドウイルカさんとお話していた栈橋に腰掛けます。優しく吹く風を全身で浴びながら夜の海を眺めます。静かに耳に響く波の音。風の音。昼間の喧騒は何処へ行ってしまったのかと思えてくるくらいの、静寂。わたしの頭に『あの絵』のことが思い浮かびます。あの絵は、きつと、海が好きな人が描いたものなのは間違いありません。バンドウイルカさんも、フォルカさんも、そう感じ

ていたようですし、わたしも同じ考えです。ですけれど、問題はその先。綺麗な絵であることは事実ですし、もしかしたら理想を描いたのも事実かもしれません。わたしがあの絵に抱いたものは、そういった感覚よりもは寂しさ。誰も居ない、何も居ない、静かな昼下がりの海。季節はわかりませんが、でも、あの場所に……いいえ、この場所に、フレンズさんもヒトも居ないなんていうことは、きつとありえないでしょう。

真夜中でしたらともかく、嘗てであればヒトとフレンズの皆さんが過ごしていた筈ですし、今でさえフレンズさんが思い思いに過ごしているはずなのです。

「わたしは……あの絵を描いた人に、何を言いたいんでしょう……？」
「ここは楽しいところだよと伝えたいのでしょうか？ それとも、皆が居るよ！ と伝えたいのでしょうか？ どちらも違う気がしますし、どちらも正しい気がします。うーん……不意にわたしは声をかけられます。」

「ともえさん、どうしたんですか？」

「ひゃああつー！」

思わず身体が跳ね上がります。わたし、今、凄いカツコを……

「あ、ああ、イエイヌさんですか……どうしたんですか？」

眠たそうな半目のイエイヌさんが、のそりのそりとこちらに歩いてきて、わたしの隣に腰掛けます。

「部屋に居なかったので、不安で……みつかって、よかったです……」

ふああと欠伸をして、イエイヌさんはわたしの太ももの上に頭を乗せます。

「中で寝ないんですか？」

わたしの質問に、イエイヌさんは「ひんやり……」とぼそりと呟いて、すぐに眠ってしまいました。呆れ半分、愛おしさ半分の不思議な溜息が思わず出てしまいます。

「まったく、イエイヌさんったら……」

わたしはイエイヌさんの頭を撫でながら、再び思考に没頭します。わたしがあの絵に何と答えるのか……いいえ、何と答えるのか

……。

暫く考えているうちに、髪は十分に乾いてしまいました。少しばかりしっとりしているところもありますが、寝転がっても支障はなさそうです。まだ答えは出ていませんけれど、月の位置がかなり動いています。もう夜がかなり深いのでしよう。(日付が変わっているかもしれませんけれど……)今日のところは、寝るとしましうか。わたしは、イエイヌさんを揺り起こして、中に入るように促します。

「イエイヌさん、中に入りましょう？　ちよつとでいいから起きてください」

イエイヌさんは何やら言葉にならない音をいくつか発して、上半身を起こします。

「ともえちや……ふああ……ともえさんも……」

彼女はくいくいとわたしの手を引いて、促します。わたしはそれに答えるようにして、家の中に入ります。

「そんなに慌てなくても……足元気をつけてくださいね」

がちやりと扉を開き、中に入ります。イエイヌさんは先ほどまで眠っていた場所に帰り寝転がります。わたしもその隣に寝転がることにしました。ちよつと固いですし、床に直接というのも気が引けましたので、タオルを一枚折って枕の代わりにします。

「ふう……お休みなさい、イエイヌさん」

「ふあい……んうう……」

彼女はそう言ってわたしの腕に抱きつきまます。まったく甘えん坊さんなんですから……。少しばかり眠りづらいですけど、不思議と心地が悪いわけではありません。彼女からの好意を独占できるといふと意地悪な言い方ですけど、純粹に嬉しいんですもの。無力なわたしと一緒に旅をしてくれるイエイヌさんが、わたしの居場所なのかもしれない。ふとそう思いました。

そう思った途端に、わたしに天啓が訪れます。それを、描こう。忘れないように、思い浮かんだその考えをを頭に刻み付けるようにしっかりとイメージします。夜の浜辺、眠る彼女とそれを見守るわたし、居場所……ええ、忘れてはいけません。明日、描くんですから

……

まどろみの中、ぼんやりと考えます。わたしは、わたしはいつか、きつといつか、彼女に恩返しをしたい。その為にもまずは記憶を取り戻すこと。それが大切です。わたしが何者か、ということへの好奇心も間違いなくありますけれど、わたしに何が出来るのかという事実が、今、知りたいのです。わたしは、イエイヌさんに、いいえ、フレンドの皆さんに何が出来るのでしょうか……？　そうしてわたしは意識を手放します。甘く優しい眠りの中へ、溶けていったのでした。

太陽の光が差し込んできて目が覚めました。ううんと伸びをして、隣を見ると、一緒に眠っていた筈のイエイヌさんが居りません。

「……あれ？ どうしたんでしよう……」

きよろきよろと周囲を見回しましたが、イエイヌさんの痕跡も、何かの目印のようなものも見当たりません。書置きでも残してくれれば良いのでしょうけど、彼女に限らずフレンズさん達が文字を扱うところは見たことがありませんし……今度時間が出来たときにでも、簡単な文字……例えばひらがな等を教えたほうが良いのでしょうか？ ちよつと上から目線な気もしますけれど……こういうとき便利ですし……。

考えは後にして、とりあえず顔を洗いましょう……つと、その前に服を取り込んで着替えないとですね。昨晚のまま、殆ど裸で外をうろつくというのは流石によろしくないでしょう……。

着替え終わったわたしは、顔を洗うために表に出て、昨晚シャワーを浴びたところを目指し、歩き始めます。

「あつつい……まだ午前中ですよね……？」

思わずぼそりと呟いてしまいます。さんさんと照り輝く太陽はまだ天頂よりも下側にあつて、まだ早い時間であることがわかります。けれども、気温といい陽射しの強さといい、夏のような暑さ……ぼんやりと感じていたに過ぎないのですが、もしかして「ちほー」ごとに天気や季節、気候などは異なるのでしょうか？

イエイヌさんの『おうち』がある「ちほー」では暑くもなく寒くもなくという具合でしたし……イエイヌさんの言葉を信じるならば、季節や天候は固定されていないようでしたけれども……本当に不思議ですね、ジャパリパークという場所は……。

暫く歩くとシャワーのある場所につきました。顔を洗える場所があるかと思つて来たのですけれど……イエイヌさんの後姿がそこにはありました。

「おはようございませす、イエイヌさん」

シャワーの列の奥側に幾つか蛇口が据えられた場所があり、そこでイエイヌさんはばしゃばしゃと顔を洗っていました。わたしの声に、彼女は首をふるふると振ってから答えます。

「おはようございますー！　ともえさんー！」

わたしは彼女に「はい」とタオルを差し出し、受け取ってもらってから顔を洗い始めます。

「そういうえば、ともえさん、昨晚はどうしたんですか？」

イエイヌさんの問い掛けに、わたしは濡れた顔のまま答えます。

「ここでシャワー浴びたんです。髪がきしきししてましたし……汗もかきましたから……」

イエイヌさんはわたしにタオルを差し出しながら、答えます。

「ヒトって大変ですねえ……汚れたり、汗とか……フレんズは基本的にみんな放っておけば平気ですから」

わたしはタオルを受け取り、顔の水を拭いながら答えます。

「本当に、羨ましいですよ……」

タオルから顔を離し、イエイヌさんの方を見ると、いつもと変わらない可愛らしいお顔……日焼けとかするんでしょうか……？

「イエイヌさんは、日焼けつてします？」

わたしの問い掛けにきよんとした顔のイエイヌさん。

「日……焼け……？」

「太陽にずっと当たっていると、皮膚の色が変わっちゃうんですよ。少しの間、ですけどね……赤くなったり、茶色くなったり、それぞれですけど」

わたしの言葉を受けて、イエイヌさんはわたしの顔をじいっと見つめて言います。

「ともえさんも日焼けしてないじゃないですか……ほんとうですか？」

わたしは思わず、へ？　と声を上げてしまいます。袖を捲つてみたり、手のひらを見てみたりしても、何も変化はありません。見慣れた肌の色のままです。そういうえば昨晚シャワーを浴びたときも、ひりひりしたりなんかはなかったような……。わたしの中の常識が崩れてしまうような気がしてきました……。

「まったく、からかわないで下さいね、ともえさん」

非難気な顔ですけれど……本当なんですってば……。

わたしが説明しても何故だか妙に疑わしい顔のイエイヌさん。どう、説明すれば良いのでしょうか……？ わたしはイエイヌさんに色々説明してしまいましたけれども……彼女の表情は変わらないまま、建物へと戻ることになりました。

「……そこまで言うなら、きつと本当なんでしょうけれど……確かめてみないことには……」

「なんだかごめんなさい……とりあえず、ご飯にしましょう？」

建物の中に入ったわたし達は、適当な位置に腰掛けます。わたしは鞆の中からジャパリまんをふたつ取り出し、片方を彼女に渡します。イエイヌさんは表情を和らげ、袋を開き、ぱくりとジャパリまんを頬張ります。わたしもいただくとしましようか……。

「それで、今日はどうするんですか？」

食事がひと段落ついたころ、イエイヌさんがわたしに問いかけます。

「ええつと……そうですね、絵を、描こうと思います。あの絵に、わたしの前の答えを出したいんです」

眠る前に思い描いたイメージ……それを形にしたいのです。わたしの『あの絵』への答え……。あの絵を描いた方は、わたしの絵を見たときどう思ってくれるのでしょうか？ 叶わぬ夢でしょう。それでも、とってしまいます。

「なんで、そんな悲しい目をするんですか……？」

イエイヌさんが言いました。わたしにそんなつもりはないのに……少しばかりどぎまぎしてしまいます。

「そ、そうでしたか……？」

「はい……切なそう……って言うんですかね……？ そんな目です……」

わたしの目を覗き込むようにして、彼女は続けます。

「何か辛いことでもありましたか？ 嫌なこととか、怖い夢とか……」
彼女の瞳は妙に潤んでいて、彼女の瞳に映るわたしの姿をぼんやり

と見て取ることさえ出来ました。

「だ、大丈夫ですよ、イエイヌさん。何も、ええ、本当に何もありませんから……」

わたしは彼女の肩を掴んで言いました。

「……なら、いいですけど……居なくなったり、しないで下さいね……？」

彼女の顔は、もう涙が出そうなのではないかと思えるくらい、悲しげなものでした。耳だつてしゅんと垂れていますし、尻尾もきつとへにやりとしているのでしょうか。

「イエイヌさん？ ど、どうかしました……？ 大丈夫です。わたしがあなたから離れるなんてこと、きつと……いいえ、絶対にありえませんが」

絶対なんて無いなんて言葉が頭を過ぎりますけれど、こればかりはそうそうありえないように思います。わたしがイエイヌさんに頼らなければ生きていけないという現実的な問題もありますけれど、そういった冷酷で実利的で利己的な思考を除いても、わたしが彼女の元を離れるということは想像が出来ませんもの。

……というか、イエイヌさんはなんだかどこまでも追いかけてきそうな感じがします。ちよつとだけ、甘えちゃってますかね……？

「……って、きやつ」

イエイヌさんはわたしの胸に飛び込んで、顔をごしごしとこすり付けます。

「ど、どうしました……？」

わたしの問い掛けからほんの少しの間をおいて、彼女はわたしの胸元から顔を離して言います。

「これでおっけー、です！ におい、ちゃんと付けましたからね！」

あはは……そういうことですか……。濡れた瞳は変わらないように見えましたけれど、にっこりと微笑む彼女。

「大丈夫ですって……あ、そうです！ 聞こうと思っていたんですけれど——」

わたしはイエイヌさんに、昨晚見つけた寝袋の話をしします。現物を

持って来て、メモ書きのことも含めて……

「お借りしちゃっていいんじゃないですか？」

あっけらかんとした風のイエイ又さん。そのまま彼女は続けます。

「これ……使っていたのはヒトですよね？　でしたらともえさんだつて使つていいと思いますよ？　誰のものつていうのは、大事ですけど……どれくらいの間ここにあつたのかさえわからないですし……」
「なるほど……」

彼女の言葉は一理あります。ヒトのものだからヒトが使つても良いという考えは少し大雑把にも思えますが、どれほどの間ここに放置されていたのかということを考えると……悲しいですけど、本来の持ち主はきつと訪れないでしょう。

「おいとか、わかりますか？　何かヒントになればと思うんですけど……」

持ち主が居た場所がわかれば、簡単にメモを残して気持ちの整理も出来るのでは、という考えです。わたしの問い掛けを受けて、彼女は寝袋のにおいを嗅ぎましたけれど、間も無く、首を振りました。

「消えちゃってます。……このにおいじゃありません……」

「そう、ですか……」

わたしは再び考え込んでしまいます。そんな様子を見かねたのか、それとも単に思いついたからかはわかりませんが、イエイ又さんが言いました。

「旅が終わったら、また返しに来ましょう？　それまでお借りする、ということ……」

「確かにわたしもそう思いましたけれど……なんだか貰ってしまうように申し訳なくて……」

イエイ又さんは自分の考えを整理するようにゆっくりと口を開きます。

「私ともえさんが過ごしやすいのが一番ですし……何よりもその寝袋？　さんも使ってもらえないのが、一番可哀想だと思います……私はそう思うっただけなんですけれど……」

わたしは彼女の言葉に胸のしこりが取れたような思いを抱きます。

「イエイ又さんらしい、優しい考えですね……」

わたしは彼女の答えを待たず続けます。

「ええ、使わせてもらいましょう。旅が終わったら、返しに来る。そのつもりで」

わたしは「これからよろしくね」という思いを込めて、緑色の袋をぽんぽんと叩きます。その衝撃でか、埃が舞い散り、わたしとイエイ又さんはくちんとくしやみをしてしまいます。

気まずい沈黙がわたし達の間を訪れて、間も無くふたりして笑い始めてしまいました。

「まずは……干すところから始めましょうか……」

「そうですね……」

わたしは緑色を、イエイ又さんは桃色の袋を抱えて表に出るのでした。

○

「さて、と……描きますかあ……」

わたしは軽く伸びをして鞆からスケッチブックと色鉛筆を出して、浜辺に腰をおろします。

「あー……そういえばイエイ又さんはどうします?」

何の疑問も抱かず、当然のようにわたしの隣に座り込むイエイ又さんでしたけれど、結構な時間がかかってしまいそうな気がするので、彼女に確認をします。

「……? いつもものようにともえさんの絵を見ていようかな、と」

「うーん……もしかしたら、結構時間がかかってしまうかもなんですよ……予感なんですけどね……」

わたしの言葉にイエイ又さんは悩んだような表情をして言いました。

「そうですかあ……では……そうですね、どなたかいらっしやったら、その方達とご一緒させていただきませう。それまでは、えへへ、ともえさん、一緒に居ていいですよね?」

イエイ又さんははにかみながらわたしにそう言いました。

「はい、大丈夫ですよ」

わたしの言葉に彼女は嬉しそうに微笑みます。

わたしは彼女に微笑み返し、スケッチブックを開いて、ペンをとります。さて、『イメージを形にする』と言ってもそんなに簡単なことではありません。見えたありのままを描くのでさえ、どう描くのかというのが大きな問題になるのですしね……昨晩に思いついたその光景は夜のこの場所で、わたしとイエイヌさんが一緒に居る光景。眠る彼女をわたしがそつと見つめる……そんなものだった筈です。

どう描いたものか……浜辺に座っているほうが良いのでしょうか？ それとも昨晩と同じように棧橋？ 後姿を描くのでしょうか？ 前から？ 彼女の頭の位置は？ わたしの膝の上？ それとも肩の上？ 色はどうしましょうか？ 全体が暗い色になるのは当然ですけれど、ただ暗いだけではわたしの伝えたいことが表現できるとは思えません……どうにも悩みは尽きません。まるで迷路の中に閉じ込められたような気分になります。真っ白な紙を前にして、わたしは何も出来なくなってしまう。

「……ともえさん？」

イエイヌさんがわたしに声をかけます。

「……はっ、はい！ な、なんですか？」

わたしは余程集中していたのでしようね、ちよつとびっくりしてしまいました。

「ええつと……ともえさんは、そのう……何を描きたいんですか？ どんな絵にしたいのか、じゃなくて……その、どんな風に答えるのか、つてことなんですけれど……」

イエイヌさんは首を傾げるようにして、わたしの目を見つめて言いました。わたしは彼女の言葉に少しだけ悩んでしまいました。ゆつくりと答えます。

「あの絵は、わたしはとても寂しい絵だと思ったんです。だから、だから……ええつと……」

「……『……は寂しくない』と答えたいんですか？」

わたしは首を振ります。

「そう思ったこともありましたが、違うかなって……あの絵を描い

た人はきつとそれを知ってますから……わたしは……もしかしたら、そう……あつ！ わかりました！」

わたしは自分の中の考えは纏まりました。もしかしたら、わたしの言葉をイエイヌさんは理解していないかもしれないかもしれません。けれど……。

「イエイヌさん！ ありがとうございます！ お陰で、描けそうです！」

わたしの様子が変わったのを見て、驚いたような、ぼかんとしたような、そんな表情のイエイヌさん。ですけれど、わたしは構わず色鉛筆を持って、それをスケッチブックに走らせませす。彼女はすぐ隣に居るのに、どこか遠くでくすりと微笑むイエイヌさんの声が聞こえませす。

「頑張つてね、ともえちゃん」

それが呆れなのか、それとも賞賛なのか、わかりませせん。ですが、わたしは答えませす。

「うんー！」

それきり、周囲の音も、景色もまるでなくなつてしまひませす。そして、わたしの目の前には真っ白なスケッチブックがある。ですが、わたしの頭の中にはどう描けば良いかがうっすらとですけれど形になつて現れてひませす。目の前の海から、何を、どう描くのか、それはまだ悩まなくてはならないでしよう。ですけれど、きつと、絵は描けませす。そんな確信にも似た思ひさえひませす。

「ふう……」

わたしは伸びをしながら周囲を確認ひませす。どれくらい集中してひたのでしよう？ 下書きがてら薄く線を引き終わつたからというひもありませすが、それ以上に周囲の熱気ひために、わたしの作業の手は止まりました。

「イエイヌさんが居ませせんね……」

周囲を見回しても、彼女の姿は見つからませず、また、同じように昨日

のようなバンドウイルカさんやカリフォルニアアシカさんと言った、フレンズの皆さんの姿もありません。さざなみの音と、風の音。静かな自然にひとり。

何となく、あの絵を描いた方の気持ちもわかるような気がします。思えば、旅の初日はわたしひとりの時間も長かったですからね。その時に感じた思いが絵に込められていたと感じた『寂しさ』に繋がっているのかもしれない。

「……本当に寂しいですね、ひとりは……って、あら？」

わたし達が泊まった建物から、うんしようんしょという具合に、大きなものを持って、イエイヌさんとバンドウイルカさんが出てきます。わたしは手にしたスケッチブックと色鉛筆を浜辺に置き、彼女達に駆け寄ります。

「あー！ ともえちゃん！ こんにちは！ って、きやあつ……」

彼女は片手を小さく振って挨拶をしました。その拍子にバランスが崩れ、ゆらりと彼女達はよろけてしまいます。

「——つと……危ない危ない……。こんにちはは、バンドウイルカさん」
ちやうど駆け寄れる距離でしたから、良かったものの……。

「あはは……ごめんね、ともえちゃん」

「ともえさん、ありがとうございます」

いえいえと返事をして、わたしはバンドウイルカさんとイエイヌさんの間の部分に手を添えます。

「イエイヌさん、バンドウイルカさん。ところで、これは……？」

彼女達が運んでいたのは、寝袋が包まれている素材と同じような袋に包まれた長い棒。外見からは中身の想像がつきませんでした。

「これですか？ 多分……傘なのかと、そんな気がしまして……ともえさん、暑そうにしていますから、日よけになれば……」

よいせつと位置を調整するように、イエイヌさんは小さく動き、わたし達は歩き始めます。傘のサイズはふたりで持つには大きく、かといってわたしが加わるほどの大きさでもない微妙な大きさ……。わたしが小柄だからでしょうか？ とはいえ、先ほどのような出来事が起こりかねませんし、わたしだけ見ているのも、何だか申し訳ないで

すから……。

「お気遣いありがとうございます、イエイヌさん」

「いえいえ、私も暑かったですし、お気になさらず!」

気配りの出来る良い子ですこと……なんて、妙に上から目線な感情が沸き起こってきます。後で感謝の気持ちを込めて……何をしましょう? 頭を撫でたり、抱きしめたり……? さすがに暑くないですかね……?」

間も無くして、浜辺にひとつの花が咲きました。イエイヌさんが見立てのとおり、運んだ大きな棒はビーチパラソルと呼ぶに相応しいものでした。直立させたり固定することが出来ず、斜めに置く形になりましたが、パラソル自体に相応の重さがあるためか、風ではそうそう動かない、中々良い具合の影を作ってくれます。それもわたしとイエイヌさんがすっぽり納まるくらいの大大きさ。

「日陰だとやっぱり楽ですねえ……見つけてくれて助かりました……どこにあったんですか? これ……」

わたしは隣に腰掛けるイエイヌさんに問いかけます。

「あの建物の隅つこにありました! 水を汲みに行こうかな、と思っで一戻りしたんですけれど、そのときにお役に立てるものないかなあと思ひまして! お役に立てて何よりです!」

につこりと満面の笑みで答えるイエイヌさん。

「ひとりで持てないなあと思っ諦めていたんですけれど……水を汲みに行った時にバンドウイルカさんに会ったので、手伝ってもらったんです」

そう言われたバンドウイルカさんは、照れたような仕草をします。

「わたしからも、ありがとうございます、バンドウイルカさん」

「えへへ……どういたしまして! でも、あたしは大したこととして無いよ……? 持ってたけだしね」

少し間をおいて、思い出したようにイエイヌさんがわたしに水筒を差し出します。

「お水、飲んでください。体調崩しちやいますよっ!」

わたしはありがとうございますと答え、水筒に口をつけます。

「ともえちゃんといエイ又ちゃんは、今日は何をしてるの？」

バンドウイルカさんの質問に、いエイ又さんが代わりに答えてくれました。

「ともえさんは絵を描いてるんです！ 私はそれを隣で見させてもらってます！」

「絵……？ 凄いなえー……あたしは良くわからないけど、あそこにあつたのと同じようなのでしょ？」

間髪居れずにいエイ又さんが口を開きます。

「はい！ 凄いですよ！ 綺麗で上手で……とにかく凄いです！」

いエイ又さんはふっふーんという具合に胸を張って言いませたけれど、それを聞いたわたしはといえば、恥ずかしさやら驚きやらで口に含んだ水がへんな所に入ってむせてしまいます。

「あそこまで綺麗には描けませんし、そんなに上手でも無いですよ……わたしなりに、描きたいと思ったもの書いてるだけです……」

わたしは素直な思いを彼女達に告げましたけれど、どうやら聞く耳を持ってくれません。いエイ又さんに至ってはよっつも耳があるというのに……。

描けるだけでも凄いだとか、そんなことは無いだとか……そりゃあ悪い気はしませんけれども、それでも、あの絵の美しさだとか色の選び方だとか、感情の込め方だとか……絵を描く道具が違うのでしょうけれど、それを別にしても、わたしからしてみれば遠く及ばない絵画がそこにある以上、どこか後ろめたさのような、申し訳なさのような、そんな思いを抱いてしまいます。

「おだてたって、何も出ませんよ、まったくもう……」

顔の熱さに耐え切れず、俯きながらぼそりと呟きます。そんな様子を察してくれたのか、申し訳なさそうにいエイ又さんが言いました。「……その、上手いかどうかっていうのは私にはわかりませんが……その、ええっと……私は、ともえさんの絵が一番好きです」

その言葉は、多分、わたしに取って一番の褒め言葉だったのでしよう。

「……ありがとうね、イエイヌさん」

思わずわたしはイエイヌさんを抱きしめてしまいます。

「ど、どうしたんですか！　ともえさん！」

慌てふためく彼女の声を聞いて、わたしは身体を離します。

「ご、ごめんなさい……嬉しくて……」

今度こそ正しく恥ずかしさからイエイヌさんの顔を見られなかったのですけれど、唐突に後ろからとさりと衝撃が……

「あたしも、ぎゅーっ！」

バンドウイルカさんつたら……。ふと視線を戻すと、膨れっ面のイエイヌさん。どうしてあなたはそんな頬を膨らませているんですかね……わたしはぽかんとしてしまいました。それも本当に一瞬の間でした。イエイヌさんもバンドウイルカさんに張り合うようにわたしに抱きつきます。

「わ、私も……！」

「ちよ、ちよっと、あ、暑い、暑いですって！　み、みんな、はな、離れ……」

「あなた達……何やってるの……？」

わたし達は「ほえ？」という言葉が出てしまいそうなくらいな表情でフォルカさんを見返すことになるのでした。

「……つまり絵を褒められて嬉しくて抱きしめたら、いつの間にかおしくらまんじゅうになっていた、と……」

フォルカさんは呆れたように眩きましたけれど、彼女は微笑んでいて、わたしにはどこか羨ましげな視線にも見えました。

「まあ、そういうことですかね……あはは……」

わたしは照れながらというか恥ずかしがりながらというか……ともかく返事をします。少し離れたところから、バンドウイルカさんとイエイヌさんがはしゃぐ声が聞こえます。波打ち際で、どうやら砂遊びをしているようです。見たところ、小さな山を作ってトンネルを開

通させようとしているのでしょうか？

「にぎやかねえ、本当に……」

くつくつと笑いそうなくらい愉快そうに呟くフォルカさん。

「……そうなんですか？ いつもこんな感じなのかと」

「それでも無いわよ？ 元々ここはフレンズの数は少ないそうだし……他のところは知らないけどね。まあ、後はマルカ……ええつとマイルカが良く来るかしら」

指を顎に当てて、ぼんやりと考えながら、彼女は呟きました。

「そんなことより！」

「は、はいっ！」

フォルカさんが突然大きな声を出したので少し驚いてしまいました。一体何事でしょう？

「貴方のこと、教えてちょうだい？ 見たことないフレンズだし、そっちの方がずっと面白いわ」

瞳をきらきらさせながら言われてしまうと、少し尻込みしてしまいます。

「ええつと……」期待に沿えるかわかりませんが——

わたしはバンドウイルカさんに話したことと同じ事を、彼女に改めて伝えます。何回目かのこの話も、さすがに慣れてきたのか、すらすらと彼女に伝えることができました。

暫くして、ゆっくり彼女は口を開きます。

「こんなこと聞くのも失礼かもしれないけれど……イエイヌと一緒に『お家』で暮らすのはダメだったの？」

わたしが何度も考えてきたことです。その答えは極めてシンプルです。

「わたしは、わたしのことが知りたいんです。何が出来て、何が出来ないのか。そうしないと、あの子に恩返しできないんですもの……それと、パークのいろんなフレンズさんに会ってみたいっていうのも……」

わたしの言葉に納得したのか、それともしてないのか、それは少しわかりかねますけれど、フォルカさんはふうと溜息をついて言いま

す。

「記憶が無いって大変ねえ……そうだわ、私に手伝えること、あるかしら？」

彼女の言葉にわたしは首を振って答えます。どうやらイエイヌさんたちの作っていた砂山が波に飲まれてしまったようで、残念がる声が聞こえてきました。

「一緒に過ごしてくれただけで十分です。泳ぎ方も、教えていただけましたし」

わたしの言葉に、フォルカさんは「そんなことか？」と不思議そうな顔をして呟きましたが、少し間をおいて、わたしに言いました。

「それなら、いいわ。ふふつ、頑張ってるね、ともえ。応援してるわよ」
「ええ、頑張ります」

わたしは笑って返します。

「さーて、私は泳ごうかしら……」

彼女はそつと立ち上がって、お尻の砂を払い落とし、伸びをします。
「絵、出来上がったから見せてちょうだいね、行ってくるわ」

フォルカさんは左手を振って海へと走っていきました……のですが、すぐに戻ってきました。

「どうしました？」

「忘れてたわ……。ともえ、傘？ の後ろの方にジャパリまんがあるの、あげるわ。差し入れよ、差し入れ」

「あ、ありがとうございます！」

わたしは座ったままなので頭だけぺこりとお辞儀をして答えます。

「いいのいいの、話のお礼。じゃ、今度こそ行ってくるわね！」

再び波打ち際に向き直り、彼女は駆けて行きました。わたしはそつと彼女の姿を見送り呟きます。

「わたしも、続きをやっちゃいますか」

再びスケッチブック広げ、色鉛筆を手に取ります。海辺では「泳ぐわよー！」と大きな声で楽しげに話すフォルカさんの声と、「おー！」と応じるバンドウイルカさんの声。控え目ですけど「私も……」と続くイエイヌさんの声。この光景は、きつとかけがえの無いものなの

でしょう。わたしが独り占めしてしまうのが惜しいくらいですね。

段々と陽射しが傾き始め、夕方の入り口とも呼べるような時間になった頃。絵が出来上がりました。イエイヌさん達はといえば、遊び疲れてしまったのか、わたしから少し離れたところにある木陰で、横になって眠っていました。気付かなかったわたしもわたしですけれど、浜辺で横になるというのも中々大胆というか野生的というか……まあ、多くのフレンズさん達は布団やベッドなんかは使わないようですしねえ……慣れているのか平気なのか、それともそもそも気にしないのか……。

可愛らしい彼女達の寝顔を見ると、起こすのがどうにも躊躇われます。わたしは寝ている人を起こすのが苦手なのでしようかね、なんて妙なことを考えてしまいます。

「ふむん……でしたら……」

もう一枚、絵を描きましょう。

わたしは描き上げた絵のページを捲り、次の真っ白なページに向き合います。今度は簡単です。描くものは決まっていますから。思い出であり、大切な光景ですしね。忘れたくないものをこうして描くときは、決まって手が早く動いてくれるのは幸いです。

絵が書き終わった頃には空はもう真っ赤に染まっていて、西の空は少しばかり紫色にさえなっています。流星に起こしたほうが良いでしょう。

「起きてください、イエイヌさん、バンドウイルカさん、フォルカさん」
声をかけてもむにやむにやもにゆもにゆという言葉にならない言葉が返ってくるばかり。余程安心しているのか、それとも疲れているのか……わたしは罪悪感をぐつと堪えて、イエイヌさんを揺り起こします。

「起きてくださいってば、イエイヌさん。夜になっちゃいますよ?」

「ん……んう? う、ん……ん?」

何故疑問系……。耳を少しぴくりと動かしませんでしたけれど、彼女の目は開かないまま、再び眠り込んでしまいます。こういうときはどうし

たらしいでしょうか？ 少し考えて、決めました。

「イエイヌさん、ほら、ほっぺた、むにいつてしますよっ。」

素晴らしいながら彼女を揺り起こそうとすると、今度はきちんと起きてくれました。

「ふああ……おはようございませす……。」

余程困ってしまうのでしょうか……？

妙に訝しげな顔で起き上がり、イエイヌさんは周囲を見回します。

「う……ん……寝ちやってたんですね……私……。」

「アレだけはしゃいでればそりゃあ疲れますもの、仕方ないですよ、イエイヌさん」

イエイヌさんはバツの悪そうな顔を浮かべていました。

間もなく、バンドウイルカさんとフォルカさんも話し声の為か目を覚ましたようです。

「ふわあ……あたし寝ちやってたかあ……ひとりにしちゃってごめんね、ともえちゃん」

眠そうに目を擦るバンドウイルカさん。

「うーんっ……ちよつと張り切り過ぎちゃったかしら……？」

伸びをしながらフォルカさんが呟きます。

「わたしもわたしですつと絵に集中しちゃってましたから……皆さん気になさらず……。」

「あつ！ そうだわ、絵よ！絵！」

わたしの言葉を聞いて、フォルカさんが大事なことを思い出したような声色でわたしに言います。

「どう？ 完成したの？」

期待の色が彼女の顔から見て取れました。わたしは困ったような顔をしてしまいます。というのも期待が重過ぎるのです。いえ、悪いことでは無いのです。嬉しい気持ちも確かにあるのですけれど、彼女のお眼鏡にかなうでしょうか？

「い、一応、書きあげましたけど……こ、これです……。」

わたしが絵を差し出すと、フォルカさんはそつとスケッチブックを手に持って、じっくりと眺め始めます。その様子を見て、バンドウイ

ルカさん、イエイヌさんもスケッチブックを覗き込みました。

「ちよつと、アシカちゃん！ 見えない見えないー！」

「……お、押さないで下さ……わふっ……」

見かねて思わず口を開きます。

「じゅ、順番に……それか少し離れてみていただくか……」

彼女はわたしの注意を受けて、申し訳なさそうな表情をして、もう一度、みんなで絵を眺め始めます。

「……不思議な絵、ですね……夜の海、ですか？」

最初に口を開いたのは、イエイヌさんでした。わたしはイエイヌさんの言葉に頷いて、口を開きます。

「はい、夜の海です……不思議、ですか……」

わたしは、そう言われるだろうと思っていました。もしかしたら、それを願ってすらいいたかもしれません。わたしの言葉に不思議そうな顔をするイエイヌさん。ふーむと考え込むように、再び黙りこくつてしまいました。

「優しい絵、だと思うけど……なんだろう、ちよつとわかんないかな……」

バンドウイルカさんが次に口を開きました。

「ありがとうございます。解説は、その、恥ずかしいというか野暮というか……なので、わたしは何も言いません」

わたしは続けて言います。

「でも、優しい絵になるようにしたのは、本当です……えへへ、こそばゆいですね……」

自分の描いた絵を他の方に見せることは、初めてではありません。それこそ、イエイヌさんに何度も見せています。ですけど、今回初めて「伝えたいこと」を込めた絵を描いたのは事実です。だからこそ、なのででしょうか？ 今までに絵を誰かに見せたときよりもずっとずっと、誇らしいような、恥ずかしいような……。

「あの絵と違って、うん、なんだか、ずっと優しいと思うわ。上手いか下手かって言うのは、私にはわからないけど……」

彼女達の言葉は、本当に、本当にわたしにはくすぐったくて、嬉し

くて……。

「あと、もう一枚描きました。こっちは、風景の絵……ですかね……」
わたしは彼女達にスケッチブックを一枚捲るように促します。

「これって……」

最初に気付いたのは、フォルカさんでした。

「私が海に出たときの景色？」

わたしは「はい」と頷きます。もう一枚の絵。それはフォルカさんがわたしと話をして、その後すぐに、彼女達が海へと泳ぎに向うその瞬間を描いた絵でした。なんてことの無い一瞬の光景でしたけれど、わたしはその瞬間を描きたいと思ったのです。

「えっ？ どの時どの時？」

バンドウイルカさんが不思議そうにフォルカさんに尋ねます。

「ドルカ、あなたねえ……もうちよつと周りを見てなさいよ……」

フォルカさんは少し呆れたような口調でしたけれど、にこやかな表情でバンドウイルカさんに説明をしています。

「ともえさん、二枚も描いたんですか？」

彼女はわたしの顔をじつと見て言いました。

「はい。あっちの絵は、その、大変でしたけれど……こっちは絵はその時の光景を、ありのままに写しただけなので……」

「やっぱりともえさんは凄いですね……」

感心したように呟いたイエイヌさん。

「いいえ、わたしひとりだったら、きつと夜の海の絵の方は、きつと描けなかったと思います。イエイヌさんが一緒に居てくれるからこそ、あれは描くことが出来たんです」

旅に出た最初の日。その時に描いた絵だってもちろんあります。ですけれど、夜の海の絵はきつと描けなかつたでしょう。『あの絵』に対する答えがイエイヌさんのお陰で見つかったというのもありますけれど、きつと、わたしは『あの絵』から感じ取った寂しさや悲しさに飲み込まれてしまっていたかもしれません。

「そんな……ともえさんが、凄いですよ」

イエイヌさんは少しだけ頬を赤らめて、わたしに言いました。その

言葉にわたしは「イエイヌさんのお陰です」と答え、その言葉にイエイヌさんは「いえいえいえ」と答え――

「はーい、ストップ」

手をぱちんと叩いて、フォルカさんが呆れたように、ですけれど少し面白がるような表情で言いました。

「チワゲンカはなんとかって言うじゃないの、もう」

わたしとイエイヌさんは、揃って「はは……」という具合に苦笑いをしてしまいます。

「失礼しました、フォルカさん」

「いいのよ、見てるとなんだか微笑ましいもの」

そう……なんですかね……？

「バンドウイルカさんも、ごめんなさい……」

わたしに続いてイエイヌさんがそつと頭を下げます。

「んー？ ぜんぜん気にして無いよー」

バンドウイルカさんは間延びした声で暢気そうに答えます。

「ドルカは気にしてなさすぎな気もするわよ……？」

フォルカさんの言葉に首をかしげるバンドウイルカさんでしたけれど、わたしもそんな気がしてきました。とはいえ、そうだと口にする訳にも……

「ともえ、あなたもそう思わない？」

フォルカさんの言葉に、わたしは二度目になる苦笑を浮かべるのでした。

「えっ！ ともえちゃんもそう思うの？」

バンドウイルカさんが不満げに頬を膨らませてこちらを見ます。困ったわたしはイエイヌさんの方にちらりと視線を動かしました。イエイヌさん。ちよつと、どうして目を逸らすんですか。わたし達の言外のやり取りを見て、ふたつの笑い声が起こります。

「えっ、え？ な、なんで笑うんですかあ……もう……」

バンドウイルカさんとフォルカさんの笑い声に釣られて、イエイヌさんまで笑い始めました。わたしだって、つい、笑い始めてしまいます。仕方ない、ですよ。ふふっ。

そうやってわいわいと話をしている内に、燃える様な夕焼け空は、燃える炎が消え去ってしまつたかのように静かで落ち着いた、寂寥感すら覚えさせる夜空になります。

「あら、もう夜じゃないの……」

「帰ろっか、アシカちゃん」

フォルカさんとバンドウイルカさんの言葉を皮切りに、めいめいに帰る準備を始めます。と言つても、彼女達に荷物は無く、わたしが使わせていただいていた傘を畳んだり、鞆に荷物をつめなおしたりと、わたしの手伝いをしてくれていたのですけれど……。

「二日間も、ありがとうございます、バンドウイルカさん、フォルカさん」

わたしはお辞儀をして、彼女達に感謝の意を示します。

「私からも、ありがとうございますましたー！」

イエイヌさんも続きます。そんなわたし達の様子を見て、バンドウイルカさんとフォルカさんが口を開きます。

「ごちらこそ、よ。面白い話も聞けたし、綺麗な絵も見られたしね」

「そうそう！ あたしだって、一緒に遊べて楽しかったよ！ また、今度遊ぼうね！」

薄暗い夜空の中でしたけれど、彼女達の笑顔ははつきりと見えました。

「ありがとうございます！ 多分、またここに来ると思います。旅が終わったらすけけれど……その時、また遊びましょうね、バンドウイルカさん」

バンドウイルカさんは「うん！」と可愛らしい声で答えてくれました。かたや、フォルカさんは楽しそうな表情になってわたしに尋ねます。

「そうなの？ じゃあまたお話しましょう？ 他のちほーの話とか、あなたのたびの話とか……また聞かせてちょうだい？ トクベツな

ジャパリまんを用意して待ってるから！」

「そんなそんな……お気遣いなんて……。でも、はい！ わたしも楽しみにしてますね！」

不意にイエイヌさんが口を開きます。

「そうだ、ともえさん。明日はいつ頃出発するんですか？」

「そうですねえ……お昼前くらいには出発しようかと思いますが……休憩は多目に取りようかと思えますから、到着は遅くなるかも……次は、さばんなちほーですからね、暑そうですね！」

「アルマーとセンに会いに行くんでしょう？ サバンナで面白いことがあるかもしれないわよ？ 急いだろうがいいかもね」

フォルカさんが言いました。

「……う？ どういうことですか？」

わたしは聞き返します。『面白いこと』というのがなんとも不思議ですし、それに『急いだろうがいい』というのも……

「ドルカは忘れてたみたいだけど——」

フォルカさんは横目でバンドウイルカさんをちらりと見ます。

「——うんどうかい？ だったかしら、そんな催しがあるらしいのよ。私達は海から離れるだけで結構大変だから断ったのだけど……残念だわ……」

心底残念そうに言うフォルカさん。

「そうそう！ 思い出した思い出した！ うんどーかい！」

バンドウイルカさんは本当に忘れてたんですね……。「あなたねえ……」と咎める風のフォルカさんの横目に、わたしはふと思いつきます。

「でしたら、フォルカさんにお話するためにもちやんと見ないとですね……」

フォルカさんは申し訳なさそうに笑い声を漏らします。

「あはは……そういうつもりで言ったのではないのよ？ でも楽しみにしてるわ」

「あたしも楽しみにしてるからね！」

バンドウイルカさんもフォルカさんに同調するように言い、続けま

す。

「イエイヌちゃんも、ともえちゃんも、何か出てみればいいんじゃない？ 確か……ええっと……飛込み参加も出来るって言ってた気がするし！ そっちの方が楽しいよ！」

イエイヌさんはバンドウイルカさんの勧めに困った風な反応をします。

「私は……いいですかね……うーん、体力に自身が無い訳では無いですけど、ともえさんをひとりにさせちゃいますし……」

判断基準がそこなんですネ……気にしなくても平気ですのに……。「わたしも……うーん……フレンズの皆さんと競えるような気がしません……」

ヒトは、恐らく多くの場合、フレンズの皆さんには身体能力の面で勝てないでしょう。いえ、勝てる要素もきつとあるのでしようけれど、こと『運動会』に限ってしまえば、まず勝ち目は……。わたし自身が運動を得意としていないというのも大きいですけど。

「そっかあ……」

バンドウイルカさんは少し残念そうにしました。フォルカさんが少ししてから、思い出すようにいいいます。

「確か……ええっと……しゅもく？ は色々あるそうだから、行ってみてから決めればいいんじゃないかしら？ 一応、始まるまではあと何日かあるらしいし……迷うだけの時間はあると思うわ」

「そうですかあ……うーん、ともえさん。もしよければ、かけっこくらいは……いいですか？」

じいっとわたしの目をみて言うイエイヌさん。そんな顔しなくても良いでしょうに……。

「言われるまでもありませんよ。遠慮せず、参加できそうなのがあったらどうぞ楽しんできてください。イエイヌさんの活躍を見守りますからね！」

イエイヌさんの顔がぱあっと晴れるように変化します。彼女がどんな動きをして、どれくらいのものがあるのか、というのも好奇心がそそられますし、断る理由なんてありませんよ、イエイヌさん。

「んーっ……もういい時間ね。私達は帰るとするわ」

伸びをしながらフォルカさんが言います。

「だねー、じゃあ、また今度ね、ともえちゃん！ イエイヌちゃん！」
バンドウイルカさんはフォルカさんの言葉に頷きました。そのま
ま、彼女達は手を振って振り向き、歩き始めます。

「はい！ また今度！」

わたし達も手を振って答えます。

「そうだ、ともえ、イエイヌ。明日早めにここに来るわね、お見送りす
るわ」

顔だけこちらを振り向いて、フォルカさんが言います。厚意に甘え
させていただけとしましょう。今日これでお別れというのも寂しい
ですし、道案内もしてもらえれば助かることは間違いありませんから
ね。

「わかりました！ よろしくお願いしますね」

そうして、彼女達は帰って行きました。

「さて、と」

バンドウイルカさん、フォルカさんの姿が見えなくなってから、わ
たしはイエイヌさんに尋ねます。

「建物に戻ってご飯にしましょう？」

イエイヌさんは「はい！」と頷き、続けて提案します。

「その後なんですけど……お散歩しませんか？ 結局、昨日は寝
ちゃってこの辺りを探索できていませんし……ともえさんがシャ
ワーを浴びるんでしたら、一緒にさせてもらいたいですし……」

お散歩……確かにわたし達が見たのはうみべちほーの中でもこの
辺りだけ。それではあまりに勿体無いですからね。

「いいですよ、余り遠くにはいけないでしょうけれど……どっちに行
くかは、後で決めましょうか。それとシャワーは……うーん……とに
かく戻りましょうか」

わたしはそう言って、傘を持ちます。イエイヌさんが畳まれた傘の
一端を持ってくれました。

「ありがとうございます、イエイヌさん」

彼女はいえいえと答えました。わたし達はそうして建物へと戻ったのでした。

夕食を終えて、少しばかり休んでから、わたし達は建物を出ます。「じゃああっちの方に行きますか」

食事中に話をした結果、旅の目的地であるさばんなちほーとは反対の方向へと向うことになりました。というのも、さばんなちほーへの方向であれば明日から再会する旅の間に見ることが出来るためです。

「はいー」

イエイ又さんはぐっぐつと簡単に身体を伸ばすように動かしします。

「ともえさんともえさんー！」

わたしの腕を掴んでイエイ又さんが楽しげに言います。

「ちよつと走つても良いですか？」

わくわくと期待に胸を躍らせているような表情。彼女の背後からは、ぶんぶんと振られている尻尾がちらりちらりと視界に入ってきてきます

「ええ、大丈夫ですよ。あ、でもあんまり遠くには行かないで下さいね？ わたし、迷子になっちゃうかもですし」

イエイ又さんはわたしの言葉を聴いて、待ちきれなかったのでしょう。ぴゅんと駆け出しました。

「……かけつこの話を聞いたから、なんですかねえ……」

元気が良いことは何よりも良いことでしょう。特に、このパークでは。

「待つてくださーい、イエイ又さーん！」

もうあんなに遠くに……早歩きになりながら、わたしは彼女の後を追います。

彼女の後を追うように歩きながら、わたしの胸の中に思い起こされるのは、今日描いた絵のことでした。

描かれた空は星々の輝きがまるで無いように、暗く、黒く、海原も、大地も同じ。まるで全てがない交ぜになったようにさえ感じてしまう暗さです。濃紺や黒色（もちろん、色鉛筆ですので、淡い色合いになつてしまいますけれども）が中心に描いた絵。ですが、絵の左半分

の側、空の低い位置に輝く細い下弦の月があります。月の放つ光は、その月の細さに反して強く、白いものです。

月光は海と、画面右端に腰掛けるふたつのひと影を照らします。まるで道のように海にひとつの帯を浮かばせていて、ふたつのひと影は逆光で黒く塗りつぶされています。そのふたつの影からは、きつと何の感情も受け取ることとは出来ないでしょう。どちらの影が誰なのか、もうひとつの影は誰なのか、それは描いた本人であるわたし以外にわからないでしょうけれど、言ってしまうえばそれは『誰でも良い』のです。

わたしの『居場所』……このパークに、今、わたしの居場所はありません。

生まれた故郷も、かつて住んでいたであろうここでないどこかにあるかもしれない家も、無いでしょう。住むことの出来る『場所』はきつと見つけれられると思います。ですけど、そこがわたし本来の『居場所』なのかといわれると疑問です。わたしが『居ても良い場所』……そこはもしかしたら記憶を取り戻して初めて判る場所かもしれないん。

では、「記憶の無いわたし」が居ても良い場所は……？ それを、この絵に表しました。

ふたつのひと影に、わたしは意味を込めませんでした。誰でも良いのです。この絵を見た方が、このひと影に何を写すのか、わたしは求めません。わたしの知らない誰かと誰かでも、その方の友達、家族、愛する存在……。どんなに「寂しい場所」でも「誰かが居る」ということ、それが「居場所」なのだ、伝えたいのです。

これが『あの絵』から受け取った寂しさに対する、わたしなりの答えです。わたしに取っての『居場所』、それはあの子が認め、許してくれるあの子の隣です。

何故……？ わたしの命を救ってくれたから？ あの子がわたしを慕ってくれているから？ わたしがあの子を家族だと信じているから？どれもそうでしょうし、それだけでは無いかもしれません。ですが、今のわたしにあの子の隣という場所以外に、わたしが居ても

良い場所を想像できませんし、したくありません。

だからこそ、わたしの居る場所を、誰かが居てもいい場所を、描いたのです。

「ふう、追いつきました……」

追いついたわたしの言葉に、にっこりと楽しげに笑ってイエイヌさんが言います。

「遅いですよー！　ともえさんー！」

そう言って、彼女は再び駆け出しました。

「ちよ、ちよつと、イエイヌさん？」

わたしも仕方なく駆け足になって彼女のあとを追います。わたしが追いつくよりもずっと早く彼女は立ち止まり、わたしの方を見ました。尻尾が本当に楽しげにゆれていて、暗い中でもはつきりと彼女が楽しんでいるのがわかります。わたしは少しだけ速度を上げて走ります。波の音や風の音、砂浜を踏みしめる音が、一歩だけ遠くになつたように感じます。

イエイヌさんに少しして追いつきました。

「はあ、はあ……あ、歩きましたようっ！」

わたしは急に走ったからか、すこし息が上がってしまいます。

「はい！　でしたら……手を……」

彼女はそう言ってそつと手を差し出します。

「ええ、わかりました」

彼女の手は、走ったために体温が上がっていたのでしよう。いつもよりも少し温かく感じました。

わたしの思い、あの子の隣に居たいという思いは、きつと絵を見た方には届かないでしょう。けれど、わたしは、あの絵を描いた方にも、この絵を見る方にも、伝えたいのです。孤独であると感じても、きつと、きつと誰かがあなたの隣に居てくれるのだということ。寂しさの中にある優しきやつながりはきつとあるのだ、ということ。

この思いは、あの絵を描いた人には、きつと届かないでしょう。そう考えると、寂しいような、悲しいような感情が込み上げてきて、みぞおちの辺りがきゆうとなってしまいます。

手を繋ぎながら、浜辺を歩きます。寄せては返す波の音を楽しみ、日中はあんなに暑く眩しかった浜辺が、命を失ってしまったかのよう
に冷たく、暗いという事実思いを馳せ、優しげに吹く湿った風に髪
をなびかせ、月と星の煌きを全身に浴びながら、歩きます。わたしと
イエイ又さんの間には、心地よささえ感じる静寂が訪れていました。
話すことが無い訳では無いのに、話さないという贅沢を、きつとお互
い楽しんでるのだと思います。

不意にイエイ又さんが口を開きます。

「ねえ、ともえさん。あの海の絵って、名前とかあるんですか？」

彼女の質問にわたしは戸惑ってしまいました。

「ええっと……どうして、そう思ったんですか？」

なぜなら、その質問は、わたしにとつて答えることがなんだか躊躇
われる間だったからです。イエイ又さんは少し悩んでから答えます。

「うーん……絵の右下の、ひと影の下のところに、見たことの無い文字
が書いてあったので……『ともえ』って文字しか、わたしはわかりま
せんけど……それとも違いましたから……」

本当に、妙な所で聡いですね、イエイ又さんは……。

「……ええ、ありますよ。絵の名前」

なんだかもう、無性に恥ずかしくて、わたしは彼女の方を見られま
せん。

「良ければ、そのう……教えてもらっても……？」

少し悩んで、わたしは答えます。

「その、ええっと、うーん……直接は、恥ずかしいので……代わりに、
文字を教える、ということでもいいですかね……」

かなり遠まわしな教え方ですけど、本当に直接伝えるのは恥ずか
しいのです。だって、彼女へ抱くわたしの感情が、あまりにも明らか
になってしまふんですもの。

「……良いですけど……文字がわかればともえさんのお役に立てるか
も思っていましたから……」

釈然としない風のイエイ又さんですけど、ごめんなさい……ほ
んつとうに恥ずかしいんです。

「わたしも知らない漢字とかもありますから……ひらがなとカタカナだけになっちゃうかもですけど、ごめんなさい」

わたしの言葉にイエイヌさんは首を振ります。

「いえ、教えてもらえるだけでありがたいです！ 帰ったら教えてくださいね！」

「ええ、楽しみにしててくださいね」

くすりと微笑んで、少しだけ考えます。

『あの子という海』だなんて、わたしの感情があげすけになってしまふの、明白じゃないですか。イエイヌさんが、これを読んだとき、どんな風を感じるのでしょうか？ わたしは恥ずかしくて顔が熱くなってしまうのでしょうか。まるで今のようにな。

そのまま歩き続けます。まだ戻るには早いですからね。

のんびりと歩いていると、どこか遠くから声が聞こえました。声、というよりも、歌声というのが正しいのでしょうか。しっかりとした音とその動き。歌詞のようなものはありませんけれど、確かにそれは歌でした。鼻歌やハミングや、そう呼ばれるような歌。ですけれど、心地よくも郷愁に似た感情を思い起こさせる歌。

「ねえ、ともえさん。聞こえますか？」

イエイヌさんがこちらを向いて尋ねました。

「ええ……小さな音ですけれど……どなたでしょう？ バンドウイルカさんやフォルカさんの声でも無いのですし……」

どちらかといえば、多分バンドウイルカさんの声に似ているのかもしれません。

「お邪魔しない程度に、行ってみますか？」

わたしの間にイエイヌさんは「はい！」と頷きます。浜辺から外れて、階段を上がり、土道に。そのまま、岬の方へとわたし達は歩いていくのでした。

間も無くわたし達は岬に着きました。草の生えていない露出した岩肌にそびえ立つ灯台と、それに寄り添うように立つ建物。その裏側から歌声が聞こえてきます。

今、気付いたのですけれど、この『歌』は同じ箇所を何回も何回も繰り返しているようです。歌声の主がうろ覚えの鼻歌を繰り返しているのか、それとも繰り返しが続く歌なのか……それは定かではありません。けれども、聞き覚えのある箇所が幾度目か、わたしの耳に響いていました。

ひとけのまるで無い岬に、綺麗な、透き通るような声に乗せられて、どこか懐かしいような、切ないような、そんな気持ちにさせてしまう歌が、響いています。

灯台も建物も灯りが点いておらず、あたりは月明かりに照らされるばかり。歌声の主を驚かせないようにそつとそつと歩くと、建物や灯台の外壁の汚れが目に入ってきます。窓ガラスの類も、打ち付けるように吹く潮風の為かなんだか埃っぽいようです。

そつと建物の後ろを覗き込むと、歌声の主の後ろ姿を見ることが出来ました。

彼女は崖に腰掛けて、ずつと海の遠くか、それとも空かはわかりませんが、遠くを眺めているように顔を真正面へと向けていました。月明かりを反射して白く優しく光る髪の毛や、時折ぱたりと動く滑らかな尻尾。服装は薄暗いので色合いは良くわかりませんが、ワンピースを着ています。なんとなく、ですけどもバンドウイルカさんに似た声と外見。ですが声の具合や、纏う雰囲気から彼女ではなさそうだとはつきりとわかりました。

その光景の美しさに見惚れるように、わたしはじいっと彼女の後ろ姿を見つめていました。イエイヌさんも、息を潜めるようにして、物音ひとつ立てません。ちらりと後ろを見てみると、イエイヌさんの表情はなんともいえない、眉間に皺のよった表情で何か考えている風です。何か思うところでもあったのか、それとも歌に聞き入っているの

か……。

「……どなた？」

歌を止め、彼女はわたし達に問いかけます。

「さっきから見てたみたいだけど……」

訝しげな顔で彼女はそつと振り向きました。少しばかり警戒心の籠った声に、わたしは少し怯んでしまいます。

「あつ、あの、ごめんなさい……綺麗で、つい……」

わたしの言葉に続いて、イエイヌさんも彼女に謝罪の言葉をかけます。謝罪の言葉か、それとも綺麗だという純粋な褒め言葉に気を良くしたのか、それはわかりませんが、彼女は警戒を解き、人懐っこい笑顔を浮かべます。

「ううん、ぜんぜんへーきだよつ。不思議に思っただけなの」

彼女は笑顔でわたし達の言葉に答え、こちらに歩み寄ります。

「あたしは、マイルカつ、よろしくね」

そう言っただけで彼女はぺこりとお辞儀をしました。彼女の首から、月光を受けて銀色に輝くアクセサリのようなものがちらりと見えました。

「わたしはともえです。こちらはイエイヌさん。こちらこそよろしくお願ひします」

わたし達も彼女に返すようにお辞儀をします。マイルカさんといえば、何度かフォルカさんから名前を聞いていたような……イエイヌさんも同じ事を考えていたようで、彼女がぼそりと呟きます。

「そういえば、フォルカさんからお名前だけ聞いたことが……」

イエイヌさんの言葉にマイルカさんは手をぱちんと叩いて嬉しそうな声を上げます。

「ほんとつ？ アシカちゃんのお友達ってことは、バンドウイルカのことでも知ってるの？」

わたし達はこくりと頷きます。ますます彼女は楽しげに微笑みま

す。

「そつかあ……ちよつと遠出してたからなあ……みんな元気？」

遠出していた……というのはどういうことでしょう？ それはと

もかく、彼女の疑問に答えませんとね。

「ええ、みんな元気でした！　ともえさんも、私も、泳ぎ方を教わったりとか……」

イエイヌさんの言葉にマイルカさんはくすりと笑います。

「みんな世話焼きなんだから……じゃあ、変わりないんだね、良いこと良いこと。うんうん」

腕を組んで頷く彼女にわたしはつい、尋ねてしまいました。

「遠出って、何処に行ってたんですか？　それにどれくらい……」

「ええつとね、隣の島の近くの海までお散歩してたんだー。そしたら、偶然シナウスちゃんに会ってね！」

マイルカさんは楽しげな表情で続けます。彼女はそこでもてなされたことや、お話したことを楽しげに語ってくれました。わたし達は時折相槌を打ったり、驚いたり……。

「二、三日かな、お隣さんにお世話になってたのー。ついさつき帰ってきたんだけど、ここから離れることなんてそう無かったから……何か無かったかなあつて少し心配になっちゃった、えへへ」

そう言つて彼女は話がひと段落ついた様に、ふうと息を吐きました。

「島つて渡れたんですねえ……私初めて知りました……」

イエイヌさんがぼそりと呟きます。

「ねー、あたしも初めて知ったよー。みんなは島から出たら『戻っちゃう』って言つてたけど……」

初耳の情報です。

「そうなんですか？」

わたしの質問に、イエイヌさんとマイルカさんはふたりしてこくこくと頷きます。暫くわたし達は考え込んでいましたけれど、イエイヌさんが口を開きました。どうやら何か思いついたようです。

「多分、方向さえあつていれば……平気……なんでしょうか……？」

イエイヌさんの言葉を聞いて、マイルカさんが口を開きます。

「なんだろうねえ……別にダメって言われてるってワケでも無いし……」

わたしは自分の事をヒトであると認識していますし、島から出るつもりも、今のところはありせんから、わたし自身に何かの影響があるということも無いのでしようけれど……。目に見えない決まりごと、暗黙の了解……。そんなものがこの島……。というよりもパーク全体にあるのかもしれない。

「不思議ですねえ……」

わたしはぼつりと呟きます。

「そういえば……。話変わっちゃってごめんね。ともえちゃんって、ヒトなの？」

するりと何気なく尋ねられた言葉にわたしは違和感さえ抱かずに応じます。

「そうですけれど、どうかしました？」

ほへえという具合にマイルカさんは驚きます。

「お隣のお隣の島……。ええつとどこだっけな……。よくわからないんだけど、ヒトが居たんだってーそれってともえちゃんのこと？」

ヒトがいる。予想外のその言葉はわたしを呆然とさせるのに十分なものでした。

「……。へ？」

一方で、イエイヌさんが妙に驚いたような慌てたような表情になりました。

「マ、マイルカさん！ その方にお会いしたんですか？」

マイルカさんは首を振って答えました。

「あ、じゃあともえちゃんじゃ無いんだね……。ええつと、噂話だから会って無いよ？ 本当かどうか分からないしね……」

「そうですか……」

イエイヌさんはしゅんとした様子です。

「ともえさんのことが……。何かわかればと思っただんですけど……」
わたしは彼女の言葉のお陰で、どうにか意識を取り戻します。

「イエイヌさん、そんなことを……。なんだか申し訳ありません……」

その情報が事実なのか否か、それを確認する必要はあるでしょう。とはいえ、わたしやイエイヌさん……。というよりも、もはや『フレン

ズの皆さんに出来ること』の領分を越えているような気もします。

「大丈夫ですよ、他のヒトが居ようが居まいが、わたしはわたしですし……イエイ又さんも何も変わらないでしょう?」

わたしはそう言つて、励ますようにイエイ又さんの頭を撫でます。

「ともえさん……」

「それに……その方が本当に居て、お友達になれたら素敵ですけど、わたしのことがわかるかどうかなんて、それこそ本当にわかりませんよ?」

わたしはつとめて明るくイエイ又さんに告げます。

「そう……ですか……」

イエイ又さんはやっぱりどこか落ち込んでいる様子です。

「そ、そういえば、マイルカさん。話は変わるんですけど、質問してもいいですか?」

わたしは空気を変えようと思つて、マイルカさんに質問します。

「んー? なあに?」

「さつきまで歌つてた曲つて何なんですか? とても、綺麗な曲でしたけれど……」

わたしの質問にマイルカさんは困つたような表情をします。

「うーん……あつちでお泊りしてたときにね、一晩だけ流してくれたの。ナントカぷれーやー? とか言うのがまだ使えるんだつてー。曲の名前はあつちの子も知らなかったみたいだけど……」

単純な興味というのも大いにあります。けれど、どうしてでしょう? 何処か懐かしい気持ちになつたのです。わたしの過去に何か繋がっている、というのは樂觀に過ぎますが、わたしの抱いた感情の根っこを確かめたかったのです。

「あのう……」

イエイ又さんが、おずおずと口を開きます。

「ちよつと自信が無いんですけれど……その曲つて——」

そう言つて、彼女はマイルカさんがそうしていたように、歌の音程を口にします。可愛らしく優しいげなハミングが、控え目でしたけれど、響きました。

「——つて、続きませんでした?」

ほんの少しの旋律でしたけれど、わたしもマイルカさんも、イエイヌさんの歌に聞き入ってしまった。マイルカさんは満面の笑みで手をぱちぱちと叩いて言いました。

「そうそう! イエイヌちゃん、なんで知ってるの?」

マイルカさんの言葉に、イエイヌさんは戸惑いを隠せないようでした。

「なんで……ですかね……凄く懐かしいなあって思ったんですけど……何処で聞いたんだろう? つて考えていたら、マイルカさんの歌っている続きがぼんやり頭に浮かんで……」

イエイヌさんの抱える過去……フレンズになる前の記憶……?

「フレンズになる前に聞いたことがある、とかですかね?」

わたしが尋ねると、答えを迷うように、悩み、答えます。

「そう……なのかもしれませんけど……私も、何も覚えていないので……」

「そうですか……ごめんなさい、辛いことを聞いてしまつて……」

彼女が最初に望んだこと。来るかも判らない誰かを『あそこ』で待つこと。それが彼女をどれほど苦しめたのでしょうか? 想像することしか出来ませんし、その想像は間違っているかもしれない。ですすけれど……あまりにも悲しいと感じて仕方が無いのです。だからこそ、彼女がわたしの旅に同行してくれることが、嬉しいと感じるのでしょうか?

「……ねえ、イエイヌちゃん! 一緒に歌おう?」

わたし達の間立ち込めてしまった思い空気を払うように、提案します。

「うう……ちよつと自信が無いですけど……」

「イエイヌさん、わたしも、イエイヌさんの歌を、聞きたいです」

わたしはイエイヌさんの方を向いて、伝えました。

「そ、そういうなら……うう、笑わないで下さいよ……マイルカさんも、ともえさんも……」

わたしとマイルカさんは揃つて首を振りました。

ひと息置いて、先導するようにマイルカさんがハミングをし始めます。何度聞いても、綺麗な声。透き通るような旋律。出遅れてしまったイエイヌさんに、マイルカさんが微笑みながら、視線を送ります。その合図を受けて、イエイヌさんも歌い始めました。少し小さい声でしたけれど、可愛らしい、優しい声。マイルカさんがうろ覚えな箇所に入ると、控え目な声はそのままに、イエイヌさんが先導するように旋律を奏でます。その後を追うように、或いは、イエイヌさんに合わせるように、音を出すマイルカさん。

本当に、本当に少しの間の出来事です。時間にしておよそ数分と無いでしょう。その間中、わたしの心は震えていました。彼女達の歌声が綺麗で可愛らしく、優しいものだったからというのは単なるひとつの理由に過ぎません。彼女達が発するその『声』というモノが、それだけしかなくとも生み出せる、その響きと美しさと、非現実さに、わたしは震えていたのです。先ほどまで、この寂しげな岬にはほんの少しの風の音と、崖に打ち付ける波音しかなかったのに、突如として現れた、美しさのうねり、感情のうねり、音のうねり。それらにわたしは、心の奥底から打ち震えました。

わたしは思わず瞳を閉じて、聞き惚れていました。わたしがここで目覚めてから、これほどまでに、自然以外の何かの美しさに心を打たれたことは無かったかもしれません。

「……………えへへ、どうだった？　ともえちゃん！」

どちらとも無く、消えて行った歌声の後、マイルカさんが尋ねます。

「綺麗、でした……………」

わたしは彼女にお礼を告げて、手をぱちぱちと叩きます。気付けばわたしの頬には涙が零れていたようで、そっと拭ってから、言葉を続けました。

「綺麗で、優しく……………イエイヌさんもマイルカさんもお上手です……………」

わたしの言葉に照れたように頭を掻くマイルカさん。

「ありがとうね、ともえちゃん！」

えっへんという具合に胸を張ってマイルカさんは答えました。イ

イエイヌさんとはといえば、顔を俯かせて、何故だか震えています。

「イエイヌさん……？　どうかしました？」

「な、なんだか……顔を上げられない、です……」

はい？　どういうことでしょうか……。

「……？　ど、どういう……？　綺麗で可愛いらしい素敵な歌でし——」

わたしはそつとイエイヌさんに近寄り、頭を撫でようと思いましたけれど、それは出来ませんでした。とさりとイエイヌさんがわたしの身体に襲い掛かるように覆いかぶさり、そのままわたしは押し倒されてしまいます。

「ぎゃっ……—」

そうして、わたしの胸や顔に顔をうずめたりくつつけたりして、擦りつけるイエイヌさん。

「ちよ、ちよつとイエイヌさん？　イエイヌさん？　マイルカさん、た、助け……わっぷ……」

マイルカさんに助けを求めると、彼女は困ったような笑顔を浮かべて、佇んでいたのです。

暫くするとイエイヌさんは冷静さを取り戻しました。

「ごめんなさい、ともえさん。嬉しすぎて、つい……」

「あはは……大丈夫ですよ、イエイヌさん。怪我もしてませんしね」

イエイヌさんは興奮しながらもわたしの頭が地面に直接ぶつからないように手で守ってくれていたようです。彼女の手の甲が少しだけ、汚れているように見えました。

「なんだかヤけちゃうなあ……おふたりさん、ふふっ」

悪戯っぽい笑みを浮かべて、茶化すマイルカさん。彼女の言葉に、わたしとイエイヌさんは顔を真っ赤にしながら、俯いてしまうのです。

暫くして、不意に、ふわああという欠伸の音が聞こえてきます。

「……ごめんなさい」

どうやらイエイヌさんのようでしたが、わたしも彼女の欠伸に釣られてふわあどひとつ。マイルカさんも、どうやら釣られてしまったよ

うで、遅れてもうひとつ。くすくすという控え目な笑い声がつつ。

「もう遅い時間なんでしょうね……帰りますか？ イエイヌさん」

イエイヌさんはわたしの言葉に「はい！」と頷きます。

「そっかあ……あたしも眠いし、帰ろうかな」

少し残念そうなマイルカさんでしたけれど、彼女自身の眠気もそれなりにあるのか、瞼の重さに耐えきれないかのように、眼は細くなつていました。

わたし達は他愛ない話をしながら、岬から土手へ、土手から浜辺へと歩いていきます。浜辺と海との境目に来て、わたしはマイルカさんにお礼を言いました。

「今日はありがとうございました、マイルカさん。お陰で、素敵な歌が聴けました」

「いえいえ、こちらこそー。イエイヌちゃんも、ありがとうね！ また今度、遊ぼうね！」

彼女の言葉に、わたし達はめいめい答えます。

「あつー。そうだそうだー！」

マイルカさんはそう言つて、首から提げたアクセサリーを外し、わたしに差し出します。

「これ、あげるねっ！」

「そんな……わたしは何もしてませんよ……？」

わたしは首を振って遠慮したのですが、彼女はわたしの手にそれを握りこませます。

「お近づきのしるし！ あと……あたしのこと、綺麗だつて言つてくれたお礼、かな？」

そんな無理矢理な……。

「だいじょぶだいじょぶ！ あと二、三個あるんだよねー。お友達のものしるしつてことで！ もしかしたら、探せばまだあるかもだしねー」

彼女はそういつて、わたしの手を離し、海原に向つて走り出します。

「じゃあ、また今度！ 遊ぼうねー！」

ひよいつと彼女は跳ねて、しぶきを立てながら波の中へと消えてい

きました。

「……どうしましょうか？　これ……」

わたしは困ってしまって、イエイヌさんに問いかけました。

「綺麗ですし……アクセサリー？　ですかね？　ともえさん、似合うと思いますよ？」

「そういう……問題なんですかねえ……？　それに……わたしが貰っても……？」

わたしは渡されたそれを改めてしっかりと見ることにしました。

小指ほどのサイズの銀色のカプセルに、銀色のチエーン。感触からして金属でしょう。どこかひんやりとしています。また、何かが掘り込まれたような跡がありました。ボロボロに擦れていてそこから何かの意味を読み取ることが出来ません。カプセルの下側には穴が開いていて、どうやら中身は無いようです。月光を受けてきらりと光るそれは、疑問を抱かせるような不思議な形であると同時に、なんとも神秘的な印象さえ抱かせます。自然には決して生まれぬ形……ヒトが作ったものなのでしょう。これに込められた意味合いは、少しわかりませんけれど……。

「私よりもともえさんの方が似合っていると思いますし……」

「そこまで言うなら……」

わたしは首からそれを掲げると、イエイヌさんは楽しげに言いました。

「やっぱり、似合っていると思います」

「……そうですか？　ありがとうございます」

わたしは彼女の言葉を受け入れることにしました。同時に、マイルカさんへのお礼も込めて、海に向かってそっと呟きます。

「マイルカさん、ありがとうございます。大事にしますね」

わたしの言葉は、彼女に届かないでしょうけれど……波の音が答えてくれているように感じます。暫く海辺に佇んでから、わたしはそっと呟きます。

「さ、帰りましょ、イエイヌさん」

わたしの差し出した手を取って、イエイヌさんが答えます。

「はい！ 明日ここを離れるというのも、なんだか寂しいですけどね……」

「ですねえ……でも、また新しいフレンズの皆さんと会えますから、楽しみでもありません？」

他にもいくつか、楽しみになる理由があります。アルマーさん、セインさんと会えるかもしれないという思い。詳細はわかりませんが、たとえば、「うんどうかい」という催しへの期待だって、勿論あります。

「とりあえず今日のところは寝ましようか、その前にシャワーを浴びますけど……」

わたしの言葉にイエイヌさんは身体をぴくりと動かします。

「シャワー……私も……ですか……？」

「当然です。三日くらい水浴びもしてないじゃないですか」

わたしがちくりと注意をすると、彼女は弁明するように色々いいましたけれど、わたしは構わず続けます。

「海水と、水は違いますよ？ 服は着たままでいいですから、一緒にシャワー、浴びましょ？」

諦めたのか納得したのかは定かではありませんが、イエイヌさんは「はい」と答えます。わたし達はシャワーの方へと足を向け、歩き始めました。

幕間3

彼は、不意に強く吹き付けた潮風に、被るパナマ帽が飛ばされぬよう抑えた。ふうと安堵の息を漏らし、視界を上げる。すると、既に景色は夕暮れで、彼はいささか驚いたような表情を浮かべ、手にした筆とパレット——橙色と黒が異様に目立つ——を近くの机に置く。

そして彼は、机の隣に乱雑に置かれていた鞆から、慣れた手つきで真っ赤な缶を取り出した。彼は缶の封を開け、煙草を取り出し、マツチを擦り、火をつける。口の端をゆがめながら瞳を閉じ、彼は数秒ほどかけてゆっくりと煙を吸い込み、同じくらいの時間をかけて吐き出す。

「うん、美味しいな……」

誰に聞かせるでもなく呟いたはずの言葉だったが、彼の言葉に答えるように煙草の炎がぱちりと弾ける。

「ああ、お前が居たか」

くすりと笑いながら呟く彼は、そのまま唇を舐める。ぶつきらぼうにさえ思える甘味を感じる。そして彼は瞳を開き、自らの描いた絵を眺める。その視線は、芸術作品に込められた意図を解読しようとするもののようにもあり、また、品物の価値を見定める商人のようなものでもあった。彼は暫く無言でそうしていた。

「ふむん」

ぽつりと呟く。

その声は風の音に、波の音に、掻き消されてしまうくらいいささやかなものだったが、彼はその一言を切欠に片付けをし始める。

傍らに置いた机の上、そこにある雑多な道具類を慣れた手付きで纏め上げる一方で、特に何も考えていないかのように、筆洗に数本の筆を無造作に投げ入れるように突っ込む。時折、煙草の灰を、同じように机に置かれていた灰皿の缶に捨てつつも、ずっと煙草は加えたままだった。

後は水を捨てて、すすぐだけ、絵はもう少し乾かさないといけないだろうが……彼がそんなことを考えていると、不意に声をかけられ

た。

「まあ珍しいことしてますね、博士……ってどうか、匂いあつま、なんですよこれ」

裏の小屋……つまりは売店から出てきたスタッフがぽつりと漏らす。

「ん……？ ああ、キミか、どうも邪魔してるよ」

彼女は彼の言葉に返事をせず、イーゼルに置かれた画用紙をじいつと眺める。

「はー……博士は機械弄りと研究しか出来ないと思ってきましたけど……綺麗なモノですねえ……」

どこか馬鹿にしたような言葉だったが、込められた感嘆の思いは疑いようの無いものだった。が、彼は意図的にそこを無視し、彼女に返す。

「キミは中々失礼なヤツだねえ……これでも学生の頃は趣味で美術をだね……」

「なんで誰も描かれて無いです？ この時間ならフレンズのみんなも、少し前だったらお客さんもいるでしょうに」

何処までもマイペースな彼女の言葉に、彼は却って小気味よさすら覚えた。

「キミね……」

そう言っって少し考える素振りをして、彼は口を開いた。

「自分の気持ちの整理だよ」

彼は煙草を深く吸い込んだ。ぱちりと火花が散って、彼は細い煙を吐き出す。

「……あんな悲しいことがありましたからね……って、匂いはそれですか……きょうび煙草なんて誰も吸わないのに……」

彼女は何があつたのかを知っている。いや、彼女だけではない。恐らくこの島に居る多くの従業員と博士、パークガイド、或いはそれらに準ずるスタッフの殆どが……彼に何があつたのかを知っていたし、彼も彼らが抱えている感情を含めて、それを知っていた。

「美味しいモンだよ？ タバコだっけ、文化なんだ、悪いモンじゃない

い」

だからこそ、だろう。かつてと変わり無い、どこかマイペースでこちらの感情を無視していて、それなのに何処か察しの良い彼女のひととなりは彼に居た堪れない気持ちを抱かせる事はなかった。

「いやあ、火花散らしながら吸われるタバコもどうかと……匂いも甘すぎませんか？ 自分は嫌いじゃないですけど……」

しかめっ面をしながらそういわれても、と彼は思っただろう。

「……吸ってみるか？ 無理強いはしないが」

彼女は首を振る。即答だった。

「……だろうな」

彼は言葉を続ける。

「あの娘があんな目に会って、私も煙草を止める理由がなくなったからね、久しぶりに、ね」

そう言って、自嘲気味に笑う彼の瞳は、海辺の夕焼けを写すには十分なほど、悲しげだった。

「……そんなこと……」

彼女はかける言葉を失ってしまったようで、視線が左右に泳いでいたが、彼は彼女の様子を気にせず続ける。

「あの娘だけじゃない、あの子だってそうだ。奇跡が起きて、それを奪われた」

煙草を吸いながら話す彼の言葉はどこまでも自虐的で、悲しげで……そうでないのは煙草から時折起こる火花だけ。

「あれを奇跡と呼ばないでなんて呼べば良い？ ……いや、全ておこがましいものだったのか？ ……僕は、そんな考え方は……」

彼は煙草を灰皿にぐしりと押し付け、火を消して中に捨てる。そして、自嘲気味に笑って、口を開いた。

「ごめんよ、困らせたかったワケじゃない……」

沈黙を余儀なくされた彼女を案じてか、或いは冷静になったか、彼の言葉はやはり自嘲めいて……彼女はそれを察したのだろうか？ 口を開く。

「……いえ、お気持ちは、全部ってことはないですけど……わかります

から……」

彼女の言葉に彼は返事が出来ず、或いはしなかったのかもしれないが、潮風を受けながら佇んでいた。

「……自分、戻りますね、もうちよつと作業があるので」

自分に来ることが無い、と感じたのか彼女はそつと口を開く。

「悪いね……というか、キミ、非番じゃなかったのかい？」

当然の疑問だった。

別の島での『アレ』があつてから来園者の完全退去が実施された。その為、ただでさえする事がなくなつてしまつたこのパークだったが、更に続くようにこちらの島での『アレ』……。

いまやパーク全土に及ぶ動きは『撤退』或いは『敗北』の言葉の相応しいものであつた。

「非番ですけど……やることは山積みですから。主に片付けですけど……博士達の退去はまだ時間あるんですけど、接客クルーは今週が期限なので……」

失意、無念、悲しみ、寂しさ、そんな感情が込められているのは、彼でもわかつた。

「ああ、そうだったね……彼女に一言、伝えておこうか？ キミ、特別仲が良かったろう。担当の私でさえ妬くくらいだ」

彼の提案に、彼女は考え込むような素振りをして、言った。

「……じゃあ、そうですね……手紙をしたためますので、それを届けてください」

何を添えようか……などと考えている彼女を尻目に、彼は再び煙草に火をつけ、答えた。

「海で働いているのに、森の方に仲良しが居るつてのもな、不思議だよ、まつたく……とりあえず度々ここには来るから、折を見て渡してくれれば大丈夫だ」

彼女はぼんやりと考えるのをやめて、「わかりました！」と答え、続ける。

「じゃあ、また今度、お会いしましょう！ では失礼しますね！」

元氣良く告げる彼女に彼は軽く手を振って応じる。そのまま彼女

は背中を向けて歩き出すが、そこに彼は声をかけた。

「僕はキミを恨んじやいないよ」

彼は視線をキャンパスに向けたまま言葉を続ける。

「あの子もそうだろう。……だから、気に病む必要は無いよ」

彼女は足を止めて、振り返ること無く応じた。お互いに表情は伺い知ることは出来なかった。けれど決して笑顔で無いことだけは、お互いに理解していた。

「……あの時一緒に行っていればって、思わなかったって言ったら、嘘になります」

「だろうよ。キミは変なところで真面目だからね」

ふたりとも口を開かず、響くのは風と波の音だけだった。

数秒ほど経って、ゆつくりと彼は言い聞かせる様に言った。

「キミが居ても、多分あの子はああしただろう。もしかすると、キミが巻き込まれなくてよかった、なんてあの子は考えてたかもしれない」
「……優しい子でしたからね」

彼は彼女の言葉に頷いた。

「何度も引き止めて、悪かったね」

小さく首を振って彼女は応じた。見えていないとしても、それは彼女自身が気持ちを入れ替える為の儀式めいた行為だった。

「……いえ、そう言ってもらえて……少しだけ楽になりました。では、失礼しますね」

彼は小さく「ん」と呟いて応じた。それから少しして、ドアの開く音がして、閉まる。と、彼女の声が再び聞こえた。

「ああ、絵も楽しみにしてますからね、ここに飾りましょう」

取り繕ったように普段の声だった。であればこそ、彼は普段の通りに応じる。

「お断りさせていただきます」

「えー、なんでですかあ」

不服そうな顔を見せる彼女だったが、一方で、彼の顔はどこか憂いを帯びていた。

「誰に見せることもないのに飾るのもね……何より恥ずかしい」

「そうですか？　綺麗な絵だと思いますよ？　とにかく、飾りますからね！」

そう言って彼女は売店の片付けに戻っていった。

「こりゃあ失敗できんな……」

ぼそりと呟く。煙草の灰を灰皿に落とし、絵を改めて見つめる。浜辺から一望した海の景色。絵の左端から伸びる岬とその上の灯台。それに寄り添うように設置された研究所。白く泡立つ波に、影。白く輝く太陽と、その影。誰も居ない浜辺。

「我ながら、悲しい絵を描いたモンだ」

そりゃあそうか、とひとりごちる。あの娘を、あんな目に合わせておいて、楽しい絵を描ける物か。自嘲気味に笑う。煙草がぱちりと弾ける。

「タイトルは……どうしようか……う」

彼の頭に浮かんだのは、悲しい言葉だった。「あの娘の居ない海」。彼はふんと鼻を鳴らし、呟く。

「……書くとしたら、英語か、ドイツ語だな……こっぱずかしい……さて、と。残りも片付けて、帰るとするか……」

彼は、煙草を灰皿に捨てて、筆洗と他の荷物をまとめ、水場へと向かい歩き始めた。

入れ違いになるように売店の電気が消え、ドアが開かれる。また、彼が居ると思ったのだろう。彼女は居ないはずの彼に声をかける。

「とーさかさーん！　寝袋ー！　って……あれ？　居ない……マイペースな人なんだから……」

途方に暮れる彼女だったが、どうせ再び会うのだからと諦め、ドアの鍵を閉め、帰路に着いた。

「……あまりに惨いわよ。あんなの……こんなの……」

その言葉は、風に掻き消えて、何処にも運ばれなかった。それを知ってか知らずか、不意に可愛らしい少女が彼女に言葉をかける。見た所、水棲のフレンズだろうか？　彼女たちと、ヒトとが寄り添い合う光景が、消えてしまうことは受け入れるしかない。しかし、取り戻せないとは受け入れられない。そんなことを内心思いながらも、彼女

は少女と言葉を交わす。

不意に、口が滑る。

「……………どうして……………はあ……………」

「どうしたの？」

問いかける少女に首を振ってなんでもないと答える。ああ、願わくば彼女達に幸福と平穏を……………。彼女は心の奥底から、人生で初めて、本心から他者のために、祈った。

建物の外でささやく声が聞こえて、わたしの目が覚めました。

「まだ中で寝てるんじゃない？」

「そうだといいいけど……入るわよー？」

フォルカさんでしょうか？ 彼女は、こんこんとノックをして、中を伺うような声で問いかけました。

「ふわあ……朝……？」

わたしがそう呟くのと殆ど同時に、フォルカさんとバンドウイルカさんが部屋に入ってきました。

「あたりで見かけなかったからもう行っちゃったのかと思ったわよ……まったく……。おはよう、ともえ」

フォルカさんは、半ば呆れるように腕を組んで言いました。

「おはよー、ともえちゃん」

につこりと笑って、手を振るバンドウイルカさん。

「あ、はい、おはようございます、フォルカさん、バンドウイルカさん」

わたしは目を擦りながら答えました。わたしの隣にはまだぐっすりと眠っているイエイヌさんが居ます。

「イエイヌさん、起きてください」

わたしはイエイヌさんを揺り起こします。彼女は耳をぴくりと跳ねるように動かし、身体を起こしました。周囲を確認するように周囲をきよろきよろと頭を動かして、彼女は言います。

「……おはようございます……う、ん……」

そういうと、彼女は欠伸をしながら、伸びをする様に体を動かしました。わたしの意識はなんだかまだぼんやりしているのですけれど、外を見てみると太陽が朝と昼の間だと思われるような、微妙な角度で輝いています。

「寝すぎちゃいましたね……」

わたしが後悔する様にぼそりと呟くと、フォルカさんが口を開きました。どこか咎めるように感じたのは、わたしの気のせいでしょう。

「……普段からこんな時間まで寝てるの？」

「いえ……ふわあ……ごめんなさい……普段はもつと早いですよ？
イエイヌさんも早起きですし……昨晚、ちよつと色々ありまして……」

「一体何があったのよ……まあ、何でもいいけど……」
「いや、その、ちよつと……お洋服の交換をしたら……思いのほか盛り上がってしまった……」

わたしの言葉に何処か釈然としないフォルカさんでしたけれど、多分、この話を続けてしまうと……この場でお洋服の交換会が始まってしまうような予感がします……。

わたしとフォルカさんが話している間、イエイヌさんは目を擦ったりしながらも、バンドウイルカさんとお話をしていたようです。

「さて、イエイヌさん、ご飯にしましょうか」

わたしは鞆からふたつほどジャパリまんを取り出し、ひとつをイエイヌさんに手渡します。

「……ああ、どこかでジャパリまんを頂かないとですね……これで最後です」

「それなら、私達がいつも貰っているところも紹介するわ。ちよつと方向も一緒なのよ」

「ありがとうございます、フォルカさん」

わたしはお辞儀をして彼女に感謝を伝えます。

「けっこー穴場なんだよーあそこー」

バンドウイルカさんはポケットからジャパリまんを取り出しながらのんびりといいます。

「まだ今日の分あるかも……んぐ……」

ひとくち頬張ってバンドウイルカさんは続けて言いました。彼女の様子をみて、フォルカさんが腕を組みながら言います。

「ドルカったら準備が良いんだから……でも少し遅いんじゃない？
太陽も高くなって来てるし……アテにするなら急がないと……」

「寝すぎちゃったんで、あんまり進めないかもですけど」

わたしは頬張ったジャパリまんを飲み込みます。

「出発の予定は変えたく無いですし……残つてると助かるんですけど

ねえ……」

わたしは次のひとくちを頬張ります。その時、イエイヌさんから「ごちそうさまでした」という言葉が聞こえます。ほうと息をついて、イエイヌさんは続けて言います。

「私、先に行つてましようか？ お水も用意したいですし……」

「うーん……わたしもすぐ食べ終わりますから、大丈夫ですよ」

イエイヌさんは「わかりました！」と元気良く答えてくれました。彼女を待たせる訳にも行きませんし……わたしはジャパリまんを食べながら出発の支度をするにしました。ちよつとお行儀が悪いですけど、仕方がないですよ。

わたしは頬張るジャパリまんを飲み込んで、出発の号令をかけます。

「では、行きましようか！」

建物の中にみんなの声が響きました。扉を開き、まずはシャワーのある水場へと歩きます。先導をバンドウイルカさん、フォルカさんに頼み、その後ろにわたしとイエイヌさんが隣り合つて進むことになりました。

「そういえば、昨晚マイルカさんに会いましたよ」

わたしがそういうと、少し驚いた様にバンドウイルカさんが口を開きます。

「あ、そうなんだあ！ 最近見ないと思つてただけ……元気だった？」

「ええ、元気でしたよ、素敵な歌を歌つてくれました」

「歌……？ どんなのどんなの？」

「えーつと……タイトルはわからないそうなんですけど——」

灯台のふもとで聞いた歌のことを彼女達に話すと、自然、彼女達の期待の目がイエイヌさんに注がれます。

「な……なんですか、みなさん……っていかともえさんまで……！」

視線に気付いた彼女はあたふたし始めます。

「いいのよ？ イエイヌ。別に歌つて欲しいなんて思つて無いわよ？」

笑いそうになりながらフォルカさんが言います。

「そうそう、へーきへーき、気にしないで?」

フォルカさんの言葉に続けて、バンドウイルカさんも、笑顔で言いました。

「……意地悪ですね、皆さん……」

わたしはイエイヌさんをフオローしようと言葉を選んだつもりですけれど、わたしもちよつと彼女に意地悪をしたくなりました。

「あ、でも、そうですね、ちよつと、ちよつとですよ? 聞きたいですかねえ……」

「ともえさんまでえ……」

「冗談ですよ、冗談……あ、水場に着きましたね」

わたしの言葉に、イエイヌさんはこれ幸いといわんばかりにほつとした表情になります。わたしは肩から掛けた水筒の中身を補充し、ひとくちふたくち程、水をそのまま飲み込みます。イエイヌさんも同じように、んぐんぐと水を飲みました。

「……今まで気にしたこと無かったけど、それって水が出るものだったのねえ……」

フォルカさんがぼそりと呟きました。

「あーっ! 確かに!」

わたしは水を飲み終わり、ふうと息をついて尋ねます。

「あれ? 皆さんはここ使わないんですか?」

「冷たくて美味しいですよ! フォルカさんも、バンドウイルカさんも、どうですか?」

イエイヌさんが口を拭ってから、バンドウイルカさんとフォルカさんに勧めます。不思議そうな表情をしながら彼女達は蛇口の使い方を教わり、そして水を飲み始めます。

「美味しい……!」

ふたりしてそんなことをいいながら、こくこくと水を飲むのでした。ひと段落ついて、再びわたし達は歩き始めます。

「あそこね、ヘンなトコだなーとは思ってたんだー」

「そうよねえ……あんな風に使うなんて、知らなかったわ……」

彼女達の言葉に、わたしは違和感を覚えました。だって、イエイヌさんは普通に使っていたんですもの。

「……？ イエイヌさん、あそこの使い方は誰から教わったんですか？」

「ええつと……覚えて無いんですよねえ……元々使い方を知っていた、ような……『おうち』のものとは形が違いましたけど、同じ物なのはわかったので使えたんです」

フォルカさんはイエイヌさんに尋ねます。

「……みんなから色々教えてもらったり、なんとなく知ってることもあったけれど……そういう知識って無かったわよ……？ ね？」

ドルカ」

バンドウイルカさんはフォルカさんの言葉に頷きます。

「あれ？ そうなんですか？ 不思議ですねえ……」

イエイヌさんも自分が「何故その知識を持っているのか」という理由に思い当たる節が無いようです。彼女がフレンズになる前の境遇が、何か関係しているのでしょうか？

「バンドウイルカさんやフォルカさんって、フレンズになる前のことって覚えてますか？」

わたしの質問に彼女達は考え込みます。

「うーん……時間が経っちゃってるからぼんやりだけど……少しくらいは」

バンドウイルカさんの言葉を肯定するようにフォルカさんが続けます。

「そうねえ……例えば、私やドルカ、マルカが海で泳いだり、遊んだりするのが好きっていうのは、多分、フレンズになる前から変わらないと思うわ。ぼんやりとだけ……ボールとかで遊んでいた記憶も、あるような気がするの……」

どこか切なそうな顔をする彼女達。わたしは、そんな様子を見ると、『あの絵』を見たときと同じように、みぞおちの辺りがきゆううとなってしまいます。

寂しくて悲しいのかもしれないけれど、その理由がわからない。そ

のこと自体が悲しくて、悲しくて……わたしは、自分から尋ねているのに、口にするべき言葉がわからなくなっていました。

「……そう……ですか……なんだかごめんなさい」

バンドウイルカさんもフォルカさんも、悪くないとわたしに言ってくれましたけれど、先ほどまで楽しげだった空気を変えてしまったことへの罪悪感を抱いてしまいます。わたしが言葉を発することが、何故だか躊躇われてしまうくらいに。

暫くの間、わたし達の間には気まずさを感じる沈黙が漂っていました。わたしの隣を歩くイエイヌさんの顔をちらりと見ると、彼女も同じようにどこか申し訳なさそうな表情をしていました。

前を歩く彼女達の後姿は以前までと変わりないものでしたけれど、言葉も発しておりませんし、わたしの勘違いかもしれないかもしれませんが、どこか気まずい雰囲気を感じているように思われます。やっぱり……そう思ってわたしは歩く砂浜に視線を落とします。すると――

「……――」

イエイヌさんが、昨晚の歌を口ずさみます。思わず驚いた表情で彼女の方を見てしまいました。同じように、フォルカさんとバンドウイルカさんもイエイヌさんを見ます。一瞬だけ歩みを止めて、イエイヌさんは言いました。

「……エへん、ともえさんも、お願いします……」

恥ずかしげに視線を逸らして言う彼女の顔は、どこか赤くなっているように感じました。彼女なりの心遣いなのでしょうか？

「……はいー」

わたしが昨晚のイエイヌさんと同じように、彼女の歌に続いてハミングを始めます。マイルカさんやイエイヌさんのように綺麗に歌えるかは不安ですけれど……。

「あーっ！ あたしもあたしもー！」

釣られるようにバンドウイルカさんが言います。

「……同じ感じで続くので、まねしてください」

微笑みながらイエイヌさんが言いました。「うん！」とバンドウイルカさんは頷き、フォルカさんにも歌うよう促します。

「し、仕方ないわね……」

少し嫌そうに言った彼女でしたけれど、気のせいでしょうか？ 彼女の瞳は楽しげに輝いているように思われました。再び歩き始めたわたし達の間に漂う沈黙は、美しくも可愛らしい、わたし達の歌声に溶ける様に消え、楽しげな空気が訪れました。

わたしは、ハミングをしながら心の中で皆さんへの感謝を伝えます。わたしの思いが伝わったのかそうでないのかはわかりませんが、イエイ又さんがわたしの手を握りました。ちらりと隣を見ると、そつとこちらを見るイエイ又さんと視線が合いました。そして、彼女はにこりと微笑んで、一瞬だけ強くわたしの手を握ります。わたしも彼女に微笑み返し、手を握り返しました。

そうして歩く道のりは、今までと変わらぬものでしたけれど、そうして歩くわたしの心は、どこか晴れ渡ったもののような気がします。

合唱が始まって、それから少しすると、階段を登ることとなり、砂浜から土道へと道が変わります。道が変わって間も無く、前を歩くフォルカさんが指さして言いました。

「あそこー！ ジャパリまんが普段あるのだけど……」

その先に木製の屋根があり、ベンチとテーブルが鎮座していました。吹きさらしの休憩所と言ったところでしょうか？ テーブルの上に何かが置かれているようです。青色の物体が細かく動いているのが見えましたけれど……。

バンドウイルカさんが陽射しをさえぎるように手を額に当て、じつと遠くを眺める仕草をします。

「うーん……ボスが居るってことは、もう持って帰っちゃうのかな？」
「ということとは……急がないと……！」

わたしはそう言っ、駆け足になります。胸からかけたペンダントが跳ねて、太陽の光をきらりと反射します。そうしている間にも、ラッキービーストさんは、ジャパリまんが置かれた籠を持ち上げます。彼らの持つ両耳を器用に動かして頭の上へ……感心するよりも先に、声をかけないと……！

「あつ、ともえさん、そんな急がなくても……」

食糧という問題がわたしの中で結構重要だったのでしよう。イエヌさんの静止は聞こえませんでした。

「ラッキービーストさあーん！ 待ってくださーい！」

わたしの声に彼は気付いたのでしよう。少し立ち止まり、ぴよこりと跳ねて、こちらに向き直ります。

「オつかれさまデス、ともえ」

「はあ……はあ……お疲れさまです……ふう、ジャパリまん、貰っても大丈夫ですか？」

「ノコリでダイジョウブ？」

彼の質問は「新しいの用意するけどいいの？」ということなのでしようか？

「はい、大丈夫です」

「リョウカイ、ともえ。ドウゾ、トツテ」

ラッキービーストさんは頭の上に乗せた籠を傾けるようにしました。

「ありがとうございます、ラッキービーストさん」

わたしは感謝の言葉を伝え、何個かジャパリまんを貰いました。これで二、三日はしのげるでしょう。

「デハ、シツレいシマス」

そう言つて彼はぴよこんとテーブルから飛び降り、少し歩いてから、もう一度振り返つて言いました。

「フィールドワーク、おツカレサマデス。ワタシモ、モドリマスネ」

フィールドワーク……？ 何か勘違いしているような気がしますけれど……。

「あ、ありがとうございます……」

そのまま彼は茂みの中へ……本当に不思議な存在ですね……というか、というか！ また色々聞きそびれてしまいました……。

「ふう……ともえさん、いきなりだったんでびっくりしちゃいました……」

イエヌさんは少し早足で歩いて、わたしに追いつきました。

「お手伝いできなくてごめんなさい……ジャパリまん、貰えましたか

？」

わたしは頷いて答えます。

「はい、二、三日は余裕があるかと……」

「良かったですね！ 安心して進めますね」

わたし達が安堵の息を漏らしていると、バンドウイルカさん、フォルカさんが追いついてきます。

「ねえねえ、ともえちゃん」

「何ですか？」

「それって、マイルカちゃんが持ってたやつ？」

バンドウイルカさんはわたしの首から掛かる銀色のアクセサリを指差して言いました。

「これですか？ そうです、昨晚お会いした時に……お友達のしるしだということでした」

「ほえ……すっかり見るの初めてだけど……綺麗だねえ……」

バンドウイルカさんは興味深げに覗きこんで来ます。日光に彼女の青い髪が輝いていて、笑顔の為に細められた瞳は青空のように透き通っていて……

「バンドウイルカさん、やっぱり綺麗ですねえ……」

衝動的に漏れ出た言葉に、バンドウイルカさんは驚いたような表情で顔をゆつくりと上げ、彼女の視線とわたしの視線とが交わり、頬は紅潮していて、喜びと恥かしさが混じった表情でした。

「——っ！」

心なしか彼女は震えているようにも思えましたけれど……。

「ともえ……あなた、考えて言ってる……っ！」

腕を組んで、呆れたように言うフォルカさん。

「そ、そこまで考え無しじゃないですよ！ ……今は……その、思わず出ちやつた言葉ですけど……」

フォルカさんはやれやれという具合に頭を振ります。そんな中、エイヌさんがわたしのベストの裾をそっと掴み、くいくいと引きま

す。
「エイヌさん？ どうしました？」

そういつて彼女の顔を見ると、期待に満ちた表情でわたしの顔をじつと見つめていました。

「ともえさんとともえさん！」

……イエイ又さんの言いたい事は大体判るような気がしますけれども……なんだか改めて言うとなるとタイヘン恥ずかしいですね……。

「……ええ、イエイ又さんも可愛いですよ」

わたしは彼女の頭を撫でながら言いましたが、今度はぽこぽこわたしの胸をバンドウイルカさんが叩いてきます。

「はーずーかーしーいー！」

「ちよ、い、痛……くはないですけど、お、落ち着いてくださいって……」

わたしが困っていると、フォルカさんが口を開きます。

「ともえ……いつか、あなたの取り合いとか起こるかもしれないわよ

……？ 気をつけなさいね……？」

「そ……それって……どう、いう……」

フォルカさんは、うーんと少し考え込むような素振りをして、言いました。

「……自分で考えたほうがいいと思うわよ……あなたも結構、テンネンよね……」

良くわかりませんが、多分、ここはバンドウイルカさんに抵抗しないのが筋というものなのかもしれません。それくらいは何となくわかりました……言葉には気をつけた方が良さそうですね……はい……。

少しして、バンドウイルカさんも落ち着き、わたし達は再び歩き始めます。

「もうー、ともえちゃん！ そういうこと、みんなの前で言わないでね！ 嬉しいけど、恥ずかしいんだからあー！」

ぷりぷりとしながらバンドウイルカさんは言いました。

「……ごめんなさい……バンドウイルカさん……」

褒めれば良いというものでは無いのは事実でしょう。反省ですね……。

「……あ、それでね、ともえちゃん」

おほんと咳払いしてバンドウイルカさんは言いました。

「そのアクセサリーね、マイルカちゃんがいつも着けてたの。お気に入りに入ってるって言ってたっけな……会ってたなら今日も呼べばよかったなあ……」

「そんな大事なものを……そういえば、イエイヌさん、今日出発って話……マイルカさんとしましたっけ？」

わたしは改めてマイルカさんへの感謝の気持ちを抱くと同時に、出発の話彼女としたかどうかという疑問を抱きます。

「ええっと……確かしてなかったような……」

「あー……バンドウイルカさん、フォルカさん、マイルカさんにお会いした時に、ありがとうと言っていたと伝えてもらえますか？」

おふたりは快諾してくれました。

「今日か明日かはわからないけど、伝えておくね！」

「そうね、私も隣の島の話、気になるわ……今度マルカと会ったらちゃんと話しておくわね」

再びここに来ることは絶対です。寝袋を返す為でもありますし、フォルカさんやバンドウイルカさん、マイルカさん達と、お話をする為でもあります。勿論、単に楽しかったからという感情も大きいですが……。

そんなことを考えて、彼女達とお話して……そうしている内に、周囲の様子が変わりました。うみべちほーの入り口と同様の門が道の先に見えます。

眩しく輝く太陽は空の頂点を少し通り過ぎていきます。今まで時折吹いていた風は湿り気を帯びたものから、どこか乾いたように感じられるようになりました。

「あの門を通ればさばんなちほーだよー！」

バンドウイルカさんが言います。

「申し訳ないけれど、私達はここまでね……あっちのちほーは、ちよつと乾燥しているし……もうちよつと違う時期なら着いていけたかもしれないけれど……」

フォルカさんは少し俯きながら、申し訳なさそうに呟きます。

「いえ、ここまで道案内してくれただけでも、本当にありがたいですから……ジャパリまんの場所も教えていただけましたし……本当にありがとうございました！」

わたしもイエイヌさんも彼女達に感謝の言葉を述べ、お辞儀をしました。

「いえいえー困ったときはお互い様なもの！」

「それに……あなたたちと過ごした時間、短かったけれど……楽しかったわ。また、会いましょう？」

「はい！ そのときは、もうちよつとゆっくりさせて貰いますね！」

「他のちほーの話も聞かせてちょうだい？ 楽しみにしてるわ」

わたし達の別れの挨拶は、和やかに進みました。二度と会うことが無い、なんてことがありえないからでしょう。パークが広いといっても、また会うことは出来ます。再会出来ることの、なんと幸せなことでしょうか？

わたし達は手を振り合いながら、彼女達と別れ、門をくぐりました。

「なんだか……寂しいですね……」

イエイヌさんの呟きに、わたしは答えます

「はい……ですけど……私にはイエイヌさんが居ますから……たぶん、この先も一杯フレンズの皆さんと会って、別れて……寂しい気がしますけど、平気です」

わたしはイエイヌさんに手を差し出します。

「私も……その、改めて言うのも恥ずかしいですけど……ともえさんと一緒なら、どこまでだって、行けると思っています」

微笑みながら彼女はそう言っ、わたしの手をとります。

「ふふっ……ありがとうございます、イエイヌさん。わたしだって、あなたと一緒にならどこまでだって……」

わたしは彼女の顔から視線を外し、道の先を見据えます。草原のように見える大地でしたけれど、所々枯れてしまったであろう草の色が混じっていて、まだらになった動物の毛皮のような印象を与えています。まばらに、ぽつりぽつりと生える樹木が陰を落としていて、ず

うっつと遠くでは空気が揺らめいている様にぼやけて見えます。

先ほど感じたとおり、風はどこか乾いていて、陽射しの強さに反して意外と心地よいものでした。土道がまっすぐと伸びていて、その先は白い冠をした山の方へと伸びているようです。もちろん、このまままっすぐ行けるとは思いませんけれど……。

「とりあえず、どこか休めそうなところを見つけてみましょう。今晚はそこで過ごす、ということでは」

「はい！ そうなると……大きな木の下とかですかね？」

「ですかねえ……とりあえず、歩きながら探しましょう。無理はしない、ということでは……改めて、出発です！」

わたし達は「おー！」と空に手を突き出し、道を進むのでした。

歩きながらわたしは首に下がったアクセサリーを弄んでいました。特に何かを考えて触っていた訳ではないのですけれど、弄んでいるうちに、不思議なことに気付きます。

「……？ これって……」

「どうしました？ ともえさん」

「いや、大したことじゃないんですけどね……？ ここ、回るんですよ……」

わたしは、筒状の『ソレ』をぐるぐると回します。すると、カップセル状のそのアクセサリーはどんどんと伸びて行き、最初の倍くらいの長さになりました。隠されていた箇所には小さな穴が開いていて、益々不思議な形状に……。

「ホントですね……なんなんでしょう、これ……」

わたしは「うーん」と悩みながら、改めてじっくりと『ソレ』を見回します。その内、これが『あるモノ』なのでは無いか？ と思いつきました。

「これって……笛？」

笛といえば、カルガモさんが首からかけていたモノをわたしは連想しますけれど……こんな筒のような小さい笛……どんな音が鳴るんでしょう？ おもむろにわたしはその吹き口だと思われる、底の穴に口をつけて息を吹き込みます。

「……？」

すーっという空気の漏れる音がするばかりで、音色のようなものは一切しません。わたしの吹き方が悪いのかと思って何回か息を強く吹き込んだり弱く吹き込んだり……それでも音はなりませんでした。やはり、笛では無いのでしょうか……？

「……ともえさん……うるさいです……」

イエイヌさんは、頭の上の耳を両手で押さえて、わたしに訴えました。

「へ……？ イエイヌさん、音聞こえるんですか？」

「……？ 凄いい音ですよ……それ……すっごい高い音です……」

「ご、ごめんなさい、イエイヌさん……わたしには、この音聞こえないんです……あの、イエイヌさん、聞こえますか？」

わたしはそつと弱く息を吹き込みます。わたしの耳にはやはり空気の漏れる音がするばかりですけれど……イエイヌさんはぴくりと耳を動かしてから答えます。

「はい、聞こえますよ？」

イエイヌさんの表情は、当然です！ と言いたげな顔でした。表情からして彼女が嘘をついているようにも思えません。そういえば……。

「イエイヌさんって、確か、ええつと……」

わたしは『おうち』で読んだ動物辞典の内容を思い返します。

「そうだ！ そうです！ イエイヌさんって耳が良いんですよ……？ 多分その違いかと……」

「なるほど……じゃあ、この音つともえさんには聞こえないんですか……」

イエイヌさんは不思議そうに考える仕草をします。

「ですねえ……合図とかには使えるんでしょうけれど……」

首からかけるだけで十分綺麗なアクセサリーですので、実用性を求めることは筋違いでしょう。何より、マイルカさんの大切にしていたものですしね。わたしは笛を手で弄ぶのをやめ、再び道に視線を戻すのでした。

道を進むわたし達に降り注ぐ太陽は、海辺のときよりも、どこか低く見えましたが、周囲の温度も陽射しの強さも結構なものでした。わたしは額に流れる汗を拭いながら歩きます。ちらりと見ると、イエイヌさんも何処か息が荒くなっているように見えました。

「そろそろ、休みますか？」

わたしの問い掛けにイエイヌさんはこくりと頷きます。

「でしたら、あそこの木まで行きましょう……もうひとふんばりですよー」

わたしは彼女にそう言って、歩みを速めます。イエイヌさんもわたしの言葉を受けて、少しでも早く休もうと思ったのでしよう、わたしの後ろを着いてきます。乾いた陽射しが急かすようにじりじりと、それでも確かにわたし達の背中に照り付けてきます。

さほどの時間を必要とせず、木陰にわたし達は腰掛けることが出来ました。空気が乾燥しているからでしょうか、日光にさえ当たらなければ思っていたよりもずっと涼しく、海辺での天候と比べると幾分か過ごしやすいようにさえ思えました。

「ふう……案外涼しいですねえ……」

イエイヌさんの言葉にわたしは頷きます。

「ですねえ……」

汗ばんだ身体に、乾いた風が吹き抜けました。さほど強くない風でしたけれど、余程暑かったのでしょうか、身体に籠った熱を吹き飛ばすようにさえ感じます。それに、鼻の中が何となくですけれど、乾いたような気がしてきます。海辺の風とはまた違った風。『ちほー』ごとの天気や環境が違う、というのは聞いていましたし、草原から海辺へと移動したときに痛感した筈ですけれど……やっぱり驚きのような疑問のような……そんな感情を抱きます。どうやっているんでしょう、これ……。

「お昼は過ぎたはずなんでしようけれど……暑いですね……長めに休みましょうか」

「はい！……あんまり無理して具合悪くなったら、困りますからね……お水、どうぞー！」

イエイヌさんがわたしに水筒を差し出しましたけれど、わたしは首を振ります。

「イエイヌさんから、お先にどうぞ。大変そうでしたし……」

イエイヌさんは「お言葉に甘えて」と言っ、水筒に口をつけ、こくりと水を飲み込みます。ふうと溜息をついた彼女はわたしに水筒を差し出します。イエイヌさんに感謝の言葉を伝えて、水筒を受け取ります。そうしてひと口、水を飲みました。

「ふう……そうです……！ 水場も見つけないと……」

準備が十分でない旅だからでしょうけれど、やはりするべきことが多いですね……。もしも今度旅に出るようなことがあったら、準備はしっかりとしましょう。反省です。

「……うーん……近くには、ちょっと……水の音もしませんし、ええつと、じゃぐち？ でしたっけ、そんなのも見当たりません……」

イエイヌさんは耳をぴくりと動かして、遠くを眺めるような仕草をして言いました。うーん……このまま水を得られずに……なんてことは杞憂でしょうけれど……。

「誰か、フレンズさんかラツキービーストさんか……会えればいいんですけどね……イエイヌさん、においとかつてしますか？」

すんすんと鼻を動かしてからイエイヌさんは首を振りました。

「すぐ近くには居ないですね……遠くの方に続いていそうなおいは幾つかありますけれど……お力になれず、申し訳ありません……」

「イエイヌさんは悪くないですって……それにしても、少し困りましたね……水筒もまだ残ってはいますけれど……」

わたしが水筒を揺らすと、小さくちやぶりと音がします。お互いに水をそこまで飲んでいないからでしょう、まだ結構残っています。このペースだったら一日くらいは……何とか……。

「うーん……せめてあそこでラツキービーストさんに聞いておけば……」

わたしの言葉にイエイヌさんは首を振ります。

「ジャパリまんだけでも十分です。ボスさん達も皆さん忙しいみたいですし……見かけてものんびりしたりしてませんし……」

彼らの仕事は何なのか？ という疑問もありますが、イエイヌさんの言葉から察するに、ジャパリまんを配ることは、山ほどある仕事の内のひとつなのでしよう。

「そう、ですか……もう少し休んだら、イエイヌさんが感じたにおい、追ってみましようか」

運動会でしたっけ、その場所に続いているのでしよう。イエイヌさんがはつきりと感じ取った訳ですし、何か催しごとがあるなら、フレンズさんも沢山いるでしょうし、水場だってある筈です。

「はい！ わかりました！ どれくらい離れてるかは……わかりませんけど……」

「大丈夫です、旅ですもの、一杯歩いて、一杯疲れて……そういうモノじゃないですか？」

わたしの答えにイエイヌさんはくすりと笑います。

「ふふっ、なんだか前向きですね、ともえさん」

そうでしょうか？ わたしはやっぱり、どこまでも自分の安全が心配ですし、その為に色々考えたりして、やっぱり不安な気持ちの方が大きいのです。

「そうですか？ 楽観的なつもりもないのですけど……」

「うーん、なんていうんでしょう……前を見ながら足元も心配してる？ みたいな……」

なんだか要領を得ない例え話のような気がしないでも……

「でしたら、きつと、皆さんのお陰ですよ」

わたしが変わったとしたら、それはきつと、フレンズの皆さんのお陰でしょう。

楽しいに生きることも、前を向いて生きることも、自分を受け入れるということも、きつと私だけでは出来なかったことですし、もしかすると理解さえ出来なかったでしょう。

……まあ、まだ、わたしは自分のことを受け入れるに足るだけの過去を知らないのですけれど、ね。

「うーん……？ はい！」

その反応は一体……？

わたしは空を仰ぎ見ます。白く輝く太陽が真つ白な雲に遮られ、大きな影が出来ます。風が一陣吹いて、遠くの草むらがなびき、頭上の葉が揺らめきます。ざわざわという心地よい音が、耳に響きます。その風で雲が動いたのでしようか、隙間から陽射しが入り込み、光の柱を作ります。

「イエイヌさん、アレ、なんていうか知ってますか？」

わたしは光の柱を指差して言います。

「……？ 名前なんてあるんですか……！ なんて言うんです？」

「何だと思います？ 想像でいいですよ」

ちよつとズルいですかね、私。

「わかりませんよお……ナントカの柱とか……ですか？」

イエイヌさんは困ったように、頭を掻きながら言いました。

「天使の梯子って言うんですって。あと、レンブラント光線、とも」

素敵ですよ、と言おうと思ったのですけれど、納得行かない様子のイエイヌさん。

「てんし……？ れんぶらんと……？ 梯子も光線もわかる気はする

んですけど……」

なるほど、そこからですか……。

「天使って言うのは……そうですね、ひっじょーにざっくり言うと、とても凄い存在のお手伝いさんですかね……レンブラントってのは……ええつと……」

ふと、頭に過ぎったのは、誰かに同じ質問をされて、わたしがイエイヌさんとまったく同じ言葉を返した記憶。

「ああ、思い出しました！ ずうつと昔の絵描きさんです。その人が好きだったらしいですよ」

ああ、『あの人』です。『あの人』に教えてもらったんです。顔が真つ黒に塗りつぶされた『あの人』。わたしの過去に何か繋がりがあるに違いない人。その時の言葉は、わたしに何かを教えてくれる様でいて、からかうようで……でもとても優しい声だった筈です。何時、何

処で、わたしは『あの人』にそれを教えてもらったんでしたっけ……？

「ともえさんは物知りですねえ……」

イエイヌさんはほへえと感心するように息を吐きました。

「いえいえ、わたしなんてまだまだです。もつと物知りな方は居ますから……それに、こういう知識は生きていく上であんまり役に立ちませんよ？」

「そうですか……？ 色々なことを知っていると、色々な素敵に気付くので、羨ましいです」

「なんだかこそばゆいですね……ありがとうございます、イエイヌさん」

わたしは一拍置いて言葉を続けます。

「でも、イエイヌさんだけじゃないかもですけど……フレレンズさん達の鼻の良さや目のよさとか身体的能力とか……そういうことの方がわたしは羨ましいくらいです。便利そうですね……」

わたしの思いにイエイヌさんは困ったように唸ります。

「うーん、私もそうですね……意識しないですからねえ……ともえさんの様なヒトの感覚もわからなくはないですけど……比べようも無いですし……」

「まあ……わたしが言うのも変な話かも知れませんが……みんなそれぞれ違うってことなんですかねえ……」

わたしはそう言って視線を再び空に戻します。先ほどまで見えていた『天使の梯子』は無くなり、太陽が輝いています。澄んだ空気、澄んだ空。わたしの持っている色鉛筆ののように真っ青な背景に浮かぶ白い雲……。穏やかな周囲の光景は、運動会という噂の騒がしさからはかけ離れたもののように感じられます。

「イエイヌさん、もうひと口ずつ水を飲んだら出発しましょう。暑いので休憩はこまめに取るといいこと」

「はい……」

わたしは水筒の水をひと口飲み、イエイヌさんに水筒を返します。視線は道の先に。あとどれくらい歩くのでしょうか？ 疑問ではあ

りますし、楽でも無いでしょう。それでも歩かなくてはなりません。進むことで答えがあると断言も出来ません。それでも、それでも……。

走るのが好きだ。身を切る風も、流れる景色も、全部好きだ。だから走るし、見たことの無い景色だって、見てみたい。だから遠くにも行くし、もちろん、走っていく。まあ、飛ぶのは苦手だしな。あつたことの無いヤツにも、会つたことのあるヤツにも会いたい。楽しいから走るし、走るから楽しい。

時折思う。『前』はこんなだったのか、とか、そんなこと。この身体になつてずっとずっと便利になつたんだろうし、前のことなんか大して覚えちゃいないから、比べようも無いし、深く考えないようにしてるけどやっぱり不思議には思う。走りながらだつて、考えるときも、まあ、結構ある。そんなときは、時々、前が見えてなかつたりするんだけどな。

で、今日、考えながら走っていると、今までに無いくらいヤバイ事態になつてしまった……。ま、突つ込まなかつただけ運がいいのかもしれないけど……。ヤバイのはヤバイ。

「げえ……セルリアン……」

そいつは目の前に居て、どうやらあたしのことを狙ってるらしい。雨上がりのサバンナが走りなれた場所だからって考えながら走つちやダメだな。うん。コイツ、でつかいし、強そうだし、どうしたモンか……。

「つて、ひよええっ!」

コイツう……。あたしはその伸ばした腕を間一髪回避……。したのはいいけど、飛び込むように避けたから体勢は悪いし、地面がえぐれてるし……。もしかしなくても、ヤバイんだろうなあ……。

「こつち見るなよ! まったく!」

地面の石を投げつけても当然意味が無いし、走って逃げるには……

うん、足を痛めたな。あー、もう一本の腕がこつちに伸びてきてる……つて、うおお……凄いや……頭の中が妙にすつきりしてるし、時間がゆっくり流れてる気がする……！ ええつと……セルリアンに食べられたら動物に戻るんだっけか？ 死ぬんじゃなければ、まあ、いけどさ……

はあ、もつと走りたかつたし、もつといろんなどころに……誰か助けてくれるってことも、ないだろうし……この辺ひとけ無いもんな。ま、いつか、楽しかったから……目を閉じて全部諦める。けど、うーん、せめてコヨーテにひと言くらい……。風を切る音が聞こえて、どごと音が聞こえて来て――

「……あれ？」

きよろきよろと周囲を見渡すと、さつきまでセルリアンが居たところには、しりもちをついてるフレンズ……。

「いったた……」

ソイツは自分の頭を撫でながら、何にぶつかったのか確かめるように前を見てた。

「お……お前……助けてくれたのか？」

あたしが尋ねると、ソイツ……ううん、その方は、あたしの方をようやく見てくれた。

「うーん……？ 何かにぶつかったけど、キミか？ だったらごめんよ、申し訳ない……怪我とかしてないか？」

その方は立ち上がって、申し訳無さそうにしながらあたしに手を差し出してくれた。懐の深い方だ、と素直にそう思った。あたしはさっきの乱暴な言葉遣いが、なんだか恥ずかしくなる。

「こほん……いい、いえ、ぶつかったのはセルリアンです……あなたは……あなたは恩人です……！」

「ん？ そうなのか？」

その方はあたしを引っ張り上げながら訝しげな表情をしている。眉間に皺を寄せた表情だけど、立派に伸びる角のお陰か、どこか凛々しいようにさえ、あたしは思った。

「うーん……？ ああ、そういうことか。キミが襲われていて、私がセ

ルリアンにぶつかって、キミを助けた、と……おっと、足、挫いたのか？ 大丈夫か？」

「へ……？ あ、ああ、平気です！ 走ったりは、ちよつと厳しいですけど……」

その方は、あたしよりもずっと背が高いから、あたしを背負おうとしゃがんでくれた。素敵な方だ。

「あ、ありがとうございます……！ ってそんなことより、あ、あなたのお名前は……」

「ん？ ああ、プロングホーンだ。よろしくな。キミは？」

あたしは、あたしは……

「オオミチ……じゃなくて、ロードランナーです！ プロングホーン様！ よろしくお願いします！」

コヨーテにあわせて名乗り始めた『名前』を伝える。

「さ……様……？ ゴリラじゃあるまいし、私にそんな大層な呼び方は……」

「いえ！ あたしが勝手に呼ぶんです！ 呼ばせてください！」

初めて感じた尊敬の思い。それをぶつけてしまうのは、あたしのワガママ？ でもそうしたいから、そうする。そうやって生きてきたんだ。そうしよう。

「そ、そうか……ま、まあ、よろしくなロードランナー」

休憩を終えたわたし達は、再び道を歩き始めました。相も変わらず暑い陽射しに、乾いた空気ですけれど、休憩の前と比べると少しだけ陽射しが傾いていて、少しばかり歩きやすい気がします。

「広いですねえ……(こ)……」

イエイヌさんの言葉を聞いて、わたしは考えます。地図がどれくらい正確なのか疑問にも思いましたが、大雑把な形としては間違っていないのでしようし……

「地図では確か縦に広がったような……『おうち』の会った草原の広さ

とあんまり変わってなかった気がします……結構歩くことになりそうですね……」

「がんばりましょう！　ともえさん！」

わたしは彼女の返事に「ええー！」と答えます。

先をじつと見つめても景色に変わりが無いように思えますけれども、それでも確かに進んで居る筈。でしたら今日中に進めるだけ進んだほうが、他のフレンズさんに出会う可能性も高いでしょうし、何より、『運動会』の締め切り（と呼んでいいのでしょうか？）にも間に合うでしょう。少なくとも、開催中に飛び入り参加は出来ないのでしょうからねえ……。

「そうだ、イエイ又さん。イエイ又さんは『運動会』で参加しようかなって考えてるんですね？　何に参加するんですか？　かけっこって言っていましたけど……」

歩みの速度は変わらないものの、イエイ又さんは考える素振りをして、言いました。

「そうですねえ……私は短い距離よりも長い距離を走るほうが得意ですかねえ……だから例えばですけど……ロバさんやコヨーテさんがライバルですね、ルール次第ですけど……」

「ほうほう……」

知られざる……という彼女に失礼ですが、初めて知る彼女の『得意』なことです。

「短い距離だとどうなんですか？　遅いってことは無いんでしょうけれど……」

わたしの質問にイエイ又さんは少しだけ考えてから答えてくれました。

「ええつとですね……私は多分遅くは無いんですけど……速いフレンズは私よりもずうつと速いんですよ……」

横目に見えるイエイ又さんの表情は呆れているような表情です。

「ど、どういう……？」

「例えばですよ？　例えば……ともえさん、ちよつと止まって下さい」

彼女はわたしにそう言って、とてとてと先に小走りで進みます。

「いきますよー！」

どれくらいでしょう……百メートルくらい？　ともかく、それなりに離れた距離からイエイヌさんが手を振って大声でわたしに言いました。

「……？　はーいー！」

わたしが手を振って答えると、彼女は走り出します。みるみる内にわたしに近づいてくるイエイヌさん。絶対にわたしには出せないだろう速度でぐんぐんと——わたしの一步前で彼女は急ブレーキをかけて立ち止まりました。時間にして、恐らく数秒というくらいでしょうか。

「……ふう」

イエイヌさんはひと息ついて、わたしの隣に。

「は、速いですね……イエイヌさん……」

わたしの言葉にイエイヌさんは首を振ります。

「本気じゃないですけど、私の走りやすい速さがこれです……で、これよりもずつとずつと速い子がいるんですよ……」

わたしは思わず「ええ……」と驚きと呆れの入り混じった声を漏らしてしまいました。わたしのそんな声を気にせず、イエイヌさんは言葉が続けます。

「数字ってよくわからないんですけど、コヨーテさんが言うには、ソイツはお前の三倍くらい速いとか……」

彼女はそう言って再び歩き始めます。わたしはといえば驚きで少し歩き始めるのが遅れてしまいました。

「ど、どういうことですか……それ……」

「その方にはお会いしたことないので、わかりませんが……凄いですよね……」

想像していたよりもずつとずつとすさまじいフレンズの身体能力。それをわたしはひしひしと感じます。

「何か参加できるかも、とか思ってたのが間違いに思えてきました……」

「うーん……そんなことないと思いますよ？ ヒトが何が得意なのはイマイチわかりませんが……イヌの私がヒトを求めていたのは間違いないんです。だから、きつとヒトの得意なこと、ありますって」

そういつて微笑むイエイヌさんですけど……多分わたしはヒトの中でも運動が苦手な部類……もしかしたら、頭を使ったりですか、実は知られざる能力が……なんてこともあるかもしれないけど……。

「そう……なんですかねえ……？ とりあえず、わたしは見学ということ……」

わたしの言葉にイエイヌさんは残念そうな表情をします。

「そうですかあ……一緒に走れるかと思ってました……」

わたし、ひと言でもそんなこと言いましたっけ……？ 気持ちは嬉しいですけど、わたしが一緒に走ったとして、イエイヌさんの足を引っ張るだけでしょうし……。

「なんだかごめんなさい……いつか一緒に走りましょう？」

イエイヌさんは嬉しそうに「はいー」と答えてくれました。何か、わたしに出来ることってあるんでしょうか？ 『恩返し』だとか『イエイヌさんの為』だとか、そういう意味ではなく、フレンズの皆さんと一緒に……出来ることです。何か……うーん……。

あたしはそれから暫くの間、サバンナに居た。足が治るまで走れなかったから、なんだかつまらない毎日だったけど、プロングホーン様が時々様子を見に来てくれて、そこはある意味得したかなどか思ったりして。

ある日のことだ。あたしがよくいる木陰の近くでぼーっと日向ぼっこしていると、プロングホーン様が様子を見に来てくれた。良く晴れた日で、雨が降り続いていたのが終わって、なんだかカラツとした風が吹き始めてた日だったから、良く覚えてる。

「プロングホーン様って、走るの好きなんですよね、速いでもんね！」

あたしがそう聞くと、プロングホーン様は楽しげな表情で言った。

「ああ、そうだぞ。お前もそうだろう？ 判るさ、何となくだけだな」

プロングホーン様はあたしに手を差し出してきて、あたしはその手を取って立ち上がる。ぴよんぴよんと跳ねて足の具合を確かめていると、プロングホーン様があたしに尋ねる。

「具合はどうだ？ 走れそうか？」

足や足首を伸ばしてみる。

「はい！ 全速力は無理ですけど……」

「どうだ、一緒に走るか？ 無理はしなくていいが……」

思ってもない提案だった。乗らないわけがない。

「はい！ 喜んで！ 身体なまっちゃいますから！」

あたしはプロングホーン様の後ろについて、足の具合を確かめながらだけど、散歩を始めたんだ。

プロングホーン様は、あたしよりもずっと早くて、ずっと体力があつて、やっぱり凄いなって思った。あたしが足を痛めてなかったとしても、絶対に追いつけないし、追い越せない。あたしとプロングホーン様は、少しだけまわりよりも高い丘の上に到着して、休憩してた。そこに着くまで走ったり歩いたり繰り返してたけど、しつかり休むのはここが初めてだ。

「はあ、はあ……速いですね……流石です……！」

「嬉しいよ、ありがとう」

プロングホーン様の言葉とは違って、顔と目はどこか遠くを見ているようだった。

「もつと速いやつは居るからな、まだまださ」

フレンズだって生き物だから成長だつてするはずだ。鍛えれば鍛えただけチカラがついたり、足が速くなったり……そんな話は簡単じゃないだろうけど……。

「上を目指してるんですね……！ 凄いです！」

「うーん、あいつよりも速くつてのは目標だが……つと、噂をすれば、

だ」

プロングホーン様は丘の向こう側を指差して言った。

「チーターだな、私よりもずっと速い。まあ、スタミナは私の方が上だがな」

誇らしげに言うけれど、悔しくないのかな？　と思う。ちなみに、今でも。まあ、プロングホーン様のことだから、きつと、一緒に走りたいんだってそんなことを言うんだろうな。

「へえ……かけっこ何かしたんですか？」

あたしはあんまり興味なかったけど、聞き返すのが礼儀ってヤツだろう。あたしの質問に、プロングホーン様は首を振った。

「話しかけても、返事が無いんだ。すぐ走って何処か行っちゃおう。あいつなりのプライドというヤツだろう。どこかで私を認めてもらいたいものだが……どうしたものか」

プロングホーン様はとんとんと足で地面をたたきながら、腕を組んで言う。

「そうですねえ……なんだか面倒なヤツですねえ」

別にチーターのヤツを悪く言うつもりは無いけど、あたしの尊敬する方と仲良くしないのは、何か、ヤダなって思う。ワガママかな。

「そう言ってくれるな。あいつにはあいつの都合がある。ま、時間はたっぷりあるさ。持て余すくらいだ。いずれ、認めさせて見せるさ」

腰に手を当ててプロングホーン様はふふんと笑う。ヨユーシヤクシヤクというヤツ？　そんな姿にあたしは、プロングホーン様のことが、もっと誇らしくなった。

つい先ほどまで真っ青なくらいだった青空は、真っ赤に染まり、疎らに生える木々の影が長く長くサバンナの大地に線を引きます。もう今にも辺りは真っ暗になりそうなくらいの思いを抱いてしまします。

「今日はこれくらいですかねえ……後は身体を休めそうところを見

つけるまでもうちょっと歩くくらいにしましょう」

わたしは伸びをしながらイエイヌさんに問いかけます。

「はいー」

イエイヌさんの返事は一日の疲れを感じさせないくらい元気なものでした。彼女はそういうなり、遠くをにらむように見つめ始めます。

「ちよつと遠くですけど、小屋みたいなのが見えますね……最初の日
に泊まった場所みたいなの……」

「そうですね、ありがとうございます！　では、そこまで行って、今日は休みましょうか」

目的地が出来たこと、それが何よりわたし達を元氣付けます。

「それにしても……結構歩いた気がしますけど、どれくらい進めたんでしよう。その……運動会の会場までですけど……」

わたしの言葉にイエイヌさんは考え込みます。

「うーん……お昼に感じたにおいは確かに強くなっていると思います。なので、近づいてはいるんですけど……」

「参加が間に合うかどうか、ですよねえ……」

かけっこで参加しようかと考えているイエイヌさんは言うまでもありませんが、わたしだつて彼女が走る姿を見てみたいですし、他のフレンズさんがそうするところだつて、見てみたいのです。純粋な好奇心というヤツですね。

「もしかしたら、もう運動会自体終わっているかも……」

イエイヌさんがなんだかぞつとするようなことを言います。

「さ、流石にそれは……否定は出来ませんが、考えないほうがいいと思いますよ……?」

「そうですね……よく考えてみたら、皆さんのにおいもまだ新しいものの気がしますし……」

イエイヌさんは確認するように鼻をすんすんと鳴らしました。

「なんにしても、急ぐに越した事は無いですね、明日は早めに出発しましょうか」

その言葉から暫くして、目標であつた小屋に到着しました。

あたりはもう真つ暗で、小屋の中でぼんやりと光る古びた灯り以外に輝くものはありませんでした。空を見ても真つ黒な空に穴を幾つか開ける星ばかりです。普段ならば月が輝いているのでしようけれど、今晚の空には眠たげに瞳を閉じてしまったような細い線がぼんやりと浮かぶだけです。

がらりと扉を開け、わたし達は手にした荷物を床におきます。

「ふう、一日お疲れ様でした、イエイヌさん」

「ともえさんこそ、お疲れさまです」

床に腰を下ろしてわたし達は互いに労いあいます。こまめに休憩を取ったとはいえ、今日は今までで一番歩いたのではないでしょうか？ 最初の日の、草原を抜けた時と比べると、スタート地点がエリアの入り口からですし……。旅の始まりに思いを馳せていると、ふとカルガモさんの頭の羽の感触がよみがえってきました、軽くてふはふはしてて……。う、ん？

「ああーっ！」

わたしは思わず大きな声を出してしまいました。イエイヌさんは身体をびくりと動かして、こちらを見ました。

「び、びつくりしました……。どうしました？　ともえさん」

非常に申し訳ないです。ごめんなさいイエイヌさん。

「い、いえ……。失礼しました……。どうでもいいことなんですけれどね……」

イエイヌさんは不思議そうな表情で、首を傾げます。

「バンドウイルカさんも、フォルカさんも、マイルカさんも……。尻尾や髪の毛を触らせていただいていたなあと思いました……」

とても、とてもとても勿体無い……。惜しいことをしました……。次に彼女達に会えるのはいつの日か……。

「やつぱりともえさん、マニアックですよ……。そんな悔しがること無いですって……」

乾いた笑いを漏らしながら、呆れたように呟くイエイヌさん。わたしはそれを否定できませんでした……。

「私が居るじゃないですか、どうぞー！」

イエイヌさんはそう言つて、頭を差し出します。彼女は尻尾もこちらに寄せてくれていきます。

「うう……ありがとうございます、イエイヌさん……」

わたしが呟いて、彼女の頭に手を伸ばそうとした瞬間――

「大丈夫か！」

聞いたことのある声でしたけれど、とても慌てたような様子です。わたし達は声の方向を見ると、そこにはコヨーテさんの姿が……。

「何だ、無事そうじゃないか……つて、ともえとイエイヌか……どうした、大声なんて出して……」

勘違い、させてしまったんでしようね……。

「ご、ごめんなさい、コヨーテさん……お久しぶりです……」

わたしは彼女にぺこりと謝ります。

「どうもこんばんわ、コヨーテさん」

イエイヌさんは見知った顔が現れた為か、どこか気楽そうに挨拶をしました。

「ん、こんばんは。何時振りだっけか？　ともえ、イエイヌ。あつちの方にはあんまり行かないからなあ、俺は元々こつちの方で過ごしてるしなあ……」

「何時だかの夜以来、ですかね。その節はどうも」

わたしは改めて彼女に感謝の気持ちを伝えます。彼女の言葉が無かったら、もしかしたらわたしは今ここにいなかったかも知れませんが。コヨーテさんはふふんと鼻を鳴らして、口を開きます。

「ああ、そうだったそうだった。俺の言葉、役に立ったみたいだな」

「あれ？　ともえさん。何の話ですか？　コヨーテさんとお話したつて話は聞いてますけど……」

イエイヌさんにお話してなかったんでしたっけ。というか、それもそうです。あの時はわたしが旅について悩んでいて、きつとその悩みがイエイヌさんを苦しめることだと思っていた時でしたから……。

「コヨーテさんに会ったとき、わたしは悩んでたんですよ。旅に出るか出無いか……コヨーテさんの言葉のお陰で、ふんぎりがついたんです」

何時だつて、誰かのお陰でわたしは前に進めている。そんなことを思いました。

「そうだったんですか……なんて言っただけですか？」

「ええつと、確か……好奇心は——」

わたしの言葉をコヨーテさんは遮り、言いました。

「な、なんだか恥ずかしいからやめてくれないか？　せめて俺のいないところで……」

彼女は左手で顔を覆って居ます。

「そうですね？　カツコ良かったですよ？」

素直な感情を告げたつもりでしたけれど、なんだか意地悪なことを言ってしまったような……。

「だからだよ……けっこーカツコつけてたろう？　自分の前で話されるのも、ちよつと、な……」

何となく、彼女の抱いている気持ちがわかった気がします……。

「あはは……では、イエイヌさん、コヨーテさんとお別れしたら、教えますね」

「ふふつ、わかりました。楽しみにしてますね」

「あー……俺がいなくなつてからの話をするところ悪いが、今晚は俺も一緒に良いか？　ここ、ちょうどいいんだ」

わたし達のやり取りを聞いたから……というのは邪推でしょうね。

「どうしたんですか？　何かありましたか？」

イエイヌさんの質問にコヨーテさんが答えます。

「ん？　お前達も運動会の話を聞いてきたんじゃないのか？　会場から程ほどに離れてるんだ、ここ」

『運動会』……！　そうです！

「えつ？　そうなんですか？」

イエイヌさんが驚いた風に聞き返しました。

「ああ、じゃあそうなのか、場所まで聞いてなかったつとトコか。アルマーとセンのヤツ、適当な仕事したな……？　まったく……つと、それは置いといて——」

コヨーテさんは指を指しながら説明してくれました。かくかく

しかしかあつて開催されることになった運動会は、この道をもう少し
まっすぐ行つた大きな建物の中で開かれるとのことだ。

「ということは、参加はなんとか間に合いそうですね……良かったで
すね、イエイ又さん！」

「はいー」

喜びの色を抑えきれない様子のイエイ又さんでしたが、コヨーテさ
んは渋い顔をして言いました。

「……ん？ イエイ又は何に参加するつもりなんだ？ ひとつだけ飛
び入り参加できる種目が残ってるが……それ以外は締め切つてたぞ
？」

「ええっ……！ か、かけっこ辺りにと思つてたんですけれど……」

先ほどと一転して心底悲しいというような表情でぼそりと言いつ放
たれた言葉でしたけれど……

「あー……うん、締め切つてたな……」

無情にも否定されてしまったイエイ又さんは、黙りこくつて俯いて
しまいました。耳がしゅんとしているのは言うまでもありません。
そんな様子を見かねたのか、コヨーテさんが言いました。

「ま、まあ、参加がくじ引きになるくらい人気だったからな、そ、そこ
まで落ち込むことないぞ？」

「そ、そうですね、イエイ又さん。落ち込まないで……」

わたしはイエイ又さんを励ますために彼女の頭を撫でながら、言葉
を続けます。

「コヨーテさん。残りの種目って何なんですか……？」

一縷の望みを抱いて問いかけた言葉でしたが、コヨーテさんは表情
を曇らせます。

「それがなあ……まだ知らされて無いんだよ。さぶらいず？ とか、
よくわからんことを言つてたが……ああ、友達と参加出来るとか言つ
てたな。明日発表、明後日に本番だったはずだ」

「は、はあ……と、ともかく！ イ、イエイ又さん、まだ希望は残つて
ます！ 諦めないで！」

わたしの励ましが効いたのか、それとも単に彼女の好奇心のお陰か

はわかりませんが、イエイヌさんは顔を上げました。

「は、はい……お願いなんですけど……もし、ともえさんも参加できそうなら、一緒に、良いですか……?」

「ええつと……イエイヌさんの足を引つ張らなさそうなら……大丈夫ですけど……」

わたしの控え目な言葉（といいますけれど、実際わたしはイエイヌさんの邪魔をしないか不安なんですよ?）を聞いたコヨーテさんは笑います。

「ふふつ、気にしすぎだ、ともえ。勝ち負けだって大事だが、そういう催しじゃない。楽しく身体を動かそう、知らないフレンズと遊ぼうって趣旨だ。まあ……一部はそう思っただけ無さそうだが」

「なんだか不穏なことを言いますね……コヨーテさん……」。

「そうですね、ともえさん。私に手伝えることがあつたら手伝いますし、ともえさんが活躍することだってありえます! ですから、お願いします!」

イエイヌさんは少しだけ表情を明るくして言いました。はあ、わたしはイエイヌさんのこういう表情を見ると断れなくなってしまうんですよねえ……。

「わかりました……絶対とはいえませんが……参加しましょう」

わたしの言葉にイエイヌさんは顔をぱあつと輝かせます。

「はい! 楽しみにしていますね!」

「その意気だ、ともえ。何なのかは知らないが、俺も参加するつもりだ。ま、お互い頑張りようぜ」

むう……。

「既にプレッシャーですよ、それ……」

コヨーテさんは、とぼけたように「そうか?」なんて言っていますし、イエイヌさんは、なんだか対抗意識を抱いたのか「負けませんからね!」なんて言っています。わたしはイエイヌさんの期待に応えられるでしょうか……? なんだか不安ですけど、やれるだけのことをやろう、とは思いません。頑張りましょう……。

で、それから少しした日のことだ。あたしは足の痛みがなくなったから、ちよつと長い距離走ってみようかなって思って、サバンナを駆け回ったんだ。初めて見るヤツも居た。ぬぼーつとしてるドードーとか、いいヤツだとは思ったけど、苦勞しそうなヤツなんじゃないかなあつて思った。まあ、少し話をした感じ、長生きしてるらしいから大丈夫なんだろうな、うん。

しばらく走ったら、この前の丘の上に着いた。そこから遠くを見ると、海の方まで見えて、次の機会にでも遠くまで行ってみようかなって思う。うっすらとだけど、きらきらしてたから、絶対に行ったら綺麗だぜって、思うんだ。あたしはあんまり飛べないから、ひとつ飛びつてのはムリだけど……なんて考えてたら、またチーターが居た。「んー……？　寝てんのか？」

ぼそつと呟いて、あたしはチーターの近くに行く。この前は、何かヤなヤツだなんて思ったけど、話したことも無いのに決め付けるのも良くないしな。

「よう、チーター、だろ？」

木の根元で、陽射しを避けながら寝てたから、凄い眠そうにしながらこつちを睨んできた。ぐうって声が出そうになっただけど、我慢したんだぜ？

「……そうだけど、なによ」

ふわあつてあくびして、目を擦りながら身体を起こして、開口一番がそれか、って思ったけど、まあ、話してみないとな。

「寝てたのに、ごめんな。あたしは——」

「ロードランナーでしょ、知ってるわよ。なに、どうしたの？」

ちよつとだけあたしはびっくりした。なんであたしのこと知ってるんだらうって。

「いや、用ってほどじゃないんだけどな、ちよつと話がしたくてさ」
細目になってこつちをじつと見つめてきたから、あたしはまたぐうって声が出そうになる。

「……で？」

なんだか言葉にトゲがある気がするんだよな。

「お前って——」

「チーター」

あたしは咳払いをして続ける。

「チーターって速いだろ？ コツとかあんのかなーってさ」

「無いわよ？ 速いから速いの」

あたしは言葉に困って、黙っちゃまった。

「……おわり？」

「お、おう……」

退屈そうに言われたら、そりゃ何もいえなくなるぜ。お互い黙って、少しの時間が経った。あたしはあたしで何て言ったらいいのかわからなくなつて、焦っちゃつてた。チーターもあたしのことじつと見てきてたし……。

「あつ、そうだ。プ、プロングホーン様のこと、どう思ってるんだ？」
色々すつとばして、こう聞いたのは間違いだったんじやないかな、とは思ふ。でも、初めて会う性格のフレンズだったから、どうにもわからなくて、緊張してた。

「プロングホーン？ 様？」

チーターのヤツつたらくすりと笑いやがった。

「ヘンなの。様、だなんて。しよつちゆう走ってるなーとは思ふけど、どうかしたの？」

あたしはなんだか妙にムカムカしてきた。なんだかコイツとはプロングホーン様の話をしたくなくなつてきたから、話題を変える。

「別に……なんでもない。それと、なんであたしのこと知ってたんだ？
初めて話したろ？」

チーターは少し悩んで言った。

「……有名よ？ お気楽でお調子者なフレンズだつて」

あたしはむつとした。

「……なっ……だ、誰が……」

「コヨーテだったかしら？　ワタシ、あの子と話したことは無いけど、他の子と話してるの聞こえたわよ？」

あいつう……。

「ちよつとコヨーテ探してくる、じゃあな」

あたしはそう言って、チーターに背中を向けて走り出した。チーターが何か言ったような気がしたけど、もうあたしの頭はコヨーテへなんて文句を言ってやるかでいっぱい、聞こえなかった。少しだけ聞こえたのは「もっ——」みたいな感じだった。なんだったんだろうな。

「そういえば、どうしてコヨーテさんはここに？」

イエイヌさんが問いかけました。なんだか困った風にあははと笑ってからコヨーテさんは答えます。

「会場の方な、フレンズで一杯なんだよ。夜行性の子も居て、楽しいのはわかるんだが、ちよつと騒がしくてな……」

なるほど……。

わたしもイエイヌさんも「ああ……」というような声を出しました。

「まあ、悪いことじゃないんだがな……ゆっくり出来なくなっ……」

わたしもひとつ、思い出したことがあります。それは、ロードランナーさんに話して欲しいといわれたことです。

「コヨーテさん。ロードランナーさんに、ええつと……三日くらい前に『約束』の話をしたんですけれど……なんだったんですか？　『約束』って……」

「ん？　ああ、アレか、ともえ、ありがとうな。……まあ色々あってな、この運動会に参加しろよ、という話をしてたんだ。アイツ忘れてそうだったからなあ……」

呆れたようでしたけれど、どこか愉快気に彼女は言います。

「あはは……あの様子は忘れてましたよ……多分……」

「コヨーテさんは、今度こそ呆れたように笑ったのでした。

「まあそれはそれとして……約束のこと、ちゃんと話しておけばよかったな。お前達も参加するつもりだったなら、尚更だ……悪い」

「コヨーテさんは軽くお辞儀をする様に頭を下げましたが……。そもそもこの催し自体を知らなかったのです。そんな謝罪を受ける必要なんてありません。」

「そんな、コヨーテさんは悪くないですよ……」

「イエイヌさんはそう言っただけです。」

「そもそも、アルマーさんとセンさんがこーほー？ でしたっけ、で色々回ってたそうですし、タイミングが悪かったんですよ……」

「まあ……そうかもしれないが……。というか、アルマーとセンに最近会わなかったのか？」

「イエイヌさんは最後に会ったときのことを思い出そうとして考え込みます。」

「少なくとも、わたしは会って無いです。そもそも、アルマーさんとセンさんに会うために旅に出たというのもあるので……」

「コヨーテさんは「どうして会おうと思ってるんだ？」と不思議そうな顔をします。わたしが言い終わって少ししてからイエイヌさんが「ああっ！」と声を上げます。」

「確かに、この前お会いした時、話があるんだけどって言ってました……！ 色々あってお話を聞けずじまいでしたけど……」

「ん？ 少しだけ思い当たる節が……というか……」

「もしかして、わたしの事があったからでは……？」
「イエイヌさんはしまった！ というような表情になります。ことこのあらましを知らないコヨーテさんは「ん？ どういうことだ？」と呟いています。」

「あ、あの……その、と、ともえさんが悪い訳じゃ……」

「イエイヌさんはわたたと慌てながら釈明しました。」

「大丈夫ですって、そんなこと考えてもいませんよ」

わたしは、つとめて笑顔でイエイヌさんに告げます。ちよつとばか

り罪悪感はありますけど……これはどうしようもないことですからねえ……。

「わ、悪い、どういふことか説明してくれないか？」

何度目でしょう。このやり取り……。いえ、仕方の無いことですけれど……。

「ええつとですね、わたしは少し前まで、ずっと眠っていたみたいで――」

結局、コヨーテに会ったのは次の日だった。アイツの気に入ってるところとかよくいるところとか……けっこー捜し歩いたんだけどな。アイツったらサバンナと原っぱの境目辺りの林にいて、あたしが水を飲みに出かけなかったら、会えなかったと思う。

「おい、コヨーテ」

あたしが声をかけると、コヨーテは振り返った。

「おう」

おうじゃない。

「あたしのこと馬鹿にしたな？」

コヨーテは心当たりが無さそうに首を捻った。

「覚えてないのかよお……チーターのヤツが話してくれたぞ」

コヨーテは少し驚いた表情になって言った。

「ん？ チーターと話したのか？」

「まあな。ヤなヤツだなーって思ったぜ。つてそうじゃなくて、あたしのこと――」

あたしが本当に言いたい事を言う前にアイツは口を開いた。

「マジかよ……お前がアイツと話すなんて珍しいこともあるもんだ……雪とか降るんじゃないか？」

心底驚いたように言われると、あたしもコヨーテが何て言ったのかわんかよりも、チーターのほうが、ずっと興味が沸いてくる。

「……どういふことだよ。アイツ、確かにいいヤツじゃないだろうけ

ど、友達のひとりやふたり位、居るだろ」

「コヨーテは首を振った。

「いんや、俺の知ってる限りじゃ、いつもひとりだぞ？ ……なんでアイツと話なんか……？」

あたしはロードランナー様とチーターのことにについて話をした。少し長くなりそうだったから、水辺の方まで歩きながらだったけど、コヨーテは茶化したりしないので黙って聞いてた。

「——というワケだ。だから悔しくなって、アイツがプロングホーン様のことどう思ってるのか聞いたんだよ。信じられるか？ あたしのこともプロングホーン様のことも馬鹿にしたようなこと言いやがって……」

「コヨーテは何か考えてる顔をしてた。

「……とりあえず、だ。チーターのことを悪く言うのはやめとけ。アイツにもアイツの都合がある。つつけんどんな口調なだけで、悪いヤツじゃないぞ？」

つつけんどん？ は？ って聞きたかったけど、馬鹿にされそうだからやめた。

「そうはいうけどよお………いつそのこと、何かで一番を決めちまえばいいんだ。かけつことか、そんなのでさ………」

「ほー………面白いこと考えるのな、お前………何で決めるんだ？ どうやる？」

コヨーテはなんだか目をキラキラさせながらあたしのことを見てくる。あたしがコヨーテからこういう風な目を向けられるのって、初めてかもしれない。

「ん？ うーん………例えばさ、チーターって足が速いだろ？ プロングホーン様が認めてるんだから、そうなんだろ？ じゃああのふたりでかけつこでもすればいいんだ。あたしじゃ追いつけないだろうけどさ」

「ふんふん………距離は？ どれくらい走るんだ？ 得意な距離はフレンドズごとに違うだろ？」

「例えば、だぞ？」

あたしはコヨーテの質問に答えながら、思いついたことを言っている。どれくらい走るのかとか、得意な長さとか、その調整とか……。時々、コヨーテがあたしの言葉を否定したりもしたけど、馬鹿するよな言い方じゃなかった。なんだか真剣な表情と声で、コヨーテってこんな顔や声もするんだなあなんて思った。

「——つと、こんなもんだろ」

話が長くなりそうだし、川にもついた。面倒になって切り上げようとしたけど、コヨーテはそっぽ向きながらふんふん言ってる。あたしは横目でそんな様子を見ながら水をひと口飲む。

「……んく……どうしたんだ？　ヘンだぞ、コヨーテ」

流石にヘンといわれたからだと思っただけ、コヨーテはあたしの方に向き直った。

「悪い悪い、ちよつとお前の考えが面白そうだな。結構、考えるヤツだったんだなあ、お前。付き合い長いけど、初めて知ったぜ……」

ヘンなコヨーテ。

いつもならもつと気楽そうにあたしのこと茶化したりするだろう……とは思っただけ、頼られるのも悪くない気がしてきた。

「ふふん、そうだろそうだろ」

そしたら、コヨーテはあたしの頭をぺちつと叩いた。

「イタッ」

別に痛くは無かったけどな。強がりじゃないぞ。

「あまり調子に乗るなって……だから考え無しだって……」

そういえば……。

「で、話を戻すぞ。あたしのこと馬鹿に——」

またあたしの言葉を遮ってコヨーテが言った。

「それな、結構前の話だぜ。まだ雨が一杯降ってたところに、ええつと……シマウマだったかな？　お前の話はしたが……あたりにはフレンドの気配もなかったぞ……？」

あたしも不思議だとは思ってたけど、あのチーターだ。

「どうせ聞き耳でも立ててたんだろ。あいつらしい」

「だから、そんな風に言うもんじゃないって言ってるだろうに、まった

く……」

「コヨーテは溜息をつくようにして言ったけど、あたしは間違つて無いと思う。性格悪そうだもん、あいつ。」

「ま、それに関しては、だ。俺の思いつきがうまくいけば、色々変わるかもしれないが……ともかく、一方的な悪口なんて他のフレンズには言うなよ?」

「コヨーテは相変わらず、あたしに諭すように言う。」

「広いようで狭いパークだ。ぎすぎすするのが一番困る。仲良くしろ、とまでは言わないが……」

「はいはい、わかったよ」

まあコヨーテのいうことも一理ある。あたしだって、顔も合わせたくないようなヤツが居るつてのも、居心地わるいしな。

「……で、この後どうするんだ? 一緒にどっか行くか?」

あたしの提案にコヨーテは首を振って否定した。

「俺はゴリラのところに行くつもりなんだが、お前も行くか?」

コヨーテは笑いそうな表情で言った。

「あたしが行ったら面倒なことになりそうだし、いや」

コヨーテは本当にマジメなヤツだなあ……なんで行くのか知らないけど、トシヨリクサイ? なんて言ったら良いんだろうな。まあ、あたしはあんまり得意じゃない。お説教はこりこりって感じかな。わかんねーけど。

あと、アイツがよく一緒に居るアムールトラも苦手。こえーもん。どんなヤツかは知らないけど……そもそもアイツ喋ってくんねーし。「よっし、俺は行くぜ、じゃあな」

川の水をごくごくと飲んで、コヨーテは走っていった。

「せっかちだよなーアイツ」

速いのはいいことだと思うけど、あたしの返事くらい聞いてもいいんじゃないかな。そう思う。

その後、あたしは何となく原っぱの方に行こうと思って、がーっと走った。海を通らなければ、川を渡ってまっすぐ行くだけだし、距離も別に遠くない。足がどれくらい治ったのかも確かめるのもって

こいだったからだ。

「やつぱごっちは涼しいなあ……」

フレンズによつては暑いくらいかもしれない。でも、時期を選ばないと凍えるハメになる。そのまま草の生えていないところを辿る。昼過ぎくらいだったから、他のフレンズものんびりしてるんだろう。あんまり周囲に見当たらなかつた。

気付けば広場を通り越して、ヘンな建物があるところまで来た。まるっこくてちっちゃな丘みたいになっていたヤツで、そこには何時もアイツが居た。フレンズじゃなかつたけど、皆から、要するに、愛されてた。

「元氣してっかなーアイツ」

あたしはその建物の周りを一周して、誰もいないことを確認する。

「どっか行つたか、それとも寿命か……寂しいよなあ、こういうの」
フレンズの寿命。それは基本的に長い……らしい。

あたし達と仲良くしてたらしいヒトつてヤツとあんまり変わらな
いか、それよりも長いフレンズも居るとか昔、ゴリラが言つてたつ
け。実際はどうだか知らないけど、まあフレンズじゃない子達と比べ
たら、そりやあな。

あたしはアイツがよくいたところの隣にしゃがみ込んで、空を見つ
める。

「ふん……ま、仕方ないんだらうけどなあ……」

あたしが空を飛べれば、もつとごっちに來たんだらうか。あの子が
どうなるうが、あたしの所為じゃないのはわかるけど、ちよつと悲し
い。もつと会うべきだったのかなあ……。

あたしが珍しくしんみりしてたら、建物の中からフレンズが出てき
た。

「あれ……？ どなたですか？」

イヌっぽい子だ。耳とかしっぽが少しだけコヨーテに似てた。
きよとんとした表情であたしに問いかけてきたその子は、なんだか若
い匂いがした。あたし、別に鼻が良い訳じゃないけどな。あと、なん
だか寂しげな目をしてる気がした。

「……！」

あたしはなんだか涙が出そうになったけど、こういうときの礼儀ってヤツは知ってる。

「あたしはロードランナー。お前は？」

何となく、わかっているんだけどな。あたしは奇跡って言葉、好きじゃない。なんだかずっと凄いヤツから『貰う』みたいで、悔しいからだ。

でも、ま、これは奇跡ってヤツなんだろう。認めるさ。認めるよ。

「結構大変だったんだな、ともえもイエイヌも……」

ひとしきり話を終えると、コヨーテさんは呟きます。

「よく言われます……でも、わたしが好きで始めたことなので……しなくちやいけないって思いもありますけど……」

わたしの言葉に続けてイエイヌさんが口を開きます。

「私だってそうです。ともえさんのために、私ができることをしたい、私も一緒に居たいって、そう思っただけですから……」

わたし達の言葉を聴いて、コヨーテさんは考え込むように黙り込んでしまいます。

「……なあ、ともえ」

「はい、どうかしましたか？」

妙に真剣な口調に、わたしは身構えます。

「ゴリラに会って来い。一応アイツは島では長老として動いてる。オサとか言うヤツも居る。アイツは否定してるがな……。多分、お前の知りたいことを教えてくれるかもしれない」

想像もしていなかった言葉にわたしは固まってしまいます。

「お前、ヒト、なんだろう？ アイツはまだパークにヒトがいた頃から生きてるからな。お前の知りたいことが全てわかるのかといわれると、わからんが……それとイエイヌ」

コヨーテさんはイエイヌさんの方に向き直ります。

「こんなことは言いたくないが……自分のことも考えろ」

イエイヌさんは「へ？」という表情になります。

「いや、軽くでいいから、お前がともえが居ようが居まいがやりたいことと考えておけ。多分、それは大事なことだ」

イエイヌさんはうーんと考え込みました。そんな様子を尻目にコヨーテさんはぼそりと呟きます。

「俺も年取ったかなー説教することがあるとはなあ……」

「へ？ コヨーテさん、お若いですよ？ とてもおばあさんには……」

わたしの言葉をコヨーテさんは笑いながら否定します。

「違う違う。フレンズだしな。外見じゃなくて、心の問題だよ」

とんとんと自分の胸を指で叩きながら、言いました。

「は、はあ……」

わたしは釈然としない表情をしていたのでしよう、コヨーテさんはくすりと笑います。

「……つと、結構話し込んだな、寝ようか、明日は早いぞ」

彼女が促し、わたし達は眠りにつくことになりました。わたしは寝袋の中に、イエイヌさんは寝袋を下に敷いて、その上に丸くなって寝ることになります。と、何かに気付いたようにイエイヌさんが立ち上がります。

「これ、スイッチ？ ですかね……？」

そう言って彼女はぱちりと部屋の電気を消しました。消灯できたんですね、ここ……。

「おお、助かるぜ、ありがとうな、イエイヌ……というか、どこで見つけたんだ？ その袋……便利そうだな」

コヨーテさんの感謝に、イエイヌさんは「いえいえ」と答え、床に寝転がります。

「海の方で、どなたかの忘れ物をお借りしたんです。旅の間だけ、ですけど……」

「そうか、大事に使えよ」

わたし達はそろって「勿論です」と応えました。そんな風にして、わたし達は眠りにつきます。

明日の種目発表への緊張感も勿論ありますけれど、ゴリラと呼ばれた方がわたしの何かを知っているかもしれないという事実が心で震えています。明日の朝にでも、水のありかとあわせてコヨーテさんに聞きなおしましょう。

今更ですけれど、わたしの旅でわたしの過去を知るといふこと。その目的は一步でも前進しているのでしょうか。そう思いました。

きつと明日、アルマーさんとセンさんにお会いするという目的は果たせるでしょう。そして「その後何を目的に旅をするのか」という思いだつて抱くことになつたと思います。それが、当面は、ゴリラという方に会いに行くという事で決まりました。偉い方の方ですし、なんだか緊張してしましますが……今から案じていても仕方の無いこと、とにかく今は明日に備えて寝ることが大切でしょう。明日から、忙しくなりそうです……！

イエイヌと会つてから、暫くして、コヨーテがあたしの寢床にやつてきた。

「よう、おはよう」

あたしはいつもの朝やるように日向ぼっこしてた。うとうととしてた所為で反応が少し遅れる。

「……んお、おはよ」

ふふんと胸を張るようにして、コヨーテが言った。

「運動会が開催決定したぞ、お前のお陰だ」

まるで意味のわからないことを言つてたし、ぼけえつとしてたから、適当に応えた。

「そう、ふわ、あ……」

「何だ、興味無さそうだな。お前の話があったから決定したんだぞ？」

喜べ……ってのは違うか。お前も参加するだろ？」

そもそも運動会が何なのかつてのは置いといて……。

「楽しいのか？ それ」

「ん？ 一応、目的は楽しく身体を動かそうって感じだな。まあ、順位が決まったりもするが……」

順位、決まる、身体を動かす。ここで少し興味が沸いてきた。「じゃあ、やる」

あたしは欠伸びながら聞いてたけど、コヨーテは凄いうきうきしてたと思う。

「そうか！ よし、じゃあかけっこで決まりだな。約束だぞ！ 俺も出るからな！ プロングホーンとチーターには伝えておくれ。じゃあな！ 後はこっちで連絡係決めて……細かい予定も……」

あたしはぶつぶついいながら去っていくコヨーテの後姿を見送る。あいつの言葉の中に、チーターやらプロングホーン様やら出てきたから少し興味が沸いたけど、眠かったし、寝なおしたんだな。まあ、また話されるだろうって思ってたしな。

幕間 4

シャワーを終え、わたし達は建物に戻り、髪や衣類が乾くのを待ちながら、寝支度を整えます（と言っても、わたしが上着を脱いで、寝袋を床に敷くだけですけれどね）。

そんなゆつたりとした夜を過ごしていると、時間に余裕があるからか、余計な興味が沸いてきました。

「あの、イエイヌさん」

「はい、何でしょう？」

ごろりと寝転がっていたイエイヌさんでしたけれど、わたしの問い掛けに姿勢を直して、正座で私の方に向き直ります。

「イエイヌさん、水着、着てみませんか？」

イエイヌさんは、へ？ という疑問の声をあげ、首を傾げました。

「あ、いや、その……単なる好奇心です。忘れてください……」

昨日、わたしが着替えていたときに抱いた疑問。それは、イエイヌさんにとってわたしが着た水着のサイズが小さいのではないか？ というものです。

もちろん、単純に彼女の水着姿も見たいというちよつとした好奇心もあります。そんな疑問や興味を解消したい、と思つたのですけれど……失礼でしたでしょうか？ イエイヌさんは別段の間を開けず、応えてくれました。

「いいですよ」

今度はわたしが「へ？」という番でした。

「私も少し興味があつたので……普段と違う格好つてしたことないですし」

イエイヌさんはそういうや否や立ち上がり、水着の架かっている窓際へと歩いていきました。わたしも彼女の後についていくようにして、移動します。

「ええつと、どれを着てみますか？」

わたしが尋ねるとイエイヌさんはおずおずと一着の水着を手に取りました。

「えへへ……これ……」

彼女が照れながら差し出した水着は、わたしが昨日身につけたものでした。わたしの疑問を解消するためにも幸いな選択ですけれど、いざとなると、なんだか恥ずかしいですね。

「……じゃあ、着てみましょうか。手伝いますよ」

わたしの言葉をうけて、イエイヌさんは上着を脱ぎ、その次にシャツ、そしてスカートを順番に脱いでいきます。わたしは脱いだものを預かったり、ボタンを外すのを手伝ったりしていましたが、彼女が肌着だけを纏うころ、わたしの手は止まります。

「イエイヌさん、ストップ」

「はい？」

わたしとは違ってしつかりとふくらみの見て取れる胸元が、わたしとは違って柔らかで丸み帯びたお尻が、そこからなめらかに伸びる両足が……柔らかな質感のパステルカラーの淡い色合いの肌着や、二の腕までを覆う長い手袋ですとか、ショーツまでを覆うストッキングですとか……そういった衣服に包まれています。白みがかつて透き通るような彼女の肌、そして肢体は、わたしに素直な感嘆の吐息を漏らさせるものですし、ずっと眺めていたいとさえ思いますけれど……。

「さ、さすがにもう手伝わなくてもいいですよね？」
礼儀、あるいは、常識。そういった類はわたし個人の感情よりも優先されます。

「へ……う？ えっ、まだ脱ぐんですか？」

「そうですね……わたしがそうしていただけますように……」

「ストッキングと手袋はともかく……濡れるわけじゃないので全部脱げとは言いませんが、せめて下着は脱ぎましょう？ ……わたしはあっち向いてますね」

わたしの言葉に、イエイヌさんは「はい」と応えます。それから少しして、彼女は言いました。

「着れましたー！ ともえさんー！」

物音から察するに、少しばかり手間取っていたようですけれど……。大丈夫だったのでしょうか？ わたしは振り向いて彼女の姿

を見ます。イエイ又さんの格好が少しばかり素っ頓狂なものでしたので、わたしは思わず「わお……」と声を出してしまいました。

「……？　ど、どうしました？　わ、私、間違えちゃいました？」

「い、いえ……わたしの説明が間違えてたんだと思います……」

まさか、手袋とストッキングの上から水着を着るとは思わなかったんですもの。「その手があったか！」とさえ思ってしまった。当然、ショーツも穿いたままなのでしよう。

「……に、似合いますか？」

不安そうに尋ねるイエイ又さん。わたしが困ってしまったている所為でしょう。イエイ又さんに不安な気持ちをさせてしまいました。

「ええ、似合ってますよ、イエイ又さん。ただ……ええっと、そうですね、マニアックですね……」

似合ってはいるんですよ？

「ま、まにあつく……？」

「いえ、忘れてください……可愛いですよ」

イエイ又さんは「はあ……」と不思議そうにしています。それにして、でも、です。

「やっぱりサイズ小さくないですか？　それ」

彼女は水着が食い込むのか、胸元やお尻のあたりを弄っています。一歩近づいてよく見てみると、案の定、彼女の白く柔らかな肌を強く握り締めたように食い込んでいる水着が見て取れます。

「そうなんですかねえ……なんだか動きづらいです……ちよつとだけ痛いですし……」

イエイ又さんは困ったような声で言いました。

「でしたら、すぐ脱いじやいましょう。怪我とかしても嫌ですし、水着が破れても困りますから……」

ん……？　あれ？　何か忘れているような気が……それも、とてもとても重要な何か……

「ああつ！　イエイ又さん……し、尻尾は……？」

「そうなんですよお……中に入れるんですか？　足のほうから出すんですか？　通ってくれないので困っちゃいます……」

イエイヌさんは心底困ったような表情で、わたしに背中を見せませす。彼女は背筋にそって尻尾を水着に入れていているようで、その部分だけ少しだけふつくらとしています。なんともいえない不思議な光景を目の当たりにして、わたしによからぬ感情が芽生えてきました。

「あのう……辛いところ申し訳ないんですが……イエイヌさん、お願いが……」

「はい、何でしょう？」

「あの、その……頼みづらいんですけれども……」

わたしが言い出せず迷っていると、イエイヌさんは自分の胸をとんと叩いて言いました。

「ほかならぬともえさんのお願いです！ 何でも大丈夫ですよー！」

そ、そこまで言うなら……甘えさせてもらいましょ……。

「で、でしたら……嫌だったら断つてくださいね？ ……その状態の尻尾を触らせてもらえないかなあと……」

「は……はぁ……」

どこか納得しかねている様子です。

彼女の、ふだんのもふもふとした尻尾は、それこそいつでも触れます。ですけれど、何かに包まれていて、ぴっちりとした尻尾に触れることができる機会なんて、次にあるとは思えないのです。わたしはイエイヌさんにそう説明しました。

「へんな所に拘るんですね……いえ、良いんですけど……どうぞ」

わたしはイエイヌさんに感謝の意を示しながら、彼女のしつぽにゆつくりと手を伸ばします。手が彼女に触れると、くすぐったかったのです。イエイヌさんの身体がぴくりと動きます。水着のざらざらとした感触の中に、しつかりとした固さのある尻尾の『芯』(と言った方が良いのでしょうか)があることが判ります。撫でるように手を動かすと、その『芯』の長さですとか、彼女の尻尾が普段はどれほどもふもふとしているのか色々なことが頭を過ぎります。

「これはこれで……なかなか……ふむん……」

わたしはその不思議な感覚に夢中になってしまっていたのですけれど、くすぐったさの限界が訪れたのでしよう、イエイヌさんが困っ

たようにわたしに言います。

「あの、その、くすぐつたい、です……」

「あっ……ご、ごめんなさい、楽しくて、つい……」

わたしは彼女の背中から手を離して謝ります。イエイヌさんは「何が楽しいんだろう？」と訴えたげな、眉間に皺を寄せた表情でしたけれど、少しして、「ああ」と呟きました。

「……ともえさんの、さっきの言葉の意味、判った気がします」

「あ、あはは……そ、そうですか……」

わたし、そんなにマニアックでしょうか……？

「あー、そうです！ 面白いこと思いつきました、ともえさん！」

わたしの心に唐突に訪れた疑問をよそに、イエイヌさんは手を打ちました。

「どうしました？」

「ともえさん、オヨウフク？ の交換を試みませんか？」

わたしは思わず「ほほう」と呟きます。

「面白そうですね、やってみましょうか！」

順序からして……

「わたしがイエイヌさんの服を着るので、先に着替えますね。その間に、イエイヌさんは水着を脱いでいてください」

わたし達は後ろを向き合い、着替え始めます。下を向くと、わたしの肌着越しにわずかなふくらみが見えます。……見えます！ そりゃあ、わたしだって、女の子ですもの、少しくらいは『ある』筈です……ありますよね？ それはそれとして、イエイヌさんのシャツとジャケット、それとスカートを身につけましょう。どうやら少し丈が大きいようで、裾が余りますし、ゆったりとした感覚……体系の差ででしょうか？ 何となく、洋服から「お前はまだ子供だよ」といわれている気がしてきます。

「ぐぬぬ……」

「どうしました？ ともえさん」

わたしのうめき声が聞こえたのか、イエイヌさんがわたしの心配をしてくれました。

「い、いえ、なんでも……それよりも、どうぞ、わたしの服です」

わたしは後ろ向きのまま、彼女に服を手渡します。彼女が受け取るのを確認すると、再びわたしは考え込んでしまいます。別に誰かに見せるようなものでも無いのに、どうしてイエイ又さんの身体に羨ましさや憧れのような感情を抱くのでしょうか……？

例えば胸が大きかったとして、何か得することも無いのでしょうか……。というか、わたしは自分の年齢さえ正確にわかっていないのですし、ずっと眠っていたわけですから……色々と仕方の無いような気がしてきました。他の『ヒト』が居れば比べることも出来たのでしょうか……。

と、それはそれとして、スカートはなんだかそわそわしてしまいましたね……。目が覚めてから一度も足を通したことが無いからでしょうか？ 可愛いとは思いますが、わたしは何となく苦手な気がします。あ、でも、半袖のジャケットとシャツは中々良いですね。動きやすいですし……。似合うか？ といわれると少し疑問ですけれど……。「……？ イエイ又さん？」

背後のイエイ又さんの動く気配や音を感じられず、声をかけます。それまで耳に入るのは彼女の呼吸の音だけでした。

「わふっ！ は、はい！」

「着方わかります？ 大丈夫ですか？」

イエイ又さんは慌てたように「大丈夫です！」と叫びましたけれど……本当に大丈夫でしょうか？ とうかが慌てすぎでは……？

少しして、イエイ又さんが着替え終わったようです。

「できました！」

わたしは振り返って彼女の姿を見ます。わたしって普段こんな格好をしているんですね……。イエイ又さんの姿は、可愛いらしいことは言うまでも有りません。ですけど、全体的に丈が短いような印象を覚えます。

「おお……なかなかお似合いです、イエイ又さん」

「ともえさんこそ、似合ってますよ！ 特にスカート？ っていうんです！ たっけ、可愛いです！」

お互いに思った感情を述べ合ったのでしようけれど、お互い見慣れた服装が入れ替わっているからか、奇妙なような、不思議なような……。

「そ、そうですか……？」

わたしはイエイヌさんの言葉を受けて、くるんと回ります。わたしが回る勢いに合わせて、ふわりと浮かぶスカートの裾。はたから見たから可愛らしいのでしようけれど、いざ自分がするとなると、少しだけ楽しさを感じられる他には恥かしさしか感じません。

「おお……そんなことが……」

イエイヌさんはなんだ感心したような言葉を発し、続けます。

「それにしても……私の格好を、ともえさんがしてるっていうのは……なんだか凄い不思議な感じがしますねえ……」

そんなことを言うイエイヌさんですけど、改めてみると、彼女は彼女で、とても扇情的？　な格好をしています。丈が短いためにシャツの下からちらりとおへそが見えていますし、下腹部……というよりも足の付け根、腰骨の下辺りで履かれたズボンの所為で、鼠蹊部（何故わたしはこんな体の部位の名前を……？）の上の方がちらりと見えています。

「あの、イエイヌさん。ズボン、下に履き過ぎじゃないですか……？」

なのでわたしの疑問ももつともなのです。後ろから見たら、きつとお尻が半分くらい見えているでしょう。

「いえ……その……しっぽを外に出そうと思ったら、つい……」

「あー……なるほど……」

わたしは確認しようと思って彼女の後ろを覗き込みます。先程の水着とは違い、彼女の尻尾は虚空に開放されていました。それでも、いいえ、それだからこそ、彼女のお尻——白く透き通るような肌の、柔らかな質感の、指を食い込ませたくなってすらしまうほどの、小ぶりでありながら、何故だか心を掻き乱してしまうような——が三分の一ほど飛び出していますし、ズボンの腰の部分がそこに食い込んでさえいます。

「……流石に、えつちですよ、イエイヌさん」

「はい？ え？ ど、どういう……」

何故『えっち』なのだと思ったのか、わたしにはイマイチわかりませんけれど（わからないんですよ？ いいですね？）それはさておき、普段の生活を送る上であまりにも不都合でしょう。

「その、良くわからないんですけど、ともえさんの服が『えっち』？ という……？」

わたしは首を振ります。そんなわたしが痴女のような言い方をしないで下さい。

「いえ、今のイエイ又さんの姿のことです。流石に、はい、これでひと前には出せませんよ……」

「出ませんよお……！」

困ったように叫ぶイエイ又さん。わたしはイエイ又さんの声色ではっと正気に戻ったような気持ちになります。

「ご、ごめんなさい……ちよつと、イエイ又さんが可愛らしいのであわててました……」

わたしの言いつくろうのような口調で何かを察したのか、イエイ又さんは「はあ……」といます。

「ど、ともかくですね……似合っているとは思うんですけど……サイズがあつて無いような……動きづらくないですか？」

わたしの言葉を受けて、イエイ又さんは身体をぐるりと回します。「うーん、そうでもないですよ？ ズボン？ っていうんですか？

動きやすいですし……なんだかともえさんに抱きしめられてるみたいで、私はとっても幸せな気持ちです……えへへ」

照れながらそんなことを言われましても……嬉しさよりも、恥ずかしさのほうがかえって大きいような……。改めてみると、彼女の尻尾は楽しいのか嬉しいのかはわかりませんが、大きくぶんぶんと振られています。

「どうしてそんな事、恥ずかしげも無く言えるんでしょう……？」

口にし終わって、わたしははっとします。思っていた事が口に出てしまった……！

「へ？ 恥ずかしいこと言っちゃいましたか？ 私……」

イエイ又さんは知らず、何かしでかしてしまったことを恥じるような口振りです。

「あ、いえ、そ、そのう……ごめんなさい、口を滑らせてしまいました……」

わたしは謝罪の後、言葉を続けます。

「それと……その、イエイ又さん。わたしの格好、どうでしょうか……？　へんじやないですか……？」

繰り返しになってしまいました。どうしても不安なので聞いてしまいました。

別にこれでどなたかの前に出るといいうワケでもないのに……。

「へんじやないですよー！　可愛いと思いますー！」

イエイ又さんは自信ありげに言い切りました。

「そ、そうですか……？　なんだかサイズも合ってますし……着心地はいいんですけれども、何となく落ち着かないような……」

わたしは素直な感想を伝えたつもりなのですけれど、イエイ又さんは不思議そうな表情です。

「うーん……今まで意識したことないです……そういわれると、私も、なんだか、違和感があるような……胸の辺りとか……」

やっぱり……。どうしてでしょう。なんだか不思議な感情が胸にふつふつと湧いてきます。羨ましさとか嫉妬とか、そんな感情のない交ぜになったような……。

「あ、あはは……イエイ又さんがなんだか羨ましいですよ……はは……」

わたしの笑い声は意図せず乾いたものになっていったようで、イエイ又さんは申し訳無さそうな顔になります。

「な、なんだか、ごめんなさい……」

「いやあ……こればかりは、イエイ又さんが悪いことでも無いですし……」

愚痴のような自嘲のような……そういう言葉は控えましょう……そう思います。

わたし達は服を着替えなおします。

「ふわ、あ……もう遅いですね……張り切りすぎちゃいましたね……」
イエイ又さんもどうやら眠そうな様子。

「ですねえ……ふあ……えへへ、つられちゃいました」
お互いあくびをひとつずつ。なんだか明日の出発が想像できないような、そんな穏やかな瞬間でした。

いそいそと彼女は寝袋を広げ始めます。わたしもそれに倣って寝支度をすすめることにしました。

「おやすみなさい、ともえさん」

彼女は床に敷いた寝袋の上に寝転がります。

「はい、おやすみなさい、イエイ又さん」

わたしは寝袋の中へ。

灯が消えた為に、星の光が疎らに差し込む室内で、わたしは考えます。明日からの旅がどれくらい大変なのだろうか？ 何か得られるものがあるのだろうか？ 『しなくてはならないこと』はあるのだろうか？ 話に聞く『運動会』では何が起こるのだろうか？ 疑問は、それこそ、尽きません。

それでも前に進むしかないんです。前へ、前へ。立ち止まるのが無意味だなんて、こんなわたしですもの、言えません。けれど、思うんです。ここで立ち止まったら、戻ったら、何も得られずに終わる。イエイ又さんだけじゃなく、今までに出会ったフレンズの皆さんも、きっと休んでいいよと言ってくれる気がしますけれど、違います。何よりも、『わたし』が立ち止まることを許せないのです。

イエイ又さんの元から離れると伝えた時の、彼女が抱いたであろう葛藤や思いを無視して、ワガママを言って歩き出して、それをワガママでやめるなんてこと、わたしがわたしを許せなくなります。きつと立ち止まったら、何かを成し遂げずに終わる人生が待ち受けているのです。

進まなくては、前へ、前へ……。旅はもう、わたしにとって『したこと』であると同時に、『しなくてはならないこと』になりつつあります。それが良いことなのか悪いことなのかはわかりません。けれど、旅を終えて、そうして初めて得られる何か……それがあると信じ

て。

無くったって構いません。仮に、旅の果てにわたしが何も得られなかったとして、全てを失ったとして、それでも、旅を終えたという事実だけが、胸に残る。それでも構わないのです。少し……いえ、少しじゃないです、かなり寂しいですけど……どうしようもなくこびりついてなくならない挫折なんかよりも、儚く輝く達成を……わたしは……わたしは……

「明日から、また頑張りましょうね、イエイ又さん」

わたしの言葉はイエイ又さんには届きませんでした。彼女はもう眠りの中です。くすりとわたしは笑います。

「おやすみなさい」

わたしはそうして、眠りにつきました。

夢を、夢を見ました。

視界は真つ暗で、音も無く、感じるのは自分の体の感覚だけ。それでも、大切な何かが身体から流れ出ていくようで、腕に、足に、力が入らなくて……不思議と夢の中のわたしは恐怖を覚えておらず、わたしは、ただただ、悲しかった。悲しさの理由はわからず、どうして悲しいのかという疑問さえ沸いてきます。何かを成し遂げようとして、失敗したのでしょうか？ それとも、何か大切なモノを失ったのでしょうか？ わかりません。けれど、ただただ悲しいのです。何かを暗示するようで居て、何かを思い出させるようでいて、けれど何もわからない。そんな夢でした。

「はっ……」

悪夢……と言っているのかはわかりませんが、心中穏やかでない心地で、目が覚めました。あたりはまだ夜明けというにはまだ薄暗く、地平線から陽光が漏れ出ているに過ぎません。また、気温は眠る前と比べると少しひんやりとしています。肌寒いくらいの感覚は、きつと体中に滲む汗の所為だけではないでしょう。

「はあ、はあ……ゆ、夢……ですよね……」

どうしようもなく悲しい気持ち。

目覚めたばかりの寝ぼけたわたしの精神は、まだその悲しさを引きずっていました。身体を起こして、周囲を見渡せば、わたしの隣には丸くなっているイエイヌさんが居て、扉の近くには、イエイヌさんと似たような寝方をしているコヨーテさんの姿があります。

昨晚の夜から地続きの現実であることを、わたしはゆっくりと認識し、心を落ち着けます。

「み、水でも飲みましようか……確か、川が……」

小屋の灯りを消し、眠りに着く直前に尋ねたのですけれど、確か道を横切ってまっすぐ行けば川辺とかなんとか……コヨーテさんから聞きましたっけ。確かそんなに距離は無いといっていました……。

わたしは枕元（と言っても枕はありませんが）に置いた帽子を被り、

寝袋を出ようとした時、小屋の透明な壁に、顔をべったりとくっつけて中を伺う少女の姿が、わたしの目に入ります。その少女とわたしと、目があいます。わたしは驚きでぼかんと口と目を開けていたのですけれど、その少女は、数秒の間を置いて、にたりと笑いました。壁にびったりとくっつけられた為か、その笑顔は歪んでしまっていて、心なしか、獲物を見つけた野生動物のように思えてしまいます。

「ひよえっ……いー！」

その笑顔は、悪夢にも似た夢を見たわたしにとって、十分な恐怖でした。彼女がどういう意図を持ち、その表情をしたのか。それは、今のわたしの精神に取って悪い方への解釈しか出来ません。

「……うん……どうしました？　ともえさん」

わたしの小さな悲鳴を聞き取ったのか、イエイヌさんが目覚めました。心配するように周囲をきよろきよろとして、今度はイエイヌさんがその少女と目が合います。イエイヌさんは「わふっ！」と驚きの声をあげて固まりました。その少女は壁から顔を離して、腕を組んで考え込み、口を開きました。

「おはよー……えっとお……入り口はあ？」

敵意が無い……というよりも人懐っこいような丸い声でした。

わたしはその少女の意図を測りかねていましたけれど、とりあえず悪い方では無いように思われました。彼女の声を聞いて、イエイヌさんは、声こそ出しませんでしたが、ドアのほうを指で示します。イエイヌさんの示したほうに、その子は向いましたが、扉の前で再び立ち止まり、疑問の表情を浮かべます。

「……うっ……お……うっ……入っ……いいのお？」

困っているような、遠慮しているような、そんな声色です。わたしは立ち上がって、彼女を迎え入れようと扉の方へと一歩踏み出すと……

「ふあ、あ……ううん……どうした？　流石に早過ぎるぞ……？」

コヨーテさんが目を覚ましました。彼女は顔を上げて周囲を見回します。

「つて、ドードーじゃないか。珍しいなこんなところで……おはよう」

「おはよお、コヨーテちゃん」

羽織ったマントから小さく手を出して、ドードーさんは返事をしました。その様子を見て、わたしはほっとしました。悪い方ではない。それが判れば十分です。何より、コヨーテさんのお知り合いみたいですし……。わたしは扉を開き、彼女を迎え入れます。ドードーさんはそのままのんびりと歩みを進め、建物の中へ。

「先ほどは失礼しました……。わたしはともえです、初めまして」

ペこりと頭を下げて、彼女に自己紹介します。イエイヌさんも同じようにしてわたしに続きました。

ぼんやりとした薄暗がりの中で、改めて彼女の姿を観察します。

髪型は黒が基調ですけど、カチューシャを境に前髪は明るい茶色になっていて、先端は再び黒色になっています。頭には羽や耳のようなものはありません。可愛らしくまるっこい顔つきですし、楽しげに微笑む表情でしたけれど、彼女の瞳は何処か冷たさに似た違和感のようなものを抱かせます。

また、首元と裾に明るめの茶色のもこもこが付いた黒いマントを羽織り、その下には——どちらも茶色や黒中心だからでしょうか？——かっちりとした印象を受けるカーディガンと短めのスカート。スカートの下からは明るい茶色のタイツが覗いていて、その先にはタイツと似たような色合いのブーツが履かれています。そして、背中からはもこもことした小ぶりの尻尾がちらりと覗いています。

「ともえちゃんとイエイヌちゃんね。わたしはドードー。よろしくねえ」

ドードーさんにはっこりと微笑みながら答えました。

「わたしこそごめんねえ……。気になって覗き込んだけど……。寝起きであんなことされたらびっくりするよねえ……」

しょんぼりと俯きながらの謝罪でした。わたしも、イエイヌさんにも、そこまで謝らなくてもと言いましたけれど、ドードーさんはどうにも落ち込んだ様子。そんな彼女の様子を見かねてか、コヨーテさんがひとつ咳払いをして尋ねます。

「それはそれとして、だ。ドードーはどうしてこっちの方に？ 運動

会か？」

ドードーさんはコヨーテさんの方を向きます。こころなしか、彼女の表情は明る気なものになります。

「そうそう！ それそれえー！ えへへえ、見学に来たのお」
体を前のめりにしながら、期待に胸を踊らせているように彼女は言葉が続けます。

「そういえば……ロードランナーちゃんは参加するんだっけ？ コヨーテは知ってるう？」

コヨーテさんはこちらをちらりと見て、苦笑しながら答えます。

「だな。まあ、本人は忘れてたみたいだが……かけっこに出るぞ。俺も出るぞ？」

「すごいなあ……みんな……わたしはからだ動かすの、苦手だからなあ……」

自嘲気味に「えへへ」と笑って、彼女はわたし達の方に顔を向けます。

「ともえちゃんとイエイヌちゃんは？ どのなの？ 何かに出るのお？」

「実はここに来るの遅くなっちゃって、参加できなかつたんです」
わたしの言葉に続いて、イエイヌさんが言葉を補います。

「今日発表のさぷらいず？ の種目には参加できそうなら……と思つてます。ともえさんも一緒に……ですよ？」

わたしは彼女の言葉に「ええ」と答えました。その様子を見てドードーさんは「ふふつ」と微笑みを浮かべます。

「仲良しさんだねえ……うんうん、よきかなよきかな」
絶妙に難しい言葉使いですけど、どこで覚えてきたんでしょう

……？

そんな話をしている内に、太陽は地平線から、その威光を徐々に現し始めます。

「よっし、じゃあ行くか……それ片付けるんだろ？ 手伝おうか？」

コヨーテさんが寝袋を指しながら、言いました。その言葉はありがたいものでしたけれど、わたしは首をふって断ります。

「大丈夫です。片付けも慣れないとですし……」

「コヨーテさんは「そうか」と軽く答え、イエイヌさんの傍らに置かれた水筒を手に取りました。

「じゃあ、水でも飲んでくるかな。……これにお前達は入れてるんだよな？ ついでだ、持ってくぜ」

「あ、ではお願いしますね、コヨーテさん。片付けが早く終わったら、私達もそちらに向かいますね」

「あいよ、じゃ、行ってくるぜ」

コヨーテさんの背中を見送り、わたし達は寝袋の片付けに集中し始めます。まずは畳んで、その次にくるくると巻いて……と、コヨーテさんの困ったような声が、小さく聞こえてきました。

「ん？ これ、どうやって開くんだ？」

ぺっしぺっしと軽く叩いて、ぼんやりと呟いている様子。ドードーさんはその様子を見るやいなや「わたしも行ってくるねえ」と言って、コヨーテさんの元へとととと小走りで駆け寄りました。どうやら、開け方を教えているようです。

わたしは寝袋のはじっこに付いている紐を結びながら、イエイヌさんに尋ねます。イエイヌさんはちらちらとわたしの手元と自分の手元を見比べながら作業をしています。わたしはコヨーテさんの様子を見て、少しだけ思ったことをつぶやきます。

「フレンズの皆さんって、結構そそっかしいところ、ありますよね」

イエイヌさんの困ったような笑い声が聞こえてきます。

「そ、そんなことないと思いますよ……？」

わたしはイエイヌさんの顔を疑問の思いを込めて、じっと見つめ返したのでした。

そうこうしている内に、わたしは寝袋を片付け終わりました。イエイヌさんも、わたしには遅れるものの、もう殆ど終わっているようです。何回か一緒に紐を結んだからか、彼女も不慣れだった作業に慣れ始めてきたようです。

文化や文明の断絶……なんて言えば良いのでしょうか？ 言葉の細かい意味はわたしにはわかりませんが、彼女たちの生き方と、

わたしの『常識』の中のヒトの生き方との違いは、ヒトとフレンズという種族（と言い切ってしまうでしょう）との違いだけが原因ではないでしょう。『教えるべきことを教える』という行動の不在のため……？ ぼんやりとした疑問の思いは先程の一瞬の出来事に対する尋常ではない違和感に塗りつぶされます。

なぜイエイヌさんやドードーさんは水筒を『開ける』ことができて、なぜコヨーテさんは水筒を『開ける』ことができないのか。他のフレンズさんができるのか否かということも考えなくてはなりませんけれど……。

「ねえ、イエイヌさん」

「はい、なんででしょう？」

丸まった寝袋を、袋に押し込みながらイエイヌさんが返事をします。

「イエイヌさんって、どうして水筒を——」

「戻ったぞー、はいよ、返すぜイエイヌ」

「ただいまあー」

おふたりが戻ってきました。わたしの疑問は後回しでも問題はなideでしょうから、ここは素直に出発するとしましょうか。

「ありがとうございます、コヨーテさん、ドードーさん」

「わたし達ももう片付け終わるところです。いつでも大丈夫ですよ」

「あ、わたしも一緒に行って良いかなあ……？」

ドードーさんがおずおずと言いました。わたし達に断る理由はありませんし、道のりがにぎやかであるのは喜ばしいことです。

「ええ、一緒に行きましょう？」

「えへへ、ありがとうございます、ともえちゃん！」

彼女の返事を受けて、わたしは出発の合図をかけます。

建物を出ると、外はもちろん、建物の中も、もう既に涼しいとは言えない空気でしたけれど、うみべや草原の方と比べると幾分か過ごしやすいというか身体を動かしやすいというか……やはり空気が乾いているからでしょうか？ あまり風は吹いていないので、草木がなびく様子こそありませんが、日の出を迎えたサバンナの大地は、強く白

く輝く陽射しを受けて、長く長く影を描きます。

イエイヌさんとコヨーテさんが前に行くようにして、道を進みます。わたしとドードーさんが後ろ。どうやら彼女たちはあまりにも楽しみなようで、ずんずんと歩みを進めていきます。彼女たちのしつぽは楽しげに揺れていて、それを後ろから眺めることができるというのは、役得というヤツでしょう。

わたしは別段目が良いワケではないので、遠くの様子はわかりませんけれど、イエイヌさんやコヨーテさんはしきりにきよろきよろして、「あつちに誰それがいる」ですとか「誰それが見当たらない」ですとか、そんな会話をしています。彼女達の会話を聞いていると、どうやら視覚に加えて嗅覚、聴覚も活用しているようですが……。

わたしは、当初、彼女達の感覚の鋭さに感心していました。けれども、そんな彼女達を見ると、ひとつばかり欲しい物ができてしまいました。

「双眼鏡、ほしいですねえ……」

ぼそりと思わず呟いてしまいます。

ヒトの身体の弱さ。それを補うための『道具』。わたしは、彼女たちに比べると、ずっとずっと弱い存在です。彼女たちの役に立ちたいというよりも、彼女たちに並び立ちたいという嫉妬の思い。

わたしはその考えに気付き、思わず恥じ入ります。

「ともえちゃんは、遠く見たいのお?」

わたしの横を歩くドードーさんが言います。

「あはは……それもありますけど……遠くがわかるっていうのが羨ましくて……」

彼女はわたしの言葉を聞いてうんうんと頷きます。

「わかるよお……」

彼女なりに、苦勞をしてきたのでしょうか? 妙な重みを感じる言葉です。

「ドードーさんは、何か得意なことってあるんですか?」

彼女は少し悩んで、口を開きます。

「うーん……特にないかなあ」

あつげらんとしすぎるくらいの言葉。

「ちよつとだけ走れるけど、別に速い訳じゃないし……空も飛べないし……」

彼女の言葉を聞いてみると、なんだか申し訳ないことを聞いてしまったのではないかと思われてきます。なんとというか、その、罪悪感……。

「でもね、わたし、思ったのお」

ひと息置いて、彼女は続けました。

「わたしにできないことは、他の子に手伝ってもらおうかなあつて」

わたしにさえ聞こえないような小さな声で、ドードーさんは「情けないよねえ」と呟きます。

「……立派だと思えますよ、ドードーさん」

自分になにもないことを受け入れる。それができる方つて、どれくらいいるんでしょう？ フレンドの皆さんは、もしかしたら、それを受け入れているのでしょうか……わたしや、わたし以外の『ヒト』は……記憶のないわたしが『ヒト』を代表するなんて間違いですけれど、彼女の、いいえ、彼女たちのその在り様は、どうしようもなくヒトには眩しく感じられるのではないのでしょうか？

「えへへ、ありがとうねえ、ともえちゃん。……わたしは、他の子と仲良くするのが好きだからかなあ」

彼女の言葉はどこか誇らしげなものでした。

そんな彼女の姿は、わたしにはなんだか羨ましく感じられます。そして、その感情が抱かれたという事実がなんだか劣等感にさえ感じられてきます……どこまでも果てのないぐるぐる回り続ける自己嫌悪の環。それを抱きそうになったその瞬間でした。

「どうしたんですか？　ともえさん」

イエイヌさんがこちらを振り返り、問いかけます。わたしは彼女の問に答えることができず、黙り込んでしまいます。イエイヌさんは不思議そうに首をかしげ、こちらを見つめます。彼女の質問に答えたのは、ドードーさんでした。

「ともえちゃんね、遠くが見たいって」

イエイヌさんはくすりと笑います。

「でしたら……えへへ」

彼女はわたしの横に移動して、指をさします。

「あそこに、鳥系の子が歩いてるんですよ、名前はわかりませんが……」

そう言って、指の方向を変えます。

「あっちの方だと、さつきコヨーテさんがシマウマさんがいるって言っていましたけど……見えづらいですね……」

わたしは彼女の言葉を受けて、遠くを眺めるように目を細めましたけれど、全然わかりません。

「わかりませんよお……」

困ってしまって、わたしはくすくすと笑ってしまいます。

「できないことは、手伝わせてください！　ともえさんみたいに色々はできませんけど、これくらいならできますから！」

わたしはほかんとしてしまいます。わたしが『色々できる』と言つてのけるイエイヌさんへの疑問が湧いてきます。

「イエイヌさん。わたし、何もできないと思いますけど……」

「そうですか……？　絵だって描けますし、色々考えてくれたり、色々知ってたり……」

わたしは少しだけたじろいでしまいます。

「えっと……そんなことで……っ？」

イエイヌさんはむっとしたような表情になります。

「私だって、少し遠くまでわかるだけです？　私の好きな方を、そんなに悪く言わないでください」

きつと彼女は衝動的に発言したのでしよう。少しして、彼女は恥ずかしく顔が赤らめました。

「イエイヌさん……うう……」

わたしは思わず彼女に抱きつきました。

「ありがとうねえ……うう、わたしも、イエイヌさんのこと、大好きですよ……」

ああ、太陽のような、優しい匂い。嗅ぎ慣れてしまったと思ってい

ましたけれど……。イエイヌさんは困ったような声を上げていましたが、少しして諦めたようにわたしの頭をなでてくれました。そんな中、ドードーさんは、コヨーテさんに駆け寄り、言います。

「ねえ、コヨーテちゃん」

「ん？ どうした？」

「仲良しさんだよねえ、ともえちゃんといエイヌちゃん……」

コヨーテさんは後ろをちらりと見て、いくつかの感情が込められていそうなため息を吐きます。

「はあ、一応流れは聞いてたがな……」

「支えてくれる友達って良いねえ……」

しみじみと言うドードーさんでしたけれど、コヨーテさんはどうやら呆れの感情が強いようです。

「まあ、そうだが……お前からそろそろ着くぞー」

わたし達は視線を前に向けます。いつの間にやら、会場の近くまで来ていたようです。フレンズさん達が集まり、壁のようになってるのが見えますし、ちよつとしたトラックなのでしょう。少し古びたように見えますが、広い建物も見えます。

「あれが……会場ですか……」

「だな。大昔になにかに使われてたらしいが……多分今回みたいなおとに使われてたんだろ。荒れ放題で掃除が大変だったらしい」

ふむふむ……。どれほどの期間かはわかりませんが、それでも結構な長い時間が経過しているのでしょう。この競技場が、そんな孤独に耐えてきたのかと思うと、少しだけ同情のような、哀れみのような、しみじみとした気持ちに浸ってしまいます。

わたし達の歩みは他のフレンズさん達の波に合流する形となり遅くなりましたが、さほどの時間を必要とせず、わたし達は競技場の中へと入ることができました。

中は広々としていて、どれくらいかの広さか具体的に説明することは難しいですけど、百人も入ることができそうなくらいでした。

わたし達が今いるのは、観客席に相当するのでしょうか。ベンチが何段か並んでいて、そこにみんな腰掛けています。あまりに朝が速いか

らか、うとうととしている子も……騒がしいのによく眠っていられますね……。

この席から一段下がったところには、四角の陸上用トラック（と呼ぶべきでしょうか？ 他の用途もありそうですが……）が広がっています。かつては芝生が生い茂っていたのかもしれないませんが、今は土が一面に広がっています。みんなの視線の先、要するにトラックの中心部では、なにやらもぞもぞと作業をしている子がふたり……。

大雑把に言つて二、三キロ四方の面積の中心に、たつたおふたりだけにいるからか、彼女たちの姿は異様に目立って見えました。

「ともえさん。あれがアルマーさんとセンさんですよ」

イエイ又さんはそのひと影を指差して、周囲の音に負けないように少し大きな声で言います。

「えっ、本当ですか？ ちよつと挨拶に行きたいですけど……今は無理ですかねえ……」

今から飛び込んでいくだけの度胸がわたしにないのは言うまでもありませんが、この観客席とトラックは高さが違う為、文字通り『飛び降りる』ことになってしまうのです。

「ああ、そうか、ともえはあのふたりに用があつたのか」

「コヨーテさんが思い出したように、わたしに言います。」

「だったら、あいつらの作業が終わってから行けば良いんじゃないか？ 一応、今回の催しの関係者はあつちの方にいる。俺も用事があるから、後で一緒に行こう」

「でしたらイエイ又さんも一緒に……大丈夫ですか？」

「コヨーテさんは「大丈夫だろ」と答えます。」

「あ、だったら、わたしはここで待ってるねえ。席とっておかないと」「気を使わせちゃって、ごめんなさい。ありがとうございます、ドーさん。会いに行ったら、すぐに帰ってきますね」

わたしたちの会話も程々に、作業が終わった彼女達は移動していきました。ちよつとコヨーテさんが指差した方に向かっていく彼女を視線で追います。わたし達はゆっくりと立ち上がりましたが、すかさず、きいんという大きな音が会場に響きます。

「——えーえーですと、ですと」

その音にぎわめく会場。わたし達も予想していない事態が起こってしまったために、慌ててしまいます。

「あー……びつくりしないでくれー、もうちょっとしたら、発表があるからなーそのまま待つてろー」

聞いたことのない声でしたから、わたしやイエイヌさんはあたふたしてしまいましたが、コヨーテさんはむしろけらけらと笑っていました。

「普段とぜんっせん口調ちがうじやないか、ゴリラのヤツ」

「あ、これゴリラさんなんですね」

イエイヌさんがぼそりとつぶやきます。

「ひと前って緊張しちゃうよねえ……それも、こんな沢山の前だし……」

ドードーさんが納得したように頷きます。

「なんというか……偉い人って聞いて怖い方なのかなって思ってたけど……」

どうやら優しげというかおっとりしていそうというか……そんな気がします。

「んー……締めるところはきっちり締めるって言えばいいのか？ 真

面目なヤツだよ、あいつは」

そう言って、コヨーテさんは言葉を続けます。

「もともと、一番古くから居るから長老だなんて呼ばれて、本人も頑張ってるが……そこまでアイツはリーダーが向いてるってワケじゃないからなあ……。だから俺や、他のヤツらがアイツを手伝いたいって思ってもいるんだが……がんばり屋で、真面目で……案外お前に似てるかもな、ともえ」

そう……なんでしようか……？ わたしが自分のことをがんばり屋で真面目だなんて思ってもいませんけれども、そこは否定することではないですし……。

「つと、またアルマーとセンが出てきたな……ってあれ、何だ？」

コヨーテさんの言葉を聞いて、イエイヌさんもふたりの姿をじつと

見つめます。

「うーん……黒い、棒……？ 手に持ってますね……なんででしょう？」
そんな疑問も束の間。トラックの中心に来たアルマーさんとセンさんは、そうして話し始めます。

「えー……って音でつか……じゃなくて、皆さん、おはようございますー
す」

ふたりして音の大きさにびっくりした様子でしたけれど、すぐに自分の仕事にそれぞれ戻ります。アルマーさんの呼びかけに応じるように、会場中に響く「おはようございます」の声。

「いまから、さぶらいずの発表ですー！」

センさんの言葉に会場が沸き立ちます。立ち上がって「うおー！」と叫ぶ子も……。

「サプライズの種目は」

一瞬の沈黙。先程までの騒がしさが、唐突に沈黙へ。

「かりごっこですー！」

再び沸き立つ会場。わたしからしてみたら、『かりごっこ』とは？
と思ってしまうけれど……コヨーテさんを見ると、まるで知っていたかのような表情ですし、イエイヌさんは盛り上がるよりも先に考え込んでいます。ドードーさんは立ち上がって拍手をしています。

「あの、ドードーさん……かりごっこって……」

わたしの質問はアルマーさんの声で中断させられます。

「えー皆さん、お静かに、お静かに……」

彼女の注意の声を聞いて、少しばかり会場は落ち着きます。

「ルールの説明をします——」

彼女の説明を要約するところです。

- ・ 時間制限あり、ふたり一組のチームで行う。場所はここではない。
 - ・ 武器や道具は禁止しないが、相手を傷つけるものや行為は禁止。
 - ・ 野生解放（ってなんででしょう？）と飛行の禁止。
 - ・ 勝負は攻めと守りを交互に行い、それを三セット行う。
 - ・ 捕まえたら一点、捕まえられても点数は減らない。
- こんなところでしょうか？ より細かいルール、というよりも本来

のルールからしてわたしはわからないのですけれども……わたしの感覚が正しければ……『鬼ごっこ』が一番近いのでしょうか……？

「——以上です。もう少ししたら、第一種目が始まります。参加者のフレンズは、下の階の入り口に集まってくださいねー」

「かりごっこに参加したい方は、あそこに」

センさんが指をさします。そこは先程彼女達が戻っていった小さな小屋でした。

「わたし達がいまでするので、教えて下さい。今日いっぱい参加を受け付けるので、急がなくて平気ですよ。くじ引きでの決定になったら、明日発表です。楽しみにしてください」

そう言って彼女たちはペこりとお辞儀をして小屋に戻っていきました。

アルマーさんとセンさんの発表から少しして、イエイヌさんは考えがまとまったのでしょうか？ わたしに問いかけます。

「……どうします？ ともえさん、参加しますか？」

うーん……わたしの足で逃げたり追ったりは難しいでしょうけど……どうやら盛り上がり方を見るに、結構楽しい種目のようです。どうにか彼女の足を引っ張らない程度に参加したいのですけれど……わたしにできること、ありますかね……。

「どうしましょう。面白そうなんで参加したいとは思いますが……わたしにできますかね……」

思案に暮れるわたしは、胸元のペンダントを弄びます。ふと、気づきました。これって……『使える』……？

「いえ、ひとつ、思いつきました。ちよつと賭けになる気はしますが……」

イエイヌさんは首をかしげますが、わたしは続けて言います。

「やりましょう、イエイヌさん。やるからには、勝ちますよ」

胸に湧いてきた妙な自信。果たしてこれが正解かどうか。それはわかりませんが、やれるだけやってみましょう。まずはどう『使う』か……考えるとところからですね。

といいましても、考えがまとまるよりも早く、次の種目が始まりそうです。

既にながやという賑やかな声が会場のあちこちから聞こえてきます。アルマーさんとセンさんに挨拶にも行きたいですし、わたしの思い付きについて考えを詰めていきたいという思いもありますし、ここで競技を見たいという思いも……。どう動いたらいいのかさっぱりわかりません。

「ええっと……次は……わかるう？ コヨーテちゃん」

ドードーさんの質問に、コヨーテさんは勝手知ったる素振りです。というか、コヨーテさん、この様子だと『サプライズ』の内容を含めて知ってましたね？ 責める気はありませんけれど……なんだかズルいですね。

『たかたび』だったかな、ジャンプ力自慢が揃うみたいだが……挨拶に行くか？ とさえ、イエイヌ」

どうしましょう。ジャンプ力自慢と言われると少しばかり興味も湧きますが……。

「競技中のほうがお話しやすいですかね……？」

イエイヌさんがわたしの代わりに問いかけます。

「うーん……どうなんだろうなあ、あのふたりは色々と手伝うらしいから何とも言えないな……でもまあ、空いてると思うぞ？ 見学したいヤツのほうが多いだろうし……」

ちよつとだけいい考えが思いつきました。モノは試しです。競技をひとつ見られないだけの価値はきつとある筈です。

「でしたら、わたしがちよつとだけ様子を見てきます。挨拶できなさそうでしたら戻ってきますね」

わたしの言葉にイエイヌさんとコヨーテさんは不思議そうな表情をします。

「……？ 挨拶できそうだったら、どうするんですか？」

わたしはイエイヌさんの言葉に首を振ります。

「イエイヌさん、そのときは合図をします。聞こえたら降りてきてください」

わたしは首から下げた笛を手で持ちながら彼女にいました。わたしの仕草を見て、何かを察したようです。

「……。なるほど、わかりました！ 聞こえるか自信は無いですけど……」

すかさずイエイヌさんの耳元（ヒトの耳の方ですよ）に顔を近づけ、そつと耳打ちします。

「いいですか？ 『コレ』のことは、みんなには秘密ですよ。コヨーテさんにも、ドードーさんにも」

わたしはそのまま言葉を続けます。

「それと、この『音』に反応した方が居るかどうか、確認しておいてください」

わたしが彼女の耳元から顔を離すと、イエイヌさんは疑問を口にします。

「どうしてですか？ 秘密にするほどのことですか……？」

わたしは少しだけ考え込みます。数秒に満たない時間でしたけれど、妙に長く感じられました。耳に入ってくるのは賑やかな喧騒。これから始まる楽しい催しに心沸き立つフレンズさん達の声。けれど、わたしの心は浮かれてなんていません。むしろ、自分でも驚くくらい冷静で、冷酷なものでした。

「勝つため、ですかね」

わたしの言葉を聞いたイエイヌさんは少し考え込んで、何か思っていたようにいました。

「けっこー負けず嫌いですね、ともえちゃんって」

くすりと微笑むようにして言うイエイヌさんの表情は、どうしてでしょう？ 今まで見たことのないような不思議な表情でした。意地っ張りな子に呆れるような、幼い子供を慈しむような、愛情に満ちた表情……と言って良いのでしょうか？ 記憶がないのですから、彼女の表情を正しく表現出来ているのか疑問ですけど、優しいような楽しいような困ったような……そんな表情。

「な、なんですかあ、その表情は……」

わたしは彼女の微笑みにたじろいでしまいました。なので彼女のほっぺたをむにむにすることにします。

「わふゆっ……いー。な、なんれふかあ……」

隣からため息が聞こえてきました。

「はあ……お前達なあ……」

コヨーテさんの声ではっとしたわたしは思わず周囲を見渡します。ドードーさんはくすくす笑っていますし、わたし達の後ろに座っていた子達（真つ黒な子でした。髪の毛や服装からして、鳥系の子でしょうか？）は「どうしたどうした？」と言わんばかりにこちらを覗き込んでいます。

「……し、失礼しました……痛くしちやっいたら、ごめんなさい、イエヌさん……」

イエヌさんは大丈夫と言っていますが、それとは関係なく顔が少しだけ熱くなっています。

「で、では行ってきますね……」

そう告げて、わたしは立ち上がり、小屋を目指します。コヨーテさんの「おう」というぶっきらぼうな言葉、ドードーさんの「はあい」という丸い声、イエヌさんの「行ってらっひゃい」という頬を擦りながら出す言葉（完全にやりすぎましたね、ごめんなさい、イエヌさん）。それらを受けて、わたしはフレンズのひしめき合う見学席を後にしました。

競技を待つ子達の隣を進み、小屋を目指します。たった十数人ほどのフレンズさん達の列でしたので、さほどの苦労はせず、進むことが出来ました。見回して見ると、競技を目前にして緊張の面持ちをした子よりも、むしろ、ちよつとしたお話をしに席を動く子が結構目立ちます。そんなフレンズさん達が別の仲良しさんと出会ってお話や挨拶をしているかと思えば、見知らぬふたりの出逢いがあったのでしよう、「わたしは〜」なんていう自己紹介の声も聞こえてきます。

割合に彼女達は動き回らないそうですし……もしかしたら島の果てと果てのフレンズ同士が出会う、なんてこともあるのでしょうか。

この催しを思いついた方……ゴリラさん、でしたっけ。なかなか優しい心の持ち主と呼ぶべきか、それとも楽しいことを思いつくのが得意と呼ぶべきか……。ともかく、なんとなくですけど、悪い方では無さそうだなあとぼんやりと感じます。

「まもなく競技がはじまります。席にもどってくださいーい」

唐突にアナウンスが聞こえてきて、少しだけびっくりしてしまいました。その声に応じるように、慌てて席に戻っていくフレンズさん達。

わたしはそんな彼女達の流れに逆らいながら進んで行き……無理でした。ちよつと通路の端の方に寄ってやり過ぎましょう。そうしている間にもトラックに入っていく先程見かけた列が……少しだけ心惜しいですけど、進みましょう。

まもなく、わたしは小屋の前に到着します。

ちよつと、慌てるようにフレンズさんがふたり、小屋から出てきたところでした。彼女たちの後ろ姿を見送り、窓から小屋の中をそっと覗き込みます。アルマーさんとセンさん、それとゴリラさん……でしようか？ 彼女達はどうかやらお話をしているようですけれど、表情はにこやかなもので、談笑をしているのでしよう。それと、壁に寄りかかって静かにしているフレンズさん……トラのような外見です。この部屋の中に流れているであろう和やかな空気とは少しだけ違う、退屈そうな、ピリピリとしているような、そんな空気を纏っていました。

「この様子なら……うん」

わたしは周囲を見回します。先程すれ違いになった方達は人混みに溶け込んでいますし、こちらに向かってくる子もいません。また、競技も始まる前です。今は……ルール説明をしているのでしょうか？ 緑色の格好をした方が参加者の列に向かつて色々説明をしているようです。これでしたら、『聞こえた』としても競技を邪魔するとは無いでしょうし……。それに何より、中の雰囲気は穏やかそのもの、ちよつと不安もありますけれど、今しかない、そう直感的に感じ、わたしは笛を加え、思いつき息を吹き込みます。

相も変わらずわたしからすると「すーっ」という具合に空気の抜ける音しかしない笛ですけれど、ここから見える範囲でも何名か、不思議そうに周囲を見渡す子が居ます。

「あの子と、あの子……それとあっちでも……イエイ又さんと確認をするとしても……うーん」

イエイ又さん達の姿はフレンズさん達に隠れて見えませんが、合図は届いたでしょうか……？ イエイ又さんが来るのを待っている間、わたしは壁により掛かるようにしてトラックで行われ始めた競技に目を向けます。どうやら猫系の子がやつぱり高く飛べるようで、それらしい子がひゅんと高く跳ね上がるのが見て取れました。

少しだけ助走をつけてジャンプする彼女たちの姿は、とても優雅で、美しいものです。飛翔の際に力を込められるその御足、落下の際にふわりと浮かび上がる彼女達の髪の毛。そのどれもが高く飛ぶという荒っぽさを抱かせる目的への過程と結果でしたけれど、彼女達の美しさや可愛らしさ、そして優雅さをより一層引き立てるもののように思われます。何故だか衝動的に彼女達の身体の動きを、筋肉の動きを、近くでまじまじと見つめていたとさえ思いました。ここで彼女達の姿を見ることがなんだか勿体ないように思えてなりません。わたしには目的があるのです。仕方ありません。

トラックを囲うようにしてそびえるネット。そのネットには鳥系の子たちによってボールのようなものが結わえられています。今見えるところでは……わたしの身長よりも高いところ位（多分、二メートルも無いと思います）でしょうか？ ですが、今からどんどんと高く動かされて行くのでしょうか。

動物の身体能力がヒトの身体になることで、どれほど変わるのか。とても興味深いことです。例えば、たいへん重い物を持って、数メートル軽々ジャンプ……なんてこともありえるかもしれません。もちろんそんな簡単に、そんな大それたことをされてしまったらヒトの立つ瀬が無いと言うかなんというか……そんな気もしますけれども。それでも、彼女達の身体能力はきつとヒトのそれを軽く凌駕するでしょう。わたしが目覚めてからまだ半年も経っていないはずですけ

れど、それでもフレンズさん達と出会い、姿を見てきました。その短い時間の間でさえ、ヒトにはまるで出来ないだろう行為を軽々としているところは見たことがありますから。

「ヒトって弱いんですね……」

わたしはうつすらと感じる、情けなさのような感情をつぶやきます。

「ともえさん、またそんなこと言ってるんですか……？　出来ないことは手伝うって、言ったじゃないですか、私」

思っていたよりも競技をじつと見ていたのでしようね、わたしは隣に到着したイエイヌさんに気づきませんでした。驚きで少しだけ身体をぴくりと動かししてしまいます。

「つと……イエイヌさん。聞こえたんですね、良かったです」

「おまたせしました、ともえさん。ちゃんと聞こえましたよ！」

にっこりと微笑みながら彼女は答えます。どうやら、自分に課せられた仕事を達成出来た喜びのようなものを感じているようです。

「こういうのも、悪くないですねえ……んふふ」

しつぽをふりふりしながらそういいますけれど……なんとも不思議な感情を胸に抱いてしまいます。彼女に少し遅れてコヨーテさんが続きます。

「おまたせ。じゃあ行くか」

コヨーテさんは小屋のドアをノックして、中に入っていきます。

「はいるぞー」

「お、お邪魔します……」

コヨーテさん、イエイヌさん、わたしという順番で小屋に入っていきます。

「ん？　ああ、コヨーテか、どうした？」

先程のアナウンスをした声と一緒に……ゴリラさんでしょう。コヨーテさんはそのままゴリラさんと一緒に部屋の隅に行き、ぼそぼそと話を始めました。ゴリラさんの姿は、黒い髪の毛を後ろでちょんまげのようにまとめ、顔の様子はわからなかったのですけれど、タンクトップに半ズボン。どちらも黒が中心の色合い。腕にはも

こもこととしたアームウォーマーと手袋。彼女はズボンのポケットに手を入れるようにして、少しばかり猫背になりながら、コヨーテさんとお話をしていきます。

「お久しぶりです！ アルマーさん！ センさん！」

イエイヌさんはばんぎいのポーズをしながらとてと彼女達に近寄っていきます。

「イエイヌさんじゃないですか！ お久しぶりです！」

アルマーさんは椅子から立ち上がってイエイヌさんとハグをします。

「あなた、元気になったんですね、良かったです」

アルマーさんとイエイヌさんの様子を尻目に、センさんはわたしに近寄り、いいいます。

「その節はどうも……おかげさまで、はい！」

「私はオオセンザンコウ。センでいいですよ、よろしくおねがいしますね」

そう言つて彼女は手を差し出しました。そういえば、わたしはイエイヌさんから彼女達の特徴を聞いていましたから、なんとなくで判断していましたし、なんだか既に仲の良い間柄だと思っていましたけれど……よく考えてみると、実際には『初対面』なんですよね。

彼女の姿は、明るい土のような色をしたハンチングの下にはセミロングの金色の髪の毛。帽子の両脇からは桃色の耳がちらりと覗いています。白い半袖のシャツに、桃色のサマーセーターを着ていて、くすんだオレンジ色のネクタイをゆるりと表に出しています。鱗のような装飾のされたスカートは膝の上まで伸びていて、少し短めな印象を受けますが、彼女の腰からはごつごつとした鱗で覆われた長くて太いしっぽが見えます。足元はストッキングのようなモノは身につけていませんが、膝下まである長いブーツ。そして腕にはしっぽと同じような意匠の腕輪をしています。

「あ……はいー！ わたしはともえです。こちらこそ、よろしくおねがいします」

わたしはセンさんの手を取り、握手を交わします。

「センちゃん！ その子は？」

アルマーさんがイエイヌさんから身体を離してこちらを見つめます。

「……覚えてないんですか？ あの子ですよ、イエイヌさんと一緒に――」

ああっ！ と大きな声を上げるアルマーさん。センさんはやれやれという具合に頭を振っています。

「思い出しました！」

わたしの方に彼女は歩み寄り、ペこりとお辞儀をします。

「ごめんなさい、失礼しました……オオアルマジロです。オルマーでもアルマーでもお好きな方で呼んでください！ ええっと……」

あ、彼女はそういう感じの名前なんですネ。

「ともえです、アルマーさん、よろしくおねがいますね」

とりあえずわたしは呼び慣れた気にする『アルマー』の方で呼ばせていただきますしよう。

「ともえさん、よろしくおねがいますね！」

わたしは彼女の姿を改めて見つめます。

センさんと同じようなハンチング帽を被っていますけれど、センさんとは違って彼女の髪の色は黒。帽子の横から飛び出る耳の色は少しばかり茶色がかっています。肩や肘、膝には鱗の模様が入ったプロテクターを着けています（意味あるんですかね……？）また、センさんとおそろいの白いシャツを着ていて、茶色のサマーセーターも同じように来ています。胸元からは明るめの茶色いネクタイが飛び出ていて、淡い黄色のスカートを着ています。腰のあたりからは細い尻尾がちらりと覗きます。彼女もやはりストッキングのようなモノは履いていませんが、センさんと違って真っ白のスニーカーを履いています。

「本当に、本当にありがとうございます……お礼を伝えたくて……お会いできて、本当に良かった……」

旅の目的。それは究極的には『記憶を取り戻す』ことです。ですけど、彼女達にあつて、お礼を伝えるということは、旅の過程でやり

たいことのひとつでもありました。その願いの結実が今、ここに成されたのです。

確かに『悲願』ではありません。旅をせずとも、彼女達にはいつか会えるという考えもありましたから。それでも、何故だかこみ上げてくるこの感情は、何でしょう？ 弱くちっぽけなわたしが、何かを成し遂げられた……ということを実感しているのでしょうか？ わかりません、わかりませんけれど……会えて良かった、本当に心からそう思います。

「と、ともえさん？ だ、大丈夫ですか？」

わたしの様子が少し変わったのを察したのか、イエイヌさんがわたしの肩を擦ります。

「だ、大丈夫ですよ。ちよつと嬉しかっただけです」

どうやらアルマーさんもセンさんも少しだけ慌ててしまっていたようです。

「そんな風に言われると、少し照れちゃいますねえ」

アルマーさんが励まそうと思ったのでしょうか？ 少しだけ茶化すようにいいいます。

「アルマーさん。茶化しちゃ駄目ですよ？」

そういうセンさんは、少しばかり瞳が潤んでいるような気がします。わたしに感化されてしまったのでしょうか？

「そもそもですね、おふたりもズルいんですよ」

イエイヌさんが口を開きます。

「うみべに居るからって聞いたので会いに行ったら、移動してて……今度もすれ違いじゃないかと思っていたくらいです」

アルマーさんの茶化すような口振りに応じるように、イエイヌさんも茶化すようにいいました。

「あはは……なんだかごめんなさい。この催しの話をみんなにしないといけなかったのぞ」

「ですけど」

わたしは言葉を続けます。

「おかげさまで、旅をする決心が付いたんですよ。本当にありがとう

「ごじます。」

「少しばかり感謝のしすぎですかね。ですけれど、これがわたしの思い。」

「きっと彼女達に話をしに行くという思いがなければ、長くなるであろう旅路は、より辛いものになっていたのかもしれない。一步踏み出すための勇気。その建前。そうであったとしても、ありがとうと感じる思いは真実です。」

「すまんが、話は済んだか？」

「コヨーテさんと話が終わったのでしょうか。ゴリラさんがわたし達に問いかけます。」

「そろそろ競技が終わる。時間が無いわけじゃないが、準備もしなないとな」

「頭を掻きながら申し訳無さそうに彼女は言いました。」

「あつ……忙しいところごめんなさい……すぐに出ますね」

「わたしが彼女にそう告げ、イエイヌさんの手を取って表に出ようとする、ゴリラさんはわたしを引き止めます。」

「……ちよつと待て、お前……」

「はっ、はいっ！」

彼女の咎めるような口調の強さにわたしは驚きながら振り返ります。彼女の表情は、何か信じられないものを見るようなものでした。彼女の視線はじっくりと品定めをするようにわたしの足元から顔までをじつとりと舐め回すように動いていました。そして、どこか冷徹に、わたしの内面を伺おうという思いの込められていたようにさえ見える、冷たい瞳……。

「名前と所属は？ ヒトだろうか？ さっき話していたようだが、聞こえなくてな。いいか？」

彼女の言葉は、どこか強いものでした。抗うことを許さない。そんな言葉。わたしの不安を悟ったのでしよう、イエイヌさんのわたしの手を握る力がぎゅっと強まりました。

「と……と……もえ……です……しよ、所属は……わからない、です……」

優しい方だと思っていたのに、という気持ちもありましたが、それよりも、何故このように問い詰められるのか、という困惑の思いの方を強く抱きました。

わたしの答えに考え込むゴリラさん。部屋の中には妙な沈黙が流れます。壁に寄りかかっていた子でさえ、どこか緊張しているようにわたし達に視線を寄越しています。

「おい、ゴリラ、それくらいに——」

コヨーテさんがなだめますけれど、ゴリラさんは手の平を彼女に向けながら、視線は変わらず、わたしをじっと見つめます。黙っている、ということなのでしょうか……？

「……知ってるヤツかと思っただけだな。悪い、怖がらせたな。ゴリラだ。よろしく。」

彼女はにへらつと表情を崩して、わたしの帽子を取って、頭をそつと撫でます。その手付きは本当に優しいものでした。疑いようもなく優しげで暖かで……どうしてこんなにも豹変してしまったのか、不気味にさえ思えてしまいます。

「は、はあ……」

イエイヌさんはまだ警戒した様子です。手に込められた力は依然として強いものでした。

「イエイヌ、こいつを頼んだぞ」

ゴリラさんはイエイヌさんの方を向いて言いました。

「い、言われなくても……」

「あー、そうだよな、警戒するよな、悪い悪い……とーさかにも言われてたなア……顔が怖いんだから言葉に気をつけろって……」

彼女はわたしの頭から手を話して、自分の頭を困ったように搔いていました。彼女からとーさかと呼ばれた誰かの名前……どこかで聞き覚えのあるもののような気がしますけれど……。

「コヨーテから簡単に話は聞いている。今度、話をしよう。招待する」
彼女はそう言って、手をひらひらさせて表に出ていきます。

「それと、『かりごっこ』な。主催者権限だ。参加決定。がんばれよ、イエイヌ、とー……エヘン、ともえ」

続けてそう言いながら、彼女はトラックの方へと歩いていきま
した。

「な、なんだったんでしょ……？」

わたしのつぶやきにコヨーテさんが答えました。

「普段は、まあ、もうちよつと気楽そうなんだけどなあ……ヘンなヤツ
……」

わたしとイエイヌさんは揃って「はあ……」と妙なため息をこぼし
て、観客席に戻ることになりました。

席に戻ると、ドードーさんは後ろの席の子とお話をしていました。
どうやら当初話をした通り席を取っておいてくれたようです。

「あつ、おかえりい」

話をしていた子（先程見かけた真つ黒の子たちです。暑くないんで
しょうか？）は、もう少ししたら手伝いをするとのことで、お別れで
す。わたし達は彼女達を見送り、席に付きます。

「どうだったあ？ お話出来たあ？」

わたしは彼女の言葉に頷きます。

「ようやく彼女達にお礼が言えました……満足です」

わたしの言葉にイエイヌさんが尋ねます。

『『おうち』に、もどります？』

わたしは首を振ります。

「もう少しだけ、進みましょうかね。記憶を取り戻す可能性はじつと
しているよりも、動いている方が高いでしょうから」

旅の目的の内のひとつは達成出来ました。それも『急がなくてはな
らない』理由が。でしたら後はゆつくりでもいいから進むことです。
わたしの両肩に寄せられた重荷が少しだけ軽くなったように思われ
ました。

「ですけど……そうですね、一旦『おうち』に戻ってもいいかもしれま
せん。もう急ぐ必要は無いですからね」

『『おうち』』という言葉に反応したのでしよう。ドードーさんが楽し
げに尋ねます。

「ねえねえともえちゃん、イエイヌちゃん。今度、遊びに行ってもいい

？ ふたりのお家、楽しそうだし……」

その言葉にしつぽを楽しげに揺らしてイエイヌさんが答えます。

「ええ、どうぞどうぞー！」

「でしたら……そうですね、この運動会が終わったら、一旦戻りましょうか？ その時に一緒に行きましょう」

そうになると、やりたいこともいくつか出てきます。まずお風呂に入りたいですねえ……それと、服を洗ったりのんびり休んだり……暫く休んだら、また旅に出ましよう。頭の中で地図を開きます。

ええつと、多分、川を横切るようにすればすぐに『おうち』に戻れますし、ここに戻ることも容易いでしょう。であれば、次に行くべき方向……山と森林の隣接したエリアがあった筈です。確か……そう、ここを北の方へ、道の続く方へ歩いていけば……。

「だったら、そうだな。ゴリラにはお前たちのナワバリの場所教えておくぞ。アイツが招待するって言うときは、大体アイツがわざわざ出張るからな。俺や他のヤツに任せてくれてもいいもんだが……」

本当に、マジメな方なんですなえ……。そう考えると、先程のあの様子が本当に奇妙に感じられます。

「そういうえば……コヨーテさん。隅っこに居た子……どなたですか？」

イエイヌさんが問いかけます。

「ん？ アムールトラか？ アイツはいつもあんな感じだなあ……無愛想だが、腕のいいハンターだよ」

ちよつとした敬意を込めた口振りです。

「ハンター……でしたら、きつとお強いんでしようねえ」

わたしはぼんやりつぶやきます。確か、セルリアンを退治してくれるフレンズさん達だった筈……。

「うーん？ ねえねえコヨーテちゃん。ハンターの子達ってこのうんどーかいに出てるの？」

ドードーさんが疑問を口にしました。確かに彼女の疑問には同意です。『かりごっこ』に限らず、ハンターと呼ばれるフレンズさん達が『強い』ので有れば、こういった催しでは大活躍なのは……？

「……なんで俺に聞くんだ？ つてもうわかかってるか……楽しみを邪魔しちゃ駄目だと思つて、隠してたんだがなあ……」

コヨーテさんは「あちゃあ」という具合の素振りをしながら言葉を続けます。

「二応、制限はしてないが……ハンターの数は多くないからな。見回りとか準備とか……そっちの方をしてきてくれるよ」

なるほど……でしたらあまり気負うことは無いんですかね……。

「つと、俺は行くぜ。次の次がかけっこだからな。ロードランナーのヤツを見つけて引つ張つてこないと」

コヨーテさんはくすりと笑つて続けます。

「また忘れられてたらかなわれないからな」

わたしも彼女につられてくすりと笑つてしまいます。

「流石にそこまででは……無いんじゃないですかね……」

立ち上がりながらコヨーテさんはふんと鼻を鳴らします。

「ま、大丈夫だろ……よっし、じゃ、行つてくるぜ」

わたし達はコヨーテさんを見送り、トラックに視線を動かします。どうやら次の種目が始まるようです。

「ドードーさん、次つてなんですか？」

思い出すような素振りをして、彼女は答えます。

「ええつと……ボール投げ……だったかなあ……フウチヨウちゃんたちに聞いた話だと、そうだったよお」

なるほど……先程とまた違った形での体力比べ。どういふ結果になるのでしょうか……？ 面白そうです。

実際のところ、ボール投げという種目は派手なところも無ければ、目立った活躍をした子が見つかることはありませんでした。……いえ、なんと言えればいいのでしょうか？　そもそもその絵面としてさほど派手になりようが無い、というのも理由のひとつではあるでしょう。

ですが、わたし以外のフレンズさん達は、参加した子達の記録を見て盛り上がったたりもしていました。つまり、わたしの知る『常識』の範疇に置いて、そこで生まれた記録はおそらく大したことの無いモノなのです。それも目立たない、さして驚きや感動を得られないような……。競技の間中、わたしは頭上に『？』のマークが浮かんでいるような気分でした。

こう言うとわたしが薄情だとか、感性が乏しいだとか、そう思われるかも知れません。それは、多分少し違います。

ひとつ例を出しましょう。バンドウイルカさんやフォルカさんが泳いだ時に抱く感情が基準となっている場合や、イエイヌさんが走った時に抱く感情が基準となっている場合、たとえ私が泳いだり走ったりしても、「素晴らしい成績だ！」という思いは抱けないはず。わたし個人を知る存在にとつて良し悪しこそあれ、客観視してしまえば、それは取るに足らない成績なのです。そういう『基準』や『感覚』の問題だと思われます。

参加した子の内の多くは三メートル以内の地面に叩きつけるような投げ方をしていましたし、一番になったフレンズ——アフリカゾウさんでした——が六メートルという記録です。

「すごかったねえ、みんなー」

ドードーさんの言葉もそうですけれど、周囲の反応とわたしの考えがどうにも食い違っているような……。思わず彼女に疑問を投げかけてしまいます。

「ドードーさんって同じようなことしたことがあります？」

想定していた返事と違ったのでしよう。ドードーさんは不思議そうに首をかしげます。

「……う？ どういうことお？ ええっと、無いかなあ……何かを投げることって、あんまり無いし……」

経験不足……ということなのでしょうか……？ それとも、何か、『フレンズ』という存在と『ヒト』という存在の間に何かあるのでしょうか？ 試しに今晚にでも道具を借りて自分で試してみましようかね……。

「そうですね……いえ、なんでもありません。ええ、凄いいと思います……」

どこか釈然としない様子でドードーさんはわたしの言葉に頷きました。なんだか彼女の楽しげな様子に水を差してしまったような気がして申し訳ないですね……。

「そ、そういうえば、ドードーさん。次はかけっこでしたっけ？」

イエイヌさんが空気の変化を察したのでしょうか。話題を変えようとして口を開いてくれました。

「うん！ そう聞いているよお。どれくらいしたら始まるのかは聞いてないけど……」

ちようどその折、アルマーさんのアナウンスが聞こえてきました。

「みなさん、お疲れさまでーすっ！」

声が大きすぎたのでしよう。きいんという音が響き、少しの間が空いて、再び彼女は喋り始めます。

「し、失礼しました……お昼ごはんの時間を挟んで、次の種目はかけっこその一です」

『その一』……？ わたしを含めた何名かのフレンズさん達は不思議そうな表情を示します。

「またこちらからお伝えしますので、みなさま、ごゆるりとお過ごしくださいーい！」

ぶつんという音がして、放送が終わった……かと思いきや再びアナウンスが。

「度々失礼します……会場の出入り口に、ボスが居るので、そこでジャパリまんを受け取ってください」

今度はセンさんの声でした。アルマーさん、きつとド忘れでもして

いたんでしようね……。センさんの声の後ろから「忘れてましたあ！」という具合の音が、ぼんやりと聞こえます。

「あはは……」

わたしとイエイヌさんは苦笑いの表情を浮かべることになりました。

「それにしても、ともえさん、ドードーさん」

イエイヌさんは考え込むような素振りをしながらわたしに尋ねます。

「はい、なんででしょう？」

わたしと何故だか被るようにしてドードーさんも「なあに？」と聞き返しました。

「その一って、どういうことなんでしょう。おふたりはわかりますか……？」

その言葉に、わたしもドードーさんも首を振ります。

「うーん……ルールが別れてるってことなんですかねえ……肝心のその中身がわかりませんけれど……」

この手の種目名は、端的にわかりやすく名前が決められるものでしょう、普通……とちよつとした怒りのような感情さえ抱いてしまいます。

「その一というのはですね」

そう言いながら、ときりと着地したのはカルガモさんでした。

「いわく、『はんでいきやつぶれーす』とのことですよ」

彼女は言葉を終えると、わたしにぺこりとお辞儀をしました。

「お久しぶりです、ともえさん。ええつと、おふたりは……」

イエイヌさんとドードーさんはお互いに挨拶を交わします。

「ああ、あなたがイエイヌさん……広場で探したんですけれど、見当たらなかったの……」

あ、そういえばそうです。伝言をお願いしたんですけれど、イエイヌさんわたしと合流しちやいましたからね……。

「その節は失礼しました……。イエイヌさんも一緒に来ることになったんです」

わたしの言葉を聞いて、彼女はぱちんと手をたたきます。

「それなら良かったですよ！ あの時のともえさん、辛そうでしたから……」

あははとわたしは苦笑します。本当に、申し訳ないですね……。

「と、それはそれとしてですね……何やら参加する子達の体力や得意な距離をコーハーにするとかなんとかって理由で、スタートの時間や位置を微妙に調整するらしいですよ？」

何をどこまでというのはいわかりませんが……と彼女は続けました。はてさて、どういうレースなのでしょう。

「それって……ええつと……例えば、短い距離が得意な子は前に出て遅れてスタート、長い距離が得意な子は後ろから先にスタート……みたいな感じ……なんですかね……？」

わたしが考えながら発した言葉を、カルガモさんはうんうんと肯定します。

「それってなんだか不思議ですねえ……」

イエイヌさんはぼんやりとつぶやきます。

「普段……というかよく見かけるあそびでしたら、一斉にスタートですし……」

「多分、どの子も一位になれるようなかけっこだよねえ……」

ドードーさんの言葉を聞いてわたしは納得が行きました。単純な速さを比べるのではなく、ルール、つまり決まり事を設けてその中の速さを競う。どの子でも勝つ可能性は、『なんでもあり』と比べるとずっと高い。

「そうなるよ、なんとこ言ったらいんでしょ……速い子だけが見どころじゃないというか、なんというか……」

なんだか言葉にし辛いのですけれども、面白そうです。もちろん、単純な速さを比べるというルールも面白そうですが……。

「ですねえ……その二が同じ距離を一緒に走るそうなので、そっちは勝つ子は想像出来ますけど……」

カルガモさんは腕を組んで悩むようにいいます。

「それってどんなフレンズなんですか？」

イエイヌさんが尋ねます。

「やつぱり……チーターさんかプロングホーンさんか……そのおふたりのどちらかでしょうねえ……」

彼女の言葉にドードーさんがうんうん頷きました。

「やつぱりそうだよねえ。遠くで見たことあるけど、速かったよお」

先日、イエイヌさんが語った言葉。「私の三倍くらい速い」フレンズ……。その言葉が指していたのはそのおふたりのことなのでしょう。か？イエイヌさんもわたしと同様に知らない方なのでしょうけれど、想像するどこか現実を疑ってしまうような心地さえします。

「あら、お会いしたことあるんですね、ドードーさんは……私も噂話しか聞いたことが無いので……特にチーターさんはどの子とお友達って話も聞きませんし……」

フレンズさん達の交流関係は、きっと極めて地域的には限定されるのでしょうか。ですから、会ったことのない子がどの子にも居て当然だと思われます。

けれど、友達の友達、そのまた友達……という具合に交流は繋がり、広がるものです。ですから、彼女達が『知り合いの子が居ない』と言ってしまうという事は、なかなか想像が付きません。単に繋がりのあるフレンズさんが偏っているというだけかもしれませんが……。

そんなことを考えて思い出したのは、『世の中、六人くらい繋がりを辿れば大体のヒトとお友達』というどう活用したら良いか悩ましい雑学の類。誰から聞いたんでしたっけ？ ええつと……。

「つと、皆さん、ボスにジャパリまんを頂きに行きましよう？ お話してたら時間経つちやいますし……」

カルガモさんのその言葉でわたしは考えを中断します。お腹が空いてはなんとやら。空腹では大体の物事は悪い方へ悪い方へと傾くのです。気持ちの上でも、現実の上でも。

「そうですね、行きましようか」

カルガモさんにわたしが同意し、イエイヌさん、ドードーさんも同じように首を縦に振ります。行き先と思われる方向を見やると、フレンズさん達の山、波、行列……それも地上に空に……。思わず「ええ

……」と声をこぼしてしまいましたが、カルガモさんはどこか張り切った様子で先へ進みます。

「さあー… ついてきてくださいねー!」

ああ、そういうえばそういう子でした……。

どこかスイツチの入ったようにきびきびと動き始めた彼女に、わたしの躊躇いは伝わらないでしょう。いえ、そうでもしなければこうやってジャパリまんを貰いに行くことはなかったでしょうから、ありがたいのですよ? 本当にすつてば。

イエイ又さんの方をちらりと見ると、彼女も同じように苦笑いを浮かべていました。彼女と目が会い、お互いに笑みを交わします。もしかすると、今日という日で一番過酷な瞬間が訪れるかもしれませぬ……頑張りましょう、イエイ又さん……。

入り口に着き、フレンズさん達の列に加わります。

やはり、というべきでしょう。辺りはがやがやと騒がしいものです。少し離れたところでちよつとした喧嘩騒ぎが会ったようですが、他のフレンズさんの助けもありすぐに収まったり、はたまた、猫っぽい子とそのお友達らしき子がお互いのジャパリまんを食べ比べして味を言い合ったり、別のところからは「暑いねえー」なんてぼやきも聞こえます。……きつとここは、今この瞬間、パークの中で一番賑やかな場所なのではないでしょうか?

何故でしょうか。わたしはこの喧騒に身を置くだけでどこか楽しげで、愉快で、彼女達の生命というものの輝きを感じられるようにさえ思えます。わたしは、きつと、ずつと、ずつと長い間、寂しく、不変の、命というものの無い空間に一人居たのでしょうか。だからそう感じるのでしょうか? わたしはカプセルの中、ずつと、一人で眠っていて……今考えるだけでもぞつとします。幾ら意識が無いと言っても、あまりに寂しすぎる、あまりに悲しすぎる事態です。

ふと、『何故そんなことになったのか』という疑問が浮かびます。何か理由があったのでしょうか。わたしの知り得ない事情。あるいは、わたしの忘れてしまった事情。でなければ、あんな、あんな、捨て子のような形で……そうでなければ、納得も、理解も出来ません。

ああ、果てのない思考の渦がわたしを飲み込もうとしています。全てを知りたい。わたしが何故あそこに居て、何故ここに居るのか……その理由……わたしの過去……それらを知らなくてはなりません。わたしがわたしでいて良い理由。それを見つけないてはなりません。生きる理由ではない、それ以上の意味、わたしが存在して良い理由。それは、笑って明日を迎えるために、どうしても必要に思えるのです。そんなもの無かったって、知らなかったって、きつと彼女達は過ごしているのでしょうか、過ごしてきたのでしょうか、過ごしていくのでしょうか。

それなのに、何故、わたしはこんなにも思い悩んでしまうのでしょうか？ わたしが、弱いから？ 力だけではなく、心も弱いから……そう、なんでしょう、ね……。どうすればよいのでしょうか？ どうすれば、どうすれば……。

「ともえさん？ どうしました？」

カルガモさんがわたしに声をかけます。

「……はい？ って、ご、ごめんなさい……」

列が動いていて、わたしの前には空間が大きく空いていました。イエイヌさんがわたしの顔を覗き込んでいるだけでなく、不審げに、あるいは心配そうに、周囲のフレンズさん達もわたしに視線を送っています。

「ちよつと考え事してました……えへへ、ごめんなさい、皆さん……」

わたしは小走りでご前へと詰めます。いけないですね、お腹が空いては……ってこれは先程も……。

「あの、ともえさん」

わたしは後ろにくっつくように立つイエイヌさんの方を向きます。

「どうしました？」

彼女はわたしのベストの裾を掴んで言いました。

「……私を、頼ってください？ ね？」

彼女の言葉はどうにも愛おしく感じられます。そして、考えを見透かされていたような感じも……。

「その時は、よろしくおねがいしますね、イエイヌさん」

それだけ言って、わたしは前に向き直ります。本当に困った時、きつとわたしは彼女に頼るでしょう。

けれど、きつとこれはわたしのだけの問題です。わたしがわたしの力で解決すべき問題です。そうして初めて得られる答えがあると思うのです。だから、それまでは……。でも、少し位彼女に甘えても良いですよ？

少しだけ、イエイヌさんの方向に左手を出します。すると、何かを察したのでしよう。イエイヌさんはわたしの手をきゅつと握ってくれました。いつもの感触、いつもの暖かさ。それが落ち込みかけたわたしの心を、そつと支えてくれる気がします。イエイヌさんに気づかれないようにちよつとだけ視線を動かします。彼女はしつぽを振りながら、わたしの手を握っていました。

「ありがとうね、イエイヌちゃん」

わたしは声を出さず、口だけ動かします。ちよつとだけ、普段よりもわたしの頬が赤いのは『ちゃん』付けで呼んだからですよ。

ジャパリまんを受け取ったわたし達は座席へと戻りました。ラッキーストさん達はといえばフレンズさん達が波のように押し寄せているのに対処するので精一杯らしく、今までの接触の時のような会話は出来ませんでした。わたし達の隣のラッキーストさんに至っては、おそらく他の方よりも長く動いて疲れたのでしよう、彼の瞳の輝きは暗くなっていました。彼の背後には交代のラッキーストさんがやって来て……。その子はこれから訪れる忙しさに震えて居たようにさえ思えました。あわわ……。なんて声が聞こえてきそうなくらいです。保守点検を主立って行う(のだとわたしは考えています)彼らにとつて、こういう作業は不得意なのでしょうか……。？ なんだか大変そうですね、もし今度こういう機会があれば彼らのお手伝いをしたい位です。ああ、案外、そういう生き方も悪く無いですね……。なんて思いました。

「ふう……。お疲れさまです、皆さん……」

どこかやりきったような笑顔でカルガモさんがぼやきます。

「だねえ。ボス達も大変そうだったねえ」

ドードーさんはぽふうという不思議な吐息を漏らして椅子に座ります。彼女の勢いはなかなかのもので、わたしやイエイヌさんでしたらどさりとと言う音がしそうなくらいでしたが、彼女が小柄な為かとさりとと言う軽い音が響くばかりでした。

「では、皆さん、いただきますしようか。いただきますー！」

カルガモさんの言葉に合わせるように、わたし達もそう言うってからジャパリまんを食べ始めます。

「んくっ……そういえば知ってるう？ 繋がりをたどってくだけで世の中大体お友達になれるんだってえ」

間延びした声でドードーさんが言った言葉は、わたしの心臓をどきりと跳ねさせました。わたしの驚きは伝わる筈もなく、彼女は「素敵だよねえ」と誰に言うでもなく呟いています。

「けほっけほっ……ド、ドードーさん、それ、どこで聞いたんですか？」
わたしが噎せたことを心配そうにイエイヌさんが伺い、そつと水筒をわたしに差し出しました。わたしは「どうも」と伝え、水をひと口含みます。

「んーとねえ……ずっと昔だからなあ……おねえさんだったかなあ……ふふっ、懐かしいなあ……」

そう呟いて彼女は遠くを見つめるような眼差しになります。もしかして、彼女はゴリラさんと同じくらい長生きのフレンズなのでは……？

「それって、ヒト、ですか？」

イエイヌさんが水筒をひと口含んで、口を拭ってから言いました。「そうだよお。みんな、ぱったり居なくなっちゃったから、お別れもあんまり出来なかったけど……」

わたしを含めたみんなが驚きの表情を浮かべます。

「ヒトが居るくらい前から生きてたんですか、ドードーさん……」

カルガモさんの言葉は、どうしてでしょう、わたしの胸をえぐるようでした。彼女にそんな意図は無い。それは断言できますが、それほど長い時間を、わたしはたった一人でここで眠っていたという事実が殊更に強調されるようで……。

「ゴリラちゃんほどじゃないよお？　わたしはまだ若い方なんだからあー！」

胸を張るようにして抗議めいた口調の彼女をわたしは見つめることしか出来ませんでした。

「あの、ドードーさん……」

わたしの方をちらりと見て——その顔はどこか申し訳無さそうなもので——イエイヌさんは続けます。

「ともえさんとは、本当に初めて会ったんですか……？」

再び、わたしの胸はどきりと跳ね上がります。ああ、きつとあなたは、わたしが聞くべきことを代わりに聞いてくれたんですね。

「……うーん、ともえちゃんと会ったこと……？　無いかなあ……同じくらいの歳の子は居なかったと思うよお」

ドードーさんは言葉を続けます。

「わたしが生まれたのはね、ずうつと前だけど、ヒトが居た最後の頃……なのかなあ？　よくわからないんだけどね、けんきゅーもしてないのにいー！　ここでえー！　って叫んでるヒトも居たっけなあ……」

彼女の発する言葉はわたしに取ってそうであるように、カルガモさんやイエイヌさんにとっても不思議なもののようにでした。

「そ、そう、ですか……ありがとうございます、ドードーさん……」

イエイヌさんの言葉に首を降ってドードーさんは答えます。

「ううん、こちらこそ、お役に立てなかったみたいで……ごめんねえ……」

「イエイヌさんも、ドードーさんもお気遣いありがとうございます。昔どうだったか、なんてことより、今ですよ、今。ええ、わたし達、もう……もうお友達でしょう？　気にすることありませんって」

わたしは思わず口が動いていました。わたしの口から出た言葉は、果たして誰に向けたものなのでしょう？

「えへへえ、そう言ってもらえると、とっても嬉しいよお……ともえちゃん！」

彼女は言葉を言い終わるか言い終わらないかの内に、わたしに飛び

つきます。私の胸には罪悪感のような感情が芽生えてきますけれども、それに心が苛まれるよりも先に表に出てきたのは……

「暑いです……ドードーさん……」

わたしの言葉を受けてドードーさんは申し訳無さそうに身体を離します。

「ごめんねえ、ともえちゃん……嬉しくって……つい……」

わたしは彼女の謝罪に「いえいえ……」と答えながらイエイヌさんに視線だけ向けます。するとイエイヌさんが羨ましげな視線をドードーさんに送っていることに気づきます。

「イ、イエイヌさん……？ どうしました……？」

前にもこんなことがあったような気がしますね。ええ、一昨日くらいに。

「後で、私も……その……良いですか……」

イエイヌさんはおずおずと申し訳無さそうに言ったのですけれど、それを元気良くドードーさんが否定します。

「今やつてもらっちゃいなよおーいいでしょ？ ね？ ともえちゃん！」

そんなわたし達をたしなめるように、カルガモさんが口を開きました。

「おしよくじ中です。おぎよーぎ良く」

大きな声ではありませんでしたが、言葉の重みは今までで一番だと思われれます。わたし達は彼女の言葉に従い、ジャパリまんを再び頬張り始めたのでした。

わたし達がジャパリまんを食べ終わり、満腹の心地でいると、今日何度目かのきいんという音が響きます。

「おまたせしましたーかけっこその一、はじまりまーすー！」

会場中がざわめき立ちます。お昼寝をしていた子達もその騒ぎで目をこすりこすり起き上がり、喧騒の中に溶け込み始めます。

「楽しみですねえ……」

イエイヌさんのつぶやきに返事をする子はいません。それは恐らくこの会場に居る全てのフレンズと同じものだったからでしょう。

わたしも先程までの仄暗い感情はどこへやら。今は目の前で行われるであろう競技に、眼が、耳が、心が、向けられます。そうして、かけっこが始まりました。

幕間5

竹を切り、作られたであろうコップには飲みかけであろう紅茶が入っていた。まだ湯気が立ち、暖かさを感じるそれをおもむろに持ち上げ、啜る。ほうと息をつき、彼女はボロボロになった紙片を手に取り眺め始めた。

それは手紙はひらがなとカタカナが中心に書かれたもので、一部には簡単な漢字が使われている。高い知性と理性を持ちながらも、ヒトとは多少異なる摂理の下生きるフレンズ相手への手紙。その内容は、惜別。

彼女と、彼女の友たるヒトとの出会いから始まり、過ごした日々と思い出を綴り、そして別れの言葉を告げる。一見すれば、いわば、転校で離れ離れになる友人へ向けたそれと大差は無い。しかし、この手紙に関与したフレンズを含めた存在の中には一貫して共通する感情はそれとは異なるモノ。もつと悲痛な感情。もつと切ない感情。文字通りの今生の別れを皆抱きつつも、晴れやかたれと心に誓い、贈り受け取られた手紙。

彼女にとつて、そこに込められた感情はどこか懐かしいものでさえあった。でなければ、こんな月夜に、手製の紅茶を啜りながら眺めたりはしない。

もはや過去の記憶が色褪せたものとなりつつある彼女でさえ、あの日々を懐かしむことはある種の神聖な癒やしの行為だった。胸の奥底を悲しみで満たしながら、あの頃を思い出す。

再び彼女はコップを取り、中身を啜る。ふうと息をつき、手紙を丁寧に畳んで封筒にそつと戻す。机の上にはもう一枚の紙片があった。それは写真だった。送り主であろう女性と自分、そして少女とその隣のフレンズ。この光景を失ったことはおよそ間違いない世界にとっての損失であろう。そう思わせるだけの和やかで楽しい光景がそこにあった。

彼女達の姿は、彼女自身を除き笑顔のピースサインをしていて、一方で彼女はといえば恥ずかしげにカメラから視線を逸らしハーフパ

ンツのポケットに手を差し込んでむっとりとしている。

「……このときくらい、一緒に……」

誰に言うでもなく彼女は呟いて、自嘲気味にくすりと笑う。もうどうしようも無いこと。だからこそ、敢えて、笑った。笑わなくてはいけなかった。

もしも今度、こんなことがあつたら——それはありえないことではあるが——今度こそ、笑って写ろう。決して成就しない未来を思い、誓う。無意味だろうか？ 無意味だろうが、それでも、そうしたかった。

ドアががちゃりと開く。彼女は振り返って相手の姿を確認する。常ならば滅多に姿を見せぬ客人の姿に、彼女は表情を変える。

「アムールトラか、どうした？ 問題でもあつたか？」

アムールトラと呼ばれた彼女は首を降る。

「いや、そうじゃない」

少しばかり安心しながら、彼女は不審げに首をかしげる。

「そしたら……何だ？ セルリアンの件で何か意見か？ それとも……」

再びアムールトラは首を降る。

「ゴリラ、用事が無いとここには入っちゃダメなのか？」

皮肉げなアムールトラの言葉。その意味をようやく理解したゴリラは大きな声で笑い、彼女の隣にある椅子を引く。

「悪い悪い、かけろよ」

ふんと鼻を鳴らしてアムールトラはゆっくりと椅子に腰掛ける。着席を確認して、ゴリラは立ち上がり、尋ねる。

「紅茶で良いか？ ハーブを収穫してな」

彼女がナワバリ——いや、彼女に關してのみ言うならば棲家と言うべきだろう——にしている場所から少し離れた場所に自生するハーブ。つい先日、その収穫を行ったのだった。多くのフレンズは『クサイハツパ』と言うだろうその植物を彼女はどうすれば上手く扱えるかを知っていた。

「紅茶……？ コーヒーじゃないのか……？」

残念そうな声色を察したのか、ゴリラは聞き返す。

「何だ、そつちが良いのか。別に構わんが……まだあつたかな……」

「いや、偶には、ああ、偶には、紅茶で良い」

「そうか？ お前の方から来るのは珍しいから、注文通りに用意しようかと思つたが……ま、そう言うなら」

ゴリラは壁際に置かれた機械を覗き込み、そのままスイッチを押す。

「コーヒーを集りに来た、ということか」

ゴリラはアムールトラに楽しげに尋ねる。顔が怖いからか、はたまた彼女自身の肩書の重々しきからか、彼女の下に遊びに来るようなフレンズは多くない。近寄ると怖いと思われている……というの過言だが、やはり、多くのフレンズには『なにか無いときちやダメ』というようにでも思われているのだろう。

「ん？ 違うぞ？ 月が綺麗だからな」

こちらを見ずにそう呟くアムールトラ。彼女の視線の先は窓の向こう、空にぼんやりと浮かぶ満月に注がれていた。

「お前なあ……その言葉、意味判つて言ってるのか……？」

よもや隠された意味などあるまい。それは彼女も理解していたが、アムールトラの滅多に見せない隙だ、茶化さずには居られなかった。

「……月が綺麗だ、と……ソレ以外に意味が？」

やっぱりと彼女は内心呟く。ポットのお湯が沸く。ゴリラはそつとポットを持ち上げ、ティーポットにお湯を注ぎながら、彼女を茶化すように言葉を返した。

「……厳密に言うところとちよつと違うが……きみがだいすきって意味らしいぞ？ ヒトの中ではそうらしい」

「なっ……」

アムールトラは言葉に困つてしまったようで、視線を月から逸らした。やってやったぜ！ というような感情を抱いたゴリラはティーカップと、自分と同じ竹で作ったコップを持ってテーブルに戻る。

「ふふん、迂闊なことを言うものじゃないぞ」

「……ヒトは、わからん」

諦めなのか呆れなのか釈然としない言葉を繰り返したアムールトラ。かたやゴリラはといえば口の端を持ち上げるように勝ち誇った笑みを浮かべる。

「で、お前は俺のことが嫌いか？」

「そこまでは言っていないだろうに……」

アムールトラはため息をついて呆れていた。そろそろ茶化すのを辞める頃合いだろう。そう判断した彼女は空のコップに紅茶を注ぎ、アムールトラに差し出す。

「悪い悪い、珍しくお前を茶化せそうだったからな……ほら、ハーブティーだ」

アムールトラは差し出されたソレをそっと持ち上げ、じいっと中身を眺めてから、臭いをすんすんとかぎ始める。

「……ダメそうか？ それなら変えるが……」

彼女の言葉にアムールトラは首を降る。

「いや、大丈夫だ。それにしても変わったたにおいだな……」

「そうか？ 熱いから、少し冷ませよ。お前苦手だろう」

ゴリラは内心『におい』ではなく『香り』と呼ぶべきと指摘するか悩んだが、野暮というヤツだろうと判断し、アムールトラがそうして居たように窓の外へと視線を向けた。

お互い何も言わず、ゆつくりとした時間が流れていた。時折、ゴリラは紅茶を啜る程度で、お互い動きも少なくぼんやりと外を眺めるばかり。時間にして十分程度経過して、ようやく言葉が繰り返された。

「流石に……飲めるんじゃないか？」

半ば呆れるような口調でゴリラがアムールトラに言う。

「そ、そうか……」

ゴリラの言葉を受けて、アムールトラはそっとコップを持ち上げ、ふうふうと息をかけて紅茶を冷まし、ほんのひと口ほどを含んだ。

「……どうだ？ 美味しいか？」

アムールトラはうーんとうなり考え込む。

「……不味くは無い……むしろ美味しいんだが……」

「好みじゃない、と……じゃあ次に来たときはコーヒーだな」

果たして次に来るのはいつになるのやらと思いついてはいたが、その『次』は彼女にとつても間違いなく楽しみなのである。変わらぬ日々だって楽しいのだ。そうであるならば、少し変わった日はもつと楽しいに違いない。そうであるのなら、それを待つて待つて、待ちくたびれて……それも決して悪いこととは言えないだろう。そんな考えが彼女の胸中に湧いていた。それは間違いなく明日を望む感情。それは間違いなく日々を過すごして行く糧になる。

「……なあ、この……なんだ？ 絵か？」

彼女の視線の先には写真があつた。ボロボロになつていて、ところどころ色褪せていたそれを、アムールトラは持ち上げるところを躊躇ちゅうちゆつていた。

「写真、だな……まあ絵みたいなものだ。それがどうかしたか？」

「時々話してたトーサカつてどいつのことなんだ？ でつかい方か？
ちっちゃい方か？」

ゴリラがその人物の話をしたことは幾度か会つた。その度に憧れのような呆れのような感情の込められた視線をアムールトラに向けていたことを彼女はしっかりと覚えていて。だからこそアムールトラは疑問に抱いたのだろう。

「どつちでもない。この写真を撮つたヤツが『トーサカ』だ」

アイツも写りや良かったのにと呆れたように言うゴリラの様子を見て、アムールトラはぼそりと呟く。

「不便なんだな、写真つて」

言外に込められた意味を悟り、ゴリラは感心したように言う。

「なんだ、お前結構優しいヤツだな」

ふんと鼻を鳴らしてアムールトラは答え、黙り込む。

「その写真はな、そこに写つた奴らがここに居た最後の頃のヤツだよ」
懐かしむような、悲しいような、そんな声でゴリラが呟く。

「なんだ、死んだのか？」

その声に対してあまりにも無遠慮な言葉だったが、気にせずゴリラは返す。

「どうだかなあ……俺にはわからんよ」

その言葉が嘘か真かに関わらず、アムールトラは自分の発言を反省したようだった。

「悪い、変なこと聞いたな……」

「いいさ、ああ、構わんとも」

年長者らしきとはこういうところから出すものだ、と言っていたのは……アイツだったろうか？

そうして再び部屋は沈黙に包まれる。気まずさを感じない訳では無いが、それでも差し込む月光が優しげに彼女達の姿を照らす。誰かと過ごす夜。その時点で、もう、ゴリラは満ち足りているような感情を抱いていたのだ。

「俺は、もう寝るよ。お前は どうする？」

ゴリラは空になったふたつのコップとティーポットをテーブルの隅にまとめ、立ち上がる。

「アタシは……そうだな、少し見回りして、散歩だな」

どっちも同じ意味ではないのだろうかという疑問は、敢えて口に出さなかった。

「そうか、俺は片付けがあるから、先に出てくれ。じゃあな」

ゴリラは彼女に先立ってドアを開き、廊下へと促す。

「どうも……。じゃあな」

アムールトラも軽く手を上げて、部屋を出て、そのまま外へと出ていく。ゴリラは彼女の姿が夜闇に紛れて見えなくなるまで見送った。不意に柔らかな風が吹き、頬を撫でる。その風はゴリラにそうしたように、優しげに木の葉を、草々を優しく撫で、そして全てを見つめるように輝く月が空に浮かんでいた。

「ふん、こりゃあ、コーヒーでも飲みたくなるわな」

そう思えてしまうほどに素晴らしい光景。

きつと、きつとあの子なら、絵に描きたいというのだろうか？ 叶わぬ夢だろうか？ しかし、あの子を頼むと頼まれた過去もある。せめて、せめて……

「俺の番になる前に、目覚めろよな」

室内に戻り、コップとポットを抱え、隣接する簡易キッチンへと向

かう。片付けは明日でも良いだろう。そう思ったのだろう、ゴリラは水を張った桶にコップ達を沈めて研究所を後にした。

何人かのフレンズさんがトラックに入っていきます。

その中にはコヨーテさんの姿があつて、彼女は気楽そうにご友人と話をしていました。……つてアレ、ロードランナーさんじゃないですか。ああ、仰つてたとおり合流してたんですね。コヨーテさんがニタニタといたずらっぽい笑みを浮かべたりしている一方で、ロードランナーさんは妙に緊張した面持ちです。

コヨーテさんはトラックの内側に立ちます。そして、彼女の反対側に移動してきた子（この子は真つ黒い鳥の子。多分先程ドードーさんとお話していた子じゃないでしょうか？）とともに白い帯をぴんと張るように両端を持ち合います。つまりは、ここがゴールということなのでしょうね……というか、コヨーテさんは走るんじや無いんですね……。

一方で、何人かのフレンズさんは各自のスタート地点に立ちます。一番遠くには頭に角の生えた子（ドードーさんが言うにはプロングホーンさんだそうです）、そこからゴールに近づくにつれて、キリンっぽいフレンズさん、そしてその次にシマウマさん（この二人はわたしでもひと目でわかりました）。次に黒いもこもこした子（カルガモさん曰く、ツキノワグマさんだそうです）、その次に猫っぽい方（この子がチーターさんだそうです）。最後、最もゴールに近い位置にはロードランナーさんが居ます。……思っていたよりも走るフレンズさん達の数は少ないのですけれど、わたしの想像を裏切るようなフレンズさん達の姿も見受けられます。

例えば、鳥であるロードランナーさん。彼女の足が速いということには既にわたしも知るところですけれども、なんだか不思議にも思われます。また、キリンさんですとか、ツキノワグマさんですとか、わたしの考える『足が速いけもの』という括りは含まれていないフレンズさんが居るのです。

ですけれど……わざわざこんな多くのフレンズさんの前で走ることを望み、叶えたのです。そんな方々の持つ力を侮ることは出来ない

でしょう。

また少し上空には下でゴールの帯を持つ方と似た色合いの黒いフレンズさんが浮いています。遠目で良くわかりませんが、彼女は口に何か笛のようなモノを加えている様子。彼女が合図をすることで彼女は走り出すのでしょうか？

ぴいーつとひとつ長い音が彼女から発せられます。その音を合図に選手のフレンズさん達が身構えます。ある子は立ったまま、ある子はしゃがんでお尻を上げるようにして……彼女達が身構えるのと時を同じくして、それを見守るわたし達の間にも緊張が走ります。

破ってはならない静寂が、競技に向けた興味が、彼女達の姿から片時も眼を離すまいという思いが、それら全てが会場の空気に張り詰めたように充満しています。呼吸さえ躊躇われるような、静寂と緊張の世界。全てがひとつの瞬間の為に動きを止めた世界。それを打ち破るひとつ目の笛が、響きました。

順番通り、一番最初にプロングホーンさんが走り始めます。次に走るであろうキリンさんはプロングホーンさんの姿を首を後ろに向けてじつと見つめています。

しかし速いですね、プロングホーンさん……。最後尾からのスタートということは長距離を走ることが得意というフレンズさんの筈。それなのにあの速度……後半になってから追い上げるのではなく、最初から差を全力を出して走るということでしょうか？ その速さの為か、彼女のオレンジまじりの茶色い上着の裾が風ではためいています。

彼女の走りにわたし達が驚嘆しているまもなく、次の笛が短く鳴りました。

キリンさんはプロングホーンさんよりもずっと速い速度で走り出します。

前評判、つまりはドードーさんやカルガモさんから伺っていたお話ではプロングホーンさんは優勝候補であった筈……。違和感のようなものが頭をよぎりますけれど、それについて考える余裕なんてありません。

さほど距離を開かずにスタートラインで待ち構えていたシマウマさんはキリンさんが走り出すと同時に前を向き、再び身構えて……笛の音が鳴ります。

シマウマさんはキリンさんよりも少し速いくらいでしょうか……？ 今の所の順位としては、最後尾をプロングホーンさんが追いかけるように走っていて、スタート位置の都合から加速が付いたキリンさんが先頭を走っています。けれど、差を少しずつ縮めるようにシマウマさんが追い上げます。

彼女達の順番はこの通りですけど……徐々にプロングホーンさんは速度を上げて……そして、間もなく彼女達は横並びに走るようになります。この瞬間に歓声は起こりません。何故なら、このレースに、みな、熱中しているからでしょう。

よつつ目の笛が鳴り響きます。ツキノワグマさんが、だあつと駆け始めます。彼女のスタートは後ろに構えた三名のタイミングとは異なり、かなり余裕をもたせたものでした。遠目なのでしっかりとした距離はわかりませんが、十メートル以上は距離が置かれているようです。

やはり彼女も速い……のですけれど、速度自体は他の子と比べるとあまり速いものではないようです。けれど、わたしよりもずっと速いですし、スタートのタイミングから見ても一位になることは不可能ではなさそうです。このまま逃げ切ることができれば……ですけれど……そんなことを考えていると、どこからか「頑張れえっ！」という声が響きます。その声を受けて会場のあちこちから声が上がります。

熱中は熱狂へ。各々のお友達だからか、それとも単に走る彼女達の方にになりたいからか……理由はめいめい違うのでしょうけれど、走るフレンズさん達を沸き立たせるように声が響きます。そんな中、次の笛が鳴りました。

走り出したのは、わたしの予想に反してロードランナーさんでした。

彼女はひゅんと走り出し、そのまま全力疾走でゴールを目指してい

ます。彼女の速度は、こうして比べてしまうと、他のフレンズさん達に比べると明らかに遅い速度だとわかります。

だから最前列に立ち、そしてかなり広い猶予を与えられてからスタートすることになったのでしょうか……？ 速いには速いのでしようけれど、他の方には及ばない速さ……わたしの知るフレンズさんだからか、つい、わたしも声を上げて彼女を応援してしまいました。

一方で、後ろを走る子供たちの様子はといえば、ツキノワグマさんにプロングホーンさん、キリンさん、シマウマさんが追いつき、再び横並びになります。……と、ロードランナーさんが走り出すと同時にプロングホーンさんは更に速度を上げます。

まだ速度をあげられるのか！ という驚きはもはや隠せるようなものではありません。「うおおっ」という驚嘆なのか、あるいは感動なのか判然としない声が会場から上がりました。

プロングホーンさんはぐんぐんと速度を上げ、横並びの状況からひとりで離れ始めます。ロードランナーさんはそれを気にせず、ただひたすらにまっすぐ、まっすぐ走り続けますが、きつと最大速度なのでしょう、どこか辛そうな表情にさえ見えました。わたしは知らぬ間に立ち上がり、拳を握りしめていました。

プロングホーンさんがチーターさんの横を通り過ぎます。何も気にしないような空気を纏い、じつと前を見つめるチーターさん。そして、一瞬遅れてシマウマさん、ツキノワグマさん、キリンさんという順番で、チーターさんの横を駆け抜け……そして、最後の笛が、鳴ります。

チーターさんが走り始めました。いいえ、『走る』というよりももはや『跳ぶ』と形容したほうが適切かもしれません。それほどの速度を、一瞬で……。最後の笛がなると同時にプロングホーンさんは更に速度を上げました。きつとこれが彼女の最高速度。いわば、『フルスロットル』なのでしょう。チーターさんの速度も、プロングホーンさんの速度も、わたしの想像していた領域ではありません。少しばかり詩的な表現をするなら、きつと風そのもの。

プロングホーンさんとロードランナーさんからしてみたら『どう

やって一位になるのか』というよりも『どうやってチーターさんから逃げるか』という思考の方が優先されていそうな位……。チーターさんは駆け出すのとほとんど同時に彼女を追い越したお三方を追い越し、プロングホーンさんに迫ります。彼女達は横並びになって、文字通り風のような速さで走ります。追いかけられるロードランナーさんは一瞬だけ後ろをちらりと見て、前に向き直ります。彼女の速度は決して落ちることは無いのですが、決して上がることもありません。ロードランナーさんは……いいえ、あの場で走っている全てのフレンズさんみんなが全身全霊を振り絞っていることは、疑う余地なんてありません。だからこそ、純粋な感情が、彼女達を応援したいという感情が、ここに共有されているのでしょうか……？

プロングホーンさん、チーターさんのふたりとロードランナーさんとの距離はどんどん短くなっていきます。辛うじて先頭を走るロードランナーさんと、追いついてくるプロングホーンさんとチーターさんのおふたりの距離が縮んでいくにつれて、会場の声は急激に小さくなります。これから達成せられるであろうゴールの瞬間。それを望むのは誰も同じなのです。

どんどんと縮んでいく距離。かなりのアドバンテージを付けて走り出した筈のロードランナーさんですけれど、あつという間にその差は縮まりました。後数メートルほどの距離なのに……ロードランナーさんが勝つ可能性がわたしには想像できなくなってしまっただけの速度を出しながら、プロングホーンさんとチーターさんが走って……そして、そして……。

ついに前を走る三名が並びます。ゴールまでほんの二、三メートルほど……このたった数歩の距離で勝敗が決するのです。会場中の全てのフレンズさんが息を飲み、会場は静寂が訪れます。そして、ゴールラインに貼られた帯が揺れると同時に会場中が爆発したかのような歓声に包まれたのでした。

勝ったのは、プロングホーンさんでした。二位にロードランナーさん、三位がチーターさんという順位。そして一瞬だけ遅れてシマウマさん、キリンさん、ツキノワグマさんの順番でゴールイン。僅差でし

たので、しつかりとした記録ですとか順位はもしかしたらわからないかもしれせん。ですけど、会場中には順位など気にしない、純粹な感動と称賛の拍手と喝采が飛び交っています。

ぜえはあと肩で息をするように地面に倒れ込むチーターさんにプロングホーンさんが近寄り、手を差し伸べます。彼女達は二言三言ほど言葉を交わしたようでしたけれど、聞き取ることは出来ませんでした。そして、チーターさんはプロングホーンさんの手を取り、立ち上がりました。チーターさんとプロングホーンさんは並び立ち、ロードランナーさんに近寄ります。

彼女も同じように地面にしゃがみ込み、荒く呼吸をしているようです。そしてチーターさんがロードランナーさんに手を差し出します。その瞬間にぐらりと彼女はバランスを失いましたけれど、それをプロングホーンさんが支えていました。そこでもやはり何か会話をしていたようですけれど……聞き取れないのがなんだかもどかしいですね……。

そんな様子を何故だか安心そうに眺めるコヨーテさん……彼女、色々知ってるようでしたし、後で尋ねてみましょうか……？ とは言え、それは失礼というもの。詮索好きが好まれるのは探偵業くらいでしょうから。

喝采に湧き続ける会場と、それに包まれたトラック。その中で喝采を浴びる彼女達の姿は、わたしにはどこか羨ましく思われました。単なる身体能力の高さを羨むだけではありません。自らの望んだことを行い、他者から称賛を受けるということへの憧れ……。

自分を『小さい』と思ってしまう一方で、それを抱くことは間違っていないという思いもあります。何にしても、あそこに居る彼女達の姿は本当に、綺麗……。美醜のくくりではなく（と言ってもそのくくりでも彼女達は『美』なのですが）、そのありよう、その気高さ……。それらにわたしは強く、強く憧れてしまいます。わたしも、彼女達のように美しく在れるでしょうか……？ そう思ってしまう。明日に控える『狩りごっこ』。

今日の彼女達の輝きに見合うだけのことが成せるでしょうか……

？ 緊張とはまた違った感情に気づきます。興奮とも恐怖ともつかない奇妙な震え。

それでも、やりましょう。やれるだけをやって……イエイヌさんと笑ってここを去れるよう、頑張りたい。走りきった彼女達への賞賛の思いの中、自然に湧いて出た感情にわたしは身体を震わせました。

「凄かったですね……」

イエイヌさんが心ここにあらずという具合で眩きました。わたしも、ドードーさんも、カルガモさんも、つい先程までの狂乱に飲み込まれてしまい、茫然自失としてしまっていました。イエイヌさんの言葉でようやく現実に戻されたような、そんな心地になります。

「ですねぇ……」

わたしが同意しか出来なかったというのは、先程述べた理由だけの原因ではありません。純粹に、凄かったとしか言えないのです。一位になったプロングホーンさんの戦略が如何にドラマチックだったかですとか、チーターさんの文字通りの瞬足ですとか、そのおふたりに対して最後まで走りきったロードランナーさんへの称賛ですとか……そんな考えは後から湧いてきたもので、今この瞬間の思いはただただ先程繰り広げられた光景への驚嘆と憧憬。それはイエイヌさんも同じだったのでしよう。彼女は先程の言葉を言ったきり、トラックを見つめていました。

トラックから選手のスーツさん達が居なくなつてからも暫くの間、会場はざわめき立っていました。どうやら熱気にアテられたのでしよう、身体を動かしたがる子たちまで見られました。と、唐突にざあつというノイズが会場に響きます。会場の熱気は数段落ち着き、これから行われるであろうアナウンスへの期待感からざわざわひそひそという具合の静けさが訪れます。

「おつかれさまでしたあー」

アルマーさんの声です。

「しばらくの間、きゆうけいでーす。ごゆるりー」

のんきそうにそう告げて、ひと呼吸置いてから、今度はセンさんの声が響きます。

「次の種目は、『かけっこその二』です。開始前にまた、放送を行います。それまでご休憩を」

そうしてぶつりと放送が途切れます。会場の空気はといえば、緊張の糸がぶつりと切れてしまったように再び賑やかになっていました。ぶつりという音を聞いて、何かを思い出したようにカルガモさんが手を打ちます。

「あ、そうそう、私はこの後集まりがあるので失礼しますね」

「かけっこの関係ですか？」

わたしの質問に彼女は首を振ります。

『サプライズ』……狩りごっこの関係で話し合いがあるとか……」

この後の競技が見られないのは残念ですけれど……と続け、彼女は立ち上がります。

「さて、じゃあ失礼しますねーそれではー」

彼女はぴよこんと跳ねながら髪の毛から続く羽を動かして空へと飛び立っていきました。わたし達は彼女を手を降って見送ります。

「……ともえさん。その……『お話』っていつ頃します……？」

カルガモさんの姿が見えなくなっからイエイヌさんはわたしにそっと耳打ちをします。『お話』……？ ああ、笛のことでしょうか？ 「笛のことですか？」

わたしがそつとイエイヌさんに耳打ちを返すと、彼女ははこくりと頷きました。今でも良いのでしょうけれど、周りにはフレンズさんがいっぱいですし……ドードーさんが他の方に話を漏らすとは思えません……。

「まだ周りにフレンズさんが居ますし、今晚にでも……」

「わかりました」

そう言っ彼女はわたしの耳元から顔を離しましたが、すぐに再びわたしに耳打ちをします。

「これだけ……犬系の子と猫系の子が多かったです」

ふむ……。

「わかりました、ありがとうございます」

犬系と猫系……つまり、コヨーテさんやチーターさんのようなフレ

ンズさんが多かった、と……。どなたが参加するのかまだわからない以上、対策の練りようもありませんが……。それって結構、広い範囲のフレンズさんが対象なのでは無いでしょうか……？

「うーん……。困りましたね……」

わたしの眩きを聞き取ったドードーさんが身を乗り出してわたしに尋ねます。

「どうしたのお？　ともえちゃん」

「いえ、ちよつと予定と違う事態が起こりそうで……」

わたしのぼやかしにぼやかしたあやふやな返事に彼女は首をかしげます。

「んー……。？　なんだかよくわかんないけどお……」

うーんと彼女は少しだけ悩んで続けます。

「最初の思い付きでやって良いと思うよお？　自信は無いけどねえ……。でも、わたしはそれで後悔したこと無いかなあ……」

彼女の言葉は確たる信念の下出された言葉では無いのかもしれない。けれど、わたしの出会ったフレンズさんの中でも長生きな彼女の言葉は、十分に参考となるでしょう。ナントカより年の功、とは古いことわざでしたっけ？

「なるほど……。ありがとうございます、ドードーさん」

彼女は「どういたしましてえー」と微笑みます。

彼女の言葉に従うなら、わたしの思い付きをそのまま実行するだけ。というか、それ以外に案も思い付きませんからね……。問題は、何をどこまでやるのか……。考えるしかありません。優れた足も爪も（攻撃は禁止ですけどね）持たないわたしが出来ることは、考えることとそれを実行すること。やれるだけやるしか無いのです。

「ちよつと、おトイレに行つてきますね」

イエイヌさんとドードーさんにそう告げてわたしは観客席を離れます。いえ、本当におトイレに行く訳では無いのですよ？　少しひとりになって考えたいだけ……。未だ熱を帯びているフレンズさん達の雑踏をすり抜け、わたしは会場の外へと向います。

「さて、と……。どうしたものか……」

とりあえず呟いてみましたけれど、まあ、何が変わることもなく、わたしは歩き続けます。会場の外は中と比べると幾分か落ち着いているようでしたけれど、それでも先程のかけっこにアテられたのでしょう、少し離れたところで「よーい、どん！」と掛け声をして走り合う子達がいきました。

もしかすると、彼女達は次の『その二』の方に参加する子たちなのかもしれませんね。また、お昼頃にラッキービーストさん達がご飯を配っていたところでは、警備も兼ねているのでしょうか？ お昼頃と同じようにお二人ほど立っていました。彼らはじいつと会場の方向を見つめています。わたしが会釈をして横を通り過ぎると、彼らも全身をひよこりと動かして会釈を返してくれました。小さく「お疲れさまです」と口にして、そのまま歩いてみると、後ろから「ボス、ジャパリまん持っていないのお？」というフレンズさんの声が……。彼らは特に返事をしなかったのですけれど、どうやら反応が無いことから持っていないことを察したようです。「そっかあ……」という残念そうな声が聞こえてきましたし、それを励ますご友人の声も……。

そんな可愛らしいやり取りを聞くと、思わず笑みを浮かべてしまいますね。周囲の光景が何とも珍しいというか、あまりにも楽しげで、それだけで心も浮足立ちます。これは考えごとどころでは無いですね……その点では失敗です。

とはいえ、なんだかこのまま少し歩きたい気分。きつとわたしも彼女達と同じように、アテられたんでしょうね。

「……つと、ロードランナーさんじゃないですか……お疲れさまです」
会場から離れた木陰で幹に寄りかかって座っているロードランナーさんが目に入りました。

「……ん？ ああ、ともえか。何日かぶりだな」

ひよこひよこ小さく手を振るロードランナーさんに歩み寄りま
す。

「隣、良いですか？」

彼女は小さく「おう」と返事をしました。それでは失礼して……。木陰に腰を下ろすと、乾いた風が吹き、わたしの髪を撫でるようにそ

よぎました。

「かけっこ、凄かったですね。二位でしたけど……おめでとうござい
ます」

わたしの言葉に照れくさそうな表情になった彼女でしたけれど、ど
こか疲れた様子です。本当に全身全霊の勝負だったんでしょね。

「ん？ まあ、ありがとな。やっぱプロングホーン様も、チーターのヤ
ツも……かなわいなあ……」

悔しげに、でも嬉しそうに彼女は呟きました。

「つと、それはそれとして……ともえ……コヨーテに告げ口したろ
……」

告げ……口……？ わたしを責めるような口振りの彼女でしたけ
れど、まるで心当たりがありません。

「何のことですか……？」

ロードランナーさんは「はあ」と小さくため息をつきました。

「あたしが今回のこと忘れてたって、言っただろ？ それだよそれ」

ああ、なるほど……その事ですか……。

「告げ口も何も……事実じゃないですか、悪いのはロードランナーさ
んですよ」

呆れながらわたしが彼女に返すと、彼女もどこか愉快そうに笑い
ます。

「まあなあ……」

そして、楽しげな笑顔のまま、わたしの目を見て、彼女は言いまし
た。

「そうだ、お前には話そうかな、うん。秘密にしとくのも何だかくす
ぐったいな」

あのふたりには秘密だぞ、と補足して、彼女は話し始めました。そ
れは、わたしの知らない『運動会』の裏側の話。それは、わたしの知
らないフレンズさん達の日常の話――。

んで……コヨーテがなんかマジメソーにあたしと話をして……つてところだったか。あたしは寝ぼけてたからそんなことすっかり忘れて過ごしてたけど、しばらくしてから、また話をされた。

「よう」

川辺に水を飲みに行った時だった。喉が乾いてたつてのもあるけど、暑くつてな。

「おつす。……久しぶりだな、コヨーテ」

実際あれからしばらく会ってない。

まあわざわざ周りのヤツらとコヨーテの話はしないから、単にどっか遊びに行つてんだろうなつて思ってたけど、ちよつと違つたらしい。

「この前話してた運動会なんだがな——」

コヨーテはあれこれ細かい話をし始めた。いつやるのかとか、オルマーとセンが歩き回つて宣伝するとか、かけつこのこととか……。

あたしははつきり覚えてないつて正直に言つと、コヨーテを怒らせそうだったから適当に相槌打つてた。

「で、だ……なんでこんな事考えてたか、お前には言つとこうと思う」
あたしはコヨーテのおかげで「そんなこともあつたな——」とか半分くらい思い出せてたから、そこは感謝だな。

「ん？ コヨーテつて結構面白いこと考えるだろ。なんかカード使つたゲームとかあつたじゃねえか。そういう感じじゃないのか？」

数字？ の書かれたカードを……つてこれはかんけーないな。

「んー……そうだな、俺は楽しいことが好きだぞ？ ただ今回のはそれだけじゃなくてな」

あたしがふんふんと頷いてると、コヨーテは続けていった。

「もつと仲良く出来るだろつてな、思つたんだよ」

「はあ？ どういうことだ？」

あたしが問い詰めると、アイツはなんだか言葉を選んでるようだった。

「あたしがそんな他人の悪口みたいな事言いふらすと思うか？」

そういうことじゃないのかもしれないけど、アイツなりに悩んでるんだったら、言いやすくしてやらねえとな。

「……ちよつと違うがなあ……チーターのヤツ居るだろ？ アイツ、友達居ないからなあ……悪いヤツじゃないのは知ってるんだけどな……」

なんでここでチーターの名前が出るのかって不思議に思ったけど、口を挟むのもヤだったから、相槌だけ打った。

「で……プロングホーンのヤツだったら仲良く出来るだろつてな、思ったんだ。走るの好きだろう？ アイツ。それに——」

プロングホーン様の名前が出てきたからちよつとだけ言い返す。

「なんでプロングホーン様なんだ？ 別にお前だつて足速いじゃねえか」

「まあ待てつて……。それなのにチーターは誰かと走るような性格じゃない。だからいつそのことこっちで誰かと走る場を用意してやろうつてな」

けつこー無理矢理な感じがするけど、コヨーテなりに考えてるんだなあつて思った。

「じゃあ、別にあたしとかお前とかいらなく無いか？」

そしたらコヨーテは首を振った。

「違うぞ。みんなでやるから楽しいんだよ。なあ、わくわくしないか？ パークで一番速いヤツと走れるんだぞ？ もしかしたらもつと速いヤツが出てくるかもしれない。それに……」

妙なところでコヨーテは言葉を切った。伝えて良いのかどうか悩んでるようだった。

「それに？」

あたしの言葉を聞いて、少ししてからアイツは楽しげな顔で言った。

「……プロングホーンに勝ちたくないか？ ロードランナー」

正直どうでも良い。勝ち負けの話は、あたしあんまり興味ないんだな。

そりゃあプロングホーン様がチーターと競争するならプロングホーン様に勝ってもらいたいけどさ。あたしがどうこうってのは……。

「んー……？」

実感が沸かないってのもあるな。あたしがプロングホーン様に勝つなんて、まず無理だからな。

「……ま、まあ……ともかくとして……楽しみにしてろよな。忘れるなよ。まあアルマーとセンに会うだろうから大丈夫だと思うが……じゃあな、他にも会わないといけないヤツが居てな」

そう言つてコヨーテは手を振りながらどっか行つた。忙しいヤツだなーとだけ、あたしは思った。あたしの思いとは違ってコヨーテのヤツは楽しげに笑つてたから、ちよつとだけ羨ましくも思つたりもしたんだけど、まあ、アイツがあんだけやつてるし、あたしに手伝えることも無いだろうしなあ……。あたしも手を降つて見送つてやつたさ。

そこまで聞いて、わたしはいくつか思うこともありましたけれど、開口一番彼女に尋ねたのは……その、なんというか……『ツツコミ』でした。

「なんでそんな大事そうな話を忘れるんですか、あなた……」

わたしの言葉に照れくさそうに頭をほりほりと掻きながら、へへんと鼻を鳴らしてロードランナーさんは言います。

「オオモノだろ、あたし」

何も言うまい、そう思いました。えっへんと胸を張るようなことでも無いでしょう……指摘しても良いのでしょうけれど、そんな誇らしげな表情をされると……その気も失せてしまいます。

「……それで、そのーえー……その後は……？」

「ん？ ええっと……その後は……お前と丘の上で会って原っぱの方をうろうろして……もう一回お前と会って話をした時に全部思い出したな」

そしてサバンナの方に帰って行った、と……。

「メモとか日記とか……そういうのした方が良いと思いますよ、ロードランナーさん……」

どちらも聞き覚えの無い単語だったのでしよう。彼女は考え込むようにしてわたしの言葉を繰り返します。わたしはと言えば話が一段落ついた今こそ尋ねるべき質問が思い浮かびます。

「あ、後……ロードランナーさんに質問なんですけれど……」

「ん？ 何だ？」

少しだけわたしは悩んで彼女に尋ねます。『あの子』の居ない場で『あの子』のことを尋ねて良いのかどうか……そう思ったからです。ですけれど、少しでもあの子の役に立てるかもしれない……そう信じて……。

「……お会いしたっていう『新しいフレンズ』ってイエイヌさんの事……ですよね？」

「おう」

気楽そうな表情でロードランナーさんは応えます。これはわかっていた事。問題はその先。

「ロードランナーさんは……あの子がフレンズになる前のこと、知ってるんですか……？」

彼女はまるで何かを思い出すように、少しだけ唸り声を上げて、そして口を開きました。

「んー……あっちの方は時々遊びに行くだけだしなあ……懐っこいやつだったぞ？ いつからあそこに居たのかは知らねえけど……」

「そう、ですか……」

彼女が教えてくれた話以上のことは何もわからないということでしょう。残念な気持ちもありましたけれど、それ以上になんとか罪悪感……。

「どうかしたか？」

わたしは怪訝な顔をしていたのでしよう。ロードランナーさんが不思議そうにわたしの顔を覗き込みます。

「いえ、大丈夫です……なんでもありません……」

彼女は納得行っていないような表情でしたけれど、わたしから顔を離します。

「ともえさあ、お前かわいいんだからさあ」

「なっ……」

急な褒め言葉にわたしは言葉を失い、ロードランナーさんの顔を見つめます。

「ココにシワ寄せてたらもったいないぞ？」

彼女は自分の眉間を指しながら言いました。少しだけ照れくさそうにしながら……。

「あはは……ありがとうございます、ロードランナーさん」

彼女の言うことはもつともでしょう。いえ、わたしが可愛いとかそういう点ではなく……。

「なんだろうなあ……バカにするつもりはないんだけどな、見てると心配なんだよ、お前……」

彼女はわたしから視線を逸らし、会場の方を見つめます。

視線の先では楽しいげな声が響き渡り、まるでこの木陰だけ世界から切り離されているよう。そよ風に乗る音を楽しむように、ロードランナーさんは一瞬だけ沈黙しました。そして、ひまわりのような晴れやかな笑顔をわたしに向けました。

「……だからさ、イエイヌと一緒に居るっての知れてよかったよ」

彼女の言葉に、わたしは少しだけ違和感を覚えましたけれど、何よりも感じたのは彼女なりの気遣い。

「ありがとうございます」

ロードランナーさんは「いいっていいって」と返します。

「旅、かあ……頑張れよ。……色々じよーきよーが違ったら、あたしも――」

唐突に会場からざあつと言う音が響きます。

「次の種目がはじまりまーす。参加する子は入り口に集まってく
さあーい」

ロードランナーさんはその放送を聞いて、跳ねるように立ち上がり
ます。

「やっべ、行かないと」

あなた両方とも出ていたんですね……。大変でしように……。

「わりいな、ともえ、行ってくる。じゃあな」

彼女はそう言いながら走っていききました。競技中ほどの速度では
無いのですけれど、それでも結構な速度。

「頑張ってくださいねー！」

わたしは走り去る彼女の姿を手を振って見送ります。彼女も軽く
こちらを振り返り、手を降ってわたしに応じます。

「思ったよりも時間経っちゃいましたね……。わたしも急いで戻らない
と」

よっしと口にして、立ち上がります。そういえばわたし、彼女にイ
エイヌさんと居るって話しましたっけ……。？　なんて思いながら道
を進むのでした。

会場に入ると、先程よりも少しばかり慌ただしい空気の中、フレン
ズさん達がこれからの競技への期待感に胸を膨らませながらトラッ
クを見つめていたり、あるいはお友達とお話をしていたりという具合
でした。

「戻りました、イエイヌさん、ドードーさん」

わたし達の掛けていた座席に戻り、おふたりに謝ります。

「遅くなってしまうってごめんなさい、ちよつとお話をしていたので
……」

イエイヌさん、ドードーさんとも首を振ります。

「おかえりなさい、ともえさん。いえいえ、ちよつとだけ心配しました
けど……」

「おかえりい。おトイレ大丈夫だったあ？」

ああ、そう言えば……。

「あはは……まあ、はい……」

ウソをついて出てきたという事と、イエイ又さんへの妙な罪悪感からばかして応えてしまいました。

「……ロードランナーさんと居たんですか？」

イエイ又さんがすんすんと鼻を鳴らして尋ねます。

「ええ、ちよつとお話を……」

じとおつという妙な視線……イエイ又さんそんな顔するんですね……。可愛らしいのは変わりないのですが、何故でしょう、罪悪感を抱かせる様な、わたしを責めているような……。嫉妬？ まさか……。

「ど、どうかしました？」

「どんなお話をしたのかなあ……と思ひまして……」

少しだけ表情を和らげたイエイ又さん。

「ええつと……『運動会』の裏側のお話ですかね……」

ドードーさんはわたしの言葉に興味深げな表情をします。イエイ又さんも少しだけ興味があつたのでしょう、ほんのちよつと、お耳がぴくりと動きました。

「へえ……なんだか面白そうだねえ……」

「ですねえ……ドードーさんから先程聞きましたけど、こういうもおし事つてそんなになかつたそうですし……」

期待の籠もつた眼差しをふたりから向けられます。こういう視線に弱いんですね……ロードランナーさんは「ふたりには内緒」と仰っていました、恐らくその『ふたり』とはプロングホーンさんとチーターさんの事。でしたら他のフレンズさんに秘密ということ、イエイ又さんとドードーさんに話してしまつても良いような……

「他の方には内緒にしてくださいね？ ロードランナーさんも他の方にはあんまり教えるなど言っていましたから——」

話が広まらないように少しだけ注意をしながら、ロードランナーさんから伺つた話を伝えようとすると、会場にフレンズの皆さんが入ってきました。

「——つと、競技が終わってからで大丈夫ですか？」

おふたりはこくりと頷いて、わたし達はトラックへと眼を向けま

す。

「……確か同じ距離を一斉に、でしたっけ？」

イエイヌさんが頷きます。

「みたいですね……前と比べると、なんだか想像が着く気がするんですけれど……」

わたしも同感でした。

その思いはどうかやらあながち間違っていないさそうです。入場してきたフレンズの皆さんはと言えば、『その一』に参加した面々に加えて、コヨーテさんを始めとした何人かのフレンズさん達……。小さな角の生えた子や、頭に小さな羽根のある子、はたまたお団子ヘアの子、ウサギっぽい子がおふたり（白色の子と茶色の子でした）……。先程と比べるといくらか賑やかな印象です。新しく入ってきた子達は先程の競技の様子を見ていたのでしょうか、どこか緊張した面持ち……。

それはもちろんコヨーテさんも同じようで、今度はロードランナーさんに茶化されて居ます。仲いいですねえ、あの二人。今回ゴールに立つのは前回もお手伝いをしていた黒い鳥のフレンズさんのふたり。揃って真っ白の帯をぴんと張っています。

一方で、アルマーさんに誘導された選手の方々はスタートラインに立ちます。誘導が終わった彼女はそのままスタートラインの脇に立ち、笛を加えます。今回は一斉のスタートですので、空からしっかりと確認する必要が無いのでしょうか。先程の光景が胸中に蘇ったのか、会場では準備の最中だというのに持ち上がって応援の声を上げる子も居ます。

そんな周囲の熱気を知ってか知らずか、ゆっくりとアルマーさんは笛を口に加え、ひとつの長い音を響かせます。音を聞いた選手の間は身体を構えます。そして、笛の音が響くのと同時に、観客席は一瞬でしんとします。ごくくりと思わずわたしも喉を鳴らしてしまいます。そして、短く笛の音が響き『かけっこ』が始まったのでした。

……結果から言えば、チーターさんの独走状態でした。いいえ、『独

走』というのも過小評価なのかもしれません。笛の音がなった瞬間に最高速度に達した彼女はそのままつすぐにゴールラインを走り抜けたのです。他の追隨を許すとか許さないとか言う次元ではありませんでした。その後はプロングホーンさん、コヨーテさん、小さな角の生えた子、小さな羽根の子、お団子の子、シマウマさん、キリンさん、ツキノワグマさん、ロードランナーさん、同着でウサギの子達……と言った具合でした。なんというか……一位と二位は想像通りでしたね……。

そんな結果でしたけれど、わたしはひとつ、気づいたことがあります。チーターさんの表情です。

先程伺ったロードランナーさんの話では、なんというか、いつもむっつりとしていてひと付き合いの苦手そうな子という印象でしたし、実際、今思い返せば『その一』の競技が始まる前の彼女の表情は（緊張もしていたのでしょうけれど）結構固いものだった気がします。けれど、今ゴールの先で立つ彼女の表情は柔らかなものでした。チーターさんは愛嬌のある笑顔でプロングホーンさんにVサインを繰り返していましたし、それを受けるプロングホーンさんはやれやれという風に首を振っています。お友達に、なれたんですね。多くのフレンズさんの知らないところで繰り返されたイザコザ（というほどの事なんでしょうか……？）。その結末がコレ……という感じなのでしようね。

ロードランナーさんからお話を聞いていたからわかる……：のでしようけれど、なんだかほんわかした心持ちになりますねえ……。完全に部外者のわたしがどうこう言うのも不思議なお話ですけどね。なんというか、ぼんやりとした記憶の中から『少年マンガ』という言葉が浮かんでくるくらいです。

競技が終わり、出場したフレンズさん達がトラックを出ていきます。幾分か落ち着いた空気の会場でしたけれど、それでもわたしを含めた観客席の皆さんは盛大な拍手で彼女達を見送りました。

拍手が鳴り止んだ頃、イエイヌさんが眩きます。

「さすがでしたね……」

「ですねえ……イエイヌさん。もしも参加できてたら、なんですけど……自分は何着だったと思います?」

わたしは素直な疑問を彼女に尋ねます。

「うーん……そう、ですねえ……」

彼女は腕を組んで真剣な表情で考え込み始めました。頭の中で走ったりしてみても比べて居るのでしようか……? 考え込んで居るイエイヌさんを尻目に、ドードーさんはわたしに問いかけます。

「そういうともえちゃんはどうなのお?」

楽しげな、好奇心に満ちた表情でした。決して悪意のない、ちよつとだけ茶化す様なそんな顔。

「あはは……多分ビリですよ、ビリ」

わたし自身が運動を得意としていないこともありますけれど、恐らくヒトという種は彼女達と比べようもないのではないのでしょうか……?」

「そっかあ……わたしも足遅いから……あ、そうだ! 今度くらべっこしようよお!」

微笑みながらの提案。断る理由もありません。

「ええ、良いですよー勝っても負けても恨みっこなしですからね」

お互い笑顔での勝負の約束。こういうのもなかなか良いものですね。

「ふふーん、負けないんだからあ」

売り言葉に買い言葉というヤツでしょう。ドードーさんは楽しげな笑顔でわたしに返します。と、唐突にイエイヌさんが先程の問の答えをわたしに告げます。

「ともえさん、多分……私、四位くらいだと思います……」

自信が有るのか無いのか何とも言えない、妙にリアリティのある順位ですね……また……。結構しつかり考えていたんでしようね……。

「……トップの方々がとんでもないですからねえ」

今回の『かけっこ』で感じた呆れとも驚きともつかない言葉が出てしまいました。

と言っても、よく考えてみたら彼女自身が得意だと言っていたのは

長距離。単なるスピードだけではなく、速さの維持やペースの配分と言った今回のような短距離の競争とは比較の難しい距離です。

「イエイヌさんは長い距離が得意なんでしたっけ？　どれくらいの距離を……」

と尋ねて思い出したのは旅の初日のこと。イエイヌさんは走ってわたしに追いつきました。何が彼女を駆り立てたのかは、わたしにはわかりませんけれど……。ともかく、彼女はかなりの時間をかなりの速度で走ったことになるでしょう。

「そうですねえ……最初の日——ええつと、私が追いついた日、覚えてますか？」

ちやうど例として適切なのか、彼女も同じことを考えていたようです。

「全速力だと、あの時が限界ですかね……あれ以上は倒れちゃいます……たぶんですけど。あの半分の速度でいいなら……試したことはないですけど、もっと行けそうですねえ……」

少しだけ悩むように手を顎に添えてイエイヌさんは答えてくれました。

「やっぱりとんでもないですね……イエイヌさんも……」

「だねえ……」

わたしの驚きの声に合わせて、ドードーさんも頷きます。とりあえず同意しとけ、とか思ってますよね？　イエイヌさんは謙遜しているのでしょうか、首を振りました。

「あの距離だと……ここからうみべちほーへまっすぐ行く位の距離……ですね？」

一応、ドードーさんにも感覚を掴んで頂いたほうが良さそうです。わたしは距離についてイエイヌさんに尋ねました。イエイヌさんは「ですです」と頷き、それを聞いたドードーさんは「ほええ……」と妙な声を上げて感心している様子。

「速いかどうかってなると、怪しいですけどね……」

謙遜とも自虐とも取れる彼女の言葉。ですが、凄いものは凄いなと思っ
うんですよねえ……。

「十分凄いですよ。わたしにはできそうに無いですし……」

わたしがそう言うと、イエイヌさんは照れくさそうに「えへへ……」と頭を掻くのでした。

かけつこが終わり暫く経っても、会場の熱気はまだ依然として残っています。何らかの連絡や放送があるだろうと思い、わたしを含めた会場みんなはじっと待っていました。何も無い、空白の時間が訪れました。時間はどれくらいだろうと思ひ、空を見ると、太陽は眠そうに、お昼寝時と言わんばかりの傾き具合です。けれども、まだ夕暮れと呼ぶには幾許かの余裕がありそうな様子。今日はこれで終わりなのでしょうか……？　なんだか、のんびりとした雲の動きも相まって、本当にお昼寝でもしたくなりますね……。そんなことをぼんやりと考えていると、折よくアナウンスがなされます。

「今日はこれにてしゅうりよーです！　明日もお楽しみにいー！　おひさまが出てから少しして開催でーっす」

楽しげな声が響きました。アルマーさんの放送を聞いたフレンズさん達はめいめいに会場を離れていきます。わいわいがやがやと言った具合でそのひと波が会場の出口へ向かっていたり、空へ飛び立っていたり……。空を飛べるって……。非常に便利そうですね……。とは言え幾ら羨んでもわたしは空を飛べる訳ではなく……。少し様子を見てから移動しましょうか。

「そういえば……。コヨーテさんは……」

雑踏が解消するのを待ちながら呟くイエイヌさん。わたしは彼女の言葉にはつとします。

「あー……。ここに戻ってくるんですかね……。どうなんでしょう……。？」

「どうなんだろうねえ……。行ってくるとは言ってたけどお……」

イエイヌさんもドードーさんも首をかしげています。うーん……。混雑を回避する為にどうせここに暫く残るのですけれども……。

ほんの数分ほどして、わたし達は声を掛けられます。それも会場のトラックの方から。誰もそちらに視線を向けていなかったため、わたし達はびっくりした声を上げてしまいます。

「よう、待たせたな……って、悪い、びっくりさせるつもりは……」
コヨーテさんでした。彼女はトラックと観客席を隔てる壁をがしがしと登ったのでしよう。

「いいえー大丈夫だよおー」

「お気になさらず……まだここから出られそうにありませんし……」

イエイヌさんは周囲を見渡して呆れたような諦めたようなそんな口調で言いました。空を飛べる子やジャンプ出来る子などは地形を無視してぴよんと会場を後にしています。わたし達のように歩くことしか出来ない子たちの方が多い様子。まだ少しばかりフレンズさん達の波が残っております。

「あー……だなあ……」

コヨーテさんもイエイヌさんと同じように呟きます。会場に残るフレンズさん達は、先程述べたとおり、まだ残っておりますし、よく耳をすましてみれば、出入り口のあたりががやがやと賑やかで、大変な混雑になっていることが想像できます。

「裏口もあるにはあるが……下に行かないといけないから……暫く待つしかない、かな……」

コヨーテさんの言葉にわたし達は同意せざるを得ませんでした。

「そういえば、コヨーテさん」

幾つか質問したいこともありますが、ひとつだけ。

「どうした？」

「あのおふたりについての計画。成功でしたか？」

わたしの言葉に彼女は眉間にシワを寄せます。

「……ん？　なんでそれを……？」

「ロードランナーさんから伺いました」

そう聞いた彼女は「はあ」とため息をついて言いました。

「秘密にしろとは言っていないけどなあ……んーと……大成功、かどうかはわからんが……上手く行ったんじゃないか？　後はあいつら次第ってところだと思うぞ」

「……優しいんですね、コヨーテさんは。お疲れさまでした」

コヨーテさんは「ふふん」と鼻を鳴らします。わたしには、彼女の

仕草に気恥ずかしさとほんの少しの自慢げな感情が見え隠れしているように思われました。

「……まだ終わってないぞ。明日もあるんだからな。ともえとイエイヌには頑張ってもらわないとな」

「プレッシャーですよ……」

わたしがぼやくと彼女はへへんと笑って出入り口の方を指差します。

「ん、空いてきたな、一旦外に出よう」

彼女が先頭を行く形で、わたし達は観客席を出ていきました。

明日の会場は違うそうですけれど、わたし達が皆さんの前に出るのは決定事項。その時、わたしは皆さんの期待に応えられるでしょうか？ 皆さんを失望させるようなことをしないででしょうか？ 心配事は山のようにあります。

やらねばならぬと思えば思うほど、腕と足が重くなっていき、胸の鼓動が早くなっていきます。それでも明日は来ますし、土壇場で引込んでしまうことは避けたいと思っています。身体が強くないんですもの、せめて、心だけでも、せめてイエイヌさんに応えるくらいはしたいのです。

観客席から出る寸前、振り返ってちらりと会場を見ます。

今日ココで起こったこと。それはフレンズさん達が自分のできることとやりたいことを最大限実行して、そしてそれに対する称賛を浴びた場。

前に向き直ると、通路に風が吹き込み、わたしの髪の毛をなで上げます。明日は、わたしが……みんなの前で……。怖いですし、不安です。ですけれど……今日の彼女達に恥じないよう、何よりもイエイヌさんに恥じないよう、やれるだけのことはやってやりますとも！

会場を出て、散り散りになっていくフレンズさん達を眺めていると、コヨーテさんが振り返り尋ねます。

「お前達、この後どうするんだ？ 昨晚の建物に戻るのか、それともこの辺で寝るのか……」

そういえばそうでした。

「あたしは一旦ナワバリに帰るよお。明日うんどーかいが終わったら、ともえちゃんと一緒に『お家』に行くしねえ、準備しないと」
ドードーさんがわたしに向かって言いました。わたし達は彼女のように準備をすることも無いですし、かと言ってあの小屋に戻るとなるとちよつと距離が離れすぎている気もします。

「どうしましょう？ イエイヌさん」

イエイヌさんも「うーん……」と考え込みます。

「あんまりここから離れたく無いですよねえ……距離ありますし……ちよつど良い樹の下とか、あればいいんですけど……」

寝袋がある為、野宿も十分に選択肢に入ります。わたしは雨風を凌げそうな大樹が無いかと周囲を見回しますが……見当たりません。川の方まで移動すればどうとでもなるのでしょうか……。

「ちよつと遠くなりますけど、川沿いの方まで行ってみましょうか」

イエイヌさんはわたしの提案にこくりと頷きます。

「よし、じゃあ俺も一緒に行かないとだな。明日お前達を呼びに行かないとだからな」

ああ……何から何まで……。

「ありがとうございます、コヨーテさん」

わたしとイエイヌさんは揃ってコヨーテさんにお礼を告げます。

「いいっていいって。じゃ、行くか」

わたし達は川の方向へと歩いていきます。多分、地図でいうと東側……なんじゃないですかね。と、不意に声を掛けられます。

「お、コヨーテか、おつかれさん」

ゴリラさんでした。主催としての任が半分終わったからか、今朝方

見かけたときよりもいくらか表情が和らいでいるように見えます。

「おう、おつかれ、ゴリラ」

コヨーテさんに続いてドードーさん、イエイヌさんと続きます。そして最後にわたし。

「お、おちゆっ……お疲れさまです……」

少しばかり緊張してしまいましたけれど、大丈夫ですよ？

ゴリラさんはくすりと笑って、わたしの頭を撫でます。

「ありがとな。とー……ともえ、みんなも」

わたしの頭を撫で、次にイエイヌさんも……イエイヌさんは緊張していたのでしよう、身体がぴくりと動いてしまっていました。

彼女の手は大きくて優しく暖かくて……イエイヌさんの手とはまた違った感覚です。恥ずかしいやらくすぐったいやら、という具合ですね。ちなみにイエイヌさんの手は少し小さくて柔らかくて、くすぐったさもありますけれど、胸が暖かくなるような、そんな具合です。比べるものじゃないですけどね。

「帰り道を邪魔して悪いな。旅してるんだろ？　ともえとイエイヌは今晚どうするんだ？」

わたしは先程の話を彼女に伝えます。コヨーテさんの案内もありますし、不安な点はほとんど無いことも。わたし達の説明を聞いて、ゴリラさんは何やら考えがあつたのでしよう、少しだけ悩んでから口を開きます。

「そうか……うーん……ふたりとは少し話をしたかったが……良ければ会場の小屋に泊まらないか？」

願ってもない申し出ですけど……申し訳ないというかなんというか……。

「ああ、俺の心配をしてるんだつたら気にしなくていいぞ。俺も家に帰るからな。緊張するだろ？」

確かに雨風をしのげるという意味では最良なのは間違いないかもしれません。ただ、旅をする以上、今後野宿しなくてはならない状況はあります。ですから、修行（というと格好つけた言い方ですね）のつもりでも居たのですが……。

「そうか、その手があったか……」

「コヨーテさんはなんだか得心行った様子ですけれども……。」

「今までなんだかんだ野宿をしてこなかったので……練習しようかな、と……」

「ですね……ここは夜少し涼しいくらいですけど、ここえたりはしませんし……」

「イエイヌさんも頷いて言いました。」

「真面目だなあ……お前達……まあ、遠慮もあるんだろうが……」

「少しだけ間を置いて、ゴリラさんは提案しました。」

「よっし、こうしよう。ちよっと小屋で話をしよう。それだけでも、ダメか？」

「なんだか不自然なくらいに頑なな気がしますけれど、島の長たる彼女がここまで言うのです。何かの意味や目的もあるのでしょうか。」

「……でしたら喜んで」

「私も……はい、大丈夫です」

「なんというか、イエイヌさんはどうにも緊張してしまっている様子。」

「ということだ、コヨーテ。ともえとイエイヌの寢床だが——」

「軽くコヨーテさんとゴリラさんは打ち合わせをしました。」

「はいよ、了解。じゃあ明日の朝、そこに迎えに行くことで良いんだな？」

「あつという間に話は決まったようです。」

「ああ、頼んだよ」

「ゴリラさんはそう言い終わると、こちらを向きました。」

「よっし、行くか。ドードー、お前はどうする？」

「少しだけドードーさんは悩んで、答えます。」

「うーん……わたしは遠慮させてもらうねえ。朝早かったからなんだか眠いしねえ……」

「ドードーさんは小さくふわあと可愛らしいあくびをします。」

「ふわあ、あ……眠いって言ったら眠くなつて来ちゃった……先に帰るねえ。楽しかったよお、また明日もよろしくねえー」

「はい！　こちらこそおかげさまで……では、また明日ー！」

わたし達は彼女を手を振って見送ります。

「あー！　そうだあー！　ゴリラちゃあーん、はーぶていー？　また飲ませてねえー」

途中で彼女は振り返ってこちらに大声で言いました。パークの置かれた環境を考えると、ほんの少し違和感のある単語が聞こえましたけど……。ゴリラさんは「楽しみにしてるよー」と返事をしています。ハープテイーって普通なんでしょうか……？

彼女の姿が小さくなり、ゴリラさんはコヨーテさんに尋ねます。

「コヨーテもロードランナーと話があるんだっけか？」

「だな……つと、ゴリラ、話すなよ？　楽しみが無くなる」

コヨーテさんがゴリラさんに釘を刺したのですけれど……。はて、どういうことでしょう。

「性格悪いなあお前……まあ信用してくれよ」

「うるせえ」

彼女達はお互いへへんと楽しげに笑い合います。

「じゃ、そういう訳だ。ともえ、イエイヌ、朝になったら迎えに行くからな」

コヨーテさんは軽く手を上げて、駆けていきました。手を振って見送る……余裕はありませんでした。やっぱり速いですよ、コヨーテさん……。

「仲、良いんですねえ……」

イエイヌさんが呟きます。

「んー、まあなあ、付き合いが長いってほどじゃないが、お互い世話になったり世話をしたりってな、持ちつ持たれつってヤツだよ。じゃあ行くか」

彼女は振り返り、歩き始めます。わたし達は彼女の後ろをゆっくりとついていきました。さほど会場と離れていない為、短い距離の移動なのでしようけれど、緊張からか会話はありませんでした。

時折、ちらりとゴリラさんが後ろを振り返ったりもしましたが……彼女も同じ様に黙って歩いていきます。視線を空に上げると、先程と

比べるとずっと夕暮れに近い空模様。朱色がさしはじめた空は幾度見ても美しく、そしてひと塊の雲が白く輝きます。その輝きは孤高でもあるようで、孤独でもあるようで……。

「ま、入ってくれよ」

いつの間にか小屋の入り口に到着していたようです。

「お、お邪魔します」

わたしとイエイヌさんは彼女に従い、小屋の中へ。今朝方と変わらず、中心に簡素な机と椅子がありました。

「かけろよ。どこでもいいぞ」

わたしは扉から一番近い椅子に、イエイヌさんはわたしの右隣に腰掛けます。わたし達の様子を視線の端で捉えるようにしながら、ゴリラさんは小屋の電気をつけます。

「ああ、そうだ。もえ、イエイヌ、コーヒーと紅茶、どっちが良い？」

……？ って、コーヒーに、紅茶？ イエイヌさんは問いかけの意味がわからず、わたしに助けを求めるように「ええつと……」と呟いて、視線を送ります。

「珍しいですね……えーつと……では、コーヒーで」

「わ、私もコーひー？ で……」

ゴリラさんは「はいよ」と気楽そうに答え、部屋の片隅の簡易的な棚に向かいます。棚の隣には極めて簡素な流し台とケトルがありました。電気で沸かすのでしょうか。

「ヒトが居なくなっても残ったモノって多くてな」

ゴリラさんはケトルに水を注ぎ、スイッチを押してわたしの向かい側に腰掛けて言いました。

「は、はい」

「緊張しなくても良いんだがなあ……まあ、それは置いといて……で、それをなんだかんだと使わせてもらってる訳だな」

イエイヌさんがあの『お家』で生活していたようなものでしょう。ゴリラさんの場合はしっかりと使い方が判っている分、より意識的に活用出来ているのでしょうか……。

「こういう特別なときには重宝するよ……。この前なんか、アムール

トラがコーヒーをねだりに来てな……」

ゴリラさんも少し緊張しているのでしょうか？ 少しばかり表情がぎこちないような気もしますけれど……それでも楽しさや嬉しさの様なそんな感情の籠もった言葉でした。

「アムールトラさんって、今朝そこに居た方ですよね？」

イエイヌさんが聞き返します。

「ああ。……もつと怖いヤツだと思っただか？」

わたし達はこくりと頷きます。そんなわたし達を見て、ゴリラさんは愉快そうに小さく笑いました。

「少なくとも満月が綺麗だからコーヒーを飲みたがる程度には、可愛いやつだよ」

そう考えると、なんだか可愛らしいところもあるのだなあと思いますけれど……。うーん……。ぶつきらぼうな様子ですと、どうしても身構えてしまいますよねえ……。そんなことを考えていると、かちりとスイッチの音がします。どうやらお湯が湧いたのでしよう。ゴリラさんは立ち上がり、作業を再開します。

「インスタントで申し訳ないが……砂糖とミルクはどうする？」

わたしは、多分なんですけれど、要らない気がします。

「わたしはどちらでも大丈夫です。イエイヌさんは……甘いのと苦いのどっちが良いですか？」

イエイヌさんは少しだけ悩んで「甘い方で」と言い、ゴリラさんはそれを承諾しました。

「はいよ、まあ少し位のんびりしてくれよ。熱いから気をつけてな」
わたしとイエイヌさんは竹のコップを受け取り、ふうふうと息を吹きかけそれを冷まします。コップ越しに伝わる暖かさは、それだけでどこか安心してしまうような、そんな心地。少しばかりお行儀が悪いですがけれど、啜るようになってわたしはひと口コーヒーを含んで、ほうと息をつきます。

「なんだか懐かしい気がしますねえ……美味しい……」

目が覚めてから一度も飲んだことなんて無いのに、舌に残る苦味も、酸味も、鼻に抜ける特有の香りも、全てが懐かしく思われます。

『舌が覚えている』ということなんでしょうか？

今のパーク（と言っても過去は忘却の彼方ですけど）では基本にお水しかないのでしょうか、コーヒーを飲むという行為自体、特別なんでしょうね。ちらりとイエイ又さんを見ると、コーヒーの臭いをすんすんと嗅いでいます。

「そう……なんですか？　そう言われると……？　うーん……？　なんだか今まで嗅いだことの無いにおいです……」

イエイ又さんは困惑し通している様子。臭いを嗅ぎ終わった彼女は、わたしの真似をするようにしてコーヒーに息を吹きかけ、ひと口含み……顔を歪めます。

「に……苦いですよお……なんでこれ飲めるんですかあ……ともえさあん……」

わたしとゴリラさんは苦笑いを浮かべます。好き嫌いってありますからねえ……。

「砂糖足りなかったか……ちよつと失礼するぞ」

彼女はそう言つて二杯ほど砂糖をイエイ又さんのコーヒーに足して、竹の棒でくるくると混ぜました。

「あ、ありがとうございます」

その後、彼女はもうひと口恐る恐る口に含みます。

「どうですか？」

わたしが尋ねると、どうやら満足行つたのでしよう。可愛らしく微笑む彼女がそこに居ました。

「まだちよつと苦いですけど……ちよつど良いです、えへへ、これくらいなら、美味しいですね」

彼女に釣られて、わたしも笑みを浮かべてしまいます。視線だけゴリラさんに向けると、彼女も同じ様に微笑んでいました。ですが、何故でしょう？　目を細めて笑みを浮かべているのに、彼女の表情はどこか切なげにさえ見えました。

「ゴリラさん？」

わたしが不思議に思つて問いかけると、途端に彼女の表情は楽しげな笑みに戻りました。

「ん？　どうかしたか？」

「……いえ……それで、お話って何なんですか……？」

わたしの言葉に、ゴリラさんは少しだけ逡巡して、答えます。

「ふたつあるな。ひとつは質問、ひとつは助言って感じだ」

「お答え出来ることなら、何でも」

わたしは頷いてそう告げます。

「答えづらいこと聞くつもりも無いけどな。ひとつ目、ともえ、イエイ又、お前たちはいつ、どこで目覚めて、何故旅をするんだ？」

わたしは何とも言えない気持ちになります。幾度かフレンズさん達にお話したこともある話題なのですけれど……今までのフレンズさん達がこの質問をする時は好奇心の為。一方で、今のゴリラさんの表情は真剣そのもの。

彼女の纏う空気さえ違うように思っています。

「そしてふたつ目。けっこー無理矢理に『狩りごっこ』に参加させちまったけど、それで良かったのかつてのと、もしお前達が良ければだが、色々教えてやろうかなって思ってたな」

ふたつ目の質問の時のゴリラさんの表情は、先程とはうってかわって楽しげなもの。わたしはイエイ又さんの方を向き表情を伺います。少しだけ考え込むように眉間にシワを寄せてうつむいています。

「では……わたしから」

順番に答えていきましょう。何度と無く話をしたことから。

「この間の、満月の夜に……草原の方の建物で目が覚めて……」

ゴリラさんは頷きながら話を聞いています。腕を組んで、俯きながら……。

「ええつと……理由、ですよ。その時に何も覚えていなかったの、パークに何か手がかりがあるかなって思ってた、その……旅に出ました」

「……本当に何も覚えてないのか？　親父のことも、自分に何があったのかも？」

彼女の言葉はまるでわたしが嘘をついていないか疑うような声色で出されたものでした。その威圧感にわたしは黙って頷くことしか

出来ません。暫くゴリラさんはわたしの目をじいっと見つめ、諦めたように俯きます。

「そうか……嘘は、ついてないんだな」

絞り出すような声。

それはわたしの覚えている言葉の中でも最も切なげな響きを持っていました。部屋に沈黙が訪れます。数秒、あるいは数分、一度だけ遠くから聞こえて来たどなたかの笑い声が部屋に染み込む様に響いただけで、部屋には重苦しい雰囲気立ち込めていました。

わたしも、イエイヌさんも、何か言葉を出せば良いのに、それを躊躇わせる様なゴリラさんの姿が視界にあるだけ。彼女は腕を組んで俯きながら黙っています。

「わ、わたしは……！」

イエイヌさんが沈黙を破ります。少しだけ驚いた様子でゴリラさんはイエイヌさんの方を向きます。

「季節が変わる前に目が覚めて……それから……ずっとひとりで……」

段々と小さくなる声に、わたしは胸が締め付けられるようでした。ゴリラさんも同じだったのでしょうか。イエイヌさんを静止する言葉をかけます。

「イエイヌ、辛いだろう？ 無理なんかしなくて——」

「しばらくしてともえちゃんと会って、嬉しくて、楽しくて……」

ゴリラさんの言葉を遮るようにイエイヌさんは言葉を続けます。

「ともえちゃんが旅に出るって、離れ離れだって……嫌で……だから……！」

「もう、良いですよ、わかりましたから、ありがとうございませ、イエイヌさん」

わたしはそつと彼女を抱き寄せます。彼女のこんな顔を見るのは何時ぶりでしょうか？ きつとあの時ぶり。ああ、わたしは彼女にまた、こんな顔を……。耳がしゅんとしおれている彼女を見るのは心が痛んで仕方ありません。

わたしが彼女の頭を撫でていると、心苦しそうにゴリラさんが口を

開きます。

「……イエイヌ、ありがとうな。それと、ともえも、ありがとう」

そう言っただけ彼女はコーヒをひと口啜り、窓の外を眺めます。再び部屋は静寂の中へ。

イエイヌさんの抱くわたしへの思いが、彼女にとってどれほど大切で、愛おしくて、守りたいものなのか。それをわたしは噛み締めます。彼女からの好意への純粋な喜びもありますし、どこか醜くさえあるような優越感も感じます。

けれど、何よりも強く感じたのは、彼女の思いに応えなくてはという義務と使命。それさえ、他者に抱く感情として美しいものとは言えないのかもしれない。けれど、感じてしまったものは仕方が無いのです。出来る範囲で、やりましょう。そのためにも、今は……。「ふたつ目の質問ですけど……」

わたしはイエイヌさんの頭を撫でながら、そつとゴリラさんに伝えます。

「参加出来たことは、感謝しています。イエイヌさんも同じ気持ちの筈です。その件は本当にありがとうございますでした」

ゴリラさんは「ん」と口にして頷きます。

「……で、どうするつもりなんだ？」

「どうする……う？ ええつと……」

わたしが悩んだのを見て、ゴリラさんは咳払いをします。

「悪い、言い方が悪かったな。お前のことだから、勝ちに行くんだろ？」

その方法は？ つてことだ」

彼女はそう言った後、少しして付け加えます。

「俺は誰にも言わんし、参加もしないぞ、安心してくれ」

わたしは少しだけ悩んでしまいました。イエイヌさんがわたしの胸に顔をうずめたまま……つて、まーこの子だったら……。

「……イエイヌさん、もう大丈夫ですね？」

わたしの言葉を聞いて、不服そうに頬を膨らませながらも、顔を離すイエイヌさん。気持ちが悪く落ちて着いて暫く経っていたのでしよう。耳もしゃつきりしていますし、しつぽも楽しげに揺れていますから

ね。

「はい……」

ゴリラさんはくすくすと笑い、わたしもわたしで思わず笑顔になつてしまいました。

「まったくイエイヌさんはちゃっかりしてますねえ……つと、『これ』を使うつもりです」

わたしはそつと首から掛けた笛を出し、ゴリラさんに見せます。

「わたしや、一部のフレンズさんにも聞こえない音が出るんです、これ」

ゴリラさんは楽しげに「ほう」と呟いて組んだ腕をほどき、頬杖をつきます。

「その音はイエイヌには聞こえる、と?」

「はい」

わたしはコーヒートを舐め、言葉が続けます。

「これで指示を出して、イエイヌさんに動いてもらおうかと。多分わたしが動いても足手まといなので……」

「……一応、ルール違反じゃないからな、考えたな」

ゴリラさんは感心するように頷きます。と、イエイヌさんが口を開きました。

「笛の音なんですけれど……先程お話した通り、犬系の子と猫系の子は聞こえてると思います。コヨーテさんが不思議そうにきよろきよろしてましたし、他のそれっぽい子も……。ドードーさんや後ろに居たフウチョウさん達は聞こえてなかった様に見えましたが……」

「やっぱりそうですか……」

はてさてどうしたものでしょう……お相手に『聞こえるフレンズ』さんが来ないことを祈るのも手ではありませんけれど……。ちよつとズルい手を使うようですが、ひとつ思い付きました。

「……ゴリラさん。嘘つてついても良いですか?」

わたしの言葉に彼女はぼかんとした表情になり、その後、大きく笑い始めました。

「構わんよ、構わんさ。ふふつ、そうか、ははっ」

ひと呼吸置いて、彼女は続けます。

「嘘だと見抜かれたらどうする?」

確かに……。

「相手にわからないように指示を細かくするとわたしもイエイ又さんも混乱しますし……うーん……」

「でしたら、その時は——」

イエイ又さんが思いついたことを口にしました。わたしもそれに対して意見を交わします。ゴリラさんは決してわたし達に有利なアドバイス——例えば相手のフレンズさんの情報ですとか——をしなかつたのですけれど、案に対する問題点をしっかりと指摘してくれました。彼女の存在がここにあることで、より確実な勝利へと近づける……という過言ですね。ですけれど、より良い作戦が生まれる可能性は高くなっていると思います。

合間合間に、ちびりちびりとコーヒーを飲んで……そしていつの間にかコップは空に。外の景色も夕暮れ時を通り越し、空は董色に染まっていました。

「つと、もう遅いな。寢床に送ろう」

ゴリラさんが外の様子に気づいて言います。

「本当ですね……今日はありがとうございました、ゴリラさん」

イエイ又さんがぺこりと会釈をします。

「わたしからも、ありがとうございます」

わたしも彼女に続けてお礼を。けれどゴリラさんは首を振ります。

「いいっていいって。俺が呼びたくて呼んだんだからな。それにまだお前達を送らないといけない。まだ終わってないぞ?」

そう言いながら彼女は立ち上がり、部屋の隅の棚をがさごそと漁り始めます。わたしとイエイ又さんは不思議そうにその光景を眺めていましたが、少しして彼女は「あつたあつた」と呟いてこちらに向き直ります。

「ほら、これやるよ」

小さなランタンでした。持ち手があつて、ランプの部分があつて……てっぺんのところには黒いパネルが。

「たいよーこーはつでん？　ってヤツらしい。昼間はここに光を当てておいて、使うときはここのつまみをひねって——」

時折彼女は指で場所を示しながらわたし達に簡単な使い方を教えてくれました。

「お気持ちは嬉しいのですが……良いんですか……？」

「んー……貴重っちゃ貴重だけどな、俺も含めてフレンズは夜は寝てるか夜目が効くかするし、誰も使わないんだ。しまつとくよりは良いだろ？　使ってやってくれ」

そうおっしゃるのでしたら……わたしはそつと彼女からランタンを受け取ります。そのままゴリラさんに促されるまま、わたし達は表に出ます。ああ、そうです、折角ですからランタンを使ってみましょう。ここのつまみをひねるんですっけ？　かちりと音がして、ランタンが光り始めます。

「おお……小さいのに結構明るい……夜も歩けそうな気がしますねえ……」

イエイヌさんが眩しさに目を細めます。

「ですねえ……危ないですし、疲れますから、夜はちよつとですけど……」

わたしは彼女の言葉に「言葉の綾ですよ」と返しましたが、彼女は不思議そうな顔をします。

「本気で言っていないぞ、ってそういう訳だな……よし、こっちだ」
くすくすと笑いながらゴリラさんは言いました。

「あ、なるほどお……」

イエイヌさんもふんふん頷きながら歩き始めました。つと、わたしも行かないと、ランタンはまだ不要な明るさですし、消して……。

来た時とは異なり、帰り道はお互いにお話をしながらの道のりです。お茶会、なんていうと少し気取っているようですけれど、それでもお話をした分だけ、時間を一緒にした分だけ、心の距離は縮まるのでしょうか。

フレンズさん達がそもそも社交的な方が多いというのもあるのでしょうか……。

話の内容としては、わたし達は旅の話を。ゴリラさんからはアムールトラさんがコーヒーを飲みに来た話の詳細ですとか、コヨーテさん考案のゲームをした時のお話ですとか、そんな感じでした。

「その、げえむ？ 面白そうですね……」

「そうは言うけどなあ……俺やコヨーテなんかはしれつと嘘つけるから良いけど……センとかロードランナーは嘘つこうとしてバレバレだったからな？ ちよつと悪いことしたんじゃないかとか思ったりしたぞ？」

あはは……基本的に嘘なんてつきませんからね……皆さん……。そう考えると、わたしもなかなかあくどいことを考えてしまったのでは……？ 少しだけ……いいえ、結構な罪悪感が……。

「つと着いたぞ」

そこは草原の側から見た時と同じ様な木々が立ち並ぶ林でした。ですけど、一点だけ他の場所と異なるのは、少しだけ背の高い木が林から外れたところにあることでしょうか。

「この辺なら、コヨーテもおいでわかるだろ。あんまり離れると迷子になるから気をつけろ。林の中を真っすぐ行けば川がある」

「何から何まで……本当にありがとうございました、ゴリラさん」

イエイヌさんもわたしに続きました。

「いいいえ、どういたしまして……つつても、お話して歩いてただけだからな、そこまでペコペコしなくなつていいさ」

そうは言いますけれど……。

「それともえ、ちよつと良いか？ 悪いイエイヌは待つてくれ」

ゴリラさんはわたしと共にイエイヌさんから少し離れます。彼女は小さな声で尋ねました。

「ともえ」

小さな声なのに、真剣さが伝わる声でした。

「はっ、はいっー」

「……俺はお前のことを知ってる。お前の親父も、お前に何があったのかも、全部」

え？ わたしは何も考えられなくなりました。ゴリラさんはわた

しの瞳を見つめ、至って真面目に、わたしに問いかけます。

「知りたいか？」

わたしの過去、わたしの名前、わたしのお父さん、わたしの……わたしの、全部……？ わたしは、わたしはそれを知って、良いのでしようか……？

「困るよな、だろうよ。お前がどうしたいのか聞いてるんだ。ゆつくりでいい、言ってくれ」

「ちよつと、考えさせてください……」

ゴリラさんは「ああ」と呟いて、腕を組みながらわたしの言葉を待ちます。頭の中はほとんど空っぽ。何を考えるんでしょう？ わたしの知りたかった答えを知っていて、それを知りたいかと尋ねるゴリラさん。そんなの、知りたいに決まってるじゃないですか、わたしがわたしで居ていい理由が、正解がそこにあつて、それが今を支えてくれるなんて、わたしみたいな宙に浮いたような人間が、足をつけることが出来るんですよ？

過去という今の証明と未来への保証。それが……その答えが、求めたものが、今、目の前に……。

支離滅裂な思考の中で、たったひとつだけ違う感情があることに、わたしは気づきました。

「わ、わた……わたしは……」

わたしはひとつの言葉を、絞り出します。それは、知らないはずの過去も含めて、今までの人生で一番大きな決断のように思われました。

わたしは震える右手を左手で抑えます。目の前に居る彼女の顔を、わたしは見る事が出来ません。

「わたしは……知りたく、無い……です……」

ああ、言ってしまった。

言葉にした以上、わたしはわたしに責任を取らねばなりません。言葉にした以上、それを聞いた彼女に責任を取らねばなりません。堅苦しい考え方もしれませんけれど、それでも、言葉にするということはそういうことです。手にしかけた希望を自らの手で払いのけるなんてこと……するとは思いませんでした。

けれど、この答えはわたしの直感にも似た本心なのです。それを否定なんて、したくないのです。

「そうか」

わたしの予想に反して、ゴリラさんの言葉はあっけらかんとしたものでした。それでも、彼女が次の言葉を繰り出すまで、少しの間がありました。わたしは視線を落とし、なんと言われるのか身構えてしまっています。批難でしょうか？ それともお説教？

「……実はな、教える気は……なかつたんだ。意地悪な質問だったな、悪い」

本当です。わたしは驚きと批難の感情を込めて、彼女の顔を見つめ返しました。

「なんで知りたくないんだ？」

わたしが視線に込めた感情なんてどこへやら。彼女は全く気にしていない様子です。ゴリラさんの言葉は、まるで大人が幼い子供に尋ねるように、優しい言葉でした。視線は柔らかで優しいもので、腕を組んでこそいますけれど、それでも纏う空気は穏やかなもの。

そんなゴリラさんの様子に、優しさに、少しだけ涙ぐんでしまいそうなくらい、胸が熱くなります。

「……ほんとうは、すごく知りたいです、教えてもらいたいです……でも……」

いろんな感情がないまぜになった心を整理して、彼女に伝えないと……。納得してくれないかも知れませんが、きつと納得してもらうことなんて必要ありません。わたしが、わたしに、わたしを納得させるだけの言葉を表に出すために、わたしは考えます。

「旅を……辞めたくないんです……」

旅なんて、過去を取り戻しても続ければいいのに、なんででしょうね。自分でさえ疑問に思ってしまう理屈でしたけれど、ゴリラさんは「ああ」と相槌を打って、言葉を待っていてくれます。自分でさえ疑問に思ってしまう理屈でしたけれど、何故だかわたし自身はそれが答えなのだと強く感じていました。

「それに……わたしがわたしの力で思い出さないと……意味がないと思っただんです……それで……」

「……やっぱり真面目だなあ、お前は……説教しなくて済んだよ、ありがとう」

変わった方。本当に。

「奇跡は待つものじゃ無いからな、自分で掴み取ってこそ、だな」

その言葉はよくわかりませんが……きつと彼女なりに良いことを言おうと思っただけでしょうね。

「なあ、ともえ、旅の終わりは決まってるのか？」

先程の発言に対する疑問なのでしょう。わたしは首を振ります。「全部思い出したら……って思っていました。今でもそれが終わりじゃないかって思ってますけれど……」

そんなことが叶うのか、という疑問もありますけれど、それ以上に、どこかで安穩と暮らす事が許されない様なそんな感覚もあるのです。「もし、何も思い出せなくても、行ってみたいところに行つて、たぐさんのフレンズさんに会つて……」

ことり、と何かが嵌る音がしました。

「わたしがわたしになる為の旅なんです、きつと、これは。自分が納得するまで、きつと続きます……いいえ、続けます」

だから、答えを知ってしまったては、ダメ。その過程こそが、きつとわたしをわたしとして形作る筈なのですから。

「言ってることよくわからんけど、お前がそれでいいなら、俺は止めないよ。アイツもそうしたと思う」

ゴリラさんはわたしの目をじっと見つめて、少しだけ目を細めて、そうしてからわたしの頭を撫でました。

「く、くすぐりたいですよお……」

彼女はわたしの抗議に耳を貸さず、そのままぐしぐしと帽子越しにわたしの頭を撫でています。

「ゴリラさん……もしも、本当に、何も思い出せなかったら……その時は、お願いします」

「情けないことを言うなよなー折角いい感じだったんだぞ？」

満面の笑みで彼女は手を止め、腰に手を当てて続けます。

「その時は、まあ、任せろ。あと答え合わせの時もだな。待ってるよ、ともえ」

そう言えば、ひとつだけ気になったことがありました。一度は心に浮かんでしまった、最も間違っていて欲しい答え。ゴリラさんと話をしている内に、そんなことは無いという思いは抱いていましたけれど……。

「ひとつだけ質問なんですけれど……わたしは、『捨てられた』んじゃないんですよね……？」

当然……と呼べるほどのことかはわかりませんが、状況からして想像しうる中で最も悪い可能性であることは間違いありません。ゴリラさんはわたしの言葉を聞いて愕然とした表情になり、再びわたしの頭の上に手をそっと添えます。今回は撫でるようなことはしていませんが、どこか力の籠もった手のひらでした。

「安心しろ。愛されてたよ、お前は」

そう言って、彼女はわたしの頭から手をどけました。

「ありがとうございます、ゴリラさん」

相槌を打つように彼女はこくりと頷きました。

「そうだ、すっかり忘れてたんだが……真っ赤なラツキービースト、見てないか？」

そう言えば……

「確か、草原の方で見かけた気がします……壊れてましたけど……」
わたしの言葉にゴリラさんは大きくため息をつきました。

「そんなことだろうと思っただよ……アイツはこういうところでツメが甘い……お前の為に用意したとか言ってたんだぞ？ まったく……」
心底呆れるように呟かれた言葉に、わたしも思わずくすりとしてみえます。きつとお父さんか……そうでなくてもわたしと親しい方でしょうから……。

「……直せますか？」

「無理だろうな。とくちゅーとか、かいぞーとかなんとか言ってたからなあ……もしかまた見つけたら、家にでも置いてやれ、野ざらしは……ちよつとあんまりだ」

困ったように頭を掻くゴリラさんに、わたしは頷き返します。そして、ひと息ついてから、ゴリラさんは口を開きました。

「よし、話は終わりだ。何だか悪かったな、ともえ」

不親切……というよりも、無礼にあたるかも知れない彼女の行動は、わたしにとって良いことであつたと思います。

「いえ、ちよつといきなりでびっくりしちゃいましたけど……なんだからスツキリしました」

なぜなら、わたしの胸の中のものもやもやとした、ぐちゃぐちゃとした、そんな形のないモノに形を与えることが出来たから。それはきつといつかわたしの心を蝕み、押しつぶそうとしたかも知れません。それらに、まかりなりにも形を与えて、否定に足る答えを与えて、自らの感情として感覚として、理解できたから。こればかりは、きつとイエヌさんにも難しいことだったでしょう。

「そうか？ それなら良かったが……今日はしつかり休んで、明日に備えろよ？ あと、イエヌと仲良くな。じゃあな」

彼女はそう言つて手を振つて去つていきました。

陽射しの傾いたサバンナに、長く色濃い影を残しながら、彼女は北へと歩いていきます。わたしは彼女に手を振りながら別れを告げて、彼女はわたしの言葉に軽く手を振り直して応えて……そうして去つていきました。イエヌさんのところに、戻りましょう。

ゴリラさんを見送り、わたしはイエイヌさんのところへ戻ります。
「おまたせしました」

「……どうしたんですか？　ヘンな様子でしたけど……」

イエイヌさんは心配の気持ちが勝っているようで、疑問の言葉を口にしながらも、その表情は眉間にシワの寄ったものでした。

「ちよつと長くなるかもですけど良いですか？」

ゴリラさんとの会話は、きつとイエイヌさんにも大切なお話の筈です。イエイヌさんはわたしの言葉にこくりと頷きます。わたしは「ちよつと移動しましょう？」と伝えて、移動しました。そこは目印と言われた大きな樹の根本。そこに腰掛けて、ゆっくりとわたしは口を開きます。

「ゴリラさんは……わたしの過去を知っているそうで——」

少々の時間をかけてわたしはイエイヌさんに先程の会話の全てを伝えます。ゴリラさんがわたしの過去を知っていて、それを知りたいかと尋ねたこと。それにわたしはどう考えて、どう伝えたのか……その全てを。

「……良かったんですか？」

イエイヌさんは何う様にわたしの顔を見つめます。

「ええ。全部、納得です。それに……教えて欲しいと言っても教えてくれなかったでしょうから」

わたしの言葉に困ったように笑うイエイヌさん。

「その言い方は……あはは……なんだかゴリラさんはズルい方のような……」

「ですよねえ……でも、もしかしたら、わたしの決断を否定しないためにそういったのかも知れませんし……」

その可能性だって否定しきれません。「試練に挑む」とわたしが決め、それに対して「行って来い」と彼女が言ったのだとしたら、それは意地悪なんかじゃありませんから。

「考えるだけ無駄です、きつと。わたしが決めちゃったんです。それをひっくり返すなんていうズルいこと、わたしはしたくないですから」

わたしは少しだけ間を置いて、続けます。

「いつまで『旅』が続くかわかりませんが、付き合ってもらいますよ？　良いですか？」

わたしは彼女の顔をしっかりと見据えて、言い放ちました。勝手な物言いだと自分でも思いますけれど、わたしにとつて彼女の存在は欠かせないものであることは違いないのです。

「フツツカな私で良ければ……喜んで！」

妙な言葉で卑下することも無いでしょうに……。

貴方はわたしに取って大切な友達で、大切な家族で、居なくてはならない方。それは、先程の小屋でのお茶会から察するに、彼女も同じ……筈。

「ごちそうこそ、こんなわたしですけれど、よろしくおねがいますね」
旅に出る前から、幾度か繰り返されてきたやり取り。それでも今回のそれは意味合いが異なるように思われます。ずっとずっと長い長い道程への覚悟、と言えばよいのでしょうか？　ええつと……子供のわたしにはわかりませんが……何時までも続く、永遠の約束……ええつと……えー……結婚……？　まさか。

けれどそんな言葉がひとたび頭を過ぎってしまうと、いたたまれないような恥ずかしさがこみ上げてきてしまいました。きつとわたしにしつぽがあつたら、地面に叩きつけるようにせわしなく動いていたことでしょう。

腰掛けたまま、わたし達は無言で夕日を見つめます。お互いの間に流れる空気は、きつと信頼と安心。時折優しく頬と髪を撫でる風が心地よく、それもあつてか本当に心地よい雰囲気な気がします。不意にことりと肩に優しい重さが訪れます。目だけ動かして隣を見ると、エイ又さんの頭がわたしの肩の上に。思わず微笑んでしまいます。わたしの口から漏れ出た吐息で気づいたのでしよう、エイ又さんも「えへへ」と小さく声を出しました。彼女の顔は、夕日に赤く染まり、果たしてどういう表情をしているのかはわかりづらいのですけれど……きつと微笑んで居るのでしょう。

「ともえさんの笑ってる顔、好きです……きば？　見えてて……」

牙……？ 八重歯のことでしょうか？ 時々口の中を噛んでしまうので厄介としか言いようが無いのですけれど……それにイエイヌさんに限らず、牙つばい歯並びの子は沢山居る様な気も……。

「何言ってるんですか、いきなり……」

まさか……イエイヌさん、恥ずかしいことしてるからこの際恥ずかしいことも言っちゃえ！ みたいなノリじゃないですよ……？

わたしがそんな風に茶化すかどうか悩んでいると、イエイヌさんが急に指を差して大きな声をあげます。

「ともえさん！ あれ……！」

「どうしました……？ あっ……まあ……」

イエイヌさんの指差す先。それは大地に溶け入る様におぼろげな空気を纏って沈む太陽。それは常ならば赤色の、あるいは橙色の光を発し、そうして空を、大地をその色に染め上げる強い輝き。そして、燃え落ちる様に消えていく星。

けれど、今この瞬間のその光は、緑色。その緑色の光は決して全てを染め上げる程の強い力を湛えたものではありません。けれども、夢げに、一瞬だけ見せる、太陽という星の美しさの一面でした。眼前に広がるその光景は、単純な物珍しさを抱かせるものでもありません。けれど、それ以上に、純粋な美しさを象徴するようでした。わたし達はその光に見惚れてしまい、ひと言も言葉を発せません。

見つめている内にも、まもなく夕日は地平線へと沈みきり、周囲は青みがかかった夜闇が立ち込め始めます。

「……綺麗、でしたね……」

イエイヌさんの言葉には色々な感情が込められているように思われました。純粋な感動、不思議な光景に立ち会えたことへの喜び、自然の神秘への驚嘆……わたしには彼女の抱いた思いの正確な形はわかりませんけれど……。

「……良いもの、見れましたね、イエイヌさん」

あの光だけでもここへ来た価値があるというものです。一ヶ月にも満たないのでしょうけれど、パークでの暮らしの中であんな神秘に見えたことなどありません。ここでの暮らしという意味での先達で

あるイエイヌさんだつて、感嘆の吐息を漏らしているのですもの。

「イエイヌさんは、ああいう景色つて話に聞いたりしたことつてあるんですか？」

わたしはゴリラさんから頂いたランタンの光を灯しながら尋ねます。

「いえ……うわき話とかも、全然……」

「でしたら……本当に珍しい光景だったんですね……」

ランタンの光は少しばかり強いもので、夜闇に少しだけ慣れ始めたわたしの瞳に刺さるようでしたけれど、それでも温かみのある光はそれがあるだけでなんだか安心してしまいます。

「私……ともえさんと見られてよかったです……」

嬉しいこと言つてくれるじゃないですか……。

「ふふつ、わたしもですよ、イエイヌさん」

お互いにくすりと笑い合つて、そうして再び夕日の沈んだ地平線を見つめ直します。強制された訳でも無く、ただそうして居たいから。素晴らしい神秘に直面したことの喜びを噛み締めたいから。大好きな相手と、それに相まみえることが出来たから。

数分程……でしょうか、地平線を見つめていましたけれど、ずっとそうして居るわけにもいきません。

「さて、と……ご飯にしましょうか」

「……あつ、そうですね、そうしましょう」

わたしは鞆からジャパリまんをふたつ取り出し、ひとつをイエイヌさんに手渡します。彼女は「ありがとうございます」と呟いて、受け取り、一緒に「いただきます」と挨拶をして食べ始めました。お互いもつきゆもつきゆと口を動かして咀嚼していたのですけれど、ひとつ思い浮かんだことがあります。

「そういえば……んつく……試しに動いてみます？　ぶつつけ本番つていうのも、心配ですし……」

わたしの提案に、イエイヌさんはこくりと喉を動かしてから頷きます。

「はー」

「わかりました。暗いですし、そんなに遠くまで離れられないですけど……」

わたしはイエイヌさんから水筒を受け取り、ひと口含みます。イエイヌさんもわたしの動きを見て思い出したかのようにひと口。

「大丈夫です！　すぐ動いたらお腹いたくなっちゃいますから……少し休んでからで……」

「ええ。……ああ、お水も用意しないですね。先にそっちを済ませちゃいましょう」

食事を再開し、わたしはジャパリまんを咀嚼しながら考えます。イエイヌさんへの指示は簡単に決めた筈です。長い音と短い音の組み合わせで簡単な指示を、合間合間の休憩時間に細かな指示と作戦を……実際に動いてみないことにはわからないことが多すぎます。ぶつつけ本番だったとしたら……一体どうなってしまったのやら……。もつと早くイエイヌさんに伝えて、もつとしっかりと準備をした方が良かったんでしようけれど……思いついた時も、それから先も、ずつとふたりきりになれずじまいでしたから……。

『狩りごっこ』のこともつと早くから知っていれば……というのはい儘でしょう。やるだけやると言ったのはわたしです。それに応える意思を示したのは彼女です。ならば、彼女の思いに応えるためにも今からでも良いから頑張るしかありません。優勝……と言って良いのかわかりませんが、一番になるという奇跡が起こるとしたら、それは一生懸命やって、そうして初めて得られるご褒美のようなもの。だからこそ……。

少しばかり堅苦しいかも知れませんが、思いを新たにしていると、イエイヌさんがこちらをじいっと見つめていました。

「……どうしました？」

「いえ……考え事してるなあと思つて……」

目尻を下げて、イエイヌさんは答えます。どうしてそんなに楽しげなんでしょう？

「見るようなものですか……？　いえ、別に良いのですけど……」

彼女の笑顔に、思わずわたしも笑顔になってしまいます。と言つて

も少しだけ困ったような表情だったでしょう。イエイ又さんは「えへへえ」と声を上げて、ずっと微笑んだまま。

「楽しそうなこととか、面白そうなこととか……そういう事考えてる時のともえさんがわかるようになって来ましたよ、私。そういう時のともえさんはなんだかいい匂いがする気がします」

に、におい……？ わかるんですか、そんなので……って、あらまあ。

「……ここにお弁当着いてますよ」

わたしは彼女の口元に着いたジャパリまんの欠片を人差し指でこそげ取ります。わたしが欠片をどうしたものかと考えようとした一瞬の間に、イエイ又さんはわたしの指ごと、ぱくり。

「……！ 何やってるんですかあ……手、洗ってないんですよ……？」
……自分で言つて「そこ？」とちよつとだけ思いました。イエイ又さんは衝動的に動いてしまったのでしょうか。はつとした表情になって、すぐさま恥ずかしそうに両手で頬を覆います。わたしは「ふっ」と声を漏らしてしまいました。それを隠すように咳払いをして、彼女に伝えます。

「えへん……せめて手を洗ってからにしてくださいね？」

手を洗っていれば……良いのでしょうか……？ それは、ええつと……答えかねます……ハイ……。

食事を終わらせ、ひと息つき、わたし達は川へと向かいます。食事を終える頃にはもう辺りは真っ暗で、星々の煌めきと月光に照らされる世界は綺麗に違いありませんけれど、わたしには少しばかり暗すぎました。いわんや、そんな中で林の中を歩くというのは極めて困難なのです。

「……それにしても、このランタンを頂けたのは幸いでしたねえ……」
少しばかり肌寒さを感じる夜氣を楽しみながら、木々をすり抜けて行きます。

「私に見えるから良いですけど……ともえさんは見えないんですものね……あ、その辺りで右方向です、音がそっちの方からするので……」
わたしはイエイ又さんの指示に従い、方向を変えます。わたしから

してみれば、ここは鳥とも虫ともつかないリリリという鳴き声ばかりがこだまするように響く夜の林。ランタンがあつたとしても、きつと遠回りをしてしまったり、はたまた迷子になってしまっていたでしょう。イエイ又さんが居てくださって、本当に良かった……。

イエイ又さんの指示に従うようにして、暫く歩いていたのですが、うっかりしていたからか、頭にペしりと枝がぶつかってしまいました。思わず「あ痛っ」と声が出てしまい、その声を聞いてイエイ又さんはくすくすと笑い始めます。

「本当に見えないんですねえ……なんだか不思議です」

「そうなんですってばあ……」

わたしは「はあ……」とため息をついて一歩踏み出そうとすると……

「あ、木の根っこあるんで気をつけてくださいね、ともえさん」

……はい……ありがとうございます、イエイ又さん……。

「よいしょっと……あ、流石にわたしにも川の音聞こえてきましたよ」
りりりという音や木の葉のざわめきにまぎれて、さらさらという流水の心地良い音が耳に入ってきました。

そのまま慎重に躡かぬように進むと、川に到着しました。川面はさざなみに揺れ、星々と月の輝きをちらちらと反射しています。角張った大きな岩や、角が取れて丸くなった小石や、そんなものが一面にあるということは変わり無いですけれど、以前に訪れた川辺とはまた違った様子を示しています。あの時と比べると、ずっと風情のあるように感じられる光景。きつと蛭とか飛んでいたら、もつと美しいのでしょうね。パークに居るのかどうかは、ちよつとわかりませんけれども……もし見られるのなら、見てみたいくらいです。

イエイ又さんは危なげなく川辺に近づき、水筒に水を汲み入れます。わたしも彼女に続いて川の水にタオルを浸し、その後、身体を拭い始めました。流石にイエイ又さんの居る場所よりも川下で、服を着たまま、ですけれど。

今日は陽射しが強い中にずつといいて汗もかきましたし、先日は身体を清められませんでしたから……可能なら水浴びをしたいくらいで

すが、水温はびつくりするくらい低く、夜になってしまった今、水浴びをするとなると体調を崩しかねませんからね。

「ふう……冷たいですけど……なんだか落ち着きますねえ……」

どうして汚れた身体を清めると落ち着くんでしょうねえ……。わたし以外のヒトも、同じ様に感じるのでしょうか？ ちよつと不思議な感覚……。辺りにヒトが居るなら質問できたんでしょうけど。

「ともえさんは本当に綺麗好きですねえ……」

イエイヌさんはどこだか呆れた様な言い方です。

「んー……前もお話しましたけど……臭いとか気になりますし、なんだかべとべとしちやいますから」

お洋服も洗わないとですね。確か替えが一着あった筈です。どこか手頃な木にひっかけて干させていただくとして……。わたしは着ている服とインナーを脱ぎ、水に浸してごしごしと洗います（もちろんすぐに着替えてますからね！）。

「……ともえさん、前も言いましたけど、へんなにおいしませんし気にしなくても良いと思いますよ……?」

イエイヌさんはちよこんとわたしの隣にしゃがみこんで、わたしの手元やら顔やらを見つめています。

「うーん……そう言われましても……なんというか、コレくらいは気をつけないとヒトとしてダメな気がしまして……つい……」

イエイヌさんはふむふむと頷きます。

「ヒトって難しいんですね……」

ヒトが難しいというか……フレンドの皆さんが簡単と言った方が正しい様な……。つと、あまりやりすぎると服が痛んでしまいますね、これくらいにしましょう。最後に服を絞って、その後おまけでひと口水を含みます。食後でぼんやりとしつつあった頭をしゃつきりとさせるような、そんなひんやりとした水が喉を通っていきます。

「さて、と……戻りましょうか、イエイヌさん。少しだけ準備して、練習の時間です！」

「はーっー」

元気の良い返事が林に響きます。

ええ、少しでも、少しだけでも……勝つために何が出来るのか考えて、実践して……。勝敗は結果だと言う方も居るでしょう。わたしもそう思います。ただ、やるからには勝ちたいのです。ちよつとした欲望です。わたしも称賛の声を浴びてみたいという、そんな綺麗じやない、こんな感情を大事にしてみたいのです。きっと初戦負けだったとしても、イエイヌさんは楽しかったと言ってくれるでしょうし、わたしだって楽しかったと思う筈です。でも、多分、きつと、悔しい筈。折角の機会です、そんな思いしたくありませんからね。やれるだけのことを、やれるだけ。

その後わたし達は確認がてら動きを軽く確かめ合って、まもなく寝ることとなりました。場所は目印の大樹の根本。移動の手間を嫌ったというのがありますが、ちょうど良さそうな具合に地面の凹凸が少なかった為です。それにコヨーテさんのお迎えを考えると場所を大きく変更してはご迷惑でしょうからね。

「ふう……お疲れさまでした、ともえさん」

「イエイヌさんこそ、お疲れ様です。……でも本番は明日ですからねえ、その時はまた頑張りましょう」

イエイヌさんは少しだけ乱れた息を整えながら、「はいー」と返事をしました。其後、そのままいそいそと寝袋を広げます。わたしは額から流れる汗を軽く拭い、同じ様に寝袋を広げます。

「……野宿って初めてですよねえ。なんだか緊張しちやいます」

寝袋をお尻の下に敷き、腰掛けるイエイヌさん。わたしは軽く伸びをしながらかえします。

「んーっ、ふう……ですなえ。今日は雨や風も無いですし、運が良かったですね」

わたしは彼女と違ってどこか期待にも似た感覚を抱いています。今までしたことのないこと、それが楽しくてこそばゆくてたまらないのです。

「そうですね、ともえさん。私の動き、ヘンじやなかったですか？」

先程の練習の動きの事でしょう。当初はお互いに合図を間違えてしまったり、移動しながらの合図で手間取りお互いぶつかってしまったりなどの軽いアクシデントもありましたが、徐々にそれもなくなりました。

「うーん……思い当たる限りでは大丈夫かと……」

わたしはランタンの灯火に照らされるスケッチブックのページを眺めます。そこには文字の読めないイエイヌさんに伝える為に、丸と傍線で作った簡単な合図の表を書いたのです。

と言っても、合図の種類は数種類。右、左、前、進め、戻れ、追加。

そんなものでしょうか。追加に関しては、少し複雑になってしまふ（右に進め、『そして』左に進め……という具合です）ため、控えるようにお互い話し合いました。また、実際に動いた時のことを考えると、わたしにもそんなに細かく指示を出す余裕は無いでしょうから、事実上『あるだけ』の指示内容になってしまふと思われれます。

「私も、もう一回見てもいいですか？」

わたしは「どうぞ」と彼女にスケッチブックを手渡します。イエイヌさんはそれを眺めながら「うーん」と唸り声を上げました。

「……ど、どうかしました？」

「いえ……わたしからともえさんにも合図を出したほうが良いのかな、と思ひまして……」

「……う？ どういうことですか？」

彼女は悩むように首をかしげながら、言葉を選ぶようにしています。

「例えば……その、景色に溶け込むのが上手な子とか小さくて隠れちゃうような子が相手になった時とか……ともえさん、指示が出せなくなっちゃいませんか……？」

なるほど、たしかに……。

お茶会の際に話題となったのは、基本的には『わたしが全て把握できている』という前提がありました。そして、それは先程の練習も同じ。

「とすると……どうしましょう。わたしにはイエイヌさんほど動けないですし……」

「おおざっぱですけど……ええつと……ううーん」

少し考え込んでから、彼女は続けます。

「ごうしましょう。わたしがごうやって手を上げます」

彼女は自分の胸元あたりまで手を上げます。

「ですね……この手の方向に伏えます。そこにフレンズさんが居るといふこと……どうでしょう？」

ふんふんとわたしは頷いて答えます。

「その情報を聞いて、わたしは作戦を考えれば良い訳ですね」

イエイヌさんならわかることと、一歩引いたところで俯瞰しようとするわたしならわかること。それはお互いに違うはずで、お互いにそれぞれの欠点があるのは言うまでもないこと。でしたら、基本的な指示を出そうというわたしが持つ情報は多いほうが良いというもの。

「いいですね。それで行きましよう。……とすると、例えば――」

わたしは簡単に思いついた作戦を彼女に告げます。イエイヌさんはその作戦を聞いて楽しげな表情になります。

「えへへえ……こんな『狩りごっこ』初めてで……本当に楽しみです……」

その笑顔だけでなんだか報われますね。

「イエイヌさんは前にやったことあるんですたっけ？」

「はい！　と言つても結構前ですし、ほんのちよつとだけでしたから、私だつてしよしんしゃです」

「それを言うならわたしなんて初めてですもの……頑張りましたよね、お互い」

わたしの言葉にイエイヌさんは心から楽しそうな声で「はい！」と答えました。わたしの出来ることなんて見て伝えて……その程度。ほとんどの労力はイエイヌさんに偏っています。彼女の身体能力への信頼と、彼女が抱くわたしの言葉への信頼。その両方を結実させる絶好の機会。それを無意味なものとしたくはないですから。

「では……寝ましようか。おやすみなさい、イエイヌさん」

「はい！　ともえさん、おやすみなさい」

言葉を交わしあい、ランタンの灯火を消したわたし達は、そのまま寝袋へと入り、眠り始めます。ランタンを挟んでこそいますが、隣通しになって。

わたしは瞳を閉じて、そつと耳を澄ませます。微かに聞こえるイエイヌさんの呼吸と、わたしの鼓動。そよ風の音。木々のざわめき、林の方から届く甲高くも小さな音、まるで歌声のようです。

わたしは、今、自然の只中に居る。今までに無い経験だからか、それを殊更に感じます。今の今まで、ずうつとパークの中を歩いて、自然に包まれていたはずなのに……。

喜びにも似た興奮の為か、わたしはすぐには寝付けませんでした。もしかしたら、背中に伝わる地面の具合の悪さの為かもしれませんが……。目を開け、イエイヌさんの方をちらりと見ます。すると、彼女の可愛らしい寝顔がこちらに向いていました。彼女が『けもの』から変化した存在である為、イエイヌさんはどこでもすぐに眠れる……。ということでしょうか？ それは少し発想が飛躍しすぎている気がしますけれど……。

わたしは彼女から目を離し、空を見つめます。時間で言うならば、今は何時頃なのでしょう？ そこは満点の星空。星座がわかるのならば、少しくらいロマンチックなお話を彼女と交わしたりも出来たのでしょうか……。きらきらちかちかと瞬く星々。あるひとつは赤色めいていて、またあるひとつは青色めいて……。そのひとつひとつの確かな色合いこそわたしにはわかりませんが、それでも美しいことに変わり無く、眼前に広がる夜帳は広大で、真っ黒で……。そこに、月と、星と、それらが開けたような穴から漏れ出る光は確かにわたし達に届いているのです。

……これは、絵には描けませんね。「かなわないなあ」なんて誰に言うのかわからない言葉が頭をふと過ります。

「野宿も、悪くないですね……」

ちいさな声で呟きます。イエイヌさんを起こさないように、小さく、小さく。何時の、どんな記憶でしょうか。「空はどこでもつながっている」なんて言葉を思い浮かべました。ああ、それはまさにその通りなのかも知れませんか。背中越しに伝わる地面の感触に、わたしは少しだけ身体を動かします。天空は屋根、大樹は天蓋。そう考えると、これほど豪華な部屋も無いことでしょうか、なんて。

「——え——いっしょ——どい——……」

わたしの声は、彼女に届いていたのでしょうか。イエイヌさんがぼそりと呟きます。驚き半分、興味半分と言った具合で、イエイヌさんの方を見返すと、彼女は眠ったまま。寝言でしょうか？ それとも、寝たふりをしながらわたしの言葉に答えたのでしょうか？ 確認する術はあるのでしょうか、それは無粋というものです。わたしは瞳

を閉じ直し、それ自体が生き物の様に微かでありながらも厳かな音を発する大地に、空に、風に、身体を預けます。

寝袋越しの地面から伝わっていた居心地の悪さはどこへやら、ベッドで寝る時の様な心地良さこそ流石にありませんが、気にならなくなっています。寝ましょう。ずっとこうして、隣にあなたが居てくれるなら、きつと、どこでも、どこまでだって……。

眠っていたわたしの瞳に、きらりと優しい光が届きます。

「ううん……」

わたしはその光の眩しさに思わず目を覚ましてしまいました。寝ぼけ眼をこすりながら、隣を見ると、イエイヌさんはちょうど陽射しから目をそむけるように横を向いていて、眠ったまま。

「……ええつと……コヨーテさん、来るんでしたっけ……？」

ぼやぼやとした頭によぎるのは迎えに来てくれる彼女のことでした。時間はまだ地平線から太陽がほんの少し顔を出し始めたくらい。東の空は朝焼けの茜色に染まり、西の空はまだ董色のまま。

コヨーテさんが来るにはもう少し時間があるのかもしれないでしょうけれど……二度寝してしまったら、それこそ準備が遅れてしまいます。少し心苦しいですけど、イエイヌさんを起こして、支度をすべきでしょうね。

「……イエイヌさん、起きてください、朝ですよ」

わたしが彼女の頭を撫でながら声をかけると、もにゅもにゅ言いながら彼女は寝返りをうちます。

「う……ん……さんちちよくそう……」

なんですか、急に。どこで覚えたんですか、それ。意味判ってるんですか……？ わたしは思わず声を出して笑い出してしまう。その声で、彼女は目が覚めたのでしょう。イエイヌさんは瞳をこすりながら、身体を起こします。

「ん……おはようございます……ともえさん……」

どこか彼女は不思議そうというか怪訝そうというか……そんな表情です。

「ふう、ふう……おはようございます、イエイヌさん……」

「……………どうかしました?」

眠たげな半目で彼女はわたしに問いかけます。

「い、いえ……………イエイ又さんの寝言が面白くて……………ごめんなさい、馬鹿にするつもりは……………」

「……………はあ」

彼女はふああとあくびをし、ぐつと身体を伸ばします。ぼうつと虚空を見つめる彼女に、わたしは問いかけます。

「顔、洗いに行きましよう? お行儀悪いですけど、ジャパリまんを食べながらで良いですか?」

イエイ又さんは一拍ほど間を置いて「ふあい」と答えて立ち上がります。そうしてわたし達は歩きはじめました。

わたし達は連れ立って林を歩きます。

まだ時間は早いでしょうから、コヨーテさんを待つために交代交代で川に行く必要も無いでしょう。まだ太陽は顔を見せ始めたばかり。ちらりと照れた様に覗くその光だけで世界がこんなにも輝くと考えると、改めてその力の大きさに、どこか感服のような感情が芽生えてしまいます。空にはちぎれた様に漂う雲が、朝焼けの董色と赤味がかった白色に染まっています。

もつきゆもつきゆとジャパリまんを頬張りながらの歩みの最中、イエイ又さんは手を止めてわたしに尋ねます。

「……………ともえさん。私、どんな寝言言ったんですか……………?」

昨晚の汲んだ水の残りを飲み込み、わたしは答えます。

『「さんちちよくそう」って言いましたよ。ええ、確かに言いました」わたしは思い出し笑いにくすりとしながら答えます。

わたしの言葉を聞いたイエイ又さんは「へ?」と力の抜けた声を上げます。

「どういう意味なんですか? それ……………」

ああ、意味判ってなかったんですね……………。わたしはどう伝えるべきか少し悩んでから口を開きます。

「食べ物とか、そういうのが作ったところからまっすぐにわたし達のところに来る……………って感じですかねえ」

イエイヌさんはほへえという感心した風な声を上げながら、食べかけのジャパリまんをしげしげと眺めています。

「じゃあ、ジャパリまんは全部さんちちよくそうということですね！なるほどなるほど……」

わたしは思わず小さく笑ってしまいました。

「ふふつ、そうですね、はい、そうです」

わたしの笑顔に釣られたのでしよう。イエイヌさんも微笑んでいます。ちらりと彼女の後ろを見ると、樂しげに揺れるしっぽ。寝起きでいきなり笑われているというのも失礼な事態でしたから、彼女がどう思っているのか少しだけ不安でしたけれど、大丈夫ですかね。

「あ、でも」

イエイヌさんが頬をぷくつと膨らめてこちらを見ます。

「あの起こし方は、辞めてくださいね！ なんだか困っちゃいます！」

……ですよねえ。

「はい、反省しております……」

そんな話をしながら、ジャパリまんを食べ終わる頃、わたし達は川へ着きました。お互いに軽く顔を洗い、再び大樹の下へと戻ります。

朝焼けの優しい董色は掻き消え、強く刺すような光が辺りに立ち込め始めていました。太陽はその姿の殆どを空へと晒し、煌々たる光を放っています。

特段の支障もなくわたし達は寝袋の敷かれたままの寝床に戻りました。その時には、もう、コヨーテさんが大樹に寄り掛かるようにして座って待っていました。

「……ん？ 戻ったか、おはよう、ともえ、イエイヌ」

コヨーテさんは耳をぴくりと動かしてわたし達に軽く挨拶をしました。

「おはようございます、コヨーテさん」

わたしとイエイヌさんは彼女に返事をします。

「思ったよりも早起きなんだな。ちよつと早めに来たつもりなんだが……においが川の方が続いてたからな、待ってたよ」

ぐいっと伸びをしながらコヨーテさんは呟きます。

「おまたせしてしまつて、なんだか申し訳ないですね……さて、イエイエさん、片付けをしましょうか」

「はいっ！」

わたし達は手早く寝袋を丸め、ランタンを鞆から下げます。イエイエさんが少し遅れながら寝袋を片付けていましたので、わたしはその隙に近くに干しておいたタオルと服を回収して……そんな風にして支度を終わらせました。

「よっし、じゃあ行くか、一旦会場に行くぞ」

わたし達は「はい！」と返事をし、歩き初めようとした時にふと気づいたことがありました。それは大樹の根本に小さな小さな鳥居があつたのです。

大きさにしてわたしの手のひらよりも少し大きい位。それには遠慮するように植物が絡みついてはいましたけれど、苔や汚れはほとんどありません。気づいた誰かが掃除でもしているのでしょうか？この鳥居がここに安置されてどれほどの時間が経過しているのかは定かではありませんけれど、どこか神聖な雰囲気を感じています。

気づかなかつたのも仕方ないかなという大きさですし、このまま何もしなくても良いとは思うのですけれど……ここで一晩過ごさせていただいたのです、お礼のひとつと位は伝えないと、何ともすつきりしませんものね。

「お邪魔しました……また、いつか、きつと……ありがとうございます……」

ペこりと身体をまげて一礼をしながら伝えます。わたしは、神様の存在を心から信じている訳ではありませんけれど、ね。

「ん？ どうした？ ともえ」

「あ、いえ、なんでも無いです。今行きますね！」

わたしは少し先を行く彼女達に小走りで追いつきます。彼女達はわたしが来るのを待っていてくれて、それだけでどこか温かい気持ちになつてしまいます。これから起こること、すること、それらに対するの緊張もありますし、楽しみだという思いもあります。時間は短かつたですけど、考えることは考えました。後はやるだけ……！

朝日に照らされ輝く道を、わたし達は口数少なく道を進みます。心臓の鼓動が嫌に耳に響いていて、一步進むごとに何か大変な出来事に自分が向かっているのだと感じてしまいます。どこかそわそわしてしまうような、どこかきよきよろしてしまうような、そんな緊張感からわたしは口を開くことが躊躇われてしまいました。イエイヌさんも緊張しているのでしょうか、彼女のしっぽはぴんと張ったようにまっすぐになっていて、ほとんど揺れ動いていません。コヨーテさんも言葉を発していないのですけれど……どうしたんでしょう？

「コヨーテさん、緊張してます？」

ちやうどわたしと同じことを思ったのでしょうか。イエイヌさんが尋ねてくれました。

「……ん？ べ、別に緊張なんかしてないが？」

めずらしー、噛みましたよ、コヨーテさん。何かするんでしょうか？ 昨日お別れした際にも何か考えてる様子でしたし……。

「コヨーテさんも緊張とかするんですね……」

わたしが茶化すように言うと、コヨーテさんは顔を前に向けます。

「ぼっかお前え……後で覚えてろよお……」

はて、どういうことでしょうか。

「うーん……？ 痛いのは嫌ですよ……？」

わたしの言葉にコヨーテさんは「そんなことせんわい」と冗談めいた口調で返事をしました。

「わかってますって……それより、何かするんですか？」

「そうだな、んー……いや、まだ秘密だな」

妙な含み笑いをするコヨーテさん。

「まあ……もうちよつとしたら、わかるさ。お前達しだ——」

「あーっ、みんなあ、おはよおー」

ドードーさんでした。彼女は手を振りながら、とてととと駆け寄ってきます。少しだけバランスを崩すようにしていましたが、彼女は転ぶこと無く、わたし達のところへ……ちよつとハラハラしてしまいましたけれども、無事なら何よりです。

「おはようございます、ドードーさん」

イエイ又さんが最初に会釈をしながら挨拶を、続いてコヨーテさん、わたしという具合です。

「ねえねえ、ともえちゃん、イエイ又ちゃん。今日は頑張つてねえ！」
朝もまだ早いというのに彼女は満面の笑み。きつと今日の『狩りごっこ』を彼女も楽しみにしていたのでしよう。それに、その後はイエイ又さんの『おうち』に遊びに行くという約束もありますからね。彼女の気持ちが伝わってくるような、そんな笑顔でした。
「プレッシャーですよお……」

わたしが泣き言めいたことを言うと、イエイ又さんがわたしに言います。

「大丈夫ですよ、色々考えて、ちよつとですけど練習だつてしたじやないですか」

イエイ又さんは自分の胸をとんと叩いて続けます。

「だから、楽しみましょう？　ね、ともえさん」

「そうだぞ。その意気だ」

コヨーテさんもイエイ又さんの後押しをするように言いました。

「あはは……確かに、そうですねえ……ドードーさん、しっかり見えてくださいよー」

緊張してしまうのは変わりありませんけれど、応援してくれる方がいてくれるというその事實は、それだけで励まされるようです。

ドードーさんが加わったことで、わたし達が各々抱えていたのである緊張感はどこかほぐれていきました。ドードーさんは彼女の友人の話をしたり、はたまた昔の思い出話なんかをしてくれたり……きつと彼女なりの心遣いなのでしょうね。

「——でねえ……そのおねえさんったら、それをごはんにかけてちゃつたのお！　信じられないよねえ……」

「あはは……確かに……」

いやあ……まさかそんなものを（飯に……。

「ともえちゃんつてそういう事、するう？」

「いやあ……わたしはそういう事しないような気がします……目が覚めてから（飯は食べてないですけど……」

わたしの言葉にイエイヌさんは不思議そうにします。

「あれ？　ともえさん、今朝もご飯食べたじゃないですか」

「んーとねえ……ご飯っていうのはそういう意味じゃないでねえー」

「ジャパリまん以外の食べ物です。お野菜とか、お米とか……この場合の『ご飯』はそっちのことですね」

ドードーさんもうんうんと頷いています。

「へえ……私はジャパリまんくらいしか知らなかったの……美味しくいんですか？　それ……」

わたしはちよつとだけ悩んでしまいます。コレばかりは……うーん……。

「作る人次第……ですかねえ……」

どこかぼやけた感情でしたけれど、あまり良い感情ではない何かが頭を過ります。

多分、『昔のわたし』の思い出……。何か……こう……名状しがたい何かが出てきていたような……そんな思い出があるようないないな……。な……。

「わたしはねえージャパリまんじゃないご飯だとお……ええつと……思い出した！　くつきーって言ったと思うよお」

彼女はどこか淋しげな表情になって、続けます。クッキーがご飯という括りになってしまうことにちよつとした疑問も抱きましたが、それを指摘するのは無粋というものでしょう。

「懐かしいなあ……何日かにわけて食べたよお……」

彼女のそんな様子を気にかけてかけたのが、コヨーテさんが問いかけます。

「へえ……その、くつきーってのは、どんな味がするんだ？」

「んーとね、甘くてさくさくしててえ……ちよつとぱさぱさしてたけどお……美味しかったよおー」

わたしはぼんやりと頭の中にクッキーを大事そうにはむはむと食べるドードーさんの姿が思い浮かんできました。可愛い女の子がクッキーを食べているというそれだけでサマになるといのは、なんだかズルい気もしますけれど……。

そんなことよりも、です。出会って二日目という短さでもわかる彼女の明るく人懐っこい性格から、先程の様な淋しげな表情が出たということが、どこかわたしの心を打ちました。

「うーん……わたしがお料理できれば良いんですけどねえ……」

といつつ、小さな自信が自分の中にあることに気付きました。スケッチブックを初めて前にした時と比べるとずっと弱い自信ですけど……。今度できるかどうか試してみましようか……確か『おうち』にはキッチンもあつたはず。

問題は材料や道具……もしかしたらキッチンに道具はあるかもしれないけれど、材料は……うーん……ゴリラさんに掛け合ってみましようか？ というかそれくらいしかなんとかできそうな気がしませんが……。

「ともえさんならできますよ！ きつと！」

イエイヌさんの無条件にも似た肯定は、常ならばありがたいもの、励まされるもの。とはいえ今回の場合は色々と勝手が違います。わたしが頑張るとかそういうお話では無いのですから。

「いやあ……こればかりは難しいですかねえ……材料とか、道具とか……それこそ作り方だ……」

イエイヌさんは「そうですかあ……」とぼそりと呟きます。

「……もしかしたら、ゴリラさんに聞いたら用意出来るかもですけど……」

わたしの言葉を聞いてドードーさんは目を輝かせました。

「ほんとおー！」

「あはは……あんまり期待しないでください……用意が出来たとしても、失敗することだってありますから……」

自分で言っていて情けないようななんというか……。

「わたしも手伝うよお？ イエイヌちゃんも、ねえ？」

こくこくと頷くイエイヌさん。

「わかりました。じゃあ、今度ゴリラさんに聞いてみて——」

「つと、話の邪魔して悪いが……到着だな」

いつの間にもやら会場に到着していたようです。改めて周囲を見回

すと、フレンズのみなさんが沢山……！

「俺は裏の小屋に行くから、一旦お別れだな。お前達は……この辺りで待っていると良い。ほーそーがされるらしいからな」

コヨーテさんはそう言つて手を軽く上げ、小屋へと向かっていきました。わたし達は彼女を見送り、近場の木陰に腰掛けます。わたしがほうと息をつくかつかないかの内に、ドードーさんがいたずらっぽく耳打ちをしました。

「緊張、解けたあ？」

少し驚いて、彼女の顔を見返すと、目を細めるような彼女が今までにしたことのない優しげな表情。最初の羽撃きを為し得た雛鳥を暖かく見つめるような、そんな優しい微笑み。

「……ええ、ありがとうございます」

改めて胸に手を当ててみると、彼女が合流する直前までに感じていた鼓動は落ち着いたものになっていました。こんなにも気遣つてくれたのです。彼女に応えるためにも、頑張りましょう。気負いすぎない程度に、ですけれど。

わたし達は時折言葉を交わしましたけれど、それも少なく、静かにその時を待ちます。緊張が解けたというだけで、これから行うことへの覚悟ですとか、どう動こうかですとか、考えることは山程あります。

かたや辺りはと言えば「参加できるかなあ」ですとか「誰が勝つのかなあ」と言う様な今日という日への期待感でもちきりです。そんなお話でがやがやと大変賑やかだった会場は、唐突に流れるざあつという音に依つて一瞬で静まり返りました。

「おはようございまーすー！」

そのひと言から始まった放送は、参加希望のフレンズさん達以外を会場の方へと誘導するものでした。

「――以上でーす！ 参加きぼーをした子は、残ってくださいねー。かかりが参加できるかお伝えしまあーすー！」

放送はその言葉で終わりました。ぶつりという音が響くと、辺りは再び賑やかに。観覧を希望した子達はがやがやとお喋りをしながらが移動していきます。

「また後でねえー!」

ドードーさんはそう言いながら手を振って、集団に混じるようにして歩いていきました。段々と遠くなる楽しげな音、それにひきかえ、この場に残ったフレンズさん達の間にはどこか張り詰める様な空気が漂っていました。ある子は隣の子(きつと相手として参加希望をした子なのでしよう)に「参加できるかなあ」と問いかけ、ある子は腕を組んで俯いたままじっとしています。

そんな子たちの下へ、アルマーさんやセンさん、コヨーテさん、はたまた鳥のフレンズさん達がひと組ひと組話をしに回っていきます。

ある組は落ち込むようにうなだれて会場の方へ歩いて行き、ある組はガッツポーズをしていたり……それぞれの願いが成就するか否かという場面に出くわしているのです。その点では、わたしとイエイヌさんは参加が決まっているというお話。気楽なものですけれど……目の前で繰り広げられる事態を、何故だか固唾を飲んで見守っています。そして最後にわたし達のところへ来たのはアルマーさんとセンさんでした。

「おまたせー」

「お待たせしました」

ペこりとお互いに会釈を交わし、本題に入ります。

「ええつと……参加は……」

一応確認です。もしかすると「やっぱりダメだった、ごめん」なんてこともありえますからね……。

「もちろん、参加決定ですよ」

わたし達はセンさんの言葉に、ほつと胸をなでおろします。

「だからー、場所の説明するねー」

「は、はいっ……!」

真面目な様子のセンさんとはうってかわって、アルマーさんは喜楽そうというか呑気そうというか……。

「いちおー見る子達と一緒に方向なんだけど、待機するところがあつてね、そこに行つてほしいんだー」

彼女達はわたし達に目的地の案内を受け、他の子達と並んで移動を

始めます。

わたし達を含め、参加が決定したフレンズさん達は、皆、これからの事に思いを馳せているのでしょね、口数は決して多くはなく、ぼそりぼそりとお互いのパートナーの子と打ち合わせをするような子達が居るくらいでした。

暫く歩き、大きな簡易テントが幾つか建っている場所に着きました。ここが目的地……。ゴリラさんがそこには居ました。

「うつつ、おはよう、みんな」

彼女はわたし達の返事を待たず、続けます。

「まずは参加おめでとう、だな。最初にルールの確認からするぞ——」
先日会場で放送されたことと同じ内容をゴリラさんは口にしました。

「つと、こんなもんか？ 正々堂々……ちよつとズルしても大目には見るが、楽しむことが一番の目的だ。そこは守れ」

わたし達を含めた子たちは「はいっ！」と返事をします。

「で、次に、競技中の話だ。上でフウチョウ達が見てる。捕まえた、捕まったの時は……」

ゴリラさんは首から下げた笛を一度だけ、長く吹きます。

「……この音。競技が終わる時は……」

次に二度、長く鳴らします。

「この音だな。この音がなったら一旦終了。攻めと逃げを入れ替えだ」

この説明がされた後、後ろの方に居るフレンズさんを彼女は指差しました。

「どうした？ 質問か？」

振り向いてその子を見てみると、昨日かけっこに出ていたウサギの子でした。どうにも緊張していて震えていましたけれど、その疑問は「え、ええつとお……い、いつになったら、終わるんですか……？」

その質問にゴリラさんは軽く笑って答えます。彼女はポケットの中から砂時計を取り出しました。

「悪い悪い、言ってなかったな。これの砂がなくなったら終了だ。だ

いたい……通じるかはわからんが、四、五分つてところかな」

長いような短いような……なんとも言えない時間です。その答えを聞いて、質問をしたウサギの子は「わかりました、ありがとうございます」と返事をしました。

その後、ゴリラさんはぐるりとわたし達を見回してから口を開きます。

「他に質問は……？ ……無いのか？ じゃあ、最後だ。それぞれ好きなテントに入ってもらうんだが……メシのとくと、トイレ、あと水を飲む時だな、それ以外であんまり出ないでくれ。他の組の勝負を見たとか見ないとか、そういうのは避けたいしな。困った時や聞きたいことがある時は、誰かしらテントの近くに居るから、呼んでくれ。以上」

彼女はそう言って去っていきました。ゴリラさんと入れ違いになって、別の鳥の子が空からやって来ました。彼女の案内に従い、わたし達はテントの中へ……。

テントの中は、異様な位厳かな雰囲気でしたけれど、メツシユ生地の窓や、しっかりと陽射しを遮る屋根のお陰か、極めて過ごしやすい空気でした。

時折吹き込む風は心地よくテントの中を駆け抜け、わたしや他の子たちの髪の毛、しつぽ、耳……そんなものを揺らします。もしかしたら、緊張で揺れているのかもしれないけれど、正解をわたしはうかがい知ることが出来ません。そんな空気の中、案内をしてくれた子がやって来て、競技のひと組目の子の名前を呼びました。

『狩り(うご)』の始まりです……！

ひと組目の子たちの名前が呼ばれ、そして数分置きに聞こえてくる歓声。その声は十分にわたしやイエイヌさんを——いいえ、テントの中で待機する全てのフレンズさん達を——緊張させ、興奮させるに足るものでした。わたしは握る手に力が加わり、思考は散り散りになってしまいましたし、イエイヌさんはわたしと同じ様に身体をこわばらせつつも、しつぽだけはせわしなく動いていました。また、ある子は我慢出来なかったのです。身体をびよんぴよんと跳ねさせていたり……ともかく、言葉を交わす子はおらずとも、集合の時点から感じ続ける緊張感の様なものは、時が経つにつれてどんどんと強くなっているのです。

そして、ひと際大きな歓声が聞こえてから少しして、鳥のフレンズさんがテントに戻ってきました。

「いちかいせん目が終わったわ」

彼女は緊張する素振りを見せず言い放ちます。彼女の言葉にテントの中はざわめき立ちます。

「ねえ、どっちが勝ったのー？」

太いしつぽの子が問いかけます。

「イエネコとイリオモテヤマネコのふたりね。凄かったわよ」

うんうんと頷きながら鳥のフレンズさんは感慨深げに答えます。

それだけでは伝わらないでしょうに……と思うわたしとは異なり、テントの中はふたたびざわざわとし始めます。

「！ イエネコちゃんが来てたんですか？」

イエイヌさんが驚きながら尋ねます

「ええ、来てたわ。……同じテントに居ただけけれど……気づかなかったの？」

イエイヌさんは鳥のフレンズさんの言葉に申し訳無さそうにして、「緊張してたので……」と答えますけれど……。

「お友達ですか？」

わたしはイエイヌさんに問いかけます。あまりイエイヌさんとは

そういったお話をした覚えがありませんので、少しだけ気が惹かれたのです。

「はい！ 時々一緒に遊んだりしてました！ ……ともえさんと会う少し前くらいに、離れたところに遊びに行ってくると言って、イエネコちゃんとはそれきり会ってなかったんですけど……」

楽しみに微笑むイエイヌさん。

なんだか嫉妬のような感情がちよつとだけ芽生えてしまいましたけれど……それでも、イエネコさんともお友達に……なんて思いのほうが、ほんの少し強く感じられます。

「つと話の途中でごめんなさいね。次のさんかしやは……つと、ともえ・イエイヌのふたりと、ユキウサギ・ヤブノウサギのふたりよ」

わたしは欠片ほどの仄暗い感情を「何故抱いたのだろう？」なんて考えていたのですけれど、鳥のフレンズさんの言葉でそれも中断です。

「はいっー」

わたしとイエイヌさんは揃って返事をして、立ち上がります。ついに、この時が……！

「呼ばれたよー！ ヤブノウサギちゃんー！」

そういう彼女の姿は真っ白なボブヘアーに、ぴよんと伸びる大きなお耳が目立ちます。真っ赤な目に透き通るような白い肌は空に浮かぶ雲よりも真っ白に思われます。視線を落としてみると、首元には真っ白にもこもことした襟巻きと真っ赤なりボンを付けていて、真っ白なコートとスカートも来ていますが……何とも『サバンナ』らしくない印象がありますね……。

「うん、じゃあ行くっか、ユキウサギちゃん」

彼女の声に返事をしながら立ち上がった子は、長い茶色の髪に黒味がかかった大きなお耳が、ユキウサギさんと同じ様に目立ちます。彼女は前髪で片目が隠れているのですけれど、楽しげな表情であることが伺えます。ヤブノウサギさんも同じ様にもこもこの襟巻きとりボンを首元につけているのですけれど、色は襟巻きの色は茶です。ユキウサギさんとは違って涼しげな白いブラウスに、桃色の差し込みの入っ

たプリーツの目立つ茶色のスカート。ヤブノウサギさんの方が幾分か『サバンナ』っぽいですし、どこかお姉さんの様な印象を受けます。「じゃあついてきて、会場に行くわ」

白い頭の鳥のフレンズさんはそう言って、テントを出ていきました。ウサギのお二人はわたし達にひらひらと手を振って、先を歩き始めました。遅れないように、わたし達も彼女の後を進みます。

空はからりと晴れ渡り、透き通るような青色がどこまでも続いています。

陽射しは先程よりも強くなっていて、外に出てすぐに汗ばんでしまうような心持ちにさせるくらいです。少し歩くと、フレンズさんがずらりと並んでいる光景が目に入ります。あれが、会場……。サバンナのと真ん中に、突如現れるフレンズさん達。そして、壁のように並ぶ彼女達が見つめる先には数百メートル程でしょうか、四角形の広場のような空間がありました。

「思ってたよりも広いねえ……それに暑い……」

ユキウサギさんがぱたぱたと両手で顔を扇ぎながら呟きます。

「無理しちゃダメって言ったのにこっちゃんも参加したいなんていうから……」

ヤブノウサギさんが心配しながらも茶化すように返します。『狩りごっこ』を気負うような素振りを見せない彼女達の姿もそうですけれど、何よりも観客の数の多さ……！ それを意識してしまうと、わたしは一層緊張してしまい、思わず隣を歩くイエイヌさんの手を握ってしまいました。

「大丈夫ですよ」

イエイヌさんはわたしの手を握り返し、わたしの目をじっと見つめて言いました。そして、こっそりとわたしに耳打ちをします。

「あの子達を悪くいうようでなんだか申し訳ないんですけど……昨日のかけっこの様子からして、私より遅いです」

そういえばあの子達は連日の参加でしたね。

昨日のイエイヌさんの言葉を思い出してみると、確かに速さではイエイヌさんの方が早いと言っていたような。

「そうは言いますけど……」

わたしは苦笑いを浮かべてしまいました。

「緊張、しません？ それに作戦負けって可能性も……」

「だから大丈夫なんです。だって、ともえさんが考えた作戦があるじゃないですか！」

イエイヌさんは「えっへん」と胸を張るようにします。

「……緊張は、そりゃあ、しちゃいますけど……えへへ、頑張りましたよー！」

「ふふっ、ですよねえ……でも、ええ、頑張りましたよー！」

わたし達は前に向き直ります。前を歩くウサギさん達に続きます。そしてあつという間に観客席の間を抜け、フィールドの中心へ。

「じゃあ、ふた組とも、挨拶」

少しだけ大きな声で先頭を歩いていた鳥のフレンズさんが告げます。

「ともえです。よろしくおねがいますね」

「イエイヌです。お互い、頑張りましょう」

わたし達は深くお辞儀をして、挨拶をします。わたし、声、震えてませんかよね？ 大丈夫ですよね？

「ユキウサギです！ よろしくねー！」

ユキウサギさんは身体を軽く動かして会釈をします。その動きに合わせて揺れる大きな耳に、思わずわたしは目を奪われてしまいました。

「ヤブノウサギだよ、よろしく」

ヤブノウサギさんはスカートの裾を軽くつまみ、持ち上げながらの会釈。

「にとおうものはいつともえずっと言うからねー、捕まらないんだからー！」

「それ、多分、使い間違ってるよ、ユキウサギちゃん」

自信ありげに微笑むユキウサギさんと、呆れたような表情のヤブノウサギさん。何とも仲の良さそうな子たちです……。

「それじゃあお互い、正々堂々、頑張つてね」

鳥のフレンズさんはそう言って、わたし達を指定の位置に移動するよう促します。そして、わたし達がお互い数十メートルほど離れたのを確認すると、空に飛び立ってから、大きな声で宣言します。

「それでは、はじめっー！」

○ ひとつ、大きな笛の音が鳴り響きました。

会場内の空気は、奇妙なものだった。

それは他でもないともえとイエイヌの『狩りごっこ』の有り様の為だ。彼女達の相手はユキウサギとヤブノウサギのペア。端的に言うならば、ともえとイエイヌの勝利だった。ともえは二度ヤブノウサギに捕まりこそしたものの、それでも相手方の得る得点は合計で『二』。一方でともえとイエイヌは、イエイヌの働きによって三回戦ともふたりのウサギを捕まえることが出来たのだ。依って合計得点上回るともえ・イエイヌのペアの勝利。ユキウサギが高温の空気のために本調子ではなかったということもある。特にそれは試合後にへたり込む彼女の姿からも察することが出来た。しかし、問題はそこではない。ともえとイエイヌの動きが問題だったのだ。

「ロバちゃん。凄かったねえ、ふたりい」

ドードーが驚きの感情を隠さず呟く。それはドードーの発言を聞くロバも同様だった。

「本当に……。あのおふたり、仲が良いのは知っていましたけれど……」

ロバはドードーと試合が始まる前に、少し会話をした。その内容は挨拶を除くと、要約すれば「初挑戦だから頑張っただけだね」というもの。あるいは「どうやって励まそうか」というようなもの。

いずれにせよ、ともえとイエイヌの活躍は極端に言ってしまうと期待されていなかったのだ。何か秘策があるらしいということを知ればドードーは知っていたが、それがどのようなものかも知らなかった。そして、加えていうならば……。

「あのふたりね、なにか考えてるっぽいこと言ってたけど……なんだったんだろうねえ……わかるう……？」

首をかしげながらドードーはロバに尋ねる。

「さあ……なにかしてるようにも見えなかつたですし……」

彼女達にはわかる筈もないのだ。『音』が聞こえないのだから。なればこそ、ともえの作戦は成功しているのである。その成功は、ロバとドードーの会話に見られるだけでなく、観客として並んだフレンズ達のほとんどが抱く感情からも察することが出来る。ただ不思議そうに隣に座る（あるいは飛んでいる）フレンズに問いかける者もいれば、考え込むようにひとり黙り込む者も居る。

つまりは「あの動きはよく出来ていたものではあるが、何も無しには難しいのに」という思いを抱えるフレンズは少なくなかつたのである。一方で——音を聞き取つたフレンズも少なくは無い。

「……あなた達……聞こえなかつたの……？」

少しだけ面倒そうな様子で問いかけてきたのはチーターだった。彼女は偶然にはあるが、ドードーの後ろに座っていた。そして、彼女の隣にはプロングホーンが不安げではあるものの、笑みを湛えて座っている。

チーターはぶつきらばうな言葉で問いかけたが、少しだけ、頬に朱が刺していた。ドードーはそれに気づいていたが、それを茶化したり、そこから何かを読み取るよりもずっと『彼女が話しかけてきた』という事実の方に驚愕の色を隠せなかつた。

「……！ チーターちゃん……！」

ロバもどうやら似たような驚きを抱いていたようで、返事をしようにもどうやら言葉が詰まってしまっているようだった。あわあわと口元を手のひらで隠して、彼女は慌てている。

そんな彼女達の様子を見かねたのか、チーターは少しだけ不愉快そうな表情で——内心、他者と接することへの恐怖と緊張を抱えながら——続ける。

「……で、聞こえなかつたのって聞いてるんだけど。それも聞こえなかつた？」

頬に刺す朱色が、強くなる。言葉を間違えてしまったのだろうか？

それとも、正解だつたのだろうか？ 話しかけるべきだつたのだろうか

か？ 黙っているべきではなかったのではないだろうか？ そんな考えが彼女の胸中に渦巻いていて、それを察したのだろう。プロングホーンは心配そうに彼女を見守っていた。

「……えへへえ、ごめんねえ。ちよつとびっくりしちやつた」

ドードーはチーターの『棘のある言葉』を気にせず、言葉を紡ぐ。何故なら、ドードー自身が彼女と仲良くなりたいたいと思っているからというだけでなく、彼女は今話しかけてきた相手が、緊張していることを察していたから。他のフレンズと比べれば交友は広く、また、その関係を深めようとする意思も、深めようとした長さも、ずつとずつと長いからだから。

「何も聞こえなかったよお？ ねえ、ロバちゃん」

そう言つて隣に腰掛けた彼女に問いかける。

「は、はい……」

「私も、聞こえなかったな」

プロングホーンも、ロバに合わせて口を開く。チーターを案じた言葉ではなく、単なる疑問からだ。

「不思議ねえ……あんなうるさい音なのに……」

チーターはそう言つて、腕を組んで考え込み始める。しかしながら、チーターにそこまで考える余裕などなかった。何故なら――

「わたしは聞こえたよー！」

「うそつ……そうなの？ 私は――」

彼女達の会話の輪が、広がっていったからだ。単純にチーターとプロングホーンという組み合わせが、昨日のレースの結果によつて注目を集めがちだという理由が一番だが……もしかすると『聞こえるか聞こえないか』という疑問を、皆、抱いていたのかもしれない。

そんな会話の広がりを見て、慌て始めるチーターと、その様子にくすりと微笑むプロングホーン。プロングホーンはそつとチーターに近づき耳打ちをする。

「来て正解だったろ？」

困ってるんですけど！ 手に負えないんですけど！ と訴えたげな視線をチーターは返す。その視線に、プロングホーンは肩をすくめ

る。

「ねえ、チーターちゃん、どんな音だったのお？」

ドードーがチーターに尋ねる。それは、気を使ったのではなく、純粹な好奇心。けれど、チーターにとってはありがたい言葉だった。

「笛みたいな音だったわね……長い音と、短い音と——」

次の試合が始まるまで、彼女達の会話は収まらなかった。

○

わたし達は勝利の喜びを噛みしめて……はいないのです。というのも、ユキウサギさんの件が心配なのです。

「ユキウサギさん、大丈夫でしょうか……」

三回目の勝負が終わったとき、崩れ落ちるように倒れたユキウサギさん。

「うーん……涼しいところでゆっくりすればって言ってましたけど……」

イエイヌさんが、やはり心配そうな顔で答えます。

「ゴリラさんも来て、あの子を運んでたのだし……なるべくこの辺りで涼しいところについて言ってたわ。不安でしょうけど、大丈夫よ、きつと」

鳥のフレンズさんは、ゴリラさんの言葉があるからでしょうか、どこか安心したような表情です。「これくらいへーきへーき」ともユキウサギさんも言っていましたけれども……。

「そう、ですか……」

わたし達とは言えば、ユキウサギさんの体調に気を払わずに競技を続けていたのですから、どこか罪悪感の様なものを覚えてしまいます。

「ほら、しゅんとしないの。あなた達は勝ったのよ？ 次の勝負に備えて、休みなさいな」

そんな言葉で、わたしとイエイヌさんを励ます彼女ですけれど……

「いい？ あの子が少し無理したからって、あなた達が気にする必要は無いのよ。それに、あの子のためにも頑張らなきゃ。ね？」

彼女の励ますような言葉に少しだけ救われる思いです。ちよつと

だけ、ユキウサギさんがお説教されているような気分にもなりますけれど……。

「……ありがとうございます」

「あのう、ハクトウワシさん」

イエイヌさんがハクトウワシさんに訪ねます……というか、名前知ってたんですね。どちらで知り合ったんでしょう？

「どうかしたの？」

「ユキウサギさんがお元気になったら、ご挨拶に行きたいのですけれど……」

ハクトウワシさんは「ふんふん」と頷いて、ちよつとだけ考え込みます。

「んー……わかったわ。でも……そうね、早くても『狩りごっこ』が終わってからね。あなた達はこっちに集中なさい？ 場所はあとで教えてあげるわ」

わたし達は頷き、ハクトウワシさんに「ありがとうございます」と感謝の言葉を伝えます。

「ふふつ、素直でよろしい」

ハクトウワシさんはくすりと微笑みました。

「お土産代わりに『狩りごっこ』の話でもしてあげなさい。最後まで残って、『けーきのひととき』だったって言ってあげなさいな」

からかうような口調でしたけれど……『けーきのひととき』とは一体……彼女なりのジョークなのでしょう……？

「……？ は、はあ……」

あ、イエイヌさんも不思議そうな表情。やっぱり通じてないんですね、彼女の冗談。

「んー……？ ま、まあ良いわ……自分で言い直すのも、ヘン、ヘンだわ……」

ぶつぶつと呟きながら（本当に小さな声で「日本語なのよ？」という何とも返事に困る言葉も聞こえてきました）ハクトウワシさんはまっすぐに歩いて行き……先程の隣のテントを指差しました。

「えー、こほん。……その中で待ってて。勝った子達はそこで待機だ

そうよ。次の出番が来たらまた呼びに来るわね」

彼女は少しだけバツが悪そうに頭を搔いて、去っていきました。

「……入りましょう、イエイヌさん」

「……はい」

きまり切らない不思議な空気に、お互い戸惑いを隠しきれませんでした。したが……わたし達はテントの中へと入っていきます。

「あーっ！ イエイヌちゃん！ 久しぶりー！」

日陰に目が慣れるか慣れないかの内に、可愛らしいはしやぎ声が響きます。

「お久しぶりですーイエネコちゃん！」

ふたりして駆け寄り、手を握りあいぴよんぴよんと跳ねるイエイヌさんとイエネコさん。

「あ、紹介しますね。こちらがともえさん。こちらが——」

「イエネコです。よろしくね、ともえちゃん」

そう言って彼女は手を差し出します。彼女の姿をしつかりと見てみると、何とも可愛らしい姿。灰色がかった白色の髪の毛は少し癖の着いたように跳ねていて、そこから生えるのは三角にぴんと立ったお耳。黄色の瞳は好奇心にきらめいていて、口元は楽しいな笑みを浮かべています。首元には赤色のチョーカーと髪の毛と同じ色のリボン。肩を出したノースリーブのワンピースと肘の辺りまである長い手袋。そして短めのスカートと、太ももの辺りまでを覆うハイソックス。足には動きやすそうなスニーカー。お尻からはぴよこんと伸びる細いしっぽ。そのどれもが活動的なようで、どこかマイペースなような……そんな印象を与えます。

「ともえです。よろしくおねがいますね」

わたしも彼女に応じるように名前を伝え、わたし達はお互いに握手を交わしました。楽しい彼女達をいぎ目の前にすると、少し前に抱いた仄暗い感情の欠片は少しだけ小さくなって、気にならなくなるような気持ちです。

イエネコさんとの挨拶を通じて、わたしは自分の中に芽生えた不思議な感情を弄んでいたのですけれど……握手が終わるやいなや、イエ

ネコさんはふわあと小さくあくびをします。

「…………ごめんねえ、眠い…………ふわあ、あ…………」

もうひとつ大きなあくびをして、彼女は本当に眠ってしまいました。一応、隅の方ですけれど…………。確かに猫って寝てるイメージありますけれど、それほどまでに…………？」

「あはは…………前からこんな感じで…………お気になさらず…………」

イエイヌさんは苦笑いを浮かべながら言います。

「ごんにちわ。イリオモテヤマネコです…………」

そう言っておずおずともうひとりの子がわたしにぺこりとお辞儀をします。彼女の姿はイエネコさんと似たような格好でしたけれど、どこか控えめというか、そんな印象を受けますし、衣装も全体的に黒色が強く、また、イエネコさんは縞の様な模様の衣装でしたけれど、彼女はまだらの様な、水玉のような、そんな模様でした。

「イエイヌさんと、ともえさん…………ですね…………よろしくお願いします。

あの、その…………リオって呼んで貰っても大丈夫です。長いので…………。何とも控えめというか臆病めいているというか…………警戒されてるんでしょうか？

「…………こそ、ええつと…………リオさん、よろしくおねがいします」

彼女に返すようにわたし達はぺこりとお辞儀をします。

「…………ふあ…………ごめんなさい、わたしも眠いので、失礼します…………」

あれこれとお話をするよりも早く、彼女はイエネコさんの隣へ行き、地面に丸くなります。

「…………マイペースですわね…………」

呆れ半分感心半分という具合にぼそりつつぶやくと、イエイヌさんは困ったような笑い声を小さく発したのです。

用意されていた椅子に腰掛け、わたし達は次の出番を待ちます。イエネコさんとリオさんは揃って隅の方で丸くなって寝たままですし、わたしとイエイヌさんは隣通しで椅子に腰掛けては居ますが、お互い緊張しているのか、それとも考え事でもしているのか、言葉を交わすこと無くじつとしています。

勝負を考えすぎても埒が明かない。そう思ったわたしは、なんとなく

く、先程抱いた感情について思いを巡らせませす。

今まで、感じたことのないような、仄暗い感情。嫉妬のような気もしますけれど、どこか憧れが混じっているのです。どうして、どうして……。『次の出番まで』というのは案外、考えるには十分な時間です。せつかくですから、ね。わたしは身じろぎもせず、心の中のいろいろなもの……淀みとも澱とも言えるそんな不純物を沈めて……沈めて……正解をなんとかして見つけようとして……。

「うーん……」

「どうかしましたか？　ともえさん」

思わず漏れ出た唸り声を聞き取ったイエイヌさんが尋ねます。

「あ、いえ、何でも……ちよつと考えごとです。『狩りごっこ』とは関係無いですけど……」

この感情をイエイヌさんに問いかけても、きつと意味が無い……というか、見当違いも良いところですよ。

「？　……困ったら私にも教えて下さいね？」

イエイヌさんはそう言つて、再び黙り込みます。

わたしを案じてか、それとも彼女自信が不安なのか、わたしの手をそつと握つて……。ん？　ともえ『さん』……イエネコ『ちゃん』……。あー……。そういうことですか……。え、わたし結構独占欲強……。えつ……。ええ……。？　ですが思い当たる節は『それ』しかありません。

彼女の交友関係でもやややっている訳でもない（もしそうなら、口バさんの時に同じ感情を抱いていた筈です）となると……。うーん……。思い返してみれば、『そう』呼ばれたのは何回かありますけれど、常の呼び方ではありませんし……。『そう』呼んでもらいたいのですけれど、それを強要するのも妙な話です。となれば、わたしが彼女のことを『そう』呼び、彼女にわたしのことを『そう』呼んでいただけ。それが礼儀であり、マナーであり、そして周到な作戦というものです。となれば……。なんだか恥ずかしいですけど……。

「あの……。おほん、えー……。イエイヌ、ちゃん」

イエイヌちゃんはわたしの声にぴくりと耳を動かし、驚きと喜びの混じった表情でゆつくりとこちらを向き、じいつとこちらを見つめ返

します。

「ど、どうしました……?」

「も、もういつかい……もういつかい……」

期待に満ちた瞳とぶんぶんと振り回される楽しげなしっぽ。それらとは裏腹に、探るような言葉。た、試してます……?」

「な、何をですか……?」

「名前! 呼んでください!」

う、ぐ……。

「……イエイヌちゃん」

そう言い切った瞬間に彼女はわたしに抱きつき、そしてわたしの胸に顔をぐしぐしと擦り付けています。

「ちよ、ちよつと……」

わたしの言葉などお構いなしで、彼女は「嬉しい嬉しい」と言わんばかりにぐりぐりうりうりと……しっぽももうそのまま空でも飛んでしまうのでは無いかという勢いでぶおんぶおんと……。不意に彼女は顔を上げ、わたしを呼びます。

「ともえちゃんともえちゃん!」

胸につつかえた欠片が、今度こそ本当に、溶けて消えました。

「な、なんですか……イエイヌちゃん……」

満足げな笑顔で、彼女は再び、わたしの胸元に顔を擦り付けました。どうしましょう、これ……恥ずかしいですし、困ってしまいますけれども……イエイヌちゃんはそんなのお構いなしという様子。

「——というワケで、ここで待っててちょうだ……あなた達ねえ……」
テントの入り口がぺらりとめくられ、そこに現れたのはハクトウワシさんでした。彼女はテントの中を一瞥し、やれやれと呆れた具合で頭を振ります。

「少しは緊張とか、しないの……?」

わたしはハクトウワシさんの言葉に改めてテントの中を見回します。隅の方で寝ているイエネコさんリオさん。そこから少し離れて顔をぐりぐり押し付けているイエイヌさんと、押し付けられているわたし。多分、わたしの表情は困惑と嬉しさのないまぜになったニヤケ

顔だったでしょう。

「…………あ、あはは…………」

わたしは思わず乾いた笑いを漏らし、ごまかそうとしました。

幕間6

しとしとと降る雨は中々止みません。朝から降り続けている雨は、つい先程まで『おうち』の屋根をとんとんと叩くほどの強さでした。ですけれど、『雨』というどこか面倒な思いを抱かせる筈の天気は、今のわたしにはなぜだか楽しげなものに感じられました。

「止みませんねえ……」

イエイヌちゃんが、今日何度目かの愚痴をこぼします。

「……偶には良いんじゃないですか？」

わたしは眺めていた画集を閉じ、イエイヌちゃんの方を向きます。わたしはと言えば、その楽しげな音のためか、あるいは目覚めてから数少ない雨のためか、どこか気楽なものです。

今日、目が覚めてからは、わたしは窓辺で外を眺めたり、手元の画集を眺めたり、はたまた、これまでに書いた絵を見返してみたり……思いついたことを、思いついた時にしていました。

イエイヌちゃんもベッドに寝転がっているくらいの違いがあるだけで、外を眺めたり、うとうととしていたり、わたしと大差のない他愛ない時間を過ごしていました。

「……イエイヌちゃんは退屈ですか？」

『運動会』が終わり、それから数日。一旦帰宅したわたし達はしばしの休息を取ることにしました。一応、わたしの感覚では一週間ほどを目安にしておりましたし、イエイヌちゃんも同じ位の期間を休息に充てることに異論は無いようでした。

けれど、しばらくすると、お互いの間には『物足りない空気』とも呼べるような、手持ち無沙汰な雰囲気生まれ始めたのです。

「そこまでじゃ……でも、うーん、ちよつとだけ……」

最初の二日間程はドードーさんが居てくれましたし、その翌日は散歩も兼ねて『お願いごと』の為にゴリラさんの棲家（と彼女は自称していました）へと行った為、さほど退屈ではなかったのですけれど……。

「まあ……そうですねえ。ずっと歩いたり走ったりして……急に

『おうち』に居ないといけないんですもの……」

今日は一日『おうち』居ると決めると言うことと、今日は一日『おうち』に居なくてはならないということでは感じ方は変わるもの。雨は朝から昼過ぎの今までずっと振り続けています。

「そうですよお……それに、なんだかつめたい雨ですし……」

雨が降る以前までは暑いくらいの天気だったのですが、今日の雨は妙に冷たいのです。まるで初夏のような天気だったのに降る雨は冬とでも言えるような、そんな具合なのです。気温も外はどこか肌寒いくらいです。

「明後日には出発したいですし……体調を崩すようなことは避けたいですからねえ」

わたしの言葉にイエイヌちゃんは「はい……」とため息まじりに答えます。

「せっかくです。のんびりしましょう?」

イエイヌちゃんはこくりと頷いてから、わたしの近くにきて、画集をそつと手に取ります。

『『としかん』……でしたっけ? 借りてきたんですよ』

「ええ、ゴリラさんが誰にも読まれないのは寂しいからって……」

わたしが借りてきたのは『画集』。

どなたの描いたものかは……ちよつとよくわかりません。というのも、絵の部分を除いた言葉の部分の全てが外国語で書かれていた本だったのです。ゴリラさんも「読めない」と首を降っていました……。かつてヒトが数多く居た頃であればわかる方に尋ねたりして読めたのかも知れませんが、今となってはそれも叶いません。

「ともえちゃんは何にか好きな絵とか、ありましたか?」

イエイヌちゃんは宝物でも扱うかのようにそつと慎重にページを捲りながら、わたしに尋ねます。

「好きな絵……ですか……」

わたしはイエイヌちゃんから画集を受け取り、何枚かページを捲り指差します。

「これ……ですかね」

わたしの示した絵は、どこかの国のどこかの場所の一瞬を切り取ったような絵。その場所は、ガラス張りの三角形の屋根があつて、明るい色彩で描かれたものでした。煙とも靄ともわからない気体がそこかしこに立ち込めていて、幾本かの線路と、その上を走る黒々とした汽車、そして遠くには赤色だったり白色だったりする建物が並んでいて……。

「絵が綺麗……と言うのもありますけど……」

イエイヌちゃんはうんうんと頷いてわたしの言葉に耳を傾けます。

「その……ヒトがいっぱい居て、生活していて……その一瞬をこんなに綺麗に切り取れるんだって感じるんです」

「はええ……」

多分、感心してくれているのでしようけれど、何とも言えない不思議な吐息を漏らします。

「イエイヌちゃんはなにか気になる絵とかありますか？」

そう尋ねながら、彼女に画集を手渡します。受け取ったイエイヌちゃんは「うーん」と悩むように数ページほどめくり、手を止めます。

「私は……これが気になります……」

彼女がわたしに見せた絵は、わたしにも不思議な感情を呼び起こさせたものでした。

「この絵……綺麗なんですけれど、それとは違くて……なんだか懐かしいんです……」

その絵は、白いワンピースを着て、日傘を刺した女性と小さな子どもが描かれた絵です。その場所は草原のような、丘の上のような、そんな場所でしたけれど、何よりも目立つのは綺麗な青色の空と、陽射しを受けて輝く雲です。

「……わたしも……同じ気持ちになりました」

「ともえちゃんも……ですか……？」

わたしの言葉にイエイヌちゃんも少し驚いた様な顔をします。

「はい……。イエイヌちゃんは、どこかで見たことありますか？」

わたしの予想通り、彼女は首を振ります。

「ですよね……わたしもなんですけど……」

過去の記憶が無い以上、わたしに覚えが無いというのも当然といえば当然なのですけれど……。単にパークの中で似たような絵を見たのでしょうか……。？にわかには蘇ってくる懐かしさ。みぞおちの辺りがじゅんとするような感覚。その出処が一体どこなのか……。どうにも気になります。

わたしひとりが、あるいはイエイヌちゃんひとりが感じるというだけならば、覚え違いや勘違い、もしかしたら遠く昔の忘れてしまった思い出なんて可能性だってあります。けれど、お互いに、共通した感情を抱くのです。わたしとイエイヌちゃん。どうしてふたりとも揃って……。？事態は途端に妙な雰囲気を感じ始めます。

わたし達は、時折「うーん」と悩むような声を上げる以外、黙りこくったまま考えこんでいました。絵……。ワンピースを着た、女性の絵……。？

「ああ、わかりました」

夢に見た、記憶のひと欠片。そこで誰か——多分、お父さん——が描いていた絵が、よく似ていたのです。

「以前お話しましたよね……。わたしの小さい頃の思い出の話……」

イエイヌちゃんは考えを止め、興味深げにわたしの瞳を見つめます。

「そこで描かれていた絵が……。よく似てるんです」

「そういうことですかあ……。なるほどなるほど……」

イエイヌちゃんはわたしの言葉に納得するように、ふんふん頷きました。わたしは改めてそこで描かれていた絵の詳細を、思い出しながらですが、彼女に伝えます。丘の上に立つ真っ白なワンピースを着た女性……。似た構図に、似た衣装。そして似た色使い。けれど描かれていたのは夜ですし、もちろん日傘なんてありません。加えていうならば、画集の絵と比べたら、どこか淡い印象でした。

「——と、こんな絵だったと思います。ちゃんと覚えていたら、ですけど……」

変わらずふんふんと頷くイエイヌちゃん。

「ですと……。私はそのお話を、覚え間違えちゃったんですかね……」

「そうかもしれませんね」

イエイヌちゃんは少しだけ悩む様な顔をしていましたが、自分の中にある疑念を振り払うかのように小刻みに頷きました。

ただ、わたしはと言えば、ちよつとした違和感を覚えています。というのも、あの時にお話したのは夢に出てきた『誰か』についてのお話や、単なる出来事についてのお話。つまり、絵の詳細は話の中心になかったのです。それなのにイエイヌちゃんが勘違いするというのが、わたしには不思議に思えてならないのです。

不意に、雨脚が強くなりました。

とんとんと『おうち』の屋根を叩くその音は、今朝方のそれよりも幾らか強いもので、温度の管理がされたこの『おうち』の中でさえ、どこか冷え込んでしまうように思われました。

「雨、強くなってきましたね……」

イエイヌちゃんの声色は退屈そうな響きを依然として含んでいましたが、少しばかり悲しみの色が強くなっている気がします。

「……そうです！ イエイヌちゃん、ハーブティー、淹れましょう？」
彼女を励ましたいという思いや、『おうち』の空気を替えたいという思いもありましたが、当然わたし自身喉が乾いてしまったという事実もありますし、改めて飲んでみたいという思いも……。わたしが立ち上がってキツチンへと向かうと、イエイヌちゃんがぱつと立ち上がって、言います。

「あ、あの！ わ、私もお手伝いを……」

「でしたら……そうですね、はい、お願いします」

ふたりしてキツチンに入り、棚をまさぐります。カップは度々使っていたのですねに見つかりましたけれど、ヤカンは少々手間取ってしまいます。

「ええつと……ともえちゃん、これですか……？」

イエイヌちゃんは流し台の下を、わたしは椅子を持ってきて高い扉の中にあるかと探し回っていると、イエイヌちゃんがヤカンを見つけてくれました。

「そうですそうです！ お手柄ですよ、イエイヌちゃん！」

彼女が引つ張り出したヤカンは、使われた形跡がほとんど無く、汚れや歪みなど無い、綺麗なものでした。わたしは彼女からヤカンを受け取り、蓋を外し、中を覗き込みます。

「うーん……汚れとかホコリも無いですし……ちよつと洗えば使えそうですね」

わたしはそうつぶやいて、がしやがしやと軽く中をスポンジで擦り、清めます。そして中に水をいれ、コンロに置き、火を点けます。

「……わうっ！」

イエイヌさんはわたしの仕草の始終を見ていたのですけれど、コンロに火を点けた瞬間、驚きの声を上げます。

「そ、そんなに驚く事ですか……？」

わたしが微笑みながら尋ねると、イエイヌさんは軽く頭を振りしました。

「べ、別にそんな、びつくりしたなんて……そんな風に使ったんですね、そこ……」

……そういうならそうなんでしょう。少し耳が赤くなっていますけど……。

「ともえちゃんは使い方、どこで知ったんですか？」

「んー……身体が勝手に動いてましたねえ……なんででしょう……？」

案外、身体が覚えていることって忘れないんでしょうか？ 過去です

とか、お父さんの名前や顔なんか忘れても、絵が描けた様に、今、火を点けることができた様に……。そう考えると、案外、できることって多そうです。

「ええつと……どうするんですたっけ……」

せっかくゴリラさんから頂いたハーブティーなのです、美味しく、大事にいただきたいもの。どうすれば上手に作れるんですたっけ、確か教えてもらったはずなんですけれども……いざとなると、ど忘れしてしまいますね。

「確か……ぱつくに入れてあるからカップとお湯でいいとか言ってますんでしたっけ？」

「ああ、そうでした、ありがとうございます。ええつと……先にカップを温めた方が良いとかなんとか仰ってましたね……」

わたしはゴリラさんから伺った『美味しい作り方』の通りに淹れればまず間違いは無いでしょう。彼女はそれなりに作ってるようですし、彼女の言葉にはわたし達を納得させるだけの重さがありましたからね。

手順は至ってシンプル。お湯を沸かして、カップをお湯で温めてから一旦それを捨て、パックを入れお湯を一杯分カップに淹れて、蓋をして蒸らす。そうしたら数分もしない内に完成……との事。完成が楽しみです。

彼女の言葉の通りお湯が沸くのを待っているのですけれど……わたし達は待つには長く、かと言って何か他のことをするには短いような、そんな時間を待つことになります。

「お湯が沸くまで、手持ち無沙汰ですねえ……」

わたしがそうつぶやくと、イエイヌちゃんは「そうですか？」と中腰になりながら、コンロの火をじいつと見つめて言いました。

「私は、なんだか楽しみです。やったことも見たことも無いですから」
そう言ってわたしの方を見て、にっこりと微笑みます。

「イエイヌちゃんのそういうところ、わたしは凄いなあって思います」
まさに尊敬に値すると言って良いでしょう。

日常の些細な光景から、非日常を見出し、楽しむ。フレンズの皆さんは割とそういう生き方や在り方だと思われませんが、わたしが『ヒト』だからか、はたまたわたし自身の性格の為なのか。彼女達のような生き方を楽しむ術が、中々身につきません。

と、そんな思いもほどほどに、イエイヌちゃんと言えば恥ずかしいやら誇らしいやらというような具合に、両手を頬に当てて笑みをこぼしております。

「照れちゃいますよお、えへへ……」

彼女のこういう顔は、わたしも好きですから、つい微笑み返してしまいますが……わたしの掛けた言葉の割に、反応が大げさでは……？
「まったく……何をそんなに……つと」

ヤカンからはしゅうしゅうと白い蒸気がほとばしっていて、お湯が湧いたことを殊更に主張しています。

「湧いたみたいですね。まずは——」

ゴリラさんから教わった通りの手順に則り、作業を進めます。

カップを温めて、沸かし直したお湯とティーパックをカップに入れて、暫く待つて、そして——

「——これで完成……なんですかね？」

わたしは蓋代わりに載せていた小皿をどかし、中身を覗きました。

「うーん……色は出てるみたいですけど……」

イエイヌちゃんも同じ様に中を覗き込みます。

「とりあえず、机に持っていきましよう」

わたしはイエイヌちゃんの言葉に頷き、わたし達はそつと慎重に机へと移動しました。……なんでふたりして忍び足で移動してるんでしょう？ コップの中身は然程多くないというのに……。なんだか奇妙な光景でくすりとしてしまいますね。

「では、いただきます」

ふたり揃つての掛け声。その後は小さく啜る様な音がふたつ。

「……美味しい……！」

ゴリラさんが淹れてくださった時と比べると、少しばかり香りが弱い様な気もしますけれど、それでも十分に豊かな香りに、味。ハーブティーの暖かさが少し冷えた身体を芯から温めてくれるようでしたし、飲み下した時に鼻から感じる独特の花のような香り、舌に残る、優しささえ感じるほのかな苦味……。

以前も感じたのですけれど、もしかしたら、コーヒーよりもわたしは好きかもしれませぬ。

「だ、大丈夫ですか……？ イエイヌちゃん……？」

彼女の方を見ると、思っていたよりも苦かったのでしょうか。とてもとても渋い顔を浮かべています。

「熱いのはへーきだったんですけど……」

結構、息を吹きかけてましたからねえ……。

「うう、まえよりも苦いですう……」

「あはは……もしかしたら、この前のはゴリラさんが砂糖を多目に入れてくれてたのかもですね」

ゴリラさんは、あの時するりと席を立って、まるで自然にハーブティーを持ってきてくれましたけれど……あの時は確か、ゴリラさんが直接「ともえはこれ、イエイヌはこれ、ドードーはこれ」という具合に配膳してくれていましたし……。

「お砂糖、持ってきましたね」

先程、キッチンを漁った時に『おさとう』という文字を見かけたのです。中身がどれくらい残っているのかという問題もありますけれど……。

「あ、ありがとうございます、ともえちゃん……」

渋い顔はそのままに、彼女は再びふうふうとグラスに息を吹きかけていました。

『おさとう』と書かれた容器には、想像していたよりも遥かに多い量の砂糖が残っていました。中に入っていたスプーンで混ぜてみたり、掬って舐めてみたりしたところ、そのまま使っても問題はなさそうです。

ヤカンはともかく、こういったものまで綺麗なままというのもどこか奇妙ですけれど……なにか特別な処理をしていたり、あるいはこの容器が特別なのでしょうか？

「イエイヌちゃん、どうぞ」

わたしは砂糖の容器と、スプーンを彼女に渡します。彼女は受け取るや否や、砂糖を数杯ほどハーブティーに入れ、軽く混ぜます。その後、こくりとひと口含み、ほうとひと息。

「美味しいですう……」

彼女は幸せそうに言葉を漏らします。

「イエイヌちゃんは、甘党なんですねえ」

わたしの言葉に彼女は首をかしげます。

「あまとう……？」

「甘いのが好きな方達のことですよ」

ほんほんと納得した彼女は、わたしに問いかけます。

「じゃあ……ともえちゃんは……にがとうですわね！」

なんだか聞き慣れないような……。それに、苦いモノが好きという訳でもありませんけれど……。

「その言葉があるなら、もしかしたらそうかもしれないですね」

思わず溢れた笑みに、イエイヌちゃんは笑い返します。ああ、先程までの不思議な、奇妙な、重い空気はどこへやら。お茶の時間というのはどれほど偉大なんでしょうね。

「あつー。ともえちゃん！」

「どうしました？」

イエイヌちゃんは窓の外を指差して楽しげに言います。

「雨、止みましたね！」

灰色の綿を敷き詰めた様な曇り空は変わり有りません。けれど、雨脚は確かになくなっていました。

「お茶を飲み終わったら……お散歩します？」

「はい！」

イエイヌちゃんは心底嬉しそうに、心底楽しそうに笑顔で答えます。

「じゃあ……また降っても困りますから、あんまり遠くまでは——」

わたし達はお茶菓子代わりにこれからの散歩について話を交わします。時間のかかるような話題では無いですけど、話はわたし達のお茶が無くなるまでの間、あっちへ行ったりこっちへ行ったり……。

気づけばお互いのコップは空になっていました。

「じゃあ、行きましようか」

わたしは椅子から立ち上がり、コップをふたつ持ち、流し台へと片付けます。

「ありがとうございます、ともえちゃん！」

何の気なしに彼女の分も片付けたのですけれど、感謝されるというのは中々嬉しいもの。

「いえいえ、どういたしまして」

わたし達は手をつないで、玄関をくぐります。

常ならば高い空に心をときめかせますけれど、今はあいにくの曇天。再び雨が降り始めそうでさえあります。憂鬱な空模様ですけれど、心のどこかでは「空はこんなにも低くなるのか」という奇妙な感慨を抱いていました。「帰ったら、この景色を描いてみよう」。わたしは心のなかで呟きます。と、いうのも先程のイエイヌちゃんの言葉が、どこか頭に残っているから。

「やったこと無いこと、やってみませんとね」

イエイヌちゃんはきよとした顔でわたしを見返します。

「……う？ よくわからないですけど……頑張ってくださいね、ともえちゃん！」

「ええ、がんばります！……実はですね——」

確か、画集には曇り空の絵があつた筈。それが参考になるでしょうか？ 上手く行かなくても、イエイヌちゃんの笑顔が見られましたから、それで良い……とちよつとだけ思います。

わたし達は前に向き直り、再び、歩みを進めました。

今日はそんな一日でした。

ハクトウワシさんが呆れた様子で新しくやって来たフレンズさんを中に促します。

「はあ……まあ良いわ……。ええつと、あなた達はここで待っていてちょうだい」

中に入ってきたフレンズさんはわたし達にぺこりと会釈をして、少し離れたところに腰掛けました。イエイヌちゃんはつい先程までと同じく、わたしに顔を押し付けるような姿勢でしたが、新しく入ってきたフレンズさん達の為もあってか、流石に姿勢を改めました。

片方の子は頭から長い角を生やしていて、茶色が基調の長い髪の毛に顔の輪郭をなぞるように二房の白色の髪、ぴよこんと頭から小さく尖ったお耳が覗いています。表情はと言えば緊張のためか、きりりとしています。そんな面持ちに彼女の吊り目気味の黒い瞳が加わり、真面目そうな印象を与えます。髪の色と同じ茶色のジャケツトとその下にはワイシャツの様な服の下には、白の縁取りのある紺色の短いスカート、また、茶色のストッキングを履いており、靴は茶色のローファーです。どことなく、遠目に見たことしか無いのですけれど、プロングホーンさんと似たような印象です。

もう片方の子はと言えば、短めの角が生えていて、うっすらと白色が混じったような茶色の髪の毛。短めの髪型ですけれど、ちらりと覗く後ろ髪はまとめられて居るのにもつきりとしていますし、白味がかった前髪は軽く捻ったような癖がついています。黒い瞳はまるっこく、彼女はあまり緊張していないのでしょう、楽しいな空気を湛えています。白色の半袖のワイシャツと、茶色のブレザー、首元には赤色のリボン。また、茶色のホットパンツを履いていて、足元は茶色のスニーカーと同じ色合いのハイソックス。やはり、というべきでしょうか、どこかプロングホーンさんに印象が似ている気がします。ただ、彼女のほうがずっと人懐っこいような、そんな雰囲気です。

「次のしあいが終わったら……そうね、ジャパリまんを持ってくるわ。それまで、ゆっくりしていてちょうだいな」

彼女はわたし達全員に聞かせるようにそう言って、テントから離れていきました。

「……にやつ？ ジャパリまん……？」

イエネコさんが眠たげな顔をあげ、周囲をきよろきよろと見回しましたが……単語が出たに過ぎないと分かったのか、残念だと言わんばかりに「ふすー」と鼻を鳴らして再び眠り始めてしまいました。わたしやイエイヌちゃんだけでなく、先程中に促されたフレンズさん達も小さく笑い声を漏らします。

おかげさまで……と言つてよいのかはわかりませんが、どこかテントの中の空気が和らいだ様に思われます。わたしはそっと席を立ち、おふたりに近寄ります。

「わたしはともえです。こちらはイエイヌちゃん。よろしくおねがいします」

自分からの自己紹介つて、なんだか緊張しちゃいますよね。イエイヌちゃんは先程までわたしにくっついていたので見られた為か、少し恥ずかしげにしましたが、ペこりと会釈をします。それを受けて、短い角のフレンズさんが立ち上がりました。

「こんにちわっ。あたしはサイガナー。こっちは——」

「私はスプリングボック。リボックでいいよ」

セリフを取られたことに膨れた様子の子のサイガさんでしたが、それを感じせず、リボックさんは続けます。

「ともえとイエイヌね……よろしく」

そう言つて彼女は手を差し出します。それに応じる形でわたしはリボックさんと握手をします。と、それを見たサイガさんが——

「あつ、先を越されたな……。あたしも、よろしくな」

挨拶とか握手とかつて……そういうものでしょうか……？ 疑問はさておき、わたしとイエイヌちゃんは順番に握手を交わします。

「これでおっけーな！」

元気な子です……とは言え、テントの中には緩やかで穏やかな空気が流れ始めます。

「そういえば……キミ達はどうして『狩りごっこ』に参加したんだい

？」

「……………？ なにかあるんですか？」

イエイヌちゃんが聞き返します。確かにそのとおりです。参加したいから参加するという以上の理由があるのででしょうか？

「ホントかどうかは知らないけどね……………ゆーしょーけーひんとかいうのがあるらしいんだ」

リボックさんは少し訝しげな表情をして言いました。

「でなーそれがトクベツなジャパリまんだとかジャパリまん一ヶ月分だとか、そんな噂なんだなー」

瞳をキラキラさせながらサイガさんが言います。真偽はさておき、そんな噂があるなら、参加者の多さにも領けますね。

「なるほど……………わたし達は特に考えてなかったですね……………ゴリラさんとお話した時も、特に何も言われなかったですし……………」

「ですねえ、他に参加できそうなしゅもくがなかったのもありますけれど、面白そうでしたから……………」

わたし達の言葉を聞いて「ふむん」と頷くおふたり。と、いきなり後から声をかけられます。

「わたし達も噂を聞いて参加したんです。ふわあ……………ゴリラさんのお話、本当ですか……………？」

声の主はリオさんでした。

彼女はいつの間にかわたし達の後に立っていたようです。眠気から抜け出ようとしているかのように伸びをしてから椅子にちょこんと腰掛けます。

「ええ、アルマーさんとセンさんから何も……………」

わたしの言葉にイエイヌちゃんも同意しましたが……………どうにも皆さんは納得の行かない様子。

「んー……………確かアルマーからそんな噂を聞いたような……………？ サイガは誰から聞いたの？」

「あたしは……………誰だったかなー……………噂でもちきりだったときもあったからな、忘れたな」

「わたしも……………いつの間にか噂だけ広まってた……………のかなあ」

噂話って怖いですねえ……。

皆して出処を気にしていないのも不思議ですけど、「楽しそうならやってみる」というような信条の子が多いフレンズさん達らしいというかなんというか。それに海の方ではそんな話も聞きませんでしたし……興味や関心がそれぞれはつきりしているということなのでしょう。

「でも本当だったらワクワクしちゃいますねえ……ね、ともえちゃん」
イエイ又さんもいつの間にか期待に満ちた顔つきに……現金な方です……。

「ま、まあ……そうですねえ……トクベツって言われると、気になりますし……ハクトウワシさんが来たら、確認してみます？」

一同頷き、なぜかごくりと唾を飲み込む音が聞こえた気がします。
……なんでしょう……？ 『狩りごっこ』のときよりもずっと緊張感があるような気が……。この場を突如包んだ緊張感から離れているのは、わたしと、寝たままのイエネコさんだけ。

『食』という行為が彼女たちの中では結構な興味を持っていたり、優先される行為である……ということが知れただけでも……儲けもの……なんですかねえ……？

それでも、緊張感は暫くすれば緩まり、お互いに自己紹介も兼ねた身の上話や世間話なんかを始めることになりました。わたし達の旅の話は、どうやら彼女達にとっても結構興味を引くものだったようです。リボツクさんは「私も旅でもしてみようかなあ」というような言葉を口にしてみたり、ゴリラさんが言っていたハーブティーの話にリオさんがわくわくした顔で詳細をせがんでみたり……。と、不意にサイガさんが口を開きます。

「でも、よくゴリラと話が出るなー……」

気づかぬ内に起きていたイエネコさんも加わって、わたしとイエイ又ちゃんはうんうん頷かれます。

「そ、そうなんですか……？ てつきり怖い見た目だけ優しいって方かと……」

「いや、それはわかるのよ？ ただ、なんて言ったら良いのかしら……」

いつも真剣な顔だし……話しかけにくいのよ」

多分、ゴリラさん、そういう顔つて話だと思っんですけれど……ゴリラさんに失礼だと思い、それは口にしませんでした。

「ねー。おせつきよーされそうだしねー」

イエネコさんも同意するように腕を組んで頷きます。

「そもそもどこに行ったら会えるのかも知らないな……」

「それは……ちよつとマズインじゃないですか……？　困りませんか？」

リオさんの言葉に「ぜんぜんなー」と呑気そうに答えるサイガさん。そう言えば……。

「あの、リオさん。ゴリラさんって普段どこにいらっしやるんですか？」

「えーつとね……あつちの方の林の山の方……でしたっけ？」

サイガさんはにやりと笑みを浮かべ、「リオもわかってないのなー」と楽しげにリオさんを茶化します。リオさんは何か言い返していたようですけれど、それを無視するような形で、リボックさんがわたしに言いました。

「リオの言う通りね。林と森を抜けて、その辺りだったはずよ。……まあ、私も行ったことはないのだけど」

リボックさんの言葉を聞いて「ほらねー」と何故かイエネコさんが誇らしげに胸を張ります。

「なんでイエネコちゃんなんですかあ……」

楽しげにイエイヌちゃんが言いました。それを受けて、イエネコさんはけらけらと笑い、それに釣られてリオさんも笑い出します。笑いの波は、わたしやイエイヌちゃん、リボックさんにサイガさん、皆を包んで、一層和やかな空気に――

「おまたせー。ジャパリまん持ってきたわよー……お？」

ほうと息をついてハクトウワシさんがテントの入り口をくぐります。

いつの間にか試合が終わっていたようです。その瞬間に、ジャパリまんという言葉もあつてか、先程の会話が思い出されます。（わたし

とイエネコさん以外の)緊張、再来……というワケです。

「な、なによ……? ど、どうかしたの……?」

一瞬で空気を察したハクトウワシさんは、部屋の中をぐるりと見回します。わたしとイエネコさん以外の皆さんは、じいっとハクトウワシさんを見つめ、時折、何かを牽制するかのよう(もしかしたら『あなたが聞きなさいよ!』ということかもしれない……)お互いに目配せをしあって居ます。噂が本当かどうかはともかく、なんに当たってジャパリまんは逃げないでしょうに……。

「と、ともえ……さん? こ、これは……?」

呆れたような、困ったような、そんな笑顔と声が漏れていたのでしょう。ハクトウワシさんはわたしに尋ねました。

「ええつと……食欲の……とりこ……?」

わたしが言葉を口にするよりも早く、雰囲気についての間にか飲まれきっていたイエネコちゃんが絶妙な言葉を言い放ちます。当たらずとも遠からず……というか、ほぼ正解じゃないですか。本当に寝てましたか? あなた……。

「どういうことなのよおー!」

ますます困惑の色を強くするハクトウワシさんに、わたしは応えま

す。
『狩りごっこ』の優勝賞品でジャパリまんがもらえるって噂がですね

わたしはハクトウワシさんに噂の概要を伝えました。すると、ハクトウワシさんはそわそわしながら口を開きます。

「と、とりあえず……座っても……?」

わたしは「どうぞ」と応じ、彼女の脇に椅子を動かします。椅子に座った彼女は「どうも」と言って、言葉を続けます。

「……はつきり言うけど、嘘よ、嘘。そんな話は聞いて無いわ。誰かがお昼にジャパリまんが配られるって言うのと間違えたんじゃないかしら?」

一同がっかりした様子……どなたかのため息交じりの吐息まで聞こえてきます。

「そうですかあ……」

「残念です……」

「……まあ、やるからには最後まで……でも……そうねえ……」

この中でも割合に真面目そうな印象のある（ありますよね……？）、イエイヌちゃん、リオさん、リボックさんの落胆の様子を見るに、余程の期待を寄せていたのでしょうね……サイガさんに至ってはしやがみこんで震えている位。そんなサイガさんの背中をそつと撫でるイエネコさん。

「はあ、やれやれね……聞いても良いかしら？」

どこか見かねた様子で、軽いため息をついてハクトウワシさんが尋ねます。

「あなた達だけじゃなくて……皆その噂を信じてるの？」

その言葉に頷くのはわたし以外の皆さん。少しだけ遅れてイエネコちゃんも。

「一応、ゴリラさんに聞いてみるわ。用意できないか聞いてみるわ」

その言葉に皆さんは俄に活気づきます。

「あなた達の為ってワケじゃなくてね。そっちの方が楽しそうじゃない？ 張り合いがあるってものよ。もていべいしよんの問題ってヤツね……」

「ホントな!？」

一番落ち込んでいたサイガさんが勢いよく顔をあげ、ハクトウワシさんにきらきらとした瞳を向けます。

「ま、まあ、あんまり期待しないでちようだい？ 実現できるかはわからないもの」

あまり期待出来ないと言いましたが、それでも、何らかの報酬があるかもしれないという事実はそれだけでやる気が出てくるものです。良かったですね、皆さん。わたしだって、まあ、可能性があるととなればそれはそれで楽しみです。むろん、わたし達が優勝出来ると確信しているワケでも自信が満ち満ちているワケでもなく、むしろ皆さんの士気が高まり、より手強くなってしまったかもしれない少し怖いくらいなのですけど……。

「それに……ホントかウソかわからない噂を野放しにしてたこちらにも否があるわ。それにカタをつける。それだけよ」

なんとも真面目な方ですこと……。

妙にきりりとした表情なのも相まって、説得力があります。事実となるかどうかは、ゴリラさん次第ですけど、ハクトウワシさんなりに動いてくれるということで、ジャパリまんの問題は一件落着……と思っただのですが、そう言えば今までとなにかが違います。

「……そう言えば、前の勝負に勝ったフレンズさんってどうしたんですか？」

わたしの質問に、ハクトウワシさんはまたまた呆れたようなため息をつきます。

「びっくりさせてやるって言って別のところに行ってるわよ」

んー……？ ハクトウワシさんはわたし達にジャパリまんの入ったバスケットを手渡し、ぼやきます。

「はあ、あの子のさぶらひらず好きはどうかならないかしら……？好きなだけならまだ良いけれど、結構バレるというか読めちゃうのよねえ……」

彼女も自分の分のジャパリまんをもぐもぐと食べ始め、それを見て釣られる様に皆、ジャパリまんをパクパクとし始めます。

「……あ、私、なんかわかつちやいました……」

イエイヌちゃんは何かに気づいたようです。

「んっく……確かに、考えてみるとわかりやすいですよねえ」

彼女はくすくすと笑い声を漏らしながら、ハクトウワシさんに言葉をかけます。

「あら……？ 知り合い？ というか……」

改めて周囲を見ると、リボックさんとサイガさんも何やら理解した様子。

「そうよねえ……そりや隠す意味無いわよねえ……まあ、大丈夫よ。あの子達も他の子の試合の様子は見てないから、そこは平等よ？ 誰とぶつかるかも知らないはず。なんだか確信めたこと言ってたけど……」

イエイヌちゃんの知り合いで、この辺りの子達の知り合いで、サブライズめいた事が好きなフレンズさん……？

「あー……なるほど……」

彼女はうっかり過ぎるんですよ……あんな思わせぶりなこと言っておいて、今の今まで何があるワケでも無く……。ことココに及んでこれなんですよ。

「ともえちゃんも気づきました？ コー——」

「やめときなさい。一応、アレでもバレてないと思ってるんだから……それに、気づいてなさそうな子も居るみたいだし」

ハクトウワシさんはちらりとイエネコさん、リオさんの方を一瞥します。彼女たちとは言えば、我関せずという様子でジャパリまんをもつくもつくと頬張っていました。

「あおう、次の試合まではどれくらいかかるんですか？」

リオさんがこくりと咀嚼するジャパリまんを飲み込んで、ハクトウワシさんに質問します。話題があっちゃこっちゃという具合ですけど、彼女の疑問は当然のものでしょうか。わたし達も黙って彼女たちのやり取りに聞き入ります。

「んー、そんなに長くないわよ。食事が終わったら、一旦あっちに戻るけど……次に来た時かしらね。ゆっくり待っててちょうだい」

リオさんは「わかりました」とひと言、そして食事に戻ります。『狩りごっこ』の熱気や、先程の緊張感なんかどこへやら。不思議な位穏やかなお昼休みです。休息と捉えても良いのでしょうか、あるいは最後の作戦を詰める時間と捉えても良いのかもしれませんが。無理してあれこれするよりも、後は最早やることをやるだけ……少し位はのんびりしましょうかね。

食事を終えたハクトウワシさんは「よっし」と呟き、立ち上がりま

す。

「ゴリラさんと話をしてくるわ」

わたし達は皆、口々にハクトウワシさんにお礼の言葉を告げます。「これを言うのもヘンだけど……頑張りなさいよ？ 用意出来ても、勝たなきゃ意味ないんだから」

彼女の言葉に、わたしはつくすりとしてしまいます。

「あはは……がんばります！　ね、イエイヌちゃ……ん……？」

イエイヌちゃんとは言えば、今の今まで重要なことを忘れていたというような表情。他の方々も同じように緊張を取り戻したように真剣な表情になります。わたしが周囲の空気に気圧され始めるとほとんど同時に、ハクトウワシさんは「ばーあい」と気楽そうに手を軽く挙げて去っていきました。

結局、場に訪れた空気は変わらず、わたし達はめいめいにグループごとに椅子に腰掛け、じいつと次の試合を待つこととなりました。時折、確認のようにイエイヌちゃんと言葉をひっそりと交わしたりしましたし、他の子達も同じような具合でひそひそと話し合ったりなど……先程までの雰囲気とは変わりなく……そのまま（体感ですけれど）三十分ほどの時間が経過して、再びハクトウワシさんが訪れました。

「やつほー、喜んでいいわよー！」

につこり笑顔な上、妙に上機嫌な彼女の様子に、わたし達は俄に色めき立ちます。

「景品、用意するらしいわよ、良かったわね！」

リボックさんはぐつとガッツポーズのような仕草を小さくし、相方であるサイガさんは両手を掲げて喜びの意を示します。イエネコさんとリオさんはお互いに黄色い声で喜びの言葉を互いに交わし、イエイヌちゃんはわたしと繋いだ手に力を込めます。

「つと、それはそれとして……次の試合ね。イエネコ、イリオモテヤマネコのペアとイエイヌ、ともえのペアよ。着いてきてちょうだい」
わたし達もイエネコさん、リオさんも揃って返事をし、立ち上がります。

「負けないからねー」

「ジャパリまんの為……ジャパリまんの為……」

イエネコさんは楽しそうに手をひらひらさせて、リオさんは自分を奮い立たせるようにつぶやいて、わたし達に先んじてテントを出ていきます。

「行きましようか、イエイヌちゃん」

「はいっ！　ともえちゃん！」

わたし達も、彼女達に続いて行きます。背後からはリボックさん、サイガさんから「みんながんばれよー」という言葉がかけられます。わたし達は、小さく振り向いて、微笑みながら頷き、感謝の意を伝えて、そのまま外へ――。

会場に入ったわたしは周囲を見渡します。たくさん楽しげなフレンズさん達と、ざわついたような、歓声のような、おたけびのような、わいわいがやがやという地響きにも似た音とに、わたし達は迎えられる。最初の時と比べると、心に幾らか余裕が生まれたのでしょうか？　だから周囲を見渡すことが出来たのかもしれない。

空は変わらず高く青く透き通り、白くちぎれて漂う雲はゆつたりと当て所無いように、けれどまっすぐと進んでいきます。けれど、そんな穏やかな空とは裏腹に、早鐘を打つように鳴り響くのは、わたしの鼓動。わたしを取り囲む光景を眼に入れてしまい、一層の緊張をしてみましたが……

「がんばってねえーともえちゃんー！」

不意に聞こえる、聞き覚えのある声。ドードーさんでした。彼女の隣には、ロバさんも……。彼女たちに手を振り返すと、それに気づいたのでしょう、彼女たちもわたし達に両手を大きく降ってぶんぶんと返してくれました。応援してくれる方が居る。そののれほど心強いことか。わたしは、きつと今ここに立たねば気づかなかったでしょう。

わたしは前に向き直り、歩を進め……と、不意に遠くにゴリラさんの姿が、それもドードーさんとロバさんの背後に……って、チーターさんとプログラミングホーンさんじゃないですか。そのおふたりにゴリラさんはそつと耳打ちをします。気にはなりますけれど、何をしているのかを確認しようとするよりも早く、わたし達は会場の真ん中へ。

「それじゃ、挨拶ー！」

ハクトウワシさんの指示に従い、わたし達はお互いにぺこりとお辞

儀をし、握手を交わします。自己紹介はお互い済んでいましたから、簡潔に……。

「じゃあ……お互いに離れてちょうだい」

試合の開始が、ほんの目の前にある。そう感じた瞬間、自分でも奇妙なくらい意識は集中していききました。

頭が真っ白になってしまうのでは無く、『何』を『どうする』のかを冷静に、客観的に考える、そんな意識が再び生まれていきます。姿勢と呼吸を整え、ひとつの瞬間を、わたしは待ちます。

「イエイヌ、ともえのペアから『攻め』よ。それでは、開始！」

甲高い笛の音がひとつ、鳴りました。

打ち合わせの通り、開始の合図が鳴るとまっすぐにイエイヌちゃんが駆け出します。

わたしは早足で前へ進みながらイエネコさん・リオさんの様子を見ています。彼女たちは二方向に別れて会場の外側方向へ駆け出していました。イエネコさんが左側、リオさんが右側……さて、どちらから……イエイヌちゃんの方をちらりと見ると、彼女は中腰で駆け出しやすい姿勢をしたまま立ち止まり、イエネコさんの方へと視線が向いていました。

ふむ……それが良いでしょう。わたしの考えですが、サバンナの景色に溶け込み、姿を見失いやすそうなのはイエネコさんの方に思われます。であれば先にイエネコさんから捕まえるのが適切……なのではないでしょうか？

『左』とわたしは指示を出し、イエイヌちゃんに動いてもらいます。彼女がこくりと頷くのを確認し、わたしはイエイヌちゃんから少し離れた距離を取りながらイエネコさんの方向へ歩みを進めます。一瞬でしたが、イエネコさんの耳がぴくりと動いたのを、わたしは見逃すことがなかったのは幸運だったと言えます。

リオさんの方向を見ると、彼女はこちらを伺うように一定の距離を保ったまま、ゆっくりと動いています。方向としてはわたしの後の方へとゆっくり、ゆっくり……。「私は狙われていない」からと言って油断をしないような、慎重な足取りでした。

わたしはわたしで、彼女の位置をしつかりと頭に入れておかないといけません。今後の行動のためにも、そして、『作戦』が見抜かれるかどうかを確認するためにも……。彼女たちはネコ系のフレンズ。つまり音が……指示が聞こえている筈なのです。でしたらなるべく合図を出さず、如何に上手に動くか……それが重要です。イエネコさんは笛の音にぴくりと反応を示していました……何か気づいているかもしれない。少なくとも今回の『攻め』の間だけでも看破されないよう願います。

イエイヌちゃんはイエネコさんの右側へと回り込むように走りま
す。背後の方向にゆつくりと摺り足をしながらこちらを伺っていた
イエネコさんですが、イエイヌちゃんが彼女の方に走り出したのを受
けて、イエネコさんはぴゅんと素早く駆け出します。イエネコさん
は、イエイヌちゃんとすれ違うようにして、イエイヌちゃんから距離
を取りました。

わたしはふたりの動きを移動しながら見つめ続けます。イエネコ
さんはゆつくりと後退しながら距離を調整したり姿勢を直したりと
いう具合に細かな調整をしていました。そしてイエイヌちゃんとの
距離を十分に確保すると、再びこちらの様子を伺うように立ち止まり
ます。

少しペースを上げて移動しながら、わたしは考えます。どうやら、
イエネコさんはわたしとイエイヌちゃんに挟まれないようにしてい
る様です。でしたら……。

わたしは『右』と指示を出します。いささか大雑把な指示ですが、わ
たしとイエイヌちゃんの間で決められたルールの内のひとつ。『ひと
りのレンズに付いたら、方向の指示はそこから攻める』というも
の為に混乱はあまり無いはずです。さて、踏ん張りどころです……
！ 思いついた作戦の成功は、わたしの体力にかかっているのですか
ら、頑張らないと……！

わたしの指示を受けたイエイヌちゃんは再びイエネコさんの右側
方向に駆け出します。わたしは、イエネコさんがイエイヌちゃんとす
れ違うように逃げないようにするために、一方向に全力で走り出しま
す。それはイエイヌちゃんの背後方向。逃げる方向を塞ぐことでイ
エネコさんの取ることの出来る選択肢を潰す。それが作戦のために
必要なのです。

わたしが走っている間も、イエイヌちゃんとイエネコさんの追いか
けっこは小刻みに進んでいきました。会場の端の方へと進んでいく
イエイヌちゃんとイエネコさん。偶然かどうかはわかりませんが、彼
女達の動きはわたしの狙い通りのものでした。

わたしの狙い。それは会場の角に彼女を追い詰め（わたししかイエイ

又ちゃんかはともかく捕まえるというもの。イエネコさんはわたしの動きも視界に入れていたのでしょう。わたしとイエイ又ちゃんの間に挟まらないように挟まらないようにと動いてくれました。そう、つまりは――

イエネコさんを会場の端まで追い詰めることが出来た、ということ
です。

わたしは『左』とイエイ又ちゃんに指示を出し、それと同時にわたしは再び全力でまっすぐ走り出します。壁がある訳ではありませんが、会場の端つこに居る以上、イエネコさんの動く方向は必然的に定まります。わたしとイエイ又ちゃんの間をすり抜けるしか無いのです。

会場の端つこにイエネコさんが居て、その左右両側から彼女に向かつて迫るわたしとイエイ又ちゃん。逃げ道はひとつ……。

案の定、イエネコさんは全速力でわたしとイエイ又ちゃんの間を通り抜けようとしています。こうなったらもう指示どころではありません。わたしかイエイ又ちゃんか、そのどちらかが彼女を捕まえようと、飛びかかります。

イエイ又ちゃんは大きく一步を踏み出すように、かたやわたしはと言えば「間に合え！」と言わんばかりに彼女の進行方向へと飛びかかります。わたしは無意識の内に手を伸ばして……イエネコさんの服を掴むことが出来ました……！

イエネコさんは身を擦るようにながら飛び込んで回避を狙いました。けれど、イエネコさんは、目測を誤ったのか、それともイエイ又ちゃんを警戒しすぎたのか……それは定かではありませんが、わたしのすぐ真正面に彼女の姿があり、奇跡的に彼女の服を掴むことが出来ました。

当然、わたしの動きはほとんど反射的な動き……要するに、考えもなく飛びかかり、掴んだのです。ですから、不格好にべちりと地面に転んでしまいました。けれど、そんな痛みなんかどこへやら、妙に沸き立つような心地がして、痛みはどこか遠くにあるようでした。とりあえず、顔を打ち付けなかったのは幸いです。

イエネコさんが捕まったことを確認したハクトウワシさんが笛を鳴らします。イエネコさんは上手に着地をしたようで、しゃがみ込むような姿勢をしていましたが、笛の音を聞いて、そつと立ち上がりまゝす。わたしもイエネコさんの動きに合わせて、立ち上がりまゝす。

一瞬の間を置いて、そこで聞こえたのは歓声。その音は、沸き立つわたしの心をより一層昂ぶらせるようなものでした。嬉しくて、楽しくて、何かがこみ上げてきそうな……けれど、そんな興奮もつかの間。勝負はまだ続いているのです。そのことを殊更に意識した瞬間、「次はどうするのか」という問題について、わたしの思考がめぐり始めまゝす。

「つちやー……がんばってねー！ リオーー！」

イエネコさんは残念そうにしながら、ゆつくりと競技エリア外へ。リオさんはこくりと無言で頷くような小さい動作を見せてから姿勢を低くし、生い茂る草むらの中に身を潜めます。

わたしはじつとリオさんの動向を伺いながらも、お腹に付いた砂埃を払い落とします。

「お手柄です！ ともえちゃん！ ……大丈夫ですか？」

「ふう、ふう……まだ、へーきです！ 始まったばかりですし、リオさんを捕まえませんと……」

わたしの下に小走りで近寄ってきたイエイヌちゃんに、わたしは首を振りまゝした。

まだ時間には余裕があるかもしれませんが、詳細な残り時間は判然としません。ここでおふたりを捕まえることのアドバンテージは無視できませんから、もうひと踏ん張り……何より、わたしが捕まってしまう可能性は極めて高いのですから……。

「はいっ！ 指示、お願いしますね！」

楽しげな笑顔でイエイヌちゃんは頷きます。ほとんどの労力を彼女に押し付けている作戦ですけど、まだ彼女は息を乱すことも無く、普段よりも汗ばんだ位の事も無げな表情です。

一方で、わたしはけっこう疲れてしまっていて……けれど、彼女に無理をさせるくらいなら、わたしが無理をする方がずっとずっと良い

と思うのです。わたしはイエイヌちゃんの目を見つめて、言います。
「ふーっ……ええ、任せてください！ イエイヌちゃん！」

大きく息を吐き出したわたしを見つめるイエイヌちゃんの表情は、少しばかり心配そうなものでしたけれど、それも一瞬でした。彼女が前に向き直ったのを確認したわたしは、囁くように彼女に伝えます。
「イエイヌちゃん。とりあえずまつすぐりオさんに走って……笛を鳴らすまでは任せますけど……動きは細かめをお願いします」

「はいっ！ わかりました！ ともえちゃん！」

こくりと頷いて彼女は駆け出します。わたしは小走りで彼女の後を追いかけて……と、ひとつ重大なミスをしたことに気づきました。思わず自嘲的な呟きが口から漏れ出てしまいます。

「リオさん……見失っちゃいました……」

わたしはがくりと膝から崩れ落ちたくなってしまうしましたが、ぺちぺちと頬を叩いて前に向き直ります。諦めてしまうような、そんな大きな失敗ではありません。時間だってまだあるはずですし、何よりイエイヌちゃんが居るんです。わたしひとりじゃ、ありませんもの。イエイヌちゃんを呼び戻すか悩みますが……

「イエイヌちゃんー！」

わたしの呼びかけにイエイヌちゃんは立ち止まり、小さく振り向きみます。わたしはイエイヌちゃんに手で大きくバツ印を作ります。伝わりと良いのですが……こんなことなら、見失った合図を作っておくべきでした……。

わたしの合図を受けて、イエイヌちゃんは、すんすんと鼻を動かすような仕草をして、右手を胸のあたりまで挙げました。そして、ぼうとひと吠え。わたしはじつと手の指す先を眺めます。すると、草むらに紛れるように揺れる灰色のしっぽをかろうじて見つけます。見つけるや否や、その尻尾はすぐさま草むらにしゅつと引つ込められてしまいました。大雑把でも場所さえわかれば考えようはあります。

「……はいー！」

わたしは手を振って彼女に応えます。

今、わたしは特に指示を出すつもりでは無いのですけれど、この場

で誰がどこに居るのか、それを理解することの重要性は大きいはず。このやりとりを決めていて本当に良かったですね……。

イエイ又ちゃんはわたしの返事を聞き取ると、そのまま向いている方向へと駆け出します。まもなく、追い立てられるようにリオさんが低くしていた姿勢を上げ、駆け出しました。聞く意味……あんまりなかったような……。

その後のイエイ又ちゃんとリオさん達の動きは、至ってシンプルなものでした。ただ、リオさんの動きは、内側方向へと大きめに移動しようというもののようです。イエネコさんが捕まったまでのことを含めての逃げ方なのでしょうか？

また、幸いだったのは、イエイ又ちゃんが細かく追いかける方向を変えてくれていたことです。イエイ又ちゃんの動きのおかげで、わたしが再びリオさんを見失うようなこともありませんでした。

とは言え……です。このままでは決め手に欠けます。であれば、指示を出して、流れを変えなくてはなりません。

わたしがイエイ又ちゃんまで残り数メートルというところまで近づいた時です。わたしがすぐ後に居ることを察したのか、イエイ又ちゃんがまっすぐリオさんに駆け寄ります。リオさんはイエイ又ちゃんの動きから逃れるように会場の左方向へと動きます。

「今……っ！」

わたしは内心で呟き、全速力で駆け出します。そして即座にイエイ又ちゃんへ『左』と指示を出します。イエネコさんの時——つまり外側へ外側へと誘導する動き——とは異なり、イエイ又さんにはリオさんを会場の外側から追いかけてもらう動き——つまり、内側へと誘導する動き——です。わたしの考えがもしも上手く行けば……。

リオさんはぴくりと反応し、彼女の視線はイエイ又ちゃんに注がれました。当然、彼女はイエイ又ちゃんに追われるがまま、右側……要するに会場の内側へと駆け出します。加えて、会場の外側へ追い込まれないために、後方に移動はしなはずですし、わたしの存在を確認している以上、わたしとイエイ又ちゃんの間を通るような逃げ方はしないはずです。

つまり、結果的にリオさんはまっすぐ横に移動することになるのです。

となれば……わたしは細かく方向を微調整しながらですが、まっすぐ走ります。リオさんはイエイヌちゃんから逃げることに集中した結果、わたしに気づくのが一瞬遅れました。彼女はわたしを数メートル先に認めた時、驚いた様な表情を浮かべ、急停止、そして進行方向とはまるで異なる方向へと飛び跳ねます。

が、わたしに捕まらないような無理な動きをした所為か、その速度は決して早いとは言えませんし、姿勢を崩してさえいました。そして、そこをイエイヌちゃんが見逃す筈がありません。

一瞬間にリオさんの逃げる方向、速度、姿勢……それらを確認したイエイヌちゃんは、全速力で駆け出しリオさんを冷静に追いかけます。風のようにびゅんと駆け出した彼女は、急な方向転換で姿勢を崩してしまったりリオさんを捕まえることに成功しました。

さすがのイエイヌちゃんですけれど、飛びかかるように動いたために、リオさんに覆いかぶさるような形になってしまいました……。ハクトウワシさんは、イエイヌちゃんがリオさんを捕まえたのを確認すると、笛を鳴らします。

「しゅーりょー！」

まだ二回ある『攻め』の一回目が終わったばかりですが、ふたりを捕まえられたということに安堵し、わたしは息をつきます。そのまま、放心状態のイエイヌちゃんとりオさんの下へ。

「立てますか？」

わたしは両手を差し出します。彼女たちは揃って手を取り、立ち上がりました。

「ありがとうございます、ともえちゃん」

「あ、ありがとうございます……」

彼女達はめいめいに身体の砂埃を払い落とします。

「まだ始まったばかりですからね……！」

感謝の言葉も程々に、リオさんは負けじとひとこと。そして彼女はそのままイエネコさんのところへと駆け寄ります。それを横目で見

てから、わたしはイエイ又ちゃんに言葉をかけます。

「お疲れさまです。……最後、大活躍でしたね！ さすがイエイ又ちゃんです！」

わたしが褒めると、緊張が解けたのでしよう、イエイ又ちゃんはへらつと表情を崩します。満面の笑みを浮かべる彼女の頭をわっしわっしとすると、ますます彼女は楽しげな表情になって……と、それもつかの間。イエイ又ちゃんは表情をはつとさせて、恥ずかしげに（あと、多分名残惜しげに）わたしの手から頭を離しました。

「も、もおお……ともえちゃん、他の方も居るんですから……」

いつもと逆の構図。ふとそんなことを思ってしまった。

「あはは……ごめんなさい……」

わたしは頭を掻きながら彼女に謝ります。

「嬉しいですけど、恥ずかしいですよ……」

一拍置いて、彼女は真面目な表情に戻りました。

『逃げ』ですけれど……どうしましょう？」

わたしはちらりとイエネコさん、リオさんの様子を伺います。彼女たちも作戦会議の様子。ひそひそと耳打ちをしあっています。

「……そうですね……多分前回と同じで、イエイ又ちゃんに全力で逃げてもらうことになるかと……」

ヤブノウサギさん、ユキウサギさんの時は、わたしがまっさきに狙われました。その結果、ふたりのフレンズさんを相手にとってイエイ又ちゃんは会場中を駆け回ることに……。

結果から言うなら、『あの子達よりも速い』と言っていた通り、イエイ又ちゃんは平気な様子で逃げて切っていました。ですけど、イエネコさんとリオさんは、少し相手にしたただけですが、おそらくあの子達よりも速いという点では間違いがなさそうです。

「わかりました！ 任せてくださいー！」

イエイ又ちゃんは事も無げに頷きます。

「体力とか……大丈夫ですか？ 無理はしないでくださいね？」

イエイ又ちゃんは胸を張るようにしてふふんと鼻を鳴らします。

「へーきです！ 自信ありますからー！」

そうは言いましても……。どういった作戦で彼女たちが来るのかはわかりませんが、イエイヌちゃんの負担はなるべく減らしたいところです。この後も『狩りごっこ』は続くワケですしね。

「もし、指示を出せそうだったら出します。その時は——」

「はいっ！ 『逃げる方向』ですよね！」

お互いに頷きあい……。と、ちょうど折よく準備の笛が鳴ります。

「お互い、頑張りましょうね、イエイヌちゃん」

「はいっ！」

まもなく全員が所定の位置に着き、開始の笛が鳴りました。

さて、わたし達が今度は『逃げ』る番です。

イエネコさん・リオさんの作戦は、どうやらイエイヌちゃんをふたりに追い、捕まえるというもののようでした。イエイヌちゃんは余裕有りげな雰囲気で駆け出し、彼女たちから距離を取り続けます。わたしは放置されてしまっているので、安心するような情けないような……。と、それどころではありません。イエイヌちゃんのサポートをしなくては……！

心構えを新たに、わたしはじつと彼女たちの動きを見つめます。どうやら、リオさんが小刻みに動いてイエイヌちゃんを動かしているようで、イエネコさんは姿勢を低くしてイエイヌちゃんの間を伺っています。

まだ勝負が始まって時間はあまり経っていませんが、既に一度、イエネコさんはしつぽと身体を揺らす動きをしてイエイヌちゃんに飛びかかるうとしていました。この時はイエイヌちゃんが動きを読んでいたと言わんばかりの綺麗な回避をしていましたが……。それも時間いっぱいまで続くかはわかりません。

わたしはイエネコさん、リオさんとある程度の距離を保ったままですけれど、イエイヌちゃんの方向へと数歩近づきます。イエネコさんがちらりとわたしの様子を伺いましたが、すぐにイエイヌちゃんの方へと顔を向け直します。そして、草むらの中に身を潜めるように姿勢を低くして、じりじりと歩を進めていました。

「ふんむ……」

こうして見てみるとイエイヌちゃんは会場のやや外側に居るようで、リオさんも意識的にイエイヌちゃんを外側方向へと動かしている印象があります。つまりわたし達がやっていた作戦と似通ったもの。意図的かどうかはわかりませんが、この場合、わたし達が行っていた作戦が参考になる……ような気がします。

「わたしがやられて嫌なこと……」

それを行うことがこの場を切り抜ける正解だと、ぼんやりと思いません。いえ、わたしの性格が悪いとかそういう……じゃなくて……そんなことを考えている間にもイエイヌちゃんは端へ端へと……。

わたしが出すべき指示に悩んでいると、事態が急変します。

イエネコさんが低い姿勢のまま、小走り気味にイエイヌちゃんの方へ近づきました。そして、それを確認したリオさんがだあつと駆け出します。これは、まずい。そんなぼやきが胸に浮かぶのとほとんど同時にイエネコさんがしっぽと身体を揺らし始めます。彼女なりの（……もしかするとネコ系の子たちの皆さんが、かもしれませんが）狙いの付け方でしょう。

わたしはイエイヌちゃんに『後』ととっさに指示を出します。

立ち止まることだけは避けなくてはならず、そして、イエネコさん、リオさんの動きが決まる前に全てをひっくり返さなくてはなりません。そして、イエイヌちゃんが逃げられる方向がこのままではある程度誘導されてしまうことを防ぐ……。イエネコさん、リオさんの考える方向とはまるで逆の方向へと指示を出すことが、正解のハズ。わたしの考えが正しいかはともかく、イエイヌちゃんに『後』と一瞬で判断できたことは事態の打開に繋がりをうる筈です。

イエイヌちゃんはわたしの指示を聞き取った瞬間に、少し減速し、方向転換。先程まで走っていた方向とは真反対の方向へと駆け出します。それを見たイエネコさん・リオさんはやや慌てたようで、イエネコさんはぼかんとしたように立ちすくみ、リオさんはイエイヌちゃんの急な方向転換に判断が追いつかず、そのまま走り抜けてしまいます。どうやら、わたしの指示は正解だったようです。

イエネコさん・リオさんは、急な事態に混乱しながらも、それを解

消する為でしょうか？ お互いに近づいてこつそりとお話を始めます。彼女たちの様子は、しきりにわたしとイエイヌちゃんを交互に見比べるなど、遠目に見ても焦りのようなものが見受けられました。

対策が取られてしまうかも……という内心のはらはらとは裏腹に、イエイヌちゃんは楽しそうな表情でわたしの近くへと駆け寄ります。

「ともえちゃん！　ありがとうございます！」

「いえいえ、とっさでしたけど……上手く行ってよかったです！」

イエイヌちゃんはイエネコさん・リオさんに注意を払いながらも立ち止まり、ほうとひと息つきます。

「これからもしかしたら彼女たちの作戦が変わるかもですから、また同じようには出来ないかもしれません」

イエイヌちゃんにわたしは危惧していることを伝えます。

「それに合図を出してるということのでわたしが狙われるかも……」

わたしの言葉にイエイヌちゃんは苦笑いを浮かべました。

「うーん……でしたら——」

と、イエイヌちゃんの言葉が繰り返されるよりも先にイエネコさん・リオさんのふたりが動き出します。

「あー……後で大丈夫です！」

わたしは無言で頷き、イエイヌちゃんから離れます。イエイヌちゃんは待ち受けるように中腰の姿勢になり、じつとふたりを見据えます。

イエネコさん・リオさんのおふたりの動きが少し変わりました。

リオさんが息もつかせぬ走りで追いかけて、隙を見つけてイエネコさんが飛びかかるといふ形には変わりのないものでしたけれど、イエネコさんが先程よりも大き目にイエイヌちゃんと距離を取り、且つ、わたしのことも狙うようにしきりに警戒するような仕草を取っているのです。おそらく……残り時間を意識した動きでしょう。読みが合っていればですけど……。

リオさんの速度に負けず劣らずのイエイヌちゃんは上手に逃げ回っています。多分、彼女を混乱させないためにも、わたしの『指示』はイエネコさんの動きにのみ注視して、必要に応じて出すべきでしょう。

う。

はつきりとはわかりませんが、恐らく『逃げ』の時間はまだ半分程度が経過した程度の筈。まだまだ気を引き締めて行かないと……！

笛がひとつ鳴ります。それは終了の合図を告げる音。

「しゅーりょー」

ハクトウワシさんが大きな声で告げます。わあわあと観客のフレンズさん達の声が耳に入り、先程と同じように心を昂ぶらせますけれど、どちらかと言えば、ひと段落ついたのだという安堵の思いの方が強いように思われました。

特に勝負に動きのないまま、わたし達の『逃げ』の時間は終わりました。わたしもイエイヌちゃんも捕まる事無く終了です。

緊張が解けて一段落という具合に、わたしはほっと胸を撫で下ろします。イエネコさん、リオさんの得点はゼロ。ここでの二点のリードが意味するところは重要なはずですよ。

「休憩よ。しっかり休んでちょうだいね」

わたし達にそう告げて、彼女自身も休むためにか地面に降りて、端の方のベンチへ腰掛けます。わたしはと言えば、イエイヌちゃんのもとへと近づいていきます。お互いの労をねぎらうというのもありますが……作戦会議という目的だつてあります。

「お疲れさまです、イエイヌちゃん！」

「ともえちゃんも、お疲れさまです！」

息の乱れた様子さえ無いイエイヌちゃんには、感服です。

イエイヌちゃんと一緒に、わたし達は競技場の端へと移動し、座ることになりました。わたしは所謂体育座りで、イエイヌちゃんは足を前側に投げ出すような形です。少しはしたないかもしれないませんが、「よいしょ」とふたりして声を出しながら座り、「ふう」とひと息。

そのままわたしは空を見上げます。真っ青な高い空に、まるで吸い込まれるようで、心地良ささえ覚える疲労感と、勝負の展開が上手いこと進んでいる喜びからか、会場の雑踏はどこか遠くにあるように感

じられます。そんな感慨に耽っていると、カルガモさんが空を飛んでわたし達のところへとやってきました。

「おふたりともお疲れさまです。どうぞ、飲んでください」

手にコップを持ったカルガモさんは、慎重そうにはらりと着地し、わたし達に水の入ったコップを手渡します。

「ありがとうございます、カルガモさん」

イエイヌちゃんわたしはそれぞれお礼を告げると、彼女はくすりと微笑みます。

「いえいえー。助け合い、ですよー。ゴリラさんや、皆さんのお手伝いですしね。残りも頑張ってください！ では！」

カルガモさんはそう言って頭の羽をふあざりと動かして飛び立ちましたけれど、すぐに「忘れてました、うふふ」とバツの悪そうな笑みを浮かべて口を開きます。

「そのコップはまた後で回収しますからね、壊したり捨てたりしないでくださいよ？」

壊しませんって……。わたし達は彼女に笑顔でのお辞儀で返事をします。それを見たカルガモさんは満足げに頷き、再び会場の外へ。多分あっちの方に本部があったりして、お水を用意してるんでしょうね。もしかしたらユキウサギさんもそこで休んでいるのかも知れません。

水をひと口含んだイエイヌちゃんは不意に「うーん」と悩むような声をあげます。

「どうかしましたか？」

「いえ……イエネコちゃん達の作戦ってなんだっただろうな……と思いをまして……ともえちゃんはわかりました？」

「ええつと……イエイヌちゃんを先に捕まえて、その後わたし……というのは分かったんですが……おふたりが話あつてからはわからないですよねえ……」

イエイヌちゃんはふむうと考え込むような声を出してから、言います。

「そうですかあ……ともえちゃんも……。なんだか油断できないです

よねえ……」

「ええ……本当に……違和感って言ったら良いんですかね……なんだか妙でしたし」

彼女たちの作戦ですが、結果論ですけれど、失敗だったとわたしには思われました。

というのも、『決め手』のイエネコさんの動きがわたしへの警戒のために制限されるだけでなく、彼女たちが中心として狙っていたイエイヌちゃんとの距離も以前と異なっている為です。

イエネコさんはしつぽを地面に叩きつけるような仕草をして、あつちでもないこつちでもない位置を調整して機を伺っていましたし……。ただ気になるのは、しきりにわたしの方へとちらりちらりと視線を送っていたという点。まるで何かを待っているかのような……。加えていうならば、リオさんの動きも妙でした。彼女の動き自体は彼女たちの打ち合わせ前後で大差は無いのですけれど、どこか本気でないように思えるのです。

例えば、打ち合わせ前であれば急ブレーキをして追いかけたであろうイエイヌちゃんの方向転換にも少し反応が遅れていましたし、追いかける方向にも作戦というものを感じられなかったのです。『疲労』のひと言で片付くような簡単な話でもなさそうですし、ね。だからこそ、油断ならないという点でイエイヌちゃんとは共通の見解を持てたのでしよう。

「でしたら、いつそう気をつけて行かないとですね……！　ですよね、ともえちゃん」

わたしは無言で頷きます。そうしながらもわたしの視線は反対側の隅に座るイエネコさん・リオさんのふたりに注がれていました。ふとひとつの考えが頭に過ります。しきりにわたしの事を気にしている、けれど最後の最後までわたしを捕まえようとしなかった……？

「もしかしたら……わたしの合図を待っていたのかも……」

「ど、どういふことですか……？」

イエイヌちゃんは眉間にシワを寄せて、聞き返します。

あくまで『もしかすると』の予想ですが……イエイヌちゃんにも聞いておいた方が良さそうです。わたしの想像を説明すると、ふんふんという領きをイエイヌちゃんは示します。

「なるほど……笛の音が聞こえているから内容を知ろうとしていた……と……」

「そうなんじゃないかなあという想像ですけど……どう思います？」

イエイヌちゃんはひとしきり「うーん」と考え込み、ゆっくりと口を開きます。

「ありえなくはない……とは思いますが……どうなんでしょう……イエネコちゃん、そこまで考える子でしたかねえ……？」

さり気なくひどいこと言ってます。それはさておき……

「……悩むところですけれど……次の『攻め』の様子次第で決めましょう」

わたしは水をひと口含んでから、言葉が続けます。

「途中で作戦を変えるかもしれませんが、それまでは同じように、ということ……大丈夫ですか？」

「はいっ！」

イエイヌちゃんは笑顔で頷いてくれました。わたしの考えが正しいのかどうかか、失敗するかもだとか、そういう嫌な考えを拭い去るような、そんな笑顔。その笑顔だけで、きつと、何でもやれる。してみせる。そう思えてきます。

「あ、そうです！ 先程お話ししようとした事なんですけれど……」

『逃げ』の最中に中断したお話……ですか？」

「はい！ それなんですけれど、もしもともえちゃんがふたりに狙われた時なんですけれど……私からも吠えて逃げられそうな方向をお伝えする……というのはどうでしょう？」

隠れて見えない子を見つけてもらうというのはお話していましたが……確かに彼女にも指示を出してもらったほうが動きやすそうです。

「そうですね……良いと思います。わたしもありがたいです。合図の

仕方は……わたしの笛と同じで大丈夫ですか？」

「はい！ 大丈夫です！ ……ええつと——」

彼女はそのまま、お互いの間の指示内容を確認し始めます。もう実際に試合をこなしているのです、大丈夫だとは思うのですけれど……。

「こんな感じでしたよね……？」

「ええ、大丈夫です。……もうちよつと時間があるでしょうし、考え事はいったん、休憩しましょう？」

頭を使つてあれこれ考えるのも、なんだかんだと体力を使うもの。

それはわたしの担当する領分です。ですが、イエイヌちゃんだつて走りながら、周囲を見渡しながら、『狩りごっこ』の最中に考えているはずなのです。加えて彼女はわたしなんかよりもずつと速く長く走っているのですから……。

「そう、ですね。んうっ……」

イエイヌちゃんは伸びをします。そして、でろんと身体から力を抜きます。力の抜けた身体は、木の葉が地面に舞い落ちるような自然さで、そのまま隣に座るわたしの膝の上へとことりと乗せられます。

それに気づいたわたしも彼女の頭が膝に当たらないようにと、無意識に足を伸ばします。完全に脱力しきつたようにさえ思われる彼女の身体。だからこそ強く感じる彼女の重さ。心地よい熱。ふとももの辺りをくすぐる吐息と彼女の髪の毛や耳の微細な動き。繊細な煌めきに魅了されて、わたしは思わず彼女の髪の毛を撫でてしまいました。手のひらに感じる熱と、細やかで柔らかな感触……。

数十秒程でしょうか、そんな愛おしい時間を楽しんでいたわたしの胸中に、ひとつの疑問が湧いてきます。

「ふふっ、『他の方が居る』んじゃないんですか？」

少し意地悪に過ぎるでしょうか……？ イエイヌちゃんはすつかりそれを忘れていたのでしょうか。はつとした様子で、身体を起こしませんでした。

「はうう……もつと早く言ってくださいいよお……」

そんな彼女の言葉は心底照れているような恥ずかしがっているよ

うな、そんな声。実際、わたしだって少しは恥ずかしいんですよ？

「んまー！ みんなの前ですよお？」

楽しそうな声色に、ほんの少しのいたずらっぽさを含めた声が空からかけられます。カルガモさんでした。

「そういうことはふたりつきりのときにですね……じゃなくて、おほん。コップの回収です」

わたし達はふたりして顔を赤らめながら、着地した彼女にコップを手渡します。

「あ、あはは……ありがとうございます……」

イエイヌちゃんのごまかすような言葉を受けて、カルガモさんはエプロンのポケットにコップをしまい、腕を組んで言います。

「別に良いんですよ？ けど、そうですねえ、もうちよつとくらいはひと目を……じゃなくてですね……二回目ですよ、まったく……。もうちよつとしたら次の番ですから、準備してくださいねー」

彼女はそう言って再び飛び立ちます。今度はまっすぐイエネコさん・リオさんの方向へ。

「んーっ……よし、やりますよーイエイヌちゃん！」

カルガモさんを見送ったわたしは伸びをしながら立ち上がります。

「はいっ！ 次も頑張りますよー！」

イエイヌちゃんも立ち上がり、前を見つめます。その視点の先にはイエネコさん・リオさんが居て……。

徐々にわたしの（きつとイエイヌちゃんも）感覚が研ぎ澄まされながらも、強く気持ちが高ぶって行くような心地です。

こんな経験は、旅の中ではありませんでした。当て所無いというところアルマーさんとセンさんに失礼ですけど、そんな旅でしたし、幸か不幸か、競い合うこともなかったのですから。

きつと失われた記憶の中にも、こんな感覚を抱いた経験は無いように思われます。絵を描く時とはまた違う、気持ちの昂りを感じているのですから。一瞬の間に何かが決まって、それに喜んだり、悲しんだりして……けれど、きつと、悲しい思い出にはならない。そんな経験はおそらく、今までなかったのです。あるいは、あつたとしてもこれ

ほどまでに強く感じたことが無いということかもしかかもしれませんけれど……。

会場の中心に歩きながら、研ぎ澄まされた感覚の中に、お腹の底の方から鳩尾の辺りにかけて、ずんと沈み込むような嫌な思いがあることに、わたしは気づきました。きっと、それは過去の思い出のほんのひと欠片。

先程の言葉を借りるなら、一瞬間の間に何かが決まって、それに悲しんだ思い出。決して楽しい思い出になんかならない思い出のほんのひと欠片。詳細さえ、理由さえわからず、唐突に現れた漠然とした嫌な感覚に、わたしは興奮とは違った震えを覚えました。奇妙に震える左腕を、わたしは右手で抑えます。

楽しげなかきましたしい騒ぎ声や、そよ風の音などは最早聞こえず、自分の鼓動がどれほど早くなっているのかということに痛感せられる程のけたたましい脈動のみが頭の中に鳴り響いてしまっています。

「……やだ……なんで……こんな……ときに……」
ぶるりと震える身体は、寒気などでは無いくらいの、恐ろしいもの。不吉なもの。

「——もえちゃん？　ともえちゃん？」
わたしの呟き声を聞き取ったのか、それとも雰囲気が変わったのを察したのか、それはわかりませんが、イエイ又ちゃんがわたしに尋ねました。少しだけ、意識が戻ったような、地に足の着いたような、そんな心地になります。

「大丈夫……ですか……？」
心配そうな瞳で、彼女はわたしをじつと見つめます。震えるわたしの腕に彼女は両手をそっと支えるように添えます。わたしは手をほんの少し動かして、彼女の手の甲の上へ。

「……ええ、緊張しちゃって、えへへ……」
疑るような瞳で、彼女はわたしをじつと見つめます。何故、わたしは嘘をついたんですか？　なんで？　ねえ、なんでですか？

「ほんとう、ですか……？」
「ええ」

わたしはこくりと頷きます。

「なんだか急に現実なんだなあって思ったんです。ホントにホントです。信じてください？」

きゅつと彼女の手に加わります。

痛くなんて無い、本当にほんの少しの力が加わったのに、どうしようもなく痛いのです。これからの出来事に影響を与えたくないから？ 彼女に不安をかけたくないから？ ……わたしには、わかりません。

「……」

彼女は何も言わず、数秒ほどわたしの目を見つめて、一瞬だけ瞳を伏せます。

「——いん——ね」

か細く呟かれた彼女の言葉は、会場の喧騒にかき消されます。

「……なんですか？」

わたしは聞き返したのですけれど、イエイヌちゃんは軽く首を振り、頭をあげます。微笑んでいるような、困っているような、泣いてしまいそうな、そんな不思議な笑顔。

「……いえ、何でもないです！ それにしても、ともえちゃんってば、どうしたんですか？ 急に……」

「えへへ、どうしちやっただんでしようね、わたし……」

イエイヌちゃんは前に向き直って、歩き出しました。わたしは彼女に引つ張られるような形になってしまいます。

「まだこれからじゃないですか、ね！ ともえちゃん！」

彼女の表情は見えませんが、明るく楽しげな声。

わたし達はすぐに所定の位置に着きます。彼女の隣に立って、わたしは言いました。

「そうですねえ……あと……五回くらいは続きますからねえ」

イエイヌちゃんはわたしの言葉に指を折りながら数えて、くすりと笑います。

「けっしょーせん……でしたっけ？ 行くってことですよね？」

「ええ、当然です。やるからには最後まで、です。もちろん、ジャパリ

まんも頂いちゃいましょう！」

ちようど向かい側にイエネコさん、リオさん達が並び立ちました。少しだけ彼女たちも訝しげな表情ですけれど、だからと言って、『狩りごっこ』は中止にはなりませんし、お互いに遠慮なんてしない筈です。「じゃあ、頑張らないとですわね！」

「ええ、頑張りますわー！」

お互い、どこか取り繕ったように感じる言葉でした。

「揃ったわね。ちようど時間ぴったりよ」

ハクトウワシさんが「うんうん」と頷きながら関心するように言いました。

「何を思ったのか知りませんが——」

イエイヌちゃんがわたしだけに聞こえるような小さな声で言います。諦めたような、悲しいような、そんな響きを含んでいるように、わたしは思いました。

「それじゃあ、だいにしあい——」

ハクトウワシさんは大きな声を出しながら空に飛び立ちます。

「——今は、前だけ見ましよう？」

イエイヌちゃんの言葉は小さくても、はっきりと聞こえました。わたしのことを案じながらも、今を楽しもうという彼女の言葉は……今のわたしを何よりも励ます言葉でした。

「——はじめー！」

笛の音がひとつ、鳴ります。わたしはそれに負けじと、イエイヌちゃんに返事をします。

「はいー！」

そうです、そうですとも。

過去がなんであっても、今、ここに居るのはわたし。ともえです。そのともえは、今、イエイヌという子と一緒に『狩りごっこ』に勝たなくてはならないのです。いいえ、イエイヌちゃんと一緒に、わたしは勝ちたいんです。

だから、わたしは、せめて今だけでも前を、前を——。

第二試合が始まりました。

……わたしはイエネコさんに捕まってしまった為、競技場の外から祈るようにしながらイエイヌちゃんの逃走劇を見つめていました。空から会場を見つめるハクトウワシさんが、おもむろに顔を動かして会場から視線を外します。そして――

「しゅーりょー！」

ハクトウワシさんが大きく笛を吹き、大きな声で叫びました。続けて、大きな歓声が会場中に響き渡ります。それらは、わたし・イエイヌちゃんとイエネコさん・リオさんとの『狩りごっこ』が終わったことを告げる音達です。会場から沸き起こる歓声に気を配る余裕なんて、わたしにはありません。わたしは疲労を訴える身体を無視して、イエイヌちゃんにだあつと駆け寄ります。

「お疲れさまですー！ イエイヌちゃん！ 勝てましたねー！」

言葉を口にするが早いのか、それとも彼女を抱きしめるのが早いのか……それはともかく、わたしは思わずイエイヌちゃんを抱きしめてしまいました。

「わふっ！ ……はい！ 勝てました！ ともえちゃんのおかげですっ！」

イエイヌちゃんはそのままわたしの身体に自分の身体を預けてくれました。

駆け回った為に上がった彼女の体温も、ほんの少し汗ばんだ身体も、そのどちらも勝利のために果たした彼女の労力の代償と思うと、一層嬉しく、愛おしいものに感じられます。

「あー……負けちゃった……ともえちゃんは捕まえたんだけどなあ……」

「どんまい……イエネコちゃん……イエイヌちゃん、先に狙ったほうがよかったのかも……」

リオさんは項垂れるイエネコさんの肩に手を添え、励まします。けれど、どこか彼女も残念そうな声色。

彼女たちは三戦目ではわたしを優先して捕まえるようになりまし

た。そして、案の定、わたしはすぐ捕まってしまったのですけれど……イエネコさん、リオさんがおふたり揃ってわたしを追いかけた為、イエイヌちゃんが自由になってしまいました。その所為かイエイヌちゃんはその度に体力を回復することが出来ましたし、イエネコさん、リオさんの動きを見てから行動を始めることが出来ました。

もちろん、そういった理由だけでなく、イエイヌちゃん自身が頑張ってくれたおかげですけれど……結果として、彼女は見事に二戦目、三戦目とも逃げ切ることに成功したのです。

ふあさりとハクトウワシさんが着地し、ゆっくりとわたし達に近寄って言います。

「ともえも戻ったわね。じゃあ、両チームとも、握手！」

ハクトウワシさんが促し、わたし達は皆で握手を交わします。

浮かべた顔は、みなそれぞれ違いました。わたしとイエイヌちゃんは楽しげな笑顔で、イエネコさんとリオさんは残念なような悔しがるようなそんな顔で……けれどお互いに「やれるだけのことはやった」という思いは共有されているように思われます。

握る手を離して、わたし達は向かい側に立つ相手と視線があいまます。

「お疲れさまー……悔しいけど、この後も頑張ってるねー」

「コヨーテさんのチームか、リボックさんのチームでしょ……？」

どっちも強いから、頑張ってくださいね」

イエネコさんも、リオさんも、おふたりとも悔しげな声色でしたが、先程の悔しげな表情ではなく、晴れ晴れとした表情で言いました。

「ええ……大変でしょうけど……ありがとうございます！」

「はい！ 目指すはゆうしよーですから！ 応援しててくださいね！」

わたしもイエイヌちゃんも、勝利の喜びを噛み締めつつも、相手をしてくださったおふたりに感謝の言葉を述べます。ハクトウワシさんはうんうん頷いて言いました。

「ふた組ともお疲れ様。見てて楽しかったわよ。……じゃあ、イエネコとリオはトクベツ席があるからそっちへ行っちゃようだい。案内

はフウチョウのふたりがするわ」

いつの間にやらイエネコさん、リオさんの背後に真っ黒な鳥のフレンズさんが降り立っていました。

「んにやつ……いー」

イエネコさんは飛び跳ねながら振り向き、驚きの色を示し、リオさんはぼんやりと首だけ振り向きました。フウチョウさん達（……おふたりとも別のフレンズさんですよね？）は微笑みながら軽く会釈をして「行くよ」とひとこと。イエネコさんとリオさんは彼女たちの案内に従って競技場の外へと歩いていきました。

「……で、ともえとイエイヌね。テントへ戻るわよ」

ハクトウワシさんはイエネコさんとリオさんが歩いていくのを見てから、わたし達に告げました。

「はいー」

そうして一回戦目と同じように、彼女に連れられて会場を出ます。わたしは会場を抜け、テントへ戻る道すがら、『狩りごっこ』のことを思い返します。

二戦目の『攻め』。その時、わたし達は一戦目と同じようにイエネコさん・リオさんのおふたりを捕まえようと思いました。結果的に、リオさんだけ捕まえることが出来ました。

というのも、わたしがリオさんを捕まえるために考えた作戦に一度失敗してしまいました。一戦目と同じく、外側へ追い詰めて、捕まえるという流れでしたのですが……わたしの動きよりも早くリオさんが逃げたのです。これは『作戦のミス』というよりも、考えた作戦にわたしの身体が追いつかなかったということなのかもしれませんが……。その為、態勢を整える必要が生まれました。

その後、リオさんを捕まえることは出来たのですけれど……イエネコさんを捕まえるだけの時間はありませんでした。もちろん、合計得点は三。勝利に一步近づいたとは言えるのですけれど……。

試合に大きな変化が起きたのは二戦目の『逃げ』の際のことです。前半はイエイヌちゃんを追うものでした。その時、イエイヌちゃんにわたしは一度、『指示』を出しました。その『指示』を受けて、イエイ

又ちゃんはなんとかイエネコさん達の攻撃から逃れることが出来たのですけれど……その直後に彼女たちは軽く話し合い、こくりと頷いたのです。

そして、ふたりしてわたしを追いかけはじめました。……最初の内はイエイ又ちゃんから指示を受け、逃げていたのですけれど、その指示を先回りするように彼女たち——特にリオさん——が動き、わたしはてんやわんやの様相に……。その内にいつの間にかわたしの視界から消えていたイエネコさんが飛びかかってきて、わたしは捕まってしまう。次はイエイ又ちゃん……と彼女たちが追いかけて始めようとしたところで、二戦目が終了となりました。

会場から少し離れ、最初に待機していたテントの前へとわたし達は到着しました。

「そう言えば、ともえちゃん……」

イエイ又ちゃんが尋ねます。

「はい、なんででしょう?」

振り向いて見ると、眉間にシワを寄せて悩む彼女の姿がありました。

「やっぱり合図はわかりやすいんですかね……?」

「あー……わたしも同じこと考えてました……」

というのも、三戦目の『攻め』の件が問題なのです。

三戦目の『攻め』、特に前半ではわたしが出す合図そのものを理解していたかのように、彼女たちが動いていたのです。そのため、もうひとつ、前もって決めていた作戦を実行しました。その作戦とは、指示の内容を全部ひっくり返すというもの。つまり、『右』という指示はその音の組み合わせそのままに『左』、『前』という指示はその音の組み合わせそのままに『後』というものです。

「うーん……三戦目まではバレなかったワケですし……多分大丈夫だとは思うのですけれど……」

わたしはイエイ又ちゃんにそう言ったのですけれど、自分でもなんとなく承服しかねる気がします。

「……『逆』にしたらなんとかかりましたしねえ……」

そういうイエイヌちゃんも発言の内容と内心とは異なっているようです。何故って、彼女はまだ眉間にシワを寄せたままなんですから。「決勝でどっちが当たるのかはわかりませんが……リボックさん達だったらきつと『聞こえない』とは思ってます」

わたしの言葉にイエイヌちゃんは頷きます。そして悩ましげに口を開きました。

「でも、コヨーテさん達……どなたと一緒になのは知りませんが……だと多分すぐバレちゃいますよね……」

「そうなんですよねえ……」

『逆』にするという行為は、言ってしまうえば嘘をつくという行為ですから、少しばかり気が引けてしまいます。それに……

「コヨーテさんだったら、すぐに見抜いちやいそうですし……」

わたしの言葉に、イエイヌちゃんも「うーん……」と悩ましげな声をあげます。

イエネコさんとリオさん。そのおふたりだって、『逆』になっていることはすぐに見抜きました。けれど、試合の残り時間の短さや、混乱している間に捕まえるという電撃作戦が功を奏し、対策を取られるよりも先に『攻め』を終わらせることが出来たのです。

「……あなた達そんなことしてたの？ 何かしてるのはわかったけれど……そういうこと……」

ハクトウワシさんが怪訝な顔でわたし達に振り向き、尋ねます。

「あはは……」

咎められるのでは、と思ったわたしは困った声を漏らしてしまいます。そんなわたしをかばうように、イエイヌちゃんが弁明してくれました。

「そ、そうですけど……一応、ゴリラさんには話をしてます……」

緊張した具合でしたけれど。

「あら、そうなの。別にどうこう言う気も無いけれど……合図なら、あの子達だっただけのもの。気づかなかった？」

思わず、わたしは「えっ？」と聞き返してしまいました。

「ああ、気づかなかったのね。イエネコが攻めるタイミング……で

しようね、しっぽを揺らしてたじゃない？」

「あー……そういうことですか……」

度々しっぽを揺らしていたのは、確かに確認しています。

「てつきりイエネコさんのクセなのかと……」

「身体はいつも揺らしてましたけど、しっぽは……どうでしたかね……」

イエイヌちゃんがちよつとだけくすりと言う声を漏らしてから、言いました。

「大体ネコ系の子ってあんな動きするわよ？ 見たことは無いけど、アムールトラも同じことするんじゃないかしら」

あんなにむつつりとした、強そうな方が……？ 本当でしょうか？

わたしは思わず身体を揺らしてから飛びかかるアムールトラさんを想像して小さく笑い声が漏れてしまいました。

「ともえちゃん、失礼ですよ……？」

「ええ、そうですよね……」

つて、イエイヌちゃんだつて軽い笑みを浮かべているじゃないですか……！

「まあ……聞いた話じゃ、アムールトラは『良いハンター』ではあつても、『狩りごっこ』は苦手らしいわよ？」

ハクトウワシさんも、わたし達と同じように笑みを浮かべて……つて、そっちはなんとも想像がつきません。

「そうなんですか？ てつきり最強の存在……的な方かと……」

「あくまで『聞いた話』よ？ 誰から聞いたかしら……」

ハクトウワシさんはそういつて考え込んでしまいます。歩みこそ止めてはいませんが……。

「案外、ゴリラさんだつたりして……」

なんて、イエイヌちゃんがぼやきます。真偽を確認する気は無いのですけれど、少しだけ興味が湧いてしまいますよね、こういうお話つて……

「どうだったかしらねえ……と、着いたわね。じゃあ、ここで待っていてちょうだい」

わたし達の先導をするハクトウワシさんは立ち止まり、テントを指差します。そこは一番最初に待機していたテントです。それはもう、どなたも居ない、空っぽのテント。

「中はもう誰も居ないわ。のんびりしててちょうだいね」

ハクトウワシさんはテントの入り口を開き、わたし達に中に入るよう促します。

「……今日はありがとうございました、ハクトウワシさん」

これはイエイヌちゃん。

「本当に……おかげさまで楽しかったです、一日、お疲れさまでした」
これはわたし。ふたりして言葉を告げて、その後にペこりとお辞儀をしました。わたし達の言葉にちいさく「ふふっ」と笑ってから、ハクトウワシさんは口を開きます。

「どういたしまして。ふふっ、ぼらんちあの報酬よね、きつと、これは……ありがとう、ともえ、イエイヌ」

よくわからないことをぶつぶつ言った後、一拍置いてから言葉を続けます。

「でもね、まだ早いわよ？　まだけっしよーせんだって残ってるのだし……頑張りなさい？」

わたし達は彼女の言葉に「はい！」と返事をします。その様子を見て彼女は満足そうに頷きました。

「そうそう、その意気よ。それと、もうひとつだけ……これは私の願望よ？　だから本気にしなくても良いのだけど……」

ハクトウワシさんは「うーん」と考え込むような仕草をします。

「ど、どうかしました？」

「あなた達……というよりもイエイヌね。本気出してないでしょう？」

彼女の言葉に、わたしはなんとなく納得するような感情を抱きます
「……ええつとですな、その……」

イエイヌちゃんはどこか困った様子です。

「本気出してないというよりも……その、指示や作戦のおかげです……手を抜いてるとかそういう訳じゃ……」

ああ、なるほど……。

「そういう事……。じゃあ私があればこれいうことも無かったわね、ごめんなさい……。そうね……」

再びハクトウワシさんは少しだけ考え込みました。

「イエイヌの全力に合わせることもえとか、そういうのを見てみたいって思っただけなのよ？　ごめんなさいね。ともかく、頑張つてちょうだい。時間になったらまた迎えにくるわね。じゃあ、また後で！」

彼女はそう言って飛び立ちます。わたし達はそれを見送つてテントの中へ……。

テントの中には彼女の言葉の通り、誰もおらず、また、椅子がふたつ用意されていました。太陽が頂点から降り始めたからか、少しだけ伸びた陽射しがテントのメッシュ地の窓から、ぼんやりとした淡い影を生み出しながら中に差し込んでいます。大自然の中から切り取られた、ふたりだけの空間、なんて柄にもないことを考えてしまつたりなんかして……。

「ふう……。緊張が抜けちゃつて、なんだか急に疲れちゃいました……。わたしはぼやきながら、椅子に腰掛けます。イエイヌちゃんはわたしの言葉にくすりと笑いながら、わたしの同じように椅子に腰掛け、ひとこと。」

「寝ちやいますか？」

「うーん……。どうしましょう……。考え事もしたいところですけれど……」

待機時間の残りはそこまで長くないはず。長く見積もつても三分くらい……。その間に考えられることなんてたかが知れていますけれど……。かと言ってお昼寝というのも……。

「作戦を考えたりとか……。しようかなとは思いましたが……。うーん……」

「大丈夫です。きつと……。よいしょつと」

イエイヌちゃんは微笑みながらわたしの帽子を外します。

「考えすぎちやうのも良くないです、多分ですけど……。それに、さつきのお返しもしたいんです……」

今度は上目遣いでわたしに頼み込むような仕草をしました。

「お、お返し……っ？」

はてさて、とわたしが考えようとすると、イエイヌちゃんはじれったそうに自分の太ももをぽんぽんと叩きます。

「な、なんですか……っ？」

「もう、ニブいですね……こうです、こう」

彼女は少しだけ頬を赤くして……って、きゃあ……！

「わ、私だって、たまには甘えられたいんです」

消え入りそうな声で、彼女はわたしの頭を撫でます。そうですとも、わたしの頭は今、彼女の太ももの上。所謂、膝枕をされているという事。

「さ、さっきのお返しってそういう……」

わたしは照れを隠すように納得したように彼女に言います。けれど、彼女はわたしの思いを知ってか知らずか、わたしの頭を撫で続けます。

「ええ、誰も、いませんから」

今度はどこか強がった口調。なるほど、意趣返し、という訳でしょうか。わたしは「誰もいなければ良かったのか……」とツツコミをしようかとも思いましたが、やめました。

「……ここまでされたら、仕方ないですね。ちゃんと起こしてください？」

「ええー！ 任せてくださいー！」

わたしはイエイヌちゃんの手のひらの温もりと、太ももの柔らかさに負け、瞳を閉じます。一層強く感じる、優しい手付き、柔らかな中に少しだけ高い熱を帯びた彼女の身体……。彼女の香りなんでしょう、太陽の匂いとわたしはかつて形容した記憶がありますけれど、それに混じるどこか甘い匂い。愛おしく、大切に、どこか懐かしいような……心が溶けてしまいそうな位です。

ああ、何という幸福でしょう。今日を通しての疲労がどっと押し寄せるように感じられ、わたしはするりと微睡みの中へ……重いくらいの瞼、真っ暗な視界をに差し込む柔らかな陽射し、側頭部を撫でる手

の優しき……何もかもがわたしを誘惑していました。わたしは抗いきれません。

意識がなくなる寸前に思い出されたのは、先程のやりとり。ハクトウワシさんが申し訳なさげな口調で言った言葉。それらはわたしに取って、どこか重要な意味合いを持つように感じられました。『わたしの指示のおかげで』とイエイヌちゃんは言いました。

けれど、裏を返すならば、もっと上手くやれるということなのです。『逃げ』の際はともかくとしても、『攻め』の時、イエイヌちゃんが全力で動くならば、きつと、もつと、ずつと……それが出来ないということは、わたしが彼女の足枷になっているということ……それはきつと事実で……わたしは、どうすれば――

「おやすみなさい、ともえちゃん」

意識の片隅で、彼女の声が聞こえました。本当に優しくて、心の奥底から愛情を込めているのが、わたしでさえわかる。そんな声……。

「――せーっ！　ってあら……」

「……しーっ」

緩やかに、けれど唐突に浮上する意識の中、声が聞こえます。

「もう少しで終わるから来たのだけ……お邪魔だったかしら？」

「あ、いえ……そこまででは……」

起きないと、ですね……。

「う、ん……」

「ああ、大丈夫よ、まだ余裕あるもの。寝てて平気」

優しげに諭すような囁きにわたしは従います。

「あい……ん……」

わたしは柔らかで暖かなモノにきゆうつと抱きつきます。それがなんなのかなんて気にせず、ただ、そうしたいから。

「……！」

それが少しだけ跳ねましたけれど、わたしは気にしません。

「あらあら……」

くすりと笑う声が聞こえて、再びわたしは――

「時間ですって、起きてください、ともえちゃん」

わたしはイエイヌちゃんの声で、目が覚めました。

「ふあ……おはようございます……イエイヌちゃん……」

「はい、おはようございます、えへへ……」

どこか照れたようなイエイヌちゃんの顔を見て、視線を動かすとハクトウワシさんがいました。

「さしずめすりーぴんぐびゅーていーつてところかしら？ ふふつ、会場に行く時間よ？ 平気？」

意味を捉えかねる言葉を彼女は度々発言しますけれど、流石に今回はわかりました。

「そ、それは言い過ぎじゃないですかね……」

わたしはハクトウワシさんの言葉を否定して、立ち上がり、伸びをします。姿勢が姿勢だったので、どこか身体がこわばってしまったような……。そんなわたしのマネをするように、イエイヌちゃんも立ち上がって伸びをしました。

「んーっ……ふう、私はだいじょーぶですー！」

「わたしも行けますー！」

わたし達の言葉にハクトウワシさんは頷いて、歩きはじめます。

外界の光に、わたしは目をくまらせながらも進みます。

外は相も変わらず風は無く、穏やかそのもの。遠くにははつきりとした山が見え、その稜線が空を切り取る様は、まさに偉大としか表現のしようがありません。けれど、どこかぼやけた空と大地の境界線は、薄目を開けてこれから起こるであろう戦いを見届けてくれているようで、わたしは何故だか背筋をしゃんとさせてしまいます。しばらく歩いていると、イエイヌちゃんがわたしに尋ねます。

「あの、すりーぴんぐびゅーてい……？ つてなんですか？」

「ああ、それは――」

わたしが答えようとすると、ハクトウワシさんが愉快そうに説明しました。

「おとぎ話よ。眠った綺麗な女の子にキスをする話」

なんともざつくりした要約ですけれど……大筋というか、オチとしては間違いでないような……？ いや、間違っている気がします……。

「ほ、ほええ……わたしが、ともえちゃんに……はええ……」

イエイヌちゃんはハクトウワシさんの説明で思い当たる節があったのか、それともその様子を想像したのか、果たしてわかりようも無いのですけれど……。

そのまま上の空になったイエイヌちゃんと手を繋いで歩きます。なんとも緊張感のない状況です……。まもなくフレンズさん達の背中が目に入り、いやにしんとした、不思議な空気を、わたしは感じました。

「あの、イエイヌちゃん？」

「ま、まだ早い、です……!」

ええつと、何が……？

「……？ いえ、そろそろ会場着きますよ？」

わたしの言葉にイエイヌちゃんははっとした様子になります。そしてわたしと繋いだ手をほどいて、彼女は頬をぺちぺちと叩いて気を取り直します。

「し、失礼しました……も、もう大丈夫です……」

「……さっきのハクトウワシさんのお話の所為なんでしょうけど……もし具合が悪いなら、無理しないでくださいね？」

わたしが尋ねると、イエイヌちゃんは首を振ります。

「い、いえ、体調はへーきです……ちよつとへんなこと考えちゃつて……」

「な、なんだか聞かないほうが良さそうですけど……何を考えてたんですか？」

イエイヌちゃんは顔を真っ赤にしながら先程よりも勢いよく首をぶんぶんと振ります。

「な、なんでもないです!」

「……へんなイエイヌちゃん……」

くすりと笑って、わたしは彼女の手を引きます。

「さ、行きましょう？　これで最後ですから、気を引き締めて行かないと……！」

イエイヌちゃんは「はい！」と頷いて、わたしの後に行きます。ハクトウワシさんが、振り返ってわたし達を待っていました。小走りで追いつくと、彼女は「どうしたの？」と尋ねること無く会場の中へ入ります。

怯えることも、竦むことも無く、足を前へ、前へ……会場の真ん中へ、わたし達は着きます。目の前には――

会場はあまりにも高まった期待感に包まれたために、かえってしんとしてしまっていました。空気が今までと違うことに違和感とも緊張とも言えない感覚を覚えながら、わたし達は歩みを進めます。

わたし達の前に立っていたのは、コヨーテさんとロードランナーさんでした。

「なんだ、お前達も驚いたりしないのか……」

「なんでイエイヌはあたしを見るんだよお……!」

コヨーテさんはどこかがっかりしたような顔で、ロードランナーさんは困惑を隠せない表情です。

「いや、まあ……察してました……」

「あ、でもロードランナーさんは意外です!」

わたしの申し訳無さを込めた言葉に続いてイエイヌちゃんは楽しげな笑顔で応えます。

「そ、そうか……」

がっかりした様子のコヨーテさんに咎めるような視線を送るロードランナーさん。

「だからいつも言ってるだろ? ひみつしゅぎは良いけど、タイミング間違えるなって……」

「いや、秘密は秘密だから良いんだ。そもそもだな——」

彼女達は口論を初めそうな雰囲気になり始めましたけれど、ハクトウワシさんがそれを諫めます。

「ほら、試合始めるわよ? 喧嘩してる場合じゃ無いんじゃない?」

楽しげに口元を歪ませながら、ですけれど。

「む、むう……まあ、バレてたんじゃ仕方ないか。よろしくな、ともえ、イエイヌ」

「……あたしはコヨーテがミスったんだと思うけどなあ……つと、よろしくな、ふたりとも」

わたし達は彼女達に返事をします。そして軽く握手。それを見届けたハクトウワシさんが、指示を出します。

「じゃあ、ふた組とも離れて、位置についてちょうだい。それと……ともえ、イエイヌから『攻め』よ」

指示に従ったわたし達を見て、ぼさりと空に飛び立ちます。

「それでは、けっしょーせん、かいしー!」

笛の音が、会場に響きました。

前回と同じようにイエイヌちゃんがまっすぐに駆け出します。それを見たコヨーテさんとロードランナーさんは散らばるように左右に離れます。ある意味では当然の反応。そして、ユキウサギさん、ヤブノウサギさん達との試合の繰り返しに過ぎない光景……。どうやら、イエイヌちゃんはどちらかと言えばコヨーテさんを意識している様子です。じつとコヨーテさんの方を見たまま、耳の方向だけロードランナーさんの方へと向けています。

「お。俺か、いいぜ?」

コヨーテさんはつま先をとんとんと地面に叩き付けながら、挑発するような言葉をイエイヌちゃんにかけます。

うーん……。『かけっこ』の際の話を思い出すと、単純な速さ比べだとイエイヌちゃんはコヨーテさんよりも『遅い』と言っていたような……。? それでしたら、ロードランナーさんを最初に捕まえて、残った時間でコヨーテさんに対処した方が無難な作戦に思われます。

「イエイヌちゃん!」

わたしは彼女に声をかけてから、笛を鳴らします。ロードランナーさんの方向を示した笛の音。彼女はそれを察して、こくりと頷きます。そして真っ直ぐにロードランナーさんに駆け寄ります。それを受けたロードランナーさんは少しだけびくくりした表情になって、駆け出します。

これで良い……はずです。作戦としては(ちよつと言ひ方は悪いですが)弱い方から捕まえるというもの。残った時間を使ってコヨーテさんを追い詰めて、捕まえる。それが確実な作戦、というヤツのはずです。

わたしはイエイヌちゃんとロードランナーさんの追いかけてこを見つめながら、小走りで近づきます。状況としては、会場の端の方へ

とロードランナーさんを追い立てる動き。これも前回と似ていますけれど、少しばかりわたしの位置が異なります。

というのも、イエイヌちゃんの方向を変えてもらった為に、わたしとイエイヌちゃんの位置とがズレているのです。

前回ならば、直線的な動きで『挟み込む』作戦をを狙えました。けれど、それも今から狙うと却って時間がかかってしまいそうな具合……。

わたしが考えているうちにも、イエイヌちゃんとロードランナーさんは目まぐるしく動いていきます。一応、わたしは駆け寄りながら見守っていましたけれど、おふたりとも速い速い……。ロードランナーさんは確かにイエイヌちゃんと比べると『遅い』のですけれど、それを知ってか知らずか、彼女は走る方向を目まぐるしく変えて、イエイヌちゃんを振り回しています。

気づけば、おふたりの位置は会場の端にほど近くなっていました。そして、彼女達の動きは数秒だけ固まります。

「っ……」

わたしは機を伺います。きつとイエイヌちゃんもロードランナーさんも同じ。ロードランナーさんの動きを読むことは、もしかしたら出来るのかもしれませんが。

けれど、『読む』という行為はいわば、一種のギャンブル。賭け事です。ここぞという場面にそんな『もしかしたら』の話を持ち出すのはきつとよろしくありません。じゃんけんじゃ無いんですから……。となれば……。決めました。動きが細かい彼女を捕まえる方法……。上手く行けば、良いのですけれど……。

「イエイヌちゃんー！」

大きな声で彼女に呼びかけます。不思議そうにこちらを振り向くイエイヌちゃんにわたしは駆け寄り、そつと幾つか耳打ちをします。時間にして十数秒。その間もわたしはロードランナーさんをちらりと見ていましたけれど、彼女は楽しげにびよんぴよんと跳ねながらこちらの様子を伺っていました。

「——という感じで……。行けます？」

「はい！ 任せてください！」

イエイヌちゃんの返事にわたしは頷き、『左』と指示を出します。イエイヌちゃんはしっぽを軽く揺らしてからロードランナーさんの左側に回り込むように走り出します。それを見てから、わたしはロードランナーさんの右側方向に向かって走り出します。形としては二回戦と同じような挟み込む動き。

けれどその先が異なる……筈です。

「そういう、ことかっ……！」

ロードランナーさんは、彼女の真正面方向に走り出します。わたしとイエイヌちゃんの間をすり抜けるような形です。ここでわたしはイエイヌちゃんにひとつ合図を出します。合図を受けたイエイヌちゃんはぐんと速度を上げて、飛びかかるように姿勢を低くさせます。

ロードランナーさんは合図を知らない筈ですけど、イエイヌちゃんの姿勢が変わったことが見えたのでしよう。きゅつと靴が鳴るような勢いで走る方向を変えました。

間髪入れずに、ざあつと地面をするような音が耳に入ります。それはイエイヌちゃんがロードランナーさんの動きに追いつけず、ブレーキをかける音でした。

ロードランナーさんが走るのは、わたしの左側スレスレを駆け抜けるような位置でした。わたしは彼女に向かって飛びかかります。彼女はわたしの動きを見て、ふたたび方向転換。わたしから離れるように、イエイヌちゃんに近い方向に……。わたしの行動——つまりは彼女に飛びかかるように前のめりに飛びかかったのですけれど——を回避出来たことに油断したのか、少しだけ、彼女は速度を落としました。一瞬だけ振り返ってわたしの様子を見るロードランナーさん。瞬間にわたしと彼女の目が合いました。それはわたし達の動きを確認するためだったのかもしれませんが、わたしを案じるものだったかもしれません。が、勝負の最中にその隙を見逃す筈が無いのです。なぜなら、そうなることを待っていたんですもの。

わたしは立ち上がるよりも先に、もう一度合図を出します。今度は

『本気で』捕まえにかかるためのモノです。

合図を聞いたイエイヌちゃんは先程よりもずっと速く走り出します。多分、今までで一番速いのではないのでしょうか？ あつという間にイエイヌちゃんはロードランナーさんに近づき、彼女を捕まえました。それこそ、ロードランナーさんがイエイヌちゃんに気づくのと、彼女が捕まえられるのが同じタイミングだったと思えるくらい、一瞬の出来事でした。

わたしの作戦。それは、ロードランナーさんが一瞬だけわたしの方角を見るといふ隙（と言いましても、これに限らず彼女の隙が見つかったら、ですね）が生まれたその瞬間に、合図を受けたイエイヌちゃんが全力でロードランナーさんを捕まえる。

要するに二段構えの作戦なのです。

空からひとつ、甲高い笛の音が聞こえます。

「……やられたあつ……」

前かがみになってふうと息をつくロードランナーさんは、視線を上げるとコヨーテさんに言います。

「コヨーテー！ つかまんなよー！」

少し離れたところから、コヨーテさんの「おうとも！」という声が聞こえました。わたしはそれを聞きながら、駆け寄って来てくれたイエイヌちゃんの手を取ります。

「ありがとうございます、イエイヌちゃん」

「上手く行きましたね！ 作戦！」

無邪気に楽しげな笑みを浮かべてくれると、それだけで報われるような思いです。

「ええ、おかげさまで……でも、これからですよ……！」

イエイヌちゃんは少しだけ乱れた呼吸を整えながら、じいっとコヨーテさんを見つめます。コヨーテさんは挑発するように肩をすくめ、わたし達を待っていました。

「頑張りましょう、ともえちゃん！」

「はー！」

わたし達の一回目の『攻め』も後半に差し掛かっています。時間は

さほど残っていないでしょう。ここは様子見ということ、体力を温存しても良いのかもしれませんが……。先制点を取れるのならそれほど良いことは無いのですけれど、迷いますね……。そんな迷いを内に秘めたまま、わたしとイエイヌちゃんの視線が自然と合いました。こくりと頷きあつて、動き始めます。

今は二回目の『逃げ』の時間。恐らく残り時間も後一分も無いくらい、と言ったところでしょうか。わたしは後悔と反省に苛まれながら、イエイヌちゃんがロードランナーさん、コヨーテさんから逃げる様子を見つめます。

ざっくりと説明しましょう。

一試合目の『攻め』はわたしが指示を——体温温存か攻めるか——悩み続けてしまい、動きは決まらなまま、試合は進まず時間だけが経過しました。そのため、コヨーテさんを捕まえることは出来ないまま終了。

その次、一試合目の『逃げ』。ロードランナーさん、コヨーテさんは二手にわかれてわたし達を追いかけました。わたしは早々捕まってしまうましたが、イエイヌちゃんが逃げ切ります。この時点で得点は『一対一』。

二試合目の『攻め』の時間。こちらも一試合目と同様、ロードランナーさんを捕まえることが出来ました。続くコヨーテさんの相手となった時、わたし達は攻めに徹することにしました。けれど、コヨーテさんはどうやらわたし達の合図の内容を察したようで、わたし達は逃げ切られてしまいます。

この時、ロードランナーさんを捕まえる為に時間を使いすぎてしまった為に、残った時間では『指示』を逆にしたところで追い詰める前に試合が終わってしまいました。続く二試合目の『逃げ』。これも同様です。わたしが捕まり、今はイエイヌちゃんがひとりで逃げている状況。幾分かマシだったと思いたいのは、ロードランナーさんが疲

労の為かさほど速度を出せなかったようで、わたしが捕まるまでに時間をかけさせることに成功したということでしょう。

彼女たちは二手に分かれ、わたし達を追いかけました。コヨーテさんはイエイヌちゃんに、ロードランナーさんはわたしに、それぞれ付くこととなりました。幸いなことに、ロードランナーさんの速度は（わたしの方がずっと遅いのは言うまでもありませんが）わたしに取っても幾らか余裕のある速度でした。それはきつと体力の温存を目的としているという可能性の為でしょうから……。お陰で、多少なりともイエイヌちゃんが二人に追われる時間を短く出来た……と思いたいところです。

そして今……。どうしてもわたしの頭から離れない考えがあります。わたしに彼女たちのような速さがあれば、と。それは、彼女たちの『攻め』の様子を見て痛感しました。今更かもしれないけれど、どうしても……。

彼女たちはそれぞれが互いに信頼しあって、互いに別々の標的を追いかける……。それはこの『狩りごっこ』において、確実に欠けるようにも思えますが、上手く行った時に得られるものは大きいでしょう。彼女たちの性格が楽しませたがりのエンターテイナー気質という可能性だつてありますけれど、盛り上がりますし、何よりも成功したときに得られる有利性は大きい……。やれるのならやつたほうが良い事……。

「……」

悔しくて、不甲斐なくて、ギリギリと歯ぎしりをしてしまいそうにさえなります。彼女たちはある程度の作戦や段取りが前提として共有しているのでしょうか、おふたりとも自分の好きなペースで身体を動かしているように見えます。

わたしは、わたしは……。イエイヌちゃんのお荷物なのかもしれません。彼女はそんなこと考えてもいないのですけれど、わたしにはわたしに思えて仕方がないのです。わたしにもっと出来ることがあれば、せめてもう少しくらい、足が速ければ……。悔しいのです、イエイヌちゃんが好きなように動けないことが……。悔しくて悔しくて

……。

二回戦目終了の笛の音が鳴りました。わたしはイエイ又ちゃんの
下へ駆け寄ります。

「お疲れさまです、イエイ又ちゃん」

彼女は、事も無げに、けれど身体の調子を整えるように慎重な呼吸
をしていました。わたしは、そんな彼女に努めて微笑みを浮かべるよ
うにして声をかけたのですけれど、イエイ又ちゃんは心配そうな顔を
してわたしを見つめ返します。

「ありがとうございます！　ともえちゃんもお疲れさ……大丈夫です
か……？」

「ありがとうございます……また捕まっちゃいましたから、休む時間
はありましたし、平気ですよ、平気」

幾らなんでも自嘲に過ぎたようで、イエイ又ちゃんはむっとした表
情になりました。けれど、その後、申し訳無さそうな、しゅんとした
表情になり、耳やしつぽもなんだか元気がなさそうに垂れてしまつて
……わたしはますます暗い気持ちになっていきます。

「そんなこと……」

一瞬の間。けれど数分にさえ感じられる沈黙が訪れました。

「……とりあえず、座りましょう？」

こくりと彼女は頷き、ふたりでその場に腰掛けます。

しばらくの間、わたし達は言葉も交わさずただただ座っていまし
た。耳に入ってくる会場の騒ぎ声がどこか別の世界の音のようにさ
え聞こえます。火照った身体を撫でる心地よい風でさえ、壁を隔てて
いると感じられ、どこかわたしから離れたものようでした。

わたし達が座ってからしばらくして、前回と同じようにカルガモさ
んが水を持ってきてくださいましたが、どこか重い空気を彼女は察し
たのか、多くを語らずロードランナーさん、コヨーテさんの方へと
行ってしまいました。きつと、彼女なりのそつとしておこうという心
遣いなのだと思います。

ひと口、水を含んで飲み込みます。わたしは、濡れた唇をそつと親
指で拭って、口を開きました。

「……イエイヌちゃんが何か気負う必要は、ありません。……だから、ごめんなさい」

わたしの言葉を噛みしめるように、瞬きだけして、イエイヌちゃんは言います。

「そうかもしれないですけど……」

わたしは『けど』の後が気になって何も言わず、もうひと口水を飲みます。イエイヌちゃんは迷ったような表情で、ひと息置いてから続けました。

「……ともえちゃんは、嫌、ですか？」

「何がですか？」

『狩りごっこ』……。つまらないですか？」

わたしはそつと首を振ります。

イエイヌちゃんの顔をちらりと見ると、安心したような顔をしていました。けれどそれもつかの間のこと。彼女は心配そうな顔に戻ります。

「じゃあ、その……私は何も言うこと無い、です……お誘いしたのは私ですから……辛かったり、つまらなかったり、嫌だったり……そういうふうにしてたら、謝らないとって……」

「わたしはそんな事ちつとも思っていないですよ？」

これは本当のこと。こんなことで嘘なんか、つきたくないですもの。けれど、今までに感じたことも本当。だから、抑え込むように左腕に添えた右手に力がこもってしまうのも、仕方のないこと。

全てはわたしの力足らずが原因なのですから。

「じゃあ、そんな辛い顔しないでください？ ……ね？」

イエイヌちゃんはわたしの右手を取りました。覆うように両手が重ねられ、それはとてもとても暖かくて……。

「何か悩んでるなら聞かせて欲しいって、ずつと言ってるじゃないですか。それともまた、抱え込んだじゃうんですか？」

イエイヌちゃんの表情は、心底わたしの事を心配するものでした。わたしの顔をじつと不安げに見つめて、様子を伺っています。彼女の瞳は今にも零れそうな位濡れていて、そこにうつすらとわたしの顔さ

え見て取れました。

どうしてこの子は、わたしの感情のことでこんなに辛そうにするんでしょう。そう思って、次に思うことは、先程ついた嘘の事。あの時に感じたことも、思ったことも、話して良かったはずなのに。胸が苦しくて、悲しくて、からっぽになっってしまうようなあの感情……。けれど、そのことは彼女には話せません。話すとしたら、今では無いでしょう。『おうち』に戻ってから……。不要な心配を彼女に抱えさせたく無いですから。

「……わたし、イエイヌちゃんの足を引つ張ってるんじゃないかなって思えちゃって……。その……。不甲斐なくて……」

「そんな事無いです」

真剣な顔で彼女は、わたしの目を真っ直ぐに見据えて、言いました。わたしは彼女の答えがあまりにも早くてあっけにとられてしまいました。

「ともえちゃんがいなかったらそもそも参加出来てないですし、勝ったり負けたりではらはらするのだからって楽しいです！」

「で、でも……。イエイヌちゃんは好きに動けていないんじゃない……」

彼女はうーんと小さく呟きます。

「そうかもしれないですけど……。私は、その……。ともえちゃんが色々考えてくれて、その通りに走って、上手くいったりいかなかったり……。そういうの、楽しいんです！ 全部！ ヒトの命令を聞くのって憧れでしたし……。多分ですけど、イヌのサガってヤツです！」

わたしの想像を上回る重たい言葉に思わず引きつった笑いが出てきてしまいます。

イヌ代表としては遜色ない彼女だと思いますけれど、命令を聞きたかったって……。うーん……？

「あはは……。そ、そうですか……」

あくまでわたしは『指示』を出しているのであって、そこに『命令』の意図は無いのですけれども……。それはさておき、彼女が嘘はついていないとする……。つまりはわたしが一人であれこれ悩んで勝手に思い詰めていた、と……。

「そ、そうですね……？ う、嘘とついてませんよ？」

なぜだか彼女は慌て始めます。自分の言葉が間違っていないか、不安になったのでしょうか？

「ふふっ、なんだかすつきりしました……ありがとうございます、イエエちゃん」

イエエちゃんは微笑みながら「どういたしまして」とわたしの手を撫でながら言いました。あれ？ 否定されてないことがひとつ、あるような……？

「それはそれとして、です。イエエちゃん、自由に動けてないのは否定しないんですね……？」

痛いところを突いてしまったのでしよう。彼女はどきりとしたような表情になって、否定するとも肯定するともつかない曖昧な言葉をもよもよとつぶやいていましたが……それは今のわたしに取って、最早薄暗い気持ちになるものではなく、新しい茶化しの道具を得たような、そんな心地です。

「冗談ですよ、冗談。……もうちよつとわたしの指示が上手かったりすれば良かったんでしょうけど……」

どこか引つかかるような考え。悪い意味ではなく、何かに繋がりそうで、その答えがわからない感覚。そんなものを覚えます。

「お水回収ですっ」

カルガモさんがやってきました。どうやら先程までの重い空気がなくなったのをすぐに理解したようです。

「……喧嘩でもしてたんですか？ まあ……無理に聞いたりはしませんけれど……」

彼女はわたし達から空いたコップを受け取りながら尋ねます。

「いえ……ちよつと『狩りごっこ』でわたしが悩んじゃって……言い過ぎちゃいました」

わたしはきまり悪く、帽子の位置を調整しながら苦笑いで応じます。イエエちゃんも「あはは……」と困ったような声を上げていました。

「……そうですかあ。……私からアドバイスとか無理ですけど……そ

うですnee……悩んだときはやりたいようにやってみるのも、良いかもしれませんよ?」

重なったコップをエプロンに入れながら、彼女は続けます。

「作戦だの何だの言ったって、ええ、やりたいようにやるのが一番です。サイオーガウマ……? とか言いましたっけ? ともなく、やればなんとかなるものですよ、きっと」

うんうん頷きながら彼女は言い切りました。……イントネーションと使い方がおかしい気もしますが、言いたいことはわかります。

「ふふっ……そうかもしれないですね」

わたしの微笑みを見て、イエイヌちゃんはどこかホツとしたようにふうと息をつきます。そんな彼女の様子が視界に入って、わたしの胸にも安堵の思いが訪れます。わたしとイエイヌちゃんの間の重苦しい空気は、確かになくなつた。そう思います。

そんな温かな思いの中、カルガモさんの言葉をわたしは振り返ります。塞翁が馬……は少しばかり違うと思いますが、なるようになる……。いえ、この場合、わたしが、なるようにする……?」

「では! もう少して最後ですからね、楽しみにしてますよ! 頑張ってくださいね!」

わたしが再び考え込んでいるうちに彼女は飛び立って行きました。わたしが気づいて手を振り始める頃には既に彼女は空高く、背中を見せてぱたぱたと飛んでいる最中でした。

カルガモさんを見送ると、わたしは再び視線を落とし、考え始めます。

わたしが出来ることとイエイヌちゃんの出来ることとの落とし所。そう思って今まで指示を出してきました。彼女にはわたしの考えの通りに動いてもらって、わたしが細かいところを修正したり、わたしの動きで相手を追い詰めたり……それがわたし達の『狩りごっこ』。それが間違っているかと言われると、わたしは自信を持って首を振ります。幾らわたし達の仲が良いとしても、『指示』はお互いが協力して連携した動きを取るために必要なものでした。これがとっておき。これこそがわたし達の要。だからこそ、ここまで勝ち進むことが出来

たのです。

けれど、イエイヌちゃんの出来ることにわたしの『指示』が追いついていない。少なくともわたしは身体は追いついていません。それを悟っているイエイヌちゃんは、ずっと力をセーブしているのかもしれない。それを見てみたいという思いもありますし、それを申し訳なくも思います。……見てみたい……？

ああ、わかりました。ひとつだけ案が浮かびました。けど、これって賭けなんじゃないですかね……。

「イエイヌちゃん」

「なんででしょう？」

首をかしげてこちらを見るイエイヌちゃん。わたしは彼女の全力にどれくらい追いつけるんでしょうね。

「……ひとつ、作戦を思いつきました」

「本当ですか!？」

わたしはお尻の土埃を払いながら立ち上がります。イエイヌちゃんもわたしに合わせて立ち上がりました。

「……ええつとですな——」

わたしはイエイヌちゃんにそつと耳打ちをします。彼女は最初の内は「ふんふん」と頷いていましたけれど、耳打ちが終わる頃には心配そうな表情になっていました。

「……あの、それ……ともえちゃん、大変じゃないですか……？」

わたしは首を振ります。

「最後ですから、そこは心配しないでください。それに……」

一拍置いて、言葉を続けます。

「わたしが、やってみたいんです」

わたしの顔を見て、イエイヌちゃんはどこかぽかんとした表情になって、その後、納得やら呆れやらわからないため息をつきました。「……わかりました。ですけど……無理はしないでほしいです。そこだけ、約束してください」

わたしは彼女の言葉に肯定の意を示します。けれど、彼女は心配そうな顔を崩しません。

「そ、そんなに心配ですか……?」

「はい……。絶対ともえちゃん無理しますもの……」

「ええつと……あはは……信じてください……?」

イエイヌちゃんは表情を変えないままです。

「わかりましたよお……」

不承不承ながらも……と言い出しそうな表情のイエイヌちゃんに、わたしは「ありがとうございます」と伝え、ちようどハクトウワシさんがわたし達を呼ぶ声が聞こえました。

「始まるわよー!」

遠目でよくわかりませんが、コヨーテさんとロードランナーさんも既にそこに居て、なんだかニヤニヤしているように見えます。

「ご、ごめんさい……!」

「今行きまーす!」

ふたりして小走りになりながら会場の真ん中へ向かいます。最後の最後。ちよつと賭けに出ることになりそうですけれど、もうこの際です。気にしてなんかいられません。それになによりも――

「楽しみましょうね! イエイヌちゃん!」

「はいー!」

駆け足気味で会場の真ん中へと到着します。周囲で見守るフレンドさん達は、押し黙っていました。そして、そんな彼女たちの視線のすべてをわたし達が独占しているのだという実感をひしひしと感じます。

緊張は、当然します。それは私だけじゃありません。ロードランナーさんも कोरोテさんも イエイヌちゃんも、きつと同じ。きつと、緊張して緊張して、けれど、それでも勝ちたいという思いを抱いて、これから起こる数分間に全力を尽くそうとしているのです。今までの試合がそうでなかったということでは無く、強く、そう思ったのです。「し、失礼しました……」

「ごめんなさいい……」
わたしと イエイヌちゃんの謝罪の言葉を ハクトウワシさんが「ふっ」と軽く笑います。

「大丈夫よ。そんなにきつちりする必要も無いのだし……」
ハクトウワシさんが腕を組んでわたし達をぐるりと見回します。

「これで最後。みんな悔いの残らないように、頑張るのよ」
彼女の言葉に、わたし達はそれぞれ抱える思いは違うのでしょうか、頷きました。

「よろしい。……さて、それじゃあともえ、イエイヌの『攻め』からね——」
彼女はそう言つて、飛び立ちます。

「さいしゅーしあい、開始っ！」
短く笛の音が鳴ります。その音の余韻が消えるか消えないか、それくらいの瞬間に、わあっと会場から声が上がりました。わたしの身体が、緊張と興奮とでぶるりと震えたように感じます。最後の『攻め』が始まったのです。

イエイヌちゃんがロードランナーさんめがけてまっすぐに走り出します。

これは当初の予定通りです。先程と同じく『弱い方から捕まえる』

という目的の為です。……わたしが先程思いついた内容。それは、今実行するものではありません。前提としてコヨーテさんがひとりになってから『指示』を……いいえ、イエイヌちゃんに『お願い』する。そして……。

「またっ……！」

ロードランナーさんはイエイヌちゃんから逃げるようにわたし達から向かって左側に駆け出します。置いてけぼりになったコヨーテさんはわたし達を煽り立てるように「俺じゃなくていいのかー？」なんて叫んでいます。無視です無視。

イエイヌちゃんはわたしの方をちらりと見ます。わたしはそれに答えるように『右』と指示を出します。こくりと頷いたイエイヌちゃんがロードランナーさんの右側から回り込むように動きます。それを見たロードランナーさんは――

「右から来るぞー！」

わたしの指示から一瞬遅れて、コヨーテさんが叫びます。やっぱり……！ とは言え、です。まだ慌てる必要も作戦会議も必要ありません。まだロードランナーさんを追い詰める為の選択肢が狭まったとは思えません。まだ、始まったばかりですから。

「おうー！」

ロードランナーさんはわたしの位置だけ確認して、走り出します。わたしから離れながら、イエイヌちゃんをすり抜けるような形です。わたしはコヨーテさんに恨めしげな視線だけ投げて、ロードランナーさんとイエイヌちゃんの追いかっこに近づいていきます。

イエイヌちゃんは『指示』に従う形でロードランナーさんの右側方向を維持したまま、ロードランナーさんを追いかけています。イエイヌちゃんも今日を通して動き続けたからか、『指示』が無くとも会場の端の方へと追い立てるような動きをしてくれています……中々上手く行かない様子。ロードランナーさんの細かい動きで微妙に進路をズラされてしまっています。それを修正しようにも、指示を出せば見抜かれる……となれば……。わたしは『後』と指示を出します。

指示を受けたイエイヌちゃんはロードランナーさんの距離を縮め

ながら後ろ側に回り込む動きをします。

「コヨーテえー！」

わたしが笛を口に持っていたのが見えたのか、それともイエイヌちゃんの動きが変わったのを察したのか、それはわかりませんが、ロードランナーさんはコヨーテさんに尋ねます。

「わからん！」

コヨーテさんがそういうのも当然です。『指示』を控え気味にしていたというのもありますけれど、使ってませんもの。『後』なんて。少しでもだけにやりとしちやいますね……なんて言っている場合ではなくて……。

視線を前に戻したロードランナーさんはジグザグに走りながら、会場の端から逃れる方向へ……。わたしはそれを見て、彼女の進路にぶつかるときに駆け出し……。

『アレ』やっていいぞー！」

コヨーテさんが叫びます。……『アレ』？ 彼女たちも何か秘策を……？

コヨーテさんの声に「あいよー！」と返事をしたロードランナーさんは急に進路を変え始めます。わたしとイエイヌちゃんが居ない方という点では変わりありませんが、会場の開けた方向へと逃げるのではなく、会場の端の方へと走り出したのです。

怪しい……というよりも、彼女たちの動きが露骨過ぎて警戒をしたところですが、現状では特にわたし達の動きに変更はありません。

指示が間に合わないかもしれないというのもありますけれど、何よりも秘策に怯え続けて消極的な指示を出してしまっただけは意味がありません。それくらいなら彼女たちの秘策を見てから行動をした方が、後の作戦も立てやすいというもの。

わたしは一瞬だけ立ち止まって『左』と指示を出しました。
「左だ！」

コヨーテさんがさかさずロードランナーさんに伝えます。それを気にしてか、イエイヌちゃんはわたしの方をちらちらと伺いました。が、わたしは黙って頷きます。指示を逆にしても恐らくすぐに看破さ

れるでしょうし、それならばこのまま追い詰めるほうが幾らか良いはず。わたしはロードランナーさんの方向めがけてまっすぐに駆け出しました。

数秒から十数秒ほど経過すると、もう、追いかけてこの舞台は会場
の端へと動いていました。「追い詰めた」という思いと彼女たちの『秘
策』に対しての警戒心が混ざりあった高揚感をわたしは感じていま
した。

イエイヌちゃんとなたしの進路が交差する点。そこがロードラン
ナーさんを追い詰める地点。そこめがけて真っ直ぐに走ります。
ロードランナーさんの動きに合わせて多少ズレるとはいえ、作戦とし
ては上出来……。そう信じて走るしかありません。

その瞬間が訪れました。

「……………」

ロードランナーさんは急に減速し、足を揃えて膝を軽く曲げ、ひよ
いと身体を空へ投げ出します。わたしもイエイヌちゃんも、飛びか
かるか手を伸ばすかという姿勢を取っていた為に対処が遅れました。
わたしの視線がロードランナーさんを追い、遅れて首が動きました。
彼女は宙返りをして、イエイヌちゃんの後ろに……。その後、ロード
ランナーさんは着地でバランスが崩れたのを即座に修正して、競技場
の真ん中の方へと駆け出していきました。彼女は「してやったり」な
顔で手を振ってさえいましたが、悔しいという感情なんて感じる暇な
ど無く、彼女の身軽さに称賛の思いさえ抱きました。

呆然と立ち尽くしてしまつたわたしに、イエイヌちゃんが声をかけ
ます。

「す、すごいですね…………ロードランナーさん…………」

彼女の言葉で、わたしは現実へと引き戻されました。

「ほ、ホントですね…………」

つまりはそういう秘策だったのでしよう。どうしても足の遅さの
為に標的にされてしまうロードランナーさんが、用意した逃げの手段
……。転んだり、上手くジャンプ出来なかつたり……。そういつたりス
クを犯してでも逃げなくてはならない場面でのみ使う秘策……。わ

たしは彼女の勇氣ある行動に、そして現実離れた動作に、拍手を贈りさえしそうになりました。

しかし、イエイヌちゃんは試合の事を考えていたのでしょうか、どこか不安げな顔。わたしは彼女の表情に「勝利を逃すのではないか？」という不安が込められていると感じました。そして、わたしは覚悟を決めます。

「……イエイヌちゃん。お願いしてもいいですか？」

「予定よりも早いんじゃない？」

彼女はわたしの事を心配してくれているのでしようけれど、このままでは埒が明かないですし、やりましょう。最後の最後、とっておき。

「ええ……ですけど、時間が心配です。お願いします、イエイヌちゃん」

イエイヌちゃんは「んーっ」と息を吐きながら伸びをしました。

「わかりました。……でも無理だけは、しないでください？　お願いします」

わたしが頷くと、彼女はぐっと全身に力を入れました。そして、わたしが今までに見たことも無いくらいの早さで、それこそ風にでもなったんじゃないかと思われるくらいの速度で、彼女は走り出しました。

『お願い』。

その内容は至ってシンプルです。イエイヌちゃんの負担はより大きくなりますが、彼女にとって出来ることの範疇。けれど、わたしに取っては全身全霊の力を振り絞らなければ、それこそ無理無茶無謀の類を覚悟しなくては作戦として成立しないもの。

……つまりは、イエイヌちゃんはわたしの事も、指示も、全て無視して全力で動き、わたしがそれに合わせて動く。それだけのことで。今まで武器としてきた『指示』をかなぐり捨てて、イエイヌちゃんの動きと相手のコヨーテさんの動きとを私が見て、動く。『指示』だったり、わたしの事だったり……色々な事を気にして自由に動けなかったイエイヌちゃん。それなのにあれだけ動けていたのです。

となれば、きつと、ずつと、もつと速く、確実に、まっすぐに、捕

まえられるはず……。わたしにだって、今までの試合を通して多少は場を見る力が備わったはずですし、旅を通して体力だって多少はついたはず……。それらを信じて、全力で走るだけ。

なのですが……。

「あー……」

イエイヌちゃんがあまりにも速すぎて、わたしは一瞬後悔しました。

けれど、イエイヌちゃんは走り出す直前に、本当に一瞬だけ楽しい表情になったのです。彼女の期待に応えたいですし、わたしがわたしを信じて走るといふ行為にもちよつとしたワクワクがあります。だから――

「行きますよー……！」

――わたしも、走り出しました。

わたしが追いつくよりも早く、イエイヌちゃんはロードランナーさんに追いつき、彼女を捕まえました。

「ええ……」

どこからか聞こえてきた呆れ混じりの声は、わたしか、それともロードランナーさんか……。わたしが想像していたよりもあっさりイエイヌちゃんはロードランナーさんを捕まえてしまいました。もつと早くこうしていれば……。？とも思いますけれど、それはそれ。

甲高く鳴り響いた笛の音が観客席に座るフレンズさん達の声にかき消えるよりも早く、イエイヌちゃんはコヨーテさんに視線を移し、再び駆け出します。

「はあ……はあ……速いですね、イエイヌちゃん……」

イエイヌちゃんが捕まえてから十秒ほど遅れてわたしはロードランナーさんのところへ到着します。ロードランナーさんは力が抜けたように地面にへたり込んでいました。

「……………最後だからって全力出しゃがって、アイツ……」

わたしは乾いた笑いを漏らしながら、ロードランナーさんに手を差し出します。

「さんきゅーな、ともえ」

彼女は少しだけバツが悪そうにしながらも、わたしの手を取って立ち上がり、会場の外へと歩いていきました。

「がんばれよおー！ みんなあー！」

会場から出る瞬間、彼女は大声でわたし達に言いました。わたしは無言で頷きましたが……コヨーテさんとイエイヌちゃんはとも睨み合っている様子。

わたしはそんなふたりの様子を伺います。何処へどう動くか。最早私の手から離れたイエイヌちゃんの動きに合わせてわたしは動かなくてはならないのですから……。とりあえずは彼女たちに近づくとしましょう。

じりじりと距離を取ったり方向を変えたりと小さな動きしかしていない彼女たちにはすぐに追いつくことができませんでした。

「お、ともえも来たのか」

コヨーテさんはイエイヌちゃんから視線を動かすこと無く、関心したような驚いたような言葉を発しました。イエイヌちゃんはその間もわたしに視線を向けること無くコヨーテさんをじつと見つめていました。

「てつきりイエイヌだけかと思ってたぜ？」

彼女が挑発の言葉を発すると、じりっという音と共にイエイヌちゃんがコヨーテさんに近づきました。それが合図だったかのようによコヨーテさんは駆け出します。方向としてはわたし達の向かって左側。

それを受けたイエイヌちゃんは「ふっ」と小さく、けれど強く息を吐いてコヨーテさんを追いかけて始めます。わたしもやや遅れるような形で彼女たちを追いかけます。

わたしが追いかけている間にも、彼女たちの動きは徐々に複雑になっていきます。時に彼女たちはすれ違うように交差しました。けれどそんな瞬間でさえコヨーテさんは手が届かないであろう距離をしっかりと取っていましたし、イエイヌちゃんもそれを理解しているのでしょう、無駄な動きを控えているように思われました。

ぎゅんぎゅんと動き回る彼女たちに追いつくだけで精一杯のわた

しですけれど、きつとこのままではギリ貧であるということは理解できていました。

というのも、おそらくはコヨーテさんはイエイヌちゃんよりも足の速い相手と競い慣れているのだということが見てわかったためです。それはコヨーテさんの余裕のある動きからも察せられましたけれど、ロードランナーさんから伺っていたお話（この運動会が開かれた理由のお話）を知っているからでしょう。

この状況を打破するために必要なのは、わたし……なのでしょいか……？ 全力でイエイヌちゃんとコヨーテさんに追いつきながらも機を逃さず、わたしから攻撃を加える。きつと、それが鍵……。

不意にコヨーテさんが立ち止まり、口を開きます。

「お前とこんな風に走ったこと、無かつたよなあ」

楽しげな、本当に心の奥底から楽しそうな呼びかけ。

「……ふう、そうですね！」

返事をするや否やコヨーテさんに飛びかかるイエイヌちゃん。コヨーテさんはそれをひらりと回避します。

「つと、話してる最中だぞ……？」

バランスを崩し、動きが止まったイエイヌちゃんにそう告げて、コヨーテさんは再び駆け出します。イエイヌちゃんは「くっ」と悔しげな声を出して、姿勢を取り直します。

「イエイヌちゃん！ 大丈夫ですか？」

少し離れたところからですけど、わたしが声をかけると、イエイヌちゃんは無言で頷いて、再び走り始めました。わたしがもつと速ければ、もしかしたら追い詰める算段を立てられたのかもしれませんが……それはないものねだりというもの。今は、彼女たちを追いかけて追いかけて、来るべき瞬間を待つしかありません。

再び追いかけてこの形になったコヨーテさんとイエイヌちゃん。ですが、先程までと違って、コヨーテさんとイエイヌちゃんの距離は縮まりました。コヨーテさんは『攻め』の時間の事を考えて体力を温存しているのか、それとも単に疲れたからか……それはわかりません。

わたしは全力で彼女たちを追いかけているからか、頭の中はまっしろで、胸は痛いし、お腹からはなにか込み上げて来ているようにさえ思われます。辛い、苦しい、吐きそう。

そう思いますし、今こうして走っている理由さえ、よくわからない気がしてきて……。全部イエイヌちゃんに任せてわたしは見ているだけで良いのでは無いのでしょうか？

視界がチカチカしてきて、流星に限界です。わたしは数秒だけ立ち止まりました。数回、深呼吸をして、頭の中を落ち着けます。

「見ているだけなんて、つまらない……」

口にしたのか、それとも心でそう思ったのか、それは十分に思考ができていないわたしにはわかりません。けれど、そう思っていることは、事実なのです。視線を上げると、イエイヌちゃんと一瞬だけ目が合います。やっぱり彼女はわたしの心配をしまっている……。

その瞬間を見逃さないコヨーテさんは、速度を上げます。はっとイエイヌちゃんは驚いたような表情をして、コヨーテさんの方へと走り出します。

けれど速度は『全力』では無いことが朦朧としたわたしにさえわかりました。わたしは笑い始めた膝をペしりと叩いて、笛を口にもっていき、『前』と合図します。一度ではなく、二度。「わたしのことなんか気にするな」という思いを込めて……。イエイヌちゃんに思いが伝わったのだと、わたしは思います。彼女は速度を再び上げ、コヨーテさんを追いかけてきました。

繰り返し深呼吸を行っていくうちに、段々と思考が落ち着いて来ました。

最初に浮かんだのは、残り時間のこと。もう、残り時間は殆ど無いはず……。次に思ったのは、結局あのきざつたらしいカツコつけのコヨーテさんに負けるのではないか？ という不安というか不満というか……。そんなもの。彼女のごとは嫌いじゃないですよ。けれど、なんであんなにカツコつけてるような……。自分の惨めさと悔しさを込めて、コヨーテさんの方を見ると、彼女の不思議な動きが目に入りました。

遠目ですけれど、彼女はなんだかハクトウワシさんの方をちらちらと見ているのです。コヨーテさんの視線の先、ハクトウワシさんに視線を移すと、彼女は彼女で、会場のわたし達を俯瞰しつつも、別の方に繰り返し視線を送っています。ゴリラさん達が居るであろう本部（と言うべきか悩みますが）の方でしょう……。

多分、制限時間に関するやり取りが、近いのでしようね……。ん？
なんで彼女たちは会場のご真ん中に向かって移動してるんですよう……？
確かに、逃げる為にも真ん中で動いていた方が余裕はありますが、そこに無理に移動するというのは、動きを読まれてしまいます。それにイエイヌちゃんは今までの経験上、端の方へと追い立てている筈なのですが……。なにか思いつきそうな気がします。

速さでも勝っていて、この『狩りごっこ』のことを以前から知っていて、『秘密主義』で、キザでカツコついで、盛り上げたがりのコヨーテさんが、やりそうなこと……？

「……あー……なるほどお……？」

わたし、コヨーテさんがやろうとすること、わかっちゃいました。いや、秘密主義だのキザだのカツコついでと言いましたけど……盛り上げようっていう気持ちはわかるんです、尊敬だっています。

けど、ねえ……油断ですよ、『それ』は流石に……。『攻め』るこちら側からしたら、格好の間隙なのでは……？
けれど、わたしの想像があっているかはわかりませんし、その瞬間まで身体が保ってくれるかも不安です。

けれど、けれど……やれるだけやると言ったのはどの口か！
なんて思っ、わたしはふとももをごちんと拳で叩いて気を取り直します。

「よっし……最後の最後。賭けますか……！」

小さくつぶやいて、コヨーテさんとイエイヌちゃんに近づいたために、わたしは駆け出しました。最後の最後で賭けに出る……わたしは正直確実性に欠ける以上、『賭け』は嫌ですけど、残された最後の手段……というか思いつきを試してみるしかありません。ここで何もしないよりも後悔は無いはず。それに、思いつきが間違っていたとし

て、それでも最後の瞬間まで攻めに転じることは不可能ではないので
すから。

そう考えながら全力で走って彼女たちに近づくと、ちょうど会場の
真ん中に彼女たちいました。

「ふう、もうすぐ、終わりだな……！」

コヨーテさんは速度を少しだけ緩めて大きな声でわたし達に呼び
かけます。そんな声を無視してわたしは全力で会場の真ん中にダッ
シユします。わたしとは違って、コヨーテさんはうねうねと曲がりく
ねった進路を取ります。

「それでも……っ！」

イエイヌちゃんは誰にいうでもなく大きな声で言い、コヨーテさん
を追います。コヨーテさんと違ってすこし大回りの進路を取ってい
ましたが、確実にコヨーテさんに近づこうという迫力のようなものさ
え感じました。

わたしの最後の最後の賭け……成功させなくてはなりません。優
勝景品だとか、わたしが讃えられたいとか、そんなことよりもずっと、
イエイヌちゃんの思いに応えるためにも……。

「だとしても、だ」

コヨーテさんは速度を緩めてイエイヌちゃんを待ち構えます。疲
れたから？ 体力の温存？ いいえ、会場の真ん中で試合を終わらせ
るためでしょう。やっぱり、という正解を当てた喜びを少しだけ噛み
締めながら、全力で走ります。自分の呼吸が耳に響いて、唾液と呼吸
がすっぱく感じてきて、足が重くなって、震えて、胸が、肺が苦しく
て、それでも全力で、走ります。自分で息をできているのかさえわか
らなくなつて……けれど、コヨーテさんは、今、わたしの目の前……
！

「おつかれさ——」

コヨーテさんの言葉は最後までイエイヌちゃんには伝わりません
でした。なぜなら——イエイヌちゃんはコヨーテさんめがけて走っ
てこそいましたが、どこか諦めたように速度を緩めていました——私
の言葉で、コヨーテさんの言葉は掻き消されたからです。

「イエイヌちゃん！ はしつてえー！」

油断していたのか、それともわたしの事をすっかり忘れてしまっていたのか……。コヨーテさんはわたしの叫び声にびっくりした顔で振り返ります。普通（？）のフレンズさんなら、びっくりしたまま動けなくても不思議ではないのでしようけれど、さすがコヨーテさん。

彼女は体当たりするのではないかという勢いで向かってきたわたしを後ろにステップするように避けました。けれど、予想外の方向からの攻撃に、コヨーテさんは姿勢を崩しています。そして、そんなところを、イエイヌちゃんが追撃します。ゆっくりと引き伸ばされたような時間の中、イエイヌちゃんがわたしの後ろをすり抜けて、コヨーテさんに迫り――

笛の音が、ひとつ鳴りました。

幕間7

狩りごっここのわたし達の最後の『攻め』。

鳴った笛の音の意味するところをわたしは窺い知ることができず、ハクトウワシさんの言葉を待ちます。ゆつくりとイエイヌちゃん、コヨーテさんの方を見てみると、イエイヌちゃんがコヨーテさんに覆いかぶさるように地面に倒れ込んでいます。

会場も、『何がどうなったのか』を告げる誰かの言葉を待つかのようにしんとしていて、物音ひとつしません。風の吹く音、木の葉や草のざわめきは勿論、それこそ会場のフレンズの皆さんの衣擦れの音さえ聞こえてきそうなくらい静まり返っている、異様な雰囲気でした。笛の音から一拍ほど置いて、ハクトウワシさんが大きな声で告げました。

「しゅーりょー！」

コヨーテさんも、イエイヌちゃんも、わたしも、言葉を失い呆然としていましたけれど、視線は一点に集中していました。わたし達の視線を集めるハクトウワシさんは心底楽しげな笑顔を浮かべて地面に降り立ちます。

わたしは、肩で息をしながらも首を動かして彼女の一挙手一投足を伺いましたが、そこに込められた意図はまだわかりません。イエイヌちゃんがコヨーテさんを捕まえられたにしても、タイムリミットが訪れたにしても、終わりは終わり。彼女はまだ、試合が、わたし達の『攻め』の時間が終わったことしか宣言していませんから……。

「まずはお疲れ様、ね」

ハクトウワシさんはわたしの肩をそっとぽんと叩いてから、イエイヌちゃんとコヨーテさんの傍らへと行き、手を差し伸べます。

「……？ どうしたの？ そんなにぼうっとして」

彼女は自分に集まる視線——それこそ会場中の——に込められた意味合いを知ってか知らずかとぼけるようにくすりと笑いながら、首を傾げます。

「いや、どうしたの？ じゃなくてだな……」

「コヨーテさんがしびれを切らしたように問い詰めます。

「ふふっ、そう……そうよね」

ハクトウワシさんはイエイヌちゃんの手を取って、彼女を立ち上げさせます。「これくらいしてもいいわよね？ 最後なんだし」と小さく呟いて、立ち上がったイエイヌちゃんの手を高く空へ挙げました。そして、妙に厳かな雰囲気を漂わせながら、大きな声で宣言しました。「イエイヌがコヨーテを捕まえたわ！」

会場中にわあっと歓声の音が響き渡ります。そんな中で、イエイヌちゃんは「ほえ？ へ？」とぼやぼやしていました……状況が飲み込めてきたのでしょうか、次第に彼女の表情は喜びの色が目立ち始めます。

「——っ……！ ともえちゃん！ やりました！ やりましたよ！」

ハクトウワシさんの手から離れたイエイヌちゃんは、わたしの下へと駆け寄ります。

「お疲れ様です！ イエイヌちゃん！ やりましたね！ 本当に……良かった……！」

イエイヌちゃんはわたしの近くへ来てから少し躊躇うような素振りをしてから、ゆっくりとわたしの手を握ってくれました。

「時間、ギリギリだったのよ？」

「くっそ……そうだったのかあ……」

コヨーテさんが悔しげにハクトウワシさんの手を借りて立ち上げります。

「コヨーテ、あなたって子はねえ……」

ハクトウワシさんは、コヨーテさんに呆れたようにお説教めいた小言を言いますが、コヨーテさんはどこ吹く風という具合でした……ちなみに漏れ聞こえたものとしてはエンターテインメントに振り回されてるとかなんとか……わたしも同感です……。

「ま、何にしてもだ」

ふふんと自信有りげに鼻を鳴らして、コヨーテさん達はわたし達に言います。

「別に負けと決まったワケじゃない。引き分けだってありえる」

彼女がそう言い終わると同時に、ロードランナーさんがコヨーテさんのところにやってきました。

「なあ、ロードランナー？ そうだろ？」

唐突に尋ねられたロードランナーさんは「んー？」と唸ります。

「お前がそう言うならそうなんだろ。そうだろうな」

わかった風にニヤリと笑うロードランナーさんですけれども……何か……伝わったんですかね……？

「ま、まあ、それはそれとして……休憩なさいな。少ししたらコヨーテとロードランナーの『攻め』よ」

ハクトウワシさんの言葉にわたし達はゆっくりと頷き、それぞれの組ごとに休憩をはじめました。

わたし達は会場の方へと移動して、休息を取ります。まだ身体から疲労が抜けきらないわたしは、イエイヌちゃんに支えてもらいうにしながらの移動……申し訳ないですけども、ずっとあそこに居ても居心地がなんだかよろしくくないですし、わたしは彼女に甘えることとなりました。

「大丈夫ですか……？ 座れますか？」

「心配すぎですよ……平気です。けど、ありがとうございます」

イエイヌちゃんはわたしを守るかのように肩の方に手を回しながら、わたしが座るまでをそつと見守ってくれました。

「よいしょ……ふう……本当に、お疲れ様です、イエイヌちゃん。おかげさまで、勝ちに一步近づきましたね」

わたしの言葉に彼女は首を振って、そしてわたしの隣に腰掛けました。

「ともえちゃんのお陰ですよ」

「うーん……わたしは何もしてないような……」

「その……最後、ああ言ってくれなかったら……私、走れなかったです……」

イエイヌちゃんは申し訳無さそうに、うつむきながら言いました。

「けど、お陰で、もうひと踏ん張りって、そう思えたんです」

顔を上げて、じつとわたしの顔を見て、そう言い切った彼女の顔は

どこか晴れやかでした。

「そう言ってもらえると、えへへ、嬉しいですね。ありがとうございます。でも本当に頑張ったのはイエイヌちゃんですから、お疲れ様です、それと、おめでとう」

わたしは彼女に応えるように笑顔で、思いを伝えます。わたしに応じるように、彼女も笑顔になって、それが何よりも嬉しくて、それが何よりも次を頑張ろうと思える支えに感じられました。

「それと……その、ともえちゃん、『逃げ』はどうします……？　いつもと同じようにで大丈夫ですか……？」

イエイヌちゃんは急に心配そうな顔になってわたしに尋ねます。

「うーん……それしか無いとは思いますが……一応、指示を出せそうなら出しますが、見抜かれちゃってますからねえ……」

こればかりはどうにも案が浮かびません。そもそもの話として、わたし達が用意してきたのは『攻め』の手段が中心。『逃げ』に関してもそれを流用したに過ぎませんし、肝心要の『指示』だってコヨーテさんが看破しているのです。

「ですよええ……」

「ですから、多分、悔いの残らないように頑張るのが一番……でしょうね」

わたしの言葉をイエイヌちゃんも思っていたのでしよう、彼女は何も言わず、こくりと頷いたのでした。

「私は……なんだか引き分けでも良くなってきちゃいました」

イエイヌちゃんの視線は空へ。

「不思議ですね……わたしも、そんなふうに考えてました」

わたしは身体中に感じる鈍痛にどこか心地よさを感じながら、彼女と同じように空へと視線を移します。

「やれるだけのことはやった。そう思うんです。そもそもイエイヌちゃんと違って、『逃げ』の時にはあんまりお役に立てないからかもなんですけどね」

先程あれだけ身体を酷使したという事も当然ありますけれど、わたしは足が遅いですから……どうしても『逃げ』ではイエイヌちゃんの

役には立てません。

「そんな事、言わないでください？ ふたりでひと組なんです。ともえちゃん和我、ふたりで頑張るんです。苦手なことは得意な方にまかせてください」

いつの間にか繋がれたわたしの手が、きゅつと一際強く握られました。イエイヌちゃんがそこに込めた思いは、きつと、労いだとか信頼だとか、安心だとか、そんな色々がないまぜになったものでしょう。それはもしかしたらひとつの言葉で言い表せない思いなのかもしれない。 「けれど」、わたしはそう思っただけ強く握り返します。

ひとつの思いを込めて、ちよつとだけ強く握り返します。「あなたが居ないとダメ、あなたが居て初めて、わたし」。そんな思いは、少し感傷的にすぎるでしょうか？ 口に出すにはあまりに恥ずかしいですものね。

でも、掌に込めて伝わってくれるなら、少しこそばゆいくらいですから、これくらいの思いは抱いても構わないと思いませんか？

その後しばらくの間、わたし達は静かに最後の『逃げ』の時間が訪れるのを待っていました。お水を持ってきてくれたカルガモさんと少しばかり会話をしましたけれど、ほんの少しの間でした。彼女にコップを返すまでの間、少しでも体力を取り戻そうとわたしは伸びをしたり足をもみほぐしたりといろいろ試してみました……効果の程は如何ほどか、流星にわかりかねます。

やらないよりはマシと思いつつもそんな事をしている内に、最後の『逃げ』の時間が近づいたようです。

「かいしゅーです。もう少して始まるそうですよー」
カルガモさんも次の試合が始まるのをわくわくしているようで、楽しいな調子です。

「はいっ！ ありがとうございますー！」
イエイヌちゃん『準備万端』と言わんばかりに元気よく彼女に返事をします。わたしは流星にイエイヌちゃんほどの元気はありませんでしたが……

「どうもありがとうございますー！ カルガモさんも、一日お疲れ様で

す！」

イエイヌちゃんにもカルガモさんにも心配はかけたくは無いですから、なるべく元気よく応えます。

「いえいえーこういうのも良いものですよ？ ふふん」

一日のお仕事を楽しみきったような、そんな具合の彼女は、やりきったような笑顔を浮かべます。そして、誇らしげに胸を張りました。

「おふたりも、最後の最後、頑張ってくださいねー！ ではー！」

カルガモさんはそういうなり空に飛び立ちました。わたし達は会釈をして、彼女を見送ります。

「……じゃあ、行きましようか、ともえちゃん！」

「はいっ！——つとと……ご、ごめんなさい、手伝ってもらえます……？」

わたしが立ち上がろうと膝に力を入れたのですが、上手く力が入りません。少しでも浮いたお尻がぺたんとして地面についてしまいました。目覚めたばかりの頃を思い出してしまつたくらいです。

「だ……大丈夫ですか……？」

イエイヌちゃんは心配そうにわたしの様子を伺い、手を差し出します。

「あ、ありがとうございます……よいしょつと……」

わたしはふうと息をついて、お尻に付いた砂を払い、答えます。

「うーん……大丈夫は大丈夫なんですけど……走ったりとなると、前までほどは……無理そうですね……」

強い痛みこそ無いため、怪我をしていないことは自分でもわかります。

それでも飛んだり跳ねたり、走ったり……そういう身体を大きく動かすには身体中に響くような鈍痛や疲労の為に難しいのです。

「……棄権します……？」

残念そうに、けれど間違いなくわたしの事を案じて尋ねた彼女の言葉をわたしは首を振って否定します。

「いいえ、それは悔しいですから……。すぐに捕まったとしても……」

というか、すぐに捕まるんですけど……それでも、あそこに立ちたいですし、ほんの少しでもイエイヌちゃんのお役に立ちたいですから……足手まとい……ですか……?」

イエイヌちゃんはわたしの言葉をゆつくりと飲み込むように、少しだけ悩んでから口を開きます。

「……足手まといだなんて……それは無いですよ? 一緒に居てくれるだけで、それだけでじゅうぶんですから」

優しい彼女の言葉と裏腹に、やっぱりイエイヌちゃんは悩んだ表情を崩しません。

「でも無理はしてほしくありませんし、うーん……」

ワガママと非力を承知な上で言ってしまうのならば、わたしにとつての『逃げ』はそこにいるだけで捕まって終わり。極論するならば、ただのカカシなわけで……。

「イエイヌちゃん。ちよつと自虐っぽいですけど——」

思った通りの事を、彼女に伝えます。

「むう……それはちよつとズルいですよお……」

イエイヌちゃんはむつとした表情になって、けれど諦めたようにため息をつきます。

「わかりました。では、行きましよう?」

わたしの手を引つ張るようにして、彼女は歩きだします。

わたしはハクトウワシさんや、コヨーテさん、ロードランナーさんに参加さえ厳しいことを悟られぬよう、身体の痛みも、不調も隠すよう意識して、会場の真ん中へと移動します。そして、わたしが固めた参加の決意が揺らぐよりも早く、同じようにわたしの体調が万全へとなることもなく、試合が始まりました。

さて、開始の合図からまもなくして、わたしは案の定捕まりました。当然といえば当然なんですけれども、ね。

コヨーテさん、ロードランナーさんの作戦は今までと同じく二手に別れて追いかけるもの。わたしがロードランナーさんに追われ、イエイヌちゃんがコヨーテさんに追われる形は変わらずそのままでしたが、いざロードランナーさんがわたしを捕まえる時点になると、彼女

は一瞬躊躇するように手を引つ込めます。

「……………」

ロードランナーさんはそんな音を口から困ったように出して、ゆっくりとわたしの肩を掴みます。甲高く鳴り響いた笛の音を背景に、ロードランナーさんは困ったような……………もしかしたらわたしを批難する思いももっていたかもしれませんが、そんな表情でつぶやきます。

「たつく……………よくそれで続けたなあ……………」

責めるような言葉でしたけれど、その言葉に込められた思いは、少しの呆れと心配でした。

「あはは……………どうしてもやりたくて……………」

わたしの言葉にロードランナーさんは大きくため息をつきます。

「ユキウサギだっけ？ あいつほどじゃ無いんだろ？ 別にいいけどさ、しばらくしっかり休めよなー？」

わたしは笑いながら頷き返します。ロードランナーさんは「じゃあな」と手をひらひらさせてからイエイ又ちゃんの方へと走っていきました。

今度こそ真正銘わたしに出来ることは無くなりました。だからでしょうか、すうつと力が膝から抜けて、へにやりと地面に座り込んでしまいました。流石に今は試合中ですので、すぐさまここから立ち去りたいところですが、それも叶いません。「あちやー……………」と内心つぶやき、這うように動くのですけれど、下半身の重さのために進みは遅々としています。

視線を上げると心配げにわたしを見つめるドードーさんがいました。彼女の視線にわたしは恥ずかしさを強く抱きましたけれど、それに身を苛み苦悶するなんかよりも先に、会場の外へ行かないと……………他の方の迷惑に……………

ドードーさんと目があってから少しすると、ドードーさんに加えてロバさんがとととと私に駆け寄って来てくれました。そうして、わたしを引つ張り上げて会場の外側へと移動させてくれます。

「申し訳ないです……………ありがとうございます……………」

わたしの言葉に、ロバさんは「いえいえ」と軽く笑って答えましたが、ドードーさんはぷっくりと頬を膨らませて怒っていました。

「ともえちゃん！ 無理はダメって、言われなかったの？ それともともえちゃんのワガママ？」

大声でこそないものの、そこには明らかに隠しようのないくらいの怒りの感情が籠もっているように思われました。もしかしたら、イエヌちゃんが無理をさせているのではないかと疑っているのではないのでしょうか……？

「それはそうですけど……続けさせてくれって、続けたかったの………つい……わたしの、ワガママです………」

ドードーさんは地面にぼすんと腰掛けます。ロバさんもドードーさんが座つたのを見て、「私も失礼しますね」とつぶやきゆっくりと座りました。

「あのねえ！ 確かに見てて面白かったし、ともえちゃん凄いなあって思ったよ？ でも、でもねえ！」

「ま、まあまあ……落ち着きましよう………」

ロバさんの言葉に、ドードーさんはふううと長く息を吐いてから、少し落ち着いた様子でわたしの目を見つめて言いました。

「心配だから、本当に、やめてね？」

申し訳ないやら恥ずかしいやら情けないやら……わたしは「はい」とぼそりと返事をして、ドードーさんから視線をそむけ顔をうつむかせます。

落ち込むような気持ちが大きく、また、自分は頑張つたのに何故？ という思いだつて、当然あります。けれど無理無茶無謀を強行したのはわたしで、それは身の丈に合わぬ行為であつたのも事実。これはわたしが悪いのですから、怒られるのも当然というもの……。

不意に、わたしの手をそつと撫でるドードーさんの手に気づきました。ちらりと視線を上げると、ドードーさんは競技場のイエイエちゃんをじつと見つめていました。

「本当に、お疲れ様ねえ、ともえちゃん」

ドードーさんはそのまま顔を動かさずに言いました。わたしの手

に添えられ、撫でる彼女の手は何よりもわたしの事を案じてくれているように、優しく温かな感触でした。

そして、その温かさはわたしの思い違いをはっきりとさせるものでした。

「……ありがとうございます。それと、その……ご心配をおかけしました」

わたしは会場を見ず、ドードーさんの顔を真っ直ぐに見つめます。「ううん、きついこと言っちゃってごめんねえ……。あとは、イエイヌちゃんを応援しよ？　ね？」

ドードーさんがわたしの顔に視線を動かして、言いました。わたしはその言葉に「はい！」と返事をし、わたし達は会場を、いいえ、イエイヌちゃんの姿を見つめ、応援し始めました。

その後しばらくの間、状況はほとんど変化がありませんでした。

イエイヌちゃんもコヨーテさんも、ロードランナーさんもみんな体力に余裕を持って動いていたのでしよう。これまでの『逃げ』同様の状況……。事態が変化したのは、頭上で勝負を見守るハクトウワシさんがちらちらと本部（の筈です）の方を気にし始めた頃——つまり試合が終わりに近づいていることがはっきりとし始めた頃合いです。

それまでの動きはコヨーテさんが追いかけて、時折隙を見計らったようにロードランナーさんが飛びかかるといふものでした。イエイヌちゃんはそのことごとくを綺麗に、時折危なげに回避し逃げ回っていたので、いつもながら凄いなあと尊敬の思いを抱いたのは、また別のお話です。

試合が終わりに近づいたことに気づいたのか、コヨーテさんがロードランナーさんに声をかけます。すると、ロードランナーさんもコヨーテさんのようにイエイヌちゃんを追いかけ始めます。これは、イエイヌちゃんの間を見つけて攻めるよりも、彼女たちふたりで追いかけて試合が終わるまでにイエイヌちゃんを疲労させ捕まえる……ということなのでしょう？　流星にわたしにはわかりません。けれども動きが変化したのは事実でした。

イエイヌちゃんはそれでもなんとか逃げ続けます。とは言え、ふた

りに一斉に追いかけられるという事態に着実に体力が削られているようでした。彼女の走る速度は勿論のこと、姿勢が崩れたりする事も増えています。

そもその話として、ロードランナーさんのイエイヌちゃんの間をつくという攻め方は（言い方は悪いですが）あまり上手ではありませんでした。だからこそ、注意すべき方向が多くとも、結果的に体力を温存できていたのかもしれませんが。けれど、ふたりが追いかけてくるとなると、相手にする方向はひとつでも、相手にしたコヨーテさんとロードランナーさんが代わる代わる手を緩めることなくイエイヌちゃんを攻め立てることになりますから、気の休まる時間がなくなっ
てしまいます。

当然のことながら、体力、速度ともにやや劣るロードランナーさんが無理にコヨーテさんとイエイヌちゃんに追いつこうと動くのですから、ロードランナーさんも体力を使い果たしたようにその場に立ち止まり「まかせたあ！」と叫び身体を屈めます。

そして、コヨーテさんとイエイヌちゃんの一騎打ちが始まりました。経過した時間や、ハクトウワシさんの様子からして、おそらく残った時間は数十秒くらいでしょう。

イエイヌちゃんとコヨーテさんを比べると、イエイヌちゃんの方が体力を削られていて、コヨーテさんはまだ多少の余裕が残っているようです。速度に関してももとの速さの差を加味しても、コヨーテさんの方が速い状態です。それでもなんとか小刻みに曲がったり、間一髪で身体を翻したりなどして逃げ回るイエイヌちゃんも流石という言葉に尽きますね……。

まるで踊っているようにさえ思われる彼女たちの攻防。その結果次第でわたしとイエイヌちゃんが勝つのか、それとも引き分けという結果になるのかが決まります。本来ならば、わたしは彼女たちの戦いをはらはらドキドキというような居ても経っても居られないような心持ちで、手に汗握りながら見届けるものでしょう。けれど、どうしてか、わたしは彼女たちの動きが綺麗で、勇壮で、美しいもののような……まるで素晴らしい絵画を目にしたときのような、ぞっとするよ

うな、心が震えるような、そんな勝敗とはかけ離れている思いに満ちていました。

同時に、異様なまでにまっすぐ勝敗を見据え、その為に邁進するという『戦い』の真髄を思わせる光景に、わたしがほんの少し前まで同じように動いていたのだという事実に気づきます。

わたしにだって、何か出来るんだ。その思考が、無力にさえ思い続けてきたわたしの、わたし自身を、どこか満たしてくれていました。

勝ったのなら、当然嬉しい。景品だってもらえるんでしようから、それはお得ですしね。けれど、わたしが今こうして、『そう』思えたことが何よりのご褒美のようでした。今、ここにこうしていること、情けなさや申し訳無さがどこか矮小にさえ思えてしまうような……そんなかけがえのない報酬。それが得られただけで、もう、わたしは満足です。

だからこそ……だからこそ、イエイヌちゃんには、もう、悔いのないように頑張ってもらいたいです。だから――

「頑張つてねえー！ イエイヌちゃあーん！」

自然に声が出ました。

会場には見惚れるような、息を呑むような、ひっそりと静かに見つめる子もいれば、賭け事でもしているかのように熱中しながら応援の声をあげる子もいました。けれど、試合の時間が終わろうとしているのも事実……。

一瞬の出来事でした。コヨーテさんが逃げるイエイヌちゃんの左側後方からぐっとフックのように曲がる不思議な軌道で攻めます。それを受けてイエイヌちゃんはとっさに右後方へと飛び退きました。すると、イエイヌちゃんの動きに対応してコヨーテさんはイエイヌちゃんの方向に跳躍しようとしたのですけれど、疲労からか右足をぐねつと曲げるようにしてしまい、跳躍に失敗しました。コヨーテさんは不意の出来事に対処しきれず、ひどく大きく転んでしまいそうになります。

コヨーテさんが転びそうだということにすぐさま気づいたイエイヌちゃんはコヨーテさんに手を伸ばします。逃げている筈のイエイ

又ちゃんが手を伸ばす、ということは何んだか奇妙に思われますけれど、それほど危なげな状況だったのでしょうか。それに対してコヨーテさんは自分の身体を守ろうという思いは殆ど無かったようで、イエイ又ちゃんの方向に手を伸ばしていました。イエイ又ちゃんはコヨーテさんの手を辛うじて掴み、そのままぐつと彼女を引き上げました。お陰でコヨーテさんは転ぶことなく、イエイ又ちゃんに引き上げられたのですが……。

息を呑むようなアクシデントの瞬間が過ぎると、コヨーテさんが立ち上がったイエイ又ちゃんに何かを言います。コヨーテさんは何か言いながらも、バツが悪そうに頭を掻いていました。

わたし達はそんな光景に呆然としていたのですけれど、それはハクトウワシさんも同じだったようです。彼女ははつと身体をぴくりと動かして、笛を鳴らしました。

「しゅーりょー！」

会場にわあつと歓声が響き渡ります。

聞こえる声には単なる叫び声のような意味の無いモノから、『狩りごっこ』参加者を称えるもの、「どつちに勝ってほしかったけどよかった」というような歓声など……ひとつとして同じ言葉が無いようにさえ思えました。けれどその声を熾す感情は、きつとひとつ。楽しかったという思いでしょう。

……結果は、引き分け。決して勝利ではありませんでした。けれど、わたしは先程感じたような満足感とイエイ又ちゃんが怪我をしなかったことへの安堵の思いを抱きます。ほうと胸をなでおろすよりも速く、イエイ又ちゃんはわたしの視線に気づきました。いつもならばきつと駆け足だったのでしょうかけれど、少しだけ右足を引き摺るようになってしなごちちらへ……。

「ドードーさん、ロバさん、手伝ってもらっても良いですか……？」

ふたりとも快諾してくれた為、わたしは彼女たちの手を借りて立ち上がり、イエイ又ちゃんの下へと近づきます。わたし達の歩みは決して速いものではありません。それは、きつと怪我や疲労という外見上の都合以上に、抱えた思いがきつと大きいから……それぞれに抱く感

情は多分違うのでしようけれど、それでも、きっとわたしもイエイヌちゃんもお互いに称え合おうという思いや、こうしていれば良かったというような後悔や、疲労を労う思いや……いろいろなものが込められているのでしよう。

会場の中心からだいぶ外側に近い位置で、わたし達は抱きしめ合いました。不思議なことに、お互いともお互いの頭を撫でるようにして、労い合いました。

「お疲れ様です、イエイヌちゃん……！」

「ともえちゃんも、お疲れ様です……！」

わたし達は身体を少し離します。……それでもお互いの両腕は互いの背中に回されていました。

「イエイヌちゃん……疲れは大丈夫ですか……？」

「私はなんとも……へーきです！　ともえちゃんだって、身体……！」

「わたしだって平気です！　ちよつと歩くのもしんどいですけど、休めば、はい、平気です！」

お互いにひとしきり心配をしあうというのも奇妙なことのように思われます。お互い言葉少なくて見つめ合っていると、コヨーテさんがいつの間にやら隣に来ていました。

「ふたりの世界に浸っているとこころ悪いんだが……！」

わたし達ははつとコヨーテさんに顔を向けます。多分、わたしの顔は赤かったと思います。イエイヌちゃんもそうでしたし、ね。

「し、失礼しました……！」

「も、申し訳ありません……ともえちゃん、行きましよう？」

「はいっ！」

会場の中心に、わたしはイエイヌちゃんに手を引かれながら歩きます。

隣ではコヨーテさんがにたにたと笑いつつも「捕まえたのは違いながいが釈然としない」とかなんとか言っていますし、ロードランナーさんは「早くしろー」なんて急かしています。会場中にはがやがやとにぎやかにお話をするフレンズさん達が居ましたし……。

わたしが見聞き出来る世界なんてちつぽけで、わたしの知らない世

界の方がずっとずっと大きい。そんな当たり前のことを思います。そして、そんな世界の中で、わたしは居て良いのでしょうか？　ここに来るまでのわたしだったら、不安で泣いてしまいそうな位の思い。けれど、ちっぽけな世界で、それでも他の方が居て、何よりイエイヌちゃんが隣に居てくれることはまず間違いないのかもしれない。

「お互いお疲れ様。楽しかったわよ、本当に素敵だね、みんな」
ハクトウワシさんが愉快そうに笑顔で言いました。そして一際大きい声で、続けます。

「勝負の結果は、引き分け！　お互い、礼！」

わたしは、重く、けれど短く、息を吐いて、「ありがとうございますでした！」とお辞儀。と、どうやらわたしの出した言葉が違っていたようで、周囲の皆さんはぽかんとしています。

『お疲れ様でした』……じゃないのか？」

これはロードランナーさん。

「いや、言いたいことはわかるんだが……うーん……？」

「えへへ、ともえちゃんも、ありがとうございます！」

イエイヌちゃんはわたしに向き直ってぺこりとお辞儀。

「ま、それもいいかもしれないな、ありがとうございます、ともえ、イエイヌ。それとロードランナーも……ありがとう」

照れくさそうにしながらコヨーテさんもお辞儀。ロードランナーさんは「それとってなんだよお」と不服そうな言葉を言いましたが、姿勢を改めます。

「そういうことなら、私も、みんなありがとうございます。楽しかったよ」

彼女の言葉を受けて、改めて、終わり。そう、これで『狩りごっこ』は終わりです。

たったの一日の出来事だったのに、なんだか無性に長く感じられる一日でした。それを言うなら、『運動会』の始まりからしてそうです。昨日と今日。たった二日間の出来事。それでも、なんと言えば良いのでしょうか？　考える時間がいっぱいあって、やることがいっぱいあって……だからでしょうか？

長い二日間だったなあという感心めいた思いの中に、きつといくつ

もの得られたものがあつたように思います。ああ、だからこそ、だからこそ、です。皆さんにありがとうって言ったのかもかもしれませんね。

頭上では木々の梢が重なり合うようにして陽光を遮っています。黒みがかつた緑色の木の葉とその影、それらの向こう側では青空に雲が高く浮かび、気まぐれに漂っています。碧空は梢に切り取られてわたしの眼に届いているのですけれど、そのために却って、一層淡く輝き、澄み渡るように思われました。

加えてわたしの歩みに沿って動く光は、わたしの眼をくすぐるようで、なんと心地の良い散歩なのかと感心さえしてしまいそうなくらいです……一点を除けば、ですが。

視線を空から前へと動かすと、楽しげに揺れるイエイヌちゃんのしつぽと、ちいさな歩幅をせわしく動かして、それでも愉快そうにイエイヌちゃんとお話をするドードーさんの背中が見えます。

「ふう……」

常ならば彼女たちのペースに合わせて歩くことは難しいことではありません。たとえば、ここが『道』というよりも『けもの道』であつて、少し草木が茂っていない程度のあぜ道のような立派では無い道だとしても、です。

けれど……

「ともえちゃん……大丈夫ですか……?」

「やっぱり辛い? 休むう……?」

わたしの様子を心配してイエイヌちゃんとドードーさんがわたしに振り返って言いました。先日の運動会で行った『狩りごっこ』。その最後の最後でわたしがあまりにも頑張りすぎたが為に訪れた当然の事態。

「……いえ、大丈夫です」

わたしはひと息ついて、言葉が続けます。

「……それに、これはこれで『運動したー!』みたいな達成感も……えへへ」

わたしの言葉は確かに本心からのものですけれど……やっぱり、運動は苦手でした、わたし。

「そ、そうですか……」

イエイヌちゃんは不審そうな声を上げましたけれど、ドードーさんは「わかるよお」と気楽そうに言います。本当にわかっています？と思わないでも無いですが、それはまた別の話です。

「ですけど……あんまり無理するのも良くないですから……もう少ししたら休憩しましょう？」

イエイヌちゃんがわたしを気遣ってくれているのは確か。でしたら無闇に我を通そうとするのはむしろ失礼というものでしょう。

「……はい……でしたら——」

ちょうど良い目印はないかとイエイヌちゃん達の向こう側を覗き込むように身体を動かします。ふぎゆうと小さく息が漏れてしまいそうな鈍い痛みを——主に背中から——覚えましたが、我慢です。

「あそこまで行ったら、お願いします」

指差した場所は背の高い樹が、一本生えている場所でした。周囲ではその樹を避けるように他の樹木は生えておらず、わたし達が休憩するのにも十分なスペースに思われますし、何よりもそう遠くない距離です。今の私でも無理なく進むことが出来るでしょう。イエイヌちゃんもドードーさんもわたしの提案を了承し、再び歩き始めました。

話は今朝に遡ります。

運動会が終わり、そのあとのてんやわんやのお祭り騒ぎめいたやり取りもあり、その日はそのまま『狩りごっこ』前日に寝泊まりした場所で一晩を過ごすことに決まりました。ドードーさんとの約束がありましたので、その夜はわたしとイエイヌちゃん、ドードーさんの三人で眠ることに。

そして今朝。

「ふああ……ふたりとも、おはよお……」

間延びしたドードーさんの声で、わたしとイエイヌちゃんの目が覚めました。

「う、ん……おはようございます……」

「おはようございます……」

イエイヌちゃんがわたしの隣でぐうつと伸びをされていて、ドードーさんはふああと小さくあくび。わたしは上半身を起こしてイエイヌちゃんと同じように伸びをしようとしたのですけれど……

「んー……つつう……」

全身に響き渡る様に走る鈍い痛みわたしは思わず顔をしかめてしまいます。

痛みの正体。それは筋肉痛。そりゃあそうですとも。昨日にあれだけ身体を動かして、自分自身の限界に挑んでしまったのですもの。

「大丈夫う……う？」

ドードーさんが首を傾げてわたしを伺います。

「ああ、筋肉痛です筋肉痛……って……大丈夫ですよ」

「ケガ……とかじゃないんですよね……？ どうします？ 帰らないでもう一日くらいは……」

イエイヌちゃんがわたしの事を気遣う言葉をかけてくれました。

けれども、のんびりするとなれば、それならば『おうち』が一番落ち着きますし、ドードーさんとの約束が遅れるのも申し訳ないというもの。

「ケガとかじゃないですし、しばらくしたら治りますって、大丈夫です。……さ、準備しましょ？」

わたしはそう言って立ち上がろうとしたのですけれど……

「あ、あれ……イ、イエイヌちゃん……手伝って貰っていいですか……？」

足の痛みが思ったよりも強く、膝を曲げることさえできなくなってしまうました。わたしの言葉にイエイヌちゃんは眉間にシワを寄せて言いました。

「もう少し、ゆっくりしましょう？」

「はい……」

その後、しばらくしてからイエイヌちゃんの手を借りて寝袋から出て、片付けを行うのでした。

片付けが一段落して、わたしは鞆からジャパリまんを三つ取り出します。

「じゃあご飯にしましょうか」

イエイヌちゃんとドードーさんにジャパリまんを渡して、「いただきます」の聲が上がったのですけれど……イエイヌちゃんはわたしの顔と彼女のジャパリまんを交互に見つめました。

「ど、どうしました……？」

わたしの問いかけを受けて、彼女は自分のジャパリまんを小さくちぎり、わたしの口元に差し出します。

「はい、ともえちゃん、あーんしてください？」

彼女の行動が意外に過ぎて、わたしはあつけにとられてしまいました。

「え……ええつと……？」

そんなわたしの眼を彼女はじつと見つめて「にぶいですね……」と呟いて、続けます。

「いいですから、口、開いてください」

「……いや、その、恥ずかしいですし……腕は平気ですから……」

わたしはそう返事をしてから、自分の手元のジャパリまんを頬張ります。疲れた身体になんとも染み渡るような心地を覚えます。……が、イエイヌちゃんはぶくうつと頬を膨らませて不服なご様子。困ったわたしはドードーさんに視線を泳がせ、なんとかこの状況を打開してくれないかと伺ったのですが……。

「うん？ どしたのお？」

ドードーさんは楽しげにくすぐすと笑顔を浮かべています。仕方ないですね……。

「わかりました。お願いしますね、イエイヌちゃん」

渋々イエイヌちゃんの申し出を受けて、わたしが口を開くと、イエイヌちゃんの表情はあつという間に晴れたものとなり、楽しげに手をわたしの口元へと動かします。

「うふふ……はい、あーん……」

ぱくりと彼女の指に挟まれた欠片を口に含み、咀嚼します。と、その間にもイエイヌちゃんは心底楽しそうにしっぽを振りながら、新たな欠片を掴みとります。

「んふー……んふふー……はい、どうぞ」

わたしに……なんというか、奉仕……？　ちよつと言い方が悪い気もしますが……看病と言うにはわたしは元気すぎますしねえ……。そんな楽しそうな嬉しそうな顔されましても、むしろ困ってしまうような気もしますが……。

「あの、まだ飲み込んでな……んっ——」

彼女に反論しようと口を開くとすかさず手にした欠片が入れられ……。

「——いや、あの……んっく、あのっ——」

とまあ、二度目です。わたしだって別に嫌じゃないんですけど追加のペースが早すぎませんか？

「イエイヌちゃん、もう大丈夫じゃない……？？」

既にわたしの口腔内はぱんぱんになっています。流石にわたしの事を案じてくれたのか、ドードーさんがイエイヌちゃんを制止します。イエイヌちゃんはドードーさんの言葉を受けて、「わっふ」と少しだけ驚いたような声を上げました。

「す、すみません、ともえちゃん……」

んっくとわたしは口に含んだ欠片を飲み込みます。

「ぜんぜん、平気ですよ……ちよつと恥ずかしいですけど……」

そうはいいいまでも、思ったよりもイエイヌちゃんは反省気味な様子。すこしうつむき気味で、耳をしゅんと垂らしていますし、しっぽだつて先程の大きな動きと比べると、だいぶ小さなものになっています。

「……はい……」

「ほら、イエイヌちゃん、あーんしてください」

イエイヌちゃんは、ほえ？　という具合にきよとんとした顔でわたしを見返します。わたしはそつと手元のジャパリまんをちぎり、彼女の口元へと動かします。すると、イエイヌちゃんは少しだけ頬を赤くしながら、ぱくりとわたしの指ごと口の中へ。少しだけびっくりしながらイエイヌちゃんは慌てて指から口を離します。

「ひ、ひっつれいひまひた……」

落ち込んだイエイヌちゃんを励まそうと思つてのことでしたけれども、ドードーさんがにたにた笑いを浮かべたままこちらを見つめています。

「ドードーさん？ どうしました？」

わたしはドードーさんの方を向いて、じいっと彼女の眼を見つめます。

「んー？ 別にいー？ 微笑ましいなあつて思っただけだよおー？」

そんな風な反応をされると、なんだか悔しいというか、巻き込んでしまえというか……そんな良くない思いが芽生えます。

イエイヌちゃんの方に視線だけ向けると、彼女と目が会いました。わたしがこくりと頷くと、イエイヌちゃんも同じように頷きます。恐らく、同じ考えが浮かんでいるのでしよう。

「イエイヌちゃん、お願いします」

「はいっー」

イエイヌちゃんはやおら立ち上がり、わたしはよっこいせ（口には出していませんよ？ レディですもの）と膝に手を当ててなんとか立ち上がります。

「ね、ねえ……ど、どうしたのお……っ？」

「はい、ドードーさん、口開けてください？」

「ええー恥ずかしいよお……」

立ち上がり逃げようとするドードーさんをイエイヌちゃんが背中からぎゅっつと羽交い締めにします。

「えっ、そ、そこまで、するう……っ？」

痛む足を半ば引きずるようにしながらわたしはドードーさんに近づきます。事情を知らない方からしたら、わたし達の様子はさながらホラー的な何かに見えたことでしょう。

「しますとも」

わたしがそういうと、観念したのでしよう、ドードーさんはゆっくりと口を開き――

そんな感じの朝ご飯でした。

時間を今に戻しましょう。

イエイ又ちゃんはわたし達に樹の根元で待つように告げ、水を汲みに行きました。彼女が行った理由なのですけれども、ドードーさんはこの辺りの土地勘が無いと言う一方で、イエイ又ちゃんは、少し先に川がある『気配』がわかるとのこと。それであれば、おふたりとも土地勘が無いとはいえ、気配を辿れる彼女が水辺に行くのが妥当、という判断の為です。なので、わたしとドードーさんは二人きりで休憩中です。

歩いている内にも多少身体の具合がよくなったのか、全身の鈍痛とも仲良くやっていけそうな具合にはわたしの体調も回復していました。なので、軽く伸びをしたり、ストレッチをしたりしながらイエイ又ちゃんを待つことにします。ドードーさんはなんだか手持ち無沙汰のようでしたけれども、座っている内に、日差しを浴びて身体が温まったからか、うとうととしています。

「ねえ、ともえちゃん」

なにか思いついたのでしょうか、ドードーさんがわたしに尋ねます。

「ほっ、ふっ……ふう、どうかしましたか？」

立ちながら身体を捻って居たのですけれども、姿勢を戻して、ドードーさんに向き直ります。

「んー……答えづらいなら、いいんだけどね……んーと……」

ドードーさんは言葉を選ぶように悩みます。わたしは何も言わず、彼女の言葉を待ちます。

「旅、楽しい？」

何を今更、と思つてしまいます。

「ええ、楽しいですよ。イエイ又ちゃんのお陰でもありますし、皆さんのお陰でもあります」

ドードーさんはうんうんと頷き、言葉が続けます。

「じゃあねえ……もしも、そのう……何も思いせないかもって考えたこと、ある……？」

申し訳無さそうに、慎重に、探るような質問でした。わたしは、彼女の間に少しだけ驚きました。ひと息置いてから、彼女の間に応えま

す。

「……そうですね、ありますよ？ でもそれでいいかなあって」

ドードーさんは「どういうことお？」と聞き返しました。

「んー……これはゴリラさんにも言ったんですけど、わたしはわたしなんだって思ってるんです。昔のことを思い出す為に、旅をしているのは確かですから、思い出せたらそれが一番です。けど、旅の最後に何も思い出せなかったとしても、旅をしたことは、事実ですから」

彼女はわたしの言葉を聞いて、ふんふん頷きます。

「うんうん。大事だよねえ……それじゃあ、だいじよぶだねえ、ともえちゃん」

「何が大丈夫なんですか……？」

ドードーさんは首を捻り、眉間にシワを寄せて「うーんとねえ」と呟きました。わたしは彼女の言葉を待つように、そつと彼女の隣に座ります。

「……頑張ってもどうしようもないことって、あるでしょお？」

「ええ、そんなことばかりですよ、ホント……」

昨日といい一昨日といい、わたしには到底出来ないことを平然とやっつのける存在を目にし続けたのですもの、彼女の言葉は嫌でも理解できます。

「んーとねえ……どう頑張ってもダメで、それで落ち込んじゃわないよね？ って、心配に思ったの」

「ああ、そういうことですかあ……」

わたしは腕を組んで彼女の言葉になんと返そうか考えます。

「さつきも言いましたけど、わたしだけだったら辛い旅でも、皆さんが居るおかげで楽しんでいられるんです。もし、何か最後に嫌なことがあっても、きつと皆さんが居てくれるなら、楽しくなれますよ、きつと。そう思うんです」

ドードーさんは、わたしが緊張していたときに見せたのと同じ微笑みを浮かべ、何かを言おうとしたのですけれど——楽しげな歩みで帰ってきたイエイ又ちゃんの気配に気付いたのか、いつもの楽しげな人懐っこい笑みになります。

「――帰ってきたねえ、おかえりいー!」

ぶんぶん楽しげに手を降るドードーさんにイエイヌちゃんも「戻りましたあー!」と大声で返事をし、手を振り返します。それを境にイエイヌちゃんは小走りになってわたし達のところへ駆け寄ります。

「ふう、戻りました!　ともえちゃん!」

イエイヌちゃんの尻尾は楽しげに揺れていましたし、何より心底「楽しいー」と主張したいかのような誇らしげな笑みを浮かべています。散歩というのも楽しかったのでしょうか、他者の役に立つ仕事を買って出た喜びもあったのかもしれないが……そんなに楽しいものだったのでしょうか……?

「おかえりなさい、イエイヌちゃん」

「お水です、どうぞ」

彼女の差し出した水筒に手を伸ばそうとしたのですけれど、わたしはその手を止めます。

「イエイヌちゃん、お先にどうぞ」

「……?　私はもう飲んできましたし、へーきです!　ささっ、どうぞ!」

わたしは「それもそうか」と納得し、彼女から水筒をひと口飲みます。

「ふう、本当にありがとうございます、イエイヌちゃん!」

「えへへえ……どういたしまして!」

そう言っ、イエイヌちゃんはわたしの隣に座ります。そして、そのままわたしの左肩に頭をことりと載せます。

「出発ですけど……もう少し休憩させてもらってもいいですか?　イエイヌちゃんもお疲れでしょうし……」

自分本位な言い方になってしまいましたけれど、多分「イエイヌちゃんが疲れてるから」と直接言うとな彼女は首を振るでしょう。ですから、わたし自身の体力がそれなりに回復していたとしても、こう尋ねた方が無難だと思われたのです。

ドードーさんもイエイヌちゃんも、おふたりともわたしの言葉に賛同し、しばしの休息。具体的な時間を誰も明言しないのは、なんと

うか、パークならでは、なんですかねえ……。

おふたりとも、目を閉じて物思いに耽っているのでしょうか。それか、暖かな陽射しの中うたた寝をしているか……。それを問いかけるのもなんだか憚られるような、のんびりとした空気が、辺り一面に漂っていました。いつそのことわたしも眠ってしまおうかと思いましたが、そうしてしまえば出発の音頭を取る者が居なくなり、きつと夕暮れ時に出発することになってしまいう気がします……。とうか、確実にそうなります。そもそも、そんなにわたしは眠くないですし……。空でも眺めてのんびりしましょう。そうですね……。あの大きな雲がここから見えなくなるまで、それか……。あの樹の影が他の影に消えるくらいまで休憩……？

気持ち次第、そう考えて、のんびりしましょう。筋肉痛も、まだ残っていますから……。

空を見上げてぼんやりしていると、昨晚見かけた不思議な光景を思い出しました。それは、昨晚のお祭り騒ぎの一幕です。

わたし達は、『打ち上げ』とも呼べるような騒ぎには後から参加しました。『狩りごっこ』が終わってすぐにユキウサギさんのお見舞いの為、会場を離れたのです。

向かった先は、先日ゴリラさんとお話をした場所。つまり、陸上競技用のトラックの脇の小屋でした。小屋につき頃には既に『狩りごっこ』の会場では大騒ぎが始まっていたようで、その騒がしくも楽しいな声は小屋にも届いていました。そんな浮足立つような空気の中、わたしとイエイヌちゃんは、ユキウサギさんと付添で一緒に居たヤブノウサギさんに簡単な謝罪と、具合の確認をしました。彼女達はどうか自分の体調の心配よりも『狩りごっこ』の結果の方に強い関心に向けていたので、そちらのお話も……。ちなみに、ハクトウワシさんの冗談は通じませんでした。いや、ホント、ケーキのひと切れってどういう意味なんでしょう？

と、これは前置きです。わたし達が会話を終え、『狩りごっこ』の会場に戻る頃には、空は董色に染まり、茜の色は地平に限りなく沈み切っていました。そして、会場につくやいなや、あちらこちらでわた

し達は質問攻めに会いました。「何をやっていたのか」ですとか、「おつかれさま」ですとか、「あたし達ともやろうよ!」というお誘いとか……。そんな色々なやり取りの後、わたしの疲労の色が強くなつたのを察したイエイヌちゃんがわたしを会場の端に立つ樹の下へと連れて行ってくれました。

「ふう……疲れましたねえ……」

わたしがそうぼやくと、イエイヌちゃんは申し訳無さそうに笑いました。

「ホントですねえ……あ、でも悪く思わないであげてください。皆新しいことにキョーミシンシンなんでしょうし……」

「なんとというか、目が覚めるずっと前でもこんなに質問攻めになったことって、無いと思います」

わたしは少し皮肉が過ぎたかと思つてごまかし笑いをあげます。イエイヌちゃんも呆れたような困つたような笑顔を再び浮かべました。

「あはは……私も初めてあんな光景見ちゃいましたよ……あつ、ゴリラさん、こんばんわ!」

イエイヌちゃんは言葉の途中で立ち上がり、ぺこりと軽くお辞儀をしました。わたしも立ち上がらなくてはと思つたのですけれど、それはゴリラさんに静止されました。

「いいっていいって、疲れてるだろ? 質問攻めもな、見てたよ。……つとこんばんは、ふたりとも」

からかうように笑つて、彼女はわたし達の隣にどつかりと腰掛けました。

「改めてお疲れ様。頑張つたな、お前達。作戦については聞かせてもらつてたし、びっくりはしなかったが……思いついてすぐあれほど出来るつてのものなかなかだな。やっぱりお前達はむ……」

彼女は言葉を途中で切り上げ、悩んだ顔になります。わたしもイエイヌちゃんもどうしたのかと思ひ顔を見合わせました。

「ど、どうしました……?」

「ん……、いや、なんでも無いよ。仲が良くなって思つたんだが、なん

と伝えたらオシヤレか悩んじまってるな」

「オシヤレ……？」

「そうか、知らんか……オシヤレとはだな——」

イエイヌちゃんが聞き返すと、ゴリラさんは『オシヤレ』について懇切丁寧に説明を始めました。わたしはあんまりオシヤレはしませんが、指す意味合いはわかりますから、彼女の言葉は殆ど聞いていませんでした。

代わりと言ってはなんですけれど、その間、わたしはぼんやりと他のフレンズさん達がジャパリまんか何かを賭けてレースをしたり追いかけてっこをしたりなんていう騒がしげなやり取りを眺めていました。

もう夕暮れというには遅い時間だからか、フレンズさん達から離れたところや樹の上で丸まって眠っていたりする子がいました。かたや、これからが本番と言わんばかりにお話に興じる子や駆け回る子、飛び回る子……眼前の光景は多少の落ち着きが生まれていたとは思いますが、まだまだ騒がしさを感じる空気でした。

そう思っていた矢先、不意に周囲の空気が変わりました。戸惑いの声をあげる子、感嘆の声をあげる子、眠ってしまった友達を起こす子……そんな色々の様子だったので、皆して空を指差していました。わたしもその空気の所為で空に視線を移します。そこには——

「イエイヌちゃん！ ゴリラさん！ あれ！」

視線の先にあるものについて思考を巡らせるよりも先に、お話に熱中していたおふたりに声をかけ、空を指差します。

「わあ……綺麗ですね……！」

イエイヌちゃんは、空に浮かぶ輝きを、彼女の双眸いっぱい煌めかせるくらいにじいっと見つめました。

「っ……」

一方で、ゴリラさんは言葉に詰まったような音を出し、顔をしかめます。まるで、見たくないものを見てしまったかのような、嫌で嫌でたまらないものを見てしまったときのような……ここでわたしが目覚めてから、ここまで嫌悪の思いを明らかにした顔を、見たことがあ

りませんでした。

「ゴ、ゴリラさん……う？ど、どうしました……う？」

だって、彼女がそんな表情をするなんて、おかしいんですもの。空に浮かぶのは、一時として同じ色を発することなく、一時として同じ形と成ることはなく、空の見せる煌めきの不思議の、自然の生み出す神秘の、その極地と言ってしまえるほど美しい輝き。月明かりを、星明かりを覆い隠す強い光。そして、つと生まれ、つと消え、儂さを湛えた、光。青に、赤に、紫に、緑に色とりどりの輝き。……きつと、めつたに見られるものでは無いはずで、そして、美しいもので……そんな存在なのですから。うっとりこそすれ、嫌な顔なんてするはずが無いのに……。

「い、いや、なんでも無い……」

そう慌てて言って、彼女は腕を組んで考え込み始めます。彼女の視線は空ではなく、地面。そんな違和感に思いを巡らせるよりも、その時のわたしは、目の前に広がる光景へのため息まじりの感動を口にするだけで精一杯でした。

けれど、なんとなくではあっても印象に残ったことは間違いないでしょう。だって、今、その時の出来事をこうして思い返しているんですから。

「……オーロラ……綺麗……」

わたしもイエイヌちゃんもじっと空を見つめて、曲芸のような光のダンスを見つめていました。そうしている内にどんどんと光の帯は薄く、弱くなり、そうして消えて無くなりました。

消えて一瞬の間があつて、辺りでは先程のような盛り上がりを見せ始めます。その全てが感動の声でした。ひとつとして何かを不安がったり、嫌がったりする声なんて無く……。

「……ゴリラちゃん、いい？」

いつの間にやらわたし達のところへ来ていたドードーさんがゴリラさんの肩を叩きます。驚いたように身体をびくりと動かしたゴリラさんは、頭を軽く搔いて、ドードーさんに頷きます。

「悪いな、ともえ、イエイヌ。ちよつとドードーと話がある。じゃあ、

また今度会おうな」

そう言つて、彼女達はその場を離れたのでした。

「……何かあつたんですかね？」

イエイヌちゃんに尋ねましたが、彼女も首をかしげます。

「うーん……そういうこと、なんですかねえ……」

彼女達の力になれないかと言う思いもありましたし、単なる好奇心もありました。けれど、ゴリラさんは『長』ですから、何か喧嘩騒ぎでも仲裁に行ったのかもしれない。きっと大したことは無いだろうと言う結果に、わたし達の答えはまとまりました。

「ようー！」

何かもやもやとした空気を抱いたわたし達に、ロードランナーさんが声をかけてきました。

「ああ、こんばんは、ロードランナーさん」

わたし達が挨拶を返すか否かくらいの食い気味な勢いで彼女は口を開きます。

「お前達、あたし達の頑張り見たよな!？」

えっへんと胸を張るロードランナーさんでしたけれども、わたしは何事かと疑問の声を出してしまいました。

「ん？ ん……う？」

ちらりと横を見るとイエイヌちゃんも不思議そうな顔をしています。

「わたし達との勝負の件……じゃないですよね……？」

わたし達の言葉にロードランナーさんはがっかりとうなだれます。ころころと見せる様子が変わるので可愛らしくもありましたが、あまりにも悔しげでなんだか申し訳なくなってきました。

「お前達なあ……あたし達と、プロングホーン様とチーターのヤツの試合があつたんだぞお！」

それは興味ありますね……。

「えっ！ そうなんですかあっ！」

イエイヌちゃんもどうやら同じようです。

「実はわたし達、ユキウサギさんのところへ行つてたんです……」

事情を説明すると、「なら仕方ない」という具合で納得はしてくれましたが、それでもなんだか悔しげな様子。

「じゃあ聞かせてください、その勝負の話」

わたしがそう促すと、ロードランナーさんはふふんと自慢げな音を出して、語り始めたのでした。その内容は、彼女らしさあふれる擬音たっぷり目の躍動感に満ちたものでした。皮肉じゃありませんよ？

面白かったんです。それに、わたしも彼女たちの姿を見たかったですとか、もしかしたらわたし達がプロングホーンさんとチーターさんと対峙出来たのでは、何ていう思いが湧いてきたくらいです。

ですけど、どうしても、ゴリラさんの振る舞いが不思議で、ちよつとだけ胸にしこりのようなものが出来ていたことに、会話のさなかに気づいたのでした。

「う、ん……」

柔らかに頭を撫でる感触に、目を覚ましました。その撫で方は、まるで生まれたばかりの赤ん坊を傷つけまいと気を配りながらも、胸に抱いた愛しさを一心に込めたような、そんな優しいものでした。そして、多分この温度と柔らかさはイエイヌちゃんのものでしょう。身に覚えがある様な気もしましたし、それに、彼女の嬉しそうな思いの籠もった吐息が聞こえています。それに、その手の動きは彼女の肩にわたしの頭を寄せるようなものなのですから。

姿勢の悪さなんか気にしないで、このまま眠ってしまいたいくらい……って、そうじゃないでしょう……！

「……イエイヌちゃん」

物思いに耽っている内に、いつの間にやらわたしは眠っていたようでした。

わたしよりも早く目を覚ましていたか、それともそもそも眠っていなかったか……それはともかくイエイヌちゃんはここぞと言わんばかりにわたしの頭を撫でていたのです。

「はい、何でしょう？」

そつとわたしの耳元で、囁くように彼女は答えました。きっとドードーさんに気を使って小声なのでしょう。ついでになんだか鼻息も感じますけれど、それはまあ良いとして……。

「……起こしてもらいたかったです」

「あつ……ごめんなさい……ともえちゃん、疲れているんだと思いまして……」

そつとしておいてくれた、ということでしょう。

「いえ、わたしも頼んでなかったですし……言い過ぎですね、ごめんなさい……お気遣い、ありがとうございます、イエイヌちゃん」

イエイ又ちゃんは軽く首を振り、「大したことはしてないです」と呟きました。

そんなやり取りの間もわたしの頭の上には彼女の手があったので、そつとその手を退かして立ち上がり、伸びをします。彼女の手が離れるのが心惜しい気もしましたが、甘えっぱなしでまた眠ってしまつては困りますからね。

イエイ又ちゃんはなんだか名残惜しそうな表情ですけれど、そういうのは『おうち』に戻ってから、『ふたりつきり』でするべきことでしょう。

「んーっ……い！」

伸びをしながら周囲を軽く見渡すと、周囲の木陰は少し伸びていて、空も透き通るような青空から少し白味がかつたような昼過ぎくらいのお空模様。休憩にはちょうどよい時間が経過していたようでした。午睡なんて贅沢ですよねえ。うふふ、眠る気はなかったのですが、なんだか得した気分です。

「よっし、じゃあ、行きましようか」

そう告げると、イエイ又ちゃんはこくりと頷きます。ドードーさんは船を漕いでいる訳では無いのですけれど、無反応でしたので、わたしはそつと彼女の肩を叩きます。

「ドードーさん、ドードーさん、出発しようと思うんですけど……大丈夫ですか……?」

けれども彼女はもにゅもにゅ言葉に成らない音を発した後、「らいじょーふー」というろれつの回っていない言葉を発しました。どうやら眠っているようですね……。

「……どうしましょう? 無理に起こすのも申し訳ないですよねえ……」

イエイ又ちゃんが困った感情をふんだんに含ませた言葉を発します。

「ふむん……」

彼女を無理矢理ではなく起こす方法……ひとつ案が思い浮かんだのですけれども、これを彼女に告げるのは後にしたかったです。

『おうち』に到着してから、しっかりと離しを詰めたかったですから。

とはいえ、ここから『おうち』までの距離がイマイチ把握しきれいていませんし、可能ならば夜営は避けたいところです。なので、休憩はしっかりとするとしても、あまり時間をかけたくないのです。そうなれば、この言葉を彼女に告げる以外にこの場をすまーとに解決する方法は無いでしょう。

「ドードーさん。クッキー、つく——」

「くつきー!?!」

凄いい勢いで目が覚めましたね。むしろびっくりしちゃいます。

「……クッキー、作るお話をしたいんですけども……」

「あ、寝ちゃってたんだねえ……わたしい……ごめんねえ……」

申し訳無さそうな表情になるドードーさんでしたが、わたしは首を振ります。

「いえいえ、わたしも眠っちゃってましたし……のんびり出来てちょうど良かったくらいです」

イエイヌちゃんもこくこくと頷いてわたしの言葉に同調します。

「さ、行きましょう? 皆さんのおかげでだいぶわたしも具合良くなりました」

わたしは座ったままのドードーさんに手を差し出し、促します。

「あんまりのんびりしてても夜になっちゃいますから、クッキーの話は歩きながらでもいいですか? 一応考えてることをお伝えしたいんです」

ドードーさんは「うん!」と元気よく返事をしてくれました。そして、わたしの手を取って、立ち上がります。

そしてすぐさま——

「行くぞー!ー おー!ー!」

ドードーさんは拳を天に突き出して元気よく宣言しました。急な大声に少しだけびっくりしちゃいましたが、わたしとイエイヌちゃんも彼女に倣います。

「おーっ!」

ドードーさんが続けます。

「くつきー！ たべるぞーっ！」

楽しいな笑顔には、絶対にクツキーが食べられるのだという確信めいた思いがあるように見えました。

「た、たべるぞーっ！」

ちよつと楽観的に過ぎるのではないかという思いや、「行くぞー！」の後に「食べるぞー！」はちよつと違うのではないかという思いで困惑気味になってしまったのは、秘密です。とまあ、そんな訳でわたし達は再び歩き始めました。

再出発してからというものの、特にアクシデントらしいアクシデントもなく、すいすいと道を進むことが出来ました。わたしの筋肉痛や疲労は先程の休憩の効果もあってか、殆どなくなっていました。

それに、話題には事欠かなかったわけですから、時間の経過や進んだ道のりを意識することもあまり無く、代わり映えのしなかった木立の景色はいつの間にか変化しています。気づけばお昼過ぎの空模様は過ぎ去り、茜色に染まった空が訪れていて、紅色の太陽から注ぐ光が、うつすらと木立に影を広げていました。

「そろそろ木立を抜けるとありがたいんですけどねえ……夜になる前に……」

わたしはそう呟いて、イエイヌちゃんに視線を送ります。すると、彼女はなんだかそわそわした様子でした。

「……ど、どうしたんですか……？」

彼女はわくわくした顔でわたしの質問に答えます。その思いを表すかのように彼女の耳はぴんと立っていましたし、尻尾も愉快そうに左右に振られています。

「ともえちゃんと一緒に『おうち』に帰れるのがなんだか嬉しくって……えへへ」

照れ隠しのように笑顔を浮かべます。

「おともだちと一緒に暮らすって、楽しそうだよねえー。あんまりそういう話は聞かないけど……羨ましいなあ……」

ドードーさんの言葉に、わたしは疑問を抱きます。

「てつきりわたし達みたいと一緒に暮らしてる方って居るのかと思っ
てました……」

「あー……そういえば珍しいかも、ですねえ……」

ドードーさんもイエイヌちゃんも「うーん」と声を上げ、考え込み
ます。

「ナワバリもあるしねえ……ケンカとか争い事なんてほとんど無い
し、遊びに行ったりとか、お泊りだつてするけど……いっしょに『暮
らす』ってなると……うーん……」

「起きてる時間とか、好きな場所とか、そういうのもありますからね
……」

イエイヌちゃんがドードーさんの言葉に付け足すように意見を述
べました。

「そうなんですかあ……色々難しいですねえ……」

例えば棲家の問題——樹の上で過ごす子もいれば、地面に穴を掘る
子もいる、木陰で眠る子、水辺でないと安心できない子——そんな
様々な事情が皆さんそれぞれにあるわけですからね。

他にも食べ物の問題だつてあるのかもしれない。もちろん、わた
しの知る限りでは皆さんジャパリまんを食べて過ごしていますし、自
然の動物とは異なつた食生活なのは確か。

ですけど、もしかしたら、ジャパリまんの中身はフレンズになる
前の子に合わせて作っているの、ある程度親しい食性の子達がまと
まっていた方が手間を減らせるという『ヒト』の思惑もあつたのかも
しれません。今はまとめて配っているのが主流のようですけれど、そ
の頃に決まつたナワバリや棲家が今でも引き継がれている……なん
てこともありえそうですね。

ともかく、気候や食性、活動時間、住居……もつともつといろんな
都合や条件があつて、今のフレンズさん達の生活があるのでしよう。
パークという存在がどれほど難しい条件の上で成り立っているのか
ということ、痛感してしまいます。

「なわばりが近くだから殆ど一緒に暮らしてるような仲良しさんも居
るよお？ さばんなの方に居る子とか、けつこーそんな感じかもお

……？」

案外、単に寝たり休んだりという場所に固執しない、というだけかもしれないね。ともかく、答えを見つけるには少しばかり難しい問題のようです。イエイヌちゃんとの何の違和感も無く生活しているわたしが答えられないというのも少し変な気もしますが……。

「ふんふん……それと、もしかしたら、私がヒトと会いたかったというのも関係あるかもですね！」

ちよつとだけ、「ヒトなら誰でも良かったんですか？」とイジワルな質問をしたくもなりましたが、それはぐつとこらえて……。だって、イエイヌちゃんったら、信頼しきった笑顔でわたしを見つめるんですもの。

「そう、かもしれないですね……。ですけど、わたしはきつとイエイヌちゃんだったから、一緒に暮らせているんだと思いますよ？」

わたしはイエイヌちゃんに、ふつと微笑み返します。彼女の顔が少し赤いのは、きつと夕日の所為でしょう。それと、慌てふためいたように「わた、わた」なんて小さな声も聞こえましたが、追求するのは止めましょう。イエイヌちゃん、駆け出してしまいそうですからね。

「いいねえいいねえ……。仲良きことは美しきかなあ……」

なんだか蝉の鳴き声みたい……。なんてツツコミは野暮ですね……。

とそんな下らないことを考えていると、イエイヌちゃんがぴくりと耳を動かして駆け出します。

「ちよ、ちよつと、イエイヌちゃん？」

その速度は決して速いものではなかったのですけれども、あまりに唐突でしたので、びっくりしてしまいました。けれど、彼女の後ろ姿を見送る内に、木立はまばらになって行き、彼女が駆け出した理由を、わたしも遅ればせながら、察することが出来ました。

その意図に気付いたわたしも小走りになって彼女の跡を追います。ドードーさんもわたしに少し遅れて……。そして木立を抜けた先で、イエイヌちゃんは前を指差していました。

「ともえちゃん！ ドードーさん！」

そこは、わたしが目覚めてから一番長い間居た場所。

爽やかで、暖かな風が生まれる場所。そうして生まれた風が、草むらや木の葉をなびかせ、優しい音の重なりを生み出す場所。大切な彼女の大切な場所がある場所。つまり、草原の光景でした。

沈んだ夕日を受けて影を生み出す草むらは、日中の一面に広がる新緑では無く、空の色に染まったかの様な茜色となっていました。そして、長い陽光の為に草むらの陰は色濃く、まるで浮かび上がっているかのようです。

たった一、二週間ほどしか滞在していなかった筈なのに、たった数日ここを離れたただけなのに、どうしてこんなに懐かしいんでしょう？「なんだか少し離れてただけなのに懐かしいですねえ……」

イエイヌちゃんはわたしの言葉に頷きます。

「ええ、本当に……」

旅が終わったという訳ではありませんけれど、どうしてかしみじみ思っています。

「ふう、ふう……ようやくだねえ……」

少し遅れて追いついてきたドードーさんは、少しだけ息をきらしていました。

わたしは彼女の言葉に同意しながら、辺りを見回します。多分、この辺りはわたしが海に行く途中で通った道だと思われれます。均された土道の向こう側に広がる草原。その中にぼつんとひとつの大きい樹がありますから……あそこが以前わたしが休憩した場所なら、もう少しで広場が見えてくる筈です。

「あと、もうちよつとですね、イエイヌちゃん、ドードーさん！」

「はい！……ええつと——」

イエイヌちゃんは辺りをきよろきよろと見回してから、太陽の沈み具合を確認します。

「——夜になる前には『おうち』につくとおもいます！」

えっへんと胸を張って断言するイエイヌちゃん。この辺りの土地勘はまだわたしにはありませんから、きつとイエイヌちゃんの言うことは正しいのでしょうか。

「わかりました……！ 頑張らましよう！」

わたしの言葉の後に、「おー！」という声かふたつ、沸き起こったのでした。

イエイヌちゃんの言う通り、太陽が沈み切る前にわたし達は『おうち』に到着しました。

がちやり、という音を響かせながら、ドアを開きます。わたしとイエイヌちゃんは「ただいまー」と誰も居ないのに挨拶をし、それを見たドードーさんは少しだけ戸惑った様子を見せながらも「おじやましまあす」と挨拶をしてくれました。

「――ふう、帰ってきたあー……」

思わずそう呟いてわたしは荷物を部屋の隅に置きます。

「あ、じゃあ私はお水用意しますねー」

イエイヌちゃんはそう言っただけでとてとお台所の方へ……行く前に、うっかり忘れていたのでしよう、自分の肩から下げた寝袋を、わたしの寝袋の隣に置きました。

「はい、お願いしますねー」

「ありがとうございますー」

わたしとドードーさんが彼女を視線だけで見送った後、ドードーさんは「どうしたら良いのだろうか？」という具合に周囲をきよろきよろとします。好奇心もあるんでしょうけれど、こういった場所に来ることも少なかったのかもしれませんが。

「ああ、失礼しました。どうぞ、おかけください」

わたしはそう言っただけで椅子を引き、着席を促します。

「ありがとうございます、何かから何まで……」

「いえいえ、折角のお客様ですもの、楽しんでください」

と、彼女が座った頃合いに、イエイヌちゃんはコップに水を入れて持ってきてくれました。わたしはイエイヌちゃんに「どうも」と告げて、椅子に腰掛けます。その言葉にイエイヌちゃんは「いえいえー」なんて言ったり……そんなやり取りをしながら、わたしは部屋を見回していました。

何も変わらない『おうち』の中……まあ大きく変化してても誰か

入ってきたのかと思っちゃんいますから、良いんですけども……変わることもなければ、変える方も居ないという、不変的であるというところが、何よりも懐かしさを抱かせ、そして安心感を与えてくれ……ん？

「イエイヌちゃん？ お話中申し訳ないんですけど……」

「はい？」

イエイヌちゃんとドードーさんは「水の出どころ」に関してお話をしていました。ただ、事が事なので、割り込むようになってしまいました。イエイヌちゃんに尋ねます。

「誰か知らない方の臭いとか、します？」

「どこですか……？ んー……」

イエイヌちゃんは再び立ち上がり、辺りをスンスンと嗅ぎながら探ります。

「どうしたのお……？」

「いえ……別になんてことは無いんですけど、違和感があつて……」

このパークで泥棒だとかそんな心配はする必要無いでしょう。ですけれど、わたし達が居ない間に誰かここに入っていたのなら何か用事があったりですか、困っていることがあるのかもしれないからね。ご飯や寝るところ、過ぐすところ……そんなことに困っている方が居るならばお手伝いしたいですし……。

「……特に無いですよ？ 私ともえちゃん、ドードーさんの臭いしかしませんね……」

イエイヌちゃんが戻ってきて言います。

「そうですか……んー、気の所為だったんですかね……失礼しました……」

「何か気になることでもありました……？」

イエイヌちゃんの間にわたしはベッドを指差して答えます。

「出発した時よりベッドが荒れてるような気がしたんですよ……誰か来たのかな？ と思ひまして……」

「んー……？」

イエイヌちゃんはベッドをじいつと見つめて考え込みます。と、彼

女は身体をぴくりとさせました。

「何か思い当たることでもありましたか？」

わたしが尋ねると、彼女はわたしの顔を見ないで応じました。

「い、いえ、な、何も……？　き、気の所為ですよ、気の所為……。臭いも無いですし、皆、私のナワバリだつて知ってますから、はいっ！」
何か思い当たること、あるんでしょうねえ……。イエイヌちゃんの尻尾はなんだか忙しなく動いていますし、目を合わせようとしませんし。まあ、無理に聞き出そうとは思いませんけども、彼女は何か知っています。

何か隠し事してないよね？　という思いも込めて、三秒ほど彼女の顔をじつと見つめていましたが、イエイヌちゃんは妙に目線を合わせようとしません。

「……イエイヌちゃんがそういうなら、そうなんでしょうね」

わたしがそう言うと、彼女の尻尾は安心したかのように力が抜けていきました。隠し事してるの、バレバレって感じですよねえ。大事でしたら彼女も隠したりしないで、話してくれるはずですから、大した問題では無いのでしょうかね。

わたしはそう納得して、言います。

「お話、邪魔しちゃってごめんなさい、ドードーさん、イエイヌちゃん」
「大丈夫だよお、ともえちゃん。……あ、そうであつ！　この後、なにかするう？」

この後の予定……。とりあえず――

「お風呂、入りたいですねえ……」

水で身体を拭つたりですとか、温めのシャワーですとか、色々やりはしましたが、お風呂には入れておりません。わたし自信、そんなにきれい好きかと言われると首をかしげるのですけれども、でもしばらく温かいお湯には使っていないというのは何とも気になるもの。

「お風呂おっ！」

ドードーさんはご存知のようでした。

「懐かしいなあ……うんうん……入れるのかあ……嬉しいなあ……」

ドードーさんは、ふんふんと楽しげに鼻を鳴らします。合わせて身

体も小さく揺れていたのですけれども、きつと足をぱたぱた動かしているのでしょうか。

「……ドードーさんはお風呂嫌じゃないんですね」

「うんー。わたしは身体温めるの好きだからねえー。もしかしたら、他の子はあるまり好きじゃないかもだけどお……そういう話、したことないからわからないかなあ……」

ドードーさんの返事に、何とも意外さを覚えます。

「イエイヌちゃんは——」

彼女の方を見ると、何ともそわそわした感じ。

「き、嫌いじゃないんですよ……？　ただ、自分のにおいが変わっちゃう気がして……」

あー、なるほど。イヌのフレンズさんだからでしょうか？　ヒトであるわたしには感覚が理解できないものですね、『におい』というものへの立場の違いというかなんとか、納得出来ないことも無いですね。

「そういう理由だったんですね……毎度そわそわしてるの……てつきり水がきらいとか、そういうことかと……」

イエイヌちゃんは首を振ります。

「全然平気ですよ？　ただ落ち着かないってだけです。それも出発の前くらいはへーきになってきましたし……」

彼女に無理をさせていたのでは、と思いましたが、それほど無理はしていない様子です。

「それに温かいお湯も気持ちいいですし、何より、ともえちゃんとかについて居られるので嬉しいですから……」

イエイヌちゃんは、わたしが少しだけ抱いた申し訳無さが吹き飛んでしまうような朗らかな笑顔でした。とはいえ、そんな笑顔でなんとまあ恥ずかしいことを……。聞いてるわたしの方が顔を赤らめてしまいそうなくらいです。

「そ、そうですか……」

「ともえちゃん、照れてるのお？　やっぱり嬉しいのお？」

クスクスと茶化すように笑うドードーさん。どうやら形勢が悪く

なってきたようです。

「ち、ちが……照れてなんか……。と、当然……嬉しい、ですけど……」
んふふーという、照れているやら興奮しているやらよくわからない音がイエイヌちゃんの方から聞こえてきましたが、あえて無視しましょう。ええ。

「……そ、それよりも！」

ちよつと大きな声が出てしまった気がしましたので、一拍置きます。

「し、失礼しました……。明日からの予定なんですけど——」

確認と相談も兼ねて、わたしはイエイヌちゃんとドードーさんに尋ねます。

まず、明日はのんびりしようということと皆の合意が出来ました。半日とはいえ歩き続けた訳ですし、わたしはそもそも結構な体力の消耗をしている訳ですから、それを皆さん考慮してくれたのでしよう。

その次の日は、ゴリラさんのところに行き、クッキー作りの為の材料や機材を確保出来るかどうかの確認をしようという予定になりました。

今まで彼女のところへ向かうということ考えたことはなかったですし、その道のりをイエイヌちゃんも知りません。けれど、ドードーさんは元々道のりを知っていましたので、こちらも大丈夫。帰りの途中でドードーさんはそのままワバリに帰るそうです。単にそうした方が近いから、というのもありますし、お見送りするには遠い距離になってしまう以上、ゴリラさんのところで別れた方が無難なのでしょう。

最後に、どれくらいの間ここに居るのか、という問題。

こちらは明日から一週間ほどの予定で決まりました。記憶を取り戻す為の旅。それを続けることは変わりません。けれど、ここで身体を休めたり、次の行き先を決めたりというのも大事な話です。

今の所、行くアテがありませんからね。ゴリラさんとの相談の結果決まるかもしれませんが、決まらないかもしれません。けれど、旅に出たい……いいえ、はつきりと言いましよう、記憶を取り戻したいと

いう思いは依然として胸の中で燻っています。その為のひとつの手
段として、旅をするのだということとはしっかりと認識し直しません
と。

『記憶を取り戻す』ということ。それは、今となつては、絶対に成し
得たいという願いではないです。ですが、取り戻したいと思ひます
し、その為に出来ることはやれるだけやりたいのです。

十分ほどで相談は終わりました。

「——と言うワケで、相談は終わりですね……。それじゃあ、お風呂に
します？ それともご飯にします？」

確か、ジャパリマンの余りはあつた筈……。わたしは隅においたカ
バンからジャパリマンをみつつ取り出し、テーブルに置きます。

「ごはんー」

ドードーさんが迷いなく答え、イエイヌちゃんも、わたしもそれに
同意します。

ジャパリマンをそれぞれ手に取り、もぐもぐと各々のペースで食
べ、その後はお風呂……。なんというか、今まで予定（というよりも、
すべき事、でしょうか？）で埋め尽くされていたかのような日々が嘘
のような気持ちです。

もちろん、ヒトにとって最も過ごしやすいであろう場所に、休息の
為に、居るのでからそれも当然かもしれませんね。

では、イエイヌちゃんやドードーさんはどうなんでしょう？ この
『おうち』は彼女たちにとって過ごしやすい場所なのでしょうか？

というか……。そもそもイエイヌちゃんは、何故ここに居たんでしょ
う？ 「目が覚めたら——」という話は聞いていましたけれど……。
それに、何故、ヒトが居ない世界なのに、ここだけこんなに機能や衛
生がしっかりとしているのでしょうか？ 偶然にしては出来すぎてい
る気もします。ヒトの痕跡が残っている場所はいくつもありました。
海でのシャワーやお店の電飾。サバンナでの放送用機器……。けれ
どもここほど充実していない印象があります。

きつと考えても答えは出ないでしょうし、案外大した理由じゃない
かもしれません。わたしは胸に浮かんだ疑問を、ジャパリマンと一緒

に飲み込みます。

この後は待ちに待ったお風呂の時間ですからね。余計な疑問や心配を持ち込みたくありませんし。それに、ドードーさんだって居るんです。せつかくのお泊りですもの、楽しい時間にしたいののはきつとみんな同じ筈。考え事に夢中になって、ぼうつとする余裕なんて、ありませんよね。

ドードーさんが『おうち』に来た日の翌々日。つまり、ゴリラさんに会いに行く日が訪れました。

空はあいにくの曇り模様でしたけれども、暑くもなく寒くもなくと言った具合の気温で、長距離の移動にはちょうど良い塩梅の天気。時折、妙に冷たい風が吹くので、それが少しばかり困りますけれども、身体を動かす始めたなら問題は無いでしょう。

「ううっ……肌寒いですね……」

『おうち』から一歩外に出たのですけれど、ちょうど冷たい風がびゅうと一筋吹きました。その冷たさにわたしが身体を震わせると、イエヌちゃんが心配そうに尋ねます。

「大丈夫ですか……？ やっぱり今日は『おうち』に居ます……？」「どうするう……？ わたしは大丈夫だけとお……」

ドードーさんもイエヌちゃんも心配しすぎですって。

「平気です。これくらいなら動けば暑いくらいでしょうし、クツキーの件がどうなるかで旅先が決まりますから、なるべく早いほうが準備もできます。それに何より、明日も天気悪いかもですし」

ドードーさんの記憶を頼りに考えを進めた結果、幾つかわかったことがありました。それは、材料についてはゴリラさん次第のものが多いが、自然にある植物を利用できる可能性があるということ。そして、機材はある『ちほー』に行けば使えるものがあるのではないかと、という二点です。

「別の『ちほー』に行くなら、どんな場所にしたって準備しないとですし、材料だって遠出しなくちゃいけない可能性もありますから……」

ドードーさんは、悩んだ顔でわたしに尋ねます。

「わたしの所為で無理してない……？」

わたしは笑顔で首を振り、その言葉を否定しました。

「誰かのお役に立ちたいんです。これくらい、全然。……それにクツキー作ってみたいっていうのはわたしのワガママですよ？ ドードーさんのおかげで思いつきましたけど、でも、作りたいのはわたし

ですもの」

「そっかあ……えへへ、ありがとうねえ」

ドードーさんの言葉の後、少しの間を置いてから、イエイヌちゃんが尋ねます。

「……そのう、ともえちゃん」

「どうかしました？」

ほんの少し迷った様子を見せてから、イエイヌちゃんは口を開きました。

「その、セントラルへは……私も一緒に行つて良いんですね……？」

「へ……？　当然じゃないですか。むしろ、一緒に来てください？」

何を今更……と思つたのですけれども、旅に出た初日のやり取りを思い出すとイエイヌちゃんが不安になるのもわかる気がしてきました……。あの時は結構ひどいことしちゃつた気がします。

イエイヌちゃんはわたしの言葉にほっと胸を撫で下ろしました。

「……行きましようか。雨が振らないと良いんですけど……」

ドードーさんに尋ねると、彼女は外をじつと見つめてから、目を閉じて集中します。

「……うん。雨は大丈夫そう」

イエイヌちゃんもドードーさんの言葉に同意します。

「雨の臭いもしませんし、空気もそんなに湿つて無いですから、すぐに雨になることは無いはずですよ。ずっと後でどうなるかはわかりませんが……」

おふたりがそういうなら、天気の方は大丈夫そうですね。雨の臭い、と言われてもイマイチぴんと来ませんが、ここで長く暮らし、そしてわたしなんかよりもずっと優れた感覚を持つているおふたりの言葉は、十分信用に値します。

「それにね、ゴリラちゃんのおうちはけっこう近いんだよ？　天気が変わる前には到着するんじゃないかなあ」

ふんふん、なるほど……。あ、そういえば……

「ドードーさん、聞いてなかったのも変なんですけど、どっち方向に行くんですか？」

「んーとねえ……ここからだとお……」

彼女は山の方を指差しました。

「あっちの方！ 林と山のあいだ……くらい？」

わたしはドードーさんの説明を頭の中に浮かべた地図に当てはめます。彼女の言う通り、距離としてはさほど遠くありません。おそらく、わたしが眠っていた『あの場所』と距離は大差無いでしょう。

「ふむふむ……案内、お願いしますね」

ドードーさんは「任せてえ！」と胸をとんと叩いて自信ありげな様子を見せます。

「じゃあ、出発ですー！」

そうしてわたし達は歩き始めました。

曇り空の下を歩くというのは何ともぼんやりした気持ちになるものです。もちろん、イエイヌちゃんやドードーさんと一緒におしゃべりをしながら歩くというのは楽しいものです。ただ、それとは別に気持ちが悪く盛り上がりがないというかなんというか……。

たとえ風が冷たかろうと、燦々と輝く太陽や、底抜けに青い空を見ることが出来れば、気持ちもしゃつきりとするのですけれどもね……。曇り空というのは、なんだか空の底に自分たちが居るようで、まるで空が落ちてきてしまうようで、なかなか心が浮き立つこともありません。

それに、自分が明日から取り組むべき使命を確認する為にゴリラさんに会いに行くという意味合いもありますから、緊張しているのかもしれないですね。

木立に沿って山へと続く道を歩いていると、分かれ道に出ました。木立から離れる方へ曲がれば『あの場所』の方向です。『あの場所』のことを意識すると、どうしても胸がざわめきます。何か、まだあそこに残っているのかもしれないという思いや、わたしが何故あそこに居たのかなんていう答えの出ない問。そんなものが否が応でも胸に浮かんできてしまいます。

少し先を歩いて、案内をしているドードーさんが、分かれ道の真ん中に立ってわたし達に振り返って尋ねます。

「どーっちだっ?」

イタズラを思いついた子供の笑顔。彼女はまさにそんな茶目つ気にあふれる表情をしていました。

「わかるわけ無いじゃないですかあ……。臭いをたどれば……。うーん……」

イエイヌちゃんは目を閉じて地面に顔を近づけて臭いを嗅いでいます。その結果が出るよりも先に、なぜかわたしの足は動いていました。自然と、勝手に、まるで蛇口をひねって水を出すという行為に一切の違和感を抱かなかつたのと同じくらい、当然のものとして、『あの場所』とは反対の方向へと足を踏み出していたのです。

その不思議さに、わたし自身に驚きが遅れてやってきたくらいでした。

「……! せいなあい。ともえちゃん、知ってたのお……?」

「いや、知らないですよ。多分、勘……ですかねえ」

沸き起こる違和感。文字通り『勘』としか言いようが無いのですけれども、当てずっぽうなら、何か一言言ってから選ぶでしょう。そういう『遊び』なのですから。それでも自然と足が動いたのは、何故……?

「それに、こっちか、あっちかしか無いじゃないですか、偶然ですよ偶然」

単に『あの場所』に行きたくなかったから、きつとこっちに踏み出したんでしよう。そう思って、自分を納得させます。

そんなやり取りがあつて、再びドードーさんが先を歩き始めます。

「もうちよつとしたら、ゴリラちゃんのおうち見えてくるかなあー」

ドードーさんが案内がてら呟きます。

「そういえば、どんなところなんですか?」

イエイヌちゃんが好奇心を抑えきれず、尋ねます。ちようどわたしも興味を持ったところです。『長』という立場もありますし、ヒトの居た頃を知っている方です。ですから、他のフレンズさん達とは違ったところに住んでいそうなものですが……。

「んーとねえ……。白くてでっかい……。かなあ……。?」

うーん、わかりませんね。

ただ、多分なのですけれども、自然にあるものを自分なりに加工して作ったものではなさそうです。ヒトが居た、使っていた建物を利用しているのでしょうかね。

「あつー、あれあれえ！」

彼女が指差す先を、覗き込むようにしてわたし達は観察します。

その先には、白く角張った建物の頂点が見えるばかりです。ただ、ほんの少し見えるだけでもそれがヒトによって作られた何らかの施設であることは察せられましたし、何よりも、『あの場所』と似通った雰囲気を感じているように思われました。

「なんだか、ともえちゃんが居たところに似てる……：……ような……」

うーんと眉間にシワを寄せて遠くを見るイエイヌちゃんがぼそりと呟きました。

その言葉を聞いて、わたしも自分の考えを伝えます。

「わたしもそんな気がします……：……ヒトが作った建物なのは絶対なんでしょうけど、何のための施設なのかはわかりませんね……」

「んー……：……ゴリラちゃんもそんな事言ってたっけなあ……。今は本当に寝泊まりしてるだけって話だけど、昔はヒトがいっぱい出入りしてたってえ」

何かの研究施設か、それともパークの『お客さん』が利用した娯楽施設か……：……そんなことを悩んでいる内に、わたし達はゴリラさんの棲家に到着したのでした。

山の麓で、稜線に抱かれるようにして、その建物がありました。殆ど手つかずのようにさえ思える山の姿は、うっすらと雪が積もっているからか、曇り空に溶け合うようにしてそびえています。加えて、光に乏しい天気のために、木立も普段よりも鬱蒼としていて、それら大自らの存在を普段よりも威圧的に感じてしまいます。

けれど、異質なくらい白いその建物は、木立を一望し、山を背にし、大自然の畏怖に対抗せんとするヒトの力と意思を感じさせました。その建物は左右対称のシルエットをしていて、さながら『洋館』と呼んで差し支えないような外見です。その中心に大きな扉がありまし

た。

扉は木製の様で、風雨の為かそれともフレンズさん達がちよつかいでも出したのか、ところどころ欠けていたり染みができていたりしており、経過した時間を思わせませす。それでも、濃い茶色に艶が感じられる程度にはかつての意匠の名残があり、同時に荘厳さも同様に思わせるものでした。

色褪せた様子が無いことから、壁面の色合いは当時のままなのかもしれない。ですけれど、地面に近いところでは壁に蔦が這ってしましたし、一階の窓ガラスは殆どホコリが被っていて、薄汚れています。やはり、管理は最低限度なのでしょう。

少し歩みを進めて、敷地の中をぐるりと見回します。建物の規模の割に門や庭の類はほとんどありません。建物の壁や扉に繋がる道は、木立や山、あるいは道にすぐさま繋がっていましたし、飾り気もまるでありません。全体的に角張った、極めて実用的な建築なのか、前述した白い壁とガラス、そして、多少の植え込みがある程度です。

それはここが遊興の類を目的とした施設では無いということを示していました。それに、厳重な門や囲いが無い事も含めて考えると、入場者を制限、管理する必要があるような、重要だったり秘匿する必要がある研究を行っていた施設では無いということもわかります。「おじやましあーす」

ドードーさんが扉をぎいっと押し開けます。わたしとイエイヌちゃんもそれに続いて中に入ります。

中は電気が着いていないから薄暗く、眼が慣れるまで少しの間を要しました。眼が慣れてから廊下を見回すと、下駄箱が右手側に置かれ、そこから先は一段ばかり高くなっていました。床面はつるりとなめらかなもので、壁面はざらりとした壁紙が中心。そして、ところどころにコルクの板がある程度。また、外装と同様に、白を基調とした内装で、奥の方には金属の扉が幾つかありましたが、その詳細は距離と薄暗さの為に判断が着きません。天井や、ところどころにある柱のような出っ張りはないかの塗装がされているのか、うつすらと光沢を放っておりましたが、天井以外に、灯になるような機材は殆どあ

りません。全体としては白を基調としたシンプルな内装、という感じでしょうか……。

幾分寂れているというか管理がなされていない様ですけど、決して不潔な印象は感じませんでした。ラッキービーストさんが最低限の掃除はしているのかもしれないですね。また、無機質さをいやでも感じてしまうくらいの飾り気のなさのためか、『ここで暮らす』となると少しばかり落ち着かなさそうだなあ、とも思います。

「んー？ ドードーかあ……？」

そんな返事とともに、一番近くにある引き戸が開かれました。ゴリラさんです。

「やつほーこんにちわあー」

ドードーさんは楽しげに手を振ります。

「あ……ど、どうも……お邪魔します」

「こんにちは、ゴリラさん」

わたしとイエイヌちゃんも挨拶をすると、事情を察したのでしよう、ゴリラさんはわたし達に中に入るように促します。

「お前たちもか、よく来たな。まあ、入れ。それと、ともえ、靴は脱がなくてもいいぞ」

「だ、大丈夫なんですか？」

わたしは靴を脱ごうとしやがみこんでいたのですけれども、ゴリラさんの制止の言葉に身体が固まります。

「ん。他のヤツは靴を脱がんからな。むしろお前の靴下が汚れる」

あはは……なるほど……。

「ではお言葉に甘えて……お邪魔します」

彼女はそのまま、先程出てきた部屋までわたし達を案内します。

部屋は窓が多く、外の光が入っている為に廊下よりも多少明るく感じられました。部屋の片隅にはボロボロになったソファアがあり、その隣には小さなキャビネットがあります。キャビネットの上には色あせた塗装のポットがあり、また、小さく傘を被ったランプがありました。

そこから離れて部屋の中心部には数脚の椅子と大きな丸机が鎮座

しています。机の上には新しいジャパリまんがふたつと、食べかけのものがひとつ置かれていました。きつと食事中だったんでしょね。「寝起きで悪いな。とりあえず椅子に座って待っててくれ。お茶用意するよ」

彼女はそう言つて、キャビネットの上のポットを持ち、部屋を再び出ていきました。

ゴリラさんにお礼を告げ、わたし達は椅子に腰掛けます。ぐるりと部屋を見回すと、窓ガラスの無い壁にはつるりとした真っ白な大きな板がかけられていて、天井には不思議なごつごつした機械がありました。

「……ホワイトボードと、プロジェクト……?」

考えてみれば、ここはあまりにも広すぎます。十数人は余裕を持つてヒトもレンズさんも入れるくらいの広さがあります。昔は何かの集まりに使われていた部屋なのでしょうか?

「なんですか? それ」

イエイヌちゃんが不思議そうに首を傾げます。

「ええつと……あれは文字を書く板で、上のは映像……そうですね、動く絵を出す機械です」

ホワイトボードの方はどうやら納得言ったようですけれども、プロジェクトの方はいまいち納得が行かないようです。疑問を顕にしていたイエイヌちゃんの表情は、眉間にシワが寄った渋い顔になっています。

「あはは……説明難しいんですよ、上のヤツは……」

ドードーさんもお手伝いと言わんばかりに口を開きます。

「んーとねえ……わたしも違うやつだけど似たような見たよお。あにめつて言っただけど……うん、本物を見るのが一番わかりやすい……のかなあ?」

アニメはちよつと違う気もしましたが、その言葉のおかげでひとつ思いつきました。

「えいぞー、あにめ……?」

イエイヌちゃんはぼんやりと繰り返し首を捻って悩んでいます。

わたしはそんな彼女を横目にスケッチブックを取り出し、小さく絵を書いています。

「ともえちゃん？ 何してるのお？」

ドードーさんはそう言っただけの手元を覗き込みます。イエイ又ちゃんも考えを中断してわたしの真横へ。

「すぐできますよ。これなら多分わかると思うので……」

わたしが絵を書き進めている内に、ゴリラさんが帰ってきました。「待たせたな……はいよ、ハーブティーだ……って何やってるんだ？」

ゴリラさんもテーブル越しに身体を乗り出してわたしの手元を覗き込んで、観察します。

「……なんだ、パラ——」

「黙っててください」

ネタバレされるのだけは勘弁願います。

「お、おう……悪い……」

彼女は椅子に深く座り直し、お茶をすすって何事か呟きます。「変わらない」だかなんだかとは聞こえましたが、スルーですスルー。

わたしの手元に置かれたお茶が冷えるよりかは早く、わたしの作業が終わりました。

「ふう。完成です……！」

「お、できたか」

「おお……！ ところで、何なんですか？ 同じ絵をいっぱい描いてましたけど……」

「見ればわかるよお。丁寧に描いてたもんねえ、上手くいくといいねえ、ともえちゃん」

どうやらゴリラさんの言葉もあつてか、ドードーさんは答えを察したようですけれど……。

「ゴリラさん、その、さっきは失礼しました……」

出来栄えを確認するよりも先に、わたしはゴリラさんへの先程の失礼な発言を謝罪します。

「いや、あれは俺が悪かったよ。すまん」

一拍置いて、彼女は言葉を続けます。

「まあ、びつくりさせられるのはイエイヌだけだろうけどな。俺とドードーは知ってるっちゃ知ってるからな。だろ?」

「イジワルなと言いますねえ……」

口の端を「ふふっ」と釣り上げていたずらっぽい笑みを浮かべるゴリラさんをわたしは半目で見つめます。

「えへへえ……気付いちやったからなあ……わたしもお……なんだかごめんねえ」

「いえいえ謝ることじゃないですよ。思いついたのはドードーさんのおかげですもの」

わたしはドードーさんにそう伝え、スケッチブックを手に取ります。

「イエイヌちゃん、見ててくださいね」

イエイヌちゃんは不思議そうな表情のまま、スケッチブックを見つめます。そんな彼女の様子を見て、わたしはぱらぱらとページを弾くようにめくり始めました。試し書き無しの一発勝負で少しだけ不安でしたが、どうやら上手く行ったようです。

「わあっ……動いて……」

歓心と疑問の入り混じった感嘆の声。これが聞きたかったんです。「本当だあ、綺麗に動いてるねえ」

二度、三度と繰り返しめくりまわります。その間中、イエイヌちゃんは瞳をきらきらさせてスケッチブックを見つめていたのでした。わたしは作ったものの出来栄えに満足げに鼻を鳴らして、スケッチブックを閉じます。

「これがアニメの例……ですかね。ちよつと違うかもしれませんが、映像っていうのも、だいたいこんな感じですよ。これがもつと綺麗にできて、音や色が着いて……それがドードーさんの知ってるものなんだと思います」

イエイヌちゃんはわたしの説明で少しだけ納得してくれたのでしよう。「ほへえ」という不思議な声をあげました。

場が少し落ち着いて頃に、ゴリラさんがハーブティーをひと口含んでから、わたし達に他図ます。

「……で、今日は何のようだ？ 別にパラパラマンガを見せて、そのついでのお茶つて訳じゃないだろ？」

「そうですね。……ええっと、お願いがあつて来たんです。ね、イエイヌちゃん、ドードーさん」

同意を得ようと順番に顔を見合わせます。

おふたりが頷く様子をじっくりと観察するように見つめてから、ゴリラさんは言います。

「んー……出来ることと出来ないことと、色々あるぞ？ それにあんまりともえを特別扱いできません。お前は忘れてるが、昔色々あつた仲だ。やってやりたいことはあるが……これでも一応、『長』だからな」
わたしの過去に繋がりがあつたこと、その事実は結構な驚きではありましたが、意外ではありません。何しろわたしの過去を、彼女は知っているのですから。それに、今の目的は『過去』ではありませんから、質問するのは後にしましょう。

「——実は、クッキーを作りたいと思ってるんです。そのために材料が必要なんですけど……」

わたしは言葉を選ぼうと言葉を一旦切ります。どうやらゴリラさんは腕を組んで頷いております。きつと『続ける』という意味でしょう。

「わたし達では用意できないものがありまして、それをお願いできないかなーと……」

不安に思つてわたしはイエイヌちゃんとドードーさんの顔をちらりと見ます。彼女たちも不安と期待がないまぜになつた表情をしています。

「そうだな……出来ないことは無い。ラッキービーストに話をすればなんとかなるだろうが……何が必要だ？ 言ってみろ」

わたしは『おうち』で考えた材料を思い出しながら、彼女に伝えます。

「小麦粉、牛乳、砂糖……思いつくのは……はい、これくらいです」

ゴリラさんは、わたしの言葉をゆっくりと噛みしめるように確認し、口を開きます。

「それなら大丈夫だ」

「良かったあ……」

ゴリラさんの言葉に、わたし達は胸を撫で下ろします。そして、『クッキーが作れる』という事実喜びを抱こうとしたのですが……。「ただそれだけで良いのか？ 味付けとか香り付けとか……そういうのとか、後、細かい作り方はわかってるのか？ それに、どこで作る？」

確かにまだ漠然と『出来るか否か』という問題が解決したに過ぎません。わたしは、今わかつている範囲で彼女に計画を話します。

「味付けや香り付けは、森の木の実とか使うつもりです。ただ……細かいレシピは手元に無いので今から調べられないかと思ってます。『としゃかん』があるとドードーさんから聞いているので、そこにレシピ本があるかなあと考えてまして……」

ゴリラさんの反応を伺うと、やっぱり腕を組んで頷いています。わたしは否定されるようなことを言っていないということに安堵の思いを抱きました。わたしは緊張を解すためにお茶をひと口飲んでから、言葉を続けます。

「作る場所ですが……わたし達の『おうち』だと作れなさそうなので、別の所に……『セントラル』でしたっけ？」

わたしは確認しようとドードーさんの方を伺います。彼女はこくりと頷いたのですが――

「ダメだ」

「な、なんでですか……？」

ゴリラさんはわたしと視線を合わせないように顔を逸しながら続けます。

「あそこは……お前は特に、行かないほうが良い」

その言葉に、ドードーさんが答えます。

「あそこ、安全になったって皆言ってるよお……？」

何かを察したのか、イエイヌちゃんも口を開きます。

「セルリアンなら、私だって一緒に行くんです。私がともえちゃんを守れます……守ります……！」

おふたりの言葉にゴリラさんは首を振って否定します。

「セルリアンはだいぶ減った。あそこだけじゃない、ここには、もう殆どいない。ただ問題はそこじゃないんだよ、ドードー、イエイヌ……」心配なのか、それとも恐怖なのか……それさえ判然としない、震えそうな彼女の言葉。数秒の間、辺りには沈黙が漂いました。沈黙は「よし」というゴリラさんの声で打ち破られます。

「……わかった。行っても良い」

「本当ですか!？」

わたしはゴリラさんの顔を見て聞き返します。彼女は真剣な面持ちで、わたしを見つめ返していて、その為にはわたしはそれ以上何も言うこと無く、彼女の目を見つめて、言葉を待ちます。

「ただ、幾つか条件がある」

わたしは黙って頷きました。

「まず、ラツキービーストと同伴すること。これは緊急時に俺や他のラツキービーストに連絡が行く。道案内もしてくれるかもしれない。お守りだと思ってくれ。次に、ハンターと一緒に行動すること。出発の当日にお前のところに向かわせようと思う。それと……最後に、何か思い出したら……いや、何か違和感を覚えたら、誰かに相談すること。イエイヌでも良い。ドードーでも、コヨーテでも、俺でも……本当に誰でもいい。お前ひとりで抱えるな。……これを守れるなら、行っても良い」

彼女の提案した条件はどれも難しいものではありません。ラツキービーストさんと一緒に居るというのも、ゴリラさんが選んだ方でしたら、腕前は保証されているも同然ですし、その方と新しくお友達になれるかと思えばむしろ楽しみなくらいです。ただ、最後のひとつ。これがわたしの胸に引っかかります。

「そこで……何かあったんですか、わたし……」

もう殆ど確信のような形となって、ずんとわたしの胸に落ちてきた不安感。

わたしの質問に彼女は数秒悩んでから答えます。

「……それは、俺が伝えることじゃない。だろ？ わかる時が来るか

もしれないし、来ないかもしれない。どうなろうと、お前はお前だよ。……ともえ、こんな言い方しておいて言うのも悪いが、気にしすぎるな。気楽に行け。俺が心配しすぎなんだよ。歳を取ったってことなのかもな」

自虐的な乾いた笑いを付け加えて、彼女ははぐらかします。

「ズルいですよ、そんな言い方……」

また沈黙が訪れてしまいそうだったので、わたしは慌てて付け加えます。

「クツキー、出来てもあげませんからね……?」

功を奏したのか、ゴリラさんは「ふふっ」と笑い声をあげました。「材料な、結構面倒なんだぞ……?」時間もかかるし、ラツキービースト達の予定だつてあるんだ。お前からの頼みじやなかったらこんな事やらないんだがなあ……それなのにお裾分けも無しか……悲しいなあ、おい」

ゴリラさんはイエイヌちゃんに視線を送ります。それを受けたイエイヌちゃんはどう反応したら良いのか困ってしまった様で、なんだかあたふたしています。

「ちよつとお、ゴリラちゃん?」ともえちゃんも、まったくう……」

ドードーさんがたしなめると、ゴリラさんは「悪い悪い」と頭を掻きながら謝罪の言葉を述べ、わたしも「失礼しました……」とひと言。「さて、相談は終わりか?」折角用意したんだ、お茶を飲んでくれよ。図書館はその後だ、案内するよ」

そう言つて彼女はコップを口に運びます。わたしも倣つてひと口。多少緊張がほぐれたのでしよう、味と香りを強く感じます。というか先程は結構緊張していたのでしようね、殆ど味も香りも感じなかった気がします。

「……ハーブティーでしたっけ?」美味しいですね、これ……」

コーヒーと比べるのも、なんだか違う気もしますが、わたしはこちらのほうが好きかもしれませぬ。

「ふふん、そうだろう。俺が葉っぱから選んで作ったんだ」

自信ありげにゴリラさんは笑います。そんなわたし達の様子を

伺ってからイエイヌちゃんもそつと口にお茶を運びました。

「……にがいですう」

渋そうな顔をしたイエイヌちゃんの顔に、思わずわたしは微笑んでしまいました。

「そうか……砂糖も入れたんだけどな……追加の砂糖持つてくるよ」

彼女はそう言つて、席を立ちます。彼女の背中は、いつもよりも猫背気味になっているように見えました。

後悔、あるいは、寂しさ。そんな感情が彼女に訪れていたのでしょうか？ それか、もしかすると単に部屋が薄暗いからかもしれない。ただ、わたしは、彼女の後ろ姿がそう見えた理由にまるで思い当たらないのです。

身体が重い。視界がぼやける。耳鳴りの様な甲高い音で何も聞こえない。身体感覚が、無い。時々見る夢に似たような、冷たい気だるさ。これは、夢なんでしょうか？

ですけれど、冷静に目の前のそれを見つめるわたしは居て、そして、失いつつある感覚が、わたしの意識を明瞭にさせようと、鈍く身体を刺激します。苦しい。まるで肺の空気が全部抜かれたような感覚です。すうつと大きく息を吸い込もうとして、吸い込めません。だから、ゆっくり、ゆっくり空気を……。

「——うっ……かな……」

言葉にならないうめき声を絞り出して、ここから動けとわたしがわたしに命令します。ええ、きつとそうなんでしょう。でも、動かないんですもの。諦めたいくらいでしたけど、動かないと。

あたしはセントラルにお買い物に行きました。

わたしはそれでも動くこうとして、腕を動かします。けれど、力の抜けたそれはしつかりと地面を掴みませんし、じつとりとして不快でした。冷たい塊。しびれているかのような感覚。かろうじて動いているだけの腕。そこに意味なんてきつと見いだせないでしょう。動かないと……ここにいちや、だめ……。

ご飯の材料を買って、その後……

鈍痛が少しだけ強くなりました。脈打つように広がっていく痛みが不思議で、わたしはお腹に手を当てます。やっぱりじつとりしていません。どうして手やお腹が濡れているのでしょうか？ なんてお腹が痛いんでしょう？ 疑問に思ったわたしは、困惑しながら手のひらを見ます。首は殆ど動かず、眼を動かしてお腹の方を見て……。ぐるぐる回るような視界の中、見えたのは色だけ。真っ赤でした。

「……いつ……ち……。ち……っ」

なんで真っ赤なんでしょう？ ぼやけた視界さえ、しつかりしてくれば、もう少し周りがわかるのに。

痛みが激しくなります。ゆっくりと、ゆっくりと全身の感覚が戻っ

てきます。ひとつ痛みが脈打てば、ひとつ何処かがはつきりしてくる。けれど頭はぼんやりしたまま。ぐわんぐわんと轟音が頭の中で鳴り響いているようでした。

頭が、首が、胸が、腕が、手が、お腹が、腰が、腿が、脛が、足が、ぜんぶが、いたい。思わず漏れ出るうめき声と一緒に、不快感が込み上げました。口の中がしょっぱいような酸っぱいような、不思議な味で満たされているのです。眉間の金属のように冷たい痛みや、お腹のひりつくような痛みや、手のひらの刺すような痛み、そんな何もかもよりも先に、口の不快感をどうにかしたくて、口の中に溜まった物を吐き出そうとします。嘔吐に似た痛みと酸味を感じました。けれど、それがお腹から込み上がって来たものかもわからない。

「っ……へえっ……うええっ……」

情けない音を出して、首を横にして、口を開くとそれが漏れ出しました。けれど、口の中にはそれがまだいっぱい残っているようで、全身の痛みを我慢して、えづくようにして吐ききって、ようやく少し楽になりました。

灰色と茶色の、薄汚れた視界の中に、赤い花。ぐるぐる回るような視界の中で、見えるのは色だけ。

込み上げてくる不安と吐き気。

だから？ それとも、痛い？ つらい？ 苦しい？ 疲れた？

力が入らない？ わたしはそつと瞳を閉じます。

「い……え……ちや……？」

届くでしょうか？ かろうじて口から出た雑音に意味を見出してくれるでしょうか？ 助けを乞うのでは無く、居てほしいから、彼女の名前を呼ぶんです。わかってほしい、通じて欲しい。それさえ叶うかわかりません。

お父さんのシャツをかうんです、あたし。セントラルに新しくお店が開いたから、そこで……あなたと……。

音は何処かに届いたようでした。重力に抗えず垂れる手に何かが触れました。それが温かいのか冷たいのか、彼女なのかそうでないのか、それもわかりません。けれど、彼女なら、嬉しい。

プレゼント……お父さんは喜んでくれるでしょうか？

もう一度口からソレを吐き出します。

お父さん、たばこ辞められたんですもの、ごほうびです。

今度は、もう雑音さえ出ません。目を開けて、手に触れるものを確認します。彼女でした。

でも、彼女がわたしの手を握ってくれているから、一層の痛みが込み上げてきます。「ありがとう」そう言いたいののに、口から漏れるのは泣き声かうめき声か、それとも空気の音か。

言いたい言葉はいっぱいあるのに、けれど音にできる思いなど欠片もなく。痛みを訴えて彼女を心配させたくないから、頑張っているのに、報われない。せめてもうひとことくらい、伝えたい。頑張って頑張って、絞り出します。

お父さん、赤い煙草を吸ってましたから……赤色？

「いろ……どう、し……ます……っ？」

感謝の言葉では無く、口から出たのはそんな言葉。だって、シャツをかうんです、あたし。でも、色。お父さんは「もえが選ぶならなんでも」って……わからないんですもの。だから、イエイヌちゃんに聞いて決めようって思ってたんです。今、ようやく聞けました。

ふつとろうそくの炎が消えました。それで、部屋は真っ暗。

ゴリラさんの棲家からつながる地下室。そこに図書館はありました。

地下室にあると聞いたときは薄暗く、じめつとした空間を想像していましたが、実際のところは違いました。おそらく、半地下か、外に少しだけ面している箇所があるのでしよう。

ある壁の天井付近には細長い四角形のガラス窓があり、そこから細く差し込む外の光が、ぼんやりと室内を照らしていました。その光の寂しさの為か、わたしまでどこか寂しくなってしまう。昔は、ここにヒトがいっぱい居たのでしようけれど、今は誰も居ない。そんなことを強く意識させる光でした。

ですが、ひとたび電灯が点くや否や、中は極めて明るくなり、印象が変わります。室内はこぎつぱりとしていましたし、埃も殆どありません。ですから、寂しさや儂さという感情よりも、『知識の宝庫』という表現が適切なのだと思われました。

その上、照明の有無を問わず、気温や湿度の類は図書館の内外ではつきりと異なっており、明らかに機械かなにかによる調整がされているのがわかります。

この建物の地上階よりも広いのでは、と思われるほどの面積と、ここに立ち並ぶ本棚の数々は、鬱蒼とした森の様でどこか圧倒されてしまいました。しばらく居る内に、好奇心や興味がふつふつと沸いてきます。そこに置かれた本のタイトルの殆どは、わたしには理解できないものでした。建物の形から考えると、おそらく研究者向けの図書館なのでしょう。けれど、ところどころにわたしでも読めそうなものがありましたし、画集や絵本、小説、漫画なんかも置かれていました。「俺はあんまり詳しくないが……確かそこより奥が『いっぱんしよせき』って話だ」

昔を思い出すように、視線を上に向けながらゴリラさんは言いました。わたしは彼女の言葉に感謝し、一般書籍の方へと足を踏み入れました。多少なりとも文字のわかるわたしと違って、イエイヌちゃんと

ドードーさんは不思議と困惑に満ちた表情で辺りをきよろきよろして居ます。

「本……こんなにいっぱいあるんですね……」

「ねえー、びつくりだよお……全部文字でいっぱいなんですよ？ 頭いっぱいになっちゃうねえ……」

困ったような、慌てたような、そんなドードーさんの言葉にゴリラさんはくすりと笑います。

「ヒトも全部読んでた訳じゃないさ。俺の知ってるヤツはもっぱら――」

彼女はそう言つて、一般書籍の棚、その一角を指します。そこは画集が並んでいた、小さな一角でした。

「あそこの本ばつか読んでた。絵の本だな……。他のヤツだつて同じもんだと思うぞ？ 『小説ばつか薦められて困る』なんて愚痴も聞いたもんだ」

寂しさまじりでしたけれど、楽しげな口調でした。良い思い出なのかもしれない。

わたしは彼女が少しだけ、昔を知っていることが羨ましくなります。わたしのお父さんのことも、お父さんとの思い出も、彼女は知っているのでしょうか？ 尋ねてもきつと答えてくれないでしょうけど……。

ゴリラさんはわたしに言いました。

「ここにある本な、好きに持ってついで」

「ええつと……それはどういう……」

わたしの質問に、彼女は肩をすくめて答えます。

「そもそもここを知らないヤツの方が多いし、知つても文字が読めなかつたりするんだ。ここで埃を被ってるよりも、読んでもらえた方がこいつらも幸せだろ？」

「まあ……そうかもしれないけど……」

わたしは少しだけ考えて、口を開きます。

「わかりました、じゃあ、何冊かお借りしてしばらくしたら返すついで……」

ゴリラさんは満足げに頷きました。

「この鍵は開けておく。……ラッキービーストが見回りしたりして
るかもしれないが、気にするな。お前がここを使う分には文句も言わな
いだろうしな」

わたしは彼女に「ありがとうございます」と告げて、本棚を見回り
始めます。イエイヌちゃんはわたしにくつつくようにして、うろうろ
としていましたけれど、時折、イエイヌちゃんが適当な本を手にとっ
ていました。彼女はページをぺらぺらと捲っては眉間にシワを寄せ
て渋い顔をしているのが印象的でした。時折首を右に左に傾けたり、
本をひっくり返してみたり……何とも可愛らしい仕草ですこと。
ドードーさんはゴリラさんが教えてくれたのか、絵本がまとまってい
るところに行き、気に入った一冊があつたのか、その一冊をじっくり
と読み進めていました。

「……ここは食べ物のレシピの本なんかがいっぱいあるんですね」

イエイヌちゃんは「ほへえ」と気の抜けた音を出します。

「じゃあ、くつきーのれしぴ？　があるかもなんですね？」

わたしは彼女の言葉に頷いて、本棚に意識を集中します。背表紙に
書かれた単語だけ拾いながら、ざあっと視線を動かしていき、目当て
のモノがあるかを探しているのですが……『ひとりごはん』『簡単』『作
り置き』『余り物』『長持ち』……なんだかこの利用者がどんな方々
だったのか、わかつてきた気がします……少なくとも料理に強い興味
を持っている方ではなさそうですね……。

「むう……お菓子のレシピあるんですね、ここ……」

わたしがぼやくと、ゴリラさんが隣にいることに気づきます。彼女
と入れ違いになったのか、イエイヌちゃんはドードーさんのところへ
移動していて、一緒に絵本を眺めていました。

「……セントラルな、元々はヒトの為の施設なんだよ」

ゴリラさんが、本棚に眼を向けたまま、小さな声で言いました。

「そう、なんですか……」

「で、だ」

彼女は言葉を続けます。

「もし、あそこで何かお前の役に立ちそうなもの見つけたら好きに使え。返す必要もない。念の為に教えてくれればそれで良い」

「わかりました……。ありがとうございます、ゴリラさん」

わたしは彼女に顔を向けてお礼を言いましたが、彼女は本棚に眼を向けたままです。

「昔な……。あそこにセルリアンがたくさん居た時期があつてな。今はもう殆ど居ないが……。っと、あつたぞ、お菓子のレシピ集」

わたしは彼女の差し出した本を受け取ります。

「ありがとうございます、ゴリラさん」

彼女は「どういたしまして」と言ってから、言葉を続けます。

「ここにある本もそうだがな、あるからには使つてやつてくれ。全部が全部使えるものじゃないし、よくわからんものも、危険なものもある。ただ殆どが壊れたり、野ざらしだったり、そういう状況だ……。もったいないし、可哀想だろ？ コイツラにだって、作られた意味があるのにな……。大事に使つてくれ。本望だろうからな」

「……はい」

ゴリラさんは、そつと本の背表紙を優しく撫でながら言いました。寂しさや切なさのような、そんな感情が込められているようにわたしには思われました。ゴリラさんは言葉を終えると、イエイ又ちゃん達の居る方へと歩き始めます。

少し進んでから、思い出したように振り返つて彼女は言いました。

「ああ、そうだ、材料の件を進めるのは、お前達がセントラルから帰つてからにするぞ？ 日持ちしないものもあるだろうし、作れるかどうかはつきりしてからの方が良いだろ？」

わたしは彼女の言葉に同意します。そして、ゴリラさんは今度こそ振り返らず、イエイ又ちゃん達の方へと近寄ります。そして、腰を下ろしてから、絵本を音読し始めました。きつとイエイ又ちゃんとドーさんに読み聞かせてあげようと、そう考えてのことでしょう。

わたしも彼女達に加わろうかとも思いましたが、『画集』の棚が気になったため、そちらへと足を向けます。

数歩という距離も無く、その棚がありました。そこに並ぶ本の数々

……。大きさも、素材も、背表紙に描かれた文字も、それぞれ個性的です。わたしは何の気無しに、一冊の本を手に取ります。手にとった本は、わたしの持つているスケッチブックよりも少し大きいくらいのサイズで、読めない文字がちらちらと書かれています。きつと外国語でしょう。

表紙に描かれた絵は、蓮と思われる植物が浮かぶ絵でした。その絵は、幾本か纏まって生える緑色の植物と、ぼんやりとした水面に浮かぶ色とりどりの蓮の群れとが描かれています。全体的にぼんやりとした印象の絵でしたけれど、少し荒さを感じる筆跡もあり、それらが組み合わせることで、より美しい色合いを夢想させるようでした。

また、水面と蓮と、それから緑色の植物……。それら以外にはつきりと周囲の光景がわかる描写は無いのですけれども、水面に写った雲や空を描いたのであろう白いモヤや、木々と思われる濃い緑色、光を捉えたであろうそれぞれの色の濃淡の違いが、その絵のモチーフとなった光景を想起させるようでした。単に綺麗というだけでなく、単に色合いが美しいというだけでなく、単に技巧的であるというだけでなく、たったひとつの絵を通して、その絵の外側さえ想像させうる絵……。純粋な感嘆の吐息がこぼれます。

「これ……綺麗……」

決めました。今日はこれを借りていくことにしましょう。もう一冊くらい……と思いましたが、この画集の大きさを考えると、イエイヌちゃんが借りるならその本が加わり、更にレシピの本も借りるのは大変な大荷物になりそうです。今日はこれくらいにしたほうが良いのでしょうか。

イエイヌちゃん達の方をちらりと見ると、傍らには何冊か本が積み重なっていました。これから読むのか、それとも読み終わったのか、どちらでしょう？　ともあれ、何を借りていくのか、イエイヌちゃんに尋ねた方が良さそうです。わたしは画集を脇に抱え、移動しました。

イエイヌちゃんは言葉を勉強したいとのこと、ひらがなを学ぶのに良さそうな絵本を彼女やゴリラさんと一緒に見繕いました。ドードーさんもどうやら一冊絵本を選んで持っていくそうです。わたし

やイエイヌちゃんと一緒に言葉を教えようかと聞くと、彼女はゴリラさんから教えてもらうとのこと。満更でもないのか、ゴリラさんは照れながら了承して――。

そんなやり取りがあつて、図書館を出る頃には、もう夕方です。ゴリラさんはわたし達を玄関まで見送つてくれました。

「もう遅いな……そうだ、ちよつと待つてろ」

彼女はそう言つて自分の部屋へと入り、少ししてから戻つてきます。

「ハーブティーだ。作り過ぎちまつてな。家で飲め、作り方は――」

ゴリラさんはわたしに小さな袋を手渡し、淹れ方を説明します。イエイヌちゃんと一緒になつてふんふんと頷きながら、鞆に包をしまします。

「大丈夫そうだな。……今日は来てくれてありがとうな。楽しかったよ。また来てくれ」

少しばかり名残惜しい気もしましたが、彼女の言葉にわたし達は従います。

「もう日が暮れそうですね……今日はありがとうございました、ゴリラさん。セントラルから戻ったら、その時はお願いします」

イエイヌちゃんもほくほく顔で絵本を抱えています。

「ありがとうございました！ 絵本読んでくれたり……お世話になりました！ また来ますね！」

「んふふー久しぶりに来られて良かったよお、今度は晴れた日に遊びに来るねえー」

ドードーさんも同じように挨拶をし、外へ出ようとなりましたが……。

「すまん、ドードー。この前の件で話がある、少し良いか？」

ドードーさんは「なあに？」と立ち止まり、思い出すように少しだけ首を捻ります。彼女はすぐに要件に思い至った様で、わたし達に向かって言いました。

「ごめんねえ、ともえちゃん、イエイヌちゃん。大事なお話があるから……」

わたし達は少しだけ間を置いてから答えます。「どうしたんだろう？」という疑問や好奇心もありましたけれど、わたし達だけで帰って良いものかと疑問に思ったからです。

悩んではしまいましたけれど、彼女たちには彼女たちの都合があります。そこに割って入るのも失礼というもの。そう思い至り、わたしは別れの言葉を告げます。

「……わかりました。少し名残惜しいですけど、またお会いしましょうね」

イエイヌちゃんもわたしに続きました。

「いつでも遊びに来てください。大丈夫ですよね？　ともえちゃん」
わたしはイエイヌちゃんの言葉に頷きます。

「来るときはお風呂、また一緒に入りましょうね？」

イエイヌちゃんはフクザツな表情を浮かべましたけれど、ドードーさんは嬉しそうな表情です。

「うん！　昨日もおとといも、ありがとうねえ。楽しかったよおー！」
彼女は両手を挙げてぱたと手を振ってくれました。わたし達も彼女に応じるように手を振って歩き始めます。夕闇の中、わたし達は『おうち』に帰ったのでした。

曇り空の所為か、普段よりも薄暗く、加えて、肌寒さを覚える道のり。ですけれど、風も殆ど無く、湿気なんかも感じない為か、むしろ穏やかな夕暮れという印象も同時に抱きます。そんな中を、ランタンを持ったわたしがイエイヌちゃんの一步先を進む形で、わたし達は歩いていました。

不意に、イエイヌちゃんが尋ねます。

「……ともえちゃん。ドードーさん、何かあったんですかね……？」

「……どうなんでしょうねえ……」

心当たりがあるとしたら、ひとつくらいです。

「この前の『狩りごっこ』が終わった後におふたりで話してたじゃないですか。その続き……じゃないんですかね……？」

思い当たる節は本当に、それだけ。こじつけるなら、他にも可能性はあるかもしれませんが。イエイヌちゃんはわたしの考えに「うーん」

と考え込みます。

「わたし達に関係があつたり、手伝いが必要だつたら……きつと教えてくれますよ」

わたし達が頼りないから、ということは無いです。いくら『長生き』なおふたりでも出来ることには限度があります。

「もしかしたら、コヨーテさんとか、アルマーさん、センさんなら何か知っているかもしれませんが……今度聞いてみます?」

イエイヌちゃんは首を振ります。

「いえ……あんまり首を突っ込むのも失礼ですから……」

詮索好きというのは余り好まれるものではないでしょうからね……。

「わたしもそう思います。……セントラルから戻つて、そのときに同じ様なことがあつたら、その時に聞いてみますか? お力になれるなら、なりたいですし……気になっちゃいますよね、あんな風にされる」と

イエイヌちゃんは少しだけ困つた様な笑い声を漏らします。

「……そうですね」

どこか落ち着かなさそうというか、落ち込んだような……そんな声色でした。

「わたしも、イエイヌちゃんも、信用されてないとか、頼りにされてないとか、そういう事じゃないと思います。なんとなくですけど……」

「……はい。でもなんだか胸がざわざわしちゃいまして……」

頼りにされていない、なんてことあるんでしょうか? それにイエイヌちゃんの言葉はなんだか心配し過ぎな気がします。

「大丈夫ですって。珍しいですね、イエイヌちゃんが落ち込むなんて……」

彼女は無言でした。言葉に困っているのかもしれませんが、暗がりの所為で判然としません。

わたしは繋いだ彼女の手を引きます。

「お腹空いてるから、落ち込んだじゃうんです。お家に戻つて、ご飯食べて、ゆつくりして……絵本だつて読みましょう? のんびり過ごした

ら、あつという間に出発の日になつちやいます。予定でいっぱいなんですよ？ 落ち込んでたら勿体ないです」

わたしの励ましが効いたのか、彼女はわたしの手をきゅつと強く握り返します。

「そう、そうですよね……。はいっ！」

きつと無理をしている……。少しだけそう思いました。

正直なところ、彼女の不安感はわからないでも無いのです。

『長』とその古いお友達であるところの彼女達が何か問題を抱えているのならば、今、ここで過ごすわたしや、今までここで生きてきたイエイヌちゃんが力になりたいと思うのは当然のことです。そして、頼ってくれないというのは、その理由は何であれ、どこだか寂しいことです。せめてひとこと位言ってもらいたいものですけれども……。きつと、まだ早いのでしょうか。何が『早い』のかはさっぱりわかりませんけれど……。それに、案外「喧嘩の仲裁をしたのは良いが仲直りが上手くいっていない」なんて話なのかもしれませんしね。

口数少なく道を進み、お家につく頃には、もう夜。曇り空でわかりませんが、きつと月が漂っている頃合いです。もう辺りは真つ暗で、わたしの眼では空の様子は伺えません。ですが、ゆっくりと、雲が流れている……。そんな気がしました。

そして、出発の日がやってきました。

先日の憂鬱な気持ちとは裏腹に、今日は快晴。あれから暫くは先日ゴリラさんのお家にお邪魔した時と同様、肌寒い日が続いていたのですけれども、幸い今日は初夏の様な暖かさを感じる空模様です。

「良かったですね！ 晴れて！」

イエイヌちゃんが窓から身体を乗り出して、わたしに言いました。陽射しを浴びた彼女の髪の毛は、きらきらと細やかに輝いています。あの時に見られた不安げな様子は、まるで見られません。

「ええ、本当に……。最近寒かったですし、天気も良くなかったですから

ねえ……」

行ったことが無いところへ行くのです。そんなときに天気が悪いとなんだかもつたいたない気がしますものね。

イエイ又ちゃんはわたしの言葉に頷いて、「そういえば」と口を開きます。

「支度は……大丈夫です……？　昨日はあんまり荷物を弄ってなかった気がしますが……」

わたしは乾いた笑いで応えます。というのも、あんまりに気にしすぎてイエイ又ちゃんから呆れられていた様な気がしましたので……。

「二昨日あれだけ確認したんです。大丈夫ですよ。あ、でも念の為に……ちよつと失礼しますね？」

と言いつつもいざとなると不安になってしまいます。わたしは再び鞆の中身や持ち物を点検し直します。

「スケッチブック……色鉛筆……ジャパリまんがみつ……水筒……ええつと、寝袋は無くて良くて、タオルと——」

荷物もそんな無いのですけれども、心配は心配です。湧き立つ心を鎮めるための儀式でもあるのかもしれない。

「そういえば、ともえちゃん」

イエイ又ちゃんの質問に、わたしは手を止めます。返事をし、彼女の方に向き直ると、彼女は考え事をしているように首をかしげていました。

「二緒に来てくれる方って、お昼になったらいらっしやるんですけど？」

「そう言ってみましたね、確か……」

わたしは鞆の中身をさつと整えて、イエイ又ちゃんと一緒に窓の外を眺めます。辺りは真新しげな緑色に満ちていて、それが時折風に靡いていました。太陽の位置は……頂点に差し掛かろうというくらいでしょうか？　影は短く、陽射しもどこか強く白いように感じられます。汗ばむくらいの陽気は、まさに探検日よりなのかもしれません。

「……んー、もう少し、ですかね……？　迷子になったりとか……大丈夫

夫でしようか？」

イエイヌちゃんが呟きます。

フレンズの皆さんの時間感覚は、わたしからすると『おっとり』過ぎる気がします。そもそも時計の類が無いパークですから、「何時集合」という約束ではなく、太陽の位置ですとか、山の雪解け具合ですとか、そういうものでやり取りしていそうです。なので仕方ないといえは仕方ないのですけれども、どこか「早くこないかな」とやきもきしてしまうのも確か。彼女たちからしてみたら、わたしはせっつかちさんなのかもしれませんね。

「ゴリラさんのお知り合いでしょうし、そこまで時間がズレることは無いと思います。それに場所もしっかり聞いてるんじゃないですかね……」

そもそもゴリラさんが真面目な方だというのもありますが、それ以上ヒトがいた頃を知っているのです。となれば、わたしと同じように時計やカレンダーの類を前提にした、割合しつかりとした時間感覚を持つていてもおかしくありません。加えて今回はラツキービーストさんも同行しているのです。なので、迷子ですとか、遅刻、日付の間違い……そういった心配はしなくても良さそうなのですが……。そんなことを考えていると、不意にイエイヌちゃんの耳がピクリと動きます。

「うん……？」

そう言つて彼女は山の方へと顔を向けます。窓は南に面していて、山は北側です。そのままでは音の出どころはわかりません。ですのて、窓から乗り出した身体を引つ込めて、ドアを抜けて外を確認に行きました。彼女が外に出たのを見て、わたしも続きます。

「……どうしました？」

わたしにはまだ何の音も聞こえないのです。

もしかしたら、遠くでの話し声や足音なんかは彼女には聞こえたのかもしれませんが……イエイヌちゃんは眉間にシワを寄せて考え込んでいます。

「どなたかの足音とか、話し声ですか？ イエイヌちゃん」

彼女は首を振りました。

「山の方から音がするんです。でも、ヘンというか知らないというか……不思議な音なんですよお……」

うーんと彼女が腕を組んで考えていると、その音がわたしの耳にもかすかに聞こえてきました。

程なくして、わたし達の視界にエンジン音を響かせながら近づいてくる車が見えてきました。

その自動車は、カーキ色に塗装されていて、大きめのごつごつしたタイヤに角張った小さな車体に乗っかっています。また、後部には荷台がありました。荷台の広さは（確かめた訳では無いですが）わたしが三人くらい寝転がっても少し余るくらいの面積があるようです。

また、座席部分に屋根はあるのですけれども、座席の数は、運転席とその隣の二席しかありません。その上、フロントガラス以外に、窓ガラスやドアが用意されておりません。なんというか、鼻が短くて、身体が長くて……無骨？ そんな印象です。利便性の為に快適さを多少無視した……と言う具合でしょうか？ きつと『パーク』のお客さんが使っていたと言うよりも、『パーク』での作業ですとか、荷運びというような目的で使用されていたのでしょうか。

ただ、外見の無骨さや無愛想さから連想すると、乗り心地が非常に悪そうですが、そうでもなさそうです。遠目からでも車体の揺れが小さいことがわかりましたし、近づいてくるに従って内装の綺麗さやシートの柔らかさ、つくりの頑丈さなどがはつきりとわかります。また埃や土汚れなどは殆ど無く、出発する以前から、かなり丁寧に掃除をされたのでしょうか。それを証明するかのように、ボンネットはきりと太陽の光を反射していました。

そんな車の運転席からびよこんとラッキービーストさんが飛び降ります。そのままわたしの前に歩いてきて、ペこりとお辞儀をしてくれました。

「こんにちは、ラッキービーストさん」

わたしも軽く会釈をして答えます。イエイヌちゃんも慌てたようにわたしに続きます。普段ならば、彼も返事をしてくれたのでしょうか

けれど、今回は黙ったまま、車の方へと戻ります。そして、ラッキービーストさんが後部の荷台の前でぴよこんと跳ねると、ぱたり、と車の最後部の仕切りが倒れます。

どうしたら良いのかわからずにぼうっとしてしていると、荷台の方からのそりとどなたかが起き上がって、わたし達に言いました。

「……乗れよ」

「し、失礼しました……」

声の主に目を向けると、アムールトラさんでした。ぴくり、と緊張の様な、畏怖の様な、そんな感情を覚えました。

「ど、どうも……」

イエイヌちゃんもどうやらわたしと同じ様に緊張気味のようにです。

「つとと、イエイヌちゃん、わたし、荷物持ってきますね」

緊張のあまり、鞆さえ持たずにわたしは荷台に足を掛けていました。

「手伝うか？」

何ともぶつきらぼうにアムールトラさんがわたしに尋ねます。ただ、ぶつきらぼうな語勢なのですけれども、立ち上がりながら尋ねてくれましたので、彼女なりの心遣いなのでしょう。

「いえ、鞆だけなので……ありがとうございます。すぐ戻りますね」

彼女にお願いしづらいというのもありますが、わたしひとりで持ちきれぬ程度の量ですから……。彼女はわたしの言葉に返事も無く、姿勢を戻します。わたしは彼女が姿勢を戻したのを確認して、家に荷物を取りに小走りで戻りました。

部屋はまだ電気が着いていたので、明るかったのですけれど、外から射す陽射しで陰影の濃淡がはっきりと生まれていました。忘れ無いうように、『おうち』に入っただけで電灯を消します。たちまち陽光以外の光源は無くなり、初夏めいた陽射しに影は一層濃くなります。

水筒よし、鞆よし、帽子よし、ベストも着て、支度はばっちりです。鞆を肩から下げ、帽子を被り、『おうち』から外へ出ます。

セントラルを目指し、出発です……！

わたしもイエイヌちゃんやアムールトラさんと同じように荷台に乗り、ラツキービーストさんにそれを伝えると、車は動き始めました。ぶおおんという低い音を立てながら、車は道を進んでいきます。

勢いよく流れる景色、心地よく身体を撫でる風、穏やかな振動、風の音、エンジンの音……そのどれもが、わたしに取ってどこか懐かしく心地よいものでした。

イエイヌちゃんはきよろきよろと周囲を見回したり、恐る恐る顔を少しだけ出して地面をみたりと忙しい様子です。アムールトラさんは、ちよこんと端の方に座っています。正座を少し崩した姿勢……といえはよいのでしょうか？ それとも、いわゆる『女の子座り』を堅くした感じ……？ ともなく、そんな具合でじつとしていました。

「これは楽ちんですねえ……」

イエイヌちゃんが髪の毛を風に靡かせながら言います。

「本当に。疲れないですし、歩くよりもずっと早いですねえ……」

速度としては、わたしが歩くよりもずっと早いです。ですが、走れば流石に追い越せそうなくらいです。

「むう……」

何故かイエイヌちゃんが頬を膨らませて、不機嫌そうな顔——と言っても眼は笑っていたので冗談でしょうが——をします。

「な、なんですか、急に……」

「私のほうがずっと早いですー！」

し、嫉妬……？ 確かに全速力でこの車は進んでいません。ぼんやりとした感覚ですけれども、むしろ車としては遅いくらいな気がします。

わたしは彼女の言葉にどう返事したら良いか少し考えてしまいました。……ここは思ったことをはっきりと言いましょ。

「車と比べなくても……良いんじゃないですか……？」

そう言うと、彼女は何かに気付いたかのように、手をぱちんと叩き

ました。

「くるま……！　これってそういう名前だったんですね……」

あまりの緊張で、好奇心が抑えられていたんでしょうかね……。わたしは彼女の言葉にくすくす笑いながら、アムールトラさんに視線をそつと送ります。彼女は興味なさそうに座っていましたが、耳はぴくりと動いているようですし、わたし達やそこで起こる会話に、まるで関心が無いということでもなさそうです。

「そうですね、車です。ヒトが移動するのに使う乗り物のひとつですね」

イエイヌちゃんはふむふむと頷きます。

「昔のパークは車がいっぱいあったんですかね……？　すごい便利ですし、速いですし……」

わたしには昔の記憶が無いので、正解は知りませんけれど……。

「そんなに多くなかったんじゃないですかね……？　フレンズの皆さんを驚かせてもマズいですから。どうなんでしょう？」

わたしの考えにアムールトラさんが答えました。

「ゴリラも同じことを言ってたな」

わたしとイエイヌちゃんは少しだけ緊張した面持ちで彼女の顔を見、言葉を待ちます。彼女は姿勢を崩さず、外の光景を眺めていたのですけれど、少しすると、訪れた沈黙が理解できないような、きよんとした表情で、わたし達に顔を向けました。

「……以上だが？」

「あ、ありがとうございます……」

わたしはなんだか言葉に詰まってしまいました。

いえ、彼女が嫌いだとかそういう理由では無いのですけれど……アムールトラさんに対する第一印象が『怖い方』だからなのだとは思いますが……。

「あ、あの……アムールトラさん、質問いいですか……？」

イエイヌちゃんが小さく手を挙げて問いかけます。アムールトラさんは「何だ？」とイエイヌちゃんに答えるように促します。

「そ、その……ゴリラさんが言ってた一緒に来るフレンズさんってア

ムールトラさんってことで良いんですね……?」

「そうだが? 不満か?」

アムールトラさんはきよんとした顔で首をかしげます。

イエイヌちゃんの発言を心底疑問に思っているような顔ですし、これはこれで可愛げがある……というのはさておき、彼女の言葉には嫌味のような感情は籠もっていないように思われますが……。

「い、いえ……心強いなあと思って……よろしくおねがいますね、アムールトラさん……!」

イエイヌちゃんはそう言っぺこりとお辞儀をします。

「わたしからも、今日はありがとうございます。よろしくおねがいます」

わたしもイエイヌちゃんに倣ってお辞儀をして、感謝の意を伝えます。

「ああ、こちらこそ」

そう言っ、彼女は再び視線を流れ行く景色に落とします。と、奇妙なモノを見つけました。

「あのう、アムールトラさん、何に乗ってるんですか……?」

イエイヌちゃんもわたしの言葉でアムールトラさんが板の上に乗っていることに気づきます。

「……これか……? 板、だな」

彼女はそう言うと、首を軽く捻って、思い出したように言いました。「あー……悪い。これはゴリラが持たせたヤツだな。ともえなら使いがわかるとかなんとか……」

そう言っ彼女が立ち上がったその場を動こうとしたのですけれども、わたしはそれを静止します。

「ちよ……危ないんで、止まってからで大丈夫です……」

アムールトラさんは「そうか、悪いことしたな」と言葉少なに腰を下ろし、それまでと同じように座り直りました。

なぜかイエイヌちゃんの方から笑うのを我慢するような声が聞こえたので、わたしは小声で尋ねます。

「ど、どうしました……? イエイヌちゃん……」

イエイ又ちゃんはわたしの耳元でそつとささやきます。

「い、いえ……なんだかイエネコちゃんみたいだなあつて思つて……」

んー……？

「どういうことですか……？ 確かに同じネコさんでしょうけど……」

「雰囲気とか、違いますか？」

「イエネコちゃんも……ふふつ、あんなふうには仕切られたところに座るんです。なんででしょうね？」

そう聞かれましたも、わたしにもわかりませんって……。

とりあえず、アムールトラさんは人見知り、もといフレンズ見知りさんなのかもしれませんね。ゴリラさんのお友達だからというのもあります、悪い方では無いはずです。

そう考えると、ゴリラさんの言っていた『可愛いヤツ』という言葉は、ぶつきらぼうだったり、ぶすんとしての仕草とは裏腹に、うっかり屋さんな仕草を見せる様子のことを言っていたのかもしれないね。ともすれば『怖い』という印象を与えてしまう彼女の仕草や容姿ですけれども……彼女、案外、天然さんな気がします。下手をするとドードーさんよりもうっかりさんで、不器用なのかもしれません……。まあこれはわたしがそう思うというだけで本当にそうなのかはわかりませんけれども。

わたし達のアムールトラさんへの印象が変わりつつある中、車はずんずんと進んで行きます。あつという間に、数日前、わたしが地図を書き写した別れ道へとやってきました。時間にして、おそらく数十分も経過していません。

その景色を見て、ふと思ひ出したことがありましたので、運転席に居るラッキービーストさんに話しかけます。運転席の後ろ側の壁を」とんと叩くと、車の速度は遅くなりました。

「ラッキービーストさん、先に行きたいところがあるんですけど……大丈夫ですか？」

彼はわたしの言葉を受けて、車を一旦停めます。それに少し驚いた様な声をあげるイエイ又ちゃんとラッキービーストさんでしたが、わたしは構わず会話を続けます。

「……ドコ？」

「少し戻って貰うんですけど、この道沿いで一旦停めてほしいんです」
「ワカッタ」

ラツキービーストさんがそう言うのと、車が道をいっぱいに使って方向転換します。

「停めて欲しいところでストップって言いますね」

わたしの言葉に上半身を小さく折りたたむように会釈してラツキービーストさんは答えました。

「ラツキービーストって喋ったんだな……」

アムールトラさんの疑問に、イエイヌちゃんが補足をするように答えます。そんな中、わたしは『アレ』の置いた場所を懸命に思い出そうとしていたのでした。

道に戻り始めて数分、わたしはラツキービーストさんに車を停めるようお願いします。車を降りて、わたしは周囲を眺めてから、林に入りました。多分、この辺の筈です。うろ覚えですけど、あの時に休憩した大樹の位置からすると……自信はありませんけど。

「……ともえちゃん、どうしたんですか？」

わたしに続いて車を降りたイエイヌちゃんとアムールトラさんは不思議そうな顔をしています。イエイヌちゃんはわたしに直接尋ねましたけれど、アムールトラさんは黙ったまま、わたしの言葉を待っているようでした。

「……他のラツキービーストさんと違うラツキービーストさんの話、イエイヌちゃんは覚えてます？」

イエイヌちゃんは腕を組んでしばらく考えると、思い出したようでした。

「あー……壊れてるのを、ともえちゃんが見つけたんですっけ？
この辺りなんですか？」

「ちよっと待て、何の話だ？」

アムールトラさんが説明を求めます。わたしは発見を手伝ってもらおうと思って、改めて説明します。

「赤いラツキービーストさんが居たんです。動かなかったんですけど

……お父さんの作ったものらしいですし、放つたらかしも可哀想なの
で……回収していいのかな、と思ひまして」

樹の根元にそっと置いておいた筈ですし、平穏な天候のこの辺りで
したら、大きく動くはずありません。そう彼女たちに説明を加える
と、わたし達は『彼』を探し始めました。

数分ほどの時間をかけて、探し回ったのですが、どうにも見つかり
ません。

「……無いな」

「さっぱりですねえ……二オイとかもありませんし……流石にともえ
ちゃんの二オイも消えちゃってます……」

地面に落ちた木の葉や木の枝なんかをがさごそと動かしながら、お
ふたりがぼやきます。

「ですよねえ……今度、探しに来ます」

この後の予定も考えると、この搜索に時間をかけすぎるのは躊躇わ
れます。

「ワガママを言って、失礼しました……。車にもど——」

わたしの言葉を遮るように、車を運転してくれていたラッキービー
ストさんが言います。

「ともえ、コッチ」

少しだけ急だったのでびっくりしてしまいました。わたし達は彼
の言葉に従い、進みます。ラッキービーストさんの先導に従って少し
進むと、『彼』はいました。

わたし達が探していたところよりも数メートルほど広場に近いと
ころの林の中、その一本の根本です。見つけたのが少し前でしたか
ら、うろ覚えなのも仕方ないですし、イエイヌちゃんが言うにはわた
しの二オイも消えていたそうですから、手こずるのも当然というも
の。

以前と変わらず、完全に動く気配のなくなった彼の姿は、どこか物
悲しくもありました。けれども、今改めて見てみると、なぜだか使命
を果たしたと言わんばかりの貫禄があるようにも思われました。誰
かがわたしの為に作ったかもしれないもの。ゴリラさんから明言さ

れていないものの、どうしてかそう思うのです。

そして、『彼』の話をした時の前後関係から考えると、作者はお父さんか、それに近い人の可能性が高そうです。そう考えると、ほんの少しでもわたしの今と昔とを結んでくれた存在がこのラッキービーストさんなのです。果たした役割は小さいかもしれませんが。もしかしたら、何の役割も果たしていないのかも……そうだとしたらあまりにも悲しいですが……それでも、わたしに取って昔を知るための手がかりであり、過去のどなたかからの、贈り物です。

「ここでしたか……」

わたしは彼の頭に落ちていた木の葉そつと手で払い、彼を持ち上げます。不思議とずっしりとした重さを感じました。水を吸っているとか、中の機材が重いとか、理由はわかりませんが……今日やることが終わったら、『おうち』で日干しでもしましょうかね。

「よいしょつと……目的達成ですね。みなさんありがとうございます。わたしはしやがんで彼と目線を合わせます。ラッキービーストさんも——」

「ありがとうございます」

「いえいえ、構いません！ 見つかってよかったですね！ ともえちゃん！」

わたしはイエイ又ちゃんの言葉に「はい！」と答えました。そして、アムールトラさんは周囲をきよろきよろと見回して、尋ねます。

「他に何か探すか？」

わたしは首を振ります。

「いえ、他には……。この子の為に、わざわざありがとうございます、アムールトラさん」

アムールトラさんは、首を振って「構わん」とひとこと。車に戻りましょう。戻るさなか、わたしは誰にも聞こえないくらい小さな声で、「お疲れさまでした」と両腕に抱えられた彼に感謝の言葉を伝えたのでした。

車に戻って、ラッキービーストさんは運転席へ、『彼』は助手席の方へ置いておきました。そして、道を進み直し、別れ道をわたしの行か

なかった方向……つまり海とは違う方向へと進んでいきました。

「やっぱり、こっちなんですね……」

以前と同じように、陽炎のように揺らめく灰色の塊がぼつりぼつりと視界に入ります。その塊は、まだ小さいのですけれど、これから大きくなって行き、その形を明らかにするのでしよう。

「そうだ、イエイヌちゃんはセントラル行ったことありますか？」

彼女は首を振ります。

「無いですねえ……。行こうって思ったことも、話も殆ど……。私もそんなに前からいたワケじゃ無いからというのもありますけど……」

「そうですか……。アムールトラさんは……。どうですか？」

アムールトラさんは、それまでと同じように風景を眺めたまま答えます。

「ある。昔に、何回か、な」

「本当ですか……。！　どんなところか教えてもらっても良いですか……。？」

わたしの言葉に、彼女は眼を閉じて考え込みます。

「ぼろぼろになったいろんなものと……。セルリアン。それくらいだったな」

「……っ」

異様な重さを含ませた彼女の言葉に、わたしは言葉を失います。アムールトラさんの言葉にイエイヌちゃんが恐る恐る聞き返しました。「まだセルリアンがいた頃……。っってことですよね？」

アムールトラさんは「ん」と同意します。

「あそこで何があったのかは、知らん……。ただ、一時期ヤツらがいっぱい居た。それを狩った。それだけの話だ」

「す、凄いですね……。ありがとうございます。お疲れさまです……。」

わたしの口から出たのはお礼の言葉でした。自分でも少しばかり違和感はありましたが、それでも危険を放置せず、対処したということとは、立派なことに違いありません。

そんな言葉に、アムールトラさんはきよとんとした顔をして言いました。

「昔のことだ。お前には——」

彼女はそこで言葉を止めて、言い直しました。

「悪い、言い方が悪かった。話すのは……そんなに得意じゃないんだ……。そう言ってくれて嬉しいよ」

責められているのかもしれない、そう思っ、少しだけ心臓が跳ねるようにどきりしました。けれど、そうで無いことがすぐにわかりました。

というのも、彼女つたらくすぐったそうな顔してるんですもの。

「……アムールトラさん、笑うと結構可愛いんですね」

しん、と空気が静まります。耳に入るのは風の音とエンジンの音だけ……。

わたしは視線だけ泳がせて、周囲の状況を伺います。イエイヌちゃんは、無表情でわたしの眼をじっと見ている……アムールトラさんは、あつけにとられたような顔でわたしを見ていて……。もしかして、悪い方に解釈されてしまったのでは……？

「あ、いや、笑ってないと可愛くないって意味じゃ……」

数秒の沈黙の後、アムールトラさんは「そうか」と言い、視線を外へと向けました。「ええ……？」と内心呟きながら、発言へのフオローを求めてイエイヌちゃんを見ると、彼女はぶくーつと頬を膨らませて、ずりずりとわたしの方に近寄ります。

「な、なんです……？ あ、ち、ちよつと、や、やめ……」

イエイヌちゃんはわたしのことをぼかぼかと叩きます。そりやあ彼女だつて手加減してくれています、当然、痛くないですけれども、あまりの事にびっくりしてしまいました。

頬を膨らませた彼女に反抗する術など無く、わたしはなされるがままになります。そんな中、ゆつくりと大きく左右に振られるアムールトラさんの尻尾が視界に入りました。それと、同時に「何回目だろう、こういうの」という、自虐めいた思いもにわかを感じたのでした。口は災いの門って、言いますからねえ……言葉には気をつけましょう。ハイ……。

少しすると、イエイヌちゃんも機嫌を直したのか、わたしを叩く手

を止めます。

「な、なんですかあ……もう……」

わたしの言葉にイエイヌちゃんはぷいとそっぽを向きながら答えます。

「ともえちゃんは皆さん褒め過ぎなんですうー」

拗ねてますねえ、これ。

「思ったことを素直に言ったただけなんですけども……失礼しました……」

彼女は何も言わず、わたしの身体にぐりぐりうりうりと頭を擦り付けます。そのまま十数秒ほど経って、彼女の動きが落ち着いた頃を見計らい、わたしは言いました。

「……イエイヌちゃんが一番ですよ？」

「別に……ともえちゃんが悪いワケじゃないんですよ……？ でもなんだか、ざわざわーってしちゃって……」

彼女はわたしの脇腹に頭を押し付けて、うつむいたまま言いました。「だから甘えちゃうワケですか……」とは口にはしませんが、彼女、恥ずかしくて何処かへ行つちやいそうですし、これ以上困らせるのも本意ではありませんから。

「……じゃ、もっと近寄ってください？」

わたしは彼女の肩を寄せるように身体を引つ張ります。イエイヌちゃんは「ひやつ」と驚きの声をあげますが、それだけで、特に抵抗もせずに引き寄せられます。そして彼女はわたしの右腕に抱え込まれるような姿勢になります。わたしは肩のあたりにある彼女の頭にそつと顔を埋めます。細やかに煌めく彼女の髪は、やつぱりどうしようもなく綺麗でした。それに、嗅ぎ慣れた、優しい匂い――

「……いい感じのトコ悪いが……飯食っておけよ？ あつちじゃ落ちて着いて食えんぞ？」

呆れた様な声色で、アムールトラさんが言いました。

わたし達は彼女の言葉を聞くやいなや、さつと離れます。

「えへん……イエイヌちゃん、ジャパリまんです。どうぞ……」

「……あ、ありがとうございます……」

アムールトラさんにも渡すべきかと思ひ、彼女の方を見ると、元々用意していたのでしよう、既に食事を始めていました。相変わらず彼女は外に視線を送ったままでしたけれども、こちらの様子を伺ったのか、一瞬だけ目が合いました。

「…………どうした？」

わたしは「うふふ」と声が出そうになるのを我慢します。と、言うのも、彼女の顎の辺りにジャパリマンの欠片がくっついて居たんですもの。わたしが自分の顎の辺りを指し示すと、彼女はそれに気付きます。アムールトラさんはそのまま指で欠片をつまみ取り、ぱくり。イエイヌちゃんもどうやら一連の流れを見ていた様で、荷台の上で、不思議なくすくす笑いが広がりました。そんな風になっている間も、ごごとと風景は流れていったのでした。

食事を終えて、それから数分。車が停まります。エンジンの音が止まると、わたし達が乗った時と同じように、後部の仕切りが開きました。ラッキービーストさんは既に車から降りていて、わたし達が降りるのを待っていました。

「着いたか」

アムールトラさんが車からひよいっと飛び降りて、身体を伸ばします。わたし達も（彼女の真似は出来ませんが）同じように自動車から降りて、こわばった身体を解しました。

周囲には草原が広がっているので、まだ『セントラル』の中ではなさそうです。ですが、道の先にはやや『異様』とも取れる光景が広がっていました。そこには、古ぼけた街並みが佇んでいました。

セントラルと草原との明確な境界線はありません。道は途中から舗装されたものとなっていききましたし、段々と建物が見られる光景になっっていました。

わたし達は車から降りて、周囲を伺います。『セルリアンが居た』という事実に必要以上におびえている可能性ももちろんあります。そういう事実を踏まえて尚、どうしてか廃墟の陰を見つめていると、寂しい気持ちになるのです。それは、きつと、ヒトが『いた』という痕跡を、このパークの何処よりも色濃く残していて、そして、何処より

もひどく荒れているからでしょう。

否応無しに寂しく悲しい思いに囚われてしまうのは、わたしが『ヒト』だからでしょうか？

虚ろな思いを誤魔化す様に周囲を見渡します。道沿いには簡易的な休息所などもあれば、何かの事務所であったかの様な簡易的な小屋、わたし達が幾度か宿泊したものと同じような透明な小屋……そんなものがまばらにありました。

そう言った何かの跡は殆どが風雨に晒された為に薄汚れていたり、染みが出来ていたり、蔦が這っていたりと、荒れ果てた様子を示しています。考えようによつては、ヒトの痕跡が自然に溶け込もうとしているとも言えます。それは植物が人工物を覆う様や、石片や木片が大地に溶け込もうとしている様子から伺えます。けれど、どうしようも無く寂しく、悲しく、何よりも虚しい……否定しようのない、虚無感に似た感情が胸に抱かれてしまいます。

イエイヌちゃんはしっかりと身体を解すと、そのまま、荷台に乗った板を指差して尋ねます。

「アムールトラさん、これ……結局何なんですか？」

「さっき言ったとおりだ。俺も知らん」

アムールトラさんの言葉を聞きながら、わたしはその板に近づき、観察します。アムールトラさんが先程言っていたことが確かなら、わたしなら何かはわかるはずなんですけれども……。

見たところプラスチックか何かで出来ている板……少し埃っぽいですが、壊れているようなことは無いでしょう。試しに持ち上げてみると、するりと板が展開し、箱になります。

「これは……箱……というより、コンテナ……？」

決まった動きをして、決まったとおりに開くコンテナ……。展開したコンテナのところどころには形状を固定するためのスライドが着いていました。それをぱちり、ぱちりと動かし、コンテナの形を固定します。

「つまり見つけたものをこれに入れろ、と……」

イエイヌちゃんも、アムールトラさんも「ふんふん」という具合に

領きます。

「で、どうする？ 持っていくか？」

わたしやイエイヌちゃんが抱えるには少し大きいですが、身体
の大きいアムールトラさんなら問題なく抱えられそうです。ですが
……

「はつきり言うと、俺は身軽でいたい。お前らの護衛だからな」

アムールトラさんの言葉にわたしは領きます。

「そうですね……。一旦は置いていくということ……ゴリラさん
は申し訳ないですが……使えそうなものがあるとも限りませんし
……」

イエイヌちゃんは領きながら、わたしに同意の意を示します。

「……今日だけしか来られないという訳でも無いですし、じどうしや
を近くまで動かせば、それで大丈夫ですしね」

決まりです、一旦はコンテナを置いていく、ということにしましよ
う。そうしてわたし達は歩き始めました。

護衛のため、アムールトラさんが先を行き、その後ろをわたしとイ
エイヌちゃん。そしてその後ろを見守るようにラッキービーストさ
んが歩きます。自動車は停まったままですが、ラッキービーストさん
に確認したところ、必要ならば内部にまで入れるとの事。途中で停め
ているのは、セルリアンが出てきた際に破壊されることを避ける為、
そして、道路の安全を直接確認してから乗り入れたいという理由だそ
うです。

舗装された道は今まで通ってきた土道よりも歩きやすく感じまし
た。ですけれど、整備が殆どされていないのか、ひび割れていたり、草
が生えていたり、塗装が剥げていたり……ボロボロの有様です。ま
た、空は綺麗に澄み渡っているのに、陽光を遮る雲さえまばらなのに、
視界の先にある建物達はどこか薄暗い印象を覚えます。それは、わた
しの気のせいかもしれません。けれど、近づくにつれて、どんどんと
大きくなる陰は重く、暗く、わたしにのしかかるようにさえ思われま
した。

「そういえば、何を探すんだ？」

アムールトラさんが前を見つめたまま、尋ねます。

「オーブンのある場所を見つけたいんです。後は何か調理器具とか、雑貨とか……使えそうならお借りしようかな、とは思っていますか……」

そうです、一番の目的はオーブンの発見です。つまり、わたし達が目指すべき場所は、レストランや食堂などの、調理関係の道具が充実にしている場所か、あるいは小型の持ち運びが出来るオーブンの発見です。

というのも、クッキーを作る上で、必要なモノとして、延べ棒ですとか、型ですとかそういった雑多な小物などよりも、完成させるための調理器具がわたし達の『おうち』には欠けていました。同様に『おうち』の周辺にもそういった施設はなかったのです。広場や、ゴリラさんの棲家、あるいはわたしの眠っていた『あの場所』などの、わたしが知る限りに於いては、簡単な作りのお店などはあっても、本格的に食事を作る場所は無いか、鍵がかかっていたりと言った具合で、必要なものを調達したり、お借りしたりということは難しいのです。

「おーぶん……？」

アムールトラさんの疑問も最もですね……。

「ご飯を作る道具です……大きいものは運べないでしょうけれど、場所だけでも確認したいんです」

フライパンとコンロでも作れるかもしれませんが、折角やるのならば拘りたいところ。可能ならばここにまた来るのも手間ですし、小型の家庭用オーブンを持ち帰りたいたいですか……それは難しい気がします。もしかすると、オーブンを見つけた場所で直接クッキーを作ることになるかもしれません。

「……よくわからんが——」

彼女は塗装が剥げきったアーチ状の看板の先を指差します。おそらくあれは『セントラル』の入り口なのでしょう。看板の前後から建築物が多くなっていましたし、黒く舗装された道は、レンガの様なブロックが組み合わさって独特の模様を生み出している道へと変わっています。

「——あそこから先はお前の指示に従う。頼んだぞ」

「はいっ！」

わたしは計画の成功を祈り、元気よく返事をします。再び歩き始めたわたし達は、まもなく『セントラル』へと入っていききました。

『セントラル』のゲートをくぐり、道を進むと、周囲の光景はもつと陰鬱なものへと変わっていききました。

この辺りはアーケード街だったのか、アーチ状の屋根に通路が続き、通路沿いには衣料品やお土産を扱っていた様なお店が立ち並んでいました。お店は内装が異なっていました。それもにわかに残る痕跡に過ぎず、内装は汚れていましたし、商品もほとんど撤去されていましたので、判断に困りました。それに、多くの場合シャツターが降りていて中を伺うことすら出来ません。

目に入るのは、パークのシンボルと思しき『の』をかたどったモチーフがプリントされたシャツや、わたしの被っているものと同じ様なハットなどが中心です。それらも、ショウウィンドウに並べられていたり、窓越しの薄暗がりの中にかろうじて見える程度で、中に入って直接触れることも出来ません。この有様を見ると、『探検』などと称して盛り上がっていた自分がどこか奇妙にさえ思えました。

不謹慎、だなんて言うつもりはありませんし思ってもいません。ただ、それでも、予想と大きく異なっていた事を考えてしまうと、どうしても、自分が滑稽なようで……。

「……なにもないですね、ホント」

わたしがぼやくと、イエイヌちゃんは不安まじりの表情をします。

「見たこと無い景色で面白くはありますけど……なんというか、ぶきみ、ですね……」

イエイヌちゃんの言う『不気味』というのも一理あります。

「もうちよつと明るければ違うんでしょうけど……」

わたしはそう答えて視線を上にあげます。ここの屋根に使われているものが何かはわかりませんが、タダでさえ色が着いていて陽射しを遮るように出来ていそうなところに、一切の清掃が行われず、埃などの汚れが積み重なっている様子。なので、光は殆ど通路には差

し込んでできません。それに街灯の類も点いて居ないですし、『ヒトの営みの痕跡』という薄暗い印象しか与えないものが密集しているので。

明るさの程度としては森の中と同じくらいかもしれませんが、周囲の光景があまりにもうら寂しい為に、実際の薄暗さ以上に重苦しい空気を感じてしまいます。

「俺は平気なんだが……まあ、確かに昼とは思えんな、ここは」
アムールトラさんは夜目が効くから、というのもあるかもしれませんが。

「せめて地図があれば……もう少し動きやすいんですけどね……」

わたしの愚痴に、ラツキービーストさんが応えました。彼は少し速歩きをして、わたしの前に立ちます。

「ともえ、モッテ」

わたしは彼の言葉に首を傾げましたけれど、従います。しゃがんで彼を持ち上げると、意外と軽く、ラツキービーストさんと同じくらいのサイズのぬいぐるみや、お人形などと大差無く感じました。抱き心地も、ふわふわとしていて、悪くないです。

「……軽いですね、もっと重いと思いました」

回収した『彼』の重さが際立っていただけで、案外この子の様な重さが普通なのかもしれません。

彼はわたしの言葉を無視して、言いました。

「……ココカラ、マッスグススンデ、ヒロバを、ミギにマガツテ」

ここは従うのが良いでしょう。彼らがこの『パーク』の管理人ならば地理や情報に疎いはずもありませんから。わたし達は彼の言葉に従って、進み始めました。

「そこに何があるんですか？」

周囲を興味深そうに、あるいは警戒して、見回すイエイヌちゃんやアムールトラさんを視界の端に捉えながら、わたしはラツキービーストさんに尋ねます。

「ボクがアケラレル、レストランがアルヨ」

つまり、そこで色々が見繕え、と言うことでしょうか？

しばらく進んで、アーケードの中心部と思われる広場に到着しました。この広場を中心に、放射状に道が伸びています。その道沿いに幾つかお店があるようです。広場の上には天井が無く、光が差し込んでいました。ここだけが直接空を見ることが出来るようです。また、不思議と広場に近づくにつれて海辺の様なニオイを強く感じるようになります。

広場に入ると、差し込む光を一心に浴びる広場中央のモニュメントが最初に目に入ります。けれど、それは植物かなにかを使ったモニュメントだったのか、針金の様なフレームが残っているだけで、草木の何もかもが無く、土肌が露出するばかりでした。

「ここを、右に……」

ラツキービーストさんの指示に従い、右を見てみると、他の通路よりも、広く大きな道が伸びていました。きつと、大通りだったのでしよう。はつきりと見える訳ではありませんが、今回わたし達が入ってきた入り口とは違って、立派な門がありましたし、その先に海の様な煌めきに混じって、大きな建物が見えます。

「他に……行けそうなところはありますか？」

わたしは歩きながらラツキービーストさんに尋ねます。すると彼は「ケンサクチュウ」と言い、それから少しして、彼は首を降るように左右に小さく揺れます。

「そう、ですか……」

「ホカは、ソウコ——……ツイタヨ。オロシテ」

着いた場所は、古ぼけた看板のレストランでした。看板の塗装は剥げきっていて、どんなお店だったのかはわかりません。大通りを抜ける潮風の為に、特にこの辺りの劣化は激しいようでした。

「……ここが、レストラン……?」

わたしはそう言って、ラツキービーストさんを地面に降ろします。彼はそのレストランのドアの隣にある端末をじっと見つめました。一瞬の沈黙がわたし達に訪れます。そんな中、ピーっという電子音の後、かちりと鍵の開く音が響きました。大して大きい音ではなかったにも関わらず、周囲が沈黙に包まれているためか、それとも音の異質

さの為か、いやに耳に響く音でした。

「……入りましようか」

ぎいっというドアの軋む音が響く中、わたし達はレストランの中へと入っていきましました。

薄暗い店内の中をぐるりと見回します。店内にはしっとりとした、というのが適切だと思われる空間が広がっていました。

数メートル四方、わたしの様な子供でさえ十歩も歩かずに端から端まで歩けるような広さで、『家族でわいわいがやがや』というよりも、親しい人と、あるいは一人でゆっくりと雰囲気と味を楽しむような、そんなお店のような印象です。それを示すかのように、落ち着いた雰囲気の木製のテーブルと椅子が数脚ずつ。また、カウンターも用意されています。

カウンターは一本の長い木材を使用しているようで、継ぎ目のようなものが一切見えません。背の高い椅子は固定されていて、わたしの様な身体の小さい方は足が浮いてしまつて使いづらそうでしたが、数は三脚でしたので、こちらの利用者は余り主眼に置かれて居なかつたのでしよう。

……メインストリートに面していて大人向けというものも不思議な印象ですけれど、天気の良い日などは表に椅子や机を出して、おしゃべりな午後を演出……なんてこともあつたのかもしれないね。ここから出るのが急だつたからか、それとも当初は戻つてくる予定だつたのか、それは今ではうかがい知ることが出来ませんが、お店の入り口側には金属製の机と椅子、それとパラソルが置いてありました。これらが外に置かれていたのかもしれませんが。

天井には丸っこいランプが下がっており、天井の真ん中にはファンが着いています。わたしがそう思うのも妙な話ですけれども、どこか古臭さを感じるものの、不快ではない、むしろ『懐かしい』……そんな印象です。

視線をカウンターの奥側に向けると、そこにはキッチンと思われる空間が広がっていました。きっと目当てのものはそこにある筈……。

思わず、椅子の背もたれに触つてしまいます。手には埃の塊が着いていて、それは時間の経過を強く意識させました。壁紙は日光で色あせている程度でしたし、床も埃や色あせが目立ちましたが、内装の全

ては、大きく壊れていたり欠けていたりという様子がありません。

「結構綺麗なんですね、ここ……」

外の有様と比べると、いくらか過去の面影をそのままにしている為、そう感じたのかもしれない。

イエイヌちゃんがわたしの言葉に訝しげな表情をします。

「……そうですか……？ 私にはちよつと埃っぽくて……くしゅん！
ご、ごめんなさい！」

彼女のくしゅみやみで埃が舞い上がります。それでも大きな塊などは少し動いた程度でした。

「けほっけほっ……っらいなら、外で待つて大丈夫ですよ？ イエ
イヌちゃんも、アムールトラさんも……」

イエイヌちゃんもアムールトラさんも、ふたりして首を振ります。
顔の辺りを手でパタパタして埃を避けながら、ですけれど……。

「護衛だからつてのもあるが、面白そうだからな。居るよ」

「アムールトラさんの言うとおりです！ 一緒にいたいですし、こう
いうところ、めつたに來ないので楽しいです！」

わたしは少しだけ「無理をさせているのでは？」申し訳ない気持ち
になりましたけれど、薄暗い店内で光を反射する彼女たちの瞳に、嘘
の色も無理な様子も見られません。

「わかりました、ありがとうございます。……でしたら、探してほしい
ものがあるんです——」

わたしは彼女達に幾つか探して欲しいモノを伝えます。『麵棒』『の
し台』『ふるい』『型』『バット』『クッキングシート』……あれば助か
るのは、これくらいでしょうか？ それぞれの形状と役割を伝え、彼
女たちに店内を探すようお願いします。無くても仕方ないですし、
汚れが酷くて使い物にならない可能性もあります。ですからそれっ
ぽいものを見つけたら教えてもらおうようにお願いしましたが……ど
うなることやら。

わたしの説明が終わると、皆さんそれぞれの持ち場に移動します。
わたしとラッキーピースさんはキッチンを、イエイヌちゃんとア
ムールトラさんはキッチンから続く倉庫の方を担当します。

「ふんむ……」

腕を組んで、周囲をぐるりと見回します。

壁は凹凸の一切ないつるりとした壁紙で、客席側と同様に汚れは多少ありましたけれど、時間経過以外の汚れも無いですし、異臭やぬめり、カビなどの水回りの汚れも見当たりません。またカウンター側からは見えなかったのですが、奥の方には機材が纏まって置かれています。

「大事に使われてたんですね……」

そう言いながら、わたしは引き出しの中や、天井から下がる棚などをまさぐります。そこには、かつて使われていたであろう調理器具が丁寧にしまわれていました。例えば、やたらと重いフライパンが数枚重なってぶら下がっていたり、例えば、お皿が重なって置いてあったり、例えば、包丁があつたり……。そのどれもが丁寧に手入れされていたようで、避けられない埃などはともかく、サビや食べ物の汚れなどは見当たりません。

わたしは床にかがんで戸棚を弄りながら尋ねます。

「ラツキービーストさん、ここって電気点きますか？」

目が慣れては来てますので、大丈夫といえれば大丈夫ですけれど……点くのであれば探索の一助となるのでしょうか……。

「……ツカナイヨ」

少し悩んだように間を置いて、彼は答えました。彼はそのまま言葉を続けます。

「セルリアンが、デタトキ、ハイデンシセツがコワレチャツタ。ゴメンネ」

抑揚のない声でしたけれど、どこか申し訳無さそうな声色に思われました。

「ラツキービーストさんの所為じゃありませんよ。それにダメで元々って思っていましたから」

彼はわたしの言葉に答えず、わたしの近くに寄ってきて、手元で目を光らせます。……いや、文字通りの意味ですよ？ 目が光ったんです。多分、わたしの手元を照らしてくれているのでしょうか。

「……！　ありがとうございます」

感謝を伝えて、中を弄りましたが……どうやら消耗品しか無いようです。それも未使用のスポンジですとか、そういうモノばかり……つて、あら。

「……クツキングシート……？」

四本ほどの未開封の筒が出てきました。それもビニールか何かで纏められているものです。透明なビニールの下には『クツキングシート』との文字が書いてあります。ボロボロになったビニールを破り、筒を一本だけ開封します。

「どこどころ箱は汚れてますけど……中身は無事そうですね……」

ぱりぱりとしつつも、つるつるとした不思議な感触。梱包がしつかりしていたのか、環境が良かったのか、もしかしたら両方かもしれないが、湿り気も無いですし、カビや虫食いと言った汚れも見当たりません。

ラツキービーストさんのライトを借りながら箱の裏面に書いてある使い方を見ると、かなりの高温まで使えるということがわかりました。

「うん、これなら……次はつと……」

わたしは視線をキッチン奥側に向けます。あの辺りは見たところコンロなんかもありますし、オーブンも、きつと……。そう思っていたのですけれども……どうやら難しい問題に直面してしまったようです。

「流しと、冷蔵庫……で、コンロがあつて、この下がオーブンなのは間違いないでしょうけど……」

先程のラツキービーストさんの話を考慮すると、おそらく動作しないでしょう。電気が通っていないだけでなく、危険性の高いガスなどはそもそもこの辺りでは使えなくなっていそうです。あ、ちなみに冷蔵庫は少し怖いの中は見ません。虫とかは割と平気ですけど、あんまり多いと探索どころではなくなりそうですし……。

「ラツキービーストさん。これ、使えます？」

コンロとくつついているでっかいオーブン。流石にこれを持ち出

すことは出来ません。せめて使用可能ならば、またココに来ればよいだけなのですが……。

わたしの言葉を受けて、ラッキービーストさんは小さく動き回ってあちこちを確認します。そして、彼は首を振るように身体をひねらせ、否定しました。

「コワレテナイケド、エネルギーキョウキュウがトマツテル。フツキモ、ムリダネ」

「ですよねえ……残念です……」

とは言いましても、内心ではどこか安心していました。ここを使えるようにするというのも大変でしょうし、それに、ここに通うというのなかなか骨の折れる仕事です。勿論、ここが使えるのでしたら、(一回だけしかクツキーを作らないという前提ですが)、それでも構いませんし、手っ取り早いのは間違いありませんけれども……。

「でっかい鉄板はありますけど……使うかと言われると……うーん……」

わたしはぱたりとオーブンを締めて、棚を再び弄り始めました。

しばらくの間、収穫が無かったので客席側の方も含めて歩き回ります。こちら側にも、消耗品の類がいくらか引き出しや棚にしまわれていましたが、そのどれもがわたしが今必要とするものではありません。流石にストローや紙ナプキンなどを持って帰っても仕方ありませんからね……。

「こんなものですかね……思ったよりもなにもない……。……ん？」

ふと奥の壁を見てみると、そこには一枚の絵が飾られていました。わたしは絵をうつすらと覆う埃を適当なモノで拭い、じっくりと絵を眺めます。

「この絵は……んー……？　……？」

色鉛筆か水性絵の具で描かれたと思われる絵。柔らかな色合いで、レストランか喫茶店の様な内装が描かれていました。その絵には人影が幾つかあり、内装はここと似ている所が多数ありました。窓から見える外側の光景は、白くぼやけていたり、そもそも描かれていなかったりという具合でしたが、パラソルを開いた机が見えます。天井

からは丸っこいランプが幾つかあって、それもここ似ています。もしかしたら、このお店のことを描いた絵なのかもしれません。それか、この絵に似せて作ったのかもしれないね。

ただ、いくつか異なる点がありました。少しか垣間見えるキッチン奥側には石かレンガで組み上げたとされる窓がありましたし、客席には見当たらない座席同士を仕切る壁があったり、パイプの組み合わさったでかい機械がカウンターのの上に置かれていたり……。

「色々と違いますね……なんででしょう……？」

考えながらじつと見つめていると、絵の下側に『改築予想図！』と鉛筆で走り書きがされています。ああ、なるほど……と思わず呟きまです。すると、見計らったかのようなタイミングでイエイヌちゃんの声が聞こえました。

「——やーん！ ともえちゃーん！」

わたしは「はい」と返事をし、彼女たちの居る倉庫の方へと移動しました。

倉庫に入ると、イエイヌちゃんとアムールトラさんは見つけてくれた道具や機材などを見下ろしながら、一冊の雑誌を捲っていました。

「おふたりとも、お疲れさまです……って何を読んでるんですか？」

イエイヌちゃんは雑誌を閉じて、わたしに手渡します。

「これ、あっちの部屋にあったんです。文字は読めないですけど、しゃしんでしたっけ、一杯あったので面白くて……」

彼女が指す先には小さな部屋がありました。その部屋は机と椅子、そして本棚があるだけの小さな部屋で、おそらく事務作業等が行われていたのだろうと思われます。わたしはちらりと部屋を覗き込んでから、イエイヌちゃんから渡された雑誌を読み始めます。光がまったくないところに置かれていた為か、劣化もほとんど無く、『図書館』に置かれていてもおかしくはなさそうなくらい良い状態です。

『簡単！ DIY！』……？』

中身をざっと見ると、日曜大工の事が書かれた書籍であることがわかりました。

「ふんふん……結構使えそう……」

お外で使える椅子や机って無性に魅力的に思いませんか？ それはさておき、あれこれ色々な情報が丁寧に書いてありますので、良い本だと思えますし、読んでいるだけで興味が湧いてくるような素敵な雑誌です。とはいえ、材料も無ければ道具もない今、知識だけ得た所で気を紛らわすくらいのことしかできませんが……。

「……ん？」

「わたしはページを捲る手を止めて、ひとつのページに眼が釘付けになりました。そのページを見て思いついたことは少し突飛な気がしましたけれど……。」

「イエイヌちゃんとアムールトラさんはわたしの様子が気になったのか、わたしの両脇に立って、しげしげとページを眺めていました。」

「……どうした？ 変なものでもあったのか？」

「ともえちゃん？ この四角いの、気になるんですか？」

「ページの詳細を頭に入れる前に、彼女達の疑問を解消したほうが良さそうです。」

「これ、オーブンの作り方です。……まだちゃんと読んでないですけど……もしかしたら作れるかもしれません」

「よもやオーブンを素人が作れるとは思いませんでした。とはいえ必要な技術や道具の問題はありますし、作れたとしても燃料や使い方に関する問題だって……ひとつ解決の手がかりが見えたのに、もつと問題が生まれます。何とも悔しいですが、作り方に関しては、明るい所でもう少しこのページを読み込んだほうが良さそうです。」

「本当ですか……?!？」

「わたしが興奮気味に話したからか、イエイヌちゃんも釣られて勢いよく言います。」

「問題は山積みですけどね……でも、ここのオーブンは使えそうもありませんし、他の場所の手がかりもありませんから……やるしかありません。ともかく、お手柄です！ イエイヌちゃん！ アムールトラさん！」

「わたしの言葉に嬉しそうに彼女達は笑ってくれました。それだけで、どこか救われた様な気持ちになります。肝心なのはクツキーを

作ることですから、まだ油断なりません。……あ、そうですそうです。「それはそれとして……。おふたりの見つけたものってこれですか？」

おふたりはそれぞれ頷きます。

「ちよつと確認させてもらいますね」

わたしはそう言つて、彼女たちの見つけてくれた品々をひとつずつ見ていきます。

まず、麵棒が一本。少し汚れていますが、しっかり洗つて乾かせばなんとかなりそうですね。のし台も同じ様なものが一枚。持ち帰るには不便そうですが、車もありますしなんとかかなりそうですね。また、ふるいは未使用と思われるものが段ボール箱に残っていたそうですね。これは問題ないでしょうね。バットと後は陶器のお皿が幾つか……。こちら未使用のようです。

頼んでおいたものはこれで全部の筈。他にもめぼしいものは倉庫の中にあるようですが、ひとまずはこれくらいにしておきましょう。「ふむふむ……。ありがとうございます！ おふたりとも……。助かりました！」

嬉しくてわたしはばんざいをして彼女達とハイタッチを交わします。まずはエイヌちゃん。いえーいと楽しげに。次はアムールトラさん……。と思つたのですが、彼女はどこか恥ずかしそうにもじもじとしています。仕方ないので彼女の胸元で遠慮がちに挙げられた両手に軽くぱちんと手を合わせます。

「本当に皆さんのおかげです……。ありがとうございました！」

「いえいえ、お宝探してみたいで楽しかったです！」

「俺もこんな事したことなかったからな、いい経験になったよ」

おふたりとも朗らかな表情で言いました。髪の毛に埃が着いていたりしましたけどね……。

「じゃあ一旦荷物を外に出しましょうか。お手伝いお願いします」

その言葉を合図に、わたし達は荷物を外へと持ち出します。

「ああ、そうです、鉄板も持っていったほうがいいかもですね……」

荷物を持つて倉庫から出たおふたりの背中を見ながら、わたしは眩

き、袖を捲くるのでした。

そこまでモノが多かったわけではないですので、殆ど時間を必要とせず、荷物を持ち出し終わりました。太陽の傾き具合はお昼過ぎと言う具合でしょうか？

わたしはイエイヌちゃんの身体や髪の毛に着いた汚れをそつと手ではたき落としながらラツキービーストさんに尋ねます。

「ラツキービーストさん。車ってこっちに動かせますか？」

ラツキービーストさんは、こともなげに答えました。

「モウ、ヤツテルヨ。アト、スコシデ、トウチャク」

あら、お仕事の早いこと。流石ですね……と、次の質問をしないとイケませんね。わたしはイエイヌちゃんから手を離して（少し名残惜しそうな声が聞こえました）、先程見つけてもらった雑誌を手に取ります。

「それと、その……お伺いしたいんですけど……お話してた倉庫にレンガってありますか？ 大きさとしては——」

わたしは雑誌のページをラツキービーストさんに見せます。彼はページをしばらく眺めてから答えます。

「チイサイホウナラ。ギリギリダイジヨウブ」

わたしはよしっ、とガッツポーズをします。このページには、手作りオーブンについて書かれているのですが、ふたつ例が挙げられていました。ひとつはレンガをたくさん使ってドーム状に形をつくり、見た目が可愛らしいけれど、作成難易度の高い本格的なもの。もうひとつは、レンガを四角形に積み上げたもので、無骨ではあるものの形成の手間や難易度は極めて低く、材料もレンガだけで良いというものでした。

「わかりました。ありがとうございます。でしたら……次は倉庫ですね」

わたしはアムールトラさんの方を向きます。

「次はアムールトラさんです、車が到着するまでですけど……」

アムールトラさんはむず痒そうに身体をぶるりと振ります。

「俺はこれで十分だ」

そう言つて、アムールトラさんはぺっしぺっしと手や尻尾を使って身体を払つていました。

「そ、そうですか……」

でしたら大丈夫だとは思いますが、ちよつと触りたかつたなあというのと言わないほうが良さそ——唐突に、身体に寒気が走ります。ぞわりという震えを抑えるように、わたしはぎゅつと身体を縮こまらせます。

「や……なん……で……?」

立っていることも出来ず、その場にしゃがみ込むわたし。理由もわからず身体に走つた恐怖の感覚は、何かを想起させるようでした。それも、嫌な記憶。

そんな時に、イエイヌちゃんがわたしの事を案じて両肩に手を当ててくれました。

「と、ともえちゃ——……こんな時に……!」

「イエイヌ。守つててやれ」

アムールトラさんも、イエイヌちゃんも、今まで聞いたことのないくらい真剣で、真面目な声でした。

「え……? え?」

半ばパニック状態に陥つたわたしは周囲を見回しますけれど、わたしには何もわかりません。いえ、なにか嫌なモノが近くに居ることだけはわかりました。

「ともえ、タツテ。ニゲルヨ」

?

「ボスの言うとおりです」

?

「ど、どういうこ——きやつ」

必死に絞り出した声でしたが、イエイヌちゃんは返事をせず、わたしを抱きかかえます。彼女、こんなに力があつたんですね。

「任せました! アムールトラさん!」

「ああ」

ラツキービーストさんとアムールトラさんを残して、イエイヌちゃ

んは真つ直ぐに海の方へと走り始めました。

「な、なにが……？」

わたしの間に、イエイヌちゃんがとぎれとぎれに応えます。

「セルリアンです」

わたしはその言葉に、彼女の身体に回した腕をぎゅゅと締めます。

「けはい、が、しました」

わたしの腕に力が籠もったのを感じたのか、彼女はそつと微笑んで、わたしを見つめます。

「私も居ます。アムールトラさんも、ボスも……だからだい——」

どこん、と大きな音がしました。耳に響き続けるようにさえ思える轟音にわたしはきゅゅと眼をつむりました。彼女はさらに速度をあげます。

早鐘を打つ心臓の所為で、時間の感覚がおかしくなっていました。

どれくらいの距離があるのかはわかりません。ただ、イエイヌちゃんは立ち止まりました。そして荒れる息を整えて、言いました。

「この辺りまでくれば、大丈夫だと思います。はあ、はあ……。隠れていてください。私とアムールトラさんで退治してきますから、待っててくださいね」

彼女はわたしをそつと降ろします。眼を開くと、そこは大きなレンガ積みの建物と建物の間でした。彼女の優しい言葉に、わたしはだんだんと落ち着いてきましたが、それでも、不安は不安です。それに、言葉が詰まって出てきません。

「あ……いえ、いぬちや……？」

それでも、せめて伝われと思い、心配だよと目線を送ります。

「だいじょぶです。私だつて弱くないんです。アムールトラさんだつてお強いんですから、へーきです。待っててください」

そういうなり彼女は立ち去りました。

どこん、どがん。わたしは涙を流しながら、眼を閉じて、帽子を深く深く被りながら小さくなります。嗚咽しか漏れ出ないのですけれど、内心はわがままでした。ひとりにしないでほしかった。一緒にいてほしかった。

けれど、と自分を叱る自分もいました。お前は何も出来ないのか。お前は泣くだけなのか。お前は逃げるだけなのか。自力で逃げるわけじゃない、逃げさせてもらっただけなのか。それで良いと、本当に思っているのか？ 何も出来ないグズ。非力で、迷惑をかけて、誰かに危険を背負わせて、後ろで泣く、無能。

……怖いものは怖いです。何かをされた訳でもないのに、一度、小さいのを見た時でさえ、腰が抜けたのに……イエイヌちゃんがあんなこと言うようなヤツなんです。わたしなんて、わたしなんて……。真つ暗な視界の中、恐れと自己嫌悪で一杯の頭に、音だけ聞こえます。

ごん、という音が響きました。

ぱりん、という音が重なって響きました。

そして幾つもの音が響きました。

それは段々と近づいてきて……。

「ともえ、オマタセ」

唐突にかけられた声に、ぴくりと身体が動いてしまいました。震えながら、恐る恐る顔をあげると、ラッキービーストさんが目の前にいました。

「トラックニ、ノツテ」

わたしは彼の言葉に従い、這いずるように前に出ます。建物の陰から出ると、すぐそこにトラックが乗り付けてありました。

「ニゲルヨ」

右を向くと、十メートルほど先でイエイヌちゃんとアムールトラさんが大きなセルリアンと対峙している姿が見えました。

「よかった……ともえちゃん！」

早く逃げてください、と彼女はわたしを見て、言いました。そう言った瞬間に、セルリアンの真ん中にある瞳が動き、イエイヌちゃんを睨みつけます。そして、触手のような腕が動いて――

自然と身体が動きました。火事場のなんとやら、というヤツでしょうね……目の前の光景はゆっくりと動くように感じられましたし、それなのに自分の身体は奇妙に速く動いているように思えました。

セルリアンの腕は、正確にイエイヌちゃんを攻撃する軌道を描いています。わたしだって、彼女を守るんです。だって、そうしないと、また……『また』……？

「イエイ——」

アムールトラさんの言葉に、わたしの動きに、イエイヌちゃんは驚きの表情をしました。そして、ゆつくりとセルリアンの方に向き直ります。きつと避けきれないでしょう。わたしでさえ、そう思いました。

わたしは、彼女がセルリアンの腕に襲われる前に、彼女の背中に触れることが出来ました。ああ、良かった、そう思いながら、走った勢いをそのままに、全力で彼女を突き飛ばします。イエイヌちゃんはそこから弾かれました。と言っても、数歩分くらいしか彼女は動きませんでした。でも、これで、彼女は大丈夫。守れました。正確な軌道を描いている以上、彼女が居た場所に今居るわたしにしか、攻撃は当たらないでしょう。

「——！」

姿勢が崩れ、倒れながらイエイヌちゃんはわたしの顔を見つめました。驚愕と、恐怖と、困惑の表情でした。絶望に、似ていました。

わたしは、間に合えばいいな、と思っただけに彼女に微笑みます。

「だめ！」

イエイヌちゃんの声が聞こえた時には、わたしに見えたのは綺麗な夕焼け空でした。

ぼんやりと灰色の光が立ち込める空間に、わたしはいました。

そんなわたしの眼前に、黒髪を長く垂らした女の子が膝を抱えて座っています。彼女は肩甲骨の辺りまである髪を後ろでひとつに纏めていて、わたしと同じ髪型でした。リボンの色は異なりましたが、どうにも親近感が湧いてきます。後ろ姿から見ると、彼女はわたしよりも少し年下に見えますけれど、正確な年齢はわかりません。

というのも、彼女の座り方は小さく縮こまった様に見えるのです。……体調でも悪いのでしょうか？

わたしはその子の数歩後ろに立っていました。彼女の後ろ姿を眺めている内に、その子がこんな薄暗くて何もなかったところで何をしているのか気になって、尋ねます。

「……何をしてるんですか？」

その子は身じろぎひとつしません。口も開かず、じっと座っています。

「……隣、失礼しますね」

せめてその子が寂しくないようにと、わたしは彼女の隣に腰掛けます。彼女と同じように、膝を抱えて。隣で見ると、彼女は目深に被ったハットで顔を隠していました。服は真っ黒な長袖のシャツと真っ青なデニムのオーバーオール。少しサイズが大きいのか、シャツもオーバーオールも、裾の方をまくりあげています。

彼女の隣でじっと座っていると、不意に彼女が尋ねます。

「……話たいことがあるの」

聞いたことのある声。でも、覚えのある声よりは少し違っています。

「何でしょう？」

ここは退屈ですから。お話でもしないと気が休まりません。

「長くなるけど……いい？」

わたしはくすりと微笑んで、黙って頷きます。それを確認したのか、してないのか……彼女はゆっくりと話し始めました。その語り口

は穏やかでしたが、諦めたような、悲しんでいるような、そんな調子でした。

そのお話は、まるでわたし自身に降り掛かったかの様な、そんな風にさえ思えてしまうくらい鮮明なもので、わたしが実際に目の当たりにしているかのような、そんな臨場感さえ、抱いてしまいます。

夏の終りのある日のことです。その日は涼しい風がそつと吹いていて、夏の終わりをどことなく感じさせるにふさわしい日でした。そして、こんな風の吹く日には、エアコンを止めて風を楽しむのが、わたし達家族の暗黙の了解でした。

あたしは時折吹く風に髪を靡かせながら、机で画集を読んでいました。クロード・モネの画集。あたしの憧れの絵。眺めているだけで懐かしくなるような、何度見ても鳥肌が立ってしまいくらいの素敵で、綺麗で、不思議な絵を書いた人の本。

「ねえ、もえ」

そんなあたしに声をかけたのはお父さん。お父さんは学者さんなんです。運動は苦手なくせに肌は浅黒く日焼けしていて、今着てるみたいに、アロハシャツとか似合う人で、背中がおつきくて、絵が上手で……それに、あたしの尊敬する、大切な人です。

わたしは画集からお父さんの顔に視線を移して、聞き返しました。お父さんは、むつかしそうな本を開いたまま、団扇を仰いでいます。「なあに？ お父さん。洗い物ならさつき済ませたよ？」

ついきつき、ご飯の洗い物は済ませたし、洗濯物はお父さんの当番。他の家事は済んでいるか、済ますには早いかのどちらかで、少しのんびりしようかな、なんて思ってたんですけど……。

「いや、夏休みいつまでだったかなって。俺も支度しないと……」

お父さんは手にしたマグカップをテーブルに戻して、本を閉じました。

「えーつとね……明後日だったかなあ……うん、明後日」

お父さんは「ふむん」と言つて、立ち上がります。

「わかった、ありがとうね、もえ。……ちよつと研究所に行ってくる

よ。ちよつと書類をね……。留守番しててもいいし、でかけてもいいよ。でも日が暮れる前には帰ってくるよ」

あたしは「うん」と答えます。その時のあたしはお出かけする予定も無かったので、このまま家でのんびりしていようと考えていました。

お父さんはリュックサックにあれこれ詰めたり取り出したりしながら支度をして、すぐに出かけていきました。口元には電子煙草とか言う不思議な機械を咥えています。

「じゃ、行ってくるよ」

あたしはお父さんを玄関まで見送ります。と言ってもワンルームみたいなものなので、数歩近寄っただけですけど。

「煙草、もう吸ってない?」

お父さんは苦笑いを浮かべながら、言い繕います。

「うん。もう完全にこつち」

「ふうん。……臭くないから良いけど……。気をつけてね、お父さん」
煙草は煙草では無いのか? と思っただんですけど、でも臭くないし、健康にも影響が無いとか言ってるんで、良いかなあということ、咎める視線を送るだけにします。

「厳しいなあ、もえは……じゃ」

そう言ってお父さんは扉を抜けて、研究所に行きました。そこは、ここから北に少し歩いたらある、病院みたいな建物です。そこではフレンズさん達の生態と、身体能力や技能を研究・検証しているらしいです。あたしだって何回か行ったことはありますが、「ぴっぴ」としか言わない機械とか、ぎざぎざしてる映像とかばっかりでさっぱりでした。

「うん、行ってらっしゃい」

そう言ってお父さんを見送った後、わたしは机に戻って残っていた学校の宿題を始めました。

学校。ここはジャパリパークの中で、学校は本当はありません。ですが、あたしみたいに、親の都合でここに住まわざるを得ない子は何人か居ます。なので、パークが大規模化していく中で、対人関係や社

会規範を子供達に学ばせる為にも学校は必要になったのだそうです。それで、図書館の建物の一室を教室へと改築。そこで通信教育を中心に、時にはパーク職員の手を借りる。そんな仕組みの学校が作られることとなりました。それがあたしがここに入学する少し前のお話。

そして、今度の夏休みが明けたら、新しい試みが実施されます。

それは、フレンズが学校に通う実験です。その被験者として、あの子が選ばれました。何故かと言えば、元々ヒトに生活圏が近い種であるということや、あたしやお父さんと一緒に暮らす特殊な子だからなのだそうです。難しい話はよくわかりませんが、あたしは彼女と一緒に学校へ行けるということをどきどきわくわくと心待ちにしていたのでした。

わたしが算数の宿題を解いていると、あの子が帰ってきました。楽しげなきぐきぐという足音や、最近テレビで聞いたらしい音楽の鼻歌なんか聞いてきました。そして元気よく扉を開ける音が耳に入ります。

「ただいまもどりましたあー！」

「おかえりなさい、——ちゃん！」

あたしは宿題を進める手を止め、玄関に視線をやります。

「どうだった？ テスト」

彼女は手提げの鞆を置いて、顔をしかめます。

「文字は読めたんですけど……さんすう？ が難しいです…… うーん……」

学校に通い始めてから何をどこから学ぶのか、それを確認するための試験だそうで、良い成績を修める必要は無い、とお父さんが何日前に言っていました……やれと言われたら良いものを提出したいと思うのも当然。だからか、テストの話をし始めると、途端に彼女は落ち込んだ様子を見せました。

「大丈夫だよ、——ちゃんならすぐ出来るようになるって」

あたしは彼女にくすりと微笑んで励まします。

「うーん……そうでしょうか……？」

「学校だと、算数と理科と美術はお父さんが教えてくれてるし、お家で

聞けばいいでしょ？ それに、——ちゃんのお勉強だったら、あただつて教えられるもの」

彼女は少しだけ表情を明るくします。

「本当ですかあつ！ おとーさんなら、安心ですねえ……」

「あたしは頼りにならないみたいない方あ……」

あたしがぶつくりと頬を膨らませて言うのと、彼女は慌てたように否定します。

「い、いえ……！ もえちゃんだつてお勉強得意なのは知ってますから、お手伝いしてもらえればなあつて思ってます！ はい！」

知ってるよ、なんて言わずに、にやにや笑いながら「ほんとお？」つて聞き返しました。イエイヌちゃんは「ホントですつてば！」と答えました。

その後は、わたしは宿題を片付けながら、——ちゃんは学校で貰ってきたという「ひらがな・カタカナ表」や「たしぎんのやりかた表」とにらめっこしながら、お父さんの帰りを待ちます。

日が暮れる前にお父さんは帰ってきましたので、それから、ごはんの支度をして、お風呂に入つて、寝ました。なんてことのない、普通の夏休みの一日。そう思います。

わたしは彼女の言葉に「へえ」と呟きます。

「昔は学校なんてあつたんですねえ……」

彼女はやつぱり身じろぎすらしません。

「うん。楽しかったよ」

楽しいな声色で、彼女は答えました。彼女の話の話を聞いていると、伺いたいところが何点か思いつきました。昔話、ですからね。今のわたしじゃわからないことも、きつとあたしなら知っているはず。

「やつぱり、その頃のパークつてアミューズメント中心だったんですか？」

幾つかヒトの居た痕跡を見つけてきましたが、その幾つかは『お客さんを楽しませること』に繋がっているような傾向がありましたから……と言つても本当に数は少なかった気がしますけど。

彼女は首を振ります。

「基本的には、研究だったと思うよ。でも、少しだけお客さんも迎えてみたい」

「みたい、というのとは、彼女にとって周囲の光景はありふれたものだったからなのでしょいか？」

「パークとしては評判あんまり良くなかったって。別にそれで良いって大人の人はみんな言ってたけど」

わたしは「ふんふん」と納得行くような納得行かないような、そんな気持ちでしたが、頷きます。

「……続けて良い？」

相手が知らない方でもお話は出来ます。そして、それは時折、思っていたよりもずっと楽しいものになります。彼女は久しぶりの会話に興が乗ったのか、喋りたがっています。

「ええ、お願いします」

わたしは眼を閉じて、彼女を促しました。

それから次の日。その日は少しだけ暑い日でした。昨日の様な、涼しい風は無く、じっとりとした日でした。

あたしはお出かけの準備をしていて、お父さんは研究所に作業があると行ってもう出掛けていました。

「もえちゃんもえちゃん」

——ちゃんが、そんなあたしの肩をつんつんと突っついて尋ねます。

「どうしたの？　っていうかお出かけの準備しなくて平気？」

——　　ちゃんは「はっ」と何かを思い出したようです。

「そ、そう言えば今日はセントラルにお出かけでしたっけ……いい、急いで準備しますね……！」

「そうだけど……まだ時間あるから、どうしたの？」

聞くと、足し算の話でわからないところがあるそうです。

「リングとみかんは別のものなのに、何故足すと二個になるのか……？」

多分、そういう問題では無いような……でも、——ちゃんの疑問も……なんというか、ひとつの理屈としては成立しているような……？

「うーん……多分、全部の数を聞いてると思うんだけど……お父さんに聞いたほうがいいかも……あたしじゃ説明難しいかなあ……」

「……？　そうですかあ……失礼しました。えへへ、ありがとうございます！　いました！」

彼女はそう言って、支度の為に部屋をとととと移動して、水筒と手提げを持ち出しました。

「私はもう準備万端です！」

んふーと荒めの鼻息を鳴らして、玄関前に彼女は立ちます。

「早いね……」

あたしは呆れたような声で呟きます。

「あたしも、うん。準備できたかな。じゃ、行こっか」

——　ちゃんは元気よく頷いて、あたし達はお出かけしました。

目指す先はセントラル。今日はお買い物です。

少し涼しくなったと言っても、まだまだ夏です。時間も早いめか、うだるような暑さは変わりませんし、当然、太陽の光は膨大な熱を孕んでいます。

そんな中で、「うへー」と言う暑さに悶える声を上げながら、セントラルへ続く道を歩いていると、小さな白い車が一台通ります。その車はあたしの隣でゆっくりと停まりました。

車の窓が開き、あたしに声をかけます。見れば、声の主は『海のお姉さん』でした。

その方は、海の方の職員だそうで、基本的には売店の店員なのだと思いますが、時々実験の補助をしたりなど、けっこう忙しそうにしている人です。また、お父さんとも知り合いの様で、何かに付けて茶化さされている節もありました。確か、「海に居るのに一番の仲良しは海の子じゃない」とかなんとか。ゴリラさんでしたっけっか。

「こんにちは、もえちゃん、——　ちゃん。お出かけ？」

お姉さんはは、あたしの顔を見るとにこやかに話しかけました。

「はい！——ちゃんと一緒に、お父さんにプレゼントを買います」

あたしの言葉に——ちゃんが続けます。

「何を買うか、まだ決めてないんですけど……何かいい案ありますか？」

その言葉に、お姉さんは少しだけ考え込んでから、ぽんと手を叩きました。

「ふんふん……よし、近くまで送るよ。乗って」

あたし達はお姉さんのお誘いに応じ、車の後部座席に乗り込みます。中はエアコンがしっかり効いていて涼しく、まるでこの中だけ秋真っ只中のような感じでした。また、少し大きめの音量で歌が流れています。曲名は知りませんが、メロディーが少し古臭く感じました。

「すずしーですう……！」

——ちゃんはそう呟きましたけれど、夏向きの格好をしていたあたしは、ついぼやいてしまいます。

「ち、ちよつと効き過ぎじゃないですか……？」

お姉さんはあたしの言葉に乾いた笑いを漏らします。

「それ、トーサカさんにもよく言われる……」

トーサカさん、というのはお父さんのことです。何故か昔からお父さんは名前で呼ばれるよりも名字で呼ばれることが多いのです。

お姉さんの言葉に、あたしも乾いた笑いを漏らしてしまいました。お父さんはエアコンが嫌いなようで、使わないで済む日は使わないという主義を昔から頑なに主張していました。

「で、もえちゃんは何買おうと思ってるの？」

お姉さんは車内で流れている音楽を消して、あたしに尋ねます。

「んーつとですね……お洋服にしようかなって。お父さんあんまり服買わないですし……でもどんなのにしようかなって考えると悩んじゃって」

わかるう、とお姉さんは楽しげに返事をします。

「あーでも、そうだなあ……トーサカさん、多分柄物よりもシンプルなヤツが似合うと思うんだよねえ」

お姉さんの見立てに、——ちゃんがうんうんと頷きました。

「それと、おとーさんはいつも白い服ばかりですし、変わった色を着るのもいいと思うんです！」

ふむ……。

お姉さんは何かを想像したのか、けらけら楽しげに笑いました。

「いいセンスしてるよー——ちゃん」

お姉さんのことです、虹色のシャツ（それも見ているだけで眼がちかちかするようなヤツ）を着たお父さんを想像したに違いありません。

「えへへ、それほどでも……」

隣に座る——ちゃんは、お姉さんの言葉が嬉しいのか、尻尾を揺らします。

そうこうしている内に、海とセントラルとの別れ道に到着しました。あたしはここで降りることになると思っていたのですけれど、予想に反して、車がセントラルの方へと曲がります。

「その……お姉さん、送ってもらえるのは嬉しいんですけど……この後の予定とか大丈夫ですか……？」

あたしが遠慮からそう尋ねると、お姉さんは苦笑いで答えます。

「へーきへーき。この後、博士から頼まれてた資料仕上げないとだげどき、もえちゃん送る方が大事。それに今度ゴリラちゃんに会いに行った時に、トーサカさんから怒られちゃうよ」

「あはは……お父さん怒ると怖いって皆言いますけど、そんなにですか……？ それに、お父さんには秘密にしますよ？ ね、——ちゃん」

彼女はこくりと頷きましたが、お姉さんは意に介さない様子でした。

「こんな事をもえちゃんに言うのも変だけどき、トーサカさんとは仲良くしときたいんだよね。ゴリラちゃんに会いに行く時に、セットになってるから、仲悪くしちゃうと、気まずくない？」

一拍置いて、お姉さんは言葉を続けます。

「それに、可愛い女の子達とドライブデートだよ？ できるだけ長く

「一緒にいたいじゃない?」

お姉さんはからかうような口調でした。

「……そんなに褒めても、あたし、何も出来ませんよ?」

「ぐっ……今度お店手伝ってもらおうと思ったんだけどなあ……」

あたしが「あはは……」と苦笑していると、——ちゃんが身を乗り出して尋ねます。

「おねえさん! 私がお手伝いしても平気ですか? で、お小遣いとか……」

ちよつと正直に過ぎる質問な気もしますが、何か欲しい物があるんでしようか?

お姉さんは——ちゃんの質問に少し悩んでから、お気楽そうに答えます。

「まあ、良いんじゃない? 博士とトーサカさんに話を通さないといけないさそーだけどねー。いいよ、聞いてみる」

——ちゃんはお姉さんの言葉に小さくガツツポーズをしました。

あたしはそつと——ちゃんに質問します。

「何か欲しい物あるの? お父さんに頼めば……?」

彼女は小さく首を振りました。

「スケッチブックと、色鉛筆欲しいんです。もえちゃんとおそろいのやつ」

それならなおさら……そう思ったのですけれど、あたしが尋ねる前に——ちゃんは照れながら言葉を付け足します。

「……自分で頑張ってお買い物して……それで、もえちゃんと一緒に絵を描きに行きたいんです」

彼女の言葉に、あたしはぽかんとしてしまいます。そんな必要無いのに、なんでそんな事を言うんだろう? つて。けれど、その後から込み上げてくる喜びの感情に、あたしは顔を綻ばせます。

「もえちゃん?」

「んふふ……そしたら今度、一緒に絵を描きに行こうね! 約束ね、

——ちゃん!」

そうしてあたし達は指切りをしました。

彼女の語るお話は、不思議と懐かしさと切なさを覚えてしまいます。わたしの過去と関係があるのかどうか、という意味では無く、ヒトが居なくなつたパークで、ヒトが居た時の思い出を語られる、という理由からです。

「……今は、そういう日常つてなくなっちゃいましたよ、パーク」嫉妬の心から、少し冷たい言葉を発してしまいました。

「知ってる」

ぶつきらぼうに、まるで関心が無いことを示すかのように、彼女は言い捨てました。

「そうですか……。ごめんなさい、ちよつとうらやましくて……」

「いいよ、別に。知ってるもん」

わたしは肩をすくめます。これは敵いませんね。ちよつとだけむつとしちやいます。

「物知りですね」

彼女はゆつくり顔を振ります。彼女の髪が揺れて、煌めきを放ちます。けれど、一言も喋らず、じつとしています。

「……続き、聞かせてもらっても良いですか？」

「いいの？」

少しだけ楽しそうな声であたしは言いました。

「ええ。聞かせてください」

彼女の話、あたしのお話を、わたしは聞きたくて……。断る理由なんてありませんから。

「ホントにここまで良いの？ 中まで送るよ？」

あたし達は、セントラルまで数百メートルというところで降ろしてもらいました。

「散歩もしたいですし、中は混んできますもの、平気です、平気」

—— ちゃんも同じようにお姉さんに説明しました。

「ふんふん。おっけー。じゃあ気をつけるんだよ、もえちゃん、——
—— ちゃん」

「はい！ ありがとうございます！」

これは—— ちゃん。

「お姉さんも気をつけてくださいねー！ しりよーづくり、頑張ってくださいー！」

「もえちゃんに言われなくても……めちやくちや厳しいんだから、博士……まあいいや、じゃあねー」

そう言つて、お姉さんは車のウィンドウを閉めて、道に戻っていきましました。

「さてと、到着したらご飯にしようか」

「そうですねえ、もうお昼ごろですもんねえ……どこに行きます？」

—— ちゃんが楽しげに尻尾を揺らしながら、尋ねます。

「ひとつ決めてたお店あるんだよね。行ったことなかったのに、建て替えだつて話だし……そこで良い？」

お金の心配はしていません。お父さんからお金を貰っているというのがありますが、お小遣いだつて使いみちが無く、貯まっていればいいので結構余裕があります。

「もえちゃんが選んだお店ならどこでも！」

あたし達の第一目的地が決まりました。そこは大通りにあるカフェです。外見がとてもオシャレで、憧れのお店。折角だから行ってみたいのに、改装作業でしばらく入れないとなると、少し悲しいですからね。

のんびりと歩きながら、—— ちゃんが尋ねます。

「服、どうしますか？ お店とか、色とか……」

あたしは思わず悩んでしまいました。

「現物見て決めようとは思っただけだね……うーん……ご飯食べながら決めよっか」

「ですね！ 腹が空いてはなんとやら！」

……それはちよつと違うと思っただけですけどもあたしは領きましました。

「あはは……。あ、着いたね、セントラル」

視線の先にはセントラルの出入り口を示す門がありました。普段からお客さんが多くないこの島では、基本的に住み込みの従業員の方や研究職員の方が利用するお店も多く、そういうお店がセントラルに集約されている節がありました。

「……なんだか今日はヒトが多いですね」

——ちゃんはきよろきよろと周囲を見回して言いました。

「そうだねえ……。どうしたんだろうね……。お姉さん休みみたいだから、暇なのかと思っただけ……」

職員の住居や研究施設等はそれぞれのエリアに点在していますし、お客さんの為の施設もあちこちにあります。なので、ヒトの往来は割とぐちゃぐちゃになっています。勿論、ラッキービーストさん達や職員の方々による管理がなされておりますので、それほど特定の場所がごちゃついたりは無いです。それに、そもそも宿泊施設はセントラルと海と山の三箇所限定されています。

ですから、ここだけに人が集中するということもないはずなのですが……。

「いつもいろんなヒトが居ますけど……今日は特別多そうですね……」

「うん。……お店、入れると良いけど……」

レストランやお土産屋さん、場所に応じた機材の貸し出しなどはそれぞれのエリアにもあります。けれど、一番お店が集まっているのはセントラルでした。宿泊施設の件もあるので、人はいつも多いのですけれど、今日はもつと集まっているように見えます。

不思議に思いながらセントラルに入ります。電飾の光や、お店のBGM、話声、どこからか漂う食べ物匂い……そんな色々を楽しみながら、アーケードを進みます。

アーケードを真っ直ぐ進んで、広場を右に。そこが大通り。人や車、時にはフレンズさんなんかも居て、わいわいがやがやという具合です。軒先にパラソルが幾つか咲いているところが、目的のお店です。

「……どうかなあ……並んでるかなあ……」

あたしが不安でつぶやくと、——ちゃんが覗き込むようにして確認します。

「んー……？　ちよつと見えないですね……見てきましょうか？」

「いいよお。すぐだし」

——ちゃんは「それもそうですね」と落ち着いた様子で応えました。とは言え心配は心配。駆け足気味に歩いてしまいます。

すぐにお店の前に着きました。お店の中は人でいっぱいでした。幸い……と言ってよいのかわかりませんが、外の席はひとつ空いていて、あたし達は従業員さんに来店の旨を伝えます。運良く、外の席でふたり、そこに座ることになりました。

「……ねえ、もえちゃん」

——ちゃんがメニュー表の表紙を眺めながら、尋ねます。あたしもメニューを眺めていたのですけれど、メニューから一旦目を話して、彼女の顔を見ます。

「なあに？　——ちゃん」

「ここのお店、なんてお店なんですか？」

あたしも手にしたメニュー表をじっくりと眺めます。アルファベットですけど、文字の上に記号が付いていてまるで読み取ることができません。

「……？　英語っぽいんだけど……わかんないなあ……」

ふたりしてああでもないこうでもないと思っていると、従業員さんがやってきました。

「ねにゆふあーる、だよ」

その人は、白髪まじりの黒髪で、メガネを書けたおじさんでした。胸元を見ると『店長』と書いてありましたので、少しだけびっくりしてしまいます。店長さんは微笑みながら、机にお冷を置いてくれました。

「ね、ねにゅ……?」

——ちゃんは復唱しようとしたが、出来ずバツが悪そうな表情になります。

「どういう意味なんですか?」

あたしが尋ねると、店長さんは楽しげに応えてくれました。

「睡蓮……蓮の花だね。そのフランス語」

睡蓮と聞いて、あたしの胸がとくりと脈打ちます。

「店長さんが好きなお花ですか?」

彼はゆつくりと頷きます。

「植物が好きって言うよりも、好きな絵のモチーフなんだ。そこから取ったんだよね」

「それって、モネの……?」

あたしが尋ねると、店長さんは「ほお」と呟きます。

「知ってるんだねえ……キミ、絵、好きなの?」

あたしは少しだけ緊張して返事は出来なかったのですが、頷きます。

「そうかそうか、流行り廃りもあるけど、僕は——つと、失礼するね。オーダーが来たみたいだ」

店長さんは「注文決まったら呼んでね」と付け加えて、店内へと入っていききました。

「もえちゃん。その絵ってどんな絵なんですか?」

——ちゃんがあたしに聞きました。

「画集あるから見せてあげるね。ちようと借りてたんだ」

楽しみです、と彼女は頷いて、メニュー表をぱらぱらとめくり始めます。

メニュー表には、パスタとサンドイッチを中心とした軽食系、パンケーキやパフエなどのデザート系、紅茶やコーヒー等のドリンク系の

三種類が中心でした。最後の方にはお酒の名前なんかも並んでいましたが、あたしにはさっぱりです。

「どうしよっかなあ……」

色々と美味しそうな名前が並んでいて、目移りしてしまいます。

それから少しして、あたし達はメニューを決めて、注文をしました。そして話題は別のものへ。「お父さんに似合うのは何色なのか？」

……。なかなか答えの出ない間に、あたし達は直面しました。

考え事をしている内に、店長さんが大きなお盆を抱えるように持ちながらテーブルにやってきました。

「はい、おまたせ。ナポリタンがふたつ。こっちがフレンズさん向けね。それと、メロンソーダとハーブティー。では、ごゆっくりどうぞ」

注文を頼んでから少しして、あたし達のテーブルに料理が運ばれてきました。ここのお店はフレンズさん向けの料理も出してくれていました。ありがとうございます。

ナポリタンはあたしが決めたら——ちゃんも同じの、ということでした。メロンソーダは——ちゃん、ハーブティーはあたし。少しだけ背伸びしちゃいました。

ハーブティーに口を付けると、苦味と一緒に何とも言えない緑色の香りが鼻をくすぐります。心地良ささえ覚えるその香りを楽しんでから、ナポリタンのお皿を自分の身体に近づけると、トマトケチャップの焦げた匂いがお腹をくうと鳴かせます。

どうやら——ちゃんもお腹が鳴っていたようで、ふたりして顔を合わせて「うふふ」と笑ってしまいます。

仕切り直し、と言わんばかりにあたしは咳払いをしました。

「いただきます」

あたしの声と一緒に——ちゃんの声も聞こえました。そして、ふたりでご飯を食べながら、おしゃべりを続けます。ちよつとお行儀悪いですけど、これくらいなら良いですよね……？

「んつく……やっぱりあたしは赤色だと思っただよねえ……」

——ちゃんはフオークで綺麗にパスタを巻き取ろうとして悪戦苦闘していました、気にせず尋ねます。

「むむう……むう……」

彼女は諦めたようにもう片手にスプーンを持ちます。そうしてなんとかナポリタンを巻き取りながら、答えます。

「私は……青か緑かなあつて思います。赤も悪くないと思うんですけど……ちよつと普段と違いすぎるかなーって思うんです」

そういうと、彼女はぱくりと一口頬張ります。もつきゆもつきゆと満足そうに咀嚼する彼女の様子を眺めながら、あたしは考えます。色、色……うーん……。

悩んでも悩んでも答えは出ません。そもそもお父さんがあたしの選んだ色なら何でも、とか言っちゃうからダメなんです。優柔不断なんです。考えても意味がなさそうなので食事を進めるとしましょう。お互いそう思っているからか、その後はお皿が空になるまで口数少なく食事は進みました。

溶けてしまうようなカノンの旋律を背景に、わたし達は気づけば食事を終えていました。

「ごちそうさまあつ」

ふたりして満腹のお腹をさすりながら、飲み物を口に含みます。と、——ちゃんの口の周りが真っ赤になっていることに気づきます。

「——ちゃん、ちよつとごめんね」

あたしはテーブルに置かれた紙ナプキンで彼女の口の周りを拭きます。

「もえちゃんだつて、失礼しますねー」

彼女もあたしの口をナプキンで拭ってくれて……ふたりしてくすくす笑い。幸せな時間です。

「やっぱり、お店に着いてからにします？ 色……」

——ちゃんが諦めまじりに提案しました。

「だよねえ……じゃあ、お店どうしよっか？」

そう言つて、あたしは周囲をぐるりと見回します。服屋さん……お土産屋さんにもシャツは置いてありますけれど、服屋さん自体はそんなに多くありませんし……。

「もえちゃんのその服ってドコで買ったんでしたっけ……？」

今着ている服は黒い七分袖のシャツとデニム地のオーバーオール。シャツはお家にあつたものですが、オーバーオールは先月買った服です。普段のあたしはあんまりこういう服を来ないのですけれど、お父さんとお買い物に行った時に、覚めるような青色に心惹かれてしまい、おねだりをしたのです。

「これ？ 確か……あっちの通りの子供服売ってるお店だよ」

あたしが指差す先はセントラルでも特に従業員向けのお店が揃っている区画でした。

「そこっておとーさん向けの服って扱ってるんです？」

うろおぼえながらもお父さんが下着とか買ってた気がします。

「うん。そんなに量は多くなかったと思うけど……紳士服売り場もあつたと思う」

ふむりと——ちゃんが頷きます。

「じゃあ、この後はそのお店で……その後は……どうしましょう？」

お洋服屋さんの心当たりは幾つかありますが、どれもお高い印象のお店……。それを彼女に打ち明けるかどうか悩んでいると、不意に奇妙な話題が耳に入ります。それは隣の席だったのかもしれないし、通りを歩く人々の会話だったのかもしれない。ともかく、今となつては事実かどうかの確認さえ……。

「他所でデカイセルリアンが出たんだと。パークは——」

崩壊。そう聞こえました。背筋がぞつと震えました。あたしは恐る恐る声のした方向を見ましたけれど、声の主の行方は知りません。

「……もえちゃん？」

——ちゃんの声にあたしははっとします。遠く聞こえるカノの旋律は抱いた感情とあまりにかけ離れていて、五感と思考が一致しないような不思議な感覚に襲われます。

「……大丈夫ですか？ 凄いい顔してましたけど……」

一瞬の間に、この生活が終わるといふ恐怖の予感が頭を過りました。パークから退去……？ ——ちゃんと離れ離れ？ 学校のお友達とか、職員の皆さんとか、フレンズの皆さんと……？

「……だいじょうぶ、だよ。お父さん達が、きつと……。ううん、何でも……」

——ちゃんはきよとんとしていますが、あたしはそれを無視して、ぬるくなつたハーブティーを飲み干します。

「じゃあ、行きましようか」

——ちゃんは慌ててグラスに残ったソーダを飲み干します。「ずぞぞつ」という音を立てていたので、注意をするべきだったのかも知れません。けれど、その時のあたしにはそんな余裕はありませんでした。

会計を済ませて、次の目的地を目指して歩きます。

広場に入つてすぐ、警報がなりました。今までに聞いたことのない様な、ぞつとする音でした。周囲は困惑と恐怖の音が、警報音に入り混じり、先程までの平穏な日々を感じさせる空気は、さながら地獄か、戦場か、そんな非現実の世界へと様変わりしつつありました。

「この音……確か……」

耳をふさぎながら、あたしは震えた声を出しました。自分でも信じられないくらい恐怖におののく声でした。

セントラルの大通りの方から何台かの緊急車両がサイレンを鳴らしながら、発進していきます。一部の車両からは屋内への退避を指示する車もありました。

「セルリアン……!」

——ちゃんが、ぐつと身体を低くして警戒の姿勢を取ります。

あたしは、きゅつと縮こまりながらきよろきよろと周囲を見回すくらいしか出来ません。

「もえちゃん。逃げて下さい」

彼女はこちらを見ないで冷静に言います。

「で、でも、——ちゃん……」

女性のスタッフが駆け寄ってきました。今まで何度か見かけたこととはありますが、お話したことのない方でした。案内スタッフの制服なので、接点もないのは当然……そんな事をぼんやり考えていました。

「ねえ！ キミ達！」

恐る恐る振り向くと、彼女は必死の形相で、あたしの腕を掴んで言います。

「この子？ 何でも良いわ。とにかく、中へ……セルリアンが……ううん、ここじゃダメね……車に乗って！ 早く！」

彼女はあたしの腕を引いて、車に引っぱり張ります。

「ち、ちよつと！」

「——ちゃんと、い、いっしょに……」

彼女はあたしの言葉を聞いて、あたしの近くに居た——ちゃんに視線を向けます。

「その子も！ あなたも来たほうが安全よ、早く……」

——ちゃんは少しだけ警戒の姿勢を緩めて、あたしの方を向いて言いました。

「もえちゃん」

あたしの眼をじっと見つめて彼女は言いました。彼女の瞳は義務と責任に燃えていて、もうあたしが何を言っても抱いた決意を変えないという強い思いが伺えました。

「私はここに居ます。皆さんのお役にたてるかわかりませんが……ひとでは多い方が良いでしょう——」

どごとと大きな物音が響きます。

物音の方を見ると、大きくて黒いセルリアンがすぐ目の前の建物に崩れ落ちるように倒れていました。広場のすぐそこまでジャンプでもしてきたのか、それとも視界に入っていなかっただけで元々そこに居たのかはわかりません。

あたしもスタッフさんも、——ちゃんも、同じ一点を見つめてあつげに取られてしまします。その一瞬で状況が変わりました。

ぎゅんと風を切るような音を立てて、ソレは——ちゃんに腕を振り下ろします。殆ど同時のタイミングでスタッフさんはあたしを抱え込んで、あたしの身を守ってくれましたが、あまりの巨体から繰り出される、極めて速い一振りの為に、衝撃は相当なものでした。あたしはスタッフさんの腕の中、真っ暗闇でしたが、すぐそこから聞こ

えた音が静まると、急に視界が光に包まれます。

「ふえ……え……？　　イエイ又ちゃん……？　おねえ、さん……？」
呆けながらも周囲を見回すと、信じられない光景が広がっていました。

セルリアンに取り込まれたイエイ又ちゃんと、地面から飛んだタイルが身体を直撃して血を流して倒れるスタッフさん。何らの支障もなく、何らの意思も見せず、何らの躊躇いもせず、あたしを見つめるセルリアン。

あたしは、音もなく崩れ落ちます。こうなったのはあたしの所為でした。力の入らない四肢がそれを物語っています。すぐに逃げればよかった。立ち向かえるだけの力があればよかった。せめて彼女だけでも助かるように身体が動けばよかった。

そう思いながら、こちらにゆつくりと向かってくるソレの眼は、あたしの無力を嘲笑うかのようでした。そして、ソレがあたしめがけて腕を動かしました。

「これで終わり」

少女はそういって、わたしの顔を見つめます。後悔と自責の思いから来たであろう苦々しい表情だけ浮かべて、あたしはわたしをじっと見つめてました。その顔は、どうしようもなくわたしでした。

けれど、あたしのお話を聞いたのに——いえ、わたしの過去を知ったのに、わたしの胸の中に、不思議と何の感情も湧いてきません。

「それで、どうなったんですか？」

お話が続くのかと思つて、一応、尋ねます。

本心を言うならば、むしろ、小説や漫画の、しかも飽きてしまった作品に触れている様な、これ以上の興味すら抱けないような気分でした。だって、知ってるお話なんですもの。眠っている間、後悔なんてし飽きたくらいでしょうに。

「……知ってるくせに」

あたしは前に向き直りました。

「まあ、そこまで聞けば、ねえ？　嫌でも思い出しますとも」

あたしはつまらなさそうに「ふん」と鼻を鳴らしました。

「セルリアンが退治された後、治療の為にあのカプセルに入れられて、眠ったままで……この前目覚めた。そういうことでしょうか？」

わたしが大雑把な予想を彼女に投げつけるように言うと、あたしはちらりと一瞬だけこちらを見てから、前を向いて言いました。

「まあね、そうだけど。他に所々、覚えてることない？　ゴリラちゃんが怖がってることとか、自分の身体のこととか……そういうの」

「わかるような、わからないような……つてところですかねえ。それこそ貴方の方が知っているでしょうに」

「本当にそう思う？」

わたしは少しだけ考えて、あたしに言いました。

「頑張れば思い出せる……んですかねえ。眼が覚めたら、がんばりますとも。応援しててくださいね、あたし」

わたしはそう言って立ち上がりました。別に行くアテもないのに、歩きたくなったのです。そして、適当な方向に、わたしは足を踏み出しました。もう、あたしの事を見つめる必要もないのです。

「がんばってねえーわたし」

あたしはわたしの方を見もしないで、ひらひらと手を振ります。

「まあ、程々に。……じゃ、どうも失礼しました」

わたしもあたしの方を見ないで、ひらひらと手を振ります。

なんでもお互いにそっぽ向いているのに手を振るのがわかるのかつて、だって自分のことでも。今も、昔も、自分は自分。やることの多少なんて、そんな変わりませんからねえ。

記憶を取り戻しても、何も変わらない。そう思っていました。そう思いました。

わたしの生き方もイエイヌちゃんとの関係も……過去を思い出したところで何も変わりません。過去と同じようにわたしがイエイヌちゃんと接することは、きつとないでしょう。

時は移ろうもので、あの頃とは何もかもが違います。

イエイヌちゃんだって、きつと……いえ、確実に、あたしの事をイエイヌちゃんが覚えていなかったからというのも理由のひとつです

が、あの時の彼女と今の彼女は、違うでしょう。なんとなくですが、そう思います。それなのに、あの時のイエイヌちゃんと同じように接することは、多分、それはわたしの自己満足です。

それだったら、わたしとイエイヌちゃんが過ごす内に、変われば良いこと。それがあの頃と同じであるというのなら、それで構いません。結果ですもの。わたしと彼女の関係は数学の答えや仕事の成果なんかじゃない。むしろ過程の方がずっと大事な、積み上げていくもの、続いていくもの、楽しんでいくもの、苦しんでいくもの、失敗も成功もするもの……。結果だけ見て、どうこうするようなものじゃありません。

……やっぱり、記憶なんて取り戻さなくても良かったんです。

不安だったわたしが、何が出来るかわからなかったわたしが、記憶が必要だって、思い込んでいただけ。だって、今度はあの子を救う為に身体が動いたんですもの。成功したのか失敗したのか、それは今はわかりません。これから先ずっとわからないかもしれません。

けれど、記憶が無ければ、何も出来ないわけじゃない。それが示せただけで、良かったんです。まあ、思い出せて嬉しいのは確かなんですけどね。でも……やっぱり、今のわたしからしてみれば、記憶を取り戻せたことは、わたしに何か出来ることがわかったという事実のほんのオマケです。

それに、今更あの頃と同じ様にしようとして、何が出来るんです？意味がありません。こうして今思うわたしがここに居るのに、あの時のあたしの真似をするなんて、ナンセンスです。過去を取り戻す、なんてのは不安を誤魔化しているに過ぎません。

それだったら、このまま生きるだけです。わたしはわたし。あたしはあたし。こうなったのなら、このまま進むだけなんです。あの頃のあたしが在って、今のわたしが居る。後悔しても、戻ろうとしても、意味はありません。ただ、わたしはわたしで居ればいいんです。そんな答え、とづくにわかってたじゃないですか。

「すつきりしたあ……」

わたしはそう言って床に大の字に寝転がります。

どこもかしこも灰色まみれ。飽きてきちやいます。そう思って、瞳を閉じました。

「どうだろうと、やれることをやるだけ。自分のためでも、そうじゃないくても……」

わたしは目を閉じたまま、呟きます。次に眼を開けると――

白い天井とくすんだカーテン。電灯は点いておらず、外から差し込む陽光の為に、部屋には優しい日陰が生まれていました。

「……夢……？」

夢と言うには、はっきりと覚えている不思議な記憶。その記憶を通して、わたしが過去を取り戻したのだ……など実感として抱いてはおりません。けれど、過去に何があったのか思い出せるようになっていくことは事実で、どことなく誇らしくもあります。

首だけ動かして周囲を見回すと、白い壁紙が目に入りました。天井にも、壁にも埃や汚れなどは無く、少し日焼けしている程度です。ベッドも白色を中心とした清潔感を感じられるものでした。

ですが、あまりにも綺麗すぎて……なんと言えば良いのでしょうか？ 生活感がない、というヤツですかね？ ちよつとした緊張感というか、落ち着かないような気持ちさえ抱いてしまいます。その緊張感とは、シーツから香る糊の臭いの為に、一層、強まっていました。

また、身体の左側には何らかの機械があり、数字が細かく変化しています。その機械からはコードが幾本か伸びていましたが、その行き先はどこにあるのか、満足に動かない身体では判断しきれません。

「……病院……？」

首だけ動かしたところで全てがわかるワケではありません。身体を起こして、改めて周囲を確認したいところですが……上半身を起こそうと力を込めると、痛みが走ります。

「つつ、いつ……つつあ……」

お腹の鋭い痛みと一緒に、全身に鈍い痛みが走ります。

こうなった理由……イエイ又ちゃんを突き飛ばして、その後……わたしは……？

「どうなったんでしたっけ……？ ええつと……」

空が見えたところまでは、覚えてるんですけど……。

けれど、記憶に残っているのはそこまで。他には何も思い出せません。

イエイ又ちゃんは？ アムールトラさんは？ 他の色々なことも……気になって仕方ありません。意識を失っていたのでしょうか？ おそらくですが、自分で思い出そうとしても思い出せる類のものではない気がします。それよりも、わたしが考えなくてはならないことがある筈。

そう、ゴリラさんが何を恐れているのか、そして、自分自身の身体について……。心当たりがない……。という訳では、ないのです。実のところ、喉元まで思い出せていそうな気がします。カプセルで眠っている間、わたしは何かを聞いていたのです。聞いていた、という事実だけ思い出せても意味がありませんが……。

考え事も纏まらず、思い出すべき事と直感した何かもまるで見当がつかず、ぼうつとしてしていると、少し開いた窓から、そつと風が吹き込みます。窓の外の景色はわかりませんが、青空ばかりが眼に入ります。漂う雲は、いつかと違って大きく膨らんでいて、べつたりと張り付いたように動きません。まるで夏の空……。

どれくらい、眠っていたんでしょう？ 満足に身体が動かせない以上、それを伺うすべなどありません……。イエイ又ちゃんとアムールトラさんの安否が気になって仕方ないのですけれど……確認の術も思いつきません。

風に遊ばれた前髪が視界に入ります。

「真つ黒……昔と一緒」

吹き込んできた優しい風にカーテンがそよいで、視界をくすぐります。わたしは力を入れて、腕を持ち上げます。鈍い痛みがありましたけれど、我慢しながら腕を上げ、陽光に自分の手をかざします。左の手首にはチューブが刺さっていました。長さにはだいぶ余裕を持って取り付けられているのか、腕の動きには支障ありませんでした。そして、指先にあるのは桃色の爪でした。

「爪も……そっかあ……」

両腕の力を抜くと、重力に逆らえずにベッドにばたりと崩れ落ちます。

わたしの身体の事……こんなころころと色が変わるといのは、

やっぱりわたしの身体に何かしらの出来事があったのでしよう。海に行った時の最初の夜……確か爪の色は桃色だった覚えもあります。その時は何か気の所為だと思った筈ですけど、こうなるとワケがありそうです。ですが、考えても考えても原因も、理由も、まるでわかりません。

こつこつと小さな足音が聞こえてきました。

元気とは程遠いその足音が、部屋の前で止まります。そして、がらりと部屋の引き戸が開きました。はっと息を飲む音が聞こえて、ぼざりと何かが落ちる音がして、瑞々しく甘い香がかすかに漂います。扉の方に視線を向けると、イエイヌちゃんが涙を貯めながら、こちらを見つめていました。

わたしはわたしで、彼女が無事に目の前に現れてくれたことに言葉を失いました。嬉しくて嬉しくて、なんと話しかければよいのでしょうか？ 申し訳なくて、情けなくて、なんと話しかければよいのでしょうか？

迷っている間に、イエイヌちゃんがゆっくりと覚束ない足取りでこちらに近づいてきます。わたしは痛みすら感じず、イエイヌちゃんへと手を伸ばします。一歩ずつ、一歩ずつ彼女の顔に涙が溢れていき、思わずわたしさえ涙を流してしまいます。

「――よがっだあ……」

彼女は鼻声でわたしの手をそつと握り、顔を擦り付けます。涙の粒が、手の甲に、手のひらに、指先に、染みるようでした。

「ごめんねえ……イエイヌちゃん……」

嗚咽混じりに伝えられたのは、謝罪の言葉でした。その後はしばらく、お互い泣き声を上げながらくっついていました。

気づけば、ゴリラさんとラッキービーストさんが一緒になって部屋に来ていました。

「悪いな、ふたりとも。ともえと話がある」

ゴリラさんは扉の前に落ちていた花束を広いながら、言いました。

イエイヌちゃんは、ゴリラさんの話を聞いて立ち上がります。そして、そつとわたしの顔をハンカチで拭ってくれました。

「いったん、しつれいします……」

そう言つて、名残惜しそうな表情を浮かべながらゆつくりと部屋を出ていきました。先程と同じくらい静寂に包まれた部屋なのに、足音は聞こえませんでした。

ゴリラさんはイエイヌちゃんが部屋から出ると、時間をかけてゆつくりと言葉を選んでから、言いました。

「……まずは、おはようつてところかな」

そう言いながら、彼女はベッドの脇にあるサイドテーブルの花瓶の花をイエイヌちゃんが持つてきたものと交換しました。作業をしながら、何の気無しに言われた言葉でしたが、多分に心配の感情が含まれた声で、その声の為にわたしには申し訳無さしか湧いてきません。

「ご迷惑をおかけしました……」

「本当だよ、まったく……無茶をしてくれたな……」

声が震えているのは、怒りのためでない事を祈るばかりです。わたしは何度も謝罪の言葉を発していましたが、途中で彼女はわたしの言葉を遮りました。

「それはもういい。説教したくてここに来たんじゃないから……反省くらい自分で出来るだろう。お前は……」

彼女は一拍置いて、続けます。

「まずはイエイヌとアムールトラについてだな。ふたりともちよつとした怪我をしたくらいで、元気だよ」

「良かったです……それだけで、無茶した意味があります……」

ゴリラさんは眉間にシワを寄せて、非難げにわたしを見つめました。が、何も言わずに続けます。

「どういう戦いがあったのか……つてのはまた今度ふたりから聞いてくれ」

彼女はわたしが頷くのを見る為に一拍だけ間を置きました。

「……で、お前の身体に何があったのかだな。腹に瓦礫が——金属の棒だったかな、貫通。少し遅れてたら、死んでいた。処置がどうこうとか置いといても、普通なら後遺症が残っただろうつてさ。わかるか、その意味が」

ぞつと怖気が走るようでしたが、気になるのは『普通なら』という文言。

「わたしが、普通じゃない、ってことですか……?」

「まあ、そうなるな……。勿論、ここの設備が使えたからなんとかあったってのもある。それ以上に……。あー……」

ゴリラさんはどう伝えたら良いのかと思案げでした。なんとなく、ですが、わたしは彼女が何に悩んでいるのかを直感的に悟りました。

「ゴリラさん。記憶。戻りました。……お父さんの名前、言ったほうが良いですか?」

彼女はわたしが記憶を取り戻す為に関与をしないようにしてきましたから、それに纏わる情報の為に、言い淀んでいるのだと思います。一応、お父さんの名前を彼女に伝えます。

「どうやらわたしの予想は当たっていたようで、彼女はあっけに取られた後、そつと微笑みます。」

「そうか、良かったな、もえ」

「ともえです。そう呼んで下さい。……あの頃には戻れませんし——」

わたしはそつと扉の向こうに視線を送ります。

「——あの子の為にも……お願いします」

ゴリラさんも扉のほうをちらりと見ました。そして少しだけ考えるような素振りをします。

「まあ、お前が言うなら良いが……もえって呼んでも怒るなよ?」

わたしは彼女の言葉にくすりとしみます。

「少し前だって……いえ、大丈夫ですよ」

ゴリラさんは「ん?」と不思議そうな声を出しますが、咳払いをしてから、話を本題に戻しました。

「ごほん。まあ、それなら話しやすい。お前が昔セルリアンに取り込まれて、救出されて……その後、カプセルで治療された。それはわかるな?」

わたしは頷いて、言葉を促します。どういった治療法でカプセルを利用したのか、それはわたしにはわかりません。ですが、あの中に

ずっと居たのは事実です。

「その影響で、お前の身体はヒトにしては不思議なことになったらしい。俺を含めてフレンズじゃ説明が難しいそうだから、こいつを連れてきた」

ゴリラさんは彼女の膝の上に置かれたラツキービーストさんの頭をぼんぼんと叩きました。

「カワルネ」

「はい、お願いします」

「ともえノカラダハ、フレンズとオナジヨウニ、サンドスターヲ、タメテオケルヨウニナツタヨ。ソモソモ——」

曰く、セルリアンに『輝き』を奪われた為に昏睡状態になったわたしは、『輝き』を補充するためにあのカプセルの中に入れられていたそうです。しかしながら、然るべき時に然るべき処置をしなかった——つまり、カプセルから出るべきときに出ず、強制排出を待った——為に予定よりも長期間サンドスターに晒され続けたそうです。

そして、過剰なサンドスターの供給に大して、わたしの身体が、フレンズさん達と同じようにサンドスターそれ自体をエネルギーとして蓄積出来るようになった……ということだそうです。この変化が、『進化』に値するのか『変異』に値するのか、その判断は難しいそうです。加えて、記憶喪失の原因は事件のショックと身体の変調、カプセルからの脱出という環境の激しい変化に起因するのでは、という予想をラツキービーストさんは下していました。

淡々と発せられた言葉に、わたしは疑問の感情と、不思議な納得感という相反する感情を抱きました。

「ど、どういう……でも、それって……もしかして……」

頭の中でひとつの仮説が生まれました。ラツキービーストさんはわたしが何か言おうとしているのに気がついているのか、わたしの言葉を待っているかのように何も言いません。

「……わたしの髪の色とかが前と違うのってそれで……?」

「ソウダヨ。……ともえノカミノケや、ツメ、ドウコウのイロガチガウノハ、ソレガゲンイン」

けれど、それらの色が昔の色に戻っていることの説明にはなっていません。

「アトハ、タイナイのサンドスターをツカッテ、ケガやヒロウのカイフクもシテル」

無意識の内に、と彼は付け加えました。そのまま彼は幾つかの要点をわたしに説明します。

わたしの身体は、およそレンズ一体程度の量を蓄積するということ。他のレンズと異なってサンドスターの摂取は生存に不可欠では無いということ。セルリアンと違って、レンズから奪う形でのサンドスターや『輝き』の摂取は不可能だということ。島に居る限りは、ジャパリマンの摂取などを通じて、自然と身体にサンドスターが蓄積していくということ……そんなところでしょうか？

彼の話が終わると、そこから予想できた答えをひとつ、ラッキービーストさんに尋ねます。

「……ええっと、つまり、髪とかの色が戻ったのは貯まっていたサンドスターを使いきったから、ということですか？」

「ソウダネ。シバラクスレバ、モドルヨ」

なるほど……わたしの身体、そんな不思議なことになってるんですね……。喻えて言うならば、わたしの髪や瞳、爪の色は、電子機器に於けるバッテリーランプの様な役割を果たしている……。のでしょうか？

「トーサカが居れば、理由や原因。後は治し方とか……そういうのも詳しくわかったかもしれないが、ラッキービースト達だけじゃ、これが限界だ。まあ、わかる範囲では命に別状が無いどころか、救ってくれるチカラだろうな」

ゴリラさんは言葉を続けます。

「……アイツはな、お前を治療することに最後まで悩んだ。ここにひとりにして、それでお前が幸せになれるのか、お前を生き延びさせるのは、自分のワガママなんじゃないか、ってな」

ゴリラさんの言葉に、すぐには答えられませんでした。

幾つかの可能性が頭を過ります。

もし、フレンズさん達がパークから消え去っていたら？ 自然の中で生存する野生動物達の中にわたしはひとり取り残されたでしょう。その危険性は考えなくともわかります。仮に危険でなかったとしても孤独に震えていたでしょう。もし、治療が失敗していたら？ 誰にも気づかれること無く彼処で永遠に眠っていたのかもしれない。もし治療が成功していても、カプセルが開かなかつたら？ 意識を取り戻したわたしがあの中で餓死していたかもしれない。もし、もし……いくらでも悪い想像は出来ます。けれど、そうならなかつた。そうはならなかつたんです。結果論ですけどね。

数分か、数十秒かは定かではありませんが、沈黙が部屋に漂います。わたしは、それを破るために口を開きます。

「わたしは、今、幸せですよ。それだけは、お父さんに伝えたい……ですかね……」

そんな事、できそうにもないのが少しだけ悲しいです。

「……なんにせよ、だ。お陰で前回は、今回も、お前はなんとか……そういう話だ。どう捉えるのかは、お前に任せるよ、ともえ」
無茶はするなど言いたげな、非難混じりの言葉に聞こえました。

「……はい」

「一応、完治まではもう少しかかる。ラッキービーストの見立てじや二週間くらいだそう。お前の体質が無かつたら、もつとかかるんだぞ？ ……しばらくはここでゆっくりしてろ。安静にな」

ゴリラさんはそう言って、部屋から立ち上がります。

「ラッキービーストはここに置いてく。聞きたいことがあるら教えてくれるんじゃないか？ それと何かあった時にもこいつに伝えろ。俺のところ連絡が来るよう頼んである。本とか欲しかったら明日にでも持ってくるが……いるか？」

彼女の言葉にわたしはゆっくり考えて、答えます。

「スケッチブックと色鉛筆。それと……レンブラントの画集をお願いします」

「あいよ。……そいつ、誰だ？」

彼女は不思議そうに聞き返しましたが、まあいいか、と呟きます。

「画集な、了解。じゃあ、俺は失礼するよ」

「はい、本当にありがとうございます。おかげさまで、本当に……助かりました」

ゴリラさんはわたしの言葉に「ん」と軽く返事をして、部屋を出ていきました。部屋を出てすぐにイエイヌちゃんの声も聞こえませんでした。やっぱり居たんですね。

扉越しに聞こえるお話では、今日一日はひとりにさせろ、とのことらしいです。わたしに反省を促したいのかもしれないし、お腹の傷が理由かもしれませんが……。イエイヌちゃんが居ないのは寂しいですが、まあ考え事をするにはもってこいです。それに、ラッキービーストさんも居てくれますからね。ひとりでは、ありません。

イエイヌちゃんとゴリラさんの声が聞こえなくなつて、足音が消えて……少しすると日が傾き始めてきました。部屋にはラッキービーストさんとわたしのふたりつきり。考えてみれば、ラッキービーストさんとふたりつきりになるのは初めてですし、近くにイエイヌちゃんが居ないというのも初めてです。

なんだかそわそわしながらちらりとラッキービーストさんを伺いますが、特に変化は見られない様子。こちらから話しかければ違うのでしょうか……。正直な所、何を話したら良いのかさっぱりです。それに、身体を動かして気を紛らわせようにも、痛みで満足に動けない以上、出来ることと言えば考えることと、空を眺めること……それくらいです。

「……思い出さなきゃ」

あたしが、わたしに仄めかしたことのひとつ——『わたし自身の身体について』——は解決しました。けれどももうひとつの『ゴリラさんが恐れていること』……心当たりも何も、無いのです。

「多分聞いても教えてくれませんよねえ……」

内容次第、かもしれません。ですが、わざわざ彼女が恐れているのだと言うのであれば、もしかすると『長』として対処しなくてはならない問題の可能性だってあります。そうなれば、わたしを含めた他の方にむやみにお話することは避けるでしょう。混乱を招きかねませ

んもの……。

それに、セントラルに向かう以前の彼女の様子を考えると、その可能性は高そうです。結局の所、ゴリラさんはなにかの問題を今抱えていて、それをわたしには……いえ、おそらく殆どのフレンズさんには、話そうとしない。

「……はあ」

ため息をついて、視線を空に向けます。

だいぶ時間が経っているのか、いつの間にか空は茜色になっていました。そして、董色に染まった雲がぼんやり漂っています。透き通るような朱色と、徐々に色を濃くしていく夜の色。空の神秘を目の当たりにしたのは、いつもこれくらいの時間でした。グリーンフラッシュ、天使の梯子、オーロラ……あれら自然の生み出す神秘は、わたしの心を励ましてくれていた気がします。

空を眺めていると、逆光の為にどなたかはわかりませんが、フレンズさんが空を飛ぶフレンズさんの姿が視界を横切りました。けれど、それ以外に変わりはなく、外からは木の葉のざわめきも風の音も、フレンズさん達の話す声も、何も聞こえてきません。空を眺めながら耳に入ってくるのは、機械のぶううんという低い駆動音だけ……。

「カプセルの中に居ると、あんまり変わらない感じ……？」

不意に思い出したのは『あの場所』……お父さんの仕事場の事。

あそこではわたしの治療が行われていましたが、本来ならば何らかの形でサンドスターを対象とした研究が行われていたのでしよう。そうでなければ、わたしが彼処に居た理由もわかりませんし……。

「退屈です……ねえ、ラッキービーストさん？」

ラッキービーストさんはわたしの方をちらりと見て、返事に困ったように身体を傾けます。

「あはは……あ、そうです」

ひとつ聞いてみましょうか。

「お父さんの研究内容ってなんだったんですか？」

ラッキービーストさんにそう尋ねると、一瞬だけ彼の瞳は瞬いて、そしてゆつくりと説明してくれました。

「サンドスターノシнтаイ、オヨビ、ブツタイニオヨボスエイキヨウにツイテダネ。アトハ、フレンズノシнтаイのカンリとチヨウサギヨウムダヨ」

ふむふむ。結構難しそうなことやってたんですね……お父さん……

「——お父さんなら、何が起こっているのかわかったんですねえ……」

オーロラ……綺麗でした。きっとわたしはあの美しさを、雄大さを、優美さを、描くことは出来ないでしょう。イエイヌちゃんと見ることが出来たのは幸いです。もし、叶うのなら、お父さんとも一緒に……あれ？

「……ラツキービーストさん」

疑問がひとつ、唐突に生まれました。オーロラって、ここだと普通に見られるものなんですかね……？ なんとというか、その、もつと寒いところでは見られない印象です。

というのも、オーロラが生まれる詳しい仕組みは知りません。ですが、色々と複雑な条件が整って初めて見られるものだということは、わたしにだってわかります。そして、このパークでそれが見られるようなことがあるとしたら、文字通り、奇跡……なんですけれど……。もし、そうであるのならば、ゴリラさんはあんな表情をしない筈です。アレコレ言い伝えもあるのかもしれませんが、少なからず『科学』の事を知っている時代の方……。何か、嫌な予感がしました。

「ナニ？」

わたしはゆっくりと考えてから、尋ねます。

「オーロラって、ここで見れます？ 空で……」

ラツキービーストさんは逡巡することなく、答えました。

「アリエナクはナイヨ。デモ、カンソクレイはナイヨ」

えっ……？

「無い……？ そんなこと……じ、じゃあ、この前の、この前のあれは……何だったんですか……？」

わたしの言葉に、ラツキービーストさんは不思議な返答をしまし

た。

「セキユリテイクリアランス、カクニン。キミツジヨウホウへのアクセス、シヨウニン」

わたしは哑然としながら、彼の言葉を聞いていました。

「オンセイキロク、サイセイ——」

そして、その言葉が終わってから彼の口から繰り出されたのは、お父さんと誰かが話す声でした。その内容は、きっと非情に過ぎる現実です。知りたくはないけれど、知らなくてはならない事実。そして、わたしにはどうにもできそうにない、悲しい問題……。その会話が事実であるということは、ラツキービーストさんが言うからという理由もありました。

けれど、わたしが、わたしの耳で、直接聞いていたのだという事に……。気付いてしまったのです。

ラツキービーストさんの音声記録を聞き終わる頃には、もう外は夜でした。部屋の電灯が点いていない為に、中は薄暗く、冷えた風が吹き込んでいました。空に浮かぶ下弦の月が、わたしを嗤っているようにさえ見えます。

「……」

わたしは口を開くこと無く、考えます。ラツキービーストさんの……。お父さん達の言葉が事実ならば、いずれ、ゴリラさんは……。

そのつもりで居るに違いありません。でなければわたしや、他の方に言わない理由もわかりますし……。おそらくゴリラさんの次に年長者であるドードーさんとお話する意味もわかりますもの……。多分、ゴリラさんの次がドードーさんなのでしょう。そういう決まりなんでしょうね。だから……。

そこまで考えて、わたしは首を振りました。それだけは、どうにかしたいです。そんな事を彼女達に強いてはいけません。

考えなくてはなりません。わたしに何か出来るのか、何か出来ることはないのか……。彼女や、彼女達が犠牲にならず、問題を解決し、全てを丸く収める方法……。

ああ、あるじゃないですか。たったひとつの冴えたやりかたってヤツが……。それはわたしにしか出来ないこと。今まで過すごしてきたパークへの恩返し。……やるしか、無いでしょう。

空はびつくりするくらいの青色に染まり、どこからか蝉の声が聞こえてくるような、そんな日。陽光はあまりに強く、それが為に色濃い陰を地面に落としていますし、時折窓から吹き込む風も多分に熱を含んでいて、ほんの少し前までの涼しげな様子はどこへやら。

「あづいですう……」

イエイヌちゃんはわたしのベッドに腰掛けながら、自分の服をぱたぱた動かして、必死に身体に風を取り込もうとしています。

「ラツキービーストさんに頼んで、エアコンつけます?」

わたしは少し前まで口に加えていた機械をサイドテーブルに置き、尋ねました。

「いえ、だいじょーぶです……」

彼女の言葉に、ゆつくりと立ち上がって、わたしは窓のカーテンを締めます。せめて陽射しだけでも……と思つてのことです。カーテンを締めようとして外に視線を向けると、目に痛いくらいの緑色を湛えた森の木々が目に入ります。

「……イエイヌちゃん」

薄暗く陰を落とした木々の下はどれほど心地よいのでしょうか? そう思うと、外に出られない今が無性に悔しくなります。

「外出られるようになったら、お散歩しましょうね」

「はい! そのためにも、早く元気になってくださいね!」

イエイヌちゃんは待ちきれないと言わんばかりの声色です。

「ですねえ……明日くらいから結構歩き回っても良いそうですねですけど……」

傷の悪化を恐れたゴリラさん、ラツキービーストさん達はわたしの事をやや過保護なくらい安静にするように言っています。実際の所、歩いてトイレに行ったり、身体を拭う程度は出来ていますし、体力の衰えなども感じません。外に出るな、という指示は、感染症なんかを恐れてだそうです……。……

「本当ですかあ! 良かったあ……」

彼女はしみじみと安心のため息を漏らします。心配も、迷惑も、かけちゃいましたからね。

「外に出てもいいかどうか、聞いてみますね」

わたしはサイドテーブルに置かれたリンゴとお皿、フルーツナイフを手にとって、リンゴの皮を剥き始めます。イエイヌちゃんは不思議そうにわたしの手元をじっと眺めながら、尻尾を振っていました。

リンゴ……どうやら自生しているものがあるそうで、そこからひとつをお見舞いということでもドードーさんが持ってきてくれたものです。とはいえ……わたしは怪我の都合で食べられなかったもので、しばらくの間は絵のモチーフとして活用させていただきました。そして、もったいなさから、日中一緒に居てくれるイエイヌちゃんに振る舞おうと思ったわけです。ちなみにフルーツナイフとお皿はラツキービーストさんに今朝方、頼んで持ってきて頂きました。

「不思議ですねえ……すいすい切れてきます……」

わたしはリンゴの皮を千切れさせずに剥ききりたかったので、集中してしまい、彼女の言葉を無視してしまいます。けれど、イエイヌちゃんもどうやら独り言だったようで、特に頓着しない様子……。

そして……

「よっし……」

なんとか千切れずに剥ききりました。満足……！ 自分で食べることが出来ないのは惜しいところですが、手慰みとしてはなかなか面白いですねえ。

そのままわたしはリンゴを八等分にし、種とヘタを取って……イエイヌちゃんにお皿を差し出します。

「なんだかいつもすみません……ともえちゃんは食べられないのに……」

お皿を受け取ったイエイヌちゃんは、わたしの顔から視線を逸して言いました。

「んー……ダメになっちゃうよりは良いですから。ほら、食べて下さい」

わたしは微笑みながら、彼女に食べるように促します。

「じゃあ、いただきます…あむ…」

彼女は笑顔を浮かべて、リンゴを一切れ口に入れて、咀嚼します。さくりという小気味良い音は、しゃくしゃくという、やっぱり小気味良い音に変わっていきます。

……イエイヌちゃんが美味しそうに食べているところを見たくてひと手間かけちゃってる節もあると思います。流石に恥ずかしいのでそんなこと伝えられません…。

「じゃあ、わたしも失礼しますね」

サイドテーブルに置かれた筒を口につけて、吸い込みます。

「それも不思議ですよえ…」

「気体でサンドスターをせっしゅって…そういう方法なんでしょうね…」

イエイヌちゃんはしゃくしゃくとリンゴを食べながらでしたが、首を傾げます。

今、わたしが使っているのは、お父さんが昔吸っていた様な電子煙草を基にして作られた機械だそうです。サンドスターをアレコレして、蒸気にしたものを吸引するというものらしく、病気や怪我で飲食が出来なくなったフレンズさんにサンドスターの摂取を可能にする…という代物だそうです。試作品の本体とカートリッジが残っていたのを、ラッキービーストさんが持ってきてくれました。

と、枕元に置かれたラッキービーストさんが声を出します。

「ともえ、コウカンのジカン」

「ああ、そうでしたそうでした」

わたしは病院着を脱いで、お腹と背中当たったガーゼを外します。背中の方はどうしても手間取ってしまいます。けれども、流石に手慣れた手付き…のハズです。ペリりと皮膚からテープの剥がれる音が聞こえると、イエイヌちゃんは思わず眼を逸していました。

「うう…」

イエイヌちゃんはうめき声をあげましたが…実際の所、傷の状態は今それほどひどいものではありません。

ここで眼を覚ましてから——つまりは記憶を取り戻してから——

一週間が経とうとしています。身体の痛みは殆ど無くなり、お腹の傷もだいぶ癒えました。目覚めたばかりの頃のグロテスクな赤色の皮膚や肉の露出、出血などはなくなっていて、(イエイヌちゃんはそれでも目を背けたがりませんが)淡桃色の傷跡程度になっています。化膿なども見られず、予後も順調……。自分の体であるにもかかわらず、不思議でならないくらいに速度で体調は戻っています。

「……モウ、ガーゼはイラナイネ」

「本当ですか？ 助かります……。どうしてもむずむずしちやって……」

「アトがノコルカモシレナイケド、ソレクライダネ」

ラッキービーストさんは、わたしに後ろを向くように促しました。わたしは指示に従い、後ろ側の傷跡も見せます。

「ジツトシテテネ。ナカもミルヨ」

不思議な駆動音を立てながら、ラッキービーストさんはわたしの身体をじっくりと見つめます。方法や原理は知りませんが、体内の傷を確認しているのでしょうかね。

「ウン、ナオツタネ。シヨクジもシテイイヨ。ヨウスをミナガラ、ダケドネ」

彼の言葉を聞いて、わたしはそつと病院着を羽織ります。わたしが前を合わせていると、イエイヌちゃんは意を決したように、わたしのお腹の傷をじつと見つめて言いました。

「ともえちゃん、痛くないんですか……?」

お腹に視線を向けると、平坦なむ……。いえ、なんでも。

「痛みはもう無いですよ？ ほら」

つんつんとおへその左側にある傷跡を自分で突きます。傷跡は高いところからインクを落としたような不思議な放射状になっていました。

「ひよええ……」

ぞわぞわと身体を震わせて、イエイヌちゃんは悲鳴混じりの声を出しましたが……。何もそんなに驚くことは無いでしょうに。まったく……。

「……ラッキービーストさん。もう外に出ても大丈夫ですか？」

「ウン。アト、オフロもヘイキダヨ」

わたしは思わずガッツポーズをしてみせます。そんなわたしを見てイエイヌちゃんがぐすりと笑います。

「ともえちゃん。お風呂好きですねえ……」

「しばらく入ってなかったので……どうしても……えへへ」

濡れたタオルで身体を拭いたりなどはしているのですが、どうしても汗や汚れ、ニオイなんかは気になってしまいます。イエイヌちゃんは平気って言いますが……。

「ソウダ、ともえ」

「はい、なんででしょう？」

ラッキービーストさんから提案されることはあまりないので、少しだけ身構えてしまいました。

「……オンセン、アルヨ」

一瞬何を言っているのかわかりませんでした。今まで意識したことも無ければ、行ってみたくとも思ったことのない場所……温泉……！ お父さん、そういう事教えてくれなかったんですよ。文句を一言、言いたいくらいです。

「え、本当ですか？ どこに……？」

イエイヌちゃんは会話の内容についてこられていないのか、きよとんとした表情でわたしの顔を見たり、ラッキービーストさんの顔を見たりと視線が行ったり来たりしています。

「ヤマのホウ。コンド、アンナイスルネ」

よつし、と幾度目かのガッツポーズをしてみしました。

「温泉……？ でっかいお風呂とかですか？」

会話の流れから推測したのか、当たらずとも遠からず、という具合です。

「そうですねえ、自然のどっかいお風呂ですかねえ……。今度——」

浮足立つような心を沈めるのは、ひとつの覚悟。

「——いつか……ええ、いつか、行きましようね」

わたしの様子が変わったのを不思議がるイエイヌちゃんでしたが、

わたしは取り繕うようにイエイヌちゃんの膝に載せられたリングに手を伸ばします。

「わたしも、いただきますね」

「……。どうぞどうぞ」

一瞬だけ、イエイヌちゃんの左目がぴくりと動きましたが、彼女はすぐさま微笑を浮かべました。

「ヒトキレダケダヨ」

ちくりとラツキービーストさんが注意をします。わたしは「ふあい」とリングを口に入れながら、応じます。そんなやり取りを見ながら、くすくす笑いを漏らすイエイヌちゃん。

平穏な、昼下がりでした。

「それじゃあ、今日はこれくらいで……」

夕日が空を染め上げる頃、イエイヌちゃんは帰宅の途につきます。

「毎日ありがとうございます。イエイヌちゃん。……明日も来ます？」

「勿論です！」

イエイヌちゃんの負担になってしまっているのでは？　と思っていましたけれど、手間などよりもずっと、わたしに会う事を大切にしてくれているのでしょう。わたしは彼女に甘えているような気がします。

「なんだかすみません……。でしたら、明日は一緒に散歩しても良いですか？　そろそろ身体を動かしたいですし……」

イエイヌちゃんは表情をぱあっと明るくします。

「はい！　喜んで！」

彼女は尻尾を振りながら、ぴよんぴよんと小さく跳ねました。

「ふふっ……。そんなに楽しみですか？」

あまりの喜び様に思わず質問してしまいました。

イエイヌちゃんは「えへへえ」と照れながら笑います。

「久しぶりですもの！　楽しみです！」

「ありがとうございます。じゃあ、また明日、お願いしますね」

「はい！ では失礼しますね！」

彼女はそう言って部屋を出ていきました。

イエイヌちゃんが部屋を出て、わたしは自分の顔をぺちぺちと叩きます。

「……お話、しないと」

覚悟を決めて、ラッキービーストさんをお願いします。

「ラッキービーストさん。ゴリラさんと呼んでもらえますか？ お話があるんです」

わたしの言葉にラッキービーストさんは頷くように身体を動かしました。

ゴリラさんが来るまでの間、わたしは不思議な考えに囚われていました。それは、何の変哲も無い、平和な日々が続いているのだという思い。

今日だって特別なことは何もしていません。わたしは座って絵を描いたり、本を読んだり……イエイヌちゃんだって同じです。絵本を読んだり、わたしとおしゃべりしたりする、普通の一日。単に場所が違うだけ。

アムールトラさんや、ドードーさん、他にもお会いした色んな方がお見舞いに来てくれたりもしますが、それはきつと場所が違うだけ。わたしが今どこに居ようと、遊びに誘ってくれたり、遊びに来たり……そういう生活です。楽しくて、面白くて、素敵で……そういう日々が変わらず続いている。怪我をして尚、いいえ、怪我をしたからこそ、記憶を取り戻したからこそ、わたしはそう思います。

だからこそ、わたしは皆の為に何かをしたいのです。何かをしなれば、何かを生み出さなければ、パークに居てはならないなどとは誰も言わないでしょう。このパークに於いて、守らねばならない原則があるとしたら、やれるだけのことは自分でやるという優しくも厳しい掟だけ……。

そして、わたしは、この言葉に応えなくてはなりません。『なくてはならない』などというのは、きつと考えすぎですし、抱え込みすぎですし、多分に自意識過剰です。だとしても、悲劇を避けるためにわた

しが使えるのなら、皆のために使ってもらいたい。あの日から眠り続け、目覚め、旅をし、記憶を取り戻し、そして今あるわたしが、パークとパークにいる皆さんに恩返しをしたい。……そう考えてしまうのは、驕りでしょうか……？

少しして、ゴリラさんがやってきました。手には紙袋を持っています。

「どうした？ 珍しいな……殆ど完治らしいな。おめでどう」

多少なりとも疑問を抱えている声でしたけれど、素直にわたしを祝ってくれる言葉に、わたしの思いは揺らぎそうになります。

「ありがとうございます。ちょっとお話がありまして、こんな時間にすみません」

ゴリラさんは「構わん構わん」と言つて、ベッドの隣に置かれた椅子に腰掛けます。

「で、何だ？」

「……ラッキービストさん。お父さんの音声の再生をお願いします」

ゴリラさんへの返事の代わりに、ラッキービストさんに音声記録を再生するように頼みます。そして音声の流れ始めました。

「よう、トーサカ」

お父さんの同僚の声でしょう。少しだけ急いでいる風です。

「ん。もえの様子を見に来た」

お父さんは妙に低い声で言いました。

お父さんの言葉に応じるように、椅子を引く音がします。

「……まだしばらくかかると思うぞ。わからんワケでも無いだろう」
隣れむような声色に、お父さんは冷静に応じました。

「……もえも、イエイヌも居なくなったからな」

同僚の方は返事に困ったのか、数秒の沈黙が訪れます。

「……寂しくてかなわん。邪魔はしないよ」

お父さんが沈黙を破ろうと笑いながら言いました。けれど、笑い声

というには声が震えすぎていました。

「……ロックはされてない。好きにしてくれ」

「ありがとう」

そのやり取りの後、扉の開く音が聞こえました。しばらくすると、噁り泣くような音が小さく聞こえましたが、ノイズ音との区別もつきにくく、判然としません。

数分ほどして、扉の開く音がしました。

「すまんな、邪魔した」

お父さんが部屋から出てきたのでしょうか。お父さんの言葉に同僚の方は返事をします。

「いや、構わん。お前が楽になるなら、そうしてくれ。暫くはロックもしない」

「……悪いな」

お父さんはそう言って、黙ったまま研究室から出ていこうとしたのでしよう。そこに、同僚の方が声をかけます。

「ああ、そうだ。昨日のオーロラ、見たか？」

お父さんは「ん？ ああ」と興味なさそうに返事をします。

「ちよつとこれ、見てくれ」

同僚の方の言葉に応じるように、椅子を引く音が響きます。きいと椅子に腰掛ける音がして、お父さんの声がします。

「……これは？ 見た所、気象分野の領分だろう、これは」

お父さんの指摘に、同僚の方は「んー」と悩んだ声をあげ、続けます。

「そうなんだが……どうにもサウンドスターの供給に問題があるらしい」

「それなら機械部か資源部だろう。どうしてこつちに報告が来る」

お父さんは少しだけ声に苛つきを混じらせていましたが、それは同僚の方に引き止められたから、というよりも、自身と異なる領分の問題を振られたことの方へ憤っているようです。

「お鉢が違う。こつちに回されても何もできんし、物品への利用は実験も含めて全て凍結中だ。こちらから提供出来る情報も技術も無い」

そう言うってから、沈黙が訪れます。同僚の方はなんと云ったら良いのか悩んでいるのか、何も喋りませんし、お父さんも黙ったままです。数十秒ほどしてから、だんと机を叩く音がします。

「つまり、あれか？ サンドスターを人体に投与する実験の継続が危うい、と？」

わたしの知るお父さんの声色とは異なった、自虐の思いが多分に含まれている声でした。へらへらとした、そんな声……。

「そこまでは、他の部門も考えてないだろう。それに、お前、そんな言い方は……」

お父さんは返事をしません。

少しして、同僚の方が詳細を告げます

「……昨晩のオーロラは天候操作が限界にきているシグナル、ということらしい。機械の故障では無いそうだ。ラツキービーストによる維持と管理は安定している。それよりも、サンドスターの供給と消費が釣り合いが取れていないことの方が問題だ。数年から十数年に一度は、もつと長い期間であれば確実に発生する……そういう計算が出てる」

お父さんは「ふむ」と小さく声を漏らします。

「サンドスターの産出と消費は恒久的に釣り合いが取れるようにするんじゃないかったか？ 実際そのつもりで色々ラインを組み直したが……それでもダメだったか？」

「基本的には大丈夫だって話だが……極めて長いスパンで見た時、最初にやられるのがこころしい。再発もするそうだ」

どちらのものとも取れないため息が聞こえます。

「この島の殆どのサンドスターとエネルギーが最初に回されるのがここだからな……食糧生産にも響くだろう、これ」

お父さんの言葉に同僚の方は悩んだように唸り声をあげました。

「対処法として、他所の島から回してもらおうとか考えたらしいが……それも厳しい。時間がなさすぎる」

「だな。……このサンドスターは埋蔵量も生産量も多くないからな。再利用の件は？」

同僚の方は何も言いませんが、お父さんの声からして、首を振ったのでしょうか。

「そうか……何にしても時間がなさすぎる……」

「……ひとつ、対策案があるらしい」

「……あるのか？ それがここに回ってきた理由か？」

同僚の方は返事をせず、しばらく黙ったままでした。

「なんだ、そんなに言いづらい方法か？ ……ああ、なるほどな」

お父さんの皮肉めいた言葉を受けて、意を決したような、深く息を吸い込む音が聞こえます。

「トーサカ、お前が何を考えてるか知らんが、多分、それだ」

お父さんは「ふん」と鼻を鳴らして言いました。

「フレレンズを使うのか。代替として。死ぬぞ？ 少なくとも、フレレンズとしての意識は……。ふん」

その後の沈黙が、何よりもお父さんの正しさを証明していました。

「……もえにやってる方法の逆だな。わかりやすい。冷酷かもしれないが、妥当だと思うぞ」

「苦痛は、無いらしい。眠るように、だそうだ」

理屈の上では、そう付け加えて、同僚の方は黙り込みます。

「……ポッドをふたつ、ここに組み替えて置いておく。それと、五番研究所に予備をふたつ。マニュアル化した情報をラッキービースト各個体に記録する。それで良いか？」

お父さんの冷静な言葉に、同僚の方は震えるような声で返します。

「……頼めるか？」

「ああ。完璧に仕上げるさ。……こうなった以上、もえが生き延びる為に何でもする。何でも使う」

お父さんは少し間を開けて、自虐めいた笑い声をあげてから、言いました。

「……あの子は死なせてやったほうが良かったのかな。こんなことになるなら、いつそ。どう思う？」

長い沈黙の後に、声が聞こえました。

「……俺は、俺には、何も言えない」

「……八つ当たりして悪かった。……帰らせてもらおうよ」

椅子が引かれる音がして、お父さんは部屋を出ようとしたのでしよう。

最後にお父さんは尋ねました。

「仮に、限界が訪れたとして、その兆候は？ 予測で良い。記録しておかないと伝えられん」

かたかたとキーボードを叩く音がして、同僚の方が言いました。

「限界の時は、光が赤方偏移する。おそらく空が真っ赤に染まる、つてところだろう。その後には、気象操作機能が喪失する……。燃料切れつてことだから……。気象の異常は放って置いて最短で半年もあれば戻るそうだが、サンドスターの加工ラインにも影響が出かねないから、数年単位で機能喪失が継続する恐れもあるそうだ……」

お父さんは「ふむん」と興味深そうに言います。

「わかった。仕事は明日にでも取りかかる。他の部署にもそう伝えておいてくれ」

がちやりと扉の閉まる音がして、音声は終わりました。

音声が終わって、しばらくの間、ゴリラさんもわたしも言葉を発すること自体が躊躇われるかのように押し黙っていました。外では真っ赤な夕日が森に、地平に、沈みつつありました。

「……それで、俺にこれを聞かせて、何が言いたい？」

わたしの真意を伺うように彼女は尋ねます。

「ゴリラさん。行くんでしよう？」

「そりゃあな。それが、長としての最後の仕事だ」

わたしは何も言わず、彼女の言葉を待ちます。

「……俺がここで一番の年長者って言ったな。それは島で一番の年長者が順番に行ったからだ。そもそもフレンドズの数は多くなかったが……頻発した時期もあったからな。巡り巡って、順番が来た。それだけだ」

どこか達観したような声で、彼女は言いました。

わたしはゴリラさんに尋ねます。

「……次は、誰ですか？」

言うかどうか、少しだけ悩んだようでしたが、ゴリラさんは茶化すように「お手上げだ」と呟きます。

「わかってそうな口ぶりだな」

わたしは肯定も否定もしませんでした。

「……ドードーだろうな。アイツが俺の次に年長だ。『長』つぽくは無
いが……」

「終わりは、あるんですか」

「……」

ゴリラさんは答えませんでした。

「わたしに案があります」

ゴリラさんが「ほう」と小さく呟きます。もしかしたら、彼女はわたしが何を言いたいのかわかっているのかもしれない。

覚悟を決めて、わたしは口をゆっくりと開きました。

翌日。わたしは身を包む肌寒さに震え、目が覚めました。

ベッドから出て、窓を覗くと、空はどんよりと曇っていて、身体が震えるくらい冷たい風が吹いていそうでした。気温も先日の夏のよくなものとは異なり、秋か冬を感じさせるようなものでしょう。部屋の温度の低さがその何よりの証拠です。

こういった唐突に訪れていた天気、天候操作の不調に由来するものであることにわたしは気づきました。

「……不思議ではありませんでしたけど……理屈がわかってても理解が出来ないと言うか、なんというか……」

わたしは誰へとも無く呟いて、病院着を脱いで、着替えます。先日ゴリラさんが持ってきた紙袋の中には数着の服が入っていました。怪我の為に、以前来ていた服は穴が開いたり、汚れがひどかったりと、着られたものではなく、ゴリラさんが探して用意してくれたのだそうです。

「オーバーオール……懐かしい……」

かつてわたしが着ていた服と同じものでした。他には目覚めてから着ていたものと同じベストなんかもありましたが、今日はそちらの気分では無く、オーバーオール。

「……イエイヌちゃんにも、話さない」と

黒のシャツに通す腕が、どこなく重く感じました。

結局、彼女にお話をするのが後回しになってしまいました。わたしの今考えていることは、何故だかイエイヌちゃんに話すのが躊躇われたのです。それに加えて、わたしの過去の重要な部分やイエイヌちゃん自身の過去についても……どうしても話す気にはなれないのです。

「……なんて言おう」

『あたし』と一緒に居たイエイヌちゃんは、きつと違う存在です。

それは、彼女自身が記憶を失っているという事もありますし、経過したであろう時間を考えると、同じ個体である筈が無い……そう考えってしまうからです。それらが明かした方が良いのかどうかという問

題も、計画についても……話さなくてはならないと思えば思うほど、話すこと自体を避けてしまいます。

シャツの中に入ってしまった後ろ髪を手で払い出してから、オーバーオールに足を通します。胸のボタンを留める頃には、どうしようかと迷う心から逃れるかのように「おトイレが面倒そうだな」なんていう他愛ない思考が去来していました。

「ともえ、オハヨウ」

着替え終わるのを見計らったのか、ラッキービーストさんがわたしに声をかけました。

「はい、おはようございます」

小さく会釈し、返事をします。

「キョウカラ、ジャパリまんヲ、タベテイイヨ」

そう言うと、ラッキービーストさんは自分の隣に置かれたジャパリまんに視線を送りました。

「タリナクテモ、イツコネ」

弱った消化器への負担を防ぐため……だそうです。

「はい。あ、用意してくれたんですね、ありがとうございます」

ラッキービーストさんは会釈するように身体を捻りました。

わたしは「いただきます」と小さく呟いて、ゆっくりと咀嚼しながら、ジャパリまんを頬張ります。そうしている間、わたしの頭には、エイヌちゃんにどう説明したら良いのかという悩みでいっぱいになってしまいました。

「まだもう少し、あるかなあ……」

空を見て太陽の位置を確認しようとしたが、厚い雲の所為で、ぼんやり光る存在が空にあることがわかるといふ程度で時間などわかりはしません。波打つような雲のうねりが太陽の威光に照らされて、陰を産み、真っ白な海を目の当たりにしているような、そんな空模様です。

常ならば、光と影の芸術に感嘆の声を漏らしているのでしょうか、今のわたしは、重く苦しいような、そんな印象をどうしても受けてしまいました。

食事を終えたわたしは、洗顔と歯磨きの為に洗面台へと向かいます。

鏡を見ると、わたしの髪の色は十分なサンドスターを蓄えたことを示すように、緑色を帯びていて、瞳の色も青と赤の色味が入ったものへと変化していました。つい昨日までは爪の色すら戻っていないかったのに、あんまりに唐突です。

「急ですねえ……まったく……」

髪の毛をリボンで纏めながら呟きます。自分で自分を笑うような、自分で自分に驚いているような、そんな独り言でした。そんな奇妙な感覚は、独り言と一緒に、誰に受け取られることもなく冷たく静まり返った部屋に霧散していききました。

朝の支度を終えて、ベッドに腰掛けると、窓の外を歩くイエイヌちゃんの姿が見えました。小さく手を振ると、彼女も微笑んで手を振替してくれます。寒さに震える様子もなく、元気そうなのは良いことなのですけれど……。あいにくの曇り空に、わたしはすこしだけ残念な気持ちを抱いてしまいます。

程なくして、イエイヌちゃんが部屋へと入ってきました。

「おはようございますっ！　ともえちゃん！」

「おはようございます、イエイヌちゃん」

んへへーと楽しげな声を漏らしながら、イエイヌちゃんはベッドの脇の椅子に腰掛けます。そして、じいっとわたしの服装を眺めました。

「ふむむ……お洋服、変えたんですね……」

「ええ、なんとなくですけどね……ゴリラさんが持ってきてくれたやつです」

わたしは身体をひねるようにして、自分の服に変な所が無いか伺います。わたしの様子を見ながらイエイヌちゃんはどうむうむという具合に頷いて、言いました。

「だから部屋にゴリラさんのニオイしたんですね……可愛いです！　ともえちゃん！」

褒めてもらえると、やっぱり嬉しいですね。思わず笑みがこぼれ

ちやいます。

「どうかなーって思ってたんですけど、大丈夫そうですね。お褒め頂き光栄です」

イエイヌちゃんは「いえいえー」と楽しそうに呟きました。そして、わたしの事を案じるように尋ねます。

「ところで、今日どうします？ 寒いですけど……お体の具合とか……」

「そうですねえ……」

わたしは少し悩みました。身体の具合がどうなるのかも心配ですし、天気も崩れそうです。とは言え、お散歩日和とは言えないもの、ずっとここに座っているのも飽き飽きしちやってますからねえ……。うーん、お散歩はしたいんですけど……長くは出ていられないかもですね……」

少しだけ残念そうな顔を浮かべるイエイヌちゃんでしたけれど、すぐに表情を戻します。

「そうですねえ……じゃあ少しだけ、ですかねえ……」

「ですね……ごめんなさい、わたしの所為で……」

わたしの言葉にイエイヌちゃんは首を振ります。

「いえ、お天気も悪いですし、ともえちゃんに無理はしてもらいたくないですし……仕方ないですって」

わたしはもう一度「ごめんなさい」と返して、続けます。

「わたしはもう準備出来てます。イエイヌちゃんは——」

準備万端と言わんばかりに立ち上がり、尻尾を振っていました。ころなしか小さく跳ねているようにさえ見えます。

「——じゃあ、行きましょうか」

小さくくすりと微笑んで、わたしがそう言うと、イエイヌちゃんは「はい！」と大きな声で返事をしました。

外はどこことなく薄暗く感じられました。部屋から見えた森は間近で見ると鬱蒼と茂るようで、威圧感の様な物をさえ感じます。けれど、そのお陰か、イエイヌちゃんと繋いだ左手は今までよりも暖かで、凍えそうな身体をお互い寄せ合う様に近づけながらのお散歩となり

ました。

「うう……やっぱり寒いですねえ……」

イエイヌちゃんはわたしの顔を見て、自信ありげな笑みを浮かべます。

「私はこれくらいはへーきですー!」

ふふんと今にも声を漏らしそうなくらいウキウキとした表情です。

「イエイヌちゃんって寒い方が得意なんですか?」

彼女はこくりと頷きます。

「ですねー……冬のほうが好きですし」

「なるほどお……そういうのもありそうですね……わたしは、春のほうが好きなので、やっぱり苦手なんですかね、寒いのに」

ふるりと身体を震わせながら言ったからか、イエイヌちゃんはわたしの左腕に身体をを絡みつかせる様にします。胸の鼓動が伝わるのでは無いかと思われるほど近づけられると、彼女の身体のほのかな柔らかなさと熱に、わたしは離れがたい誘惑と気恥ずかしさを覚えました。

「ち、ちよつと、は、恥ずかしいですって……」

イエイヌちゃんは、んふふーと上機嫌に鼻を鳴らしながらわたしを引っ張るように進みます。歩みはそこまで速い訳ではないので、追いつくのは容易でしたが、内心では急な動きに少しだけびっくりしてしまいました。

「ともえちゃん、行きましょー!」

彼女が嬉しそうな表情を浮かべることには恥ずかしさも失せ、やむなしと諦めたわたしは、彼女に引かれるがまま、進みます。

イエイヌちゃんは勝手知ったると言わんばかりに、迷いなく進んでいます。

「この辺り、探検でもしたんですか?」

そんな様子を不思議に思い尋ねると、こくりと彼女は頷きます。

「お散歩楽しみだったの……えへへ……」

まるでご飯をつまみ食いした事を注意された子供のような、照れと申し訳無さの相混じった表情。ただ、違う点があるとするのなら、彼

女が「わたしとの散歩を我慢しきれなかった」ということに対してわたしが喜びを抱いていることでしょう。

「……まったく、楽しみは取っておかないとダメですよ」

微笑みながらそう言うと、彼女はやっぱり笑みを浮かべました。

「こっちです、こっち」

わたしの腕にイエイヌちゃんが顔をくっつけながら進む道は、寒空の下であろうと、寒風の中であろうと、薄明の中であろうと、わたしに取って明るく、暖かな道であることは確かでした。

ずっとこうしていたい、というじつとりとした感傷の様な思いが込み上げます。それに気付いたわたしは、イエイヌちゃんと少し距離を取ろうとしたのですけれど、彼女はぐっと腕を押しえつけるようにして、より深く、強く、わたしの腕を抱きしめたのでした。

「そう言えば、ここに島のどの辺りでしたっけ……？　ゴリラさんのおうちから少し行った所だそうですね……」

目覚めた翌日くらいに場所を教えてもらった筈ですけれど、こうして歩いて確認したこともなく、実感として場所を把握出来ていませんでした。

「そうですね。ええっと——」

イエイヌちゃんは指をわたし達の後ろの方へと示します。方角にして東でしょうか。

「——あっちの方に進めば、ゴリラさんのおうちがあつて、曲がり角があつて……そんな感じですよ」

つまり、わたし達のお家から見ると、北へ進んで、別れ道を西へ進んで、その途中にゴリラさんの棲家があつて、さらに進むとあそこに着くと言ったところでしょうか？

「なるほど……。あの……それだと、お家から結構な距離ありません？」

わたしが聞き返すと、彼女は「んー」と考えるような声を出しました。

「道に沿って歩くと遠いですけど、林を……こう、びゅーんと……」
先程まで後ろを指していたイエイヌちゃんの指は林の周囲をなぞ

るようにひゅんと動いていました。

「ああ、そういうことですか……」

木立を抜けるのは、わたしにはしんどいでしょうけれど、彼女にとつては大したことが無い、というところでしょうか？

「あー、でですね……いいところ見つけたんです！ さつきからそこに行こうかなって思ってた……」

探検をした彼女の方が、この辺りの地理には詳しいでしょうから、断る理由はありません。わたしだって、記憶が戻ったのですからまるで土地勘のない場所、ということも無いはずですが……どちらかと言えば道沿いの知識があるに過ぎません。それにもともと出不精のきらいがあつた気もします。

「ほほう……楽しみですね……」

評論家めいた奇妙な呟きに、小さく笑うイエイヌちゃんの声が返事をしました。

「すぐ着きますよー……あ、そこで林に入つてまつすぐです」

彼女は眼の前の林の一点を指差します。そこは下草に切れ目が出たかのように、道が踏み均されていました。よく見なければ見落とすしてしまいそうなくらいの脇道です。きっと、わたしひとりでしたら気づかないか、覚えていられないかしてしまうくらいささやかな細道で、イエイヌちゃんがそこに気付いてしつかりと覚えていることに感心してしまいました。

わたし達はゆっくりと小路へと足を踏み入れます。

何故かわたし達は周囲に誰かいないかどうかを確認するように周囲を伺いながら道を進んでいきました。もしかしたら、わたしとイエイヌちゃんのふたりで『秘密』を共有したいと思つてしまつたからかもしれません。

曇り空でただでさえ薄暗い為、木陰の下は夕闇を思わせるような薄暗さでした。また、辺りには木の葉のざわめきが無いためか、わたし達が地面を踏みしめる音と、時折聞こえる甲高い虫の音が耳に入るくらいで、ひっそりとした不思議な空気に包まれています。

わたし達はお互いに口を開かず、一步一步確かめるように道を進ん

でいました。イエイヌちゃんと言ったら、常よりもずっと注意をしているかのようです。薄暗さの為か、それとも静謐な空気の為か、はたまた、セルリアンを警戒しているのか……その理由はわたしにはわかりません。

けれども、周囲に誰も居てほしくないと思う気持ちは、もしかしたらわたしと一緒にしません。わたし達ふたりだけの『秘密』。そう考えると、彼女との逢瀬の大切さが一層増すように思われました。まもなく、道が開けます。

いくら曇り空と言えども、梢の薄暗がりから抜けるとなれば、眼がくらむのも当然。わたしは少しばかり目をしばしばと強めに瞬きしてしまいます。そして、視界の先の光景に、息を飲みました。

目の前には、白い石のタイルが円形に敷かれた小さな広場とベンチ、そして、ベンチに面する様に佇む泉がありました。天を遮るものは何一つ無く、また、時間が止まったかの様に静まり返った場所でした。

……広場、と言うほどの広さはないかも知れません。わたしの足でも数歩程度の広さですから、どちらかと言えば休憩所と呼び習わした方が適切かもしれません。それに、タイルはそこかしこがひび割れていて、頭を出している小さな草や、小石が挟まっていたりしましたので、手入れもされていない様子です。

ベンチは木材で出来ているようで、塗装の剥げや、染みもありましたし、加えて苔が生えていたりしました。座る面は何らかの加工がされているのか、光沢の中に木目を主張していましたが、端の方などは欠けてしまっていて、そこだけ汚れが目立っていたりと、眺めているだけで経過した年月を考えてしまいます。

けれど、それらの経過した時間こそが、この広場と林、そして泉との調和を成し遂げるに必要であったことは想像に難くありません。

例えるならば、パステルカラーの背景に原色の絵の具を落としたようなもの、でしょうか？ それを描かれた当初であれば、『浮いて』見えてしまう原色であったとしても、色あせていく内に、背景の淡い色合いに原色が近づいていき、同質化して違和感が消えていくような

……。

イエイヌちゃんはわたしの腕を軽く引いて、ベンチに座るように促します。わたしが彼女の指示に従ってベンチに座ると、彼女は小さく「よいしょ」と呟いて、隣に座りました。そして、お互いに自然とくっついて、泉を眺め始めました。

泉には幾つかの浮き草のような葉っぱが浮いていることと、低めの柵で囲われているという点以外、目立った装いはしておりません。ただ、水がとても澄んでいて水底まで見ることができそうに思われまして、また、静かに水を湛えるその様は、どこか気高さを示しています。それは、湧水の美しさや、泉が周囲の自然に溶け込んだ有様や、そういう理由の為かもしれません。

けれどそういった自然の美に対しての感嘆の思いよりも、これだけの純粹さを誇らずに、ただあるだけの姿にわたしは羨ましさを抱いてしまいました。

「……きれいですね」

わたしの言葉に、イエイヌちゃんが小さく「はい」と答えます。お互いに、それ以上の言葉を交わすこと無く、手を握ってくっついて座っていました。

数分ほどして、イエイヌちゃんはわたしの手をぎゅっと強めに握りました。「どうしたのだろう？」とわたしがイエイヌちゃんの顔を伺うと、彼女はわたしの顔をじっと見つめていました。

「……隠し事、してますよね」

どきりと胸が脈打ちました。

「ど、どういうことですか……そんなこと、してませんって……」

わたしは空いている右手を自然と左腕に持つていき、きゅっと握りしめます。

「ほら、嘘付いてるじゃないですか……」

イエイヌちゃんはわたしの眼から視線を逸らしません。その瞳は今までの親愛に満ちた優しげなものでも、セルリアンに襲われた時の敵意に満ちたものでも、ありませんでした。わたしの嘘を咎めようというものでした。

「へ……？」

彼女はすうつと息を吸い込んでから、口を開きました。強く握られた手が震えているのは、彼女の覚悟の現れなのかも知れません。

「ともえちゃん。緊張したり、ごまかしたりすると、腕握るんです。知っていました？」

わたしは何も言えず、呆然としてしまいます。心臓からじわりじわりと身体に広がって行く震えは、きつと罪悪感そのものでした。

「私は……そんなに、お役に立てませんか……？」

咎めようという視線。それは間違いでした。本当は、わたしの力になることが出来ない事を嘆くものでした。

「……そんなこと、無いです」

「じゃあ、信用出来ないんですか？」

わたしは首を振ります。けれど、イエイヌちゃんは表情を変えません。

「……ゴリラさんの代わりになるって、聞きました」

びくりと身体が震えます。

「別に、良いです。理由も、聞いてます」

へ？ え……？」

「あ……な、なんで……？ 知って……？」

わたしが言葉にならない疑問を投げかけても、彼女は答えず、けれど視線を逸らさず、わたしをじっと見つめます。

永遠に感じられるほどの一瞬が過ぎて、彼女は口元を震わせながら言いました。

「前もそう」

彼女の瞳が潤みます。

「その前もそう」

彼女の瞳から雫がこぼれます。

「今度もそう」

幾滴もの涙がベンチに落ちます。

「ずっとそう」

彼女が両目を閉じると、瞳に貯まった悲しみが、全部こぼれ落ちま

す。

「なんで話してくれないんですかあつ！」

大きな声で叫んだ後、イエイ又ちゃんはわたしの手を離して、立ち上がります。わたしは彼女の背中に掛ける言葉が思いつきませんでした。

「……ごめんなさい。ともえちゃんの言ってること、多分間違ってるのは知ってます」

彼女はわたしに背中を向けて、来た道を戻り始めました。

「イ、イエイ又ちゃん、待って……話す、話すから……」

せめて、せめて時間をちょうだい……そう言いたかったのに、彼女は大きく頭を振りました。

「じぶんで、かかえこんで、つらいおもいして」

嗚咽混じりに聞こえる声に、返事をしようとしても、声は出ません。わたしの喉は枯れてしまったようにさえ思えました。

「それを、となりで、……」

鼻をすする音がしました。わたしは腕を伸ばして、彼女を引き止めようとします。けれど、その腕は空を切りました。

「みてるわたしのことも、かんがえてください」

彼女はそう言って、林の中へ消えていきました。

わたしは何も考えられず、ベンチに座っていました。悲しみや後悔、そういう思いすら抱けず、ただただ、泉を眺めていました。どれくらいの時間が経過したのか、それさえわかりません。

そつと左手を動かして、イエイ又ちゃんが座っていた場所に触れます。まだ温もりが残っているような気がして、まだ握ってくれる手がある気がして……けれど、そこには何もありません。

「……冷たいんですね」

わたしは、立ち上がって、部屋へと戻ることになりました。

部屋に戻ると、ドードーさんが居ました。

「こんにちわあ」

彼女は椅子に座って、んふんふと笑みを浮かべています。楽しげな

彼女の様子に、どうしても心が痛みました。

「ドードーさん……こんにはは」

わたしはベッドに座ります。

「今日は、どうしました？」

彼女はわたしの様子を怪訝そうに見つめ、首を傾げます。

「んーとね、ゴリラちゃんから、話してもらえって言われたんだけどお……大丈夫？ 具合悪いのお……？」

「ああ、そういうことですか……ちよつと色々ありまして……その……」

わたしは先程のイエイヌちゃんとのやり取りを思い出して、思わずドードーさんの顔から眼をそむけてしまいます。

「……お話、つらいなら、いいよお？」

わたしは小さく首を振ります。心配そうな表情に罪悪感が込み上げてきます。ああ、イエイヌちゃんはずっとそうやって居たんですね……。

「……天気の話です」

ドードーさんは「はっ」と驚いた様に身体を小さく跳ねさせます。けれど、何も言わずに、わたしの言葉を待っているようでした。

「ゴリラさんの代わりに、わたしがカプセルに入って、サンドスターを使ってきます」

彼女はゆっくりとわたしの言葉を飲み込んでから、尋ねます。

「ダメだって言っても、行くんでしょお？ ともえちゃん、死んじやわない？」

普段と同じおっとりした口調で『死』という言葉が出てきたことに、言い知れぬ寒気を感じました。

わたしは首を振り、彼女の言葉を否定します。

「わたしの身体の事を話さないのですね——」

わたしはドードーさんにひとつずつ、説明しました。

サンドスターが不足して、天気が安定しないという問題への対策はおそらくひとつ。それはレンズの持つ『輝き』をエネルギーとして装置に充填するという方法。

フレンズであれば『輝き』を失えば元の動物に戻ってしまおうという現実。そして、わたしはフレンズさん達と同じように『輝き』やサンドスターのエネルギーを身体に蓄えている。

けれど、フレンズさんと違うのは、それらを喪っても『元に戻る』ことも無ければ『死ぬ』ことも無いという点。つまり、わたしがフレンズさん達の代わりにカプセルに入っても何も問題はない。

「——そういうワケです」

ドードーさんは頷いて、その後、首を振りました。

「……わたしは嫌だよお、そういうのお」

はつきりとした否定。

「だと思いました」

えへへ、と誤魔化す様に小さく笑ってから、続けます。

「それでも、誰かが居なくなったりするのは嫌ですし、わたしだって皆のお役に立ちたいんです」

彼女はわたしの眼をじっと見つめて、質問しました。

「多分ともえちゃんのお話は間違っていないと思うんだけどお……隠してることない？」

上手く行き過ぎている……彼女はそう思ったのかも知れません。

「あはは……鋭いですね、みんな……」

わたしの考えた計画は幾つか問題点がありました。

「わたしが入っても平気なのかっていう問題があります。色々記録を調べましたけど、フレンズさん用の機械ですから、あれは……。それと、わたしの身体に無理させ過ぎないかっていう心配。そして、仮に成功したとしてどれくらいの期間をカプセルに入っていることになるのか、っていうのも……」

わたしは言葉を切って、一拍置きます。

「最後に……カプセルから出る時に、また記憶を無くしちゃうかもしれないっていう問題です」

わたしが記憶をなくした理由がはつきりとしていれば、最後のひとは否定出来たかも知れません。あの時の事故の衝撃で記憶を失ったのかも知れませんが、急激な『輝き』のやり取りの所為で記憶に失っ

た——あるいは取り戻した——のかもしれない。何にせよ、過去と同じ状況が生まれかねないのです。記憶を失い、取り戻し、また失う。その可能性はどうしても避けられません。

「それ、イエイヌちゃんに話したあ?」

彼女の言葉には疑問以外の他意が一切込められていないのですけれど、今のわたしにはちくりと刺さるものでした。

「あー……それが……イエイヌちゃんに迫られて、答えられなくて……」

彼女は顔をむつと膨らませます。

「やっぱいい……ここに来る途中でイエイヌちゃんに会ったけどお……だからかあ……」

わたしは返す言葉も無く、黙ってしまいました。

「ともえちゃんねえ、甘え過ぎい。イエイヌちゃん、ずっと気にしてたんだよお?」

「甘え……そう、そうですね……」

ドードーさんは腕を組んで眉間にシワを寄せながら、語り始めました。

イエイヌちゃんはドードーさんと出会ってから……特に、わたしがセントラルでイエイヌちゃんをかばってから、時折相談をしていたそうです。彼女は、わたしが隠し事や悩みを抱えて、それを自分に話してくれない事が悲しく、情けないと思っていた……。

「別にねえ、わたしも気にしなくても良いんじゃない? って思ったよお。お友達でも話したくないことはあるし、秘密もあるんだって。イエイヌちゃんはともえちゃんのこと考えすぎだって言ったりもしたけどお……ともえちゃんはお話しなさすぎだと思うなあ……」

ドードーさんは少しだけ言葉に悩んだ様子を見せましたが、強く頷いて言いました。

「ともえちゃんは、全部自分だけでなんとかなるって思ってるう?」

「……そうかもしれない」

「なんとかなったとして、一緒に居てくれる子はそれで良いって言うと思う?」

わたしは首を振ります。イエイヌちゃんから言われた言葉もありますが、「もしも逆だったら？」と考えると、ぞつとしたのです。

「じゃあ、なんで話さなかったのお？」

彼女はそう尋ねて言葉を切りました。部屋には沈黙が訪れます。

少しして、わたしは答えました。

「……イエイヌちゃんに心配をかけたくなかったんです。それに、引き止めるでしょうから。揺らいじやう気がして……いつか、いつかは話さないと、とは思ってました。ですけど……今日……」

不意打ちなんてズルいと思うのは、多分ワガママです。

ドードーさんが、唐突にわたしに尋ねます。

「ねえ、ともえちゃん。ここ出られる様になるのっていつ頃お？」

どうして今そんな事を聞くのだろうか？　とも思いましたが、彼女なりの考えがあるのでしよう。

「二週間って言われてましたけど……この具合なら早くなりそうな気も……」

そう言つて、ドードーさんの方を見ると、彼女はラツキービーストさんの方を指でつんつんと示していました。ああ、なるほど、と合点がいきます。

「ラツキービーストさん。今日、もう帰つてもいいですか？」

状況を知つてか知らずか、あつけらかなと彼は答えてくれました。

「……モウダイジョウブだよ」

予後を確認したいとのことで二週間と決めたが、ラツキービーストさんと一緒にお家に戻るのであれば、確認も可能なので大丈夫……とのことです。

わたしは、ラツキービーストさんの言葉を聞いて、思わず立ち上がりました。ドードーさんが微笑みながら、わたしの様子を見ていましたが、それを気にする余裕はありませんでした。

幾つかの荷物を紙袋と鞆に収めて、そして、ラツキービーストさんを小脇に抱えます。

「頑張つてねえ、ともえちゃん。全部、話してあげてねえ」

隠し事はこの際無しね、そう念押しして、彼女は微笑みました。

「ありがとうございます、帰りますね。わたし……急でごめんなさい……」

くすりと優しい音が聞こえました。

「ううん、そうするのが一番だものお。イエイヌちゃん、待ってると思うよお……気をつけてねえ」

彼女はひらひらと手を動かしながら、微笑んでいました。時折見せる、あの見守る様な微笑み。

彼女の声を背中に受けて、わたしは勢いよく部屋を出ます。

目指す先はお家です。わたしの、帰るべき場所へ帰るんです。待っていてくれた方がいた場所へ、待っていてくれる方がいる場所へ、道を東へ、わたしは向かいました。

時折歩みを止めて、呼吸を整えたりしながらも、日が暮れる前にはお家に着きました。

「はあっ……はあっ……ふう……」

お家の中はひっそりとしていて、イエイヌちゃんがいるのかどうかさえ判然としません。けれども、電気が点いていることからしても、きつとあの子は居るでしょう。

わたしは扉の前で深呼吸をして、最後に覚悟を決めます。

「よっし……」

がちやり、扉を開く音が聞こえます。

部屋の中では、イエイヌちゃんがベッドに丸くなっていました。わたしはそっと近づきます。彼女を起こしたくなかったですし、もしも寝たふりをしているのなら、彼女の思いを裏切るようなことは、もうしたくなかったのです。

わたしは彼女の隣にそっと腰掛けます。

わたしの背中と、丸くなった彼女の背中がくっつくかくっつかないか、それくらいの距離が、とてつもなく遠く感じました。

わたしが座つても、イエイヌちゃんは寝返りを打つたり、むにやむにやと声を出したりなどしないで、じっとしています。呼吸に合わせて小さくお腹や胸が動くくらいです。尻尾や耳なんかも身体にくっつくようにしていますので、本当に身じろぎひとつしません。

「……起きてますっ…」

何の反応もありません。眠っているのか、わたしを無視しているのか……。

「……」

わたしは何も言わず、彼女の頭を撫でつけようと思いました。

けれども、彼女の頭に手が触れるや否や、彼女はそれを払うように頭を動かします。怒っているのでしょうか、それも当然です。彼女を怒らせてしまったのは、わたしです。最もわたしの近くに居てくれる方を、ないがしろにしたのですから……彼女に触れるよりも先に、する

べきことがあるのです。

深呼吸をして、緊張を解してから、わたしはイエイヌちゃんに語りかけました。

「イエイヌちゃん。わたし、謝りたいんです。聞いてくれますか？」
彼女の頭が、こくりと動きます。

「……わたし、イエイヌちゃんにずっと隠し事してきました。昔のことを思い出しそうになって、怖くて身体が震えちゃったり、イエイヌちゃんの過去を知って、話せなかったり。誰かが居なくなるのが嫌だから、自分を使おうと考えたり……そういうの、話してきませんでした」

イエイヌちゃんはじっとしたままです。

「イエイヌちゃんに心配かけたくなかったんです。イエイヌちゃんを混乱させたくなかったんです。イエイヌちゃんに引き止められなくなかったんです」

わたしは少し前の事を思い出しました。ひとりで旅に出ると言った、あの時のこと。

「わたしは、自分の問題は全部自分で解決しなきゃって思ってたんです。旅に出る時の事、覚えてますか？」

こくり。

「あの時と、一緒に……イエイヌちゃんに行かないでって言われたら、わたし、行けなくなっちゃいますから……でも、行かないといけないんです。何があっても」

彼女は寝返りを打つようにして、わたしの背中に顔を押し付けます。彼女の腕はわたしの胸にぐるりと回されていました。

「わたしはね、イエイヌちゃん。誰の手も借りないで、わたしの問題をわたしが解決するのが当然で、絶対だと思っていました。それが辛くて、寂しくて、大変でも、そうするのが皆に迷惑をかけるよりもずっと良いって……それは今でもあんまり変わってません。わたしはわたしで、わたしの問題はわたしが解決しなくちゃいけない。そう思っています」

わたしの言葉が部屋の静寂に溶けていきました。

「……それに、イエイヌちゃんと一緒に旅をすることになって、他のフレンズさん達だつて居てくれて、楽しくて、嬉しくて……そんな幸せをくれた皆に恩返しをしたくて……だから……そうしようって」

小さくくぐもった声で「はい」と聞こえました。

「心配をかけましたよね……。自分勝手でした……。頼るべき相手に頼らないなんて、話さなくちゃいけない相手に話さないなんて、ひどいですよね。今まで、ごめんなさい、イエイヌちゃん……」

イエイヌちゃんはぎゅうつとわたしのお腹に回した腕に力を入れました。

「もう隠し事はしません。……許してくれますか……?」

鼻をすする音がして、一拍置いてから、イエイヌちゃんは言いました。

「……ゆるします」

「ありがとう。イエイヌちゃん」

こくりと彼女の頭が背中で動きました。

しばらくの間、わたしもイエイヌちゃんも、黙つたままでした。わたしは、やるべきことをやろう、そう思つて口を開きます。

「イエイヌちゃん。何か聞きたいこと、ありますか?」

考え事をするように、少しだけ間をおいてから、イエイヌちゃんが尋ねました。

「……昔のともえちゃんのこと、教えて下さい」

「わかりました」

わたしがどこで産まれて、どこで育つて、お母さんとお父さんの事や、ここに来た理由。ここで『イエイヌちゃん』に出会ったこと、一緒に暮らしていたこと、ここでの暮らし、どうして事故に巻き込まれたのか、どうして記憶を失ったのか……。その全てを包み隠さず彼女に伝えます。

「……大変だったんですね」

彼女はわたしの背中に顔を押し付けたまま言いました。

「んー……お父さんがずっと居てくれましたし、こっちに来てからはイエイヌちゃんがいましたから、平気でした」

わたしはそう言って、「他には？」と続けました。

「……昔の私のこと、教えて下さい」

「……良いんですか？」

彼女が混乱してしまわないかと思つて聞き返すと、彼女はこくりと頷いて、促します。

「わかりました」

わたしは昔を思い出しながら、ゆつくりと語ります。

「わたしとあの子が出会ったのは、ここに来てすぐの頃だそうです。詳しい理由や経緯は知りませんが、気づけば既にそこに居た存在で、わたしの一番の友達でした。……一緒に生活しながら、わたしが大きくなつて、学校に通い始めたらあの子も行きたいって言ひ出したりとか、それを叶えようとしてお父さんがあれこれやったりとか……。でも、そうですね……。今のイエイヌちゃんと殆ど何も変わつてませんよ？」

フレンズさん達の性格や個性が『引き継がれる』傾向が多いことは、とてつもない謎が潜んでいそうな気もするのですけれど、今のわたし……。いえ、わたしと言う個人ではその謎なんてわかる筈が無いでしょうし……。案外、謎なんて無いのかもしれませんが……。

「それで、わたしと一緒にセルリアンに巻き込まれて、あの子は居なくなりました。それは、わたしが確認したワケじゃないですけど……。多分そうです。だから、昔のイエイヌちゃんと今のイエイヌちゃんは違うんです。記憶が違うのもそうですけど……。今のわたしに取つての一番の友だちは、今のあなたです」

イエイヌちゃんは身体を起き上がらせて、わたしの隣に座り直します。そして、わたしの右手を握つてから、わたしの右肩に頭をこつりと載せました。

「ともえちゃん。思い出した、ことがあるんです……。セントラルから帰ってきた後に、思い出して……。ともえちゃんに伝えようと思つてたんです」

泉でお話しようと思つていたけれど、わたしの隠し事があつた所為で打ち明けるのが遅れたのだそうです。

「……なんですか？」

イエイ又ちゃんが『思い出した』というのは、何とも不思議ですけど、今話すということはなにか大きな意味があるということでしょう。

「フレンズになる前のことなんです。ずっと昔、お母さんが言ったんです。私のお母さんのお母さんのずっと前から教えられてきたこと……。ここでヒトを待って」

思わずわたしはイエイ又ちゃんの顔を見ます。けれど、肩に載せられた彼女の表情を伺うことは出来ません。

「ずっと昔にヒトに言われたって、そう教えてくれたと思います」

「それは……多分……お父さん……なんですかね……」

イエイ又ちゃんは頷きました。

「たぶん、そうです」

「……ごめんなさい、イエイ又ちゃん」

わたしは呪いだと思っていました。イエイ又ちゃんがここで一生を賭して、来るはずの無い誰かを待つ。そんな呪い。希望の一切ない、呪い。だから謝罪の言葉をお父さんに代わって伝えました。

けれど、イエイ又ちゃんは首を振って否定します。

「なんで謝るんですか？ だって……だって、私ともえちゃんが会えたんですもの。私のお母さんも、そのお母さんも、今までの全部、それで良いって言うと思います」

イエイ又ちゃんは、わたしの肩から頭を離して、笑顔でわたしの顔に向き合います。

眼の周りを赤く腫らしながら。

「それは、っ……結果論です。ここに縛られるなんて、そんな事……」
彼女は首を振ります。

「違います。私がここに居たかったです。ここで、誰かに……いえ、ともえちゃんに、会いたかったです……！ ともえちゃんだって知ったのは、つい最近ですけど……でも、でも……！」

彼女はほろほろと涙を流し始めました。笑顔に涙なんて、ズルいですよ。

「ずっと逢いたかったです！」

ああ、この子には、かなわない。そう思いました。

わたしは何も言わず、彼女を抱きしめました。強く、強く抱きしめます。きゆうと声が出ちやいそうなくらい、イエイヌちゃんもわたしを強く抱きしめました。暖かで、柔らかで、想いの籠もった抱擁に、今日起こった何もかもが、溶けて消えたようでした。

お互いにしばらくそうしていましたが、不意にお互いに身体を離します。

「ともえちゃん」

イエイヌちゃんは覚悟を決めたようにわたしの顔をじつと見つめて尋ねます。

「計画……？ お話してもらってもいいですか……？ ゴリラさんから聞いてはいますけど、ともえちゃんの口から聞きたいです」

わたしはゆっくりと頷いて、ドードーさんにお話したことを全て伝えます。ついさつき、彼女に話したことが、わたしの想定しうる全てでしたから……。

イエイヌちゃんはわたしの説明を聞いてから、口を開きました。

「……行ってほしくないです」

「皆そう言うんですね……。ゴリラさんも、ドードーさんも同じこと言いましたよ」

「でも、行くんですよね？」

「はい。わたしにしか、出来ないことですから」

わたしの言葉にイエイヌちゃんはひとつため息をつきます。

「わかりました。もう、止めません……私や、皆の為になんて言われたら、何も言い返せないですもん」

わたしは困ってしまい、乾いた笑いを漏らします。

「いつ頃……行くんですか？ あと、場所は……？」

「真っ赤な太陽が見えたら、その時に……。場所は、わたしが眠っていた研究所です。別の部屋にあるそうですから、そこに」

「そうですか……」

イエイヌちゃんは俯いてから、顔を上げて、尋ねます。

「ともえちゃん、ワガママ、言ってもいいですか……？」

「……ええ、なんでも」

わたしの言葉に答えようとして、言葉を引つ込めて、もう一度口を開こうとして、またまた彼女は口を閉ざします。

「どうしたんですか……まったく……」

「いえ、その……恥ずかしくって……」

もじもじとした様子のイエイヌちゃんに、わたしは発破をかけるように、言いました。

「なんて言おうとしているのか、大体わかってますよ？」

わたしの言葉に、イエイヌちゃんはぷっくりと頬を膨らませます。

「むうっ……じゃあ当ててくださいよお……」

わたしはイエイヌちゃんをもう一度抱き直して、そつとささやきま
す。

「ずつと一緒に居ましょう？ わたしが彼処に行くまで、ずつと。わたしが彼処から帰ってきてから、ずつと。ずつと……」

イエイヌちゃんはきゅつとわたしの身体を抱きしめて、そのまま何も言いません。

「もし、また記憶をなくしたりしても、ずつと……そんなわがまま、許してくださいますか？」

イエイヌちゃんは震える声で、ささやき返しました。

「せーかい、です……」

彼女の表情なんか、わかりません。けれど、想像がつきました。真つ赤ですよ、彼女。だってわたしがそうなんですから。

「……ほら、わかつてたじゃないですか」

「……ズルいですよお」

ふたりして小さくくすくす笑いが始まって、微笑みあって……。その日は、ゆつくりとお話をしました。わたしが覚えている昔の事や、わたしの知らないパークの事。明日の予定、明後日の予定、帰ってきてからしたいこと、帰ってくるまでにしたいこと……色々。

そうして眠りにつく頃に、わたしは我が身の幸福を痛感しました。愛する存在が居ること、待っていてくれる存在が居ること、隣に眠る

ことを受け入れる存在のあること、そのために出来ることがあること。それらがどれほど幸福であることか、わたしは身体を震わせるほどの喜びを抱きました。

微睡みの中、伸ばした手に暖かな手が触れます。もう、イエイヌちゃんは眠っているでしょう。けれど、彼女はわたしの手にそつと指を絡ませて、満足げな鼻息を漏らします。そして、彼女は身体をわたしの方に寄せました。わたしの頬に、彼女の額がくっつきます。柔らかで、なめらかで、温かい……そんな彼女の肌が、手が、わたしの気持ちいを落ち着け、深い眠りへと誘いました。

それからの三日間、わたし達は一緒に過ごしました。

一日目は、イエイヌちゃんと一緒に彼女が見つけた泉へ行き、絵を描きました。この日は幸い、夏様なからりとした日和でした。お互いに、いわば『リベンジ』の様な心持ちで居たのは間違いありません。

この時、イエイヌちゃんも絵を描いてみたいとのことで、一緒に風景をスケッチしました。わたしはスケッチブックを膝に置いて、イエイヌちゃんにはスケッチブックのページと黒の鉛筆を渡しました。描き終わると、わたし達はお互いの絵を見比べてみたり、はたまた、わたしが彼女に描き方を教えてみたり……そんなのんびりとした時間を過ごしました。

二日目は、お家でふたり、ゆつくりと過ごしました。この日も透き通る様な青色を湛えた空が眼に眩しい日でした。

午前中はクッキー作りの為のコンロを設置する場所を一緒に考えました。周囲の木の葉や草むら、石……そんな物を少しだけ動かしたり片付けたりしながら過ごします。ゆつくりと作業を進めると、いつの間にかお昼を少し過ぎたくらいの時間になっていて、イエイヌちゃんがハーブティーを用意してくれていました。彼女が言うにはわたしの『真似』をしたけれど味はまだまだ、だそうです。それでもイエイヌちゃんが用意してくれたというだけで、わたしは嬉しくて、これまでで一番美味しい、そう伝えました。彼女はまんざらでもなさそうな表情を浮かべましたが、「しよーじんあるのみ、です」との事……。

その後は、部屋に戻って絵本を読み聞かせしたり、イエイヌちゃんに文字のテストをしてみたりという具合です。

そして、三日目。窓から覗く空は、曇り空でした。気温も低く、少しだけ風の吹く音が部屋からでも聞こえる、そんな日でした。イエイヌちゃんが言うには、雨は降らなさそうとのこと、午後からのお散歩の予定は変更せず、昼過ぎに家を出発することになりました。ですけど、身体を冷やすのは良くないという事となり、早めに帰る予定です。

曇り空で、寒さに震えながら……という点さえ除けば、以前と変わらない道のり。ですが、初めて丘の上へ向かった時と違って、今のわたしとイエイヌちゃんの関係は、少し変わっている様に思えました。言ってしまうえば、あの時から変わらなずわたしと彼女は友人で、大切な相手であったのは変わりないはず。けれど、どこか、変わっていると実感しました。記憶を取り戻したからなのか、それとも、先日のわだかまりが解消されたからか……それははつきりとはわかりません。もしかしたら、わたしの中に燻り続けている『計画』の実行の日が近づいていることを感じているからかもしれない……結局の所、そう思った理由はわかりません。

丘の上に到着してからも、周囲を散策してみたり、腰を下ろして広場の景色を見てみたり、そんなふうにいるの時間を感じていました。そして、夕方くらいになった頃、唐突に空の色が変わりました。わたしもイエイヌちゃんも、同じように空をじっと見つめていました。

別離の現実が近づいた証拠。真っ赤に染まる雲と、空。曇り空で無ければ、きっと太陽が真っ赤に燃えていたことでしょう。

「……」
漠然と抱いていた不安感が、焦燥に変わって心臓に早鐘を打ちます。

「……ともえちゃん」
震えそうな声をかすれさせながらイエイヌちゃんがわたしの名前を呟きます。

「イエイヌちゃん。明日、あそこに行きます……それまでは、一緒に」
せめて、彼女に不安を抱かせないようにと、微笑んで伝えます。彼女
は地面を見つめながら、頷きました。

十分間ほどで、空の変化は収まり、元の濃灰色に戻ります。けれど、
胸のざわめきがどうしても収まらないわたし達は神秘と見紛うほどの
現実を見届けてから、お家に帰ることにしました。

お家への道中も、お家へ着いてからも、言葉を交わすことはありません
でした。イエイヌちゃんはわたしの事を気遣ってか、それとも寂
しさを紛らわせようとしてか、わたしの近くにずっと居てくれまし
た。わたしがベッドに腰掛けて画集を眺めている時などは、そっとわ
たしの隣に座って一緒に画集を見ながら過ごしてくれたり……。

その優しさが、却って明日の朝を、そしてその日から始まるであろ
う彼女の孤独を考えさせてしまいます。けれど、わたしも彼女と少し
でも長く居たいのは確か。わたしは上の空になりながらも、彼女の身
体に触れながら、彼女の香りを確かめながら、画集のページを捲って
いました。

日が暮れて、夜。

わたしはひとりでお風呂に入っていました。これは、単に身体を清
めたいという思いもありましたけれど、カプセルから出てきた時に身
体が汚いと嫌だな、なんていう他愛ない思いからです。イエイヌちゃ
んは一緒に入ると言ってくれましたが、わたしは断りました。

「少しだけ、ひとりにさせてください」

イエイヌちゃんは少しだけ迷った様子を見せましたが、頷きます。

「わかりました！ こっちでお待ちしますね！」

……気丈に、振る舞ってくれていることは、すぐにわかりました。
湯船に浸かりながら、何かを考えようとしていたのですけれど、ど
うしても考えが纏まりません。考えるべきことも、考えたくないこと
も、全部、お湯に溶かしてしまったような、そんな気持ちです。

頬をぺちりと叩いて、気を入れ直します。

「やることを、やるだけ……」

浴室に投げかけた独り言は、うわんうわんと唸る様に反響し、消え

ていきます。

言ってしまうえば、何のことはありません。とても単純で、とても簡単なのです。カプセルの中で、眠るだけ……。

けれど、いつそこから出られるのかわかりません。次にエネルギーが不足した時まで目覚めないことだってありえます。そうなれば、短くても数年という単位でわたしとイエイヌちゃんは離れ離れです。わたしは眠って、目覚めるだけの一瞬の出来事でしょうけれど……イエイヌちゃんからしてみれば、一瞬なんかではありません。文字通りの数年を過ごすのです。その苦しみを彼女に味あわせたくなんてありません。

はたまた、目覚めてから記憶をなくしてしまっていた場合……わたしは楽かもしれません。また記憶を取り戻そうと頑張るだけです。それに、記憶を取り戻すことを諦めることだって選択するかもしれません。けれど、イエイヌちゃんは、わたしの過去を全部知っていて、それを押し込めながらわたしと初めて会い直すことを選ぶでしょう。

……彼女は聡明ですから……記憶をなくして混乱したわたしの事を案じて、わたしとの思い出をすぐには語らないでしょう。だからこそ、彼女はひどく辛い思いをしなくてはならない……そんな予感がしました。

「一番辛いのは……イエイヌちゃん、なんですよね……」

色々考えてみても、何も変わりませんし、何も出来ません。わたしは長く息を吐いて、お風呂を出ました。

お風呂から出ると、イエイヌちゃんが外を眺めていました。

わたしはタオルで髪の毛の水気を拭き取りながら、尋ねます。

「……外、どうかしました?」

彼女はわたしの方を向いて、言いました。

「雪……? 降ってます。綺麗ですね、雪って」

高揚と諦観の混じった不思議な声色でした。

その声に導かれるように、わたしも窓の外を眺めます。窓から滲み出るような冷気の向こう側に、うつすらと積もり始めた雪達が見えました。

「……寒いですもんねえ……夏だと思ってたんですけど、まあ、ここま
で……」

天気 of 異常を嘆く言葉に同調したのでしょいか、彼女は外をじつと
見つめたまま、こくりと頷きました。

「イエイヌちゃんは……初めてでしたっけ、雪」

「はい……冷たいんですね？」

わたしは少しだけ窓を開いて彼女に手を伸ばすよう促します。そ
して、彼女はひとひらの雪を手のひらで受け止めます。けれど、手袋
越しとは言え、彼女の体温の為にすぐに雪華は液体へと変わってしま
います。

「あっ……溶けちゃいました……」

「冷たくて黒い布とかあれば、結晶が見られるんですけどね……」

イエイヌちゃんはふむふむと呟いて、外に積もった雪を熱心に見つ
めています。

「何かありました？」

「い、いえ……頑張れば見えるかなあと思つて……えへへ」

なるほど……？ 説得力があるような、無いような……？

「難しいんじゃないですかねえ……どうなんでしょう？」

彼女は首を振ります。諦めたように、窓を閉めました。

「無理そうです……」

わたしは小さく笑つて相槌を打ちます。

「今度はちゃんと用意してから、見ましょう？ ……積もったら、
きつと綺麗ですよね、草原……」

きつと綺麗。そう思うと同時に、この寒さや雪によつてつらい思い
をしている方がいるのかもしれないことに気づきます。

「……でしようねえ」

イエイヌちゃんはそれを知つてか知らずか、小さな声で同意しまし
た。

「……わたしは髪を乾かしたら、寝ますね。イエイヌちゃんはどうし
ます？」

「私も寝ます。先にベッドに入つて待ってますね」

わたしは了承の意を伝えてから、洗面所に戻りました。髪を乾かし終えたわたしは、部屋の電気を消して、ベッドに入ります。

「……ともえちゃん、くつついて良いですか？」

彼女は天井を見つめながら、そう言いました。

「良いですよ、ちよつと頭あげてください」

イエイヌちゃんは「ん？」と戸惑う声を漏らしましたが、わたしの言う通りに頭を少し上げてくれました。そうして出来た隙間にわたしは腕を通します。

「はい、じゃあ、こっちに」

そう言ってわたしはイエイヌちゃんをぐつと抱き寄せます。腕枕と云うには少し違います。というのも、彼女の頭は枕の上ですし、わたしの腕は彼女の首の辺りを通っているのですから。

「ち、近いですね……」

照れくさそうに彼女は言いました。それに、少しでも身体を強張らせているようでした。

「んーでも……」

なんと言えば彼女は承服するでしょう？

「そうですねえ……寒いので……。良いですか？」

「は、はい……」

彼女はそう言って身体力を抜きます。

すると、わたしの脇腹に彼女のお腹が当たるようになりまし、頬を彼女の鼻と唇がくすぐります。ずっとそうするべきだったと言わんばかりに、彼女はわたしの腕の中にすっぽりと収まりました。そして、お腹の底の方から込み上げてくるような愛おしさを感じました。そんな思いを堪能しながら、わたし達はお互いに言葉を交わすこと無く、そうしていました。

イエイヌちゃんの呼吸に合わせて、お腹が動いて、わたしの肋の辺りに押し付けられた胸からはとくんという鼓動が繰り返して伝わります。わたしの足が、暖かな彼女の足に当たります。あまりの冷たさに彼女は一瞬だけぴくりと足を逃しましたが、すぐにわたしの足にぴつ

たりと足をくつつけてくれました。

彼女の匂いと熱と、柔らかさ、呼気の湿り気、呼吸の音、お腹や胸のささやかな動き……そのどれもが愛おしく、離れがたい誘惑にさえ感じます。けれど、けれど……。

目を閉じてしまえばすぐにでも眠りに落ちてしまいそうな夜。少しでも長く起きていたいと思うのは、わがままなのでしょうか？ ですが、そんな思いも無視して、睡魔はわたしの意識を奪い去っていきましました。

終わり

早朝。わたしは焦りのような感情から眼を覚まします。急ぐ必要はきつと無いのに、けれど、どうしても胸の鼓動が収まりません。わたしが彼処に……『あの場所』に向かう日が今日なのですから、それも仕方のないことなのかもしれません。

わたしはまだ眠っているイエイヌちゃんを起こさないようにそつとベッドから抜け出ます。トイレへ行つて、顔を洗つて、歯を磨いて……普段の朝と変わらぬルーチンワークを意図的になぞりながら、気持ちを落ち着けようとします。

わたしが朝の支度を済ませて尚、イエイヌちゃんは眠ったままでした。不思議と食欲は湧かず、けれど何かをお腹に入りたいという思いはありましたので、お湯を沸かしてハーブティーを飲むことにしました。一杯だけですので、さほど時間をかけずにハーブティーは淹れ終わり、椅子に腰掛けて、舐めるように飲みます。

外の景色を見やると、一面の銀景色。昨晩に降り始めた雪は依然として降り続いており、また、ゆつくりと積もり重なって居ました。

普段の青々とした景色はそこから無くなり、どこまでも続いていそうな雪原。窓から辛うじて覗く光景でさえ、薄つすらと陽光の残滓を反射し、煌めくようです。視線を徐々に遠くへと運んでいくと、地形の起伏に倣って波打つ様に積もった雪は広がっていました。辛うじて、先日までの景色を残しているのは林くらしいのもですけれど、林の木々にも小さくちよこんと白い帽子がかかっています。

そんな光景を前にして、わたしはため息をひとつ漏らします。それは、恨めしさや怒りの様な感情から来たものではありませんでした。それは、自然の生み出すモノ、それらが持つ美しさや壮大さ、儂さ……そう言った性質に対する憧れとも歓心とも言える、感嘆の思いから漏らしたため息でした。

「理由が理由じゃなければ、素直に喜べたんでしようけど……」

異様に低い空も、しつとりと湿った空気も、触れれば溶け去る雪の欠片も、緑を飾る白色も、鈍く輝く大地も、そのどれもが儂く、そし

て愛おしく、何よりも心奪われるような魅力を持っていました。

「これを飲んだら、行きましようかね……」

半分ほどハーブティーを飲み進めてから、ぼそりと呟きます。

イエイヌちゃんに挨拶をしないで行くつもりは無かったのですけれど、いざ出発の時と考えると、悲しい別れになりかねないように感じられました。仮にそうならなかったとしても、わたしは後ろ髪を引かれる思いである研究所に向かうでしょう。ですから、ひと言だけ告げて、お家を出ようと決めました。

カップに口をつける頻度は、お茶の残りが減っていくにつれて、減っていきます。ひと口飲むごとに、彼女との別離が近づくような気がして……。けれど、最後のひと口を含んで、飲み込みます。

「……よし」

わたしはそつと立ち上がり、ベッドで眠ったままのイエイヌちゃんの額にキスをします。彼女は「ううん……」と声をあげ、寝返りを打ちました。わたしは彼女の頭をそつと撫でて、聞こえるか聞こえないかくらいの小さな声でささやきます。

「行ってくるね、イエイヌちゃん」

すると、彼女ははつと眼を覚ましました。

「！……おはようございます……」

とは言え、まだ寝ぼけ眼の様子。

「ああ……起こしちゃいましたね、ごめんなさい」

わたしの言葉にふああとあくびをひとつしてから、彼女は首を振ります。

「いえ……それよりも——」

彼女は少しだけ微笑みを浮かべて、続けます。

「——今度は、ちゃんと行ってくれたんですね」

そういうつもりでは無かったのですけれど……考えてみれば、以前のわたしであればそのまま家を抜け出ていそうな気もします。

彼女にわたしも小さくほほえみ返しました。

「約束しましたもの」

イエイヌちゃんはベッドから出て、わたしに尋ねます。

「もうちよつとだけ、待ってて貰っても大丈夫ですか……?」

「大丈夫だと思いますけど……どうでしょう……? ラツキービーストさん、大丈夫ですか?」

わたしは枕元にそつと置いておいたラツキービーストさんに尋ねます。

「アト、ニジュウヨジカンは、ダイジョウブダヨ」

わたしは彼に頷き返しました。

「平気そうですね……」

イエイヌちゃんはわたしとラツキービーストさんのやり取りを見ながら、洗面所に行きました。その間に、わたしは彼女にもハーブティーを用意しておくことにして、彼女が戻るのを待ちました。

イエイヌちゃんが戻ってきてから、少しだけゆつたりとした時間が訪れました。

イエイヌちゃんはハーブティーの完成を待ちながら、外の景色をぼうつと眺めていて、わたしは外を眺めるイエイヌちゃんを眺めていて……そんな事をしている内にハーブティーの蒸らしが終わって、カップにお茶を注いで……ついだにわたしももう一杯。そんな風にして過ごしました。半刻も無い短い時間でしたけれど、ふたりきりで過ごす時間は、もうしばらく訪れないのかと思うと切ないような愛おしいような……。

イエイヌちゃんはひと口、ふた口とお茶を飲んでいきます。

「ともえちゃんは、ご飯食べます?」

わたしは首を振ります。

「お腹空いてないんですよね……緊張ですかね? えへへ……」

わたしの言葉に、彼女は「うーん」と少しだけ考えます。

「じゃあ……私も食べないで、へーきです」

「大丈夫ですか? 結構歩くと思いますけど……」

イエイヌちゃんはカップを傾けてから、小さく喉を動かします。

「平気ですってば、心配しすぎです」

イエイヌちゃんはいたずらっぽくそう言って、笑います。わたしもハーブティーをひと口飲んでから、笑い返します。

「んー……寝てる時お腹鳴ってましたよ?」

イエイヌちゃんはわたしの言葉に「本当ですか?」と聞き返しましたので、わたしはすぐに首を振って「冗談ですよ」と否定します。

イエイヌちゃんは頬を膨らませて、少しだけ怒る素振り。けれど、すぐにお互いに小さくくすくすと笑い始めてしまいました。

わたしも、イエイヌちゃんも気づけばカップの中身は空になっていました。けれど、お互いに気づかないフリをして、のんびりと降り積もる雪を眺めていました。

「……今度雪が降ったら、外で遊びましょう?」

わたしの言葉に、イエイヌちゃんが楽しげに笑って頷きます。

「はいー!」

「多分、半年もしたら冬ですから——」

楽しみですね、とは言えませんでした。そのまま、わたしは口を閉ざしてしまいます。どうしても、今からの事を考えてしまうのです。

「……」

イエイヌちゃんも何かを言おうとしましたが、言わずに黙り込みます。

言葉を発することが気不味いような、未練のような、不思議な感情が部屋に満ちていました。わたしが最初に動かなければ、きっとこのまま足を止めてしまいそうでした。

「ねえ、イエイヌちゃん」

イエイヌちゃんはぴくりと耳を動かします。

「わたし、そろそろ行きますね」

そう言っただけで立ち上がると、イエイヌちゃんが言いました。

「……もうちょっとだけ、ダメですか……?」

わたしはゆっくりと首を振ります。

「このままだと、行けなくなっちゃいます。だから、ごめんなさい」
イエイヌちゃんは小さく「はい」と呟きました。

「わ、私も……一緒に……!」

「……途中までで良いですか? あの別れ道のところまで」

それ以上一緒に居てしまえば、きっと辛い思いをさせてしまうので

しようし、わたしも辛いですから。

そんな思いを知ってか知らずか、イエイヌちゃんはこくりと頷きます。

「行きましょ？」

彼女は俯きながら、わたしの手をきゅつと握ります。そして、わたし達はお家を出ました。

お家を出てから数分。苦心しながらわたし達は研究所への道を進みます。

降り続ける大粒の雪は、地面に落ちるや否や雪原の一部へと掻き消えて行きます。普段ならば土道と草原の境界がはつきりと見て取れるのですけれど、積もった雪の為にその境界はわからなくなっていました。茫漠と広がる雪原は、ひっそりと静まり返っていて、どなたの足跡も見当たりません。

わたしとイエイヌちゃんは、一緒に手をつないで、ゆつくりと足元を確認しながら歩きます。ぎゅつぎゅつという処女雪を踏みしめる音だけが、わたし達の間広がっています。幸い、靴の中はまだ濡れていませんけれど、濡れてしまうのは時間の問題でしょう。

歩いている内にどうしても肌寒くなってきてしまい、わたしは歩くペースを落としてイエイヌちゃんの腕を抱きかかえるように寄せます。彼女は抵抗もせず、わたしとイエイヌちゃんはぴったりとくつきます。

「ともえちゃんの方からくつきについてくるの、珍しいですね」

イエイヌちゃんが言いました。彼女の声はそもそも大きいものではないのですけれど、降りしきる雪の為に、いつもよりも小さく聞こえました。

「周りにどなたもいませんから、こういうときくらい」

わたしは一呼吸置いてから、続けます。

「それに、ロマンチックじゃないですか。降りしきる雪、一面の銀世界、大好きな人とふたりつきり……こういうときくらい、こういう事してもバチはあたりませんよ」

イエイヌちゃんはわたしの言葉に不思議そうな表情を浮かべまし

た。

「ろ、ろま……？　ともえちゃんが言うなら、そういうことなんでしょうけど……」

彼女にはわたしの言葉の半分くらいは伝わってなさそうです。

「ん……じゃあ宿題です。イエイヌちゃん」

宿題、という言葉で彼女はわからないかもしれない……そう思っていたのですが、どうやらこの言葉の持つ強制力というか威圧感というか、そういうモノに気圧されているようでした。

「は、はい！」

「わたしが帰ってくるまでに、そうですね……ゴリラさんと相談した上で、児童書くらいは読めるようになって下さい。わたしにそう言われたって話をすれば、色々教えてくれますよ、きつと」

やっぱり彼女はきよんとした顔を崩しません。けれど、使命感に燃え始めたように瞳が輝き始めました。

「わかりました！　任せて下さい！」

「……そんなにかしこまらなくてもいいのに」

わたしがくすくすと笑いながらそう言うと、イエイヌちゃんは首を傾げます。

「わ、私、何かしちやいました……？」

わたしはゆっくりと首を振ります。

「いいえ、イエイヌちゃんらしいって、そういうお話です」

「そ、そうなんですかあ……？」

「そうなんですよ、きつと」

わたしはそこまで言って、足を止めます。気づけば別れ道の所まで、歩いて来ていたのです。

イエイヌちゃんも、ふうと息を吐いてから足を止めました。わたしは、イエイヌちゃんと繋いだ手をそつと離します。彼女の手が、名残惜しげに空を切りました。

「……までです。行ってきますね」

イエイヌちゃんは、笑顔を浮かべていました。

「はい！　行ってらっしゃい！　ともえちゃん！」

元氣よく紡ぎ出された彼女の言葉は、どうしても震えてしまっていましたけれど、ここ暫くの間で一番力のこもった声でした。

わたしはこくりと頷いて、彼女に背中を向けて歩き始めます。数歩歩いてちらりと後ろを見ると、彼女はまだ居ました。きっと私の姿が見えなくなるまで居るのでしよう。

そんな彼女を見ると、悪戯心のような思いがふつつつとやってきました。我慢できずに、わたしは急ぎ足で彼女の元へ行きます。

「えへへ、忘れ物です。眼、閉じて下さい!」

彼女の表情は疑問に満ちていましたけれど、そつと眼を閉じてくれました。眉間にシワを寄せて「ん? え?」と慌てふためいていますけれど、構いやしません。彼女の睫毛が煌めいて、震えていて、髪に乗った雪の華が髪飾りの様に輝いていました。

「ふえ……? な、何を……? ひゃつ!」

わたしはイエイヌちゃんの肩に手をあてて、顔を近づけて……やることをやってやりました。多分、三秒くらい? それだけだったのに、彼女つたら、口元を抑えてあわあわして、顔を真っ赤にして……可愛らしいいつたらありません。

「じゃあ、今度こそ、行ってきますね!」

イエイヌちゃんは恥ずかしそうにこくりと頷きました。彼女と暫く会えなくなるのです。これくらいのワガママはどなたも許してくれるでしょう。そもそも、この場にはわたし達以外いませんけどね。

そうしてわたしは道を振り返らず歩き始めます。道に迷いそうなくらい、目印のない周囲ですけれど、不思議なことに真っ直ぐに研究所に到着しました。

正面玄関を前にして、扉の隣で赤色のランプが点灯する端末を覗き込みます。おそらく、今までならばラッキービーストさんが開けていたのでしようけれど、時間が早すぎたのでしょうか? 深呼吸してから、考えておいた言葉を告げます。

「遠坂もえ、コードSM34862414。解錠願います!」

電子音がして、端末のランプが緑色に変わりました。扉の鍵が解除されたのでしよう。ゆつくりと扉を開き、中へと進みます。

研究所の中は物音ひとつありません。外からの光がぼんやり差し込む程度の薄暗い廊下には、扉の横に備えられた端末の赤い光が幾つも輝いて居るばかりです。

廊下を真っ直ぐ進んで、角をひとつ曲がると、そこに緑色のランプがひとつだけ煌めいていました。その扉の先が、これからわたしの眠る場所なのでしょう。確信めいた思いとともに、扉を開きます。

中に入ると、明かりが自動的に点灯しました。そこには、ふたつのカプセルがありました。カプセルはそれぞれ幾つものケーブルに繋がられていて、ひとつは蓋が閉まっていて、もうひとつは蓋が押し上げられたように開いていました。わたしはそこで待機することになりました。ゴリラさんを説得したときに、ラツキービーストさんが来るか居るかすると聞いていましたので……。

十分ほどすると、部屋にラツキービーストさんがやってきました。お家に来てくれたラツキービーストさんはお家に置きっぱなしにしてきてしまったので、別の方でしょう。

「ハヤカッタネ」

彼は小さくお辞儀をするようにしてから言いました。わたしはそっとしゃがみこんで、彼の頭に積もった雪を払い落とします。

「……まあ、こんな天気ですから、早い方が良いかなあと思っています……」

わたしの言葉を尊重しているのか、していないのかはわかりませんが、ラツキービーストさんはわたしの言葉を聞き終わるまでじっとしていました。

そして、彼はカプセルの隣に近寄ってから、段取りを説明し始めました。曰く、カプセルの中に入って眼を閉じるだけなのだそうです。

「——ソレト、クツハヌイデネ」

ちよつとした注意に思わずくすりとしてしまいます。

「はい、わかりました」

いそいそと靴を脱いで、カプセルの中に、わたしは横たわります。

「ツギニヒライタラ、ソノトキニメガサメルヨ。ソレデ、オワリ」

わたしは頷きます。

「……………お願いします」

「リョウカイ」

そう言ってラッキービーストさんは何らかの指示を出しました。カプセルの蓋がしまり、密閉されます。ゆっくりと、けれどしっかりと、わたしは眼を閉じます。温かさに満ちた空気が部屋に満ちていくのがわかります。

頭の中で、いろいろな思いがめぐります。

イエイ又ちゃんと出会ったこと、草原の色んなところを歩いて、フレンズさん達とお話したり、イエイ又ちゃんの大好きな場所に行ったこと。海へ行き、泳いだこと。サバンナへ行き、競い合ったこと。図書館で画集を見つけて嬉しかったこと。セントラルへ行き、ヒトの名残に触れたこと。イエイ又ちゃんを守れたこと。記憶を取り戻して尚、彼女の事を愛しいと思ったこと。そして、今朝のこと。

そのどれもが、大切な思い出でした。そのどれもが、失いたくなくて無い思い出でした。もし、こんな問題が無かったら、こんな心配なんてせず、平穏な日常が続いたのかもしれない。

やりたいことは、一杯あります。イエイ又ちゃんと一緒に温泉に行きたいですし、山の方や島の西側なんかは行ったことがないので、そこも行ってみたいですね。クッキーを作るのも、楽しみです。リンゴがあるのですから、他の果物なんかも見つけられそうです。そして、色んなお菓子を作ってみたりもできそうですし、石窯を作れるのなら、それを使って色々できそうですから、頑張りたい所……。

今ここに居るのは……やりたいことをやるため、未来を守るため。そう思っています。ですから、事が終わったら、イエイ又ちゃんと一緒に、色んな事を――

――そして聞こえたのは、空気の抜ける音でした。その次に何か動く音。わたしは、まだカプセルの中に居るべきなのではないかと思いましたが、身体に充満している気だるさの為に、身体を起こして伸びをします。

「う……………ん……………」

カプセルの外から入ってくる空気は今までカプセルの中に充満していた空気とは異なっており、少しばかりひんやりしていました。だから、寝起きだと言うのに妙に意識ははつきりしてしまいましたし、いっただかと違って身体に力が入らない、なんてこともありません。

わたしがそつとカプセルから出ようとして身体を動かすと、部屋の電気が点きました。周囲には誰もいません。けれど、枕元には花束が置いてあったり、怪我の治療中に使っていた吸引器が置いてありました。吸引器の隣には、うねうねと癩のあるひらがなで「つかつてくだちい」と書いてありました。あの子が持つてきてくれたのでしよう。

わたしはそつと吸引器を取り、口につけます。中の蒸気を吸い込んで、吐き出して、そうして行く内に身体に力が取り戻されていくような気持ちになります。数口ほど吸引してから、機械をそつとあつたように元にもどします。

「もう、終わったって……ことなんですかね……？」

眼を閉じて、色々考えている内に意識がなくなつて、また眼を覚ました。そういうことなのでしょう。そこでふと気づきます。

「記憶……あるんだ……」

わたしは安堵の息を漏らします。

そして、靴を履いている内に彼女からの手紙の意味することに気づきます。それは、彼女が自分で文字を書けるようになったということもそうですけれども、紙や文字がそこまで色あせていないということです。

「時間も、多分そんなに……」

靴を履いて、カプセルを出ると、もう居ても立ってもいられなくなりました。今すぐにでもお家に帰って、イエイヌちゃんと会いたい……！

駆け出そうとして、床に這っているケーブルに足を取られます。転ぶや否や、思わず「ぶへえ」という奇妙な声を出してしまい、ひとりきまり悪い気持ちになります。……あの時は、もうちよつとお上品な声を出していたような……？ まあ、幸い怪我もしなかつたので、良

しとしまししょう。少しくらいは落ち着いたほうが、良さそうですね。でもね……。

立ち上がって、扉を開きます。吸引器でサンドスターを補給したお陰か、身体の方が抜けるようなこともなく、すんなりと廊下へと出ることが出来ました。

外は、どうやら夜のようでした。ここに来た時は辛うじて外からの光も差し込んでいたので、薄暗い程度でしたけれど、今は明かりになるものは道沿いに並ぶ赤いランプだけです。注意を払いながら前に進むと、玄関に到着しました。鍵は施錠されて居ないようので、苦もななく外へと出ることが出来ました。

視界に飛び込んできたのは果てしなく広がるように思われるほどの広大な草原でした。

「良かった……」

わたしは、パークの為になれたのだということに、計画が成功していたことに、思わず涙を流します。そんな涙を、柔らかく暖かな風がそつと撫でます。その風は、わたしにそうしたように、木の葉を、草々を優しく撫でていて、全てを見つめるように輝く月が空に浮かんでいます。不意に草むらの青い匂いが鼻をつきました。

「……春……?」

眠った頃は、夏だと思われましたので、少なくとも半年近くは眠っていたのでしょうか？ 少しでも考えて、わたしはそつと首を振りまです。考えて足を止めるよりも、今はすぐにでもお家に向かいたいですから。

道を歩くわたしの身体を、度々風が撫でます。わたしの後ろから、道を進めよと吹く、心地よい、暖かな風を、時折眼を閉じて堪能します。真つ黒の伸びた髪が風になびきました。

土道の端つこに、小さな黄色い花が咲いていました。遠くから、りりりという虫のような鳴き声が聞こえます。透明感のある空気をいっぱい吸い込みます。その全てが、愛おしく感じられました。

ゆつくりと歩いて、歩いて……お家に着きました。

電気はまだ点いています。イエイ又ちゃんは、まだきつと起きてい

るのでしよう。

わたしはコンコンとノックをします。

「……はあい、どなたですかあ？——！」

わたしは何も言わず、ドアが開くのを待ちます。

ドアが勢いよく開かれて、そして、その時はやってきました。

「ただいま、イエイヌちゃん」

後日談

眼の前に広がるのは、からりと晴れた青空と、濃さを増しつつある草原。そして、その一角に広がる濃い茶色の土。土は掘り返されたばかりでまだふわふわとしていいる箇所もあれば、時間が経過した為に少しばかり硬さを取り戻している箇所もあります。

「……こんなもんですかねえ」

わたしは手にした鍬を地面に置いて、ふうと息を吐きます。そして、ぐーっと伸びをしてから、首に下げた手ぬぐいで額の汗を拭きます。

「お疲れさまです！ お仕事終わったんですか？」

麦わら帽子を被ったイエイヌちゃんのコップにお水を入れて持ってきてくれました。わたしは彼女に「ありがとう」と言葉を告げて、受け取ったコップに口を付けます。

ひと息で半分ほどを飲んで、その冷たさが過ぎたのか、頭がきいんと言う痛みに苛まれます。とは言っても、身体に染み渡る様で、何とも美味しく感じられました。

「一応ラッキービーストさんに確認してもらおうかな、とは思ってますけど……」

二週間ほど前から、わたしはお家の裏側に『畑』を作っているのです。幸い、道具も種もありました。

パークの一角に『ヒトとフレンズが協力して作る』というコンセプトの小さな農園があったのですが、そこから鍬や鎌等の雑多な道具や肥料を借り、種はラッキービーストさんから一袋（と言っても何キロなんて重さではありませんが）を譲り受けました。

「クッキーの材料を育てるんだよね、楽しみです！」

彼女は期待に胸を膨らませているようですけれど、わたしは彼女に釘をさします。

「成功すれば……ですけどね」

わたしの目的は小麦の栽培です。

というのも『クッキーを作る』という予定を達成する為にはどうし

ても小麦粉や米粉などの材料が必要です。そして材料はラッキービーストさんから譲り受ける形で用意は出来ます。けれども、今後継続的にクツキーを作ろうと思った時、それらを毎度毎度ラッキービーストさんに頼んで用意するというのは手間ですし、何より申し訳ないことです。一応、生産計画とかあるんでしょうし……。

なかなか大変な道のものであることは察していましたが、今後の生活に幅を持たせられるなら、多少の苦勞などは嫌う必要がありません。

「大丈夫ですよ！　ともえちゃんなら上手く行きますよって！」

「だと良いですけど……」

病気になりにくく、どこでもよく育ち、収量も多い……という夢のような品種なのだそうですね。農作業なんてものはこれまでの人生で初めての経験ですし、色々とアドバイスが貰いたい所。また、収穫の後の作業などもまだ知識が足りませんので、勉強しないといけませんからね……。図書館に行つて知識を得ると同時に、それを実践する必要を強く感じます。

と、それはそれとして……。

「わたしはシャワー浴びてきますね。イエイヌちゃんはどうします？」

イエイヌちゃんはわたしの質問にえへんと胸を張つて応えます。

「テーブルと椅子を綺麗にして、皆さんをお待ちしてます！」

「なんだかお願いしちゃってすみません……」

イエイヌちゃんは首を振ります。

麦わら帽子をすり抜けるようにして外に出されている彼女の耳はぴんと張つていて、これからすること、起こること、その全てを待ちきれないと言わんばかりです。

「いえいえ！　こういう時くらい頑張りたいですから！」

わたしは彼女に感謝の言葉を告げ、シャワーへと向かいました。

脱衣所に入ったわたしは服を脱ぎながら、この後の事を考えます。お世話になったフレンズさん達を招待して、みんなでクツキーを食べようという計画を少し前から練っていたのです。そしてそれが今日の午後、お昼から始まります。

お世話になった方々、と言いましても、連絡が出来た方も居れば、そうでない方もいましたし、フレンズさんで賑わう場所を避けたいという方も居ました。なので、全員という訳にはいかなかったのですけれど、それでも何名かは来てくださることになりました。一応、連絡のつかない方やこちらに来ないと行っていた方には後ほど直接手渡しするつもりです。

かなり遠回り（おおよそ九ヶ月ほどでしょうか？）して、ようやくこぎつけたクツキー……。それをドードーさんにプレゼントして、余ったものをわたし達だけで食べる、なんて勿体ないこと出来ませんものね。

それに……今までお世話になって来たフレンズさんはいっぱい居ます。お裾分けと言うにはちよつと多すぎるかも知れません。けれど、独り占めはしたくないのです。

アルマーさん、センさん、ロバさん、カルガモさん、フォルカさん、バンドウイルカさん、マイルカさん、コヨーテさん、ロードランナーさん、ドードーさん、ゴリラさん、ハクトウワシさん、ユキウサギさん、ヤブノウサギさん、イエネコさん、イリオモテヤマネコさん、アムールトラさん……。旅に出ている間だけでもこれだけのフレンズさんにお世話になりました。それに、今回使わせてもらう牛乳を用意してくれたフレンズさんもいるそうですし、その方にもご挨拶に行きたい所です。そうなれば、もつとたくさんのフレンズさんとお会いすることになるでしょう。

服を脱ぎ終わり、わたしはシャワーを浴びます。そして、水が床に跳ねるノイズの様な、不思議な安心感を覚える音が浴室に響いて、それらはわたしの髪を、身体を濡らしていきます。

「ふう……」

不意に腕に触れてみると、以前よりも少しだけ腕がしっかりしてきたような気がしました。筋肉が付いたということなのでしょうか？ それもそうでしょう。レンガを運んだり畑を耕したり……。どれも力仕事ですし……。

「二段落付いたら、遠出も良いかもですねえ……」

山の方に行く予定はありますが、それ以外では……今の所何も思いつきません。もしかしたらどなたかとお話の結果行き先を決めるなんてこともあるかもしれませんね。

その後、浴室から出て、身体の水気を拭っている内に、ひとつ行き先を思いつきます。

「あつ……！ 温泉！」

あれこれあつた所為で忘れていましたけれど、そう言えばあるんです。つけた。イエイヌちゃんと一緒に……んふふ……旅、というよりも旅行という印象ですけど、彼女と一緒に温泉に浸かるのはなかなか楽しみじやないですか。

「そしたら、ラッキービーストさんがゴリラさんに話をしないとですねえ……」

ぶつぶつ呟きながら下着だけ身につけ、髪を乾かした後、普段の感覚で居間へと戻ると、ドードーさんとカルガモさんが居ました。おふたりは椅子に腰掛けて、ジャパリまんを食べているようでした。

「ひやつ……し、失礼しました……すぐ服着ますので……」

いくら同性と言えども下着姿で眼の前に出るといのは失礼ですし、それに恥ずかしいです……。

「んんー平気だよおーゆっくりねえー」

「……？ いつもと格好違いますけど……どうしたんですか？」

ドードーさんとカルガモさんの会話を聞きながら、わたしはいそいそと服を着て、おふたりの前に戻ります。どうやらドードーさんがカルガモさんに色々と言葉についてお話をしているようです。

「お、おまたせしました……」

「えへへーこんにちわあ」

首を少しだけ傾けて、微笑むドードーさん。

「……とつとつと、こんにちは、ともえさん」

カルガモさんは手を背中に回してこしよこしよと動かしていた手を止めて、ぺこりと折り目正しくお辞儀をしました。

「おふたりとも早いですね……もう少しかかると思っていましたけど……」

わたしが油断していたというのもありますが、お昼過ぎ頃になってからここに集合する予定でした。今の時間はお昼過ぎというには少しばかり早いくらいです。

「えへへえ……クッキー楽しみで、つい……」

照れ笑いを浮かべながらドードーさんが言いました。

「それですね、私はたまたま合流したので一緒に来ちゃいました……って、あら……」

カルガモさんはそう言ってニッコリと微笑みました。と同時に彼女のエプロンの腰紐がはらりと落ちます。

「お着替え？　できると聞いたので、つい弄ってたんですけれど、ここは……？」

彼女は少しだけ慌てた様に自分の背中を覗き込もうとしています。

「なるほど、そういうことですか……あ、カルガモさん、背中、こつちに向けて下さい」

わたしは彼女の腰紐を手に取り、蝶結びにします。

「ど、どうも……余計なことはいらないほうがいいですねえ……」

わたしもドードーさんも乾いた笑いを漏らしてしまいました。

「良ければ結び方お教えしますよ……？」

「で、ではお言葉に甘えて……お願いします」

わたしはカルガモさんのエプロンをするりと脱がして、実例で教えます。

「ここを通して、輪っかを作って——」

ふんふんとカルガモさんが領きながらわたしの手元をじつと見つめています。その後、わたしは彼女の手元を見つめながら間違いがあれば指摘していましたが、ふと別のことに疑問に思っただードーさんに尋ねます。

「そう言えばイエイヌちゃんはとうしたんですか？」

「んーとねえ、イエネコちゃん呼びに行くって外に出かけていったよお」

「ふんふん、なるほど……」

でしたらそこまで時間もかからなさそうですねえ……。

「ともえさんとともえさん、これで大丈夫ですか……?」

気づけばカルガモさんは綺麗な蝶結びを背負っていました。

「おお……わたしより上手じゃないですか……?」

カルガモさんは照れているような、誇らしいような、そんな気持ちで顔を赤らめました。

「ほ、褒めても何もありませんよおー?」

そんな折、イエイヌちゃんが帰ってきました。

「戻りましたあー」

「こんにちわー」

勿論もイエネコさんも一緒です。彼女はお家の中をきよろきよろと見回していたので、わたしはベッドの上に腰掛ける様に促します。

「ごご? はい」

腰掛けるや否や、彼女は姿勢を崩し、上半身だけ横に倒します。

「あ、寝ないからねー」

そう言っただけで彼女はぐーっと伸びをしてから脱力しました。

「お行儀悪いですよー?」

くすくす笑いながらですが、カルガモさんがちくりと注意をします。

「はあーい」

そう言われて、イエネコさんは上半身を起こしたのでした。

暫く彼女達ががやがやとしている様子を見ていましたけれど、わたしは「よっし」呟いてから立ち上がります。

「わたしはクツキーの準備しますね。ちよつとかかつちやいますけど、のんびりしててくださいね」

わたしの言葉にみなさんが口々に手伝えることが無いかと尋ねますけれど、わたしは首を振ります。

「皆さんにごちそうするのが目的なんですから、のんびりしてて下さい」

と、そこまで言って付け加えます。

「イエイヌちゃんものんびりしてて平気ですけど……どうします?」

イエイヌちゃんは首を振りました。

「お手伝いさせて下さい！」

「わかりました、お願いします、イエイヌちゃん」

わたしは頷いて、ふたりでキッチンへと入っていききました。

わたしはキッチンにしまわれていたエプロンを身に着けます。その後、用意しておいたバンドナを三角巾代わりに被って作業を始めます。と言っても、大した作業はありません。用意をしながらも、背後からはお客さんとして迎えた皆さんの楽しいげな声が聞こえてきます。

わたしはイエイヌちゃんに牛乳を計量カップに移すようお願いします。

「……ともえちゃん。これ、どこまで入れるんですか……？」

レシピを見て、確認した数字を彼女に伝えます。

「わかりました！ そーっと、そーっと……」

心配になって彼女の手元を見てみると、牛乳の瓶をゆつくりと傾け、計量カップに注いでいました。心配のしすぎなんでしょうけれど、ゆつくりとし過ぎな所為で手元がふるふると震えてしまっていました。

「そ、そこまで緊張しなくても……」

「そ、そうですか!？」

焦っているのか慌てているのか、奇妙なハイテンションでイエイヌちゃんが答えました。

「ま、まあ……やりやすいように……」

わたしは自分の作業に戻ります。わたしはボウルでバター（こちらも頂いた牛乳から作りました）を溶かし混ぜているところです。この後、イエイヌちゃんが計ってくれた牛乳とお砂糖、塩をバターと混ぜます。そして最後に、小麦粉の計量をしてからふるいにかけて、混ぜ込む、というのが今後の段取りです。

案の定、イエイヌちゃんの作業のほうが先に終わり、わたしの作業をじいっと見つめています。

「終わったんですね、ありがとうございます……あっちで待っていて平気ですよ?」

彼女はゆつくりと首を振ります。

「いいえ、今はともえちゃんと一緒に居たいんです」
また嬉しいこと言ってくれますねえ……。

「わかりました。じゃあ、側に居てくださいいね」
そうしてわたしは作業に戻りました。

しばらくして、生地が完成すると、わたしはボウルをキッチンの冷蔵庫に入れました。そして、部屋にお呼びさせてもらったラッキービーストさんを抱えて外に出ることにします。

「あ、ともえちゃん、どこ行くのお？」

わたしが扉に手をかけたところで、ドードーさんが尋ねます。

「石窯に火を入れるんです。温度上げないとダメらしいので、今のうちによっておきませんと」

「なるほどお……手伝うこと、あるう？」

「小さいですし、火も扱いますから……」

ですが、わたしの言葉に彼女は首を振りしました。

「でもずっと待ってるのも申し訳ないし……」

わたしは少しだけ考えて、イエイヌちゃんを呼びます。

「イエイヌちゃん」

不思議そうにやってきたイエイヌちゃんにお願いをします。

「はい、なんででしょう？ この後は外の片付けでしたっけ？ 他にしたらほうが良いことありました？」

「いえ、その外の片付けなんですけど、ドードーさんと一緒に——」

ちらりと部屋を見回すと、どうやら他の皆さんもうずうずとしている様子でしたので、言葉を訂正します。

「——いえ、みなさんと一緒にやつてもらっても大丈夫ですか？」

イエイヌちゃんは「はい！」とこくりと頷き、部屋に来てくれていた皆さんもそれぞれに了承の意を示しました。

わたしは一足先に外に出ます。すると、からりと晴れ渡る青空が、わたし達を迎えます。少しばかり湿気った空気はそのままですけれど、梅雨めいた気配はどこへやら。目に眩しい新緑が、陽光を受けて輝いていました。

イエイヌちゃんは他の皆さんに机や椅子（どちらもあの喫茶店から

お借りしたものです)の位置、邪魔そうな石や放置してしまっている道具を動かす先などの指示を出しています。そんな様子をどこか微笑ましく見ると同時に、わたしはお家の裏へと移動し、そこに設置した石窯の前にしゃがみ込みます。

「ええつと、ラツキービーストさん。監督、お願いしますね」

わたしはラツキービーストさんを地面に降ろしながら、そういいました。着地したラツキービーストさんはくるりと回転して、わたしの眼をじつと見つめて言います。

「マカセテ」

わたしはポケットからマッチを一箱取り出し、擦ります。石窯が完成してから何度か練習もしていましたので、手間取ること無く、用意しておいた薪木や小枝に火が移り始めます。わたしはマッチを石窯の下段に放り込み、ラツキービーストさんに監督をお願いしました。

この石窯は、薪木などの火を点ける段と、生地を入れる段とが上下で別けられているものです。レストランから拝借した鉄板を上下の仕切りに使い、その上にレンガを積むことで部屋を分けました。

接着剤に使う粘度やコンクリートなどの扱いが必要かと心配でしたが、構造が単純なことで鉄板を天井・仕切り・床に使うことが出来たために案外簡単に作る事が出来ました。もしも火が外に出てしまったら、近くに用意してある水入りバケツや、ラツキービーストさんの力を借りて対処する手筈です。

ぱちぱちと火が燃え移り、強く、激しくなっていく音を聞きながら、眩きます。

「温まったら中に生地を入れるんですけどつけね……。ええつと、レシピと生地……」

すかさずラツキービーストさんがわたしのフォローをします。

「オンドとヒはミテルカラ、ナカにモドツテイヨ」

「ありがとうございます」

わたしは小さくお辞儀をし、小走りでお家に戻ります。レシピを確認すると、百八十度で十分程度だそうです。

「……ラツキービーストさんに感謝ですね、ホント……」

昔はわたしがよく料理を作っていました。お父さんは何故か料理はズボラでしたし、栄養バランスとか考えてなさそうだったので……。と、それはそれとして、なのでご飯作りは下手ではない自信があります。

けれども、見たり手をかざしただけで温度がわかるかと言えば……そんなことは無理です。となると温度を測る手段がありませんから、焼きすぎてしまったり、生焼けになってしまったりという可能性は十分にあります。逐一生地焼け具合を確認したりすれば良いんでしょうけれど、それも時間がかかってしまいますからね……。

わたしは手を綺麗に洗い、その後、生地の入ったボウルとレシピを手に持って外に出ます。

外では、既に机と椅子は綺麗に並べられ、皆さんがそれぞれに座ってお話をしていました。

「おー……早いんですね……」

なんて言ってる場合ではありません。皆さんをおまたせしてるんですから、急いで生地を形作りませんと……。

石窯の近くに用意しておいた小さな台にボウルを置き、生地を乗せる鉄板を見据えます。

「ここに千切つては乗せ、千切つては乗せる……と……」

何故か神妙な面持ちで生地に入れます。そして、生地を塊を直径二センチメートル程度の球体になるよう細かく千切ります。千切ったものは小さく手で形を整えて、押しつぶして、平たいクツキの形へとあつという間に変化していきます。そして円盤状になった生地を、クツキングシートを敷いた鉄板の上へと並べていきます。

と、作業を進めていると、ラッキービーストさんがわたしに声をかけます。

「ともえ、オンド、ハイキダヨ」

「わかりました！ ありがとうございます！ ……うーん……」

まだ三分の一も生地を別けられていません。どうしましょう……？

「んー急がないとですよねえ……」

わたしは生地を千切りながら、こね、つぶし……そんなふうには作業を繰り返し繰り返し進めていると、イエイヌちゃんが様子を見に来ました。

「ともえちゃん。どうですかあ？」

ボウルの中にある生地を見てみると、まだ半分ほど残っています。

「ちよつと遅れちゃうかもです……」

「りよーかいです！ 皆さんに時間がかかるってお伝えしてから、私もお手伝いしますね！」

「なんだかごめんなさい……これくらいならって思ってたんですけどね……」

イエイヌちゃんは首を振りしました。

「いえいえ、私だってともえちゃんと一緒に、皆さんをお迎えする立場ですから！ これくらい！」

わたしは彼女に感謝の言葉を伝えました。

「つと、イエイヌちゃん。手袋外して、ちゃんと手を洗ってからお願いしますね。一応、念の為です」

イエイヌちゃんは一瞬だけきよとんと首を傾げますが、「ともえちゃんがそういうなら」と納得したようにして、戻っていききました。

その後、イエイヌちゃんの力もあってか生地の整形も終わり、鉄板を窯に入れます。

「そしたら十分ほど待つ、と……」

生地の様子によって長くなったりもするでしょうけれど……それにしても十分は手持ち無沙汰です。

「ふむふむ……あ、ともえちゃん。今度作る時は私にやらせてもらってもいいですか？」

「良いですよ……いつになるのかはちよつとわかりませんが……楽しんでかったですか？」

イエイヌちゃんにはつこりと笑顔で頷きます。

「はい！ やったこと無かったので！ それに、最初のほうはなんだか形崩れちゃいましたし……りべんじまつち、です！」

「そうですか？ 結構綺麗にできてたと思いますけど……」

そんな風に言うと、彼女は嬉しそうにまた微笑みました。

わたし達はラッキービーストさんに窯の番をお願いし、一旦テーブルの方へと戻ります。お家に入り、手をすすいでから外に出ると、コヨーテさんとロードランナーさんが到着していました。

「こんにちは、コヨーテさん、ロードランナーさん」

おふたりは楽しそうな笑顔を浮かべながら「よう」とタイミングよく揃ってわたしに返事をします。

「クツキーだったか？ 誘ってくれてありがとうな。……俺たちで最後か？」

コヨーテさんの言葉に、ロードランナーさんが（何故か）答えます。

「最後じゃなさそうだけどな。けっこー声かけたんだろ？ 椅子足りるのか？」

「あはは……それがですね——」

わたしは今回の催しに来てくれる方を説明します。

センさん、アルマーさん、マイルカさん、それと、ハクトウワシさんには連絡がつかなかった事。アムールトラさんとゴリラさんは辞退。イリオモテヤマネコさんからは気が向いたら、という返事を、ユキウサギさん、ヤブノウサギさんのおふたりは距離的に無理かも、ということだそうで……。

「——ということで、後は海の方からバンドウイルカさんとフォルカさんが来てくれるんだそうですけど……」

天気があまりにも良い場合体調的に無理かも、とは聞いていましたので少しばかり不安です。

「こっちの方なら夏真っ盛りでも無ければ平気だそうですが、距離もありますし、無理はして欲しくないの……なんとも……」

わたしの言葉に苦笑いを浮かべるおふたり、後イエイヌちゃん。

「そ、そうか……」

呆れたような返事に困ったような、そんな声でコヨーテさんは言いました。

「あ、そういえばイエネコちゃん」

イエイヌちゃんがイエネコさんに尋ねます。

「イリオモテヤマネコさんって、結局……」

「んー……寝てるんじゃないかなあ……遅れて来るかも？」

「……どうして一緒に来なかったんだ？」

コヨーテさんが不思議そうにイエネコさんに尋ねますが、イエネコさんは笑ってごまかしました。そんなおふたりの様子を見かねたように、カルガモさんが腕を組んで呟きます。

「皆さんマイペース過ぎるんですよ。折角こういう機会があるのに、まったく……ねえ、ともえさん」

「いやあ……こればかりは、皆さん都合もありますから……」

わたしの発言も最もだと言わんばかりにカルガモさんは頷きますけれど、どこか釈然としない様子。と、ロバさんが何かを思い出したように言います。

「ロードランナーさん、昨日海の方からこっちに走って来てましたよね？ お昼くらいでしたっけ。バンドウイルカさんやフォルカさんにお会いしました？」

ロードランナーさんは話を振られて驚いたような表情をしました。が、頷いて返事をします。

「ん、そうだけど……あー、そういや海っぽいヤツ見かけたなー。林の方の……確か川沿いの辺りだったかな……」

海っぽいってどう言う印象なんでしょう……？ ん？ となると……。

「でしたらバンドウイルカさんとフォルカさんですかね……来てくれているんでしょうか？ 迷子になってたら大変です……それなりに距離もありますし……」

わたしがそう呟くと、カルガモさんがさつと立ち上がって言います。

「私、ちよつと見てきますねー。そのおふたりでしたら、会ったことありますから」

「お願いしても大丈夫ですか……？ 一応、こここの場所はお伝えしてあるので、そこまで迷ったりはしてないと思いますが……」

カルガモさんは「任せて下さい！」と胸をとんと叩いてから、ゆっ

くり飛び立ちました。

彼女の後ろ姿を見送っていると、アラーム音が石窯の方から響きます。時間になったのでしよう。ラッキービーストさんが鳴らしてくれる予定でしたから。

「とつとつ、時間ですね。わたしは作業に戻ります。皆さんゆっくりしててください」

わたしがそう言うと、イエイヌちゃんはぼんと手を叩いて立ち上がります。

「ともえちゃん、まだ、いしがまっつて温かいですか？」

「ええ、暫くは火も残しておくつもりですが……どうかしましたか？」

イエイヌちゃんは「んふふー」と笑みを零して、答えます。

「ハーブティーをみなさんにお出ししようかな、と思ひまして……やかん、借りますね」

「なるほど……じゃあ、それはイエイヌちゃんにおまかせしますね。あ、でも気をつけてくださいよ、やけどしちやいますからね？」

イエイヌちゃんはこくりと頷いてお家の中へと戻っていききました。人数分の用意は大変でしょうけれど、茶葉は数日前に多めに頂いたので、余裕はあるはずです。

……ゴリラさん、わたしと会うといろいろな物をくれるんですけれども、どれも妙に量が多いんですね……。なんででしょう？ そう言えば、お父さんが昔実家に帰った時の話してましたっけ……。『ばあさまはお腹いっぱい以上に食べさせようとする』でしたっけ……。ゴリラさんもそういう気持ちなのでしょうか……？

わたしは立ち上がり、石窯の前にしゃがみ込み、中を覗き込みます。熱された空気がわたしの顔に当たり、今この瞬間にも乾燥させきってしまうのでは無いかと思われました。

意を決して、ミトンを手を嵌めて、鉄板を外に引きずり出します。

「よいしょっ……と……」

熱された薄暗がりから取り出されたクッキーはこんがり焼き上がっていました。

甘い香りを堪能しながら、クッキーの様子を伺います。鉄板の上に

並べられたクッキーは少しだけ膨らんでいるようで、また、蒸気が立ち上っているかのようにはさえ思えました。

「ふんふん……こんなもんですかねえ……」

温度も時間もちょうど良かったのでしよう。ラッキービーストさんの管理のお陰ですね。

「ありがとうございます、ラッキービーストさん。この後も暫く火は入れておくつもりなんですけど……平気ですか……?」

そう尋ねると、折よくイエイヌちゃんが水を入れたヤカンを持ってこちらに到着していました。

「お湯を沸かして、お茶を入れたいんです」

「へイキダヨ。デモ、キヲツケテネ」

イエイヌちゃんとわたしは揃って「ありがとうございます」とお辞儀をします。

その後、わたしは鉄板をそのまま作業台に置いて、熱を取ります。イエイヌちゃんは石窯のてっぺんにヤカンをそつと置きました。

わたしはふうと息を漏らして、眩きます。

「石窯、もうちよつと頑丈にしたほうが良いですかねえ……粘土を隙間に入れたりとか……」

そうは言っても、粘土なんてどこにあるのやら。

わたしのボヤキにイエイヌちゃんが言いました。

「なんて言いましたっけ? ええつと……こん……こん?」

「コンクリートですか? あれは……わたしが使うには難しすぎますねえ……」

イエイヌちゃんはがつくりと肩を落とします。

「そうですかあ……」

「今度また、図書館で色々調べてみようかなーとは思いますが……」

そんな事をのんびりと話しながら粗熱が取れるのを待っていると、

「……ん? おふたりとも到着したんでしようか……? 思ってたよりも早い気も……」

イエイヌちゃんはすすすと鼻を動かしますけれど、クッキーの匂

いが強すぎるのか眉間にシワを寄せます。少し見に行こうと思つて立ち上がると、ちょうどこちらの方にバンドウイルカさんとフォルカさんがやってきました。

「おまたせっ！　こんにちわ、ともえちゃん、イエイヌちゃん！」

「こんにちは。……遅くなってごめんなさいね、ふたりとも。思つてたよりも遠くて、時間かかっちゃったわ」

わたしとイエイヌちゃんは挨拶を返すと、バンドウイルカさんは興味津々という具合にわたし達の背後を覗き込みます。

「ねえともえちゃん、あれがクツキー？」

「そうですよー。今焼き上がったばかりなんで、粗熱を取つてるところです」

そういうと、バンドウイルカさんは「あらー」なんて言いましたが、わたしはどう反応したら良いのかわからず困つてしまいます。

「あ、あはは……まあ、なので、おふたりともちようどいいタイミングでいらつしやっただです。お気になさらないで下さい」

イエイヌちゃんがわたしの言葉を補足するように続けて言います。

「おふたりとも、あっちの席で待つて下さい！　私もお茶を用意しますのー！」

わたし達の言葉を聞いて、フォルカさんがバンドウイルカさんの袖をくいと引いて言います。

「ほら、ドルカ、行くわよ。ふたりの邪魔しちや、申し訳ないじゃない」

「うーん……それもそっか。じゃあお先に失礼するねー待つてるよー」

彼女達が席に戻つてからまもなく、ヤカンのお湯が沸きました。イエイヌちゃんはヤカンをそっと火元から離して小走りでお家に戻ります。ポットと茶葉、カップを取りに戻ったのでしよう。そう言えば、ティーカップは人数分ありましたっけ……？

わたしはイエイヌちゃんが物を取りに戻っている間、鉄板から注意しながら、お皿にクツキーを移していきます。何枚かはこの後ひとりですらっしやるらしいアムールトラさんの為に取っておくとして……。それでもだいたい余裕をもって作ったからか、用意していたお皿

に山盛りになってしまいました。

「わぁお……やりすぎですね、これは……」

思わずわたしがそう呟いてしまう程度には、山盛りでした。

落としてしまうのも困るので、一旦、戻します。おかわりというところで都度都度運べば大丈夫でしょう、きつと。数が足りなくなったりした時は……連絡が付かなかった方には申し訳ないですけど、また今度作ってお渡しするということ……。

「……ともえちゃん」

いつの間にやら戻っていたイエイヌちゃんがわたしに残念そうに声をかけます。

「ど、どうしました？」

「コップが、足りなかったです……」

やっぱり……。

「順番に飲んでもらうってことにします……?」

「それしか、無いですよねえ……」

バツが付いた、と言わんばかりにがつくりとしているイエイヌちゃんの肩をわたしはそつと手を添えます。

「大丈夫ですよ、皆さん喜んでくれますって」

イエイヌちゃんは項垂れたままですが、ゆっくりと頷きました。

「わたしは先にお皿持ってつちやいますね」

わたしはそう言って、お皿を運びます。

テーブルでは皆さん思い思いにお話に興じていたようですけれども、わたしの姿が見えるや否や、話を止めて、じっとお皿に乗ったクッキーを見つめていました。

「おまたせしましたー、クッキーです。おかわりもありますし、順番でイエイヌちゃんがハーブティーを作ってくれるそうですよー」

そう言って、テーブルにお皿を置きます。すると、「おお……」ですとか「これが……」ですとか、感嘆の聲がひそひそと、けれど確かに耳に届きます。コヨーテさんなんかは鼻を動かして甘い香りを堪能しているようでした。

「食べちゃって平気ですよ? わたしはイエイヌちゃんのお手伝い

もありますし」

わたしの言葉にコヨーテさんが答えます。

「いや、お前達を待つのが礼儀ってヤツだな」

「コヨーテさんの言葉にカルガモさんとフォルカさんが頷きます。

「そうですそうです。みんな揃っていただきます、ですよー」

「そうよ、これだけ揃ってるんだもの、一緒に食べなきゃ損じゃない？」

そんな彼女達の言葉を受けて、申し訳ないやらありがたいやらという気持ちです。

「お気遣いありがとうございます、皆さん。でしたら……多分もう少しでハーブティーも出来ますので、もうちょつとだけ、失礼しますね」
わたしはペこりとお辞儀して、イエイヌちゃんのお手伝いに向かいました。

そして、紅茶を順番にお出ししながら、わいわいがやがやとしたお茶会が始まりました。

みなさんおしゃべりをしたり、ハーブティーを堪能したり、クツキーをもぐもぐしたりと思いいいに過ごしています。わたしはお茶に口を付けたり、クツキーも味見程度で済ませてしまいましたが、皆さんが楽しそうに過ごしている様子を眺めているだけで、どこか満ち足りたような気持ちになります。

イエイヌちゃんも、どこか満足そうに皆さんを眺めていて、こういった会を主催した満足感の様なものに浸っているようでした。

「……嬉しいですね、自分の作ったものを楽しそうに食べてくれるって」

わたしは小さな声で、隣のイエイヌちゃんにそう伝えます。

彼女は小さく頷きます。そして、クツキーを一枚とって、食べました。

「美味しいです、ともえちゃん……」

しみじみとした風に言ったイエイヌちゃんの様子を見て、ドードーさんの事を思い出しました。

「ドードーさん」

ドードーさんは一枚一枚を丁寧に、ゆつくりと口に入れて、瞳を閉じて、飲み込んで……何も知らない方からしてみれば大仰に過ぎる仕事をしています。

「……なあに?」

「美味しいですか?」

「うん……! 本当に、本当にありがとうねえ、ともえちゃん……!」

彼女は一息おいて、わたしの顔を見つめながら続けます。

「懐かしい味でね、優しい味なの。うん、美味しいよお……」

今にも泣き出してしまいそうな笑顔で、彼女は言いました。

「なら、良かったです。また今度、作ったらお伝えしますね」

ドードーさんは「うん!」と頷いて、ハーブティーを一口含みます。

イエネコさんはお茶をふうふうと息をかけて冷ましていたのですが、それを止めて、わたしに尋ねます。

「ねえ、ともえちゃん。他に何か作れるの? そのう……おんなじ様なのかな?」

わたしは少しだけ考えてから、イエネコさんに答えます。

「ん……材料とレシピがあれば、なんとか。例えば今回と同じ様な材料と——」

ふとドードーさんが持つてきてくれたリンゴの存在を思い出しました。

「そうですね、リンゴがあれば、アップルパイとか作れるか、も……お?」

わたしの言葉の途中で、具体的には『アップルパイ』と言った瞬間に、わたし達の背後でとさりとと言う着地音がしました。

「アップルパイがあるのね!」

わたし達は驚きと共に背後を振り向くと、そこにはハクトウワシさんが居ました。それもかなりカッコいい(かもしれない)着地ポーズから顔だけこちらに向けて。

「いいわよねえ、アップルパイ。素敵な響きだわ……こきよーのりよーり。そーるふーど……!」

わたし達は啞然として居たのですけれど、ハクトウワシさんはスタ

スタと歩いてテーブルを覗き込みます。

「……な！」

彼女はそう呟いて、我に返った様にきよろきよると周囲を見回します。

「邪魔しちゃったみたいね、ごめんなさい……失礼するわね……」

そして彼女は飛び去っていきました。

数秒の後、わたしはゆっくり呟きます。

「せめて一枚くらいは食べていつてくれても……」

ロードランナーさんがぼそりと言いました。

「アイツ……あんなにヘンなヤツだったっけ……?」

コヨーテさんが困ったような、けれど茶化すような、そんな具合でロードランナーさんに返します。

「今までで一番変だったぞ……? いつもはあそこまでじゃなかった気がするが……」

わたし達は暫く、空を飛ぶハクトウワシさんの背中を見つめていました。

見えなくなつた頃、イエネコさんが「あ！」と大きな声を出しました。彼女の視線の先にはイリオモテヤマネコさんの姿がありました。

「……おはようございます」

そう言つて彼女はペこりとお辞儀をしました。

「もう、リオちゃんったら、遅いよお」

イエネコさんがリオさんに駆け寄つて、彼女の手を引きます。

「ご……いえ、おはようございます、リオさん」

リオさんはイエネコさんに手を引かれながらも言葉を続けます。

「今日は、ふああ……、おまねきいただききよーえつしごくです……」

もにゆもにゆと言う具合で言い終わると、彼女は空いている椅子に座りました。イエネコさんは自分が確保していたクツキーの何枚かを薦めます。

「ありがとうね、イエネコちゃん。いただきます……」

ひと口食べたならそのまま何も言わずにぱくぱくとすべて平らげから、「んぷー」と満足そうな鼻息を漏らします。

「美味しいですね、これ。まだありますか？」

わたしの顔をじつと見つめての言葉に、わたしはたじろいでしまいます。彼女の表情は見たことも無いような笑顔でしたので……可愛らしさに胸を打たれてしまったのです。

「あ、ま、まあ……おかわり持つてきますね」

わたしがそう言うて立ち上がると、イエイヌちゃんも一緒に立ち上がります。

「私も次のハーブティー用意しますね！ 失礼します」

そんな風にして、その日の夕暮れまでお茶会は続けました。最後の方はクッキーもお茶もなくなってしまうましたが、みんなでお話をして楽しく過ごしたのでした。

空が茜色に染まる頃、ナワバリから距離のある方々は帰宅の道につきことになりました。バンドウイルカさんとフォルカさんは二日ほどかけて帰ることになるかもしれないとのこと。泊まっていけばよいのにとお伝えしましたが、マイルカさんが他の島へと遊びに行っているようで、彼女の帰宅を待ちたいということでした。

そんな訳で、護衛も兼ねてコヨーテさんとロードランナーさんが一緒に送り届けることに決まりました。

「今日は楽しかったよ。ありがとうな、ともえ」

コヨーテさんが夕焼け空に髪を煌めかせながら言います。

「わたしも楽しかったです。今日は来てくれてありがとうございました」

考えてみれば皆さんそれぞれに遠い場所から来てくれたのは確か。わたしが呼びびして、来てくれたのだということだけでも本当にありがたいですし、こうして直接楽しかったと言ってもらえることのなんと嬉しいことか。

「本当は片付けも手伝いたいところなのだけど……ごめんなさいね」
フォルカさんが申し訳無さそうに言いました。

「いえいえ、お気になさらず。やりたくてやったんですもの。その後のことも自分でやりますとも」

「私も居ますのでー」

イエイヌちゃんがあえへんと胸を張るようにして付け加えます。

「じゃあ安心だあ」

微笑を浮かべてバンドウイルカさんが言いました。

「ですので、お気になさらず……。今度また、海の方にも遊びに行きますので、その時はよろしくおねがいますね」

わたしがそうおふたりに言うのと、「もちろん！」と元気よく揃ったおふたりが返事をしてくれました。そんな様子を見ていたのか、ロードランナーさんが口を開きます。

「サバンナにも来いよなー。あ、あと、今度どっか行くときはあたしも誘ってくれても良いんだぞ？」

彼女の言葉の後半の方はそっぽを向きながらでした。照れ隠しでしょう。

わたしはイエイヌちゃんと顔を見合わせます。結構、わたし達、彼女に気に入られてるんでしょうか？

「でしたら、その時はよろしくおねがいますね」

わたしの言葉にイエイヌちゃんが楽しげに付け加えます。

「です！ ロードランナーさんだって、みなさんだって、遠慮なく遊びに来て下さいね！」

皆さんめいめいにわたし達の言葉に同意しました。

「じゃあ帰るか、今日はホント、ありがとうな」

コヨーテさんの言葉に従うように、ロードランナーさん、バンドウイルカさん、フォルカさんは帰っていききました。

そうしてしばらくすると、夕焼け空は段々と董色に染まっていきます。そんな空の下、残ってくれていた皆さんと一緒に片付けを進めていましたが、皆様のお陰で予定よりも早く片付けが終わりました。

「ひと息ついたら、私達も帰りましょうか」

カルガモさんがロバさん、イエネコさん、リオさん、ドードーさんに声をかけます。

「もう少しゆっくりしても平気ですよ？」

寂しさからわたしは彼女達にそう言いました。

「んーそうだねえ、夜になっちゃうしい……」

ドードーさんの言葉を受けて、ペこりとロバさんがお辞儀を言いました。

「ですね、今日は楽しかったです。ありがとうございます」

そんな言葉を聞いたか聞いてないか知りませんが、イエネコさんがあくびをひとつ漏らします。

「わたしは眠くなってきちゃった……ふわあ……」

イエネコさんのあくびに釣られてリオさんもあくびをひとつ。

「ふあ……ん、美味しかったです……今度も楽しみにしてますねえ」

皆さんそれぞれに疲労の色や満足げな表情を浮かべています。リオさんは……寝過ぎじゃないですかね、なんて思いますけど、それはそれとして……。

「そうですね……わかりました。みなさんのお陰で楽しかったです、来てくれてありがとうございます！」

その後、わたしとイエイヌちゃんは皆さんを見送りました。

空は夜闇に濡れていて、星々の煌めきと月光とが部屋に差し込んでいました。すっかりと静けさを取り戻してしまつたお家で、ふたりつきり。今日一日ずっとどなたかといましたから、ぼんやりとした寂しさをどうしても感じてしまいます。アムールトラさんにクツキーをお渡しするのも済んだ為に、もう今日はふたりつきりで過ごすこととなつていきます。

彼女は今日の余韻を楽しんでいるかのように、瞳を閉じてベッドに丸くなっていました。尻尾がゆっくりと大きく振られていましたので、眠つてはいなさそうです。

わたしはそんな彼女の隣に腰掛けて、彼女の頭にそつと触れながら言います。

「イエイヌちゃん、今日はお手伝い、ありがとうございます」

イエイヌちゃんは瞳を閉じたまま、満足げに「ふふーん」と鼻息を漏らしてから、口を開きます。

「ともえちゃんこそ、クツキー作ってくださつて、ありがとうございます」

満足感にも似た感情がわたし達の中に漂います。

「ああ、そうです。今度、ちよつと遠出しようと思つてます。山の方ですかね……」

イエイヌちゃんは身体を起こして、わたしの顔を見ます。

「牛乳のお礼でしたっけ？ 場所わかつたんですか？」

「はい。コヨーテさんに教えてもらいました。……ここからだと思えないらしいんですけど、ゴリラさんのお家に行く道あるじゃないですか。あっちの方はずつと行つてから山に登つて少しするといらっしゃるらしいです」

わたしは過去も含めてその場所には行つたことがないのですけれど、確かあの辺りは牧草地とかなんとかつて教えてもらった記憶もあります。詳しい話はまた、おいおい考えていけば良いでしょう。

イエイヌちゃんは「ふんふん」と頷きます。

「お名前は……確かフリーシアンさんでしたかね。クツキーの材料はまだ残つてますし、また新しく作つてからお届けしようかな、つて思ひまして……」

「わかりました！」

イエイヌちゃんは久しぶりの遠出に瞳を輝かせます。

「その時は一緒に、お願いしますね」

元氣よく彼女は頷いて、答えます。

「はい！」

その後は、普段どおり食事をして、お風呂に入つて、髪が乾いたら歯を磨いて眠りにつく。そんな一日でした。

ベッドに入つて、ぼんやりと考え事をしていると、隣からイエイヌちゃんの寝息が聞こえます。彼女の生命の音は、なんとも愛おしく、ふわりと香る彼女の匂いもあつてか、どんどんと眠気が増していくようにさえ思われました。

けれども、頭の中には考え事で一杯。数日以内に山に行くのは決定として……その次にしたいことについて色々と思いを馳せてしまいます。

畑に集中するのも良いかも知れません。種も撒いていないのに収穫の心配をするというのはいささか気が早いですけれど、耕したばかり

りの畑を改良したり、農業の知識を得たりする必要があるのは事実です。

はたまた、温泉を目的地として出かけるというのも魅力的です。結局、今の今までいけてませんからね。普段と違うところでイエイヌちゃんとのんびり過ごすと考えると思わずニヤニヤしてしまいます。それに、温泉であればロードランナーさんをお誘いすることもできそうです。山の方は気温が低いこともあって、彼女には大変でしょうから、今回はお話ししなかつたのですが……そればかりでは何とも申し訳ない気持ちが出てしまいますからね。その為にも温泉の場所はどなたかに伺いませんと。

そう言った細々とした思いの一方で、大きな問題が依然としてこのパークには残っています。それはこの島の天候についての問題です。わたしが『行く』ことはその場しのぎに過ぎません。今回はなんとかになりました。運良く、期間も短く、後遺症も無く解決しました。けれど次は？ そのまた次は……？ この問題にいつかわたしは真剣に取り組まねばなりません。例えば、わたしがパークから居なくなってしまうような自体が起こった時はどうなるのでしょうか。あまりにも不吉な想像です……けれど、どうしても考えてしまいます。誰かを犠牲に島を守るなんていうことは、繰り返してはいけません。この問題をどうにか解決すること、それがわたしの『すべきこと』なのかも……なんて考えてしまいます。

「……考えすぎですかね」

ぼそりと小さく呟いて、瞳を閉じます。

そう言えば、他の島に『ヒト』が居たという話をマイルカさんがしてましたっけ。噂話、とマイルカさんは言っていましたから、事実かどうかはわかりませんが……もしかしたら、その方と会って話をしたら、この島の問題の解決に繋がる可能性だってありますからね。やることもやりたいことも、山積みには思えました。けれど、やれることをやるだけです。

おやすみなさい、イエイヌちゃん。口だけ動かして、呟いて、意識を深いところへと沈めていきます。

微睡みに溶けつつある思考で、ぼんやりと思いました。

変わらないわけでも無く、変わるわけでもなく、ただある世界。そんな中に、わたしと、イエイ又ちゃんが一緒にいられることの奇跡、あるいは、喜び。これから先、ずっと一緒に居られるのかと言うと、確信はありません。

けれど、きつと隣に彼女は居るでしょう。きつと、わたしもそれを望むでしょう。きつと彼女もそれを望むでしょう。時には喧嘩もするかもしれませんが。時には泣いたりするかもしれませんが。それでも、絶対に、一緒にいることを望むと思います。そうして生きて行く。

それがわたしの物語……いいえ、わたしとイエイ又ちゃんの物語です。明日も、明後日も、その先もずっと、ずっと続いていく。そう思っています。いいえ、そう信じています。

夜闇に沈んだ森をアムールトラは歩いていった。木々の隙間から、星の光が差し込む。空は黒い天幕に穴を開けた様に鈍色の輝きを満たしている。

彼女はともえからクッキーを受け取り、縄張りに隠した後、日課の夜の見回りと散歩の為に縄張りから再び離れていた。そんな自らに課した任務の最中、彼女は立ち止まり、空を見上げる。周囲には誰もおらず、ただただ木々と岩とが乱雑に散らばるばかりであった。

「……良い夜だ」

アムールトラはぼそりと呟く。誰に聞いてもらうでも無い独り言だったが、以前までの彼女であれば無駄だと断じていただろう。彼女は無駄を嫌い、効率を求める性格では無かったが、独り言を漏らすという事は自らの気配を周囲に振りまくのと同じであると考えていた。

「ふん」

喜びと呆れの混じった独り言を、つい、呟く。

彼女の性格は甘くなった。それはあるいは油断だと取れるかもしれない。けれど、彼女自身はそんな変化を疎ましくすら思っていない。ともえやイエイヌとの交流に端を発して、彼女の交友関係はいくらか広くなった。以前までならばゴリラと、必要に応じてココロテと話すくらいだったが、ともえのお見舞いの際に出会ったドードーのお陰か、ゆつくりとはあるが、他のフレンズと話す機会が増えていった。

月に雲が重なり、辺りが瞬時に暗くなる。アムールトラは、興奮ざめしたと言わんばかりに、視線を空から前に戻した。

その時、唐突に後ろから声が聞こえる。

「ね、綺麗な空だよー」

一切の気配を感じさせなかったその声に、アムールトラは振替り、構える。攻撃の意思を感じさせなかったのは確かだが、未知の気配に変わりはなく、そして、同時に、アムールトラの警戒をさえすり抜けていた事の異様さに、彼女は瞬時に気付いていた。

「……誰だ？」

くすくすと笑いを我慢できないような、茶化すような声色だった。

「やだなあ、怖いよおー」

警戒を解かずにアムールトラは陰を見つめ続ける。声の出どころは岩の上で、何かが腰掛けていているということだけが、暗闇の中、おぼろげに掴めた事実だった。

雲が流れ、月光が再び辺りを照らす。暗がりから現れたのは、青空だった。

夜闇にぼつかりと穴が開いているような、青色。銀色の月光を受けて尚、強い、吸い込まれるような青空。その青空の上に、サファイアハットがひとつ被さっていた。ハットには羽根が飾られていないものの、デザインとしてはともえの物に似通っていた。

じつと構えて観察している内にアムールトラは気付いた。目の前のそれがフレンズかヒトかはわからないにせよ、自分たちと同じ形をしている存在であり、ソレが自分に背中を向けて、岩の上に腰掛けているのだということ。

「ねえ、襲ったりしないよ？ 安心してったらあ」

違和感を覚えんばかりの鼻にかかった声ではあったが、敵意は感じられない。そう考えたアムールトラは姿勢を崩す。しかし、アムールトラは神経を張り詰めたままだった。それは、その青い存在が攻撃をしてこようなものならば回避し、反撃できるようにするため。

「……お前は誰だ、と言っている」

ソレはアムールトラが姿勢を崩したことを知ってか、ゆっくりとアムールトラの方を向く。

ソレは少女だった。長い髪の毛をふたつのお下げにしている、前髪は左目を隠すように垂らされていた。異様なのはその髪色。透き通るような青空の色。また、しっかりとアムールトラを見据えるソレの右目はぽっかりと穴が空いたような、宝石のように真つ青な——けれど光は決して通さない——ものだった。彼女が身にまとうセーラー服の様な衣装は藍の差し色が鮮やかであることや、小さな体軀にはやや大きいサイズであったが為に可愛らしくさえあったが、アムールトラからしてみれば彼女の姿はレンズでは無いという事を証明する事実以外の何物でもなかった。

彼女は黒い手袋を嵌めた手を顎にあて、考え込む。

「んー誰……誰ねえー……んー」

彼女は視線だけを動かして、下を見る。

「何だ、名前がわからないのか？」

アムールトラは警戒を完全に解いていた。眼の前に居る存在は未知であることも、敵か味方かさえ不明であることも理解していたが、力に於いては完全に御せるといふ判断のためであった。

「あつ、そうだ！」

彼女は、そう言つて手をぱちんと大仰に叩く。まるで何かに気付いたかのようだった。

「私はねえ、るり。そう、るりって言うの。よろしくね、アムールトラちゃん」

茶化すような、戯けるような、そんな声色だった。

後日談2

夏の終わり頃のある晩。

狂乱が、ともえとイエイヌの家に訪れていた。

「お、おい……ともえも、イエイヌも……大丈夫か……？」

アムールトラの眼前には、奇妙な光景が広がっている。

「わ、わた、わたああああ——ううう……ふええ、ひつく、ぐす……いえいぬぢやああ……」

嗚咽を漏らして泣き叫ぶともえ。彼女はイエイヌの胸に顔をうずめて只管に顔をぐしぐしとこすり付けていた。

「うふふ、んふー、んふふうー。かわいい、かわいいですう……ないてもともえちゃんすきいー。わふうー」

上機嫌でにたにた笑って——時折けらけらと笑い声を漏らして——いるイエイヌ。彼女はと言えば、心底嬉しそうにともえの頭を撫で回し、時折、頭皮の匂いを嗅いで小さく吐息を漏らしている。

「いや、あの、あの、あのさ、だ、大丈夫か……？ ホント……」

それを柄にもなくとりなそうとしているアムールトラ。ともえを止めれば良いのか、それともイエイヌにもつと真面目にするように言えば良いのか……悩んでいると腕をくいと引かれる。

「あーたしー！ わーすーれーてーるーうーうー！」

丸っこい声が耳に打ち込まれる。少し調子が外れているだけに、なおさらかましい。アムールトラはドードーの朱に染まった頬と樂しげな垂れ目を見て俄に絶望にも似た表情を浮かべて隣を見る。

「ドードー……お前もか……」

知らず、偉人の言葉を借りていた彼女は眉間にシワを寄せて瞳を閉じた。

「あむうるとらちゃん！」

ドードーは立ち上がり、アムールトラを見据える。腰に手を当てて、じつくりとお説教でもしようかという具合に威圧感を漂わせている。……彼女の身体は小さく、それでも背筋を伸ばしたアムールトラよりも少し背が高い程度で、威圧感というよりも背伸び感を感じる

が。

「あのねえ」

語尾で何故か音が上がる。それも必要以上に。調子が完全に狂っていた。

「おはなしがあ、ありますうー」

呂律の回らない言葉は、可愛らしくも面倒そうな雰囲気纏っている。

「お、おう……」

「おはなし、するのにそっぽむいてちゃあー、めっ!」

アムールトラは抗う気力も無い。素直にドードーの言葉に応じ、身体を向き直す。

「……話って?」

一応、ドードーの言葉を促すが――

「お、おい、座ったほうが良いんじゃないか?」

ドードーは頭を小さく左右に揺らして、心地よさげに微笑んでいた。

「うん」

先程までの意固地な雰囲気が一瞬でかき消えるほどの素直さに、アムールトラは「ええ……」と内心呟いてしまう。

そのまま沈黙が数秒続く。

アムールトラは周囲をきよろきよろと警戒しつつも話があると聞いたドードーを見つめていた。そのドードーは目を閉じてともえとイエイヌのやり取りに耳を傾けている。ゆらゆらと揺れる頭は、喧騒に揺蕩う船のようだった。

「いや、ドードー」

しびれを切らしたアムールトラがドードーの肩をそつと掴む。その暖かさは常とは違うものだったが、それ以上の違和感が立ち込める部屋の中ではそれに気付くことさえ難しい。

「話って、何なんだ……?」

ドードーは身体をぴくりと動かす。

「そだったあ。あのねえ……んー……」

ドードーは唇をつんと上向きに尖らせて、考え込む。
が――

「やっぱいいやあ」

「ええ……」

今度は本当に口から出た。

「それよりもねえ……そおだあ！ ひざまくらあ！」

大発見をしたかのように瞳を輝かせながら身体を前のめりにするドードーを断ることは、アムールトラには出来なかった。

「……か、構わんが」

アムールトラの耳にイエイヌの「それですう！ ふつう！」というテンションの高すぎる声が聞こえた。が、アムールトラはその言葉を聞こえなかったことにして、ドードーの顔を見る。

「ど、どうぞぞ？」

アムールトラはそう言ってスカートの裾を整える。彼女の太ももにこてんとドードーは頭を乗せられた。

「これで良いのか？」

ドードーは上機嫌に「んー」と音を発し、彼女の脚を撫でる。

「すべすべえー」

反応に困るアムールトラの耳にともえとイエイヌのやり取りが聞こえた。

「ねーませえんー！ ぐすつ、ひつく……うう……」

「わふう」

否定とも肯定とも、相槌とも取れないイエイヌの発言にアムールトラは思わず首を傾げる。

「それよりもですよお！ わたしの身体……どうして……せーちよー、おそ……ふええええ――」

ともえがまた泣き出したが、アムールトラは瞳を閉じて、眉間にシワを寄せるばかりだった。

「だいじょーぶですよお、私はともえちゃんのこと大好きですからー」

それは励ましなのか？ とはアムールトラは言えなかった。完全にふたりの世界になっていた。

「あー」

ドードーが急に声を上げる。

「どうした?」

アムールトラの言葉を無視して、急にドードーは身体を起こした。アムールトラは驚きこそしたが、どちらかと言えば疑問の気持ちが大きく、黙ってドードーの言葉を待つ。

「これじゃあ、のめないねえー」

そう言っただードーはグラスに注がれた琥珀色の液体をこくりと飲んだ。

ぽふうと満足そうに甘く香る吐息を漏らすドードー。その隣に座るアムールトラは肩を落として、ため息を漏らす。

「……俺は……どうすれば……」

小さく呟いた彼女の声は、ともえの泣き声とイエイヌの笑い声に消されて行く。そんな中をマイペースにのらりくらりとドードーが揺蕩う。そんな夜。

事の始まりは、一ヶ月ほど前に遡る。

梅雨の終わり頃のことです。その日はじめじめとはしていましたが、碧空の色濃さや時折吹く風が心地よいですし、空に翳りもありません。蒼天と言うにふさわしい、夏の入り口。

そんな日に、ドードーさんがわたし達のお家に訪ねてきました。

「ともえちゃん、こんにちわあー」

「こんにちは、ドードーさん。どうしたんですか?」

今日は特別暑く、わざわざ出歩くフレンズさんも少ないでしょうに、何か用事でもあるのでしょうか?」

「えへへえ、これ、プレゼント!」

ドードーさんは上着のポケットをがさごそと弄り、ひとつの包みを取り出します。彼女の手に乗まるほどの小ささで、濃い紫色をしています。

「そんなわざわざ……ありがとうございます。お返しとか……ええつと……」

考え込み始めたわたしを静止する様に、ドードーさんが言います。「ううん。この前のクツキーのおかえしだから、気にしないでえ」

「そうですか……でしたら、ありがとうございますね」

ドードーさんは微笑んで「うん！」と頷きます。

「つと、中に入りましょうか。外だと暑いですし、わたしは、手を洗いませんと」

畑仕事を終えたばかりのわたしの手を彼女にひらひらと見せます。すると、ドードーさんはどこか感心したように頷きます。

「クツキーのそぎい、だっけえ？ 出来ると良いねえ……」

「ええ、皆さんに迷惑かけないで、でも好きなことしたいって思ったら、頑張るしかありませんもの」

ドードーさんはくすりと微笑みました。

「ともえちゃんなら、大丈夫だと思うよお。頑張ってるしねえ」

「ありがとうございます……さて、と。おまたせしました」

わたしは足元に積まれた草の山を端の方へと寄せて、お家へと入りました。

「おじやまします」

ドードーさんの声に、イエイヌちゃんが驚いたような声を出します。

「ドードーさんじゃないですか！ ようこそですー！」

彼女は絵本を読む手を止めて、とてとてとドアのところへ。

「この前のお返しにプレゼント持ってきてくれたんですって」

わたしの言葉に、イエイヌちゃんは「ほほお」とひと言。

「よかったですね！ ともえちゃん！」

わたしはイエイヌちゃんに頷きます。

「お返し目的じゃなかったんですけどね……でも、やっぱりそういうのって嬉しいですから、本当にありがとうございます、ドードーさん」

ドードーさんは手をぱたぱたさせました。

「ううん、大したものじゃないからあ、えへへ、そう言ってもらえると

嬉しいよおー」

彼女の手に動きにあわせてひらひら動く包みを凝視して、イエイヌちゃんが尋ねます。

「……それって、何なんですか……？ 見たこと無い文字が書いてありますけど……」

ドードーさんは手を止めて、わたしに包みを渡します。

「んーとねえ、ゴリラちゃんが言うには、こーぼってことらしいけど……わたしにはわからないんだあ……」

受け取った包みは中にほんの数グラムほどの粉が入っているようです。表面を見てみると、アルファベットで色々と書いてありますが、その意味をわたしでは読み取れません。ひっくり返して裏面には日本語の書かれた箇所が……。

「ええつと……ワイン酵母……？」

うーん……？

「わかるう？」

イエイヌちゃんもきよとんとした表情ですし、わたしもなんだかよくわからないですし……。

「えーつと……うーん……あー！」

足りない知識を総動員して必死に考える内に、ひとつの答えが浮かびます。

「パン！ パンですよー！」

……イエイヌちゃんもドードーさんも揃って首をかしげます。このふたりにそういうことされると可愛くってたまりませんが、そういう話では無く……。

「酵母は……発酵っていう加工があるんです、それをする為に必要なもの……だったはず……」

わたしもなんだか正しいことを言っているかわかりませんが……

「はっこー？ 光るのお……？」

ドードーさんの言葉にイエイヌちゃんがぎよつとした顔を浮かべますが、わたしは首を振って否定します。

「ええつと……わたしも詳しくないんですけど、目に見えないちっちゃな菌が……この場合は酵母ですね……食べ物や素材を変化させてくれるんです。例えば、ええつと、ドードーさんならわかりますかね……？ 納豆とか。ああいう感じに……」

ドードーさんは眉間にシワを寄せて、しつぷい顔を浮かべました。

「あ、あそこまで臭いは強くないと思います。ワインですから、ぶどうっぽい匂いでしようし、それを使ったパンとなれば……そういう香りなのかなーって思いますが……」

ぶどうという言葉にドードーさんの表情は一変します。

「ほんとぉー！ んふふー、あんまり食べたこと無いけど、好きだよおーぶどうー！」

イエイヌちゃんが面白そうに瞳を輝かせて、ドードーさんの顔を見つめます。

「ぶどー……どういうのなんですか……？」

ドードーさんが簡潔にぶどうの味や形、匂いを説明すると、みるみる内に彼女は顔をほころばせていきます。

「わふう……そんなものが……」

わたしは呆れ混じりに乾いた笑い声を漏らしてしまいます。

「あはは……これはぶどうとは違うので、結構違う味とか匂いになりそうですけど……」

「でももおー！」

ドードーさんがきらきらした瞳をわたしに向けます。

「普段と違うものとか作れたり、食べられるってことだよねっ!？」

ほわほわと期待に胸膨らませた言葉でした。

「うーん……」

わたしは腕を組んで考えます。プレッシャーもありますが、それよりも出来るかどうか、です。

「断言は出来ませんが……でも色々方法はありそうですから、調べてみますね……。あ、ドードーさんもイエイヌちゃんも、もしも完成したら一緒に食べましょう？ 他の方には……多分、秘密の方が良さ

「そうですね……」

今回、作るかもしれないモノは量が少ない酵母を用いるものです。でしたら、酵母を持ってきてくれたドードーさんと、作るわたし、そしてイエイヌちゃんだけの秘密にした方が良さそうです。もしも量が確保出来るなら、隠したりなんてしたくはありませんが……。

「そっかあ……」

ドードーさんが少しだけ悲しげに言葉を漏らします。

「……ドードーさん、どなたかお呼びしたいんですか……?」

イエイヌちゃんの言葉に、ドードーさんは申し訳無さそうに「えへへ……」と声を出します。

「あのねえ、アムールトラちゃんを呼びたかったんだあ。最初からともえちゃんをあてにしているようでごめんねえ……。でも、こういう機会ってあんまりないから、アムールトラちゃんとお話出来たらなあって思ってたのお……」

「アムールトラさんですか……」

そう言えば、セントラルでの一件の恩返しを出来ていないような……。感謝の言葉は以前お伝えしましたけれども……。

「でしたら、アムールトラさんもお呼びしましょう。わたしも、一緒にしたいですから。……でも、それ以上は……足りなくなっちゃうかもです……」

ドードーさんはこくりと頷いて、けれど少しだけ寂しそうな顔を浮かべていました。きつと大勢の方と一緒に楽しめたかったのです。う。

「なんだかごめんなさい……頂いたものなのに、勝手に決めちゃって……」

わたしがそう言うと、ドードーさんは「ううん」と否定しました。

「仕方ないよお。これしか見つからなかったんだし、喧嘩になっちゃう方がもつと嫌だものお」

改めて、わたしは彼女に謝罪の言葉を伝えました。と、ひとつだけ気になったことがあります。

「そういえば、ドードーさん、これはどこで見つけたんですか……?」

「あ！ 確かに……。もしももつと見つかるようでしたら、他の方も呼べますし……」

イエイヌちゃんもぱちりと手を叩いて言いました。

「ゴリラちゃんのお家、だよお。いつもお茶を飲むお部屋の隣のお部屋あ。でもあの時はこれだけしか見つからなかったのお……」

ふむ……。

「でしたら、明日か明後日か……晴れたときに図書館に行って調べてみますね」

と、そんな感じで昼下がりの時間は過ぎていきます。この後はお茶を飲みながら、ゆっくりとイエイヌちゃん、ドードーさんと過ごしました。

さて、次の日。

その日も幸いにして晴れた日和でした。風が少しだけ吹いていて、青空に浮かぶ大きな雲がのんびりと漂うような日。お散歩も兼ねてイエイヌちゃんと一緒に図書館へと出かけました。

「わっふう……。ぱん、でしたっけ……。それっぽい本はいっぱいありますけど……」

イエイヌちゃんは書架に並んだレシピ本を、じいっと見つめていきます。

「……これは……。多すぎてわからないですよねえ……」

高さ二メートル幅四メートルほどの大きな本棚。その一列分を占めるのは『手作りパン』の本ばかり……。こんなに同じ料理のレシピがあるというだけで驚きです。

「んー……。これなんかはドライフルーツなんか使ってるんですねえ……」

適当に手にして開いた本の一ページを指差します。

イエイヌちゃんは興味深げに本を覗き込みました。

「ふむふむ……。ともえちゃん、これ……。材料、大変じゃないですか……？」

「そうなんですよお……。できればラツキービーストさん達の負担にはなりたくないですし……」

その後わたし達はああでもないこうでもないと思ひながら本をぺらぺら捲り……ひとつの答えに至ります。

「——つまり、作れるのはぷれーんのぱんだけ……でしたっけ？」

イエイヌちゃんは腕を組んで呟きます。

「そうですねえ……そうなります。美味しいとは思いますが……ジャパリまんの皮のところだけみたいな感じになっちゃうかもです……」

手作りパンであるならば、そんなに味気ないものとはならないかもしれませんが、けれども、ジャムや中に混ぜ込む食材ですとか、味付けの材料の調達は難しいというのが結論でした。であるならば、物足りなさを覚えてしまったり、そもそも量を作れそうになかったりと、パンを作るにはちよつと難しそうです。

「なので……他に何か作れるか調べたほうが良さそうです。もしかしたらクッキーみたいなお菓子とかも作れるかもですし……」

導き出した結論に落ち込み気味なイエイヌちゃんでしたが、わたしの言葉に少しだけ晴れたような表情を浮かべます。

「でしたら、頑張つて調べませんとね！」

「ですね……！ イエイヌちゃんもお手伝いお願いします！」

イエイヌちゃんは「はい！」と元気よく頷いて、視線を本棚へと向けました。わたしも頑張りませんと……！

それから一時間ほどしても、なかなか良い結果にはめぐりあいません。

「んー……なかなか捗りませんね……」

わたしのぼやきにイエイヌちゃんも「うーん」と唸り声をあげます。「ですねえ……小麦粉を使うのはわかりましたけど……それは今は難しいんですよ？ ともえちゃん」

わたしは頷きます。彼女の言うとおりです。

可能な限り、ラッキービーストさんをお願いして小麦粉をいただくという手段は取りたくありません。パークの裏側……というか見えない場所で動いている機能を使うことはなんだかズルいことをしている気持ちになりますし、何よりもわたしのわがままで彼らの負担を

増やしたりもしたくありません。

「うーん……お家にはもう小麦粉は殆ど残ってませんし……畑が上手いこと実るまでは……難しいかもですね……」

どちらとも無くため息がこぼれました。

「わたしはもうちよつと調べます。イエイヌちゃんはこれが他にあるか探してきてもらってもいいですか？」

わたしはイエイヌちゃんに酵母の袋を見せて、お願いします。

「ぶんたんですね！ わかりました！」

イエイヌちゃんはそう言つて、図書館を出ます。酵母がもうちよつと見つかるかと嬉しいのですけれども、それ以外でも何か使えそうなものがあれば、ゴリラさんと相談したいところです。

そんなことを考えながら、ぼんやりと足だけ動かしていると、レシピの棚とは全然違う難しい棚の前へとわたしは来ていました。

「……ここは……ええつと……っ？」

生物系の本が集まったコーナーのようです。動物や昆虫の図鑑や、動物の歴史や身体の仕組みを漫画で図解してくれる子供向けの書籍……不思議な生き物辞典なんていう本もありました。

「ははあ……なるほど……」

ある程度、子供向けを志向しているのか、わかりやすさを中心に様々な本が並んでいます。

「ここは……違いそうですね……戻りましょ……」

わたしは踵を返し、先程まで居たレシピ本の辺りへと戻ります……と、一冊の本が目に入りました。

『酵母の働き』……？』

生物というには小さすぎる気もしますが、酵母だって要するに『菌』ですから、生き物……。

「ちよつとだけ……見てみますか……」

その本は文字が多く、読むのに少しばかり時間がかかりましたが気になる点が一点。見つけられます。

「お酒……っ？」

ちよつとだけ、イケナイコトの匂いがしてきました。

けれど、好奇心がふつふつと……。ポケットにしまっていた包みを取り出して、眺めると、なんだか奇妙な考えが浮かびました。……もしかして『作れる』？

「ふむ、ほほう……」
読めば読むほど面白い働きをしてくれるんですね……。酵母さん……。

「もしかしたら、お酒づくりの本も……。？」
試しに探してみても……。それから決めましょう。ちよーつと、悪いことしてる気分になりますけど……。

そんな思いを抱きながら、レシピの立ち並ぶ本棚を見つめます。わたしは本棚の最下段にお酒についての本が並ぶ箇所があったことに気付きました。

「こんな所あったんですね……」

カクテル、日本酒、ワイン、ウイスキー……。後はおつまみに関係したものが幾つか……。

「うーん……。なんとも……。そもそもお酒って作ったらダメだったと思いますし……」

そりゃあ無いですよ……。と思った矢先、目当ての本が見つかりました。

「これ……。？ 自家酒造って書いてありますけど、ようするに……。そういう事……。？」

犯罪では……。？ そう思いつつページを捲って行きます。

「へえ……。ジュースとか果汁で作れるんですね……。パークだと難しい……。？ でも、果実はありますし……」

リンゴを使ったシードル。ぶどうを使ったワイン（もどき？）。よくわかりませんが……。洋梨を使ったペリー。バナナを使ったお酒や蜂蜜から作るお酒。はたまた、梅を漬け込むモノやコーヒー豆を漬け込んだモノまで、様々な記事が写真とともに掲載されています。

「色々、あるんですね……」

それぞれのページには作り方を非常にぎつくりと纏めた情報も書いてあったりなどします。もし材料があるならわたしでも作れそう

なくらいです。……情報の末尾には、違法です、と書かれてましたが。「……イエイヌちゃんにも聞いてみましょう。お父さんに怒られちゃいそうですけど、でもちよつと興味が……」

悪い子です、わたし……。お父さん、ごめんなさい……。

けれど、考えてみればわたしの年齢って幾つなんでしょう？ 生きた年数だけなら二十年は経過しちゃったりしてるんですかね……？

ま、身体はすつとんぺったんですけどお……。

見つけた本を鞆にしまつて、上階へ。

以前と変わらず照明が少なく薄暗い建物ですけれども、不思議と以前ほどの不気味さは覚えません。きつと、過去にわたしがここにお世話になっていたということを思い出せた事に加えて、度々ここに来ていふということ、気持ちを整理してくれたのかもしれない。かつてと大きく変わったパークの姿に虚無感を抱くことも、かつて見知った方々が居なくなっている事への寂しさも、殆ど感じなくなりました。慣れた、のかもしれない。受け容れた、のかもしれない。

一番の理由は、きつと、わたしは今も昔もここに居るのだということに気づけたからでしょう。きつと明日も居ます、明後日も、明々後日も、ずつと……。隣にはあの子が居て、皆が居て……。それで十分。もちろん、『外』への興味だってありますけれど、それを望むことは無いでしょう。物理的に不可能だから、というのは理由の一つ。一番は、わたしがここに居たいと、あの子の隣に居たいと、そう願っているのですから。

普段通される、玄関から入つてすぐの部屋へ向かい廊下を歩いていると、別の部屋からイエイヌちゃんとゴリラさんの声が聞こえてきます。

「あの辺にあつたかなー……どうだったかなー……」

「あつちですわね！」

がたん、ごこん。

そんな具合でしたので、思わず扉を開いて中を覗きます。

「……な、何を……？」

振り返つてわたしを見つめるおふたり……。部屋の中は乱雑に物

が置かれており、ちょうどイエイヌちゃんが取り掛かっていたであろう場所はひっくり返った籠やら布切れやらで溢れています。

「ああ、ともえか。調べ物は終わったのか？」

「一段落、つてところですよ……ええつと、これは……？」

イエイヌちゃんがわたしに駆け寄って来ました。

「ゴリラさんに探しものしたいとお願いして入れてもらったんですが……」

イエイヌちゃんの言葉を引き継ぐように、ゴリラさんは肩を竦めました。

「もともと退去のときの物置だったんだよ、ここ。その時以来手つかずでなあ……要不要をわけないで、邪魔になりそうな物を押し込んでたんだ」

少しだけ過去を懐かしむような言葉でした。少しだけくすりという笑いを漏らしたのは、悲しい出来事ではあっても、彼女なりに楽しい思い出があったのからかもしれません。

「なるほど……」

「で、探し物ってなんなんだ？」

彼女は不思議そうに尋ねます。

「あ、そうでしたそうでした。……これです」

わたしは包みをゴリラさんに手渡します。しげしげと眺めた後、彼女はわたしに返しました。

「ワイン酵母、ねえ……多分、これで最後だと思うぞ……島中を探せば酵母自体はあるかもしれないが、これと同じものは無いだろうな……」

わたしもイエイヌちゃんも、肩を落としてしまいました。

「そもそもコレ、この島の物じゃない……と思うぞ？ お前の親父が、トーサカが島の外からつーはん？ したんだったかな……何故か俺に自慢してたのは覚えてる」

わたしかイエイヌちゃんか、それは確かではありませんが「ええ……」という呟きが聞こえました。

「……何やってんですか、お父さん」

「トーサカナあ……アイツ趣味人とか自称してたが、まあ実際に多趣

味だったんだろうな……」

呆れたような声色に、郷愁を思わせるセピア色が混じっています。「そういう話何も聞いてませんけどねえ……あ、でも多趣味は多趣味でしたかね……」

思えば、許可は貰ったと言ってテントを持ち出して林の中に泊まったり、絵を覚えてくれたり、機械いじりをしていたり……

「あー」

お父さんとの日々を思つて、ふと思い出したことがありました。

「時々、美味しそうに何か飲んでたような……」

視界の端に見えるイエイヌちゃんの表情に好奇心の色がさしました。

お前にはまだ早いよ、と言つて飲ませてくれなかったのですけれど、甘い匂いがしたような？

「まあ、何に使つてるのかは知らんが……使い方がわかるならお前が持つべきものだと思うぞ」

ゴリラさんは腰に手をあてて、言います。

「あはは……そういうものですかね……でしたら、遠慮なくいただけさせて貰います……」

「何度も言つてるが、使われないのが一番可哀想だからな。大事にしてやってくれ。……で、他に何か探すものはあるか？ この部屋に何かあるかはわからんが……」

「んーっと……」

イエイヌちゃんの顔をちらりと伺うと、不思議な位楽しそうな表情を浮かべています。

「イエイヌちゃん？ どうかしました？」

「探したもの、楽しくつて、つい……」

えへへと申し訳無さそうに彼女は頭を掻きます。

「でしたら……もう少しだけ探しましょうか？ ゴリラさん、大丈夫ですか？」

ゴリラさんは「構わんよ」と言い、壁に寄りかかります。

「まずは片付けから、ですね……」

わたしは袖まくりをしながら、ひっくり返ったガラクタ（という失礼ですけど）の山を見つめるのでした。

物の山を大雑把に別けて行く内に、イエイヌちゃんが面白そうなのを見つけてます。

「……………これ、なんですか!?!」

イエイヌちゃんがわたし差し出したのはかなり大きなボトルです。未開封のもので、色も透き通った琥珀色です。

「蜂蜜……………だなあ……………」

「蜂蜜……………」

確か、先程の本に…………。

わたしの思いを他所に、ゴリラさんはうんうん唸って誰のものかを思い出そうとしているようです。

「も、もしかして、何かに使えます……………?」

イエイヌちゃんは宝物を見つけたワクワクを抑えられないのか、しっぽを大きく振っていました。

「ちようど、図書館で見つけたレシピで使えるかもです……………問題は食べて平気なのかですけども……………」

どれほどの時間が経過しているのか、結局わたしはわからないままです。ラッキービーストさんに聞いても「シラナイホウガイイヨ」の一点張り。ライセンスを提示しても「ダメ」なんですよ……………。わたしに知識と技術があれば星の巡りから判断したりも出来るかもしれませんが……………。

「あ……………思い出した……………」

わたしとイエイヌちゃんは一齐にゴリラさんの顔を見つめます。

「な、何を期待してるんだ、お前たち……………」

彼女はこほんと咳払いをしてから、ゆっくりと口を開きます。

「……………やっぱり、トーサカだったかなあ……………うん、そんな気がする……………。研究室でにたにた笑って、撫で回したような……………ともえの持つてる酵母をつーはんって言ったろ? それのしばらく後の話だった筈だが……………」

もしかして、お父さん結構悪い事してました……………?

「ええつと……どなたかと勘違いしてたりとか、そもそもこの物つてことは……」

ゴリラさんは悩んだように首をひねりました。

「なんとも言えんなあ……流石に全部覚えてるワケじゃない。ただ、この物つてことは無いと思うぞ。腐らない食い物は大体あつちにあるんだ」

彼女が指差したのは別の部屋の方向でした。恐らく、流し台がある部屋なのでしょう。

「きゅーとーしつ、って言ったかな。だから個人の食い物じゃなければあそこに置かれるんだ。気づいてれば俺も紅茶やコーヒーに使ってるしな。ここにあるつてことは誰かの持ち物だ。まあ、誰にも使われないだろうし、ここ以外でも見つかりそうなシロモノだが……」

わたしはワルイコトと意識してしまい、言葉に詰まります。

「あの、ゴリラさん……。これ、頂いても良いですか……?」

それを察したのか、それとも先程の会話の流れから必要と思ったのか、それは定かではありませんが、イエイヌちゃんがゴリラさんに尋ねました。

「んー……。構わんが……。それは俺も使えるからなあ……」

少しだけ渋るような雰囲気を見せるゴリラさん。それもそうでしょう。甘味となれば少なからず欲望の対象になるものです。

「その……畑の小麦が出来たんですが……それで作ったクッキーに混ぜてお渡しします。それじゃダメ、ですか……?」

わたしがそう言うと、ゴリラさんは「まいったなあ」と頭の後ろに手を組みました。

「お前にそう言われると、やりたくなっちゃうんだから……ズルいぞ?」

「す、すみません……。でもちよつとやってみたいことがあつて……」

ゴリラさんは微笑みながら「ふんふん」と促すように相槌を打ちました。きつと、何をしたいのかを知りたいのでしょうか。

「その……酵母と、蜂蜜で……お酒を……」

わたしの言葉を聞いたゴリラさんは眉間にシワを寄せて、数秒ほど

考え込みます。

「うーん……良いんじゃないか？　ここじゃそういうものも手に入らんからな」

わたしはダメと言われると思っていましたので、きよとんとしてしまいます。

だって、年齢に身体に風紀に……色々問題がありそうじゃないですか。

「へ……？　良いんですか……？」

「良くない。って言っても意味がないからな」

わたしは思わず眉間にシワを寄せて居たようで、ゴリラさんはくすくすと笑ってから自分の眉間をつんつんと突いて茶化しました。

「ここはもうヒトの手に無い。それなのにお前がヒトの法を厳密に守る義理はない。もちろん、何やっても良いわけじゃないのはわかってるだろ？　お前がソレくらい考えられるのは知ってるからな。それに、歳で言うなら俺とお前はどっこいだぞ？」

あ、そう言えば……パークの最年長の方と同じ年か、下手するとわたしの方が年上の可能性までありましたね……。

「それに、酒がどれほど恐ろしいか、お前も身を持って知る良い機会だ。飲みたいんなら、飲んでみろ」

放任、とは少し違う教育方法の様に思われました。

「な、なるほど……あ、そうです、完成したらゴリラさんにお渡し——」
「いや、いい」

驚くほど早い否定の言葉に少しだけびっくりしてしまいます。

「あー……悪い悪い。興味無いワケじゃないんだよ。ただなあ……アレを目にするとなあ……」

不穏な空気が辺りに漂い始めます。

イエイヌちゃんはなんだか怯えたようにわたしの手を握っていますし、ゴリラさんはぞくりと身体を震わせていました。

「な、何が……あつたんですか……？」

ゴリラさんはふつと遠くを見る目に。

「……研究員達が酒を飲む場所にたまたま居させてもらったことが

あつてな——」

曰く、ちよつとした歓迎会だったそうです。新入職員の歓迎会に、互いの紹介とヒトの文化を知るといふ名目でゴリラさんはその場に立ち会った。その宴の場は高揚の頂点に突入した頃、テーブルの上は空になった瓶やら缶やらで溢れていて、ある者はつまらない冗談を繰り返し、ある者は泣き叫び、ある者は笑い狂い、ある者は眠り……混沌の様相を呈していたそうです。

「あの場はどうかしてた……俺は酒を飲ませて貰えなかったが……それで良かったと思つてる……」

一瞬の沈黙の後、イエイヌちゃんが恐る恐る尋ねます。

「そ、それからどうなったんですか……？」

「それから、か……ある奴はしきりにトイレに行っていた。多分、吐いてたんだろうな……恐ろしいぞ、酒は……そのまま流れ解散とか何とか言つてたが、まともだったのは俺だけだ……」

ひえつと恐怖の言葉をイエイヌちゃんが漏らすのが、わかりました。

ゴリラさんがぱちんと手を叩きました。それではつと意識を取り戻したかのように、空気は元に戻ります。

「ま、上手に飲めれば楽しいとはトーサカの言葉だ。作るのも、飲むのも、失敗しても構わん。好きにしろ。が、無茶はするな。それと、完成したらラツキービーストに安全かどうか確認してもらふこと。……最後に、もしも量を安定して作れるようになったら、俺に隠さないこと。一応キケンだからな。いいな？」

わたし達は厳かに頷きます。お酒の持つ力（もはや魔力と言っても過言ではなさそうです）に対して敬意とも恐怖ともつかない、奇妙な感情がわたしに芽生えていました。

「ああ、それと、ここの片付けは頼んだぞ。蜂蜜をやる代わりだ。頼んだぞ」

ゴリラさんはくすりと笑つて、部屋を出ていったのでした。

片付けがひと段落する頃にはもう夕方。わたし達は帰路につくことになりました。

今日は割に暑い日でしたけれども、室内は空調が効いていた事もあつてかそこまで体力は消耗しませんでした。とは言え、です。普段やらないことをいっぺんにやったものですから、わたしもイエイヤちゃんも疲労困憊という具合。

「ふひい……たいへんでしたね……」

イエイヤちゃんがため息まじりに言いました。

夕暮れが彼女の髪の毛を照らして、灰色の髪はどこか茶色がかった不思議な色へと変わっていました。

「ほんとうに……わたしのわがままに付き合わせちゃつてごめんさい、イエイヤちゃん……」

今日の作業であの部屋の半分ほどが片付きました。

物の山を切りわけ、掘り返し、並べ直す。言葉で言うのは簡単ですが、実際に身体を動かすととなると、また違うもの。イエイヤちゃんに手伝ってもらったのはありがたくも申し訳ない話です。

「いえいえ、けっこう楽しかったです！ それに、その、おさけ、ちよつと興味ありますし……」

「あはは、イエイヤちゃんも結構悪い子ですね……」

イエイヤちゃんは「えへへえ」と照れたように笑います。

「成功するかはわかりませんが……それに、まだ作り方も確認してませんから」

わたしは鞆をぼんぼんと叩きます。

「本は見つけたので、それを見て……必要なものをまた見繕わないとですよー」

イエイヤちゃんの瞳に、俄に「やる気」のようなものが煌めきます。単に夕日かもしれないですけどね。

「んふー……いー！ がんばりますー！」

おー！ と彼女は空に手を突き上げます。

「ええ、頑張りませんと……いー！」

ドードーさんたつてのお願いです。それに、アムールトラさんと一緒にゆつくり出来るなら、お話もしたいです。アムールトラさんは、口数は少ないですし、物静かな方ですけど……でも優しい方ですか

ら。きつと、もつと仲良くなれるはず。

「ま、ず、は……つと」

わたしは鞆の中から本を取り出し、目的のページを開いて眺めます。歩きながらなので、ぎっくりとですが……。

「容器……ビンとか、壺とか……？ うん、材料は平気そう……時間はかかるけど……そこまで難しくも……うん、何か……？」

考え事が口から出ていたようで、イエイヌちゃんがくすりと笑います。

「どうしました？」

わたしが聞き返すと、彼女は微笑を浮かべたまま、少しだけ照れて言います。

「やるぞー！ ってなってるともえちゃん、きれいで、つい……えへへ……」

「……そうですか？」

わたしが聞き返すと「ぜったいにそーです！」と彼女は胸を張りました。

わたしは照れ隠しに空を見上げて返します。

「夕日がきれいな、見間違えたんじゃないですか？」

イエイヌちゃんはそつとわたしの腕を抱きしめました。暑いはずなのに、心地良い。

「じゃあ、それでいいですよー」

わたしは小さく笑みを零しながら、本を鞆にしまいます。

「イエイヌちゃんの方が——いえ、なんでも」

足を止めて、そつと彼女の額にキスをしました。ふわりとくすぐる髪の毛に、どこか名残惜しさを抱きます。

「……褒めてくれたお礼です。行きますよ？」

照れ混じりの笑みで、彼女は「はい！」と答えます。

「帰ったら私からもちゅーしますからね」

「その前に……シャワーかお風呂か、ですかね」

汗もかきましたし、ホコリだって付いているでしょうから。

「りよーかい、ですー！」

そんなにかしこまらなくてもいいのになんて、今更ですね。

それから二、三日ほどかけて、わたしは何とか瓶を用意できました。「これでようやく作れますね……」

わたしはお家の流しで大瓶をひとつと小さな瓶とを水で洗い、直射日光に晒して乾燥させ終わったわたしは、それを室内に戻します。

「お疲れさまですー！ セントラルまで行った甲斐がありましたね！」
ゆつくりとわたしは頷きます。

小さい瓶が見つかったのはゴリラさんのお家でした。スイングキヤップのおしゃれなガラス瓶で、恐らく一リットル程度が入ると思われました。本数にすると四本。恐らく、お父さんの使い古しか、使い残しか……そのどちらかでしょう。結局、事ここに至ってわたしはお父さんが自分でお酒を作っていたことを認めざるを得ませんでした。

「……殆どお父さんの残したものですけどね」

イエイヌちゃんは乾いた笑いを漏らします。

「でもまあ、おつきい方を見つけたのはわたしですから」

少しだけ誇らしげに、大瓶を撫でます。あの時行った喫茶店の奥に安置されていました。梅酒用と書かれた紙が中に入っていて、蓋と瓶とがテープでくっついていましたので、未開封なのでしょう。中に入っていた用紙によれば、容量は十リットル。運ぶことの大変さは言うまでもなく、洗うことさえ一苦労でしたが、作る量自体は不満のないところですよ。

窓から差し込む陽光に雫とガラスが煌めきます。それは不思議な位綺麗で、これから作る蜂蜜酒の前途を照らしてくれているように思われました。

「それなら、後は蜂蜜と水と酵母を入れて放っておくだけです……」

イエイヌちゃんは「ほへえ」と相槌らしき声をらします。

「結構簡単なんです……」

「ですねえ……むしろ準備の方が大変だったくらいです」

わたしが呆れ混じりにつぶやくと、小さく彼女は笑いました。

「でも、温度とか色々条件もありますし、放っておくだけと言っても手間はかかりますね、これは……」

大雑把なのでレシピと呼べるかはわかりませんが、作り方はこうです。

第一に綺麗にした瓶を用意する。

第二に瓶に蜂蜜と水と酵母を入れて混ぜる。ここで水と蜂蜜との量を調整して味の濃さや度数の高さを調整できるのでしよう。

第三に発酵が始まり、終わるまで待つ、または終わらせる。この間、発酵でガスが発生することですから、完全密閉はしないこと。また、温度が低いと発酵が起こらなかつたり、時間がかかりすぎる、とのこと……。この点は夏場の今なら気にすることは無いでしょう。

第四に長期間熟成させる。今回はお試しくらいのつもりですので、長期間の熟成をさせるつもりはありません。とは言え、一週間程は置いておきたいところ。ここはもしかしたら他の本を探してみても、決める方が良くかもしれません。

「後は……そうですね、果物とか入れると味も変わるらしいですけど……今は無理ですから」

イエイヌちゃんは少しだけ残念そうな顔を浮かべます。

「りんごとか、ぶどうとか、そういうの入れるんですかね……？ 美味しそうですね……」

「なんというか、名前も変わるらしいですよ？　そこまで詳しくは書いてないですが……。それに、普通のを一回飲んでみて、それから比べるのも面白そうですね……酵母は何回か繰り返し使えるそうですから」

んふふーとイエイヌちゃんが楽しげな声を漏らします。

「でしたら、次が楽しみですよ！」

「……イエイヌちゃん。嫌いな味だったらどうするんですか……？」

わたしの意地悪な言葉に、彼女は「うーん」と考え込みます。

「……その時はその時、ですよ！」

「なるほど、そう来ましたか……。味の方は甘いと思いますけど……」
甘い、という言葉に彼女は笑顔を浮かべます。

「何にしても、楽しみですね、完成。……まずは上手いこと発酵が進んでくれるとありがたいんですけども」

「だいじょーぶです！　ともえちゃん、がんばってましたもの！」

「ありがとうございます、イエイヌちゃん」

そう言つて、わたしは仕込み作業を始めました。

それから更に時間が経つて、もう夏の終り。消え入るような虫の声に、色濃い夕焼けに、長い影が臉に焼き付くようなそんな時間。発酵と熟成と、ラツキービーストさんのチェックと、そういつた過程が全て順調に終わり、今日が蜂蜜酒を飲む日になりました。

わたしは畑を眺めながらドードーさんとアムールトラさんが来るのを待ちます。

「よくもまあ、こんなになつて……」

眼前に広がる小さな畑には、黄金色混じりの緑の海が広がっています。風になびき、頭を揺らし、ざわりざわりと音を立てる畑……。品種が優秀だとか、土地が肥沃であるとか、色々理由はあるんですけど――

「けっこー、やれるもんですね……」

刈り取りと脱穀という問題を考えると、これからの苦労に恐怖を覚えますけれどね……。けれどやりたいことのためにも……

「おまたせえー」

「よう」

いつの間にかやら、おふたりが来ていました。

「おふたりとも、こんばんは」

わたしの返事におふたりが返事をして……。そうしてお家に入ります。

「おじやましまーす」

「邪魔するぞ……」

机にコップとボトルを並べて支度をしていたイエイヌちゃんが楽しげな笑顔を浮かべて玄関に駆け寄りました。

わたしとイエイヌちゃんの勧めに応じる形で、彼女たちは椅子に座

ります。

アムールトラさんは不思議そうに瓶を覗き込みます。瓶の湾曲の為に彼女の瞳が大きくなったり小さくなったりして、少しだけくすりとしてしまいました。

ドードーさんがじいつと琥珀色を見つめてから、わたしの方を向いて尋ねます。

「ともえちゃん、これって……ジュース？ 作るのお菓子だと思ってたよおー」

今まで秘密にしてきただけあって、彼女は驚き混じりの視線でした。

「いえ、お酒です。頂いた酵母と蜂蜜で作ったんですよ」

「おさけえ……へえ……」

ドードーさんは再び視線を瓶へと戻し、しげしげと眺め始めました。

「……これ、飲んで平気なのか……？ 泡とか出てるし、底の白い粉も……」

わたしは申し訳無さから乾いた笑い声を漏らしてしまいます。

「お酒以上の害は無い、そうですけど……心配ですよねえ、すみません……」

イエイヌちゃんはわたしの言葉を継ぐ様に口を開きます。

「味見しましたがけど、美味しいですよ！ 甘くってほわほわして……ともえちゃん、注いじやって良いですか？」

わたしは頷いて促します。すると、イエイヌちゃんが瓶の蓋を外します。スイングキャップがぐるりと回り、金属とガラスのぶつかる軽くて高い音が部屋に響きました。

とくとくとコップに蜂蜜酒が注がれていくと、底から泡がふわふわわりと浮き上がりました。琥珀色の液体は電灯の光を反射し、立ち上る泡沫が川面を思わせるような涼しげな印象です。

イエイヌちゃんが全員分のコップにお酒を注ぎ終わった頃、わたしはゆっくりと口を開きます。

「ええっと、ドードーさんから頂いた酵母で、蜂蜜酒。作ってみました

……お口に合えば幸いですけども……いただきます」
わたしの合図に合わせて、いただきますの声のみつつ、上がりま
した。

これが成り行き。

美味しいの合唱があつて、気分の良くなつたともえが一番最初に
酔つ払つた。泣き上戸だった。イエイヌとドードーはともえが酩酊
し始めるのと同様くらいに気分がよくなってきたようで、ペースが上
がった。その結果、出来上がったのが笑い上戸のイエイヌと、マイ
ペース度合いの増したドードーだった。

最初の数口だけ飲んだアムールトラは「甘すぎる」と感じた為に飲
むペースが遅かった。それが幸いして殆どシラフだったのだが……
それはシラフでありながらも酔つ払い空間に巻き込まれる不幸でも
ある。

アムールトラは小さくため息を漏らし、頬杖をつく。

「んふーんふふー」

イエイヌがコップに口をつけて、蜂蜜酒を飲み干す。

「ともえてやん」

イエイヌがともえの名を呼ぶと、流れる涙をシャツの袖で拭つたと
もえが応じる。

「なんですかあ……?」

「まだ、残ってましたよね……?」

ドードーは「ほんとお!?」と言うと同時に、アムールトラがあまり
飲んでいないことにも気づいた。

「ちよつと待っててくださいね……」

鼻を嚙りながらともえは席を立ち、キッチンに向かう。それを見送
りながら、ドードーはアムールトラに尋ねる。

「あむーるとらちゃん、たのしい?」

アムールトラは呆れ混じりに笑い声を漏らす。

「……まあ、な」

巻き込まれる不幸……そう確かに彼女は感じていたが、それでも尚、アムールトラは不思議と悪い気持ちでは無かった。むしろ心地良ささえ覚えていた。むろん、困りこそするが、周りで誰かが楽しんでいたり、誰かと誰かの話が聞こえたり、雰囲気を楽しむという経験に純粹に喜んでいたので。

「じゃーあ、のもっ?」

酒を飲んだのは初めてなのに、熟練の酔っぱらいさながらの催促だった。

「いや、その……甘くてな……ゆっくり飲ませてもらうよ」

「そつかあ……でもたのしーなら良かったよお……ともえちゃんにもそう言ってあげなねえ。けっこー気にしてるだろおからあ」

ドードーはそう言ってグラスをひと口煽る。漏らす吐息の甘さがアムールトラの鼻をくすぐる。

「あむーるとらさあーん」

キッチンの方から声をかけられる。ともえの声だった。

「どうした? ともえ」

すつと立ち上がって、アムールトラはキッチンへと向かう。

「てつらつて貰っても良いですかあー?」

覚束ない足取りで、彼女は大瓶を抱え込もうとしていた。

「俺が持っていくよ。お前じゃ、危なっかしい」

しまった、とアムールトラは直感した。何かと泣きっぱなしなどにもえには、こういう言葉は禁句なのではないかと感じたのだ。

「えへー、ありがとうねえ、前も、今日も、ほんとうに、ありがとうねえ」

ともえはアムールトラの意に反して、笑みを浮かべて彼女の手を取った。

「おかげさまで、こうしてらえるんです。ほんとうに、ありがとうございます」

ともえはそう言ってふらりと身体が揺れたが、それをアムールトラが支えた。

「お見舞いの時も言ったが、俺は何もしてない。頑張ったのはお前さ。今日も、前も」

彼女はそう言つて、ともえの頭を撫でようとする。が、ともえが瞳に涙を貯め始めたのを見て、やつべと口に出しそうになっていた。

「な、なんか言つたか？ す、すまん……」

びよええともえは泣き出す。それを聞き取ったのか、イエイヌが駆け寄る。

「と、ともえちゃん？ だいじょーぶですかあ!？」

慌てた様子でイエイヌはともえの頭を抱き込み、そつと髪を撫でる。

「がんば——がんばったねって、いわれ、……うれし……ぶえええ——」

アムールトラもイエイヌも困惑していた。褒めて泣かれるほど、困ることも無いだろう。

「ともえちゃん、いつだって頑張ってるじゃないですかあ、いいこいいこ。……あつち戻りましょう?」

イエイヌの言葉にともえはこくりと頷いて、居間へと歩きだす。そんなともえの肩をそつと支えるイエイヌ。ふたりの姿に、アムールトラは「伊達に一緒に居ないんだなあ」とぼんやりと思った。

イエイヌは振り返つてアムールトラに言う。

「アムールトラさん、すみません、大瓶とそこの掬うやつを……お願いします」

「お、おう」

やや気圧されながらも、返事をし、アムールトラは大瓶とレードルを持って居間へと戻つたのだつた。

居間に戻り、テーブルに頼まれた品々を置くと、イエイヌは全員分のコップにさつとレードルで掬つたお酒を注いだ。ねつとりとした蜂蜜の匂いと、ふわりとしたアルコールの匂いが部屋に漂う。

「ほら、ともえちゃん。用意しましたよ」

イエイヌはそう言い終わってから、アムールトラに小さく会釈をした。

ともえは「んっ」と鼻を噉ってから応じ、グラスに口を付けた。それに合わせてイエイヌもひと口分を飲む。

「ねえ、あむーるとらちゃん」

ドードーが小声で尋ねる。

「ふたり、仲良しさんだよねえ」

彼女の言葉に、アムールトラはともえとイエイヌの姿をじっと見つめる。グラスに口を付けてお酒を飲むともえを、幸せそうに、心底幸せそうに眺めているイエイヌ。

「だなあ」

ちよつとした危うさのようなものを感じなくもない光景。だが、だからと言ってそれをアムールトラは否定したく無かった。

ドードーがこくりとコップを煽り、満足げに鼻息を漏らした。

「いいよねえー」

ドードーに倣って、アムールトラは蜂蜜酒に口を付ける。

優しい、甘い味だった。繊細な香りがした。「作る人に似るのかな」とアムールトラは思う。

「……なんとも言えんが……まああそこまで仲が良い奴らはそんなに居ないだろうなあ」

呆れ半分、微笑ましさ半分という不思議な塩梅の言葉に、ドードーはくすくす笑った。

なんとも気恥ずかしくなったアムールトラは、蜂蜜酒をもうひと口煽る。

「だろっねえ……ねえ、あれくらい大事な子って居るう？」

アムールトラは「んー」と少しだけ考え込む。

大事かどうかという尺度で言うならば、そんな相手は居ないと断言できる彼女だったか……

「……そうだなあ、気になる奴なら居るが——」

そう言いながらドードーの方を見つめ直すといつの間にやら彼女の姿は消えていた。

「ついでいけん……」

思わずぼそりつぶやくアムールトラだった。

彼女の視界に、蜂蜜酒がいつぱいに注がれたグラスが入る。彼女はともえの言葉を思い出していた。

お酒を飲むと、酔っ払う。ペースは程々に。気持ち悪くなったら飲まない。酔っ払いすぎると、オカシクなるかもしれない。

そんな言葉を、思い返していた。

「……………いつそ……………」

彼女の視界の先ではどこから戻ってきたドードーがイエイヌに抱きついていて、ともえはドードーに張り合うようにしてイエイヌの腕に抱きついていて、声が入り混じって誰のものかはわからないが「ぎゅー！」と聞こえる。

「はあ……………」

作ってくれたともえには失礼だが……………そう思った。が、少しぐらい羽目を外したいし、羽目を外さなければアイツラにはついていけない。そんな考えが彼女の頭をめぐる。

アムールトラはくつとコップを一気に空にする。嚙下してすぐには何も感じなかったが、次第に頭がぼんやりしてきて、ふわふわしてくる。

「ほっほーお。これはこれは……………」

不思議な眩きは誰の耳にも届かず、けれど、楽しかった。

アムールトラの記憶はそこからぼんやりとしたものになる……………と
いうか、彼女は酔うと眠くなるタイプだった。酩酊を意識し始めるや
否や、アムールトラは遠慮なくベッドにごろんと寝転んだ。

「……………おれはねる」

ともえとイエイヌが驚きと困惑の声を漏らしていた気もするが、ア
ムールトラはそれを無視して眼を閉じる。

「あたしもおー」

寝ると思えない元気な声色の後に、アムールトラの後ろ側がぼす
んと揺れる。アムールトラのしっぽがぺちりとドードーの身体を叩
く。だが、それを意に介さずドードーはアムールトラにくつつこうと
すり寄って、きゅつと服の裾を掴んだ。イエイヌともえは、何やら
相談していたようだが、間もなく部屋の電気を消して、ベッドに潜り

込んだ。

小さなベッドに四人が眠る。

アムールトラは丸く膝を抱え込んで、ドードーはそんなアムールトラに抱きつくようにして、ともえとイエイヌはベッドから足だけだらりと垂らしながら、手をつないで仰向けに……。ぼそりと誰かが「すやんぬ」とつぶやいた。意味すらわからないが眠いことだけは、辛うじて皆理解できていた。

窮屈そうで、けれど幸せな夜は、翌朝の頭痛で明けるのだった。

後日談3

どこか遠くで、蝉の鳴き声に混じって金属の触れ合う音が微かに聞こえました。

真夏の盛りと言わんばかりの昼、部屋にこもる熱気の為に、わたしは窓を全部開いて少しでも風を取り込もうとしますが……それもなかなかうまく行きません。

そんな中、わたしはお家のクローゼットをがさごそと探り続けていました。

「えつと……う？　これはーつと……」

中からずりずりと引き出したダンボールにメモなどは無く、ガムテープできつちりと封をされているばかり。

「よいしょつ、と……」

お父さんの無精に呆れながらも、わたしはガムテープを剥がし、中を覗き込みます。そこには英語と思われるタイトルが記載された本が何冊も入っていました。

「……これは……うん、お父さんのですね」

呟いた言葉にイエイヌちゃんが尋ねます。

「ともえちゃん、お家の中で探したもの、ですか……？」

彼女は床にべつたりと張り付いていて、少し顔を上げていました。

「ええ。……ほら、ゴリラさんのお家で色々探したじゃないですか。

それで、ここにも何かあるかなーと……」

淡い期待を示すと、彼女は「ほへえ」と呟いてから床に再びべつたりと張り付きます。

「いくら空調止まってるからって、それは汚れちゃいますよ……？」

先日ラツキービーストさんがわたしに伝えたのですが、点検だそうです。

なので今は、部屋の中に電気は通っていません。

「むう……そうですけど……こうしてた方が涼しいですし……」

「ごによごによと言葉を濁すイエイヌちゃん。

「イエイヌちゃんらしいですけどね」

わたしはそう言って、視線をクローゼットの中に戻します。ダンボールは後何個ありました。

「ええつと、これを……よつ、と……」

同じようにしてダンボールを引き出します。こちらも先程と同じようにメモ書きなどは無く……つてあれ？

「なんで奥側にメモが……普通手前じゃ……」

マジックペンでしょうか、黒くて太い文字で何か書かれています。

「えーつと？ も、え……？」

わたしの背筋に不思議な感覚が走りました。寒気とも違う、感動とも違う、不思議な感覚……。多分、懐かしいという思いに近いのですが、それが正しいとは言えませんでした。

「……ということは、ともえちゃんの昔のモノが……？」

イエイヌちゃんの言葉にわたしはゆっくりと頷きます。

昔のわたしが使っていたものが、中にはいつているかもしれないです。

「開けましょうか」

わたしの言葉に彼女が頷きました。

不思議と、わたしの胸は落ち着いていました。

記憶が無かった頃のわたしにとつて、過去の残滓に触れる時は興奮や緊張の類を抱きました。けれども、今となっては、過去というものは『その気になれば思い出せる。手元にあり続けていて、触れたければ触れられる』というような、不思議な距離感を持つものに変まりました。実際の所、全てを覚えていた訳でも思い出せる訳でもありませんが。人の記憶とは、かくもうつろうものなのでしょうか？ けれども、わたしが今を生きるに値するだけの過去があったと理解しているだけで十分なのだ……今は、そう思っています。

ベリりと音が響き、ダンボールが開かれます。中には服が数着と、帽子。その下には何冊かの教科書がありました。教科書は小学校の高学年向けのものが中心でした。

わたしは本をひとしきり確認した後、一旦脇に退けた衣類に視線を

移します。試しにひとつ服を開いてみると、真っ白なワンピースでした。ちょうど、今の時期にぴったりの気もします。ノースリーブで、スカートの丈は膝下程度と思われる、無地の服。小さく首元にはレースで縁取りがされています。腰の辺りには黒色のリボンが一周して、背中の部分でリボン結びになっています。襟から背中に掛けて、小さな白いボタンがみつつ結付けられています。

「綺麗……って——」

ぼんやり呟いて眺めていると、不思議なことに背中側の、尾てい骨の辺りに小さく穴が空いていました。

「——なんです、この穴……穴？　はあ……」

よく見て見ると、虫食いではなさそうです。しっかりと切り口は縫い付けられていて、意図的に開いた穴のようですから。とは言え、全体の作りや縫い付けにはほつれが無いどころか、汚れもありません。お陰で、かなりしつかりとした服なのだと思えてすぐにわかりました。それだけにこの珍妙な穴に憎しみすら抱きそうです。わたし、そんな『へんたいさん』な趣味ありませんし……。

お父さんのセンス(あるいは常識、と言っても良いかもしれません)を疑いつつ、服をベッドに置きます。

次は帽子——麦わら帽子です。

「ふんふん……」

こちらは何も穴はありません。つばが広く、白い帯が巻かれています。シンプルな麦わら帽子。極めて簡素ながらも、どこか頑丈さを感じてしまいます。

「こっちは、使えますね、うん」

わたしがそう言っただけで帽子をかぶって具合を確かめたりなどしていると、イエイヌちゃんはわたしを見ながらうずうずしています。

「どうかしました……？」

「わ、私も……箱、開いても良いですか？」

わたしは彼女に「どうぞどうぞ」と言いました。

すると、彼女は楽しげにクローゼットの下段に身体を入れて、中からダンボールをひとつ引っ張り出してきました。

「んふふー、こっちはなんでしよう……?」

樂しげに微笑むイエイヌちゃんにくすりとしながら、彼女の姿を見守ります。

「むう……文字……!」

やっぱりダンボールの奥側の面に文字が書かれていたようです。イエイヌちゃんはわたしの顔をちらりと伺いましたが、すぐに文字に顔を向けてうんうん唸り始めます。

「……!」

わたしは内心驚いてしまいました。そこに書かれた文字は、だって

「い、え、い、ぬ……わっふ!」

彼女の名前でしたから。

彼女は驚きと誇らしさからか、わたわたしています。

「カタカナは完璧ですね」

わたしが褒めると俄に喜びの色を示したイエイヌちゃんですが、それよりもっと大きく感情を動かされてしまっているようです。

「わ、わ、ともえちゃん。これ、これって——」

わたしは頷いて、彼女に伝えます。

「はい、イエイヌちゃんのものですよ」

厳密に言うならば、彼女のずつとずつと前の『イエイヌちゃん』のモノ。それはイエイヌちゃんもわかっているはず。けれども、今の彼女のモノだとわたしは敢えて伝えます。パークには他に『イエイヌちゃん』はいません。聞いた話では似た子が居るらしいですが……それでも、わたしのかつての荷物と一緒に大切に保管された荷物の正當な所持者である『イエイヌ』は彼女を置いて、他に無いでしょうから。彼女は余程興奮しているのか、尻尾をぱたぱたさせるばかりで、果然と箱の文字を見つけていました。

「……開けないんですか?」

わたしが茶化すと、彼女ははっとしました。

「そ、そうでした! えへへ……」

いそいそとイエイヌちゃんは手を動かし始めます。

ガムテープが剥がれ、蓋が開かれました。

中身はわたしのものと大差ないものでした。違いをあげるなら、洋服が一着だけしか入っていない事と、底に敷き詰められた本や教科書がより幼い子向けのものが中心だった事でしょうか。

「えーつと……服と、教科書ですね……わたしの方とあんまり変わり無い気も……」

わたしの言葉に相槌を打ちながら、イエイヌちゃんは服を開きます。

「あー！ これ、ともえちゃんの方とおそろいですね！ 帽子もありますし！」

広げた服をくるくると回して、確認をするイエイヌちゃん。

「みたいですね……つと、穴は……あれ？ 無い……？」

イエイヌちゃんの箱に入っていた服は、尾てい骨の辺りに穴が開いていないようです。他に違いと言えばそれに加えて、ちよつと丈が違っているかな？ と感じる程度です。リボンの色やレースの位置も同じ……もしかしたら、レースの柄が微妙に異なっていたりはしそうですね。

「あの、ともえちゃん」

彼女は眉間にシワを寄せながら、何か言いたそうな顔をしています。

「あー……もしかしたら同じこと考えてるかもですね……。なんです……？」

イエイヌちゃんは小さく苦笑いを浮かべて、言いました。

「おとーさん、間違えましたよね……？」

「あ、やっぱりそう思います？ わたしもそんな気がするんですよええ……」

要するにそういうことでしょうか……。同じデザインだから入れ間違えた、ただそれだけの事。

腰の穴は尻尾を通すための穴で、あちらがイエイヌちゃんのワンピース。わたしのワンピースにはそもそも穴が空いていない、ということでしょう。

お父さんがうつかりだったという事実には、安堵の思いを抱きました。尻尾の無い女の子にあのデザインを率先して着せたがるような変態ではないというのは、お父さんの信用問題に大きく関わる気がしますからね……。

「それに、イエイヌちゃんの方の帽子はてっぺんに穴が開いてますしね……」

こちらは耳を通すための穴、ということでしょうか？

「あ、ホントです！」

彼女は楽しそうに言って、麦わら帽子を手に取ります。そして、しげしげと眺めた後、被りました。彼女が左右に帽子をガサゴソと動かし、位置を調整してから被り直し……そうして耳がびよこんと麦わら帽子のてっぺんから飛び出します。

「あらあ、可愛い……似合ってますよ、イエイヌちゃん」

イエイヌちゃんは耳の具合を確かめているのか、視線が上に向いていて、少しでも可笑しな表情になりました。それに、耳は横を向いたりお辞儀をしたりピンと立ったりと普段と比べるとずっと忙しく動いています。

その微笑まじさに、思わず微笑を浮かべてしまいました。

「えへへ……照れますね……ありがとうございます！」

そして彼女の視線はベッドの上のワンピースに移ります。

「あの、その……ワガママ、良いですか……？」

申し訳無さそうに彼女はわたしの顔を見つめます。

「なんででしょう？ 内容次第ですけども……」

わたしは立ち上がって、ベッドの上のワンピースを手に取ります。

「これ、着てみてもいいですか……？」

「ええ、もちろんです。そもそもイエイヌちゃんのお洋服ですもの。

……手伝います？」

わたしは改めて、それが彼女のものであると強調しました。

イエイヌちゃんはわたしに「お願いします」と答えて、服を脱ぎ始めました。

ふと思い立ち、わたしは一旦その場を離れて洗面台へ行きます。そ

して濡らしたタオルを手にして戻る頃には、彼女は下着姿になってもじもじしていました。

彼女は俄に汗ばんだ様子ですが、汗の量は大したことがないのかキャミソールが汗に濡れた様子は殆どありません。

「イエイヌちゃん、キャミソールも脱いでください」
「へあつ？」

驚きと困惑と……多分ほんの少しの恥ずかしさ。そんなものを感じさせる表情ですが、わたしは彼女を説き伏せようと言葉を続けます。

「身体、拭きますよ。汗もかいてますし、わたしがやるのは背中だけですし……綺麗な服ですから、綺麗に着ませんと、ね？」

いえ、本当にそう思ってるんですよ？ 彼女の綺麗な肌を見たいというのも、まあ……ありますが……。

もじもじとしながらも彼女は頷きました。そして、彼女はわたしに背を向け、その肌を曝け出します。

「お願いしま——ひゃうっ！」

手でぺたりと触ると、やつぱり少し汗ばんでいます。それに異様に体温も高いですし……少し心配です。

「……シャワー浴びます？ そっちの方が身体冷やせそうですけど……」

イエイヌちゃんは首を振りしました。

「い、いえ……髪乾かしたりとか、時間かかっちゃいますから……お願いします……」

「じゃあ、失礼しますねー」

そつと濡らしたタオルで彼女の背中を拭きます。

動く度に彼女は「ひゃっ」とか「ひようっ」とか「わふっ」とか声をあげますが……擦りたいのか冷たいのか……どっちなんでしょう？ わたしは、声を聞く度に少し楽しくなっていましたから、後でやりすぎたと謝りませんとね。

「——これでおっけーです。後はイエイヌちゃんがお願いしますね」

「はふう……すつきりしましたけど……むう……」

わたしは不服そうな表情を浮かべるイエイヌちゃんにタオルを手渡します。

彼女はわたしに背を向けたまま身体を拭い始めます。首筋を拭い、左右の腕を拭い、腕を挙げて脇と脇腹を——彼女の身体が少しだけ横を向いて、胸の膨らみがうつすらと見えました——、胸を、お腹を、少しかがんで——彼女の胸が重力に引っ張られて、だらんとしているのが見えました——太ももを、脛を……。

彼女が身体を清め終わった頃、わたしは彼女に肌着とワンピースを手渡します。

「えへへ……じゃあ着ますねー……！」

そして彼女は駆け足気味にキャミソールを着て、ワンピースに頭を通します。彼女は袖に腕を通して——

「ん？ あれ？ あ、頭が……よ、いつしよ……！」

背中のボタンを外すこと無く彼女は頭を通しました。お洋服が壊れなかったのは幸いです。まあ、首元の広いものですから、大丈夫でしょうけども……。

彼女は服を手で引っ張ったりして少し整えてから、自分の姿を伺います。

「んふー……どうでしょう!？」

わたしは素直に思ったことを伝えます。

「似合いますよ、ホント……びっくりしちやったくらいです」

服の大きさに関してはちようど良さそうです。こうして見ると、ワンピースは身体のシルエツトを強調しすぎず、かと言って隠しきらない程よいサイズ感です。まるで彼女のために誂えたかのような気さえします。

……というか、そもそも彼女は普段からして厚着をし過ぎなので。毛皮だから、というの彼女の論ですが……。その所為か『イエイヌちゃんが薄着をする』というだけではつとするような真新しさや不思議さを覚えるものです。それに加えて、彼女の地肌の白さとワンピースの白さが映えること映えること。普段隠されている腕が頭になつて、所在無げに空を彷徨っていて、それもまた、なんともいじ

ましいい……。

「イエイヌちゃん、ちよつとくるんつて回つてもらつても良いですか？」

彼女は不思議そうな表情を浮かべますけれども、わたしの言葉に頷いて、その場でくるんと回ります。膝下まで丈のあるスカートはふわりと綺麗な円を描いています。少し持ち上がったスカートからちらりと覗く太腿がまばゆく光を放つようです。

「ふおお……」

思わずわたしはあらぬ声を出してしまいましたが、イエイヌちゃんはきよんとした顔を崩しません。

「な、なんですか……？　ともえちゃん？」

「い、いえ……失礼しました……イエイヌちゃんが可愛すぎてヘンな声が……」

「……？　いいですけど……あつ、尻尾出すの手伝つてもらつてもいいですか？」

彼女の言葉に頷きます。

「大丈夫ですよ、背中、向けてください？」

イエイヌちゃんはゆっくりと振り向いてわたしに背中を向けます。いくら彼女の身体の一部と言つても、見えない場所ではなかなか上手く行かない様子です。尾てい骨の辺りに開けてある穴がもぞもぞと動いていました。

「えーつと……くすぐったかったらごめんなさいね……？」

「わっふー！　ちよ、ちよつと、ともえちゃ……ひやうつ！」

わたしはそつと穴に指を入れ、イエイヌちゃんの尻尾に引つ掛けます。そしてそのまま引つ張り出そうと考えているのですが……

「イ、イエイヌちゃん、う、動かさないで……！」

「あ、だ、ちよ、そこは違——」

余程擦つたいのか、それともソレ以上に何か感じるものでもあるのか、細かく動いて尻尾を逃がすイエイヌちゃんでした。

それからすつたもんだしつとも、何とか尻尾は無事、外に出ます。

「うう……」

何故かイエイヌちゃんも恥ずかしそうに顔を覆い隠していました。「失礼しました……でも、逃げるイエイヌちゃんもイエイヌちゃんですよお……」

まあ、楽しかったんで良いですけど。

「そ、そうかもですけど……」

依然としてうつむき気味の彼女でしたが、少しすると何かを思いついたようにはっと真面目な表情で顔をあげます。

「んふー……！　そうです、そうですよおー！」

嫌な予感……という少し言い過ぎですが、虫の知らせのようなものを覚えました。

「ともえちゃん！　ともえちゃんも着るんですよ！　わんぴーす！」

「良いですよ？　わたしも興味ありますし……」

わたしは服を脱ぎ始めます。

いつものシャツに、ズボンを脱いで、畳んで……イエイヌちゃんの居たところを伺うと、彼女はいつの間にか居なくなっていました。

「あれ？　イエイヌちゃん？」

きよろきよろと周囲を見回しても、彼女が隠れた様子は見当たりません。

少しすると、イエイヌちゃんは洗面所の方から戻ってきました。手にはタオルが握られていたので、おそらくは仕返し、あるいは意趣返しと言ったところでしょうか？

「あー……なるほどお……？」

「むう……わかっちゃいましたか……」

そう呟いてイエイヌちゃんはわたしに近寄ります。

「ともえちゃん。裸になってください……」

要するに、です。わたしに背中を拭われたのと同じように、わたしの背中を拭おうという事。そしてワンピースを着るように言うでしょう。

わたしを見つめる彼女の視線から、まるで獲物を仕留めるかなのようなほのかな嗜虐の眼差しを感じましたけれど……

「キャミだけで良いですよね……？」

イエイヌちゃんは「あっ」と思いついた様に呟きます。

「えへへ……失礼しました……」

「まあ裸でも良いですけど……イエイヌちゃんしかいませんし……」
「なんだか少し荒い鼻息が聞こえてきましたけど、無視です無視。」

わたしはキャミソールを脱いで、彼女に背中を向けます。

「どうぞ……というかお願いします、イエイヌちゃん」

わたしだつて彼女に裸体を晒したいという訳ではありませんが、綺麗に着たいという思いはわたしにだつて当てはまります。要するに折角の立派な服ですから、汗で着てすぐに汚してしまうのは勿体ないのです。

「では、失礼しますね……!」

不思議に思うくらいわくわくした口ぶりでした。

「はい、お願いしま——ひゃっ、ふっ、ちよ……やはっ……!」

彼女はタオルでわたしに触れる前に指の先端で背中をくすぐつて来ました。

「ちよつと、イエイヌちゃん……? さつきわたしもやりすぎちゃいましたから、そこは謝りますけど……」

「し、失礼しました……」

イエイヌちゃんは申し訳なさそうに呟きます。わたしも「そこまで言うつもりでは」と弁明しましたが……。その後はわたしの背中をそつとタオルで拭ってくれました。

何度か小さく声が出てしまいましたけれど、順調に背中拭い終わつたようです。

「終わりです……! 後はどうぞ!」

彼女はそう言つてわたしにタオルを手渡します。

「ありがとうございます、イエイヌちゃん」

わたしは感謝の言葉を伝えて、イエイヌちゃんがそうしたのと同じように身体を軽く拭きました。……何故かイエイヌちゃんの視線を感じましたけれど、それは気にしないことにします。

「こんなもんですかねえ」

そう言つて振り向くと、イエイヌちゃんは腕にかけていたワンピース

スをわたしに手渡ししました。

わたしは小さくぺこりと頭を下げて、受け取ります。

背中のボタンを外して、頭を通し（イエイヌちゃんから「なるほどお」という声が聞こえました）、そして、袖を通して、ちよつと整えて……つと。

「あ、ボタンお願いしても良いですか……っ？」

わたしはイエイヌちゃんに背中を向けて、頼みます。彼女は快く引き受けてくれました。少しだけ苦労しながらですが、何とかボタンも留まり、これで大丈夫。

「ん……ありがとうございます、イエイヌちゃん。どうでしょう……？」

イエイヌちゃんは瞳をきらきらさせて言いました。

「似合ってます！　かわいいーです！　はい！」

べた褒めでした。

「そ、そうですか……、照れちゃいますね……。ありがとうございます……す」

思わず微笑みながらそう伝えますが……ちよつと思ふ所も無い訳ではありません。

イエイヌちゃんはスタイルが良いですから、それと同じくシルエツトも大人びて見えますし、だからこそ、一見すれば地味な意匠のワンピースでも映えるのでしょう。『普段と違う格好』という非日常感も強い印象を抱かせます。

かたやわたしはと言えば、体型が子供っぽいですから……このワンピースでは少し背伸びした子供という感覚が拭えませんが、髪の色も少し派手気味ですのでどうしても浮いてしまう気がします。

「んふふーいえいえー。髪の色綺麗ですから、ともえちゃんは似合いますねえ……」

しげしげと感心する様につぶやくイエイヌちゃんでしたが、わたしからしてみれば別のことを考えていますので、思わず聞き返してしまいます。

「派手じゃないですか……？　前みたいに黒髪だったらもうちよつと

違ったでしょうけど……」

わたしの言葉に彼女は首を傾げて考えて、ゆっくりと口を開きました。

「んー……黒い髪もステキでしょうけど……この色でもステキですよ？ 草原と、お花みたいじゃないですか！」

彼女の解釈の仕方にあっけにとられてしまいました。彼女の見立てはなかなか詩的に思われますし、もしかしたら間違っていないのかもしれない。特別な服を着る時ぐらい、前向きにいきたいもの。

「も、もしかして失礼なこと言っちゃいました……？」

不安げに彼女がわたしに尋ねます。

わたしはそつと彼女の頭に手をあてて、微笑みます。

「いえ、ステキな褒め方してもらえて、嬉しくって……ありがとうございます。います。イエイ又ちゃん」

彼女は微笑んで「どういたしまして」と嬉しそうに呟いたのでした。

「あ、そう言えば」

イエイ又ちゃんはぼそりと呟いて、玄関の方へと行きます。

「どうしました？ 何か思い出したことでも……」

ぱつかんと音がして、玄関脇に置かれた戸棚が開かれました。中を覗いたことはありましたが、その時は何も無いと判断していたよう……？

「これですこれですー！」

彼女がそう言って取り出したのはビニール袋に収められたサンダルでした。

彼女から受け取ってしげしげと眺めると、パークに不釣り合いな位「おしゃれさ」を意識したサンダルです。どちらかと言えばアウトドアなきらいのあるこのパークでは、この靴では行動し辛いでしょう……そう思えてしまいます。薄い茶色を基調としたサンダルですが、編み込みの一部には白色が混じり、ぼんやりした雰囲気を引き締めているように思われました。

また、サンダルのヒールは三センチほどで、靴底もそこまで厚いものではありません。なので履きやすそうではありますが……甲の側

は繊維質の編み込みがあるばかりで、爪や肌の殆どが露出してしまいます。

「まるで、この服にあわせたみたいですよね！」

よく考えてみれば、わたしもイエイヌちゃんも靴や靴下に関しては頓着していなかったのです。ですから、普段の靴で外に出ればおしやれとは言い難いでしょう。

「もしかしたら、お父さんが一緒に買ってくれたんじゃないですかね……？ 昔も今も、あんまり靴はこだわりがなかったので、わたし……」

パークだから、という事情もあるでしょうけれども……。

イエイヌちゃんはふんふんと納得するように声を出しました。

わたしは靴下を脱いで、試しにサンダルを履いてみます。

「サイズは……うん、大丈夫そうですね。ちよつと違和感あるかもですが……履いてみます？」

「はいー」

イエイヌちゃんはいそいそとサンダルに足を通します。白い肌に、桜の花弁のような爪があつて、摘み取つてしまいたい位、綺麗。

少しバランスを崩しつつも、彼女はサンダルを履き終えました。

ヒールのお陰で彼女の目線が高くなったのも、どことなく新鮮です。イエイヌちゃんはわたしよりもほんの少し身長がありますが、目の高さはさほど違わなかったのですが……今のイエイヌちゃんの眼を見つめるには少し視線をあげる必要が出てきました。その事実……その、何というか……胸がきゅんとするような、しないような……？

「ほへえ……ちよつと、歩きにくいかもですね……走ったりはできなさそうです……」

思わず実用重視な言葉をつぶやくイエイヌちゃんに、くすりとしてしまいます。

「走る靴じゃないですよ、これ。綺麗に、可愛く、その為の靴です」

まあ彼女、既に十分可愛いですけどねえ。

「おしやれ、とか言うやつですか……なるほど……」

「例えば、そうですねえ……ヒトがいつぱい居た頃のセントラルにお買い物に行く時とか、そういう特別なときに、特別にしようと思つて使うものです。この服も、靴も」

自分でも考えながらそう言ったのですが、腑に落ちる様に思えました。

それはイエイヌちゃんも同じだったようで、細かく頷いています。納得してくれたのでしょうか？

「折角です。イエイヌちゃん。この後、この格好で、丘に行きませんか？」

特別な機会に、特別な場所へ行く。その言葉の響きはなんとも素敵に思われました。けれども、考えてみれば『他所行き』の機会などそうそう無く、また、今のパークでは何処かへ行くとなると少なからず旅の様相を呈します。となると……なかなかこういった服を着ることは無いことで……。

「！いいですね！ えへへ、楽しみです！ すぐ行きますか!？」

イエイヌちゃんは尻尾を勢いよく振って、わたしに尋ねました。

「んーと、少し支度をして……あとわたしは髪を整えますかね。なのでもう少しだけ待ってもらっても平気ですか？」

イエイヌちゃんは「はい!」と大きく頷き、台所へと足早に向かいます。きつと水筒を用意するのでしょう。

それから少しして、支度が終わり出発の時間になりました。

気づけば蟬の鳴き声は変化していて、騒がしさを感じる音から切なげな音に変わっていました。

イエイヌちゃんは待ちきれないと言わんばかりに尻尾を振って、被った帽子をもそもぞと整えています。わたしはそんな彼女を尻目に鞆を肩から書かけ、帽子を被ります。

「よっし、行きましようか」

「はいー」

わたし達は扉を開きます。

昼下がりの沸騰させるかのような強い日差しが弱まって、ふんわりとした優しい風が吹き始めている……そんな自然が、わたし達を出迎

えます。

家を出てふと振り返ると、ラッキービーストさん達がお家の壁に向かって何らかの作業をしているのが見えました。おひとりは腕がひとつ付けられた大きな機械の脇に立っていて、その機械の作業を近くで監視するラッキービーストさんがもうおひとり居ます。

わたしは彼らに近づいて、声をかけます。

「お疲れ様です、ラッキービーストさん」

おふたりともわたしの方を向いて小さくお辞儀をしてくれました。

「サギヨウナラ、ニチボツニハ、オワルヨ」

「なるほど……」

何をしているのかはわかりませんが、ちらりと機械の手元を覗くと開かれたお家の外壁の中に、細かな配線が目に入ります。

「いつもありがとうございます。えつと……わたし達は出かけさせていただきますね」

わたしがそう伝えると、機械の監視をしている方のラッキービーストさんがちらりとイエイヌちゃんの方を見てから、わたしに小さな声で囁きます。

「サムイトコニハ、イカナイヨウニネ。イエイヌ、ゴゴエルヨ」

一瞬だけほかんとしてしまいましたが、なるほどとすぐに納得します。

つまり、普段と違う格好をしているから寒さに弱くなっているぞ、ということなのでしょう。

「大丈夫です。あつちの丘の方までです。靴も歩きにくいですから、気をつけます」

「リヨウカイ。キヲツケテネ、イツテラツシヤイ」

わたしは彼らの言葉に小さく会釈を返して、再びイエイヌちゃんの元へと戻りました。

イエイヌちゃんの元へと戻ると、わたし達は歩調を合わせてゆつくりと歩き始めました。

「何話してたんですか？」

彼女は不思議そうに尋ねます。

「んーと、作業について、ですかね。夜には終わるそうですよ？ それと、気をつけてって」

くすりと小さく彼女は微笑んで、振り返ります。

「いつてきますねえー！」

イエイ又ちゃんは楽しげに「ほふん」と息を付いて、前に向き直りました。

「珍しいですね、あんなに大きな声出すなんて……」

「えへへ、見守ってくれてるんだなって思ったら、嬉しくって……」

なるほど、と内心で呟いてしまいました。

「優しいですね、イエイ又ちゃんは……」

わたしはそう返事をして、彼女の手をそっと取ります。

夏の暑さの中で、一際熱く感じる彼女の手は、けれど、柔らかで愛おしく思われました。

「ともえちゃんの手、少しひんやりしてますね」

そう言っただけはわたしの手を撫でます。

「そうですか？ イエイ又ちゃんが温かいんですよ、きつと」

汗をかきにくい体質——というカイ又ってそういう身体でしたっけ——だからか、体温が籠もってしまうのでしょうか。ですが、温かさの理由はそれだけでは無いと、思ってしまうます。

「んふふー」

会話も程々に、ゆっくりとわたし達は歩みを進めます。

暫く前から、わたし達の散歩は変わりました。少し前までは、何があつたとかあれはどうなつたとか、そういう何かの話題を中心に散歩の最中はやや賑やかな雰囲気帯びていたと思っっています。

けれども、気づけばわたし達の間で会話は減りました。それは、単に話題が減ってしまったからという事もあると思います。わたしが眠っていた間の話や、イエイ又ちゃんのお友達の話、わたしの思い出の話、そんなものを散歩に限らずお話しているのですもの。それは当然です。ただ、それだけが理由ではありません。

特に散歩の間はそうなのですが、意識して会話をしないようにしているような気がします。イエイ又ちゃんがそう思っているのかはわ

かりませんが、少なくともわたしはそうです。

お互いに手を繋いで、黙って歩く。字面にするとなんとも味気ないものですが、不思議なことになわたし達の間には流れる空気は穏やかで、のんびりとしていて、愛しくて、何よりもかけがえのないものです。それは誓って言えるでしょう。

何故こうなったのか？ という問への答えはわかりません。ですが、欠片ばかりの考えをわたしは抱いていました。それは、別段喋らずとも散歩を楽しめる、ということに気づいたから……なのだと考えています。精神が大人になった、とも言えるかもしれませぬ。

同じ景色を見て、同じ道を一緒に歩いて、けれど感じることも、思うことも、全部違う。それがわたしとイエイヌちゃん——いいえ、わたしに限らず、誰もがそうでしょう——なのだと思います。そうであるのなら、今日の散歩で感じたことをわたしだけの秘密として大事にしてもいいでしょうし、今すぐ彼女と共有してもいいでしょうし、じっくりと心のなかで寝かせておいて晩ごはんのときに会話の種にしてもいいでしょう。

今を生きるからこそ、敢えて伝えない。今を生きるからこそ、敢えて後で伝える。それらを選ぶだけ、わたしが成長したのかもしれない。それらを選ぶだけ、イエイヌちゃんが成長したのかもしれない……ちよつとだけ、誇らしく思います。

ふと、イエイヌちゃんがわたしに言いました。

「ともえちゃん」

考え事をしていた所為で返事が少し遅れてしまいました。

「……なんですか？」

隣に視線を向けると、彼女はわたしの顔を見てから、髪の毛に視線を動かしました。

「その髪型もなんかおとなっぽくて、良いですねえ……」

うふふ、とわたしは思わず声を漏らしてしまいます。

「ありがとうございます、イエイヌちゃん。……これ、結ぶ位置をズラしただけなんですよ？」

「ふーむ……それだけで結構変わるんですね……」

今のわたしの髪型は、髪を結びリボンの位置を変えただけです。

麦わら帽子のつばが広いので、あんまり高いところで結ってしまうと帽子に干渉してしまうのです。ですから、それを低くしただけ。普段が耳と同じくらいの高さだとしたら、今はうなじくらいでしょうか。

「そうですねえ……そしたら今度はイエイヌちゃんの髪を結んだりしてみましょうか？　リボンやヘアゴムがあればですけど……紐は、うーん、絡まっちゃいそうですし……」

考え事を始めたわたしを見て、イエイヌちゃんが面白そうに小さく笑います。

「ど、どうかしました……？」

「いえ……やっぱり、考え込んだじやうところが好きだなあって、思いまして……えへへ……」

そう言うなり、彼女はさつと前を向いて、腕を大きく振り始めます。

「とつとと……転んじやいますよ……？」

「へーきですっ！」

照れ隠しなのか、少し意地を張ったように彼女は言いましたが……案の定、バランスを崩してしまいます。

「ほわっ……！」

わたしは彼女の腕を引っ張って、支えます。

「おっと……靴も普段と違うんですから、気をつけましょ？」

イエイヌちゃんはきまり悪そうに「うう」とつぶやきます。

わたしは気にしてないよ、と主張するようにちよつとだけ大きく腕を振り、足を進めます。

「ほら、日が暮れちゃいますよ」

イエイヌちゃんは小さく頷いて、歩き出しました。

「じゃねーイエイヌちゃん、ともえちゃん。また今度あそぼーねー！」

イエネコさんがわたし達に手を振ります。イエイヌちゃんもわたしも、空いた方の手を振り彼女に返事をしました。それから暫く、彼

女の背中を見つめ、再び道を進み始めました。

丘へと続く坂道、その最中で、偶然イエネコさんとすれ違ったのです。

「今日はなんだか珍しいですね……イエネコさんとあんまり会えない印象ありましたけど……」

イエイヌちゃんは困ったように笑います。

「イエネコちゃんは結構歩き回るタイプですけど……夜の方が元気な子ですからね」

「ああ、なるほどお……」

今は夕方と言って差し支えない程度の時間。風が冷えてきたお陰もあります、陽射しは弱まり、涼しくなりましたし、空も茜色に染まりつつあります。

「けっこーのんびり来ましたからねえ……」

イエイヌちゃんの言葉に、わたしは同意します。

「ですねえ……嫌です?」

普段の格好なら、もつと早くここまで到着していたのでしょうけれども……わたし達は一步一步をのんびりとゆっくり進んだために、普段よりもずつと時間がかかっています。それを嫌う方も、もしかしたらいるでしょう。

イエイヌちゃんは少しだけ考えて、言いました

「んー……毎回となると、ちよつと考えちゃいますけど、でも……」

彼女は空を仰いでから、わたしの顔を見ます。

「きょうくらい、とくべつ、ですから!」

わたしはくすりと笑います。

「毎日が特別、だと思いますよ? お陰様で」

イエイヌちゃんはわたしの言葉が擦ったかっただのか、肩をすくめる様にしながら笑って、駆け出します。

「危ないですよ?」

駆け出した彼女の背中に声をかけましたが、それに返事をしてくれるよりも先に、彼女は坂道のでっぺんに到着しました。そして、振り向いて言いました。

「へーきです！ えへへ、一番乗り！ です！」

まったく、と思いがらわたしは息を漏らし、彼女に追いつこうと
一步踏み出します。すると――

「きやつー」

びゅうとひとつの風が吹きました。今日で一番強い風と言っても
差し支えないかもしれません。風はわたしとイエイ又ちゃんの身体
を撫で、そして海の方へと駆け抜けていきます。

思わずわたしは帽子を押さえて姿勢を低くしました。それはどう
やらイエイ又ちゃんも同じだったようです。

「びつくりいー……」

小声でつぶやいてから視線を上げると、わたしは息を飲みました。

この辺りは風の通り道があるのか、まだ弱い風が吹いています。そ
の風に彼女の身体はぱたと煽られ続けていました。その姿に、わ
たしは見惚れてしまいます。

煽られて空を撫でる白いワンピースを夕焼けが照らし、彼女の太腿
の辺りを透かしています。逆光ではありませんでしたが、ちょうどイエイ又
ちゃんの背後に太陽があるからか、薄暗さこそあれども彼女の姿を
はつきりと見つけることが出来ました。彼女はまるで後光を湛える
かの様に、輝いていました。

ああ、夕暮の、薄暮の光に透けて浮かぶ彼女の身体のシルエットの
美しさと言ったら……！ わたしは既に彼女の裸体を見た事があり
ます。けれど、その時に見たそれよりもずっと、ずっと……神秘的に
さえ思えました。それと同時に、どうしてか切なさのような、郷愁の
ような、不思議な思いも抱きます。

イエイ又ちゃんは帽子を押さえた手をそのままに、風の行く方向を
見つめていました。その手も、その瞳も、帽子の影になった耳元も、風
に靡く髪も、全てが完成されたひとつの絵画のようで、淡く、けれど
確かにわたしに訴えかけます。夏の夕暮れとはこのようなものだ、
と。燃え盛る炎の鎮火の寸前。その切なさ。明日も来るであろう陽
光との暫しの別れは切なくも愛おしいものだ。

わたしが油絵を描けるのなら、きっとそうでしたでしょう。この色濃

くも切ない光景を切り取るには、あれが一番ですから……。色鉛筆では、淡すぎます。水彩絵では、切なさの方が強く出てしまいます。繰り返し訪れる夏の夕暮れの繰り返し覚える切なさを、思いを込めて描くには……。わたしは自身の不遇と力不足に嘆きそうになります。けれど、描きたくて、仕方が無い。

わたしはしばし彼女の姿に見惚れ、風が弱まってなおも、身動きが取れません。

「……ともえちゃん……？」

わたしは思わずイエイ又ちゃんに言っしまいました。

「動かないで！ あっち見てて！ 手は帽子！ 身体は、そう、そっち！」

彼女はきよとんとしながらも、指示に従ってくれました。わたしは衝動的に鞆からスケッチブックと色鉛筆を取り出し、彼女の姿をスケッチします。ちらり、ちらりと進捗に応じて彼女の方に視線を送りますが……。彼女は困った顔をしていた気がしました。

それからスケッチが終わって、わたしは駆け足に彼女の元へ。

「失礼しました……。ごめんなさい、無理言っちゃって……」

彼女はお腹の底から漏れ出すように、笑います。

「いえ、大丈夫です。うふふ、ともえちゃん、すっごい真剣な顔してましたよ？ ちよつと困っちゃいましたけど……。えへへ」

「本当にごめんなさい……。なんか、がーってなっちゃって……」

「いえいえ、気にしないでください。あ、でも絵は後で見せてくださいね！」

わたしは「もちろんです」と答えると、イエイ又ちゃんは湛える微笑をそのままに、広場の方に視線を動かしました。わたしも彼女に倣って、広場を見つめます。自然、わたしの手は彼女の手元へと引かれるように動いていました。

ふたりして、じつと広場を見つめます。

「やっぱり、良い所ですね……。ここは……」

わたしが口を開いた頃には、わたしと彼女の手は強くつながり合っていて、確かな熱を孕んでいました。

「……はい……」

ぼんやりと彼女が相槌を打ちました。

気づけば下草の生えた場所にふたりで腰を下ろして、やっぱり景色を見つめていました。

菫色に染まり始めた空の下、ふたり、手を繋いで……その特別な感覚にしばし酔いしれます。そして、それを彼女と一緒に堪能できることの幸せを、感じていました。

きつとイエイヌちゃんも同じことを思っていたのでしよう。しばらくすると、わたしと彼女の視線が交差し始め、近づいて、くっついて、離れて——そして、再び広場へと視線を戻したのでした。

菫色に染まった空が、新たに黒墨色へと塗り替えられ、そして月が空に漂う群雲を淡墨色に照らす頃、わたし達はお家に戻りました。出発前に告げていた様にラッキーピースさん達はもう作業を終えて、姿を消していました。

「ふう、今日はお疲れさまでした、イエイヌちゃん」

彼女はベッドに身体を預けて、天井を仰いでいました。

イエイヌちゃんは満足げに呟きます。

「今日はすてきでしたあ……」

わたしは彼女の隣に腰掛けて、頬に触れながら尋ねます。

「ええ、本当に……イエイヌちゃんのお陰です」

「いえいえ、ともえちゃんの……えへへ、終わらなくなっちゃいますね」

小さく笑みを零して、彼女は身体を起こします。

「ともえちゃんとお揃いで出掛けるのって、凄い幸せな気持ちになりますねえ……」

しみじみと零す言葉に、わたしは少しだけ考えてから返事をします。

「んー……普通、一緒に服って着ないから……ですかね？ 後は——」

他にも、仲間意識が殊更強く感じられる、とかありそうですけど……これは話をややこしくしてしまいそうに思われますので、黙って

おきましよう。

「それはさておき、また夏の間にも一回くらいはお出かけしましょう？
今度は丘じゃなくて……そうですね、どこか行ったことの無い場所
とか」

わたしのお出かけの提案に彼女は楽しげに頷きます。

「はい！　じゃあ、明日とか——」

あまりにも気の早い彼女の言葉にわたしは肩をすくめてしまいま
す。

「うふふつ、それだとトクベツじゃなくなっちゃいますよ？」

イエイヌちゃんは「ふむう」と考え込みながら、呟きます。

「確かに……でも、お出かけは……んー……お散歩くらいなら……？」
「お散歩なら……どうしましょう？　どこか行きたいところとかあり
ます？」

イエイヌちゃんは少しだけ間を置いてから答えてくれました。

「でしたら……そうですね、暑い日ばかりでしたから、川の方で涼ん
だりとか……？」

思いがけない言葉に、わたしは頷きました。

「いいですね、でしたら——」

そうして一緒の時間が過ぎていきます。

翌朝、わたしは描いたスケッチを改めて見返しました。その日の夜
に、色を着けようと思ったのです。そして、気づいたことがありまし
た。描いたスケッチが、どこことなく、何かに似ているのです。白いワ
ンピースを着ていて、風に吹かれた女性の絵……。

数秒ほど眺める内に「何に似ているのか？」という問いへの答えが
見つかりました。画集の絵、そして、お父さんの描いた絵、わたしが
憧れていた絵……。

きつと、わたしはあの絵が好きなのでしょう。きつと、わたしが絵
を描きたいと思った源泉がああ絵なのでしょう。どちらが？　では
なく、どちらとも、その役割を担ってくれているのだと思います。

それに気づけたことが、それに少しだけ近づけたことが、それを意
図せず描こうと思えたことが、誇らしく思えました。けれど同時に、

自分の無力さにも気づいてしまう。悔しくて、悲しくて、不条理にすら思えました。……けれど、追い付きたい。お父さんに、あの絵の人に。無理かもしれないけれど、時間も気持ちもいっぱいあります。だから、絵が、好きなんです。だから、絵を、描くんです。

それに彼女と一緒になら、何だって出来るくらいの気持ちになれます。だから、きつと――

そう思えた、夏の一日でした。

後日談4—1

クッキーを焼いたあの日から数日をかけて、わたしとイエイヌちゃんは遠出の支度をしてきました。その理由は、お話ばかりに出てきたフリーシアンさんへのお礼の為。彼女の居る場所はどうかやら山の中腹あたりの方です。一日やそこらで彼女にお礼をしてすぐに帰るといっても勿体ないです。失礼ですから。

そして今日はその出立の日。空は綺麗に晴れていて、初夏の青い風が時折身体を撫でてくれるような心地の良い日でした。

「ともえちゃん、ともえちゃん」

イエイヌちゃんはお家の中から空の様子を眺めていたのですけれども、何かを思い出したようにわたしに尋ねます。

「どうかしました？ 何か忘れ物とか、失くしちゃったとか——」

わたしは荷物の確認を中断し、彼女の方を見返します。

イエイヌちゃんはわたしの言葉に首を振りました。

「そういうのじゃないんですけど……あの、寝袋って、どうします？」
ん……？ どういうことでしょうか？」

「寝袋がどうかしました……？」

「その、今まで使わせてもらってきた寝袋って、うみの方でお借りしたものですよね？ 返さなくても——」

「あ……なるほど……お話するの忘れちゃってましたね、すみません、イエイヌちゃん」

わたしの言葉にきょとんと不思議そうにするイエイヌちゃん。

わたしは彼女に説明を始めます。

あれは本来お父さんとわたしのものなのです。あの施設に置かれていたのは処理に困ったことでしょう。お父さんが忘れていったのはある意味で正解でしょうけれど、あそこに置いておこうと思ってお姉さんのこともありますから。何にしても返す必要なんて無いのです。今度また海へは行きたいところですけど、それは今ではない……というところでしょうか？

わたしの説明を聞いてイエイヌちゃんはふんふんと納得のいくよ

うないかないような、そんな不思議な表情を浮かべました。

「要するに、です。あれはお父さんの残したもので、あれを使う正当な権利がわたし達にはある、ということですよ」

ちよつとばかり小難しい事を言ってしまったが、要するにそういうこと。イエイヌちゃんはますます眉間にシワを寄せて考え込んでいましたが、唐突に耳をぴくりと動かして玄関の方に顔を向けました。

「――！　ちよつと失礼しますね……！」

そしてそのままとてと外へと行き、様子を伺います。

「来たんですかあー？」

既にお家の外に出てしまったイエイヌちゃんに聞こえるよう大きめの声で声をかけると、外から「そうですねー！」と楽しげな声が響きます。

わたしは小さく微笑んで、イエイヌちゃんの後を追いました。

外に出ると、目がくらむような強い陽射しがわたしを迎えます。そして目が慣れるに従って、青々とした若い青色を湛えた木立と草原とが視界に入ってきました。そして、そんな景色の遠くからエンジンの駆動音が聞こえてきます。

「ん、今回はわたしにも聞こえますよおー」

思わず興奮混じりに呟いてしまいますが、イエイヌちゃんもどうやら楽しみなのは変わらない様子です。

「ですですうー！　久しぶりにもえちゃんとお出かけできるの、楽しみですー！」

イエイヌちゃんは耳をぴんと張りながら、しつぽをぶんぶん……よほど楽しみなのでしょう。ふと考えを泳がせると、イエイヌちゃんをひとりにしてしまった期間のことに触れてしまいそうになりますが、今は向き合うべき時間ではない、そう思っ胸にしまい込みます……考えるだけで、切なくなりそうですから。

「んふふうー……」

彼女はわたしの腕をきゅつと抱え込み、そのまま二の腕に頬ずりをしました。擦ったいですし、暑いと言えば暑い。けれど心地よい。

「歩いて行くのも大変ですし、車、お願いしてよかったですね」

そう言つて、彼女の顔を見つめると、彼女もわたしの瞳をじつと見つめていました。そして、目が合うと同時に、彼女は瞳を閉じます。ついでに、こころなしかつんと唇が尖っているようでしたけれども、わたしは意地悪の気持ちとすぐに車が来るぞという両方の思いを込めて、そつとささやきます。

「口で言わないと、わかりませんよ?」

すると、イエイヌちゃんは返事をするよりも先に頬をぷつくりと膨らませて抗議めいた表情を浮かべます。わたしは彼女の可愛らしい表情にくすりと微笑んで、さつと口づけをします。一秒にも満たない、浅い浅い口吻。

ともすれば不満にさえなりそうな短い時間。けれどもイエイヌちゃんは口からふすーつと息を漏らして満足気な笑みになりました。まったく、表情がころころ変わるつたらありません。そういうところが……じゃなくつて。

「ほら、車来ましたよ?」

そう言つてわたしが開いた方の手で道の先を示すと、車のはつきりと見え始めました。距離にすると百メートルもないでしょう。

「むっ……」

イエイヌちゃんは手で屋根を作つてわたしの指の先をじつと見つめます。

そうこうしている内に、車がわたし達の目の前へとやってきました。

最初にセントラルへ行った時と同じ、ピックアップバン（とラッキービーストさんは言っていました）がわたし達の目の前でゆつくりと止まります。

そして、運転席が開いてラッキービーストさんがぴよこりと飛び降りしました。

「オマタセ」

わたしもイエイヌちゃんもぺこりとお辞儀をして、答えます。

「キョウハ、ともえがウンテンスルンダヨネ?」

「ほ、ほんとうですかあっ!？」

イエイヌちゃんが何うようにわたしの顔を見つめます。

「えへへ……そう、です……ちよつぴり心配ですけど……初めてですし」

自信がない訳ではありません。ですが、緊張はしますし、動かなかったらどうしようとも思います。

「ダイジョウブだよ。レンシユウはシタシ、ゴウカクだよ」

そう言ってから、ラッキービーストさんは荷物を積むように促すのでした。

荷物、といいましてもそれほど多いということもありません。普段の肩掛けと寝袋、水筒、それとクツキーの包みくらいのもんです。

確認しつつも荷台に鞆と寝袋を置き、包みと水筒をイエイヌちゃんに持ってもらいます。

「うん、おっけーですね……じゃあ行きましようか、イエイヌちゃん」
「はいー」

イエイヌちゃんはさつと荷台の方へと飛び乗りましたが、わたしはそれを静止します。

「折角ですから、こっちに乗ってくださいよお……」

わたしは助手席のドアを開いて促すと、彼女は「なるほどお」と呟いて助手席へ……何がなるほどなんでしょう、とは聞きませんが……ちよつと気になります。

それはそれとして、という思いを込めてわたしは自分の頬をぺちぺちと軽く叩きます。

「……よっし、運転……!」

運転席の扉を開いて、乗り込もうとするとラッキービーストさんがびよこんと跳ねるのが視界の端にちらりと見えます。

「ワスレナイデ……」

「し、失礼しました……」

ラッキービーストさんを抱えて、助手席と運転席の間にそつと置きます。……流石に不憫に思ったのか、それとも不安定と感じたのか、イエイヌちゃんが彼を抱え込みます。

「ありがとうございます、イエイヌちゃん」

彼女は「いえいえ」と微笑み、それに心を落ち着かせながら、わたしは車に乗り込みました。

ハンドルの隣にあるスイッチを押すとぶるんとエンジンの震える音が響き始めます。そして、ブレーキペダルを踏んでからクラッチを同じように踏み込みます。

「ふ、ふおお……」

イエイヌちゃんがわたしの一挙手一投足を興味深そうに見つめていましたが、そこに意識を向けるよりも、エンストしないことに集中……！

「イエイヌちゃん、揺れる、か、も……」

ギアを入れ替え、クラッチに込めた力を緩めます。そして、ブレーキから足を離すと車体が少し揺れます。そしてアクセルをゆっくりと踏むとエンジンの音に変化していき——クラッチを離します。

「おお……う、動いてますよ！　ともえちゃん！」

「ジョウズジョウズ。ボクもイルカラ、アンシンシテ。アンナイハマカセテ」

イエイヌちゃんは両手をぱちぱちと小さく叩いてくれましたが、それに返事をする余裕ありません。なんと行ってもわたしが今動かしているものは極めて危険で、事故だってありえるものですから。

「い、いきますね……！」

ぶおおんと音をたてて、ゆっくりと道を進み始めました。

わたしが運転している最中、窓を全開にしてイエイヌちゃんが風を楽しんでいます。きつとぱたぱたと髪がなびき、それをくすぐるように書き上げているのでしょう。それを見る余裕ありませんが、けれどもそれを楽しんでいてくれることがわかる。車って不思議です。

「あー！　ともえちゃん！」

イエイヌちゃんが楽しげに声をあげます。

「な、なんです……!?!」

わたしは運転に必死で彼女の方を見ることができません。

「あそこに——さんがいますよ！　ここにちわーっ！」

「へえっ!？」

まともに返事もできません。

……自分が如何に緊張しているのかわかるというもの。ハンドルを握る手も汗で濡れています。イエイヌちゃんもわたしの状態を察したのか「しつれいしました……」と呟きました。

その言葉を聞いて、わたしはアクセルから足を離し、ゆっくりとクラッチを踏み、ギアを落とします。少しばかり緊張が解けるような心地を味わいながら、車の速度を落ち着かせて……わたしはイエイヌちゃんに謝罪しました。

「い、いえ、イエイヌちゃんが悪い訳では……わたしが不慣れなのがいけないんですし……」

「わ、私も集中しすぎちゃって……すみません……」

しゅんとしつつかある空気を割るのはラツキービーストさんでした。

「ともえ、ツギはミギにマガツテネ」

「は、はい……!？」

ラツキービーストさんの指示の通りに道を曲がります。気付けばいつもの分かれ道に来ていたようです。

「あれ?…こっちの道ってお山の方に行く道でしたっけ……?」

イエイヌちゃんがわたしに尋ねます。

「た、確かに……山に行くなら左かと思ってきましたけど……」

この道は山から離れる訳では無いですが、島の外周部へと続く道だった筈です。わたしもそこまで詳しい訳では無いですが、すぐに道を曲がるようなことは無かった気がします。

わたし達の疑問に答えるように、ラツキービーストさんが言います。

「トチュウでマガルヨ。チョット、トオマワリダケド、ヒロイミチをススムヨ」

「な、なるほど……ありがとうございます、ラツキービーストさん」

そう言っただけ視線をラツキービーストさんの方へと向けると、彼はお礼を言うように胴体のレンズをぴかりと一度だけ光らせました。再び視線を前に向けて、進みます。

いつもの分かれ道を右に曲がり、そのまま十分ほど経過して今。多少気持ちに余裕ができてきたのか、時折イエイ又ちゃんの顔をちらちらと伺います。

彼女は先程までと変わらず窓から吹き込む風を浴びながら、遠くの景色を見つめています。わたしも、イエイ又ちゃんも、広々とした草原を見つめているというのがなんとも不思議な気持ちです。歩けば結構な時間を必要とする距離も、車ならあっという間。時間を掛けない移動というのがどこことなく寂しいと感じる心もありますが、今回の目的は移動そのものではありません。

「……イエイ又ちゃん、楽しいですか?」

視線だけを彼女の方に向けて、尋ねます。

「はいー!」

彼女は笑みを浮かべて、わたしの方に顔を向けました。

わたしが「それなら良かったです」と返事をする、彼女はそのまま言葉を続けます。

「前乗せてもらった時もそうでしたけど、ぎゅんって景色が流れるの好きですし……それに、えへへ」

「……それに?」

彼女はわたしの太腿に手をあてます。少しだけくすぐったいのですけれど、心地よいですし、温かいですし、何より運転に支障はありませんから、止める必要もありません。

「それに、ですね……えへへ、ともえちゃんの真面目な顔、見れてうれしいなって」

わたしは視線を前に戻します。決して、照れから来る訳ではないのです。イエイ又ちゃん、さつきキスしたからかテンション高いんですかね……? なんて少しだけ思っています。

「ありがとうございます。……でも褒めても何もありませんよ!」

「そんなつもりで言ってるんじゃないですってばあ」

イエイ又ちゃんは微笑んでわたしに言い返します。

「あ、でも……そうですね——」

わたしは窓を下げて運転席からも風が入るようにしました。風の

吹きすさぶ音で耳がいつぱいになります。まとめた後ろ髪や横髪が風に弄ばれる感覚がどこか心地よい。

「——大好きなイエイ又ちゃんの笑顔が見られて嬉しいですよ、わたしも」

いくら耳の良いイエイ又ちゃんと言えども、びゅうびゅうという風の音で溢れた今の車内ではわたしの言葉は伝わらないはず……：そう思いながら言い切ったわたしは窓を上げ、閉じます。なんとも恥ずかしいので一瞬だけ彼女の顔を伺うと、真っ赤になってそっぽを向いていました。

「……聞こえてました?」

わたしが尋ねると、彼女は小さく頷いたのでした。

わたしはわたしで前を見つめ、イエイ又ちゃんはイエイ又ちゃんです窓の上げ下げをしてなんとなしに黙り込んでしまっていました。それを破るのはやっぱりラッキービーストさんでした。

「ともえ、ソコデトマツテ」

「ひゃ、ひゃい!」

少し嘯みながらもそう言って止まります。少し乱暴になってしまったようで、かくんと小さく車が揺れました。

「チョットマツテテネ」

彼がそう言っている間、周囲を見回すと左手側には金網で封鎖された道路がありました。道路……：これまで通った道と異なり、アスファルトで舗装されていて街頭も幾つか点在している様子です。勿論、手入れが行き届いていないのは言うまでもありません。金網越しに見える限りでもひび割れや雑草などが生えています。

不意にちかちかとラッキービーストさんの胸元のレンズが幾度か光りました。それに眼を引かれ、わたしとイエイ又ちゃんは彼を見つめていたのですけれど……：それ以降、動くことも光ることも、何もありません。どうしたのだろうか? と疑問の視線を送っていると、唐突に金網が左右に開きます。

「ハイッテ、ミチナリダヨ」

「ありがとうございませすー!」

少しだけ驚いてしまいましたが、わたしは道を曲がり、車道を走り始めました。車道に入ると、両脇には林が広がっていて、進むにつれて段々と木々の密度が増していきます。

暫くまっすぐ進んだ後、左にカーブ。ちようどその辺りから道には傾斜が入り始めて、アクセルに込める力が俄に増していきます。カーブを曲がるとすぐに右にカーブ。すぐに左に……つづら折りの山道が始まりました。

何度目かのつづら折りを曲がりながら、ラッキービーストさんの話を聞きます。

曰く、この道は山間部の施設への物資搬入用の通路だったようです。そのため、基本的には立入禁止。今回の目的地までの道は開けてあるが、他の施設へは入れないようになっている、とのこと。

「……なるほどお」

わたしはしっかりとラッキービーストさんの話を聞いていたのですが、イエイヌちゃんはそれよりも外の光景に首ったけの様子です。窓に前のめり気味になつていて、彼女の髪の毛が過ぎゆく梢の影と陽射しとで明滅するかのようです。それに、座ったままなのでそこまで大きい動きでは無いですが、尻尾だって振られるように動いています。

「イエイヌちゃん、何か面白いものでもありましたか？」

わたしが尋ねると、彼女は姿勢を戻してわたしの顔を見つめます。

「これってものがある訳じゃないんですけど、でもお家の周りじゃ見られないものばかりですから！」

くすりとわたしは微笑みます。

「確かに……あつちだと林はあつても森って感じじゃ無いですからねえ」

窓から吹き込む風が段々と冷えてきていて、初夏とは思えないような心地にさえなります。

イエイヌちゃんは小さく伸びをして、車の天井越しに空を見上げて噛みしめるように言いました。

「あと、空がすっごくい近くなつてて、綺麗だなあつて……えへへ」

わたしは少しだけ姿勢を下げ、フロントガラスから窓を覗きます。

真つ青な空が近い、という彼女の言葉もなんだかわかりますが……けれど運転中の身ですから、いまいち景色を楽しむことができせん。

「なる、ほどお……？ 確かに綺麗な空ですけど……降りたらちゃんと見たいところ……」

と、そんな話をしている内に、目的地らしき場所が見えてきました。そこは金網では無く、しつかりとした金属のゲートがあり、そこから伸びるのはわたしの腰ほどの高さがある木製の柵。その手前側には森が広がっていました。まだ道は続いていましたけれど、ラツキービーストさんのお話では一番最初の門とのことでしたから、ここが目的地……。

「アソコのゲートだよ」

わたしはラツキービーストさんの言葉に返事をし、ゲートを潜りました。

ゲートの先に入って暫くの間は建物と建物の間という具合で、景色も何もありません。左手側には木造の小屋のようなものが点在し、その内の幾つかからは機械のパイプや電線が伸びています。倉庫だったり、もしかしたらフレンズさんが寝起きする場所なのかもしれません。右手側には真つ白なコンクリート造の建物。こちらはおそらくは何らかの研究所なのでしょう。

「ははあ……流石に裏口って感じですねえ」

思わずぼそりと呟きましたが、イエイヌちゃんもラツキービーストさんも返事をしません。

そのまま暫く進むと、急に視界が開けます。

「——！ わあっ！ そーげんですよお！ そーげん！ つふう！」
イエイヌちゃんの興奮混じりの楽しげな声に、わたしも思わず頬をほころばせます。

右手側の施設はログハウスめいた建物に変わっており、視界が防がれているという点ではあまり変わりません。けれども左手側では背

の低い草が一面に広がっています。

遠くの方ではラッキービーストさんが整備でもしているのか、ちよこちよここと動いている様子まで……。一面に広がる牧草は途中から下っており、あたかも地平線のように見えました。地平線とはまるで異なるのは、その上に広がる景色でしょう。空ではなく、海でもない。見えるのはわたし達が暮らし、或いは過ぎ、そして旅をしてきた光景が一面に広がっているのです。視界の殆どを草原が締めめていますけれど、お家の近くの林や、セントラルへの道、海辺への道、そして海……。そんなものが視界いっぱい広がって、どうしてだか胸が高鳴るような、苦しいような、こみ上げるような、不思議な感覚を覚えます。もしかしたら『感慨』というひとことで済む感情かもしれませんけれど……。ひとことで済ませてしまいたくない不思議な感覚……。

車を施設に寄せ、停めると、イエイヌちゃんは勢いよくドアを開き、駆け出しました。

「——うわふーっ！」

あちやあと思わず頭に手をやりましたけれど、なんとなく海に初めて言った時の事を思い出して、自然と口角が上がってしまいます。

「まったく、広い所となるといつもはしゃいじゃって……。待つてくださーい」

イエイヌちゃんの後を追いかけるのですが、彼女はもう遠くに居て追いつくのも一苦勞、という具合です。

ある程度進むと、草原……。というよりも牧草地の全容が理解できなくなります。

基本的にはやや勾配がかかっているのは先の通り。ですが、一箇所だけ少しだけ背の高い場所がありました。そこは石造りの土台と木の屋根があつて、ベンチもあるようです。要するに休憩所なのでしょう。彼女はそこに腰掛けてわたしが来るのを待っている様子です。また、牧草地の縁は森に囲まれていて、手つかずの自然と管理された自然とを明確に切り分けているような感覚を覚えます。森の手前には先ほどのゲート周辺と同じような柵が巡らされていますが……。そこらは雰囲気の為だという印象です。というのもあまりにもボロボロ

で何らの意図も役割も見いだせないのです。仮に綺麗な状態であったとしても、背も低すぎますし……。それに何より……。本当に空が近い……。！ 手を伸ばせば雲さえ掴めると思われるような、指の先に、手のひらに、空が触れているようなそんな感覚です。

と、よしなし事を考えながら、休憩所に近づいていきます。

休憩所の屋根の下で、イエイヌちゃんは周囲を警戒するかのよういきよろきよろと見回しています。

「あー！ ともえちゃん！」

わたしの姿に気づいた彼女はこちらへと近づいて来ました。彼女は楽しそうな雰囲気纏ってこそのいるのですが、どうもなにかが気になるのか尻尾はぴんと張っています。

「どうかしました？ 何かあったとか、セルリアン……。とか……。？」

「うーん……。そういうワケじゃ……。！」

そう言っただけ彼女は再び周囲を見回します。わたしも釣られて辺りを伺いましたが、茫漠と広がる牧草があるばかり。

わたしの様子を見て、イエイヌちゃんは口を開きます。

「ともえちゃん、女の子見ました？ 青い髪で、ともえちゃんよりもちっちゃい感じの……。急に居なくなっちゃって」

「いえ、全然……。ここに住んでるフレンズさんですか？」

事実、これまでの景色の中に青い髪の女の子の姿なんて――
「！」

視線を巡らせた先、そこに「彼女」は居ました。

わたしにぶんぶんと大きく手を振って……。表情や服装なんかはぼんやりとしか見えませんが、それでも目立つのは空色の長髪。違和感さえ覚える瑠璃色はどこかで見覚えがある気もしましたが……。それに思い至る余裕ありません。そして、彼女そのまま森の中へと消えていきました。

「……。あつ……。行っちゃいました……。！」

「へっ!? い、居たんですかあ!？」

わたしは指差しながら言います。

「あつちの方に……。空色の髪の毛の……。森に入っちゃいましたけど

……」

イエイヌちゃんは考え込むように「うーん」と唸ります。

「なんだかともえちゃんの事知ってるみたいなき事言ってたんですけどよ
ねえ……名前は聞けなかったんですけど……」

「ど、どういいうことですか……知らない方ですよ……？」

「い、いえ……ともえちゃんによろしくーって言っていましたし、うーん
……あっ！」

イエイヌちゃんは何かを思い出したように手をぱちんと叩きます。

「るり！ るりさんです！」

「るり、さん……？ んー……」

わたしは思わず首をかしげます。

昔々の、まだ記憶を失う前に……そういう子は居ました。何度かお
話もしたことはあると思います。けれど、今ここに居る筈がありませ
んし、何より臆気な記憶の中のその子とは面影も遠目の印象も、何も
かもが違う——。

ふたりして考え込んでいたわたし達ですが、そんなわたし達は急に
声をかけられました。

「こんにちわ。……珍しいですね、どちらから来たんですか？」

身体をぴくりと震わせながらも、わたし達は声の方向に振り向きま
した。わたし達が振り向くと、ちりんという鈴の音がひとつ響きま
す。

「ど、どうもこんにちは……」

「し、失礼しました……わたしはともえです。こちらはイエイヌちゃ
ん。よろしくおねがいします」

わたし達は小さく会釈をし、彼女の姿を見つめました。彼女はおっ
とりとした表情でこちらを伺っています。真つ黒な瞳は、淑やかに光
を湛えています。

また、垂れた耳が頭から外向きに垂れていて、耳の間は白い髪の毛
が帯のように伸び、それ以外の箇所は真つ黒の髪がボブカットのよう
に整えられていました。よく見ると、高い位置で白い髪の毛がちよん
まげのように後頭部で結われています。白と黒の斑のノースリーブ

のシャツに白いフリルが着いた黒い短めのスカート。ロンググロブやニーソックスには服と同じような斑があり、背中から覗くのは先端に鈴が着いた、細い尻尾。何より目立つのは胸の大きさでしょう。おそらく、今までに出会ってきたフレンズさんの中でも有数の「サイズ」……。いえ、別に？ 悔しくなんて……。というかむしろ困惑の思いの方がつよ——じゃなくなつて！

わたし達の挨拶を聞いて、彼女は申し訳無さそうに眉尻を下げました。

「いえ、す、すごい顔してたんで、びっくりしちゃいました……。こちらこそごめんなさい」

彼女はペこりとお辞儀をしました。顔をあげた彼女は、わたしとイエイヌちゃんの顔を交互に見つめてからにつこりと微笑みます。

「ゴリラさんからお話は聞いてます。ともえさんとイエイヌさんですね。わたしはホルスタイン・フリーシアンと言います。フリーシアンで良いですよ、長いので」

「！」

わたしは会うべき人に会えたことに身体を思わず跳ねさせます。

「！ ともえちゃん！」

どうやらイエイヌちゃんも同じだったようで、彼女はわたしの顔を見つめました。

「ど、どうかしました……。？」

一歩前に踏み出して、わたしは彼女の手を取ります。

「お会いできて良かったです……。！ お陰でクッキーが作れました！」

わたしはイエイヌちゃんに目配せをします。彼女は意図を汲んでくれたのか、ポケットの中から小袋をひとつ、フリーシアンさんに手渡します。

「これ、ともえちゃんと私で作ったんです。おすそわけ、です！」

きよとんとしながらもフリーシアンさんはわたしから手を離し、クッキーを受け取ります。

「えつと、くつきー……。ですかあ」

わたし達はクッキーの説明をしながら、休憩所へと移動します。爽やかでひんやりとした風がわたし達の背中を押すようにそつと吹くのを感じました。

後日談4―2

わたし達は休憩所のベンチに腰掛けて、のんびりとした空気を満喫していました。

フリーシアンさんは丁寧に包みを開き、クッキーの香りを楽しむように鼻を近づけます。

「……甘い匂い……ジャパリまんとは違うけど……うん、いい香り」

香り自体を味わっているかのようにおっとりとした仕草には、[〃]牧場らしさ[〃]と言えるような雰囲気を感じます。

「ささ、どうぞどうぞ」

イエイヌちゃんが勧めると、フリーシアンさんはクッキーをひとつつまみ、口に近づけます。そして、さくりとフリーシアンさんがクッキーを食む音が響きました。幾度かの咀嚼を終え、こくりと飲み込んだ彼女は頬をほころばせて声をあげます。

「……んーっ!」

楽しいのか、それとも興奮しているのか、彼女の尻尾が小さく揺れているのが視界に入りました。ちりんちりと楽しげな鈴の音が心地よく響きました。

「どうですか?」

わたしが尋ねると、フリーシアンさんは笑みを浮かべたままわたしに顔を向けます。

「美味しい……今までで一番かも、です」

わたしは思わず笑みを浮かべてしまいました。それはイエイヌちゃんも同じだったようです。彼女も満面の笑みでわたしの手をきゅつと握りました。わたしもイエイヌちゃんも、知らず「良かったあ」と小さく呟いていました。

フリーシアンさんが手をぱちんと叩きます。

「あ、そうです! お礼にミルク用意しますねえ」

「い、いえ、お構いなく……」

イエイヌちゃんの言葉を聞きながら、わたしは辺りの建物を伺います。決して長距離の移動では無いにしても、わざわざご足労願うとい

うのも失礼です。

「手間も時間もおかけしてしまいますし——」

「いえー、すぐですから！ ちょっと眼をつむっててくださいねー」

彼女はわたし達の言葉を気にせず、ほらほらと両手を促すように動かします。

「す、すぐ……？」

わたしは疑問に思いながらも眼を閉じます。イエイヌちゃんもきつとわたしに倣ったのでしよう。少ししてから「うんしょ」とフリーシアンさんが小さく声を出しました。

「はーい、大丈夫ですよー」

それこそ先程の掛け声から殆ど一瞬。数秒の間さえ置かず放たれた言葉に、どうしても困惑の思いを抱いてしまいます。

「ど、どういうことで……す……っつて——」

フリーシアンさんは両手に瓶を持ってわたし達に差し出していました。

「すぐって言ったじゃないですかあ、うふふ」

どこか満足げな顔でしたけれど、手品や魔法の類のように思えてしまいます。

「ど、どこから出したんですか……？ ニオイも急に……」

イエイヌちゃんが周囲を不思議そうに見回していました。そんな様子を見ているフリーシアンさんはぴくりと身体を跳ねさせて視線を逸します。

「ど、どこからって、も、もう……やーですよーまったくう」

わたし達の頭上には「？」のマークが浮かんでいたでしょう。恐らく、誰が見てもそれを理解できた筈です。

「——と、ともかくー、どうぞ、飲んでください」

ほらほらとやっぱりを動かしながらフリーシアンさんはわたし達を見つめます。

「で、では——いただきます……！」

わたしもイエイヌちゃんも不思議と揃って動き、ひと口含みます。少しだけひんやりとした液体が舌に触れ、仄かな甘味と独特の香りが

広がります。とろりとさえしているかのような感覚を嚙下すると、お腹の方へと冷感が下つていき、収まりました。

「……い、美味しいですうー!」

イエイヌちゃんがはたはたと尻尾を揺らしてフリーシアンさんに微笑みかけました。

「うまく言葉に出来ないんですけど……何とか、新鮮……?」
「もかく美味しいです!」

フリーシアンさんはわたし達の言葉に嬉しそうに頬を綻ばせ「うふふー」と満足そうに声を漏らします。

「よかったあ……苦手な方も居るって以前聞いたことありましたので、お口にあうようで嬉しいです!」

わたしは口の中に残る味と香りを堪能しながらも、ふと気づいたことがありましたのでそつとイエイヌちゃんに顔を寄せます。

「イエイヌちゃん、じつとしてくださいね」

「へ? は、はい」

きよんとした彼女を尻目に、わたしはそつと親指で彼女の上唇をなめます。指には白い跡が残って、わたしはそれをズボンの裾で拭きます。

「おひげ、ついてますよ」

「し、失礼しました……」

わたしの言葉に、イエイヌちゃんは慌てた様子で口の周りを拭きました。わたしもフリーシアンさんも思わず微笑を浮かべてしまいました。

一拍程の間をおいて、フリーシアンさんがわたし達を訪ねます。

「ところで、くつきー、でしたっけ? どういう風に作るのか教えてもらってもいいですか?」

「ええ、構いませんよ。ええつと、まずは――」

わたしは必要な材料や調理の手順、ようするにレシピを思い出しながらフリーシアンさんにお伝えします。イエイヌちゃんはフリーシアンさんと一緒に相槌を打ったり、わたしの説明に補足をしてくれたりという具合です。

わたしの言葉とフレンズさん達の言葉は意味がズレてしまうことがあります。例えば「ごはん」という言葉ひとつとっても、彼女たちにとってはジャパリまん以外に指すものは多くないでしょう。けれども、わたしからすればその言葉の持つ意味合いは比べようもなく広いはず。むろん、知識をひけらかすつもりはありませんし、彼女たちを馬鹿にするつもりもありません。ともかく、イエイヌちゃんが言葉を補ってくれるというのは非常にありがたいことです。わたしと、他の方々をつなげてくれるというと、ちよつと大げさですね……？

「——と、こんな感じですよ」

フリーシアンさんはふんふんと頷きながら考え込んでいます。

「あの、私からも質問良いですか……？」

イエイヌちゃんがフリーシアンさんに尋ねます。はつと少しだけ身体をぴくりとさせて、彼女はゆっくりと頷きました。

「ええ、なんででしょう？ ……あ、ミルクについては秘密ですよ？」

イエイヌちゃんは苦笑いを浮かべながらも口を開きます。

「あはは……わかりました。……えつと、クツキーのことが気になるのはわかるんですけれども、どうして作り方を……？」

「そういえば……。もし良ければわたし達のお家に来て、一緒に作りますか？ 機会があれば、ですけれど……」

今までお譲りしてきた方からは、感想をいただけただけ他にも色々聞かれましたが、コレほどまでに詳細に作り方を尋ねられたことはありません。

フリーシアンさんは視線をわたしからちらりと外しました。

「んつとですね、興味がありそうな子が居て……ジャージーちゃんつて——」

「呼んだかね」

不意にわたし達の後ろから声がかかけられました。

「ひゃっ！」

わたしは驚きで身体を跳ねさせてしまいました。イエイヌちゃんはペこりと会釈を返し、フリーシアンさんは胸元で小さく手を振って

います。

振り返るとそこには腕を組んで立っているフレンズさんがいました。

彼女は肩まで伸びたベージュの髪の毛で、もみあげは小さな赤いリボンで纏めています。頭の横側に近いところからは垂れた大きなお耳。やや釣り眼気味の半目には好奇心が見え隠れしているように思われました。また、彼女は白衣に似た丈の長い上着を一枚羽織って居ますが、少しばかりベージュの色が混じった所もあります。羽織りの下には紺色のベストに赤色のスカート。スカートの裾には白いフリルがあり、スカートから伸びる足は膝上までであるソックスを履いています。真つ黒なローファアの背後には髪の毛と同じ色をした尻尾がゆらゆらとしています。尻尾の先にはフリーシアンさんと同じような赤いリボンが結われていました。

「やあ、フリーシアン。それと……イエイヌともえ、だったね、よろしく。私がジャージーだよ」

「こちらこそよろしくおねがいます、ジャージーさん」

イエイヌちゃんが座ったままの姿勢でお辞儀をしました。そして彼女はそのままわたしの方を手で示しました。

「で、こちらがともえちゃんです」

「失礼しました、気づかなくて……よろしくおねがいます、ともえです」

挨拶を済ませると、ジャージーさんはフリーシアンさんの隣に腰掛けました。フリーシアンさんは既にスペースを作るために少しばかり横にズレていたようです。……そのお二人のやり取りだけで彼女たちの間柄が何となく察せられます。仲良しさん、なのでしょう。

ジャージーさんは「ふう」と小さく息をついてからわたし達を見つめます。その瞳は新しい世界に触れたとき特有の煌めきのようなものを伴っていました。

「それでだねー！」

彼女は前のめりになりながら言葉を続けます。

「私にも詳しく教えてくれないかな？ りよーりというのは興味があ

るよ」

「と言いましても……他に作れそうなものは——」

わたしが腕を組んで考えていると、フリーシアンさんの言葉がちらりと耳に入ります。

「まったく、困ってるじゃないですか」

「いやいや、知識を増やしたいのは当然だろう？」

イエイヌちゃんも乾いた笑い声を漏らしていますが……。

さて、他に何か作れるものでもあるのでしょうか？　そもそもこのことを言ってしまうえば、火がここではない以上、なかなか難しいお話です。材料だって圧倒的に不足していますし……

「ごめんなさい、ジャージーさん——」

その後、わたしは彼女に無理だと判断した理由をお伝えしたのですが……彼女の表情はみるみる内に残念そうな渋いものになっていきます。

「——というわけで、ちよつと難しいかな、と……。わたしにもうちよつと知識があればよかつたんですけれども……すみません……」

ジャージーさんは首を振り、口を開きました。

「いやいや、ともえの所為じゃ無いよ。教えてくれてありがとう」

フリーシアンさんはジャージーさん咎めるかのように、肩を小さくすくめました。

「そうですね、ジャージーちゃんが知りたがりなのが悪いんです」

「い、いえ、それは悪いことなんかじゃ……」

わたしの言葉にイエイヌちゃんがぱちんと手を叩きます。

「でしたら、皆さんで図書館に行く、というのはどうでしょう？」

イエイヌちゃんの提案にジャージーさんは「ほほう」と楽しげに吹き、フリーシアンさんは申し訳無さそうな顔を浮かべます。

「なるほど、確かにそうですね……小麦粉と牛乳を使った料理なら……時期を選べば作れそうですね……となれば、おふたりにも協力してもらったほうが良いですし……その時はご一緒にしてもらえますか？」

わたしがそう言うと、ジャージーさんが嬉しそうな表情を浮かべな

がらわたしの手を握ります。

「そうか！ いいね、その時が楽しみだ。こちらこそよろしく頼むよ」
そう言うのと、次に彼女はイエイヌちゃんの手を握ります。

そしてきゅつと強めに握って、手を離れた彼女を見て、わたしは口を開きました。

「いえいえ、お役に立てるなら、ですよ。……となると——」

その後、わたし達は具体的な連絡方法や、目安の時期などについて話を進め始めます。そのお話が終われば旅の話をしたり、この辺りのことについてお話をしたり……ゆるやかに時間は過ぎていきました。

気付けばもう時間は夕方。

掴めそうなくらい近かった空は燃えるような茜色に染まり、手を伸ばせば自分の手が燃えてしまうのでは無いかと、どこか躊躇われてしまいくらいです。時折、吹く心地よいひんやりとした風が、緑色の匂いで鼻をくすぐって来て……思わず浸ってしまう程。茜の中に在って、緑色の風というのも不思議な話です。

それに、梢の揺れる音もどこか違うのでしょうか、お家の周りで聞こえる風の音は絵画で例えるならば背景や陰の色、主線を際立たせる為のもの、けれど、自らの存在を主張する音。そんな印象です。

一方、こちらで聞こえる音はと言えば、さらさらとか細げで、けれども耳を傾ければしつかりと聞こえるものでした。先程の例で言うならば、陰や主線にはならないくらいのか細い存在感なのに、存在に気付けばアクセントとして胸にすんと落ちてくるような、差し色みたいな印象です。……この比喩が伝わるのかどうかはわかりませんが、わたしの感覚に自身があるワケでもないのですけれど、そう思えました。

フリーシアンさんが立ち上がりながら言います。

「さて、お話はコレくらいにしましょうか」

「っと、もう夕方かね。時間が経つのは早いねえ、本当に……」

どこかしみじみとした雰囲気を感じながらジャージーさんは言葉を続けます。

「ともえとイエイヌはどうするんだね？ 私達は日が沈んだら寝るけ

れど……アテはあるかい？」

わたしもイエイヌちゃんも、ジャージーさんの言葉に顔を見合わせます。

「そういえば……どうしましょう、ともえちゃん」

「完全に忘れてましたねえ……荷台に寝ます？　寝心地悪いかもですけど……」

悩むわたし達に、フリーシアンさんが手をぱちんと合わせて、言います。

「それならいいところあるんですよ、最近使っていないんですけれど……とりあえず行ってみます？」

「ん？　眠れるような所あったか……？　あー、あそこか……」

ジャージーさんの言葉に少しだけ先行きの不安さを感じましたけれども、他にアテもないわたし達です。イエイヌちゃんの顔を伺うと、不思議そうに眉間にシワを寄せてわたしの目を見つめ返してくれました。暗にわたしに従うのだと主張しているように受け取れますが、なんとも言えませんねえ……。

「ええつと……折角ですので、案内していただけますか？」

フリーシアンさんは「ええ」と微笑み、立ち上がったのでした。

牧草のふわふわとした心地を楽しみながら、フリーシアンさんの後に続きます。

「この先の……えつと、あそこです」

彼女の指差す先には何棟かのログハウスがありました。見た所、広さとしてはわたし達のお家と比べると同程度か少し広いくらいです。

「中、入れるんですね」

利用された痕跡、とでも言えば良いのでしょうか？　ログハウスのどれもがそういった痕跡を残していないことに気付いたのか、イエイヌちゃんが聞き返しました。フリーシアンさんは頷いて、イエイヌちゃんに返事をします。

「この前……と言っても結構前ですけど、急に寒くなった時あったじゃないですか、下の方で雪が降ってた日」

おそらくは、わたしが施設に眠りに行った日の辺りを指すのでしょ

う。わたしもイエイヌちゃんも返事をして話を促します。

昔を思い出すかのように腕を組んでジャージーさんが言葉を引き継ぎます。

「あの時は私もフリーシアンも冬の用意してなくてなあ。で、あの中で過ごしたんだ」

フリーシアンさんは「寒かったよねえ」と身体を縮こまらせてぼやきました。ジャージーさんは小さく首肯します。

「二応、見ての通り私達はやり過ごせたがね」

……あの時の異常気象の原因とその解決方法。それを他のフレンズさんには話したことがあります。知っているのはイエイヌちゃんとドードーさんとゴリラさんくらいでしょうか？　もしかしたら察しているフレンズさんもあるかもしれませんが……。

少しだけ間を置いて、イエイヌちゃんが口を開きました。

「なるほど……こっちの方だと寒そうですね……」

「そうなのよ！　雪だって降るし、風も冷たいし……もー大変でしたよお……」

フリーシアンさんはそう言って、わたし達から一番近くのログハウスの扉に手をかけました。

「うん、開いてますね」

がちやりと彼女は扉を開いたのですが……扉を開いた先を見て数秒ほど固まり、大きな声をあげます。

「……あーっ！」

「すわ！　どうした！　……そうかあ……そうなるのかあ……」

ジャージーさんが慌てた様子でフリーシアンさんに駆け寄りますが、彼女も中を覗き込んで数秒固まり、振り返ります。

「……すまん」

わたし達は事態を飲み込めず、ふたりして首をかしげたのでした。困惑を胸に歩みを進め、フリーシアンさんとジャージーさんの背中越しに部屋の中を覗き込みます。

「……なるほど」

わたしの言葉にイエイヌちゃんも思わずぼやきます。ただ、わたし

と違って少し楽しげな声でした。

「もつもふ……ですねぇ……」

フリーシアンさんとジャージーさんの乾いた笑い声が耳に届きました。

部屋のおよそ半分ほどを占めていたのは、もふもふとした白い毛玉でした。「最近使われていない」という言葉が意味するように、中は少しばかり埃っぽくもありましたが、汚れに意識が向くよりも遥かに存在感のある白い毛玉……。柔らかそうですし、中に入れないというほどでも無いのですが……。

「えつとですねえ……そのう——」

フリーシアンさんは申し訳無さそうな顔をして、わたし達にお話をしてくれました。

要約するところです。

雪の降った日に寒いからということでのログハウスに集まった。その折、一緒に避難したヒツジさん、アルパカさんと一緒に過ごしたのだそうです。その晩、みな口々に言ったのだそうです。「寒い」「毛があつたかそう」「ずっと残ればいいのに」「次の冬はあつたかいだらうね」と。

異常気象はすぐに終わりましたが、今年の冬が終わった時（恐らくわたしが目覚める前後でしょう）に刈られた毛を「残っていれば良いな」ということでこのログハウスに残しておいたのだそうです。ヒツジさんとアルパカさんだけでなく、他の生え変わりをするフレンズさんのものもあつたようで、その量は見ての通り……。

フリーシアンさんはぱちんと両手を合わせ、わたし達に謝罪します。

「普段は消えちゃうので忘れちゃってたんです……」

それはそれで不思議なんですけどね？ とは口にしません。

「いえ、ふわふわで気持ちよさそうなくらいですし、ねぇ？ イエイヌちゃん」

「はいー… ジャンプしていいですか!？」

ニコニコとしながらイエイヌちゃんは尋ねますけれども……

「流石にそれはどうなんでしょう？」

ジャージーさんは困ったように首をかしげて考え込み、その後わたし達の方を伺います。

「んー……邪魔になって申し訳ないんだが……大丈夫そうか？ 捨てるには惜しいし、かと言って他に置き場も無いんだ」

「大丈夫ですよ。先程も言いましたけれど、むしろ気持ちよさそうなくらいですから」

わたしの言葉にイエイヌちゃんも頷きます。

「後は……そうですね、水場とジャパリまんを配ってる場所を教えてくださいただければ大丈夫です。これでも野宿だっけてしてますから、ヘーキです」

「そうか……狭くなるが、すまん」

「私もすっかり忘れちゃってました……すみません……」

おふたりともしゅんとしています。

「いえいえ、気にしすぎですって。わたし達だっけて泊まるつもりではいましたけれど、無計画過ぎましたから……」

「そうですそうです！ それに、えへへ、ふはふはしてて気持ちよさそうか思っちゃったり……」

フリーシアンさんが「ふふっ」と小さく笑い声を漏らします。

「それは保証しますよー。ね、ジャージーちゃん」

ジャージーさんはフリーシアンさんの言葉にうんむと頷きます。

「私達もアレくらいもこもこになりたいくらいだね。冬が楽そうだ」

ちらりとイエイヌちゃんの視線を伺います。彼女は微笑みを浮かべていますけれども、よく考えたら夏場は大変そうな格好です。

「……夏場大変そうですよ……？ イエイヌちゃんだっけて麓でしんどそうにしてましたし」

「です」

イエイヌちゃんの言葉に、ジャージーさんは「そうかあ」と残念なのか楽しんでいるのか、定かでは無い言葉を漏らしましたけれど、すぐに気を取り直します。

「——よっし、寝る場所が決まったということ……後は水場とジャ

パリまんだったか、案内しよう」

わたし達は「お願いします」と揃って声を出したのです。

その後はおふたりの後に続いて案内をしてもらいました。水場もジャパリまんの配布場所もさほど離れたところには無く、しばらくの逗留であれば何の不自由もなさそうです。再びログハウスの前に案内してもらった頃には既に陽は沈みかけていました。

「じゃあ、また明日かな、ふあ……あ」

ジャージーさんに釣られたのか、フリーシアンさんはあくびを噛み殺すようにしました。

「……ですねえ、あ、そうです、おふたりは明日の予定とかあるんですか?」

「んー……特には決まってないですね。クッキーをお渡しするのがそもそも目的でしたし」

イエイヌちゃんの方を伺うと彼女も同じことを考えていたのか、わたしの顔を見つめ返して頷きます。

「あ、でも絵は描きたいですかね……折角ですし。後は散歩したりとか……?」

「ともえちゃんともえちゃん」

「どうかしました?」

聞き返すと、イエイヌちゃんは少しだけ悩んだ素振りをしました。が、口を開きます。

「その……走ったりとかしたい、です……大丈夫ですか……?」

わたしは思わず、うふふと微笑み返してしまいます。

「勿論ですとも」

イエイヌちゃんは「やつほう」とバンザイします。どうしても微笑んでしまいますよねえ。

「と、言う感じです」

フリーシアンさんはくすりと笑みを漏らしました。

「本当に仲が良いんですねえ。良ければ色々ご案内でもと思いましたが。ジャージーちゃんも一緒に、ですよ?」

最後の方はジャージーさんに視線を向けて言っていました。それ

を受けたジャージーさんは「もちろん」と言わんばかりにゆつくりと頷きます。

おふたりの提案はなんともありがたいお話です。知らない所を探索するというのは楽しいことですけれども、言い方を変えると『当て所無く彷徨う』ということと……なかなか大変なことですからね。「ありがとうございます！ でしたらお言葉に甘えて……時間はどうしましょう?」

わたしの言葉に、フリーシアンさんは頬に手をあてて、しばらく考え込んだ様子を見せました。

「ええっと、いつでも大丈夫ですが……そうですね、お昼前で良いですか? 私もジャージーちゃんもご飯はゆつくりなので遅くなっちゃいますし……」

「わかりました! イエイヌちゃんも大丈夫ですか?」

「はい! フリーシアンさんもジャージーさんも、ありがとうございます!」

フリーシアンさんは「いえいえ」と言つて、腕を組んで考え込みます。

「となると……どこへ行きましょう? 案ありますか? ジャージーちゃん」

急に話題を振られたからか、ジャージーさんは些か驚いてしまったようです。

「ん? 私に聞くのか……? ふーむ、むむ……」

とは言え、彼女達にとつてはもう眠い時間なのでしょう。おふたりとも揃つてふああと大あくびを漏らします。

「すみませ……ふあ……ん……今日はこの辺りで失礼します、おやすみなさい、ともえさん、イエイヌさん」

「すまんね、ふたりとも。明日はよろしく頼むよ。どこに案内するかは考えておく。じゃ」

わたしとイエイヌちゃんはナワバリに戻っていくフリーシアンさんとジャージーさんの背中に手を振つて見送つたのでした。

後日談4―3

おふたりと別れてから、時間は経って夜。遠くから虫の声が聞こえて穏やかでのんびりとした牧場の夜というのも今まで過ごしてきた世界とは異なつた趣を感じます。それに、外から差す月光がログハウスをぼんやり照らしていて、なんとも幻想的な光景です。

風の音は聞こえないのですが、ずっと上空では風が強いようでごんぐんと雲が流れています。ですから、ログハウスに差し込む光がゆつくりと辺りを明滅させているかのようで、その為にますます情緒的な空気を強まっているのだと思われました。

「……眠れない」

ぼそりと呟いたわたしの言葉は、頭の隣に積まれた羊毛に吸い込まれていきます。

「……」

視線を隣に向けると、寝袋の中にすっぽりと収まったイエイヌちゃんがすすうと眠っている顔が見えました。月光の残滓に照らされた彼女の顔は穏やかそのものです。イエイヌちゃんの熟睡の理由は、もしかしたら脇に寄せておいた“ふわふわ”に頭を乗せているからかもしれません。わたしはなんだか申し訳なくて頭を床にあてています。勿論寝袋越しに、ですが。

「……はぁ」

何というか、寝床が変わって眠れないなんてことは無いはずなんですけれども……旅だつてしてきましたから。

「仕方ない、ですかねえ……」

一旦外に散歩にでも行きましようか。

わたしはそう考え、音を立てないようにそつと寝袋から身体を出し、外へを向かいました。

外に出ると、ひんやりとした夜の空気がわたしを迎えます。

「んー……っー」

伸びをすると、こわばった身体に冷えた空気が染み込むように感じられました。

「さて、と」

ぐるりと周囲を見渡すと、夜の帳が降りたという言葉の通り真つ暗です。けれども、ささやかな月光に照らされた牧草や建物の壁は冷たくも柔らかな光を放っていました。

「知らないところに行くのは、うん、迷子になりそうですし……」

誰に言うでもなく呟いて、わたしは昼間に居た休憩所を目指して歩みを進めます。ついでに、ランタンにも光を点けておきましょう。星や月の光があると言えども夜は夜。気をつけませんと。

昼間と変わらないふわふわとした牧草を踏みしめて進むと、さほどの時間もかからず休憩所へと到着しました。ベンチに腰掛けると、じんわりと木材の冷気がお尻から登ってくるようでした。

視線を麓の方へと向けると、真つ暗なベールで隠されたかのように闇だけが広がっていました。ですが、ところどころに光点があるのは、まだ通電している街灯やバス停の光でしょう。

そして、視線を遠く遠くへと動かしていくと、きらきらと輝く海面が見えます。海も砂浜も、ずっと遠くですからさざなみの音も聞こえませんし、砂浜を歩く時のぎゅっという音もわかるはずありません。けれど、きらめく海面を眺めているとそれだけである場所の音や空気が頭に過ります。

「——でも、うん……懐かしい……」

考えてみれば、旅の最初の目的地だったワケですから、大事な思い出の場所でもあるのです。お父さんの描いた絵を見て、わたしが絵を描きたくなって、そんな過去からの思いが伝わった場所でもあるのです。不思議としみりした気持ちになった私の胸に「また海へ」という思いがどうしても過ぎってしまった程です。

ここから見た景色を描くのも、良いのかもしれませんが、だって、旅路の半分を——と思っている内に月が雲に隠れ、途端に辺りに陰が訪れます。周囲の景色が一面に暗くなり、些かの驚きの思いを抱いていました。

が、不意にわたしは声をかけられました。

「コーンばーんわっ」

気配さえ感じなかったのに、あまりにも唐突でわたしは身体をぴくりと跳ねさせてしまいました。

「ひゃっ！」

声の主はくすりと笑ってわたしの隣に腰掛けます。わたしと彼女の間には、ひとり分の余裕を開けてあるのが、彼女の遠慮の気持ちなのか、それとも警戒の現れなのか判断に困ってしまいます。

「あはっ、ごめんねえー」

鼻にかかった、甘い声に少しばかり間延びした言葉……一瞬だけドードーさんの事を思い出しましたが、けれど、まったく聞き覚えの無い声です。

「……どなたですか……？」

パークの中である以上、邪悪な存在だと疑ったワケではありません。多少の疑問の思いこそありますが、それ以上に相手に対する好奇心のほうが勝っているくらいです。脇に置いておいたランタンの光を声の主の方へと向けると、暗がりの中に声の主の姿が浮かび上がります。

はっと息をのむほどの、綺麗な青い髪。青空色の髪。瑠璃色の髪。満面の笑みを讃えた幼さが強く残る少女の顔。垂れ目から伸びる視線はわたしの方へと注がれています。好奇心というよりも、きつと情愛や親愛の思いが多分に込められているのでしょうか。一切の警戒の色を含まないことは、わたしにさえわかりました。

「あーそっかそっかあ、はじめましてだったねー……あたしはるり、よろしくね、ともえちゃんっ！」

何というか、距離が近すぎる……気が……？ けれど悪い子ではないのかな、と感じました。

「え、ええ……よろしくおねがいます。というか、初めて、ですよね？ どうして名前を——」

わたしが尋ねると、彼女はいたずらっぽい笑みを浮かべます。

「んふふーイエイ又ちゃんとお話したのは知ってるでしょ？ あの時にねー」

「なるほど……びっくりしちゃいましたよ、急で」

「ごめんねえつ。えへへ、ともえちゃんとお話出来て嬉しくて、つい」
そこまで言われて悪い気はしませんけれども、なんだか不思議な子
です。

「そんなに嬉しいですか？ 別にお昼にだっってお話は出来ましたよ
？」

彼女は腕を組んで悩むような表情を浮かべます。

「んー色々忙しいのよ？ あたしも。うんうん」

「は、はあ……そうですか……」

何というか会話が噛み合っていない気がしてしまいます。

言葉に詰まったわたしに、るりさんが尋ねました。

「眠れなかったの？」

心配そうな表情。この短時間の間に彼女は表情がころころと変わ
ります。少しオーバーアクションなきらいもあるのは、可愛らしくも
ありますが、あざとさのようなものも感じてしまいます。

「ええ、久しぶりに遠出して興奮しちゃってるんですよ、きつと」

自虐めいた呟きに、彼女は小さく笑います。

「あはは、なんだかわかるなあ」

「るりさんも旅を？」

わたしが聞き返すと、彼女はむっとした表情になりました。

「る、り、ちゃ、ん！」

「は、はあ……るり、ちゃんも——」

途端にるりさんも表情をにこやかなものに戻します。

「——旅に出たことがあるんですか？」

「ううん。行ったことがあるだけだよ」

彼女はベンチに腰掛けた所為で浮いた足をぱたぱたと前後に揺ら
します。

「サバンナも行ったしい、草原も行ったしい……山とか、湖とか！
色々行ったよおー」

……えっへんと言わんばかりに腰に手を当てる彼女でした。

わたしよりもずっと幼い姿をしていますけれども、ドードーさんの
ように、わたしよりも年上さんなのでしょう。

「……！ わたしよりもベテランさんなんじゃ……？」

わたしの言葉に彼女は首を振ります。

「それはね、違うよ」

彼女の声色が変わった気がしました。

「旅じゃないよ、あたしのは。行っただけ。わかるかな、わからないかな、どっちでもいいけど」

彼女の顔からは表情が消えていました。けれどわたしの目をじつと見つめています。わたしには、それがわたしの何かを伺っているように見えました。

「……旅と移動の違い、みたいなことですよね？」

「うん、まあ、そうなのかな」

彼女はすうつと息を吸って、吐き出します。その瞬間にはもう、彼女の視線は海の方へと向いていました。

「旅っていうのは、気持ち繋がったり、何かを手に入れたり、前に進んだり、そういうことをして初めて旅だと思うんだ。あたし。だから、何も無いあたしがしたのは、移動。どう取り繕ってもそれ以上のものじゃない」

彼女の様子があまりにも急変したので、心配に思ったわたしは、彼女の背中に手を伸ばします。

「だ、大丈夫、ですか……？」

はっと彼女はわたしの方へ向き直ります。

「！ さ、さわら——」

彼女が言葉を言い切るよりも先に、わたしの手は彼女の背中に触れていました。触れた途端、彼女はびくりと身体を跳ねさせます。そして、不安とも焦りとも取れない表情をわたしに見せます。そんな顔を見せられて、一層わたしには彼女の気持ちが心配になります。何か、思いつめたような、困りきったような、そんな顔ですもの、手助けになれば、そう思ってしまう。

「だいじょーぶですよ、落ち着いてください」

彼女の中で、何かが燻っている。それをぼんやりと感じました。

彼女の背中をひとつ撫で、ふたつ撫で、そうしている内に彼女の表

情は困惑の色を残したままでしたが、徐々に明るいものへと変わっていききました。ほのかに温かくわたしやイエイヌちゃんよりもずっと小さな背中を撫でていると、次第に彼女の気持ちも落ち着いて来たようです。

「何か困ったことでもあるなら、相談してください？ 力になれるかはわかりませんが……辛そうにしてる方をただ見てるっていうのは、わたし、嫌ですから」

彼女はわたしの眼をじっと見つめて、口を少しだけ震わせましたが、すぐに首を振って立ち上がりました。それこそぴよんと飛び跳ねるかのようにはげさに。

「……ごめんね、心配させちゃって……。いよっしー！」

るりさんは自分の頬をぺちぺちと数度軽く叩きます。

「もうだいじょーぶ！ えへへ」

「本当に大丈夫ですか……？ 無理はしちやダメですよ？」

彼女は「んふふー」と満面の笑みを浮かべます。

「へーきへーきい。あ、そうだ！ ともえちゃん！」

彼女はわたしの前に歩きます。

座ったままのわたしの視線よりも少し上にある彼女の瞳を、わたしは見返します。

「なんででしょう？」

彼女は少しだけ悩んだのでしよう、一瞬だけ視線をわたしから外しましたが、すぐにわたしの顔に視線を戻します。

「あのねえ、えへへ、しつれーだったら、ごめんねえ……その、ね……握手、したいな……」

彼女はわたしに手を差し出して、そう言いました。

「それくらい、全然」

わたしは立ち上がって彼女に手を差し出します。

彼女はゆっくりとまるで怯えているかのように、まるで触れることを恐れているかのように、ゆっくりと手を伸ばして――

「！ごめんね！ また今度！」

さっと手を引き戻して、彼女はだあっと駆け出してしまいました。

「へ？ えつと……」

みるみる内に彼女の背中が小さくなっていきます。

「き、気をつけてくださいねー！」

そう声をかけるので精一杯でした。彼女は後ろ手で大きく手を振って応じてくれましたが……。

ぽかんとしながら彼女の背中を見つめていると、あとという間に彼女の姿は森の中へとかき消えます。

「不思議な子……」

そう呟いた頃に、るりさんの消えた方向と反対の方から、ラッキービーストさんがとてと歩いてきていました。

「ともえ、モウオソイヨ」

わたしとイエイヌちゃんを案内してくれた方では無いでしょうけれど、わたしを案じる言葉にどこかありがたさを抱きます。

「はい、もう寝ようと思います……。巡回ですか……。？ お疲れさまです、ラッキービーストさん」

彼はお辞儀をするように小さく身体を揺らして、別の方向へと歩いていきました。

「——ん、ふ、わあ……。戻りましょ……」

俄に覚え始めた眠気のせいで、帰りの道のりは往路にもましてふわふわとした心地でした。

ログハウスに戻ったわたしは、すぐに寝袋に潜り込んで瞳を閉じました。すぐにでも眠れそうな、そんな感覚の中でちよつとした疑問が頭を過ります。

フレンズの皆さんは、理由はともかく、自分の種としての名前と個としての名前が同じです。例えば、それこそ「イエイヌちゃん」のように……。そして、今まで出会った方の中で、個としての『名前』を持つ方はいらっしやいませんでした。恐らく今のパークの中では「わたし」くらいなのではとさえ思っていました。

では、るりさんは？ フレンズ……。？ にしては『名前』があるという違和感を覚えてしまいます。彼女が『名前』をもらったフレンズさんなのだとしたら、珍しいかもしれませんが納得出来ます。けれ

ど、皆さんの話では身体に何らかの特徴があるのがフレンズさんです。耳や尻尾、羽、服装……では、るりさんは……？ 髪の色……わたしみたいにサンドスターの影響で身体に変化が……？ ヒト？ フレンズ？ どちらなんでしょう……？

そんな思考は重くなつた瞼に、身体に、押しつぶされて無くなりません。

彼女が何であれ、仲良くなることは出来ますから。今度お会いした時に直接聞けば良いのです。

確信めいた思いを抱いて、わたしは眠りにつきました。

後日談5

ぱちりと目が覚めて、朝。秋の朝日が部屋に差し込んでいました。
「……………」

常ならば心地よい秋の涼しさが一日の始まりを祝福してくれているような気持ちを抱くのでしようけれども、どうしてか違和感のような不快感のようなもやもやとした心地で胸の中がいつぱいになっていました。

「うん……………」

幸先が悪いなあどうしても思っています。

悪夢から目覚めたような焦燥感。寝ぼけた頭が訴える緊迫感。早鐘を打つような荒い鼓動。そういったモノに近しい感覚をわたしは深呼吸をして落ち着かせようとします。

「すうーっ……………はあーっ……………」

あえて口から音を出して深い深い呼吸をします。そして、それを幾度か繰り返していく内に気持ち自体は落ち着いてきます。けれども、感情の出どころがはっきりとしません。悪い夢を見た覚えはありませんし、何か切羽詰まった予定があるわけでもないのですが。

「……………なんでしようねえ、まったく」

ため息をひとつついて、再びベッドに寝転がります。

頭をそつと動かすとイエイヌちゃんの額に頬がぺたりとくっつきました。どうやら彼女の体温はわたしよりも少し高いようで、頬からは彼女の熱が伝わってきて、その温度に愛おしさを感じてしまいます。それに、規則正しく漏れる寝息が、わたしへの信頼と愛情を示してくれているように思えて仕方ありません。……………おほん、とにかく、そういった彼女の生命の動きがわたしの波立つような心を落ち着かせてくれるようにも思えました。

甘く感じさえしそうな彼女の熱を堪能しながら二度寝を——とも思いましたが、時間としてはジャパリまんを頂きに出る頃合いにほど近いのでしよう。外からどなたかの声が小さく聞こえて来ました。

「ふむん」

贅沢な二度寝か余裕を持ったのんびりごはん……どちらを取るべきか悩んでしまいます。

「……起きますかあ」

二大欲求同士の戦いは、食欲の勝利でした。

わたしはイエイヌちゃんを起こさないようにそつとベッドから抜け出ます。

「んーっ……」

ベッドを抜け出たわたしは伸びをしながらイエイヌちゃんの寝姿を見つめます。

彼女の姿を眺めながら、二度寝はできずとも（上手く予定が済んだら）お昼寝は出来るかも……と考えていました。

わたしの身体のこわばりが解け、眠気が払われた頃合いに、彼女にもにゆもにゆと不明瞭な声を出しながら寝返りを打ちます。ちょうど日差しから顔を背けるようにして眠っていました。その安らかな顔を見ているとイエイヌちゃんを起こして一緒に家を出るのが躊躇われてしまうように思えて仕方ありません。いつもイエイヌちゃんがわたしを起こすときに申し訳無きそーな顔しているのは、多分そういうことなのでしょうかねえ……。

「たまにはわたしだけで行きましようか」

彼女を起こすのが躊躇われるのと同時に、嫌な気持ちを紛らわせたかという思いもありました。散歩がてら朝の空気を楽しむのが一番なのかもしれません。

窓から外を覗くと、空に雲が少しありますが柔らかさを感じる朝日に包まれています。歩いたら気持ちよさそうです。不安感に満ちていた心は裏腹に、今日もきつと良い日になるのだと考えていました。……もしかしたら、「願っていた」のかもかもしれません。

外に出たわたしを迎えるのは、思っていた通りの心地よい空模様。鋭さを感じる朝日に、俄に冷気を帯びた空気、そして白味を帯び始めたように思われる大気……自然の、四季の移り変わりを感じながらわたしは広場に向かいました。

少し早かったという予想はあたっていて、わたしが広場に到着する

と、ちょうどロバさんがジャパリまんを配る支度をし始めている所でした。

ロバさんは乱雑に積まれたジャパリまんの山を少しずつ切り崩して幾つかの塊に並べ直していました。

「おはようございます、ロバさん」

彼女はわたしの声に耳を最初に向け、その後こちらを向いてぺこりとお辞儀をしました。

「おはようございます、ともえさん。今日はお早いですね、イエイヌさんはおうちですか？」

「ええ、なんだか早く目が覚めちゃって——」

とまあ、こんな具合にゆるゆるとした雑談を交わし、混乱と雑踏に巻き込まれるような事もなく、ロバさんからジャパリまんをもらえませんでした。

ロバさんが朗らかに笑みを浮かべながら手を振ります。

「ではお気をつけてー」

わたしも手を振って、彼女に返事をしながら広場を後にします。

「ありがとうございますー！。ロバさんも頑張ってくださいいねー！」

広場から出て、お家への道すがらに何人かのフレンズさんとすれ違ったり、挨拶をしながら帰る。……ここまでは普通の日常でした。

帰路を半分ほど進んでいた時のことです。

「ふえっー！」

足元にこつんという衝撃が伝わり、身体のバランスが失われ、視界が目まぐるしく動き、どしゃあという音と衝撃と痛みが身体に伝わりました。……ようするにわたしは地面に転んでしまったのです。

「……いったた」

立ち上がってから思わず足元や周囲を確認しますが、小石のひとつもありません。

「はあ……」

身体に着いた土埃を払い、その後、地面に飛び散ったジャパリまんを拾います。

なにもないところで転んでしまったというのは、なんとも情けない

話です。最近、車に乗ったりしてますし、徒歩での遠出もしていませんから身体が鈍ってしまったのでしょうか？

「むう………幸先の悪い………」

思わず呟いて、歩き始めます。

歩いている内、不意に合点が行きました。寝起きに感じた不安感是要するに悪いことが起こる虫の知らせとでも呼べるものだったのでしよう。

「これだけで終わるなら、まあ………」

はあとため息をもうひとつ。

ジャパリまんが潰れなかっただけ運が良かったと思ひましょう。怪我もしなかったですし。

「ただいま戻りましたあ」

イエイヌちゃんを起こさないように小声で呟いて、おうちに入ります。彼女はまだぐっすりと眠っていました。無防備で無垢な彼女の寝顔を見ていると、なんとも気持ちが悪やされます。やはり起こすのが躊躇われますね……。

手を洗ってベッドの前に戻ると、唐突に声が聞こえました。

「にゅにゅにゅにゅ」

彼女はそう呟いてから寝返りを打ちます。

「にゅ………にゅ？」

わたしは反射的に聞き返します。いくら寝言といっても「にゅ」は無いでしょう。連呼する必要も……いえ、寝言にツツコミを入れるのは無粋というか無駄というか、まあ、意味がない事ですけどねども。

「にゅ」

彼女は断定するように呟きました。こころなしか頷いていたような気もします。

「そ、そうですか………にゅですかあ………」

前にもありましたねえ………不思議な寝言………なんでしたっけ？

「っと、それはそれとして………」

彼女を起こすか起こさないか、です。少しだけ考えましょう。

昨晚の寝る時間は特段遅い時間ではなかった筈ですから、もうしば

らくすれば彼女も起きるでしょう。でしたら――

「――無理に起こさなくてもいいですかね」

わたしはそつと小さく呟いてベッドの脇にしゃがみ込みます。そして、そつと彼女の枕元で、彼女の顔を眺めながら、彼女の髪を撫でていました。

さらさらとした髪の毛に、朝日に煌めく睫毛、無防備に開かれた彼女の口から漏れる柔らかな吐息、肌寒くなってきたからこそずつと触れていたと感じさせる彼女の体温……そのどれもが愛おしく感じられ、そして、わたしを幸せな気持ちを抱かせます。

彼女の耳を撫でて倒すと小さな反発を感じ、通り過ぎると押し倒された耳は三角にぴよこんと立ち……しばらくそんな繰り返しを楽しんでいると、彼女が目を覚ましました。

「――ふあ……ん、う」

どうやらイエイヌちゃんが眼を覚ましたようです。彼女ははうつすらと瞼を開け、わたしの姿を視認しました。すると、彼女はわたしの手――まだイエイヌちゃんの頭を撫でていました――に頭をこすりつけるように小さく動きます。

彼女は何も言わず、満足げに口角を上げていましたが、このままではイエイヌちゃんはまた眠ってしまうと考えたわたしは、彼女に声をかけます。

「おはようございます、イエイヌちゃん」

今日の予定では遅くとも正午前にはおうちから出発します。ですので、もう少し長く眠っても問題は無いでしょうけれど、遅れてしまうようなことは避けたいところです。

イエイヌちゃんは「んう」と呟いてから、眼を擦りました。

「ふあい……おはよ、うございます……」

彼女はゆつくりと身体を起こして伸びをして、あくびをひとつ。わたしはそんな彼女の姿を見て思わず頬をほころばせてしまいます。

「ジャパリまんもらってきましたよ」

「……ありがとうございます。ふああ……かお、洗ってきますね」

「いえいえ。待っていますね」

彼女はわたしの言葉に小さく頷いて、顔を洗いに洗面台へと向かうのでした。

さて、イエイヌちゃんが朝の支度をしている内にわたしはご飯の支度を進めてしましましょう。と言っても、水をグラスに注ぐだけですから、くれどもね。

わたしは台所に行き、グラスをふたつ手にとって蛇口をひねりまです。短い時間ながらも、ふと考えてしまうのは食事の事。多分お腹が空いているからでしょう。

ここで暮らす上で食事の心配が無いというのは幸いですけれど、工夫のしがないが無いというのは寂しいところです。ですが、工夫をすると言っても何かしようと思いはじめるとパン然りクツキー然り、蜂蜜酒然り……殆どイチから自分の手で作るということになります。流石にそれを毎日するというのは難し——

気付けばグラスから溢れた水がじゃばじゃばとシンクを叩いていました。

「とつとつ。考え事はいけませんね」

もうひとつのコップにも水を注ぎ終えたわたしは、居間へと戻ります。

と、その最中——

「ひゃつ！」

足が何かに引っかかり、よろめいてしまいます。

「ともえちゃん、大丈夫ですかあ!？」

洗面所からイエイヌちゃんの心配そうな声が聞こえてきます。

「は、はい！ お騒がせしました！」

転びこそしなかったのですが……コップ二杯ぶんの水が服にかかってしまいました。

「……はあ……冷たい……」

思わず愚痴を漏らしてしまいます。「今日一日、ツイてないかも」なんていう嫌な予感が頭をよぎってしまいそうでしたが、わたしは頬をぺちりと一度叩いて、気を取り直します。

「……コップ置いたら、着替えませんか」

ため息がもうひとつ、こぼれました。

服を着替えてから、水をコップに注いで居間に戻ると、既にイエイヌちゃんは席に着いていました。彼女はわたしの姿を見て、尋ねます。

「えっと、水こぼしちやったんですか？」

わたしは思わず苦笑いを浮かべてしまいました。

「ええ、まあ……」

躓いたきつかけはわたしが先日床に置きっぱなしにしてしまった鞆の紐でした。なのですべて自分の所為なのです。苦笑するしかありません。

わたしは言葉を続けます。

「怪我とか、コップ割ったりとか……そういうのなかったただけ良かったです」

イエイヌちゃんは頷いたらいいのか迷っている風でした。

「とりあえず、朝ごはん食べましょ？」

「そう、ですね。はい！」

わたしの言葉にイエイヌちゃんは笑顔を浮かべて頷いてくれました。

食事の最中、イエイヌちゃんがわたしに尋ねます。

「ともえちゃん」

「ふあい、なんれひよう？」

口の中に食べ物を入れながらしゃべるといふのはお行儀が悪いですけれども、とつさのことですから仕方無いのです。

「ええつと……今日の予定なんですけども」

わたしはこくりと含んだジャパリまんを嚙下します。

「雑貨屋さんの探索のことですか？」

イエイヌちゃんは「はい」と小さく頷きます。

「もう少ししたら車が来るはずですが……どうかしました？」

予定、と言っても「朝ごはんが終わった頃合いを見計らって」と言っていたので大雑把にすぎると思ったのは否定できませんが、もしかしたらラッキービーストさん同士の通信でタイミングを図っているの

かもしれません。ともあれ、それは今は知りようのないことです。

「いえ、歩いて行かないのかな?」と思ひまして」

わたしは彼女の言葉に「うーん」と声を漏らします。

食事の時間を彩るお話となれば、少し位長くなっても大丈夫でしょう。

「絵の具や色鉛筆、あとはスケッチブックとか、そういうのを探してるというの、お話ししましたよね?」

「はい。ざいごう? をかくほって予定でしたよね」

わたしはイエイヌちゃんの言葉に頷きます。

「まだ余裕はありますけど——」

脳裏に一瞬よぎるのは、今使っている色鉛筆の丈の長さでした。三分の一度しか減っておらず、まだまだ使えるのですが……使えば減っていくのは自然の摂理です。いずれ使えなくなるのは避けられません。なので、在庫を手元に置いておいたり、新しいものの在り処を見つけておくというのは今後絵を描く上で必然とも言えます。

「——絵を描こうと思つたら必要なものですからね。それを探そうかな、と言うのが元々なんです」

それに絵の具が……特に油絵の具があれば、わたしの描きたいものを描けるかもしれません。以前、イエイヌちゃんのワンピース姿をスケッチしたときの、清書です。あれを、あの人達のように描けたら……どれほどの達成感を得られるでしょうか? わたしはそれを考える度に、身体が震えてしまうほどの高揚と興奮を覚えていました。むろん、巧拙という大きな問題が目の前に横たわることにも気付いています、挑戦する機会が得られるかもというのは大きな一歩でしょう。

わたしはイエイヌちゃんの反応を伺いながら、言葉を続けます。

「それで、この辺りに雑貨屋さんがあるとのこと、試しにそこへお邪魔するということにしました」

ほんの少し前にわたしがゴリラさんに画材にまつわる相談をした際に思い出したのか、教えてくれました。

イエイヌちゃんは「そこまではわかつている」と言わんばかりに頷

きました。

「ぎつかやさんって、山の方でお邪魔した……せんもんでん？ と違っているなものがあるんですよね」

わたしは彼女の言葉を肯定します。

「はい、そうですよ。……ただ、何かあるのかは行ってみないとわからないんです。なので使えそうなものが大きかったり重かったりなんてこともありえます」

流石に雑貨屋さんイーゼルやキャンパスがあるとは考えていませんが、もしかしたら来客用の椅子だったり、畑の収穫に役立つようなカゴ等があるかもしれません。何にせよ、手で持つには大きいモノがありえる以上、備えはしておきたいものです。

そんな風な説明を付け加えると、イエイヌちゃんは「ふむふむ」と呟きました。

「……実のところ、運転の練習をしたいというのもありますけどね」

わたしの言葉に彼女は楽しげにほほえみます。

「どうかしました？」

イエイヌちゃんは少しだけ照れた様子を見せます。

「運転してるともえちゃん見るの、すきなで……えへへ。それに、景色びゅーんってなるのも楽しいですし」

「ありがとうございます、でも、褒め——」

わたしは彼女のこぼした言葉に照れてしまい、大きく手を振ってしまいます。普段ならしそうなオーバーな身振りになってしまったのは、多分、朝の出来事で落ち込んだ心をイエイヌちゃんが知らず励ましてくれたから。それが、嬉しかったから……だと思えます。

「——あっ」

大きく振られた手にぶつかったコップが床へと落ち、ぱりんと言う音が部屋に響きました。

「ひゃうっ！」

「……はーっ、はあ……」

わたしは自分の行動にあきれてしまい、慌てることすら忘れてしまいました。けれどもイエイヌちゃんはぱつと立ち上がってあわあわ

し始めます。

「わ、わ……と、ともえちや、だ、だいじよ——」

わたしはゆっくりと立ち上がって、足でガラスの破片を寄せ集めながら返事をします。

「大丈夫ですよ、ご心配おかけします……度々すみません……」

自己嫌悪の思いで胸の中はいっぱいです。

「で、でも、と、とが、尖って……!」

「スリッパ越しですから、へーきです。箒……どこでしたっけね……」
箒とちりとりを探すのはひとまず後回しにして、大きい欠片だけでも外に持っていきましよう。そうした方が片付ける時に楽でしょうし——そう思っしてしゃがみ、欠片に手を伸ばします。その瞬間、ちくりと刺すような痛みが指先から走りました。

「っ、たあっ……!」

「だ、だいじよ——ひうっ……!」

さつと手を床から話して指先を見ると、赤い玉のような雫がこぼれんばかりに漏れ出ていました。

「あっちゃあ……とりあえず拭かないと……はあ……」

わたしは血を零さないように気をつけながら立ち上がります。「もうやだ、今日」なんて思いますが、全て自分のが原因の出来事です。反省するしか、ありません。

「と、ともえちや、あ、う、ゆ、ゆび、ゆび……!」

イエイヌちゃんは先程よりもあわあわとした具合です。彼女のしっぽはぴんと貼っていて、けれど大きく振り回されていて……:自分よりもパニック状態に陥っている方がいると、案外冷静で居られるんですねえ。

「イエイヌちゃん、大丈夫です」

「ひえ、うう、ふ、ふく、ふくもの、ち、ち——」

漫画でしたら、眼にぐるぐると模様が描かれていそうなくらいです。

「イエイヌちゃん!」

わたしが大きな声でイエイヌちゃんを呼ぶと、彼女ははつとした表

情に変わります。

「は、はいっ！」

彼女はまるでわたしの動きを確かめているかのように、わたしの顔をじつと見つめていました。

わたしは彼女に背を向けます。

「イエイちゃん、慌てさせちゃってごめんなさい」

わたしは背中越しに彼女に謝ります。謝りながら、なにかがこみ上げてきそうになりました。ため息に込めきれない感情が、どこから漏れ出てしまっそうでした。

「い、いえ……で、でも……」

彼女の表情は伺えませんが、声の調子が低い為にわたしの身を案じてくれているのが察せられます。

「箒とちりとり、お願いしてもいいですか？ わたしは……指の手当をしませんと」

イエイちゃんは「は、はいっ！」と大仰に返事をしてくれました。

「……ありがとうございます」

すとんとひとつ鼻を鳴らして、洗面台へ。ひとまずは指の手当。傷口を洗って、綺麗な布で抑えて……救急箱、ありましたっけ……？ なんだか、今日はなんだかため息が多いですね……はあ……。

刺激を我慢しながら傷口を流水で流し、患部を見ます。見てみれば、指の怪我はさほど深いものではなく、傷跡にガラス片が残っているようなことはありませんでした。

怪我が浅いというのは、ただそれだけで幸いなことです。それに洗面台のタンスの中を少し探せば救急箱があったというのも幸いなことでしょう。それに、自分の体質を思えばそこまで完治には時間がかからないというのも、幸いなこと……。けれど――

「――そもそも……はあ」

患部にガーゼをあて、テープで固定……そんな事をしながらも、胸の中ではどうしても後悔のような、自己嫌悪のような、やり場の無い感情を抱いてしまいます。

そもそも怪我なんてしなければそんな幸いななどいらなかったのだ

す。そもそもグラスを割らなければ怪我なんてしなかったのです。そもそも朝転んで落ち込んだりなんかしなければよかったです。

「……はあ」

今のわたしには、ため息を漏らすくらいしかできることはありません。この様子では、この後の探索も芳しい結果は訪れないでしょう、などとさえ思っていました。

手当を追えて居間に戻ると、イエイヌちゃんがどこからか箒とちりとりでグラスの破片を掃き集めてくれていました。もうグラスの破片の全てはちりとりの中にまとめられています。見えないくらい小さいものは残っているかもしれないませんが、床に散らばっていた鋭利なきらめきは姿を消していました。

「ありがとうございます、イエイヌちゃん」

彼女はわたしの言葉に、首を振って応えます。

「いえいえ、これくらい……！ それよりも、指は大丈夫ですか？」

わたしは手を前に出して彼女に示します。

「そこまで深くなかったので、すぐ治ると思います。……本当に、ご心配をおかけしました」

わたしが頭を下げると、イエイヌちゃんはわたしをぎゅっと抱きしめてくれました。

「いえ、そんなこと——土のニオイ……？」

イエイヌちゃんが唐突につぶやきました。

彼女の言葉を聞くやいなや、わたしは彼女から身体を離します。身体の内奥イをしっかりと嗅がれているようで恥ずかしくって仕方ありません。

「ちよ、ちよつと、イエイヌちゃん？」

わたしの言葉に返事をせず、彼女はわたしの身体をじいっと眺めています。時折顔を近づかせてニオイも確認しているようでした。

「な、なんですかあ……！」

わたしの身体を上から下まで——かどうかは彼女の仕草を見ただけなのでわかりませんが——確認し終えたのか、イエイヌちゃんはわたしの顔を見て、わたしの具合を伺っているかのように心配そう

な表情になります。

恥ずかしさと決まりの悪さを抱いたわたしは言葉に困ってしまいました。イエイヌちゃんはそんなわたしを再びそっと抱きしめます。

「転んじやつたんですか？」

「え、ええ……でも、怪我はなかったですし、ジャパリまんも——」

イエイヌちゃんの腕にきゅっと強く力が加わります。

「朝から、えつと……さいなん、でしたね、ともえちゃん」

彼女はそう言ってわたしの頭をそつと撫でてくれました。わたしが黙りこくつてしていると、彼女は「大変でしたね」と付け加えて、わたしの頭をぽんぽんと小さく叩きました。

「……いえ、これくらい……でも……」

彼女の言葉も仕草も、それだけで何かが良くなるものではありません。怪我がすぐに癒えることもなければ、この後の探索で目当てのものが見つかることとなるわけでもないのです。

ですが、ですが、嬉しくつて、優しくしてくれて、励ましてくれて

「——ありがとうございます、イエイヌちゃん」

わたしは彼女の頬に自分の頬をくつつけました。彼女の灰色の毛先がわたしの鼻先をくすぐって、視界いっぱいに広がります。陽射しのような優しい香りがして、触れ合った頬から伝わる彼女の熱が温かくて、触れ合った胸から伝わる脈動が愛おしくて、たまらなくなつて……わたしはぎゅつと彼女を抱きしめ返しました。

「っひゅぐう」

わたしが腕に力を入れすぎた為か、イエイヌちゃんの口から今まで聞いたことのないような音が聞こえてきます。

腕に込めた力を緩めて、ほんの少し身体を動かします。彼女と見つめあえるように、ほんの少しだけ。

「……ごめんなさい。……と、ともかくです、気遣ってくれてありがとうございます……！」

イエイヌちゃんはわたしの背中に回した手を離して、優しくわたし

の目元を拭つてくれました。

「いいえ、これくらい!」

わたしは彼女の言葉に笑顔で応えました。そして数秒ほど黙って見つめ合った後、ゆっくりと顔が近づいて、くっつこうとした瞬間――

「ひゃっ!」

「はうっ!」

ふたりして身体を跳ねさせてしまいました。……といいいますのも、外からクラクションの音が響いて来たのです。つまり、車の到着です。

「むう……時間ですかあ……」

イエイヌちゃんは不服そうに頬を膨らませます。

「ですねえ」

わたしはそんな彼女の頬を突っつきます。すると彼女は「ふすー」と口から息を漏らし、くすりとほほえみました。

「んふふー……なにか見つかるといいですね、ともえちゃん!」

「ありますよ、きつと」

正直な所、朝から幸先が悪いということもあって、何も見つからないのでは無いかとさえ思っていました……イエイヌちゃんのお陰もあってか、少しだけ前向きになれている。そんな気がしました。

それから時間が経って、昼過ぎ。探索を終えたわたし達はおうちに戻っていました。帰ってきたのは正午を過ぎた頃でしたので、今は探索の余韻に浸りながらハーブティーを頂いているところです。

お茶をひと口飲んで、カップを置くと、それを見計らったかのように、イエイヌちゃんが不満そうにつぶやきます。

「何も見つからなかったですねえ……残念ですう……」

わたしはイエイヌちゃんに視線を向け、小さく頷きました。

事実、目的地であった雑貨屋さんの中には殆ど何も残っていません

でした。天井の電灯やレジスターのような機材や扱っていたであろうアクセサリーや小物などの商品はもちろん、鉛筆やボールペンのような備品も含めて、何も。島からの撤去の際に片付けられたのでしよう。残っていたのは埃と汚れ、それとかつての商品を示す商品タグだけ……。

「……やっぱりちゃんと画材を置いている場所にお邪魔した方が良いんでしょうね」

イエイヌちゃんは「うーむ」と考えるように声を漏らしました。

「となると、今度は……セントラルの方ですか？」

「そうなりますかね……。もしかしたらお父さんの残した道具とかもあるかもしれませんが、研究所の方も手かもしれませんね……」

「むずかしいですねえー……」

イエイヌちゃんは困ってしまったといわんばかりにぐでえつとテーブルに突っ伏します。わたしはそんな彼女の様子を見て、思わずくすりと微笑んでしまいます。そして、彼女の頭をそつと撫でて、感触を楽しみます。

「まあ、なるようになりますよ、いざとなったら自分で作れば良いんですもの」

イエイヌちゃんは心地よさそうに眼を細めていましたが、わたしの言葉を聞いて不思議そうに視線を向けてきました。

「つ、作れるんですか……？」

「た、たぶん……」

作り方は知りませんが、調べるなりラツキーピースさんに伺うなり……色々方法はある筈です。流石に科学的に色々混ぜたり分離したりとなると独力では無理そうですね……。

「確か炭を使うって方法も聞いたことがありますね……黒色だけでも絵は描けますし……。紙だつて作れる筈です。……色々調べないですねえ、本当に」

時間がいくらあつても足りません。したいことや欲しいものがある、それを手に入れようと思つて、あれこれ手段を探つて、時には借りて、時には作つて……大変ですし、失敗もありますし……。

「と、ともえちゃん、くすぐったいですよお」

イエイヌちゃんの言葉にはつとわたしは彼女の頭から手を離します。わたしはどうやら動物のお耳の裏の方をずっとかりかりと引っ掻いていたようです。

「し、失礼しました……痛かったりとか、してません……？」

彼女は身体を起こして、小さく首を振ります。

「へーきです！ それよりも……ともえちゃん、元気になったみたいで良かったです！」

ん？ と声を漏らしてしまいました。

「朝のこともそうでしたけど、おうちから出発してすぐに車止まっちゃったりしましたし、それにぎっかやさんには何もなかったですし……」

わたしは手をぱちんと叩きました。

「確かに……！ 今日本当に運が悪い日でしたねえ……」

まだお昼過ぎくらいですから、まだまだ悪いことが起こるかも……とも思いましたが、そんなのは無視です無視。

イエイヌちゃんは困ったように苦笑いを浮かべています。わたしはテーブルの上に置かれた彼女の手を撫でながら言います。

「朝は落ち込んでました。本当です」

ひと息置いて言葉を続けます。

「でも、励ましてくれたことが一番嬉しかったんですもの……。それだけでだいたいなんとかなります」

ダメ押しに「うんむ」とひとつ大きく頷きます。

イエイヌちゃんは照れているのか、困ったような笑顔は変わっていません。

「えへへ……お役に立てたなら良かったです……！」

「お役に立ちまくりますよー、だいさんげんです」

イエイヌちゃんはわたしの言葉に「？」と言いたげに首をかしげます。

「それ、どういう意味なんです……？」

「お父さんが昔わたしにそんなことを言っていたような……？ わた

しじやなかったかも……？」

ふたりして変な空気を漂わせて、黙ってしまいます。なんでしたっけ、よくわからなかったのはわたしも一緒ですし、意味を聞いた気もします。というか聞いている筈です。

どちらからともなく、ふわあとあくびの音がしました。もしかしたら、ふたり同時だったかもしれません。わたしもイエイヌちゃんも「すみません」とひと言。そう言うやいなや、わたしがもう一度あくび。

「お昼寝、しましょうかね……早かったから、眠くなっちゃいました」「あ、では私も……」

イエイヌちゃんはそう言っ、椅子から立ち上がります。そしてわたしよりも先にベッドの上にごろんと寝転びました。

わたしも彼女の隣に寝転んで、ふたり見つめ合います。

「夜になる前に起きましようね、先に起きたら起こしてください？」
「わかりました！ あ、でもともえちゃんも私を起こしてくださいね？」

「ええ、お任せください。……では、おやすみなさい、イエイヌちゃん」「おやすみなさい、ともえちゃん！」

小さく頭を動かし合っ、唇が小さくくつつくと、イエイヌちゃんは満足そうな微笑を浮かべました。きっと、わたしも同じような表情だったでしょう。

そうして目を閉じて、仰向けになります。

結局、今日はなんとも運の悪い日でした。何をやっても上手くいかない日、というやつ……なんでしょうね。けれど、彼女の唇がひとつ得られました。珍しいものではないですし、しょっちゅうしてる気もしますけどね。

でも、案外、それで良いのかもしれない。